

コードギアス～護国の剣・天叢雲～

蘭陵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

皇歴2017年、絶望の中を生きる少女は記憶を失った少年に出会う。その出会いは、世界をどう変えるのか――。

この作品は、コードギアス 叛逆のルルーシュ LOST COLORSの二次創作になります。

カレンがルルーシュより先にライに出会っていたら、というifストーリーで第一期を再構成しています。

※オリジナルキャラ、オリジナル設定が多数登場します。(ちなみに作者は亡国をまだ見てませんので食い違うことがあるかもしれません)

2013/9/8 亡国1話を見ましたが設定はまだこのままで大丈夫そうです。修正が効かないほど食い違ったらもう開き直ります。

※作者はルルーシュに対する評価が信じられないほど低いので、ファンの方は注意を。ルルーシュ至上の方は回れ右をお勧めします。

※この設定はフォレストページの『白銀の軌跡』様の短編から始まっています。掲示板にも『しよう』という名前でいろいろ書き込んでますが間違いなく本人です。(閲覧時ネタばれ注意)

白銀の軌跡様HP <http://id32.fm.jp/359/lostgeas/>

※先にお詫びしておきますが、あくまで暇を見つけて書いているものなのでリアルが忙しい、ネタに詰まった等で更新が滞ることがあり

ます。ご容赦ください。

※ただし一度人様の前に出した以上は完結まで漕ぎ着けるつもり
でいますので、長い目で見てほしいと思います。

※この作品が作者の初投稿になります。

※繰り返しますがルルーシユの扱いは相当酷いです。

目次

Stage	22	河口湖	164
外伝			
夢の終わりと、夢の始まり			158
外伝			
緑の少女と白銀の王			149
Stage	21	黒い渦	140
Stage	20	鷲の羽を継ぐ者	132
Stage	19	生徒会	124
Stage	18	カレンとルーミリア	117
Stage	17	黒と蒼	109
Stage	16	『王』	101
Stage	15	紫の少女と雪の妖精	94
Stage	14	猫と仮面	88
Stage	13	キョウトからの使者	80
Stage	12	騎士と皇女	74
Stage	11	魔王と魔女	68
Stage	10	理想と現実	61
Stage	09	記憶喪失	54
Stage	08	初恋?	48
Stage	07	学園生活	43
Stage	06	出会い	34
Stage	05	白の騎士	27
Stage	04	コンタクト	21
Stage	03	目覚め	14
Stage	02	背中	7
Stage	01	契機	1

Stage	4 5	キサラツ攻略戦	354
Stage	4 4	救済	347
Stage	4 3	天空神	339
外伝		三人官女の飲み会	333
外伝		遊園地	326
Stage	4 2	在り方	319
Stage	4 1	ルーミアの日常	311
Stage	4 0	岐路	303
Stage	3 9	更始	295
Stage	3 8	告白	288
Stage	3 7	情勢分析・日本	280
Stage	3 6	情勢分析・ブリタニア	273
Stage	3 5	表と裏	265
Stage	3 4	陥穽	258
Stage	3 3	激突	251
Stage	3 2	開戦	244
Stage	3 1	新たな力	235
Stage	3 0	ナイトオブブラウズ	227
Stage	2 9	忠義	220
Stage	2 8	回想録	212
Stage	2 7	母と娘	204
Stage	2 6	リフレイン	198
Stage	2 5	暴風襲来	188
Stage	2 4	偽りの神	180
Stage	2 3	『小菊』	172

Stage	69	成長	522
Stage	68	決裂	516
Stage	67	式典会場	510
Stage	66	ネージユの戦い	504
Stage	65	前夜の静寂	496
Stage	64	帰趨	490
Stage	63	キュウシユウ戦役	483
Stage	62	新機軸	475
外伝	7年前、伊豆		469
Stage	61	急所	462
Stage	60	陽動	456
Stage	59	始動	449
Stage	58	過去	442
Stage	57	救援要請	435
Stage	56	運	428
Stage	55	神根島	422
Stage	54	経過報告	415
Stage	53	苦悩	408
Stage	52	租界攻防戦・終結	402
Stage	51	救援	395
Stage	50	撤退戦	388
Stage	49	崩壊	381
Stage	48	奪還	374
Stage	47	綻び	368
Stage	46	崩落	361

S
t
a
g
e

7
0

未
来



Stage 01 契機

日本降伏から7年後―

ブリタニアの支配を受け入れない日本人は、レジスタンスとして光明の無い抵抗を続けていた。

「その情報、本当か？」

団員たちが手に入れた情報の大きさに目を輝かせる。成功すれば、弱小グループにすぎない自分たちの名前が一躍知られることになるだろう。

「キョウト経由で手に入れた情報だ。信用はできる…、と思う」

『思う』ねえ…。あなたがリーダーなんだから、もう少しはつきりして欲しいのよね、扇」

女性メンバーである井上から言われて、扇が言葉に詰まる。自分はリーダーの器ではないことは、彼自身が誰よりも自覚していた。

端的な表れとして、扇がリーダーになってから、このグループのまとまりは明らかに悪くなった。

誰もが不安なのだ。当然だろう、超大国ブリタニアに敵対しているのだから。そして、その不安を感じさせないリーダーを渴望している。

(あいつがいれば、みんな不安に思うことなんてなかったんだろうな…)

そう思った扇は、団員たちから少し離れて一人たたずんでいた少女を見る。

まるで燃えるような赤い髪が真っ先に目を引く。

名前は、紅月カレン。

扇が先ほど思った、親友でこのグループのリーダーだった紅月ナオトの妹だ。当然、扇も妹のように、あるいは娘のように可愛がってきた存在である。

その兄は、1年ほど前に帰らぬ人になった。「死亡」とは少し違う。死体が見つからないので、「死亡」と断定することもできないでいた。カレンに残されたのは、絶望と、憎悪と、形見の短刀だけだった。

(俺にできるのは、せいぜいナオトの真似でしかない)

カレンには有能なりーダー以前に、支えてくれる人が必要なのだ。短刀一振りにも負けている、と考えると情けない話だが、今この少女を支えているのは兄との思い出であり、その兄を奪ったブリタニアへの憎悪でしかない。

しかも厄介なことに、その憎悪は屈折して自分にも向かっている。ブリタニア人と日本人のハーフである自分自身を呪いながら生きているこの少女の未来について、暗い予想しか浮かばない。

「陽動部隊は玉城、突入は俺たちの部隊で行う」

「私は？」

カレンが無機質な声で問う。それに対してやはり扇は不安になった。

この少女の望みは、死ぬことではないか。レジスタンスとして死ねば、誰もが日本人と認めてくれると思っっているのではないか。そう感じてしまったのだ。

「お前は待機だ。『アレ』はいざと言うときまで使用しない」

彼らは知らない。このテロ行為が、世界を変え、この少女を救う契機になることを。

「やりすぎだ、玉城の奴め！」

陽動にしては大きすぎる爆発音に、メンバーの一人が毒づく。

「軍の動きは？」

『動く気配が無い。やはり極秘研究っていうのは間違いないな』

最も近い駐屯地を見張らせていた仲間からの通信で最悪の事態はされられそうだとわかり、少しだけ安堵する

「だけど、この状況…」

「想像以上に兵士が多いぞ。…おい、サザーランドまで出てきた」

サザーランドとはブリタニア軍の人型自在走行機「ナイトメアフレーム」の量産機で、今のブリタニア軍の主力機である。

「三機も!?何なんだよ、この研究所…」

生半可な基地以上の警戒態勢だ。極秘で、しかも重要な研究所だと

言うのは間違いない。だが…。

「やむをえない。作戦を断念し、撤収するぞ」

「正気か、扇!」

「正気だからこそだ!このままじゃ、全滅する可能性だって…」

言い争うところに、サーチライトの光が照らされる。見つかった。

「何者だ!」

銃をかまえた兵士が寄ってくる。包囲される前に逃げるしかない。

「くそっ!玉城、撤収だ!」

闇の中に銃の発砲音が響く。その音から、配備されている兵士数も異常だとわかる。

「玉城たちは無事なんでしょうね?」

「わからない」

できる限り暗闇を選んで走るが、ライトの数が多すぎる。追う兵士たちの向こうに、さらなるサザードが見えた。

「一体何機あるんだ!」

玉城の陽動部隊に向かったのが三機、そしてこちらを追うのが二機。これで確認しただけで五機になる。

「冗談じゃないわよ!こんな嚴重な施設、私たちの手に負える代物じゃないわ!」

井上の嘆きはもつともだ。何か騒ぎを起こして相手の反応を見るのが目的で、自分たちは生贄にされたのではないかという考えが全員の前をよぎった。

次の瞬間、屋根の上から影が降ってきた。

その影は、赤く塗装されたナイトメアフレームによるもの。だがこの機体は、扇たちを追う軍の前に立ちふさがる。

このグループの切り札であるナイトメア『グラスゴー』。搭乗者はカレン。

「カレン!?グラスゴーは待機だと…」

『そんなこと言ってられる状況じゃないでしょ!!!』

指示を無視された扇が通信機に怒鳴るが、それ以上の怒号で返され

た。

「…仕方ない。だがお前も時間稼ぎ以上は考えるな！」

『わかってる』

わかっている、とカレンは答えたが、相手のナイトメアの動きを見ればそう簡単にいく相手ではなさそうだ。無駄の無い、俊敏な動き。相当腕が立つ。

(エース級…、ってどこかしらね)

カレンにとつて分は相当悪い。二対一であり、乗っているグラスゴーはサザーランドより一世代前の旧型だ。スペックは比較にならない。

しかもこのグラスゴーは何とか手に入れたジャンク品で補修したりもしたので、整備状況は非常に悪い。いつどこが不調になってもおかしくない。

「けど、負けるわけにはいかないのよ!!!」

コクピット内で叫び、サザーランドへ向かう。相手は左右に分かれ、アサルトライフルを撃ってきた。

カレンのグラスゴーにライフルは無い。遠隔武器は両肩のスラッシュハーケンだけだ。ライフルを回避し一機に向けてハーケンを放つが、それはあっさりかわされる。

「くっ！」

元々当たると思った攻撃ではない。弾幕を途切れさせるのが目的でなんとか接近戦に持ち込もうとしたのだが、もう一機がその隙を与えてくれない。

予想以上に、相手の腕はいい。

(一対一なら、なんとか…)

実はカレンの操縦技術は常人をはるかに凌駕しており、世界的にもトップレベルの実力を持つ。彼女はそれを知らないが、それでも今までの経験から自分の操縦技術が優れているのは理解していた。

だが、今回ばかりは状況が悪い。このままでは機械のような正確さで連携を行う相手に次第に追い詰められ、いずれ撃破される。

「ならっ!!」

損害覚悟で、相手の懐に飛び込む。さすがに予想外の動きだったのか、相手の反応がわずかに遅れた。

「はあぁっ!!!」

スタントンフアで攻撃。撃破。イジエクシヨンシートが作動する。

「……一機は倒した、……けど」

レーザーには二機の増援が映っている。そしてグラスゴーは右足を損傷。何とか動くが、機動力は格段に落ちた。敵は三機に増え、戦うことも逃げることも絶望的だ。

(ここまでかな……。お兄ちゃん……)

さらに一機の反応。カレンの顔に浮かんだ絶望が消えた。覚悟が固まったのだ。自分はここで死ぬ。ならば、最後まで戦ってやろうと。

だが、最後に現れた一機により、二機の増援の反応がLOSTした。

「え？な、何が……」

状況が理解できない。が、自分を掴もうとしていた死神の手が遠ざかったことは、カレンにも理解できた。

カレンの相手をしていたサザーランドが向き直る。その先には、同じブリタニア軍のサザーランド。このサザーランドが増援部隊を撃破したのだ。

(内紛？裏切り？私たちの誰かが奪ったとか？……とにかく、チャンス！)

敵のサザーランドが謎のサザーランドに向けてライフルを撃つ。が、謎のサザーランドはそれを最小限の動きで回避した。

「な、何よ、この動き……」

カレンの予想にあった可能性が一つ消える。こんなナイトメアの操縦ができる人間など、仲間にはいない。

何しろ、ほとんど真っ直ぐ進んでいるようにしか見えないのだから。カレンでさえ、この操作はできるかどうかわからない。

謎のサザーランドが接近戦に持ち込んだ。トンフアの一撃。だが戦ったカレンには結果が見えていた。

(この敵ならこの程度は回避するはずで…)

その回避先には、スラツシユハーケンが打ち込まれていた。「なっ?」

相手の回避行動を見越した追撃。しかもその正確さは…。

だが敵もさるもの、体勢を崩しながらもそのハーケンまで回避する。その瞬間、カレンの直感がどう行動すべきか告げていた。

(このパイロットは、私がこうすることも読んでいた!?)

そう思いながらもグラスゴアのハーケンを発射。体勢が崩れた敵に避けることは不可能で、直撃。機体が爆発した。脱出できなかったパイロットは爆死しただろう。

それを見届けて、謎のサザーランドは立ち去る。

「待って!」

外部スピーカーで話しかけるが、返事は無い。

(やっぱり、違うよね…)

一瞬期待してしまったのだ。もしかしたら、行方不明の兄ではないのか、と。

カレンが感傷に浸っている間に、サザーランドは視界から消え、レーダーの範囲外へ去ってしまった。

『カレン、聞こえるか』

扇の声で現実に戻る。ここは戦場なのだ。考えるのは、後でいい。

『玉城の部隊が足止めを食らってる。お前も応援に来てくれ』

「了解!」

カレンの威勢のいい声とは逆に、モニターは警告の表示で赤く染まる。動かしたグラスゴアの右足からは火花が飛んだ。

(サザーランドがいたら…、今度こそ終わりかもね)

せつかく拾った命なのに、とカレンは思ったが、現場に着いたときにその心配は杞憂だったことを知る。

玉城の部隊は足止めこそされていたが敵にナイトメアの姿はなく、グラスゴアで歩兵を蹴散らし、隠しておいたトレーラーまでの道を開いた。

「ふは、とんでもねえ目にあつたぜ。扇！お前の確認が足らねえんじゃないのか!？」

アジトに帰り着くなり、玉城が言う。

「全員無事だったからよかつたけどよ、あやうく死ぬところだったんだぞ！」

玉城は「無事」と言ったが、これは「死者が出なかった」という意味だ。無傷というわけではなく、怪我人は何人もいる。

「やめろ、玉城。あんたに扇を責める資格は無い」

さらに言い募ろうとする玉城を、カレンが止めた。

「あん？なんだよ、カレン」

「自分が何をしたかわかってないの？陽動なのに深入りしすぎ。それで撤退できずにみんなに迷惑をかけた」

事実、今度の作戦における負傷は玉城の部隊と、最後にそれを救おうとした際のメンバーに生じている。そう指摘されると玉城の勢いもしぼんだ。

「で、でもな…！俺だって、あんだだけ兵士がいるってわかってりや自重したぜ。情報を鵜呑みにした扇に責任が無いとは言わせねえ。それに、扇の部隊に被害が少ないのはお前がグラスゴーを動かしたからだろ」

それもまた誰もが認める事実だった。玉城が自重したかはともかくとして、扇の責任については。

「次も同じことになって、誰かが死んだらどうする？今回は運がよかったから誰も死なずに済んだだけで…」

「もういい…、今回は幸いにも誰も失わずに済んだが、俺の責任を問うのは当然だろう。だから…」

『リーダーを辞める』なんて言わないでよね」

いきなり割り込んできた声に全員がそちらを振り向く。

「小笠原！大丈夫なのね!？」

「うん、井上。丈夫だけが取り得だからね、あたしは」

長身の女性だった。その背は並みの成人男性より高いが、元女子バスケ日本代表、という肩書きを聞けば、誰もが納得する。

そして今回の作戦で小笠原は玉城隊に編入され、銃創二箇所を負っている。幸いなことに後遺症が残る傷ではなかったが、当然しばらくの間は安静にしておくはならない。

「重傷者として言わせてもらおうわ。ここでリーダーを辞めるって言うのはただの責任放棄。少なくともあんた以上に有能な後任を見つけてからでなくちゃ、あたしは認めないわよ」

「………わかった。俺は今回のことを反省し、慎重な行動を心がける。玉城、お前もだ。カレンについては緊急事態につき不問。これでどうだ？」

「…ああ。俺も今回はしくじった。だからもう言わねえし、みんな、すまなかった」

扇と玉城が反省の言葉を述べたことで、場がほっとした空気に包まれる。

「それにしても、あのサザーランドは誰が乗ってたの？ てつきりカレンだと思ってたんだけど」

カレンの命の恩人である謎のサザーランドだが、実は玉城たちの恩人でもあった。玉城の部隊に向かった三機のサザーランドも撃破していたのだ。

深入りした玉城たちであったが、それで敵が混乱したので重囲から抜け出せた。カレンが向かった際に敵にサザーランドがいなかったのも、そういう理由による。

あのサザーランドとそのパイロットについては、カレンを救った以後は一切わからない。誰もが逃げるだけで必死だったのだ。仕方が無い。

「どう思う、カレン…、って、あれ？」

井上が周囲を見回すが、赤毛の少女の姿はいつの間にか消えていた。

カレンはグラスゴーが積み込まれたトレーラーに来ていた。床に

座り、空き箱にもたれかかる。

「馬鹿だよ、私って」

空色の瞳から、涙があふれていた。

今回の作戦では小笠原を始め、真田、門倉、山崎、吉田など多くの負傷者を出したが、誰ひとり欠けていない。それが嬉しかったのだ。「まったく、嬉しいならみんなの前で大泣きすればいいのよ。変に強がりなんだから」

自嘲する。それができないから、玉城に悟りきつたような冷静な意見述べたのだ。

「泣きながら、『みんな生きて戻れたんだから、それでいい』って言えばよかった。そうすれば、ハーフだなんて関係なくみんな認めてくれるのよね」

涙をぬぐい、目の前のグラスゴーを見る。そうすると、彼女の脳裏にはどうしてもあのサザーランドが浮かんでくる。

「……あのサザーランド、結局何もわからなかったな」

兄なら、このグラスゴーを見てわからないはずがない。元々彼の機体なのだから。そして妹の声にも反応しないはずはない。

「お兄ちゃんなら、帰ってきてよ……。ずっと守るって、『小菊』をもらった時約束したじゃない……」

短刀を取り出す。『小菊』というのはこの短刀の銘のことだ。

実はこの『小菊』は七年前、日本とブリタニアの戦争が始まる直前に偶然会った人からもらったものだった。亡くなった妹の守り刀だと言っていた。

『売ろうが捨てようがかまわない。……私には、もう持つ資格などないのだから』

そう言ってカレンに渡したのだ。その刀をカレンは兄に渡した。『守り刀』と言われて、なら兄が持っていれば兄を守り、そして兄が自分を守ってくれると単純に思ったからだだった。

その行動に相手は驚いたようだったが、別に怒ったわけでもなく、兄に一言だけ言った。

『信頼されているのだな。妹を大切にしてくれ』

顔も声もなんとなくしか覚えていない。だが言葉だけははつきり思い出せる。忘れようにも忘れられない、悲しみと、寂しさと、諦めと、少しの羨望の入り混じった言葉だったから。

その後、戦争が起こり苦しい生活を強いられたが、兄はこの短刀だけは何としても売らなかつた。

肌身離さず持つほど大事にしていたが、何か予兆を感じていたのか『小菊』をカレンに預けたその日、兄は帰らぬ人となった。

「……もう嫌なのよ、大切な人を失うなんて」

カレンは再び瞳ににじんだ涙をぬぐい、トレーラーを去つた。

カレンがメンバーの元に戻ると、やはり話はあのサザールランドのことになっていった。彼らの推論で一番説得力があつたのはこの意見だ。

「誰か俺たちと同じレジスタンスの一員で、あの施設に潜入していた奴がいた」

だがナイトメアの操縦技術が異常なまでに高い、というのが謎だった。だから説得力はあるが納得できるかと言われると微妙なところになる。

「単機で五機撃破してるものな……。そんなことができる人間なんて、この国でも数えるほどしかないぜ」

そして、そんな人間なら責任ある立場についてるのが普通だ。危険の多い潜入に使うのはリスクが大きすぎる。

「カレンの危機に現れた騎士様だったりして」

井上と小笠原の意見だ。からかわれたカレンは真っ赤になって否定した。

翌日、グループ内で小さな事件が起きた。団員の私服がなくなつていたので。

誰もがあわてたがそれ以外に盗品は無く、どこか別のところにしてまつて忘れてしまったのだらうということ片付けられた。

―トウキョウ租界エリアー政府。

「あの施設が襲われただ?!」

カレンたちの襲撃は、意外なところに大きな衝撃を与えた。この声

の主は、神聖ブリタニア帝国第三皇子クロヴィス・ラ・ブリタニア。このエリアー11の総督である。

「それで、損害はどのようなのだ、バトラー!? 『CODE—R』は? 『CODE—G』は?」

主君であるクロヴィスの言葉にバトラーも顔面蒼白で答える。さらに剃り上げた禿頭が冷や汗で濡れ、それはまるで水揚げされたばかりの軟体生物のようだった。

「はっ…。『CODE—R』は研究者を多く失いましたが、肝心の検体は残っており、続行は可能です。『CODE—G』は…」

「どうなのだ!? はつきり言え!」

「はい、『CODE—G』は壊滅状態です」
バトラーの報告を聞いたクロヴィスの顔は白を通り越して逆に赤黒くなった。報告内容は、惨々たるものだった。

まず、最適検体が混乱の中逃亡。それによって研究員の多くが死亡し、ナイトメアを強奪。

それを止めるために残る二体の検体をナイトメアに乗せたのだが、混乱の中で先にテロリストのナイトメアと戦うことになった。

そして、次善の方は戦死し、最後の一体は撃破された恐怖のせいか精神異常を起こしている。

壊滅状態という言葉通り、これ以上の研究は無理だろう。だがクロヴィスにとってはそれ以上に重大な問題があった。

「あ…、あの『王』が逃げ出したのか…?」

再びクロヴィスの顔が白くなる。

「どこまで行っていた? 私への忠誠心は…」

「まだ、でございませす」

「なぜそれを最初に教え込まなかった!!!」

クロヴィスの罵声にバトラーは平伏するが、すぐさま自己弁護を開始する。

「…ですが、最初にそれを教え込みますと、思考がいびつになる恐れがあると申し上げておりました、それでは殿下のご要望に合わぬ結果になりかねないと…」

これは『CODE—G』研究の際にクロヴィスも了承していたことで、バトラーを責めるのは筋違いと言うものだ。それを思い出したクロヴィスが言葉に詰まり落ち着いたところで、バトラーが問いかける。

「…殿下、『CODE—R』のほうはいかがでしたでしょうか？再びあのような騒ぎが起きることを考えますと、移転するのがよい、と愚考いたしますが…」

「う、うむ、そうだな。……移転しよう。それに、『王』は何としても確保するのだ。手配を頼むぞ、バトラー」

はっ、とバトラーが再び平伏し、目の前から禿頭が消える。だがクロヴィスは彼が去ってもその禿頭があった場所を見ていた。

「あの、『王』が…。はは……。はははははは……」

うつろな表情でつぶやく。誰かがこの場にいたら、気が狂ったのではないかと思っただろう。

彼は怯えていたのだ。敵となれば手の付けようがない獅子を、野に放ってしまったことに。

「またあの研究所を襲うって!?!」

あの襲撃から4日。扇が次の作戦をメンバーに伝えたとき、メンバーからは怒りと不信がない交ぜになった視線を送られた。

「いや、そうじゃない。俺たちの襲撃を受けて、移転を決めたという情報が入った。だから、移送途中で奪い取る」

またしても情報はキョウト経由だが、さすがに扇も今回は慎重に、別ルートでも確認を取った。

それによると、気づかれないよう極秘に行うため警備は薄く、あの研究所にサザーランドが新しく配備されたこともない。

「チャンスといえばチャンスだけど…」

「で、結局何の研究所だったんだ？その情報は入ってないのか？」

前回の襲撃では『極秘兵器』という情報しか入ってなかった。施設を襲うならともかく、移送中に奪うとなれば目標がわからなくては話にならない。

「ああ、どうやら『毒ガス』らしい」

「ざわ、とメンバーに動揺が走った。このゲットー中に毒ガスをばら撒くことだって、ブリタニアという国はやりかねない。」

「ここでやらなきゃいずれやられる、そして動けるのは俺たちだけ、か。嫌な話だな」

「……他の連中は何をしてるんだ。俺たち弱小レジスタンスより、解放戦線あたりが動くべきだろ」

「南、杉山。片瀬のジイさんに期待したって無駄だよ。クロヴィスとどんぐりの背比べでやってこれただけなんだから」

小笠原に辛辣な意見を述べられた片瀬という人物は旧日本軍少将で、日本最大の抵抗勢力『日本解放戦線』の総司令官である。

「が、彼の実績は芳しくない。消極的で状況に受身すぎるといえるのがもっぱらの評判だ。平時や、戦時でも大国の指揮官なら「堅実で着実な軍の運用をする」と評価されたかもしれないが、レジスタンス組織にはまったく不向きな人材だ。」

一方のクロヴィスも彼の天分は芸術面にあるらしく、陰ではブリタニア人にまで「一流の絵描き、三流の総督」と揶揄されている。

「なら、やっぱここは俺たちがやるしかねえだろ」
玉城の威勢のいい言葉に団員たちがうなづく。

「ああ。それで今回の作戦なんだが……」

扇が作戦を説明していく。カレンはその説明を聞きながら、心の中で祈っていた。また、誰も死なないように、と。

決行はこれより1週間後――。

Stage 03 目覚め

「こいつの威力は、お前たちがよく知ってるだろっ!？」

いつそのこと、と『毒ガス』を使うことを提案した永田を一喝し、再びグラスゴーに乗り込んだカレンはスラッシュハーケンで二機の軍用機を撃破した。

が、そこに増援が現れ、カレンの表情が引きつる。

『お前たちは下がれ。私が相手をする』

ナイトメア空輸機。地上兵器のナイトメアを迅速に輸送するためのものだ。

カレンたちの襲撃は一応成功。目標の『毒ガス』と思われるカプセルは奪取した。が、またしても玉城が作戦通り動かなかったので、警察の航空機に追われることになった。

途中、前をゆつくり走るバイクが邪魔で事故を起こしたものの、今に至るまでは何とか逃げ延びた。

だが、ブリタニアは本格的に動き出した。ナイトメア部隊を投入してきたのだ。

ということとは、このカプセルがどれほど重要なものを証明するよなものだ。偽物なら空輸機まで使ってナイトメアを投入するようなことはしないだろう。

それは同時に、絶体絶命、ということでもあった。

『どこから流れたのかは知らんが、旧型のグラスゴーではこのサザールランドは止められぬ。ましてや、皇帝陛下の情愛を理解できぬイレヴン風情にはな』

カレンの放ったハーケンを自分のハーケンで撃墜し、サザールランドが降り立つ。

そして降り立つと同時にグレネード弾による攻撃。サザールランドを見て態勢を整えようとしたグラスゴーに直撃するが、カレンは左腕を犠牲にすることでなんとか防いだ。

(くっ、また…)

カレンの脳裏に研究所での光景がよみがえる。あの時、このグラス

ゴーでサザーランドの相手をするのがどれほど無茶なことか、骨身に
しみるほど思い知らされた。

『カレン、別行動だ！共倒れはまずい。お前は逃げろ!!』
「でもー」

永田の提案を退けようとしたカレンだったが、トレーラーの前方に
別のサザーランドが回りこみ、有無を言わさずそれしかない状況に追
い込まれた。

トレーラーは狙撃され、ちょうどそこにあつた脇道に道を変えるこ
とで捕まえることだけは避けられた。

カレンは何かとして目の前のサザーランドを倒そうと左のスラッ
シユハーケンを放とうとする、が、何度トリガーを引いても発射され
ない。

「なんで!?!」

整備不良だ。よりもよってこんなときに、と機体と貧乏所帯の内
情と運の悪さを罵り、迫るサザーランドに対しては左腕をパージして
弾丸代わりにぶつけ、爆煙に紛れて何とか逃げ出した。

「ほう、思い切りがいいな」

旧型のグラスゴーであれだけの動きをする相手を褒め、サザーラン
ドのパイロットは不適に笑う。

『ジェレミア卿、追わないのですか？バトラー將軍からなんとしても
トレーラーは止めると…』

トレーラーの前に回りこんだもう一機のサザーランドから通信が
入る。

「ヴィレッタ、考えてもみよ。何故このゴッドバルト家の血を引く私
が、あんな戦の役に立たぬ臆病者に顎で使われねばならんのだ」

ジェレミア・ゴッドバルトというのがこの男の姓名である。爵位は
辺境伯。ブリタニアの貴族中でも相当な名門といえる。

「そもそも、今回はバトラーが行っていた研究が盗まれたのだ。移送
計画も奴の発案。あいつの進退まで面倒を見る義理はない。第一、
『毒ガス』など我ら純血派がいれば必要のない兵器ではないか」

『しかし—』

ヴィレッタと呼ばれた女がなお食い下がろうとするが、ジェレミアはリーダーを見てさらに追撃しない考えを固めた。

「クロヴィス殿下の親衛隊のご到着だ。我らは援護に回るとしよう」

リーダーに反応があった方向を見たジェレミアの視線の先には、サザランドとは違うナイトメアの姿があった。

ナイトメアフレーム『グロースター』。現在のブリタニア軍最新鋭量産機で、このエリアーではクロヴィスの親衛隊に数えるほどのしか配備されてない。

（ふん…。殿下に取り入るしか能のない連中には過ぎた玩具だ）

グロースターの姿を見たジェレミアが内心で悪態をつく。本来、それに乗るべき存在は自分のはずだ、と思いながら。

「バトレー、状況はどうなっている」

「はっ…。その…。純血派の部隊が追跡しましたが、『魔女』を積んだトレーターは旧地下鉄網に逃げ込んだと」

純血派の役立たずめ、と内心で罵りながら、恐る恐るバトレーが報告する。だがクロヴィスはそれほど気分を害したようでもなかった。

「…ならば、親衛隊の網の中に追い込んだ、ということだな」

「はっ、ではイレヴンどもを地下鉄の搜索に当たらせませす」

考えてみれば、純血派にも『魔女』のことは知らせずに済んだのだ。秘密を知る可能性があるのは少ないほどいい。警察に至っては、ただの医療機器としか説明していない。

バトレーは『イレヴン』という言葉を使ったが、正しくは『名誉ブリタニア人』である。だがクロヴィスもそんなところを指摘したりはしない。

「…口封じは念入りにな。わずかでも知った可能性のあるものは、全て抹殺しろ」

心得ております、とバトレーが頷く。どちらも使い捨ての道具しか思っていないのだろう。

「…『王』に続き『魔女』まで失ったら私は破滅だ。わかっているのだ

ろうな、バトレー」

旧日本、エリアーにクロヴィスが総督として赴任したのは3年前の事だ。その時点で抵抗が激しく治めがたい地だと知られていたが、それはクロヴィスの予想をはるかに超えていた。

元々彼に野心は無く、この地を選んだのも「弟と妹の眠る地を静かにしてやりたい」という理由だった。人質になっていたのが7年前の侵攻で犠牲になったのだ。遺体も見つかってない。

だが彼は思い知ることになる。現実是非情だった。テロ行為は止まず、成した政策は期待を裏切り、部下の派閥対立は深刻になる一方で、彼のきれいな思いから発した願いはかなうことが無かった。

苦悩する日々の中で見つけたのが『魔女』であり『王』だった。この二つはクロヴィスの苦悩を吹き飛ばす魔法の道具だったのだ。

先の襲撃で『王』を失った今、『魔女』まで失うことは絶対にできない。クロヴィスも内心では必死だった。

だがその期待は、見事に裏切られた。

「逃げられただど!?それでも親衛隊か!?!」

1人のイレヴンが目標を発見、その場に急行したが、捕獲しようと近づいた瞬間にトレーラーが爆発したのである。テロリストが自決用に仕掛けていたらしい。

爆破の衝撃は上方に拡散したため人的損害は無いが天井の岩盤が崩れ搜索不能、という報告にバトレーが激昂する。

「た、探索を続行します」

当たり前だ、と思いつながら通信を切る。何のために貴様らにだけは教えたのだと思うと、怒りは収まらない。

「……作戦は次の段階だな」

そんなバトレーの様子を見ながらクロヴィスが冷静を装って言う。「次の段階」、それが何を意味するか知っているバトレーは少々あわてる。

「あれが外に知られたら、私は廃嫡だよ。本国には演習を兼ねた区画整理と伝えよう」

廃嫡、と言われてはバトレーも黙るしかなかった。彼の忠誠心は国

家より個人に向く。まずはクロヴィスありき、なのだ。

「第三皇子クロヴィスとして命じる。シンジユクゲットーを壊滅せよ!!!」

虐殺が始まった。

ブリタニア軍は包囲網を敷き、一齐に中央に向かって進む。その包囲網の中では、民間人もレジスタンスも関係なく殺されていく。

(くそっ、ブリタニアめ!)

天井から伝わる衝撃に内心の後悔を噛み殺し、カレンはグラスゴーを発進させた。サザーランドから逃げた後、地下街に身をひそめていたのだ。

「おい、カレン！無茶だ！一機で何ができる!?!」

「だからと言って知らぬ存ぜぬで隠れてろって!?!ふざけないでよ!!!」

扇からの通信を乱暴に切ったカレンは地上に躍り出るが、それは確かに扇の言った通り無謀でしかなかった。

『さあ、狩りの再開だ』

先のサザーランドに見つかったカレンは、逃げるしかなかったのだから。

(……死んでる、皆)

何故自分が廃墟の中にいるのか、少年にはわからなかった。

埃でくすんだ銀色の髪、色白の肌は垢じみ、身なりも粗末なものが、整った顔立ちにはどこか気品がある。

わかるのは、この光景に対しては憎悪を伴った嫌悪がある、ということだ。

サザーランドが姿を現す。熱源反応からこの場所に人間がいると判断したのだろう。

「ん？君はイレヴンではなさそうだが…」

銀色の髪を見てブリタニア軍の兵士は引き金を引くのをためらったのか、銃をかまえた状態でサザーランドが停止した。

抵抗する様子も逃げる様子も無い少年を見て、サザーランドから降

りて様子を見に近寄ってきた。

「酷い有様だな、テロリストに人質にでもされたのか？……ともかく、ブリタニア人なら保護しよう。ここにいれば殲滅戦に巻き込まれるからな」

「……殲滅？皆殺しか」

少年の顔にあからさまな嫌悪が浮かぶ。さらにその眼光の鋭さに歴戦の兵士がたじろいだ。

「……気分は良くないが、命令だしな」

「……そうか。貴様は殺さないで置いてやる。サザーランドというのが不満だが、まあいい。私によこせ」

「ああ、起動コードは――」

言われるままキーを差し出し、起動コードを口にする兵士。ありえない行動を当然と受け止め、少年はサザーランドに乗り込んだ。

サザーランドを手に入れた少年は、慣れた手つきでコンソールを操作し始めた。目的は、ブリタニア軍の配置図。

（やはり、か）

この作戦に投入されているブリタニア軍の戦力は、ナイトメアだけに限っても五十機は下らない。これをサザーランド一機で退けるのは不可能だ。

「ん……」

ではどうするか考える中、すぐ近くに他とは違う識別信号の小隊があることに気づいた。識別信号から機体を割り出す。

「グロースターか。ちようどいい」

少年はとりあえずの目標を見つけ、笑みを浮かべる。端正な顔がそれを一層酷烈に見せる、狂気を宿した笑みだった。

3機のナイトメアによる小隊が、廃墟と喋っているほど荒れ果てた街を進む。

（何で俺たちまで……）

隊長は内心の不満を押し殺して突き進む。相手は旧型のグラスゴーがただ一機という。大騒ぎして親衛隊まで投入するなど正気の

沙汰ではない。

しかも彼らは親衛隊の中でもエリートとされる人間だった。なんと言っても機体がグロースターというのがそれを証明している。

(文官上がりが偉そうに…。殿下の恩寵をいいことに、自分の失態のため親衛隊を動かすとは…)

主君であるクロヴィスを批判するのははばかられるので、必然的に批判はバトレーに向かう。

もともとバトレーは官僚であり、軍人になっても後方勤務や兵器開発を手がけていたので、実戦部隊とは疎遠だった。

それゆえ皆が多かれ少なかれ、ジェレミアが『戦の役に立たぬ臆病者』と罵ったのと同じ感情を持っていたのだ。

「ん?」

レーダーにいきなり反応が現れた。場所は非常に近い。すぐ隣と言ってもよい。

背後にドン、と着地した音。と同時に一機のグロースターが吹っ飛んだ。コクピットにスタントンファアが直撃。さらにもう一機がスラッシュハーケンを打ち込まれて戦闘不能。

「なっ!?!」

あわてて向き直り、敵にランスで突きかかる。

が、敵は難なくその攻撃をかわし、足払いを仕掛けてきた。グロースターが無様に転び、起き上がろうとしたときにはコクピットにアサルトライフルの銃口が突きつけられる。

『降りよ』

敵の冷徹な声に、隊長はおとなしく従うしかなかった。

Stage 04 コンタクト

「まだ何かあるの!？」

扇からの通信を切った直後に再び通信が入り、苛立ちを隠さずカレンは応答してしまった。事実、サザーランド三機に追われてそれどころではないという状況ではあったが。

『……ずいぶんな挨拶だな。君とは初対面のはずだけど?』

相手の声がして、冷や水を浴びせられたような感じと共にカレンの頭に冷静さが戻る。明らかに別人の声だった。そしてもう一つ、明らかにこの声はカレンと同年代の少年のものだった。

「あ、ごめんなさい。……って、あなた、何者よ!？」

この周波数はメンバーしか知らないはずなのにもかかわらず、この少年は通信を送ってきた。もしかしてブリタニア軍にも筒抜けになっているのでは、とカレンは思い切り不安になった。

『説明は後に回す。それより、隠れていたのが出てきたということは多少なりとも罪悪感を持っているということか?』

「罪悪感?」

『今回のことは、君たちの失策が原因だろうか?』

そう言われて、カレンは言葉に詰まる。確かに今回の殺戮は自分たちの作戦が失敗し、ゲッターに逃げ込んだために引き起こされた。

「……そうね。その通りよ」

『認めるか。ならば手を貸せ。一人でも多くの日本人を救う』

「わかったわ。何か考えがあるの?」

カレンは躊躇せず答えた。畏かもしれない、という思いは微塵も無かった。

何故だか知らないが、この少年の言葉は信じられる。

『線路上を西口方面に。追ってくるサザーランドは、私が片付ける』

「片付けるって……、相手は三機よ!」

『問題ない。横から君に近づく一機が私だ。間違えて攻撃しないでくれ』

カレンがモニタを見ると、確かに急速に近づく一機の反応がある。

(この識別コードはブリタニア機…)

普通ならば、罨と思う。だが、カレンは迷うことなくその機体を『味方』と認識させるように設定した。

グラスゴーが線路の高架に上る。当然、それを見た後ろの三機もそれに続く。

なぶり殺しにするつもりなのか、アサルトライフルは撃ってこない。

(…それが間違いだ)

その様子を見て笑った存在がいることに、気づくものは誰もいない。

「しかし、俺と同じところに目をつけるとは…。少し甘く見すぎているな」

黒い髪と、アメジストのような紫色の瞳が特徴的な少年だった。顔は女性を十人連れてくれば、まず間違いなく全員が「美形」と言うだろう。

欠点を探せば、「華奢」としか見えない体格だろうか。体は細く、手などまるで女性の手のようだ。

そして、この場所にいるにもかかわらず、学生服を着ていた。巻き込まれた民間人なのだろう。なのに傍らにサザーランドがあるというちぐはぐさは、どう説明すればいいだろうか。

「……まったく、いい迷惑だ。だが俺の目的を達するための駒としては、使えるほうかもしれん。あながちマイナスばかりでもないか」

その眼前を、グロースターが走り抜けていく。このグロースターの動きは明らかにブリタニア軍のものではない。それに、基本的にブリタニア軍が単機で動くということはない。

(お手並み拝見、とさせてもらうとするぞ。このルルーシュ・ヴィ・ブリタニアの駒足り得るか、のな)

そう思い、グロースターの姿を見下ろす。その瞬間、相手の頭部もこちらを見た。

「……………っ！」

カメラ越しであるが、視線が合った。そして、何とも表現できない奇妙な感じに襲われたのだ。

証拠はない。が、ルルーシユは確信していた。このグロースターのパイロットが、指揮官だと。

「なにい!？」

アサルトライフルの斉射を浴び、サザーランド一機が撃破された。

「グロースターが!?!馬鹿な、味方だぞ」

「うろたえるな!撃つてきた以上、敵だ!」

僚機の動揺を一言で沈めたジェレミアだったが、通信を切ってから舌打ちした。

横から猛スピードで近づいてきた反応があつたが、ブリタニア機なので誰もが味方だと思つていた。

その一機がグラスゴーと自分たちの間に割り込むように高架上に乗り入れ、銃口をこちらに向けたとき、ジェレミア自身も一瞬戸惑つたのだ。

他の二人は、夢を見ている思いだったろう。

(まさか奪われたのか?親衛隊の能無しどもが)

グロースターが奪われた、というのは予想外の事態だ。性能、とくに接近戦ではサザーランドを圧倒する。

「だが、テロリストふぜいにも過ぎた名馬よ。援護を頼むぞ」

僚機の発砲。当然相手は回避する。その回避先を打つ、というセオリー通りの戦法であるが、大きく回避すると思つていた予想は外れ、その修正に必要な時間が致命的な遅れになった。

相手は、正面から向つてきた。

「な、なんなんだ、こいつは?」

弾幕の中をまるで何事もないように走り抜けながら、相手が発砲する。

振り向かずにジェレミアのいるあたりを狙っただけで、これが牽制であるのは明白だったが、狙いを逸らされたジェレミアは回避するだけで攻撃はできなかつた。

(まずい!!!)

分散させられた。そう思ったがどうしようもなかった。僚機のサザードが敵のランスに貫かれ、爆発。

ライフルを構えるが、それよりも早い相手の射撃で腕が吹き飛んだ。構えなかつたらコクピット正面に直撃弾を受けて、パイロットの肉体は四散していたかもしれない。

「おのれ!!!」

無念だが、イジエクシオンシートを作動。この判断は間違っていない。勝てる相手ではなかった。機体性能にしても、操縦技術にしても。

人に負けた、という気分ではなかった。シミュレーターで最善の動きをするようにプログラミングされた機体が画面から抜け出した、という感じだった。

(亡霊だ、まるで…)

射出されたコクピットは包み込むようにエアバッグが開く仕組みになっているが、着地の際にはそれなりの衝撃を受ける。

その衝撃に揺さぶれながら、ジェレミアは思った。

鉄道の高架の上に逃げたカレンは、背後から追ってきていた三機の反応が消えたことを知る。

(本当…、本当に!?)

通信で話した少年の言葉は無謀でも自意識過剰でもなかった。実際に裏付けされた自信だったのだ。

「!!!」

レーダー反応にばかり気を取られていたカレンだったが、前方からの警笛の音を聞き我に返る。列車がこちらに向かってきていた。

「うわっ」

とっさにその列車に飛び乗る。反応があと少し遅れていたら跳ね飛ばされていただろう。

やがて、その列車は停止した。どうやらオートパイロットで運転されていたらしく、障害物を検知して停止システムが作動したらしい。

「でもこれ、…貨物列車?なんでこんな時に?」

カレンには理解できない。戦闘中に、軍によって封鎖されているはずのエリアを通過して運ぶ物資などあるとは思えないからだ。

カレンが首をひねって間もなく、扇たちグループのメンバーもこの場に駆けつけてきた。

「扇さん!みんな!」

「カレン!無事なようだな」

お互いの無事を確認して安堵の声が聞こえる中、メンバーの一人である杉山があわてて対ナイトメア用のロケットランチャーを構えた。

その先にはグロースターの姿があったのだから、これは当然の対応というべきだった。

「待つて!彼は味方よ」

カレンの声が、トリガーにかかった指の動きを止める。

『…その列車の中身を使い。私にはエナジーファイラーとライフルの弾倉を』

列車の中身を見て、カレンも他のメンバーも息をのんだ。十数機のサザードと、武器弾薬やエナジーファイラーが満載されていた。

「…す、すげえ。おい、これなら戦えるぜ!」

興奮した玉城が声を上げるが、グロースターの少年は換装を済ませるや立ち去ろうとする。

「どこに行くの!?!」

それに気づいたカレンが引き留めようとするが、帰ってきた答えはそつけないものだった。

『あとは適当に暴れてくれればいい。その間に、包囲網を突き破る』

この人は、私たちの能力を全く評価してないのだ、とカレンは思った。それはそうだろう。先ほどの通信で、今回のことを『失策』と断言したのだから。

そんな連中に合わせるなどごめんだ、私は一人でやる、と彼は言っているのだ。

「けっ!すかしやが…」それなら、あなたが私たちの指揮を執って!」
…カレン!」

悪態をつく玉城の言葉を弾き飛ばすように、カレンが叫んだ。

「お、おいカレン。いくらなんでもそんなことは…」

南が反対の声をあげる。確かにこの貨物列車に目を付けたのはグループ内には誰もいなかったし、操縦技術は三機の敵をなぎ倒したことで証明されている。

しかし、だからと言って自分たちの命を全面的に預けるなど、できることではなかった。

「彼は信用できません。そして彼の實力は見ての通り。私たちには、彼の力が必要なんです」

「ならよ、この状況から勝てるんだろうな!？」

玉城が「信用なんてできねえぞ」という内心をあらわに、嫌味たっぷりに言う。

『勝つ、だど?この戦い、勝つことに意義はない』

それに対し、彼はそう言い切った。

Stage 05 白の騎士

「グラウベ卿、通信途絶！」

「ガレリア卿、撃破されました。本人は脱出したとのことですよ」

「テロリストはわが軍のナイトメアを使用している模様」

「ジェレミア小隊壊滅から、入ってくる報告は敗報ばかりになった。

(な、なんだ、これは…)

少なくとも表面上は余裕綽々だったクロヴィスの額に、汗が流れ落ちる。『魔女』のことを除けば、相手はたかの知れたテロリストではなかったのか。万が一にもこんなことが起きるはずはなかった。

「このままでは北側の包囲網が突破されます。殿下、ぐ指示を！」

参謀の声が、クロヴィスを現実に取り戻した。北が突破されるとなればその先はイケブクロであり、その東にはトウキョウ租界が広がっている。

「に、西の包囲網から戦力を回せ。大至急だ！」

この作戦は大事にしたくない、というのが裏目に出た。もともと手近な親衛隊と租界の防衛部隊を動員している。留守部隊でははなはだ心もとなく、他の部隊は出撃準備もされていない。

この状況で、十機程度とはいえナイトメアが租界に乱入したらどうなるか。まるで無人の野を進む如しであろうし、民衆がパニックを起すのも間違いない。

だから最も近い西から戦力を回すことにしたわけである。東はクロヴィスの本陣で、こちらから兵力を割くわけにもいかない。

そして、それが敵の狙いだということに、クロヴィスは気付いていなかった。

「さあ早く！こっちよー！」

井上を隊長とした別働隊が取り残された民衆を先導して、西へと向かう。クロヴィスが戦力を移動させたおかげで、包囲網はとぎれとぎれになっている。

「やああっ！」

そして残る敵ナイトメアは、小笠原率いるサザーランド部隊が倒していた。

「小笠原、無理しないでね。あなたは傷が何とかふさがった、ってぐらいなんだから」

「大丈夫、この程度の相手なら負けるはずないって。カレンにはちよつと勝てないけど、あたしだってナイトメアには自信があるんだからね」

あつはつは、と豪快に笑う小笠原だが、先の研究所襲撃で重傷を負ったにもかかわらず、「もう治った」と言い張り参加していたのだ。

扇グループのエースがカレンなら、小笠原は準エースといえた。実はこの二人と井上の存在のおかげで扇グループでは女性陣の発言力が相当大きく、男たちは少々肩身が狭い思いをしている。

包囲網を突破。あとは散り散りに逃げてもらおうしかない。

「…これで少しは償えたかしら」

その言葉が偽善でしかないとわかっていながら、井上は言った。それまでに死んだ人たちのことを考えれば罵倒されてしかるべきだろう。

だが、それでも口から出てしまった。口にして、自分でそう思わなければやってられる気分ではなかった。

「…それにしても、あのグロースターの子って何者なのかしら」

彼がいなかったら、逃げ延びることなど不可能だったろう。命の恩人、というべきだった。当然ながら感謝している。

(でも、なんかカレンがおかしいのよね…)

最愛の兄を失ってから、カレンは誰にも心を開かなくなった。扇グループのメンバーとて信頼はしているだろうが、心の底にある思いをぶちまけることは決してない。

それが、あのグロースターの少年にだけは違う。

(もしかしたら、面白いことになるかも…)

この状況下で不謹慎極まる想像だが、井上はそう思った。

グロースターの行くところ、次々に敵がLOSTしていく。

もちろん、グロースターの機体性能が優れている、という点はある。だがそれを差し引いても操縦技術が並みの物ではないというのは明白だった。

また一機、グロースターのランスに敵サザーランドが貫かれる。

(これで七機目…)

カレンが誘い出した敵を、彼が殲滅する。あるいは逆に、彼を狙った敵をカレンが撃破する。その繰り返しでしかないのに、七機撃破した今でもろくに損害を受けてない。

タイミングが、絶妙なのだ。カレンが望むときに彼の攻撃があり、カレンが攻撃するときには敵を絶好の位置に追い込んでいる。

そして、このグロースターの少年はそれだけではない。

扇たちにも指示を出し、敵を分断し局地的にこちらが有利になる状況を作り出し撃破する。それに気づいた敵がまとまれば、そこにケイオス爆雷を打ち込んで一気に殲滅した。

ブリタニア軍全体では、すでに三十機以上が倒されているだろう。

『別働隊から作戦成功と報告が入った。撤収に移る』

「おいおい、このまま行けば全滅させられるぜ。ここで引くつてのはねえだろ」

レジスタンス結成以来初めての大战果に浮かれた玉城がかみつくが、彼は動じない。

『なら残りたい奴だけ残れ。私は去る』

こう言われては、玉城も苦虫をかみつぶしたような表情でありながらも従わざるをえない。彼なしでは勝てる見込みなど皆無というくらい、子供でもわかる。

『ブリタニアにとっては局地戦に過ぎず、全滅させてもかすり傷一つつけたぐらいだ』

これが、彼の主張だった。

確かに、国家レベルで見れば何の意味もない戦いである。

どんな損害を与えても、ブリタニアの国力なら1週間もせずに回復するだろう。

仮にクロヴィスを殺すなり、この失敗が失脚につながったとして

も、次はもつと優秀な総督が来るだけでしかない。将来的にはむしろクロヴィスの首をつなげたほうが有利なのである。

(戦略…、むしろ政略かしら…)

この少年は、明らかに自分たちとは違う視点で物事を見ている、とカレンは思った。

(ま、まさか、『王』では…)

このシンジユクゲッターに乗り込んだ時とは一転し、顔面蒼白でクロヴィスはそのことに思い至った。

損害は、死傷者合わせて数百名というところだろうか。だが、ナイトメアに限れば半数近い。そして戦果はとても人に言えるものではない。

「親衛隊は何をやっている」

小声で、隣にいるバトラーに話しかける。

戦場での失態は、ごまかせばなんとでもなる。局地戦の勝ち星一つくらいくれてやってもいい。『魔女』の回収さえ成功すれば、自分にとっては満足なのだ。

だが、そう相手に叫ぶわけにもいかなかった。

そして、『王』が相手なら狙いは自分の首だろう。思い当たる節が多すぎたので、そう恐怖に駆られたのも無理はない。

まさか、敵がこれ以上の戦闘を無意味と考えてるなど、クロヴィスに悟れるはずもなかった。

「通信が途絶えました。状況は不明です」

役立たずどもめ、と心の中で罵った。

(…どうする、…どうすればいい)

本当に『王』が相手なら勝てるはずもない。誰かいないか、とこの作戦に参加している部隊の名簿を見返す。

その眼が、ある行で止まった。

「…そうだ。兄上に借りを作ることになるのは望まぬことだが、この際仕方ない」

「殿下？」

「特別派遣嚮導技術部に連絡をとれ！大至急だ！」

「は〜い、特別派遣嚮導技術部でございま〜す」

特別派遣嚮導技術部、略して特派。その主任である白衣と眼鏡が特徴的なこの男は、ロイド・アスプルンドという。

階級は少佐、爵位は伯爵なのであるが、この態度は到底皇族でありこのエリアの総督に対するものではない。

「きつさま、なんだその態度は!!!」

当然ながらバトラーなどは憤慨したが、それはクロヴィスが押しとどめた。

「ロイド、勝てるか？お前のオモチヤなら」

「殿下、ランスロットとお呼びください」

ランスロット。『アーサー王伝説』に登場する、最強とされた騎士の名前。だが主君であるアーサー王の妻と密通し、円卓の騎士を崩壊させた一因となった男でもある。

「それで、勝てるのか？」

「さあ？それはやってみなくちゃわかりませんけどね。あ、でもついにデヴァイサーが見つかりましたよ。軍属なので異動を許可してもらいたいんですけど」

ランスロットの運用で、最大の問題になっていたのがデヴァイサー、つまり乗り手の問題である。

機体自体は実戦も可能なレベルまで完成している。だが、それも乗りこなす人間がいけないのではどうしようもなかった。

簡単に言えば、サザーランドの倍の性能を持つ機体であったとしても、50%しか性能を発揮できない乗り手しかいないのではサザーランドと変わらないことになる。

「誰でもいい、そいつをそのランスロットとやらに乗せて出撃させろ」
「え？じゃあ許可いただけたってことで。やったー!!!」

通信を切る。これ以上相手のあのペースに付き合う気になれなかったのだ。

「…なんとという不謹慎な。殿下、あのような者を、本当に信用なさるつ

もりですか」

「少なくとも、時間稼ぎにはなるだろう。私は政庁に戻る」

「準備はいいかしら、枢木スザク一等兵」

まさか、ロイドの見つけたデヴァイサーが名誉ブリタニア人で、しかも自分が先ほど使い捨てにしようとした中の一人、などということクロヴィスを知るはずもなかった。

「ざあくんねんでした。天国に行きそびれたね、枢木一等兵」

医務室で目を覚ましたスザクが見たものは、大ぶりの縁なし眼鏡をかけた、奇妙な発音で話す白衣の男であった。当然、ロイドである。

名誉ブリタニア人とは被征服国の住民で、ブリタニア人として生きることを選択した人間たちだ。

だが内実はナンバーズと変わらない。そのため正規部隊が嫌がるような任務を押し付けられるのが常で、今回スザクは『毒ガス』の捜索に駆り出された。

そして、スザクは見事目標を発見した。ただし、これは幸運ではなく不運というべきだったろう。『魔女』の秘密に関わってしまった彼は、親衛隊に撃たれたのである。

ちようどその場に民間人が居合せ、それをかばい上官命令を拒否したのは事実だ。だがそれで射殺というのは過剰すぎ、口封じであるのは明らかだった。

地下鉄で撃たれたスザクは親衛隊から放っておかれたので、その場所が発見された。トレーラーの爆発に動転していて生死を確かめることも忘れられたらしい。

それに、至近距離での銃撃だったので助かるはずはないという思い込みがあったのだろう。

「これが君を守ったのよ」

助かるはずはない、というのはスザク自身すらそう思っていた。それなのに今こうして生きている。その答えは、女性士官がかざした、弾痕のある古い懐中時計。彼の父親の、形見だった。

「正確には防護スーツの中での跳弾を防いだけただけだね。ま、それ

はそれとして…。枢木一等兵、君、ナイトメアの実戦経験は？」

「はっ。」

予期せぬ質問に、スザクの思考が停止する。そんな経験など、あるはずなかった。名誉ブリタニア人にナイトメアパイロットになる資格などないのだから。

冗談だろうと思いきや指摘するが、ロイドはさらに切り込んできた。

「なれるとしたら？ おめえでとおう、世界でただ一つのナイトメアが君を待っている。乗れば変わるよ、君も、君の世界も」

「望もうと、望むまいとね…」

世界が変わる、その表現はスザクにとって抽象的でありすぎたのだろう。それより彼は、目の前で行われている戦闘を止めたかった。

だからランスロットに乗ることを決意した。一回シミュレータに乗っただけで実戦に出るなど無謀というほかないが、彼は本気だった。

「ランスロット、発進します」

フルスロットルで、白の騎士が戦場に向かう。

Stage 06 出会い

「ん、増援か…。でも一機だけか。まあ、敵が追ってくるんじや仕方ねえよな」

「お、おい、玉城！」

仲間の声を見殺しして、玉城のサザールランドが向き直る。ここで撤退というグロースターの少年に対する反感もあったし、彼の指揮を受けずに敵を倒したいという功名心があった。

(へっ、俺だってやればできるってことを証明してやるぜ)

だがそれは、すぐに相手のことを見殺した愚挙に過ぎないことを証明することになる。

「なに？このスピード…」

たった一機の増援、それが尋常ではない相手だということに、気付く者もいた。

レーダーディスプレイ上の光点が、あっという間に近づいてくる。サザールランドやグロースターでは考えられないことだった。

そうこうしているうちに一機LOST。やられたのかといぶかる間に、他の二機もLOSTした。

『こいつは…。私が行く。それまで持ちこたえろ。戦おうとするな。逃げ回ってもいい』

グロースターの少年も気づいた。ただ、声が若干固い。つまり、彼でも自信のない相手だということだ。

このとき、カレンと彼の位置はかなり離れていた。逃げ遅れた人がいないか、探し回っていたのである。

そして、位置的にはカレンのグラスゴーのほうが、圧倒的に敵に近い。

敵の光点が、新たな味方の反応に近づく。そして10秒もせずにLOST。

「南さん、返事して！」

南が乗っていたサザールランドに通信を送るが、返答はない。そして、敵の反応はカレンのグラスゴーがいる方に向かってきた。

「…………やるしか、なさそうね」

スピードは相手が圧倒的に上、つまり逃げられない。ただ、勝てるなどとは微塵も思っていない。

せめて彼と同じグロースターならそこそこ戦えるかもしれないが、片腕を失ったこのグラスゴーでは取るべき手段は一つしかなかった。彼のところに、少しでも近づいただけだ。

(いける、このランスロットなら！)

これまでのナイトメアに乗ったことのないスザクでも、ランスロットの性能が圧倒的だということは理解できた。

また一機、サザーランドを葬る。さらにその僚機を撃破。これで撃破数は八機になった。

ただし、搭乗しているパイロットはせいぜいのところ軽傷だろう。ナイトメアフレームは元々『搭乗者の生存性を高めるコクピット』という概念から発達したため、脱出機構の性能が他の陸戦兵器と比べて非常に高い。

しかしそれも機構が使えなければ意味がないわけで、スザクは『脱出できる』ように敵を倒していたのだ。それはつまり、ある意味手加減しているということになる。

だからスザクは、背を向けている敵に銃を撃たなかった。ランスロットに搭載されているヴァリスなら十分狙えるが、コクピットに直撃したら…、と考え、引き金を引けずにいた。

(けど、逃がさない)

次に狙った相手をモニターに捉える。グラスゴーだ。そしてその機体は赤く塗装され、これが最初からテロリストが持っていた機体だとすぐに分かった。

そして反応がもう一つ。猛烈な勢いで近づいてくる。ゲットーの荒れ果て、倒壊した建物や瓦礫で障害物だらけの道をフルスロットルで進んでいるのだろう。

「並みの相手じゃないな…」

これまで撃破してきた相手とはまるで違う。そしてこのままだと、グラスゴーに追いついてすぐ相手にすることになるだろう。

「捉えたー！」

一撃でグラスゴーを撃破し、返す刃で次の相手をする。それがスザクの目算だった。

ただ、グラスゴーのパイロットもこれまでの相手とまるで違う技量の持ち主、というのを感じ取れなかったのは大きなミスだったと言える。

「嘗めないでー！」

カレンは廃ビルにハーケンを打ち込み、機体を飛び上がらせてランスロットの一撃を回避した。そのまま空中で反転、トンファで攻撃に転じる。

普通なら絶対の間合い。だがスザクの反射神経とランスロットの性能は『普通』を簡単に凌駕した。

「なっー！」

グラスゴーの右腕を、ランスロットは掴み取った。そしてランスロットの右手の剣が振られていく様子を、カレンはスローモーシヨンのように見た。

そして気付いた。ビルの壁に亀裂が入った事に。

次の瞬間、そこからグロースターが現れた。

「グロースター!? こいつが親玉かー！」

襲いかかるグロースターのランスを、スザクはMVSで防いだ。だがその状況から零距离で発射されたショットランサーまではかわしきれず、右胸装甲を小破。

索敵機構であるファクトスファイアが破損。両胸にあるためレーダーが使えなくなることはなかったが、範囲は大きく狭まり精度が低下するのは避けられない。

『あ~~~~っ!!! 僕のランスロット~~~~っ!!!』

ロイドの嘆く声があるが、スザクはそれどころではなかった。相手はランスに食い込んだMVSを引き抜き、構える。

態勢を整えたランスロットももう一本のMVSを取り出し、構える。それは武術に詳しい人ならわかるだろうが、明らかに日本剣術と日本剣術の立会だった。

(隙がない…)

スザクは認めた。相手の実力は、自分の予想をはるかに超えていたことを。

スペックを比較すれば、ランスロットの性能はグロースターさえも圧倒する。

なのに、である。

「信じられない…」

開発者の一人であるセシルさえ、この状況は想定していなかった。ランスロットがグロースターと戦闘を開始してから6分経過。なのに、このグロースターはランスロットと直角の戦いを演じ続けた。

これまでのサザーランド相手では、長くても数十秒だった。それを考えれば、驚異的としか言いようがない。

「うくん、まあこっちのデヴァイサーが初めての騎乗ということもあるんだけど、生半可な相手じゃないね。……欲しいな、この相手」最後の言葉は隣にいたセシルだけに聞こえる程度の小声だったが、心の中だけにしてほしいとセシルは思った。また病気が始まった、として諦めるしかないのだが。

薙ぐ。かわされる。右足のランドスピナーを急速後退させて相手の突きを回避。攻撃に転じようとしたところマシンガンが撃ち込まれ、シールドを展開。そこにさらに追撃が来る。

「この…」

手加減している余裕はなく、ついにスザクは腰に手をやった。もちろんランスロットの、であり、そこにはこれまで使わなかったヴァリスがある。

至近距離からの銃撃。これも『普通なら』かわせるはずのない攻撃のはずだった。

「なにっ!!」

スザクは見た。相手は、ランスロットの手が腰に動いた時点でもう回避のための重心移動に移っていたのだ。発射の時点では、すでに視線からずれていた。

グロースターのMVSが振り上げられ、ヴァリスが切断される。スザクの反応があとコンマゼロ数秒遅ければ、ヴァリスではなくランスロットの腕が切り落とされていただろう。

(恐ろしい相手だ)

スザクは敵の評価を変えた。完全に、次の手が読まれている。正確にはその時の状況とスザクが何か行動を始めたときの動きで予想しているのだろうが、その正確性は予知に近い。

「一つ聞きたい、どうしてそれほどの力があるのに、間違った道を進むんだ!!!」

通信で呼びかける。どうしても言っておきたかったのだ。返事がなくても仕方ないと思っていたのであるが、相手は真面目に返してくれた。

『…『間違った』？私には、貴様の方がよほど間違っていると見える。関係のない民衆を虐殺するような行為のどこに正義がある!!!』

「それについての批判は甘んじて受けよう。だが、戦いが終わればそれも終わる!」

『…貴公は勘違いしているのか、騙されているのか。私たちが戦うのを止めれば、虐殺が再開されるだけだ』

グロースターが構える。もはや問答無用ということだろう。

だが、分はスザクの方にある。ランスロットの戦闘機動は、まだまだ限界に達していない。

(スピード重視、いくぞ!!!)

一撃で狙う愚は避け、無数の攻撃を立て続けに行う。小技ゆえ命中しても相手に致命傷を与えることはできないが、グロースターが防戦一方になる。

突く。グロースターが回避し、反撃に移ろうとする。明らかに焦りからのミスで、それこそスザクの狙いだった。この突きはここからさらに2段、敵を追い詰める。

「藤堂さん直伝の、『3段突き』だ!!!」

2段目の突きまでかわされたが、ついに3段目の突きがグロースターの左腕を貫いた。

グロースターはその状態のままマシンガンのトリガーを引く。狙いなど何もなかったがランスロットの足元あたりに銃弾がばらまかれ、それにわずかにひるんだ隙に距離を取った。

(……………どうする。……………どうすれば)

焦っているのはグロースターの少年だけではない。二人の激突を間近で見ていたカレンは、むしろ本人以上に焦っていた。

グロースターの左腕は貫かれた上のマシンガン乱射で千切れたようになり、パージして捨てる以外になかった。これで情勢は、圧倒的に敵が有利である。

ここであるグロースターが敗れば、もう勝ち目はない。かといってカレンのグラスゴーが割って入れるような立ち合いではない。無理に割り込めば、足手まといになるだけだ。

『地図と座標を転送する。敵をこのポイントに誘い込め』

不意に、通信が入る。と同時にモニターにシンジユクの地図が映し出され、光点が表示される。グロースターの少年の声とはまた別の声だった。そして、扇グループの仲間の声でもない。

これが罠なのかどうかカレンが疑うより先に、グロースターは動き出した。考えてみれば、このままでは勝てない以上、この話に乗るしかない。

『Q-1、お前はここで待機しろ』

人を何だと思っている、と言いたくなるような態度の相手だが、乗ってしまった以上は従わざるを得なく、指示されたポイントに向かう。敵はグロースターを追って行った。

そしてカレンの眼前をグロースターが、そして敵が通過。

グロースターがビルを越えた瞬間、道路が吹き飛んだ。地表に爆薬を仕込んでおいたのだろう。

そして、ビルでも爆発が起きていた。目の前の道路、つまり敵のいる場所に向かって倒壊させたのだ。

「なっ!!!」

スザクも、この状況は焦った。さすがのランスロットも巨大なビルに押しつぶされてはひとたまりもないだろう。逃げるにしても地面

が陥没して、足が取られる。

「くっ！おおお!!」

だが、スザクはその状況からでも脱出した。途中から倒壊するビルの側面を走るといふ荒業で、間一髪の脱出を果たしたのだ。

だが滑り込むような態勢で、当然戦闘態勢は取れてない。次の反応が遅れた。

「もらったあっ!!」

グラスゴーの一撃が、ランスロットのコクピットに直撃する。コクピットが大きく揺さぶられた。

普通なら強制脱出になってもおかしくないが、ランスロットにはそれが無い。だがこの場面はそれが幸いし、反撃で振るったMVSがグラスゴーを貫く。

グラスゴーの強制脱出装置が発動、それを見てスザクはほっとした。無我夢中で振るった剣だったが、相手を殺さずに済んだことに。

だがそれは戦闘中に思ふべきものではなかった。その瞬間、塵煙を切り裂いてグロースターが現れたのだ。倒壊するビルの上面を走るという、グロースターでは神業というべき機動だった。

『お返しだ』

グロースターの斬撃をかわす。だがそこからノータイムで派生してきた突きまでは回避できなかった。先ほどスザクが貫いたのと同じ左腕に、MVSが貫通する。

「ぐあっ!!」

そのまま壁にまで押し付けられた。激突の衝撃でコクピットが大きく揺さぶられ、縫い付けられた状態になる。腰のハーケンがグロースターを挟むが、振り放せない。

『……………ここまでか。まあ、上出来だ』

「!!」

ハツとスザクも気付く。もう動けないグロースター。組み合ったこの状況。取るべき手は、一つしかない。

(まづい!!!)

グロースターの脱出装置が作動。普通なら安全圏まで飛び去るの

を待ってからだろうが、相手はそれをしなかった。

ドオン！

すさまじい閃光と爆風がランスロットを包み込む。グロースターが自爆したのだ。

(あ、危なかった…)

左腕とハーケンのパージがあと半瞬遅かったら爆発の中心点にいたであろう。だが直撃を回避したとはいえランスロットのモニターは警告の表示で真っ赤に染まる。

『……スザク君、帰還してくれる？』

セシルの声は静かだった。怒りを押し隠しているのか、グロースターにここまでやられたことに愕然としているのかはわからない。疑問形なのは、とにかく動揺しているのだろう。

『僕のランスロット……。僕のランスロット……。』

その背後からは、うわ言のようにつぶやくロイドの声が聞こえた。

何にせよ、戦闘はもう無理だった。ランスロットは整備が必要だし、リーダーには敵の反応がない。残りには逃げ切られたのだろう。

「戦うのを止めれば、虐殺が再開されるだけ……」

敵の声がスザクの脳裏にこだまする。これで自分の世界が変わったのかは、まだわからずにいた。

ドオン、ガン、ガン、とものすごい音を立てて、ナイトメアフレームのкокピットがとても無事とは言えない状況で着地した。

本来ならエアバッグが開くのだが、ほとんどが焼き切れた断片だけになっている。それが自爆の際の爆風のためとなどカレンにわかるはずもなかったが、これがグロースターの物であるのはわかった。

戦っていたのは、自分と彼以外にいない。

「え、あ…、た、助けなくちゃ」

偶然、脱出した方向が同じになったのだ。よって同じあたりに着地することになった。カレンの方はちゃんとエアバッグが展開されたため傷一つないが、彼の方はいろいろ叩きつけられただろう。

「ふぬ…、くあ…」

女の子が出す声ではなかったが、カレンは歪んだコクピットのドアを必死でこじ開ける。

ついに開いた。

「え？」

グロースターを操っていたのはカレンの想像とは大きく違う、銀色の髪をした少年だった。

「う…、く…」

「目、覚めた？」

その後、カレンは意識を失った少年を近くの廃ビルに運び込み、介抱していた。

目立つ外傷は頭の切り傷程度で、命になんらかかわるものではない。あれだけ叩きつけられたにもかかわらず骨折の一つもしていないというのは、この少年の体が頑丈なうえに幸運だったのだろう。

「…君…は？」

「残念だけど、あなたが何者かわからない以上、答えることはできないわ」

銀色の髪に深い青の目。明らかに『日本人』と思えない容貌がカレンを慎重にさせていた。

「この声…、グラスゴアのパイロットか。無事なよう…、だな」

「おかげさまでね。…質問なんだけど、あなた、何者？どうして私たちに味方したの？」

「別に…、たいした理由ではないさ。虐殺というのが気に入らなかった、ただそれだけだ」

確かに、たいした理由ではなかった。そして敵ではないというのも明らかだ。ただ、それであれだけのことをするというのは異常だった。

「それだけ？」

「それだけだ…、…と、のんきに話している場合ではなくなったようだな」

カレンも気づいた。ブリタニアの憲兵だろうか、10人以上の集団がこの辺りを詮索していた。

どうするか。10人相手に立ち回る自信は、カレンにもない。もう一人は武器も持ってない。彼を連れては、逃げ延びることも難しい。（死ぬほど嫌だけどー）

自分の中に流れるブリタニアの血。それを使えば何とかなるかも

しれない。服装は少々難があるが、顔立ちは二人ともブリタニア人に見えるはずだ。

自分一人なら絶対に使わない手段。その思いがカレンを躊躇させ、そして油断に繋がった。

「…すまない」

首筋に当身をくらい、カレンは意識を失った。

「ん、ん…」

携帯のコール音に、カレンは目を覚ました。周囲は静まり返っていた。外も、爆音も何もしない。

(戦闘は!?それに彼は!?)

状況は把握できないが、とりあえず携帯に手を伸ばした。

『カレン、無事だったか!?何回鳴らしてもつながらなくて、心配したぞ』

相手は扇だった。とりあえず一言謝ったカレンは、簡単に気絶していたことを説明し、今の状況を聞くことにした。

扇によると、あの白いナイトメアも撤収し、その後理由は分からないがクロヴィスの名で停戦命令が出されたのだという。

カレンにはよくわからない話だったが、扇も他メンバーもわからない話なのだから仕方ない。

あの白いナイトメアが撤収した、というのは理解できる。銃を破壊され左腕を損傷しグロースターの自爆攻撃を受けたのだ。誰がどう考えても、一度整備が必要だろう。

だが、だからと言ってそれが停戦につながったとも考えにくい。残った戦力でも戦闘を続けるくらい不可能ではない。

『なににせよ、戦闘は終わりだ。お前も合流しろ』

作戦は、今回も失敗に終わった。結局『毒ガス』は地下で拡散してしまっただけ。ガスによる人的被害がないのが、せめてもの救いと言える。

物資のほうはグラスゴーを失ったものの、釣りは十二分に手に入れた。撃破されなかったサザーランドが五機に大量のエナジーフィ

ラーや武器弾薬。しばらく困ることはないだろう。

だが、トレーラーを運転していた永田の生存は絶望的だった。トレーラーの反応が消えた場所に向かったメンバーが見たのは、瓦礫の山だった。自決用の爆弾を起動したとしか思えない。

(永田さん…、ごめんなさい)

彼には奥さんとまだ幼い子供がいた。自分がもつとうまくやっていたら、あのサザーランドを倒すことができたら、残されたものは泣かずに済んだだろう。

後悔するばかりの作戦になった、と沈み込む気持ちで携帯電話をポケットに入れようとしたカレンは、覚えのない紙が入っていることに気付いた。

広げてみると、ポイント座標とこの場所に行けという指示がブリタニア語で書かれている。

「……彼の仕業よね、これ」

気を失う前にこんな物があつた覚えはない。もしかしたらもう一度彼に会えるかもしれないと、カレンの心は少し上向いた。

指示されたポイント。そこに隠されていたものに、カレンも扇グループのメンバーも息をのんだ。

「お、おい…。これって…」

故障しているとはいえ、二機のグロースターが佇んでいた。

「うん…。この程度なら簡単なパーツ換装でいけるわね」

あの銀髪の少年は、三機ものグロースターを奪取していたのだ。しかも、機体に大した損害を与えることなく、である。

「と、とにかく運び出そう。これは、今後の俺たちにとって大きな力になるはずだ」

興奮して声が上がっている扇であつたが、言っていることは間違つてない。グロースターを持っているレジスタンスなど、世界中を探してもないだろう。

ただ、そこに彼の姿はなかった。

「ねえ、カレン。彼は…」

目を覚ました時、憲兵の姿もなかった。ということ、彼は囮になつたのだろうか。とにかく消息は、一切わからない。

「銀色の髪に青い目のブリタニア人みたいな少年ね……。とりあえず知り合いのグループにもいないっていうのは断言できるけど」

「そうだー井上さん、これを分析してください」

カレンが出したのは血の付いたハンカチ。彼の血を拭うのに使つたものだ。

「……なるほど。キョウトに問い合わせるわね」

彼ほどの実力者でレジスタンスに所属しているのなら、キョウトとつながりがあつても何らおかしくない。ブリタニア人としても、キョウトならブリタニアのデータベースと照合するくらいは可能だ。

何にせよ、彼の素性を知る手掛かりにはなるだろう。

一方でレジスタンス活動のほうであるが、しばらくは身を潜めるべきだという意見が大勢だった。あれだけの大騒ぎをしたのだから、ブリタニアの締め付けは一層強化されるだろう。

カレンもそのことについては異存がない。このグロースターを扱う訓練でもしようと思つていたのであるが、リーダー命令でそれは一転した。

「カレン、お前、明日からしばらく学校に行け」

のちのことを思えば、この一言も歴史を変えた運命の言葉と言えるだろう。

「はあ…」

結局ここに来ることになるのかという思いを、ため息一つにとどめたカレンであった。

私立アツシユフォード学園に通う名門貴族シュタットフェルト家のお嬢様。それが、カレンのもう一つの顔である。

勉強自体は嫌いではない。休むことが多いとはいえ、その分努力しているので成績も優秀だ。だが、ここにいると自分が壊れていくような気がして、それがカレンは嫌だった。

昨日と同じ今日があり、今日と同じ明日が続くと思われている平穩

な世界。それはこの租界の外の現実には目をくることがないため認識されることがない、ブリタニアのための世界。

昨日の新宿での戦闘がネット上に流れたらしいが、それをまるで遠い国、いや、フィクション作品のように閲覧している生徒がいる。

そんな連中と同じ世界で自分を偽り、病弱なお嬢様という仮面をつけて生活する、というのがたまたまなく嫌なのだ。

適当に授業を受け、適当に話を合わせ、時間が来たらさっさと下校…、あるいは調子が悪くなつたと言って早退しようかと考えていたカレンであつたが、その思案は少々狂うことになる。

「シンジユクのごとは誰にも言うな」

とある男子生徒から、こう言われたからだ。

親しい仲ではない。もつとも、表面上の付き合いしかないカレンと親しい生徒などいないのだが、それでも会話をしたかどうかの記憶もあやふやな相手である。

そんな相手に、何故そんなことを言われなくてはならないのか。それを突き止めようと、放課後まで残ることにしたのだ。

黒髪に紫の目。生徒会副会長のルルーシュ・ランペルージという生徒だった。

しかし、その予定すらも狂った。

(え……!?!)

話がある、とルルーシュから誘われて生徒会室のあるクラブハウスに向かう途中、信じられないものを見てしまったのだ。

「何してるの！手伝いなさい!!」

病弱なお嬢様、という設定も忘れて駆け寄り、ルルーシュに向かっては叫んでいた。

銀色の髪の少年、間違いなくあのグロースターの少年が、クラブハウスの壁にもたれかかるようにして崩れ落ちる、その瞬間を見てしまったのだから。

「先生、彼の容体は…」

あの後カレンは、ルルーシュを叱咤してクラブハウスの一室にこの少年を運び込ませたのである。

…叱咤するだけの理由はあった。なにしろルルーシュは非力なのだ。これなら絶対自分で運んだ方が速いと思っただカレンであるが、さすがにそこまで病弱なお嬢様という仮面を外すことはしなかった。

意識のない人間を運ぶというのは確かに重労働ではあるが、階段でぜいぜい息を切らせながら必死で運ぶルルーシュの姿は、正直言っただけで情けない。

シンジユクのことなどと思わせぶりなことを言われて、もしかしたら自分の正体を知っているのではないかと疑ったカレンだったが、この情けなさを見て疑うのが馬鹿らしくなった。

こんなひ弱な人間、軍だろうが憲兵隊だろうが機密情報部だろうが在籍しているはずがない。

(…まったく、彼を見習いなさいよ)

ルルーシュが必死で運び込んだこの少年は一見するとルルーシュと変わらない細身だが、内実は贅肉など全くない、鍛え上げられた体をしている。

やがて連絡を受けた生徒会長も駆けつけ、学園かかりつけの医師も呼ばれた。

「まあ、心配はない。ただ、かなり衰弱しているな」

医師の診察によれば病気や怪我とも思えず、結局のところ極度の疲労と栄養不足による衰弱と思われる。とりあえずは栄養剤を注射したので、あとは休めば意識を取り戻すだろう。

そう説明を受け、心底ほっとしたカレンであった。

「さて一安心したところで、あなたに話があるんだけど」

この学園の理事長の孫娘にして生徒会長であるミレイ・アツシユフォードに改まって切り出され、内心身構えたカレンだったが言われたことは大したことではなかった。

「生徒会に入ってほしいのよ」

アツシユフオード学園では、生徒は何かしらのクラブ活動に加入しなくてはならない。カレンはこれまで休みがちで、何より本人が面倒だからと延ばし延ばしにしていたのだが、さすがに問題になってきたらしい。

「ルルも手回しいいじゃない。カレンって休み時間はどこかに行っちゃやし早退は多いし放課後までいてもすぐ帰っちゃうから捕まえるの難しいって思ってたんだよ」

「…ん？ああ、シャーリー。まあ…、そうだ…」

やけに歯切れの悪い返答のルルーシュだったが、カレンは気にしなかった。このとき彼女の頭の中を占めていたのは銀髪の少年の容体と、どうやったらこの場を切り上げられるかということだけだった。「…なんだ。ルルーシュ君の用ってそんなことだったの？あまり力になれないと思いますけど、それでもいいなら…」

名目上だけと考えるもいいからと言われたこともあるが、断る理由もなかった。断ればより面倒になるだけだからだ。

「よっし！それなら歓迎会ね。実はすっかり用意…」

「でも今日は駄目です。ちよつと用事があるので…。あ、これ私の連絡先です。彼が目を覚ましたら、連絡お願いします！」

ミレイの言葉を遮り、カレンが言う。歓迎会などたまたまのものではなかった。普段なら別にかまわないが、今はそんなことをしている暇などない。

それでは、と一礼して部屋を出ていったカレンは速足で学園を抜け、周りの生徒が消えると駆けだした。

「扇さん、彼を見つけてました!!!」

租界内の拠点の一つで着替え、尾行に注意してシンジユクゲットーにある扇グループのアジトに駆けこんだカレンは開口一番に叫んだ。「う、うわー……ど、どうした、カレン。そんなにあわてて…」

さすがに今日は顔を見せることもないだろうと思っていたカレンが現れ、扇は飲みかけのコーヒーをこぼしそうになった。

「だから、あのグロースターの少年を見つけたんです!!!」

興奮のままカレンは告げる。しかし、昨日の今日で見つかるなど誰も思つてなかつたので、扇たちまでその興奮は伝わらなかつた。

「あー、とりあえず、順を追つて話してくれないか？」

扇が苦勞してカレンを落ち着かせながら聞き出した情報は、大したことではない。偶然あの少年がカレンの行っている学校に迷い込んできた、というだけだ。

事前に連絡を取らなかつたのは言うまでもなく、盗聴の危険があったからである。インフラの破壊されたゲッター内では一般回線は使えず、それ以外の通信手段はブリタニアが目を光らせている。

ガードのしっかりした通信網を確立すればいいのだが、貧乏所帯ではそうもいかない。だから安全性の高い手段となると、尾行に注意して直に会うか租界内で一般通信に紛れて連絡を取るかになる。

さすがに一般回線の全てを監視して、しかもその内容が符丁かどうか精査するなど、ブリタニアといえども不可能だ。

「…しかし、カレンと縁のある子よね。別れたと思つたら翌日にはばつたりつて…」

井上の呆れながらの冗談に、周囲も苦笑いを浮かべる。確かに拍子抜けもいいところだった。せつかく彼の血液サンプルをキョウトに送つたし、これからいろいろ探してみようと思つていたのでから。

「だが見つかつてくれたのはありがたいな。これで俺たちの仲間になつてくれたら…」

それはメンバー全員に共通する思いだつただろう。昨日の一件はそれほど衝撃的だつたのだ。犯行声明は出していないが、レジスタンス仲間ではもう噂となつて拡散していた。

「カ・レ・ン。そこは任せたわよ」

もちろんですとカレンが意気込む。言われるまでもなく、彼が目を覚ましたら話してみるつもりだつた。

しかし、井上の考えは少々違つたようだ。

「やはりここは泣き落としと色仕掛けかしら…。カレンが涙を浮かべて『私たちを助けて、代わりに私をあげるから』とか口説けばどんな男でもいちころで…」

「馬鹿なことは言わないでください!!!!」
どうやらカレンをからかいただけだったらしい。しかし、メン
バーの表情は明るかった。

あの銀髪の少年が運び込まれてから、二日たつ。彼は目を覚ま
さず、眠りつづけたままだ。

(こうして見ていると、お姫様みたいなのにな…)

元々色白なのだろうが、今の血色は病気じみて青白い。だがそれを
除けば、穏やかな呼吸で深い眠りにつく彼は物語の眠り姫のようだっ
た。

顔立ちは中性的で、女性と名乗っても通用しそうな美貌といえる。
髪がもう少し長ければ女性と勘違いする人間のほうが多くなるので
はないか。

この少年が、グロースターを乗り回しブリタニア軍に土をつけたな
どと言っても、誰も信じないであろう。

コンコン、とノックの音が静寂を破り、反射的にカレンが身構える。
だが入ってきたのはシャーリーだった。

「あ、カレン、また来てんだ」

と言うが、やけににやにやしているシャーリーであった。

それはそうかもしれない。何故ならカレンは、暇さえあればこの部
屋を訪れていたのだ。

(変な勘違いしてないでしょうね…)

私は彼の方が必要なので様子が気になるのだ、とカレンは思ってい
たが、傍から見ればその行動は思い人に尽くす乙女の行動に見えてい
てもおかしくない。

しかも、理由を言えないので否定できないのが辛いところだった。

「眠りつづけたまま、か。まさか、凶悪犯なんてことはないよね」
「まさか」

カレンはそう返したが、まさか、テロリストが目の前にいるなど、
シャーリーは微塵も思っていないだろう。

「うーん、それはなさそうなんだけど…」

会長であるミレイもやってきた。表情は、困惑している、という感じだ。

「まったく身元が分からなくて…。行方不明者のリストにもないどころか、DNAで検索してもなーんにもヒットしないのよ。詳しく調べれば何かわかるかもしれないから、とりあえず専門の機関に送ってみただけ…」

彼の持ち物には、身元を特定できそうなものは何もなかった。ブリタニア人ならだれもが持っているIDカードさえもない。そこでDNAパターンで検索してみたのだが、これでも駄目だという。

アッシュフォード家は元貴族で、今でもそれなりにつてを持っている。そのつてを使っても身元が分からないということは、彼はブリタニア人ではない可能性が高い、ということであった。

「それはそうなんだけど、この顔でねえ…」

そう、問題なのはこの顔だ。誰がどう見ても東洋人には見えない。EUの出身という可能性もあるが、だとすれば入国記録がない。スパイにしては特徴的すぎて目立ちすぎだ。

「でも、悪い人じゃないのは間違いないですから」

何気なく、カレンがぼろつとこぼした言葉にミレイとシャーリーの表情が固まり、次いで顔を見合わせてにやりと笑う。

その表情に、しまったと思ったカレンだったが遅かった。

「…………ふっふっふ。カ・レ・ン、どういう心境から出た言葉なのか、お姉さん興味あるな—」

「あ、私も私も」

彼のことを知っているという点は気付かれなかったが、それはさらなる不幸へとつながったようだ。

「え？ちよ…、ちよつと…」

「はつきり言いなさい!!!足繁くここに通うなと思ってたんだけど、やっぱり一目惚れね!」

「カ、カレン、私応援するするからね」

恋話を目の前にした時の女子パワーに、カレンは圧倒される。あの白いナイトメアと対峙した時でもこれほど恐怖を覚えなかったと、の

ち彼女は述懐する。

「会長会長ー!!!大ニュース!!!」

何やらあわてた様子で、生徒会仲間のリヴアルが駆け込んできた。この男に対してカレンは好悪どちらの感情も持っていない。世間一般よりナンバーズに寛容という点を除けば、ごくごく普通のブリタニア人だ。

だが、今だけは心の底から感謝した。彼のおかげで、話の腰が折れたのだから。

「なによおー、せっかく面白い話をしてたのに」

「とにかくテレビ、テレビ」

電源ONから映像が映し出されるまでの時間も惜しいようで、「早くしろー」とリヴアルが叫ぶ。

ようやく映し出された映像を見て、カレンも息をのんだ。

臨時ニュースは、エリアー総督クロヴィスの死去と、その暗殺実行犯として名誉ブリタニア人である枢木スザクが捕らえられたと伝えていた。

(枢木、か…)

日本人なら、おそらく誰もがこの姓を知っている。ブリタニアとの戦争時の首相であり、日本最後の首相が『枢木ゲンブ』であるのだから。

ブリタニアの圧倒的な戦力を前に、徹底抗戦を唱える軍部を諫めるため自害したという。諦めるのが速すぎると思うが、結果日本が力を残し今に至るまで抵抗を続けられていると考えると、カレンの評価は一定しない。

今回の容疑者である枢木スザクはその息子なのだが、カレンはそこまで知っているわけではない。もしかしたら縁者かな、と思ったぐらいだ。

それはともかく、枢木スザクはあのシンジユク事変の際に政庁に戻ったクロヴィスを追い、隙について暗殺したのだという。

(よくやったと言いたいけど…、余計なことをしてくれたものね。…本当なら、の話だけ)

これでブリタニアが本気になる。クロヴィスより有能な人間が総督となり、精鋭を率いてやってくる。クロヴィスは生かしたままであったほうが、日本にとって有益だったのだ。

カレンにそう言った目の前の少年は、翌日になっても眠りつづけたままだ。

「……ねえ、あなたは今どんな夢を見ているの？」

彼の手を握る。そうしてからハッと気づく。この瞬間を誰かに見られたら、あの女子二人に何を言われるかわかったものではない。

どうも最近おかしい、と思いつつあわてて放そうとしたが、その時彼がうめき声を上げた。

「……………う」

これまで眠りつづけるだけだった彼が示した、最初の反応。それを聞いたカレンは、つい放すつもりだった手を握り締めてしまった。

彼のまぶたが、少し動く。そして、はっきり開けられた目の色は、海

を思わせる、深い青。

「……………君、あの時の」

「しっ、誰か来たわ。とりあえず後で話すから、私とは初対面ということにして」

カレンが感じた気配の通り、人がやってきた。メイドの女性に押された車椅子の少女。

ルルーシユの妹のナナリーだった。

ナナリーとは、この3日で頻繁に会った。彼がこの部屋に運び込まれてから最も足繁く通っていたのがカレンであるのは揺るがないが、その次はこの少女だったであろう。

話を聞けば、兄妹でこのクラブハウスに住んでいるのだという。すぐ近くに昏睡状態の人間がいれば、気になるのも道理だ。

「こんにちは、カレンさん。またいらっしやっていたのですか?」

「マリー…シヤ…?」

彼が何か、夢を見ているような表情でつぶやいた。

「え?あ、あの…、目覚められたのですか!?す、すいません、私は、ここに住んでいるナナリー・ランペルージと申します」

「そういえば私も名乗ってなかったわ。私はカレン。カレン・シユタットフェルト。それで…、あなたは?」

自分のことを尋ねられたに過ぎない。難しい話は何もないはずなのに、彼は頭に手を当てて考え込み始めた。

「……………ライ」

長い沈黙の後、ようやく答えにたどり着いたという感じで彼が答える。

「……………え、えっと。ライ…さん?それで、ご出身は?先ほどつぶやかれた『マリーシヤ』さんとは…?」

明らかに、彼の様子は不自然だった。それに気づいたナナリーが質問を続けるが、彼の答えはこの一つだけだった。

「わからない」

彼には、過去の記憶がなかった。

「記憶喪失?!厄介ね」

彼の身元を特定する手段は、もう目覚めた本人に聞くしか残ってなかった。その一番確実と思われる手段がもろくも崩れ去ったことを知ったミレイは、つい嘆息の声を上げてしまった。

「す、すみません…」

「ああつ、あなたを責めたわけじゃないのよ。あなたは何も悪くないんだから」

加わった情報と言えば『ライ』という名前と、彼がナナリーを見て言った『マリーシャ』というのが、おそらく彼の知っている誰かというだけだ。

姓すら「わからない」と答えるばかりでは、身元特定についての進展は何もないと言っている。

「やはり警察に保護してもらったほうがよさそうだな」

ルルーシュが言う。正論だった。正体の知れない人間を置いておくのはいいことではない。

「んー、でもここまで面倒見たわけだから、最後まで責任取るべきじゃないかなって思うんだけど」

「会長！単に面白がっているだけでしよう！いつもいつも…。はあ、知りませんよ、ホントに」

最後の抵抗というべき意見を述べるルルーシュであったが、もはや何を言っても無駄だと諦めているのも明らかだった。

「それはたぶん、だくいじょうぶよ！女の勘ってやつだけど」

理由になってない。だがそれで押し切るのがこのミレイという生徒会長なのである。

「この子、初めて会った時から、なくんか放っておけないのよね。だ・か・ら、ここに迷い込んだのも何かの縁ということで、記憶が戻るまで私が面倒みます！」

ミレイがそう宣言したのでカレンは内心ほっとしていた。彼を警察などに突き出されたら、全てが水の泡だ。そしてここにいてくれるのなら、自分もつながりを持ちやすい。

「私も協力しますから」

だから、真っ先にそう言っていた。だがそれは、正解だったのか失

策だったのか。

「ではそういうことで。カレン、この子の面倒は、あなたが見るのよ」
いきなりミレイから、そう言われたのである。

「へっ?」

「彼のお世話係主任に任命します!!!これは生徒会長としての命令!いえ、厳命よ!!!ちなみに拒否権はありません!」

ついで抱きかかえられるように頭を取られ、耳元でささやかれる。

「……彼と二人つきりでいろいろ街を巡れば、一気に距離が縮まるでしょ?それも生徒会公認で、よ。うくん、我ながらナイスアイディア」
「だから、そういうものじゃありません!!!」

井上と言いこの人と言い、どうして人をからかうのが好きなのか。つい叫んでしまったカレンだったが、次の言葉で言葉に詰まる。

「じゃあ嫌なの?」

「え……?そ、それは……」

メリットは大きい。彼のすぐ近くにいても、正当な理由があると言うことができる。人気のないところで二人きりで話していても、なにも怪しまれないだろう。

だが、そんな打算よりも、何か胸の奥につかえているような気がしてしまい、素直になれなかった。

「まあ嫌なら仕方ないわね…、私だって鬼じゃないから。それじゃ、シャーリーに……」

「いえ、私で構いませんから!」

何故か叫んでいた。ミレイの顔がにやける様子に、自分が何を言っ
てそれがどう取られたのか気付いたが、それは彼の才覚がレジスタンス活動に必要なだから言ってしまったのだ、ということ自分で納得させた。

もう一人の当事者である彼は、少し困ったような表情で頬のあたりを掻いていた。

ライと名乗ったこの銀髪の少年はアッシュフォード学園に仮入学中、という立場でここに住むことになった。

ミレイの手回しの良さ…というよりノリの良さと言うべきか、昏睡中に許可を全て取ってあったのだという。なんと制服や教科書まで用意されていたのだから驚きだ。

「それはいいけど、ここまでさせなくたって…」

翌朝、カレンは早々と学校に来ていた。ミレイから重要指令と言うことで朝食抜きで来いと呼び出されたのだが、内容を聞いて唾然とした。

「彼の朝食の用意、お願いね」

材料は申し分ない。パン、卵料理、サラダぐらいなら問題ない程度の料理の腕はある。本音を言えばご飯と味噌汁と塩鮭が欲しいのだが、それは仕方ないだろう。

「あれ…？カレン？」

「お、おはよう。ちよ、朝食を用意しろって会長から言われてね…」

彼が寝間着のまま起きてくると、どうにも新婚家庭のような雰囲気になる。そうカレンは気付き、顔中を真っ赤にした。

「そうか、ありがとう」

ニコリと笑った彼の笑顔に、カレンはさらに顔を赤くする。

そのまま向かい合って朝食。ようやく話ができそうだと思っていたのだが、気恥ずかしくてそれどころではなかった。

昨日は話す機会を持てなかったのである。当たり前障りのないことなら聞けたが、カレンが話したいことは他に誰かいて聞けるような内容ではない。

(け、けど…、この雰囲気じゃ…)

間が持たずにテレビのスイッチを入れると、ニュースはクロヴィス暗殺とその容疑者である枢木スザクのことで一色に染まっていた。

「茶番もいいところね…。あのブリタニアの指揮官、『純血派』よ」

記者の質問に答えるブリタニアの軍人を見て、カレンが言う。その軍人は『純血派』の象徴である赤い羽根を模した飾りをつけていた。

「『純血派』？」

簡単に言えば国粋主義かつ排他主義の集団である。そうカレンが説明すると、彼もカレンが言った『茶番』の意味を理解したようだった。

た。

「なるほど、日本人への弾圧を強める正当な理由が欲しいわけか」

普通に考えれば、一軍人に総督暗殺などできるはずがない。よほど寵愛されていたのが裏切ったというのなら話は別だが、今回容疑者のスザクは一等兵の上名誉ブリタニア人である。

遠目に見るのがやつとのところ、むしろその機会に恵まれたかも疑わしい。そんな人間をあえて犯人に仕立て上げる以上、目的は別にあるのは疑いようがない。

「そういえば、あなたは『日本人』って言うのね」

「理由はわからないけど、日本人と言ったほうがしっくりくるというか…。おかしいかな？」

確かにブリタニア人ならば珍しいほうに入る。ブリタニア式の教育を受けてきたのなら、ナンバーでの呼び方が無意識に出るようになるはずだ。

しかし、カレンにとってそれは嬉しいことだった。

「おかしくなんてないわ。ここは本当は『日本』という国で、彼らもイレヴンではなく日本人で、また、そう呼ばれるはずの人々なんだから」

「……クロヴィスを殺したのは君たちか？」

唐突に、ライが言う。その雰囲気はあのシンジユクで見せた指揮官としてのそれだった。

「嘘なんですよ？ 記憶喪失って」

「九割方は本当だ」

カレンの詰問に、ライは弁明めいた口調で答える。

本人の談によれば、シンジユクでの記憶は一応ある。夢を見たような感じで、あれからどこをどう彷徨ってこの学園にたどり着いたかは思い出せないという。

そして、それ以前の記憶については全く思い出せない。気が付いたときはシンジユクゲッターの中で座り込んでいたらしい。

答えようにもそれ以上言えることはないと言われ、カレンも追究を止めた。身元不明というのは事実だし、記憶喪失というのが嘘でも本

当でも彼がここに留まることは変わらない。

「それで…、クロヴィス暗殺の真犯人だけ…」

「私たちじゃない。それは断言するわ。あなたじゃないのは…、当たり前前よね。となると…」

残る人物は一人しかいない。あの白いナイトメアと対峙していた際、いきなり通信を送ってきたあの男だ。

「心当たりは、全くないわ」

「ブリタニアにとって敵、と言うことは明らかだ。ならば、そのうち姿を現す。必ずな」

その『そのうち』は、意外に早くやってきた。

その日の宵、護送中の枢木スザクの前に『ゼロ』と名乗る仮面の男が現れ、自分こそがクロヴィス暗殺の実行者と名乗り出たのである。

「違うな、間違っているぞジェレミア。犯人はそいつじゃあない。クロヴィスを殺したのは、この私だ！」

『ゼロ』と名乗った男は、枢木スザクの護送中にクロヴィスの御料車そっくりの車で現れるという大胆極まりない行為の上、自分こそが真犯人であると名乗ったのである。

当然ながらブリタニア軍に取り囲まれるが、ゼロは全く動じず、自信満々に言い切った。

「いいのか？公表するぞ、『オレンジ』を」

ブリタニア兵の動きが止まる。『オレンジ』などと言われて理解できた人間は誰もいなかった。ジェレミア本人でさえも、言われて動揺している様子はない。むしろ不思議がっている。

「…私が死んだら公開されることになっている。そうされたくなければ…、私たちを全力で見逃せ！そっちの男もだ！」

なのに、そう言われたジェレミアはスザクを開放し、追い打ちを仕掛けようとしたとした味方さえ阻むという謎の行動をした。

ゼロはスザクを連れて逃げ、後には取り残された敵役と観客に加え、空虚な空気だけが残った。

「仰々しいパフォーマンズだな。よほどの目立ちたがり屋と見える」
その様子を、ライとカレンはテレビで見ていた。そして一部始終を見て彼が言った感想がこれである。

「でも、ちよつと不満ね。あなたの功績もさも自分が行ったごとく吹聴してるじゃない」

確かに、『シンジユク事変』と呼ばれるようになったあの事件も、ゼロが指揮を執ったのだと思った人間は多いだろう。だが別にライは構わなかった。むしろブリタニアの目が逸れ、ありがたかった。

『オレンジ』って何だと思う？あの指揮官の慌てようからすると、よっぽどのことみたいだけど…」

「僕はただのはったりじゃないかと思うけど…。だけどあの指揮官の様子は…」

本当にやましいことがあるなら、言われた時点で何か反応があつてしかるべきはずだ。そんな様子は全くなかった。言われてきよんとしていたあの態度が演技なら、ジェレミアと言う指揮官は相当な役者だろう。

しかし、そうするとその後の彼の行動はあまりにも不可解だ。やましいことがないのなら、あの必死の行動は説明がつかない。

(まあ、僕なら可能なんだが…)

その点が、ライの心に引っかかっていた。

「ライ、どうかした？」

「いや、大したことじゃない。……それよりも、鍋の方は大丈夫なのか？」

「へっ!?…あああ!!」

ライに言われて、カレンがあわてて台所に戻る。盛大に吹きこぼれていたが、焦げ付いてないことを確認したカレンがほっと息をつく。

「夕飯まで君に作ってもらうなんて、なんだか悪い気がするけど…」

「べ、別に気にしなくていいから。お世話係なんだし…、会長の命令だし…」

そう、そうれだけよ、とカレンは思うが、どうしても顔が赤くなるのは止められない。

結局、朝も肝心な話はできなかった。今度こそ、と思うが、どうにもこの部屋で二人きりという雰囲気の前に沈黙してしまうのである。

「あなたって、お箸も使えるのね」

この目の前の少年が、日本人なのか、ブリタニア人なのか。カレンはそれを知るきっかけにならないかと、わざと夕食を和風にし、さらに箸だけ出していたのである。

「ん?…そういえば…。覚えはないけど、なんだろうな。箸を使うのは、ちよつと、懐かしい感触というか…」

多少ぎこちないが問題なく使えている。だが彼にとって、それ以上の不思議が目の前にあった。

「それにしても、君はどうしてそんなに箸を使うのが上手いんだ？」

カレンの箸の使い方は堂に入っただけで日本人のようだ。そ

う思い質問したライに、カレンは少し沈み込んだ様子で答えた。

「私…、ハーフなの。日本人とブリタリア人の…。今でこそブリタリアの家に引き取られてるんだけど、育ったのは日本。本当の名前は『紅月カレン』。だから…」

「それが君の戦う理由か」

カレンが頷く。そしてついに意を決し、言った。

「お願いがあるの。私たちに力を貸して」

「……………君たちに協力して、僕に何のメリットがある？」

長い沈黙の後、ライが答える。確かに一介のレジスタンスに過ぎないカレンたちが、彼にしてやれることは少ない。一方的な貸しの超過になるのは明らかだ。

「力になってくれる存在が欲しいのなら、あのゼロだっていい」

それはカレンも考えなかったわけではない。だが、目の前の少年を信じるほど、あの仮面の男は信じられなかった。

「…初めて見たとき、ううん、通信で声を聴いたときから、あなたは信じられた。……………なんだか、どこかで会ったんじゃないかって」

理由はものすごくあやふやだったが、これがカレンの偽らざる心情だった。そしてその言葉に、ぴく、とようやく彼の表情が動いた。

「……………わかった。君のためなら、協力してもいい」

実は、ライの方もカレンのことが気になっていた。どうしても、ただの他人とは思えなかったのである。

「君がああのグロースターの少年か。俺はこの組織のリーダー、扇だ。これからよろしく」

休日になり、カレンはシンジユクゲットーにある扇グループのアジトにライを案内した。記憶探しと言えば、休日に二人で出かけても怪しまれない。それは役得だった。

扇が差し出した手を、ライが握る。ひとまず彼の立場は参謀兼グロースターの一機を駆るエースの一人となるだろう。

「ちよーっと待った。俺は納得いかねえぜ」

そんなライに、噛みついた男がいた。玉城である。実は彼もグロ-

スターを狙っていたのだが、ライが来たから彼が乗るのが当然と言う
雰囲気になってしまい、それが不満だったのだ。

もう一機は、当然ながらこれまでのエースであったカレンが乗る。

「この前のことがあるからって、新入りは新入りだ。先輩に対する礼
儀つてものが：げふあー！」

玉城の演説は、カレンと小笠原と井上のコンビネーションによって
遮られた。カレンに腹を殴られ、小笠原から後頭部に肘鉄を受け、井
上に股間を蹴られたのである。

「ライの機嫌を損ねたらどうするつもりだったのよ…。ごめんさ
い、あの馬鹿は、気にしなくていいから」

カレンにそう言われるが、あつけにとられるライであった。

「はうー、可愛いー！お持ち帰りいー!!!」

そんなライに、玉城を沈めた小笠原が抱き着く。

「ちよつとー！小笠原さん!!!」

「んー、だってねー、こんな可愛らしい子だなんて思ってたの
よ。ね、君、お姉さんといいいことしない？いっぱい甘えさせてあげる
よっ。」

「い・い・か・げ・ん・に・し・て・く・だ・さ・い・!!!」

シンジク中に聞こえるのではないかという大声でカレンが叫び、
小笠原を引き離す。ライは何が何だかわからないという様子で、さら
に呆然として状況を見守っていた。

「あー、ゴホンゴホン、…まあ、こんな感じの組織なんだ。迷惑ばかり
かけるだろうが、見捨てないでほしい。…：勝手な願いで悪いが、君
は俺たちの希望だと思ってる」

「それではお尋ねします。あなたたちの目標は？」

「もちろん、日本の解放だ」

扇たちにとっては当たり前の答えである。カレンから聞いている
ことでわからないはずはないので、この問いは平凡と言うより愚問で
あろう。

当然ながら、ライにはそんな愚劣な問答をするつもりはない。

「問題は、それをどういう形で成し遂げるか。そこは考えているので

すか？」

『日本の解放』と一言で言ってもいろいろある。ブリタニアの全面撤退まで妥協しないのか、一部の奪還で良しとするのか。そしてその後のブリタニアとの関係をどうするのか。

「あなたがブリタニアを憎むのは理解できます。が、ブリタニアと永遠に戦争を続けることは、この国のためにならない」

日本の地勢上、ブリタニアと中華連邦の対立を避けて通ることはできない。かつての日本は小狡く立ち回っていたのだが、ブリタニアの力に押しつぶされて今に至る。

そして無尽蔵ともいわれるサクラダイト鉱脈と、中華連邦に対する前線基地として、ブリタニアにとって日本は何としても手放したくない要地である。諦めることはないだろう。

「仮にブリタニアの駐留軍を壊滅させたとする。ならその後のブリタニアの再侵攻はどう防ぐのか。それを防いだとして、その次は？」

日本中のレジスタンス組織が持っている戦力を結集しても、ブリタニア本土まで攻め込んでペンドラゴンを落とす力はない。ひたすら防衛線を繰り返せば、最後には磨滅する。

そして中華連邦だ。日本とブリタニアの係争中に介入してくるのは目に見えている。これへの対応など何も考えてなかった。漠然と、ブリタニアと戦うなら敵には回らないだろうと思っただけだ。

その点を指摘されると、皆が言葉に詰まった。

「ブリタニアとの戦争中に、背後から襲う。そしてブリタニアとの外交で、西日本で権益を得る。その程度の可能性も考えてない、と？」

日本の残党と結ぶより、はるかに危険はなく得る物は大きい。いくらブリタニアと犬猿の仲だからとて、中華連邦が日本のために戦ってくれるなど甘い夢に過ぎない。

唯一、日本が全面的に中華連邦の傀儡となることを認めるなら話は別かもしれないが、これは何の解決にもならない。今度は中華連邦の尖兵として、ブリタニアと戦わされるだけだ。

「ゆえに最も現実的で確実なのは、ブリタニアから独立を承認してもらうこと。そのために戦うという方針で考えるべきです」

ライがそう結んだ時、周囲は誰も発言しなかった。今この時点で、独立後の日本のことをそこまで考えて戦っている人間はいないだろう。

彼の言いたいことを要約すれば、日本が独力でやっていくのは不可能である。ではブリタニアか中華連邦のどちらかと結ぶとなれば、ブリタニアの方がまだマシだということになる。

しかしその主張は、レジスタンスという組織の中では禁句に等しい。

しばらくの沈黙の後、玉城が叫ぶ。

「……て、てめえ、ふざけんよ。ブリタニアと結ぶ!?俺たちに、さんざんやられた恨みを忘れろって言うのか!?!」

「…勝てる見込みなど全くない。目的が日本の解放ではなく暴れたいというだけなら、勝手にしろ。ブリタニアに勝つという幻想を抱き続け、それで死ねばいい」

ライはあくまでも冷静に返すが、その雰囲気は一変していた。それは皆をたじろがせるほどの迫力で、玉城でさえも黙り込んだ。

「……時間の無駄だった」

だれも口を開くことができなくなった中で、ライが踵を返す。

「ま、待て、待ってくれ!……君の言ったことは非常に考えさせられた。だから…、少し、時間をくれないか?」

扇はやつとのもので、それだけを口にした。

「おい扇…、何なんだあいつはよ…」

ライとカレンが去ったアジトで、玉城が毒づく。現実を見れば『ブリタニアとの講和による独立』と言った彼の方針は正しい。

だがこれまでレジスタンスとして戦ってきたその時間を否定されたような気分になるのは避けようがなく、決していい気分ではない。

「甘く見すぎていたようね…」

井上がつぶやく。その通りだった。なんとなく、彼が無条件に力を貸してくれる。そう楽観していたことは否めない。

彼の力が欲しいなら、自分たちも変わらねばならないだろう。

「……俺は彼を迎えるぞ。必要なら、リーダーの座も譲る」

「正気かよ?」

過剰評価だ、と感じたメンバーが一斉に声を上げるが、扇は動じない。そして、次の小笠原の言葉が空気を一転させた。

「んー。でもね、あたしは信用できると思ったね。少なくとも『ただ俺についてくればいい』なんていうような奴よりは」

ライはしっかりと日本の将来を考え、そのヴィジョンを示してくれた。日本を利用するだけ利用して、「独立はさせてやったのだから満足しろ」などという人間では決してない。

「不満はあるだろうが、このままでも駄目なことは分かっているだろう。：ならば、俺は彼に賭ける」

ナオト以上かもしれない。扇は、そう思える人間に初めて出会った、という気がしていた。

学園までの帰り道、アジトの中からカレンはうつむいたままだった。

「ライ…、さっきの言葉は本気?」

「嘘を言ったつもりはない」

その言葉に、カレンの目がきつと吊り上る。

「…：ブリタニアと結ぶなんて、冗談でも言わないで」

「納得いかないのか」

「当然よ。奪われた自由と誇りは、自分たちの手で取り返すものなんだから。自らの欲望のためだけに奪い取ったブリタニアを、私は決して許さない」

「君たちは『弱い』。君はそれを理解してないのか?」

「強くなればいいのよ。ブリタニアよりも、誰よりも」

カレンにとって、決して妥協できない一線だった。それはライに言わせれば夢想到過ぎない事なのだが、そう指摘する代わりに一言だけ言った。

「…：君は、ブリタニアを滅ぼした先に何を見ているんだ?」

それから、学園に帰りつくまで、カレンは何も話さなかった。

Stage 11 魔王と魔女

「邪魔しているぞ」

目の前にこの女がいるという現実を前にして、混乱しない方がおかしい。そうルルーシユは思った。

しかも、クラブハウスのルルーシユたちが住んでいる部屋のダイニングで妹のナナリーと茶と折り紙を楽しんでいるというおまけつき、だ。

ルルーシユが目の前の緑の髪の少女―C・C.と出会ったのは、あのシンジユク事変の時だ。

丁度賭けチエスで勝った帰り道にトレーラーが事故を起こし、救助に向かったらそのトレーラーはテロリストの物であり、否応なく巻き込まれた。

そしてその後、積み重ねられていた『毒ガス』とされていたカプセルのロツクが偶然はずれ、中から出てきたのは毒ガスではなく目の前の少女だったのである。

「どうしてここにいる…!?!」

「どこにいようと私の勝手だろう」

お茶をこぼしたとナナリーを騙してC・C.を自分の部屋に連れ込み、尋問を開始したルルーシユであったが、相手はふてぶてしい態度を一向に改める様子がない。

「そうじゃなくて、お前は―」

「あの時死んだはずか、か?」

C・C.と名乗ったこの少女は、クロヴィスの親衛隊に銃で頭を打ち抜かれたはずだった。ルルーシユは息がないことを確認している。それが今、目の前でぴんぴんしているのだ。

「……………気に入ったか、私が与えた力は?『絶対遵守』のギアスカ。いいものが出たな」

『魔女』の秘密にかかわってしまったため、ルルーシユもあやうく殺されるところだった。その状況に追い込んだ元凶がこの女なら、救ってくれたのもまたこの女である。

『ギアス』。超能力と言っている。ルルーシュに与えられた『絶対遵守』とは、『どんな命令でも一度だけ従わせる力』。それで彼はシンジクで親衛隊を全滅させ、サザーランドを奪った。

頭を打ち抜かれても死なず、人に超常の力を与える。クロヴィスが『魔女』と呼んでいたことなど知る由もないが、まさにその名にふさわしい存在だろう。

「お前、どうして俺にギアスを与えた？」

ルルーシュにとって、彼の世界を大きく変えた力だった。だからギアスとこの女については、知りたいことが山ほどある。だがC・C. ははぐらかすような答えを返したただけであった。

「お前が私の初恋の男に似ていたからだ」

「……俺はまじめな話をしたいのだが？」

「心外だな。私はまじめに答えているぞ」

もういい、とルルーシュは諦めた。何を聞こうが、この女は答えたいようにしか答えないだろう。

「……こつちにも聞きたいことがある。この学園に、銀髪の男がいるだろう。何者だ？」

「銀髪だけでわかるか。……他の特徴は」

「この建物から赤い髪の女と一緒に出て行った。住んでるようだったぞ」

やはりライのことか、とルルーシュも得心がいった。真つ先に思い当たったし、このクラブハウスに向かってきたC・C. と出会う確率は彼が最も高い。

だが彼について伝えられる情報は、ルルーシュもほとんど持っていない。

「名前は『ライ』。……あとは知らん、記憶喪失だそうだ。数日前、行き倒れたところを助けた」

ようやく相手の表情に反応が現れた。ルルーシュにそう言われ、C・C. は一瞬固まったのだ。

「知っているのか？」

「そっくりな奴ならば……。だが、生きてるはずのない男だ。ありえな

い…、はず…」

「生きているはずがないのなら別人だろう。気にするだけ無駄だ」

ルルーシユは大して気にしていなかった。他人の空似程度ならよくあることだし、それよりも、今後の計画に大きく影響しそうな人間、という観点でライを見ていたからだ。

当然ながら、ルルーシユが巻き込まれたテロリストのトレーラーとはカレンたちが乗っていたもので、ルルーシユはこのとき彼女の顔を見ている。

物陰に隠れていたのも彼女が気付かなかったが、翌日カレンに接触しようと思ったのもそのためだった。あのグロースターを操っていたのが誰か、それを知りたかったのだ。

「銀色の髪に青い目のブリタニア人のような外見をした少年、名前も今どこにいるかも知らない」

ギアスを使って聞き出した情報がこれだけでは無駄撃ちと言っている。舌打ちして「シンジユクのことには誰にも言うな」と次の命令を下したが、これは失言だった。

『絶対遵守』は、一人に対して一度しか使えない。その時ルルーシユはそのことを知らなかった。声から気付かれる可能性を考慮した行為だったのに、ただ自爆になってしまった。

仕方なく、放課後彼女の疑惑を取り払おうと策を考えていたのだが、これもライ登場のドタバタで諦めるしかなかった。

…ルルーシユの意図とは関係なく、結果的に彼女の疑惑は消えたようだが。

カレンから聞いた外見上の特徴、そして彼女の態度からして、ライがああグロースターを操っていたのは間違いない。それ以外に彼女があそこまで必死になる理由はないからだ。

また、シンジユク事変が二人のファーストコンタクトというの間違いない。名前も知らなかったし、それ以前から知り合っていたのなら、今度は必死すぎて不自然になる。

シンジユク事変でいきなり現れ、自分たちを驚嘆させる才覚を示し

た男を仲間にしたいがための態度、と考えれば、カレンの態度は説明がつく。

だが、そうだとするとルルーシユにとっては不都合になった。
(様子見をするべきではなかったか…)

大失敗と言っている。シンジユクでは、どうせ少し頭が回る程度だろう、苦戦になったところで助けてやればいい、と思っていたのだ。それが、ルルーシユの予想をはるかに超えた指揮ぶりを見せた。

結果、苦戦した白いナイトメア、ランスロットを嵌めた策を披露しただけで終わってしまったのである。

あの策が『ゼロ』によるものというくらい気付いているだろうが、あの程度では彼を差し置いて『ゼロ』に従うことは期待できないだろう。謎の仮面の男『ゼロ』の正体としては、正直言っても厄介極まる相手が登場したものである。駒足り得るか、どころの話ではなかった。

相手は、犬ではなく獅子だったのだ。

仮に敵対することがあれば、負けるつもりは毛頭ないが、勝てると言いつかれる相手でもない。だが、走り出した彼はそれでも足を止めるつもりはない。

「お前は何をするつもりだ？クロヴィスに殺されかけたから、その鬱憤を晴らしただけなどということは…」

「もちろん違う。俺は、ブリタニアをぶっ壊す。…：：：驚いたか？」

「…いや、ほっとした。それくらいでなくては、ギアスを与えた価値がない」

人から見れば妄言としか思えないことを言うルルーシユも、それに平然と応じるC・Cも、かなり壊れていると言っている。

「…しかし、目立ちすぎではないのか？枢木スザクとやら一人のために、あんな大仰なことをして…」

「売名行為としてはこれ以上ない舞台だった。利用しない手はあるまい」

ルルーシユの答えは嘘ではない。確かにあの一件で『ゼロ』の名は世界中に知れ渡っただろう。だが、それ以外の理由もある。そしてそれは、この女には言う必要のないことだった。

ルルーシユの答えに、C・C・はにやりと笑う。その笑みにルルーシユは自分の心情を見透されているのではないかと思ったが、C・C・は忠告とも皮肉とも取れる一言を言っただけだった。

「期待を膨らましすぎると、破裂した時が悲惨だぞ」

余計なお世話だ、とルルーシユは思った。どれほど膨らもうが、叶えさえすればいいのだから。

「それで、お前は『ゼロ』の名を上げてどうするつもりだ。……ブリタニアの国是は、『弱肉強食』。お前ほどの才覚なら、充分食う方になれると思うがな」

C・C・が再びにやりと笑う。今度の言葉には明らかに挑発が混じっていた。ルルーシユが決してそうしない、と確信しているための。

その態度が勘に障り、ルルーシユはあえて挑発に乗った。

「……強者は、弱者に対して何をしてもいいという物ではない」

「なら、お前の望む未来とは？お前はブリタニアを滅ぼした先に何を見ている」

「大切な人を失わなくていい、戦争のない世界」

ブリタニアを滅ぼすという妄言よりさらに上の、もはや狂人の言葉と言っている。本当にそんな世界を作れると思っているのかというC・C・の問いにルルーシユはあっさり答える。

「誰かが勝てば、戦いは終わる」

その『誰か』には、当然自分なるつもりだろう。

ベッドに腰掛けていたC・C・がおもむろに立ち上がる。話は終わりだということなのだが、その次のC・C・の行動はルルーシユの想定外の物だった。

「お、おい！何を考えている!!!」

C・C・は、いきなり服を脱ぎ始めたのである。

「何って…、寝るのにこの服では窮屈だ」

C・C・の来ている服は囚人が着るような拘束衣であり、そんなものを着ていては寝にくいのも道理だろう。だが目の前で、少なくとも見た目は年頃の女が服を脱ぎベッドにもぐりこめば、あわてるのは当

然だ。

「ここに泊まる気か!？」

「……男は床で寝ろ。私が捕まったら、お前も困るだろう?」

追われているはずだと言っても、ごく一部の人間しか知らない、なら身を隠すのもここで充分だと言って聞きもしない。当然ながらルルーシユの都合は完全に無視である。

「少なくとも、私はお前の共犯者だ。正体をばらしたりはしない。……と思っではいるが、お前が不誠実な男なら、その限りではない」つまり、自分の面倒を見ないならお前を売るぞ、という脅しだ。それに対しルルーシユが渋い顔で黙り込むと、今度はいたずらっぽい口調で続ける。

「…もしかして、ギアスだけでは代償として足りないと言いたいのか? あいにくだが、私には持ち合わせがない。仕方ないから体で払ってやっても…」

「断固断る!!!」

「ではタダでいいんだな。それでは、おやすみ、ルルーシユ」

厄介なものを抱え込んだが、追い出すわけにもいかない。言いたいことはいろいろあるが、ため息一つに留めたルルーシユであった。

Stage 12 騎士と皇女

「ふう…」

政庁を出たところで、スザクはほつと息をついた。

思えば、この数日ほど密度の濃い日々はなかったであろう。シンジクでいつものように雑用で駆り出された、それが運命の綾だったと思う。

7年前の戦争で生き別れた親友と再会し、奇妙かつ神秘的な少女に出会い、親衛隊には殺されかけ、ランスロットに乗ることになり、あのグロースターと死闘を繰り広げ、拳句に総督暗殺の容疑者にされた。

さらにその護送中にゼロによって拉致され、しかし法廷の裁きに従うべきだと考えたスザクは自ら出頭し、たった今釈放されたのである。

結局、総督暗殺容疑は証拠不十分で起訴見送りとなった。ゼロについては絞られるだけ絞られたものの、ゼロとつながっているとすることも証拠不十分とされた。

堂々と真犯人と名乗り出た者がいる以上、誤認逮捕を批判されないうちに終わらせたいということだろう。

「どいてくださーい!!」

歩いていると、不意に空から女の子が降ってきた。状況が把握できないものの、このままでは飛び降り自殺になるのでひとまず受け止める。

「…あの、怪我とかしていませんか？」

あっけにとられたものの、とりあえず相手の体の心配をしたのは真っ先にやるべきこととして正解だったであろう。

スザクの受け止め方が良かったのか目につく外傷も痛がる様子もなく、受け止めたスザクの方も何事もない。

だが、次の彼女の言葉には、さらにあっけにとられた。

「私、実は悪い人に追われていて…。だから、助けてくださいませんか？」

「嘘なんでしょう、追われているなんて…」

しばらく歩いて公園にたどり着き、そこでスザクが切り出した。相手はスザクのことを知っていた。気を引くためにわざと物騒なことを言ったのだ。

その相手は、たとえば、野良猫と適当な猫語で話していた。

「にゃー。にゃ、にゃー。足をけがしてるのかにゃー」

どうにもつかみどころのない人だ、とスザクは思う。しかし、騙されたのであるが悪い人だとは思わない。

どうやら猫は彼女に懐いたようだ。抱き上げて差し出されたのでスザクも構ってやろうとしたのだが、この猫はスザクの指に思い切り噛みついた。

ネコ科の動物はライオンや虎をイメージすればわかる通り、肉食である。だから牙は鋭く、噛まれれば相当痛い。

ちなみに日本で猫といえば魚を食べるイメージがあるが、これは飼い主である日本人が魚ばかり食べて獣肉を食べなかつたため必然的に猫の餌も魚になり、その姿が定着したからである。

噛まれたスザクの指をしっかりと消毒して、怪我をしていた猫の足も手当てしたやっただ。が、スザクは見ていただけだ。手を差し伸べようとしただけで、牙を剥かれる。

「駄目ですよ、アーサー。…猫、苦手なんですか？」

スザクは好きなのだが、いつも片思いなのだという。結局スザクは触ることもできず、アーサーと勝手に名づけられた猫は足の手当てが済むとどこかに行ってしまった。

「片思いって、優しい人がするんですよ」

本当につかみどころがない人だと思う。軍の峻厳さに慣れたスザクにとっては、別の世界の住人とさえ思えるほどの。

「私のこと気になりますか？じゃあ、もう少し私につきあってください」

何故追われているなどと言ったのか。今度こそ相手にその疑問をぶつけると、そう返された。それで押し切られ、結局租界の案内をすることになったのである。

別に、スザクには特別の予定はない。軍も今は辞令待ちという状況だ。話によればあのランスロットの研究チームに転属になるらしいが、最高責任者がいないので正式な辞令を出せず、中二階で足止め中なのである。

この少女は、ユファイと名乗った。雑談をしながら租界を巡り、わかったことは本国出身で、先週まで学生だったのを辞めてこのエリア11に来たらしい。

「今日が最後の休日なので、だから見ておきたかったです、エリア11を。どんなところなのかなー、って」

なら自分よりもっといい案内役はいくらでもいるだろうに、とスザクは思ったが、彼女はスザクだからよかったと言う。

その答えに、不思議とスザクの心は弾んだ。

ユファイがただの観光客、などということはない。その思いは、相手がシンジユクを見たいと言ったことで確信に変わった。

シンジユクゲットーはもはや無人の廃墟と言っている。いるとすればテロリストぐらいのものだ。

その光景を、ユファイはじつと凝視していた。

「枢木スザク、あなたに問います。ブリタニアは、間違っていますか？」

唐突に、ユファイが言う。それに対してスザクは即答することができなかった。

「答えてください。あなたから見て、この国は間違っているか、そうでないかを」

正直に答えれば、処刑台送りでも不思議ではない。だが、嘘や遁辞を許さない迫力が今のユファイにはあった。

「間違っています」

このシンジユクを正当化するなど、あつてはならない。力ある者のエゴイズムによって生まれたものが、この廃墟だった。

「…『弱い』って、そんなにいけないことなんだろうか」

強い者の許可がなくて、生きることすら認められない。それが『弱肉強食』の世界である。そして、そんな世界は間違っていると、ス

ザクははつきり言い切った。

「では、あなたはそれを変えるために、どうすればいいと考えているのですか？」

「……………わかりません」

ユフィの問いに、スザクは答えられない。だがスザクはブリタニア軍に所属している。それは何か、目的があったからそうしたのでないか。そう追及され、スザクは誰にも語ったことがない、自分の夢を口にした。

「…『ナイトオブワン』を目指しているんです」

ブリタニア皇帝直属の騎士『ナイトオブラウンズ』の長である、『ナイトオブワン』。この立場はただ「ブリタニア最強の騎士」という榮譽を得るだけでなく、好きな領地をもらえる。

無論、スザクが望むのは、このエリアー、日本以外にありえない。そして、ブリタニアにさまざまな面で協力はしなければならない、という制約はあるものの、領地をどう統治するかは領主の自由だ。

「…領主と言っても、名目上だけ。内実はかつての日本と同じ、民主制の国家。そうすれば、この戦争だけならば終わるはずです」

「それでは、あなたは何も報われないのではないですか？」

そもそも、名誉ブリタニア人に過ぎないスザクが『ナイトオブワン』になれる可能性など皆無に等しい。仮に成れたにしても、一生を賭け、気が遠くなるほどの障害を乗り越えた末の話であろう。

スザクは、その成果を全て譲り渡す、と言っているのだ。名誉は得るかもしれないが、ブリタニア人からは邪険にされ日本人から裏切り者呼ばわりされた末に手に入れた代償としては、あまりにも小さい。「それでいいんです。それが俺にできる償いなのだから…」

「お父様のこと、気にかけていらっしやるのですか？」

ユフィはスザクの素性まで知っていた。当然、枢木ゲンブ首相が軍部を諫めるために自決したことも。

その自決は戦争の終結を望んでの、文字通りの決死の行動のはずだった。しかし、結果として今に至るまで抵抗が続いている。

スザクはその中途半端と言うしかない結末に至った父親の意志を

継いで、今度こそ本当に戦争を終わらせたいのだろうとユフィは思った。それが、彼の言った『償い』であるのだと。

「……………」

それに対し、スザクは何も答ええない。心の奥にある自分の『闇』については、誰にも言えなかった。

スザクもユフィも黙り込み、ただ廃墟を眺めていた。

実際の時間は十分にも満たないのだが、体感的には優に一時間を越した気がする。

「……………そうだ！枢木スザク一等兵、あなたは学校に行ってますか？」
「は？」

唐突かつ何の脈絡もない質問に面食らったスザクは、つい間の抜けた声を上げてしまった。

「ですから学校です。あなたぐらいの年なら、学校に行くのが当然じゃないですか」

当然なはずがない。スザクは軍人としての道を選んだのだ。学校に行く暇など、あるはずない。

「駄々目々です！学校に行つて…。友達を作つて…。あなたには、そういうことが必要だと思いました」

「え？いや、でも、軍務があるんですけど…」
「それはわたくしが何とかします」

ユフィがあっさり言い切る。何気なくであったが、ユフィの一人称が変わっていたことにスザクは気付いた。

「え、えーと、ユフィ？」
戸惑うスザクにユフィが二の矢を放つ。

「では『命令』という形にしましょう。それなら、あなたは従わなくてはなりませんから。……………わたくし、エリアー1副総督ユーフェミア・リ・ブリタニアが、枢木スザク一等兵に学校に行くよう命じます」
「……………。し、失礼しました。皇女殿下とは知らず、数々の無礼、お許しください」

『エリアー1副総督』、『ブリタニア』という単語の意味に理解が追いつ

き、あわててスザクが膝をつく。

ユーフェミア・リ・ブリタニア。神聖ブリタニア帝国第三皇女なのだが、これまでほとんど表に出てこなかったので、スザクは名前に覚えがある程度だった。

「そんなことはなさらないでください。…えつと、それで、総督や軍の方にはわたくしから話を通しておきますから安心してください。学校の方も、当てがありますから」

もはやスザクの意向を無視してとんぱ子で話が進んでいく。断ろうにも、少し困ったように次の一言を言われてはどうしようもないとスザクは思った。

「……受けてくださいますか？」

「…イ、イエス、ユア、ハイネス」

返答は、これしかなかった。

数日後、皇女殿下の推薦ということで形式だけの試験をパスしたスザクは、『命令』通り学校に行くことになる。

学園の名は、『私立アツシユフォード学園』。彼の運命は、そこでもた激動する。

Stage 13 キョウトからの使者

「勝った勝ったー！」

アジトに着くなり、玉城が叫ぶ。だが誰も咎めなかった。今日の勝利はその程度では足りないものだったからだ。

旧埼玉県鶴ヶ島市にある、ツルガシマ駐屯基地襲撃。それほど大きい基地ではないが、基地一つを壊滅させたという戦果は誇っていいだろう。

『オレンジ事件』以来代理執政官であるジェレミアの求心力は地に落ち、新たな総督はまだ赴任していない。今では重職にある者たちが合議の未決めている。

だから、ブリタニア軍が即応できない今こそ動くときというのは理解できた。だが、基地襲撃を考えるのは大胆にもほどがある。当初、誰もがそう思った。

結果は大成功。真っ先に格納庫を制圧し敵ナイトメアを抑えたのが大きく、人的損失はゼロ、軽傷者少数にサザーランド数機が修理可能な損傷を受けた程度という完勝だった。

ブリタニアの増援がやってきたときにはすべてが終わっており、歯噛みしながら片付けをするしかなかったであろう。

「ほれ、ライ。いやー、お前が仲間になってくれてホント良かったぜ!!!」

「ちよつと!!!ライは未成年よー！」

玉城がライに渡したものはビールだった。それを見たカレンがひたたくるように取り上げる。アルコールはまだ入ってないが、それ以上に戦勝に酔っていた。

ライが加わってから最初の作戦で、グループ結成から最大の戦果である。最初は悪態をついた玉城だったが、今では「ライ万歳!!!」などと叫ぶ始末だ。

「いいじゃねーかよー。こういうおめでたい席に酒はつきものだった。それにこいつの本当の年齢なんてわかんねーんだろ？20歳超えてる可能性だって…」

「はい、玉城。もう酔っぱらってるのなら酔い覚ましに付き合っ
てあげるわ」

言葉の途中で小笠原と井上のコンビに拉致された玉城は、その日
戻ってくることはなかった。

「ごめんね。あの馬鹿だったら、本当にデリカシーつてもものがないん
だから…」

「いいさ、気にしてない」

ライの過去に関する手掛かりは、今に至るまで何も無い。

ナイトメアフレームの操縦技術が隔絶しており、白兵戦となれば他
の追従を許さない。それだけの鍛練を積んでいるのに、それがどこで
学んだものなのかもわからないのだ。

よって、グループ内ではライの過去を下手に掘り下げるのは禁則事
項になっている。だが玉城はお構いなしにそれをやっては、カレン、
井上、小笠原の制裁を受けるのだった。

「でも、お兄ちゃんがいた頃以来だって、玉城があんなにはしゃぐの
は」

ライの狙いは、まさにその点だった。新参の、わけのわからない記
憶喪失者。それが認められるために最も単純な方法は戦果を挙げる
ことである。それも、これまでにない位の。

つまり、今回の戦闘は政略的な意図から必要とされたもので、それ
は十分満たされた。

あとは、『扇グループ』の名も売れるとは踏んでいたが、それは少々
想定外の事態にまで発展した。

「あー、みんな聞いてくれ。キョウトから連絡があった」

扇の発言にメンバーがどよめく。日本最大の秘密結社で、反ブリタ
ニア勢力に資金、物資などさまざまな援助を行っている組織、それが
『キョウト』である。

そのキョウトの代表が、直々に会いたいと言ってきたのだから騒ぎ
にならないほうがおかしいだろう。

「今回の襲撃の件だろうな。……さすがに耳が速い」

扇グループの戦力はライとカレンのグロースター二機に、サザーラ

ンドが五機。それで小さいといえ二十機以上が格納されていた基地を叩いたのだから噂が駆け巡るのも早いだろうが、それにしても素早い。

とはいえ、キョウトと直接つながる、というのは一級レジスタンスとして認められたということであり、これまでの貧乏弱小グループからすれば考えられないことだった。

「もう一つあって、ライは絶対に連れてこいということだ」

「何かわかったんですか!？」

キョウトに依頼したライの血液分析。意図とは全く違うことになったが、分析結果からライの過去の手掛かりがつかめた可能性はある。

「それも、直接話すそうだ。あー、カレン、…お前も来るよな?」

連れて行かないなどと言ったら何をされるかわかったものではない。そんなオーラを発していたカレンに負け、扇の口調は確認のためのもになった。

当然のごとく、カレンは頷く。最近、カレンが変わったような気がする。そう思った扇であった。

翌日、キョウトの関係者の案内でライ、カレン、扇の3人が連れて行かれたのは、予想もしない場所だった。

富士山にある、サクラダイト採掘プラント。ブリタニアの最重要施設と言っている。

「キョウトの表向きは、NACか…」

ブリタニアに協力する経済企業体、それがNACである。その実態がキョウトであり、本拠が富士山のサクラダイト採掘プラントと言うのは皮肉だった。

「あら、いらっしやいましたのね」

3人を迎えたのは、巫女のような衣装をまとった少女だった。明らかに歳はカレンより下で、そんな少女に迎えられるというのも予想外のことである。

「皇神楽耶、と申します。以後、お見知りおきくださいませね」

「は…、拝謁を許され恐悦至極であります！リーダーの扇要と申します！」

扇はがちがちに緊張していたが、ライとカレンはこの少女がどんな立場にあるのかわからない。

「扇さん、誰なんですか、この子？」

「ば、馬鹿。『皇』という姓を聞いてわからないのか…。キョウト六家の総家だぞ」

つい誰なのか聞いてしまったカレンが、扇に押さえつけられて頭を下げさせられた。

「あら、そんなにかしこまらないでくださいませ。『お義姉さま』になるかもしれない方ですから、仲良くしましょう」

「お、『お義姉さま』!？」

とんでもないことを言われおうむ返しのカレンに対して、神楽耶は怪訝な表情で言う。

「……お二人は恋人同士ではないのですか？そうだと伺っておりますが…」

神楽耶の視線の先は、カレンの隣にいる銀髪の少年。それに気づいたカレンは顔を真っ赤に染める。

「違います違います！まだ恋人なんて関係じゃ…」

『まだ』？では、近い将来にご予定は…」

カレンの言葉に神楽耶がさらに暴走するが、それを遮ったのは老人の声だった。

「はっはっは…。神楽耶様、順を追って話をしないと、誰もわかりませんぞ」

この老人の名は、桐原泰三という。桐原家はキョウト六家の中で皇家に次ぐ家であり、神楽耶がまだ幼いという点もあって、彼が実質的なキョウトの長と言っている。

「さて…。まずは先日 of 基地襲撃、見事であった。ここ最近では、久しぶりに聞く胸のすくような戦果だ」

「恐れ入ります。ですが、その戦果は全て、この者の功に帰するものです」

「聞いている。間違えたように派手に暴れたものだが、これは誰か新しい者が加わったに違いない、とな」

桐原が、視点をライに移す。

「ふむ、見た目は日本人とは見えないが……。いや、失礼した。貴公らが送ってきた血の持ち主は、この少年で間違いないのだな」

「何かわかったのですか!？」

本人より、カレンが勢い込んで聞く。

「はい、実は大変なことが分かりまして…」

説明を引き継いだのは神楽耶の方で、彼女が伝えるところによると、以下の点が判明したという。

一つ、ブリタニア人と日本人のハーフであること。

一つ、日本人の遺伝子を調べたところ、皇家の遺伝子と最もよく符合すること。

一つ、皇家の家系図からこの血筋に至る系譜は確認できないこと。

「結論をまとめますと、皇家の、それもかなり直系に近い誰かとブリタニア人の誰かの間に生まれた存在、となるのですが、その『誰か』は全く特定できなかった、ということになります」

ありえない話、と言った方がいいだろう。皇家は日本貴族の末裔で、しかも家格は最上位級に位置する。家系図はしっかり管理されているし、それ以前にブリタニア人との結婚などまず許されない。

「言っては悪いのだが、誰かの隠し子とも思うほかは…」

「桐原、それはありませんと言ったはずではないですか。咲耶様以後、皇家のしきたりがどれほど厳格なのかはあなたも重々承知でしょう」

桐原が黙り込んだ。確かに、伝統ある旧家らしく皇家は非常に厳格なのだ。外出の際には当然のごとく護衛が付く。その目を逃れて婚外交渉などできるはずもなく、隠し子などすぐ発覚するだろう。

「咲…耶…?」

「あ、咲耶様と言うのは…」

新しく出た名前に、ライがつぶやく。神楽耶が説明しようとしたのを遮り、それ以上話したくないと言外に言いながら、桐原が言い捨て

た。

「いや、関係あるはずがない人だ。200年ほど前のお方で、息子の代で家系も絶えた」

「……えっと、とにかくライが『皇家の親戚』ということは間違いないんですよね?」

少々険悪になった空気を察し、カレンが話を戻す。

「はい。……それで、皇家に養子に迎えられないかと考えているのです。皇家も、私だけになってしまいましたから」

ここでようやく、最初の『お義姉さま』と話がつながった。ライが皇家の養子といっても、さすがに神楽耶の息子ではおかしいので、義兄になるのだろう。

「……神楽耶様、少々先走りすぎですな。六家も承認しているわけではないのですから」

「ですが桐原、皇家の血を引く、若き英雄、それはこの日本解放戦争の象徴足り得る存在ではありませんか」

「…神楽耶様、私とて、反対しているわけではありませんぞ。ですが、まだわからないことも多いです、何より本人の意思を確認もせず話を進められては迷惑でしょう、と申し上げているのです」

老獪、と言うべきであろう。反対しないと言いながら、圧力をかける。もともと、そのくらいの口が回らないようではキョウトの影の長などやっついていられない。

「ねえライ、いい話どころか夢みたいな話よ」

本人がどう思うか、それを聞かれて考え込んでしまったライにカレンが促す。彼女にしてみればまさしく『夢みたいな話』であっただろう。自分たちの救世主が日本最高の名家の血を引き、その家に迎えられるのだから。

「記憶喪失、ということも伺っております。出自が分からないことを気にされていらつしやるのでしたら、ひとまず仮に、ということでしょう」

具体的には『皇』の姓を名乗るが、家督の継承権はない、ということである。また、家族が見つかったら『皇』の姓を捨ててもいい。

この条件は、桐原以下六家の人々も勧める。神楽耶がどうしても折れなかったので皇家に迎える事は妥協したが、自分たちの総家を見ず知らずの人間に継いでもらうのは快いことではない。

「……………そういうことでしたら。あくまで『仮に』ということまで」

ライの返答に、神楽耶がぱつと顔を輝かせる。彼女にとっては、家督うんぬんより家族が増えることが重要ならしい。

「よろしくお願いします！『お義兄様』」

だが、神楽耶にそう言われてライが固まった。

「あ、あの…、どうかされましたか？あ、もしかして『お義兄様』では嫌なのでしたら、他の呼び方で…」

的を大きく外した神楽耶の提案を、ライは苦笑いで返す。固まった理由は他でもない。誰かにそう呼ばれていたような気がして、それが神楽耶の声と重なったのだ。

「驚いたね」

「……………うん」

帰りの車の中で、カレンが言う。それに対しライは頷き返したただけだった。

「気になるの？」

神楽耶に『お義兄様』と呼ばれて、何かが頭の中をよぎった気がした。

記憶を失う前の自分には、妹がいたのだろうか。だが思い出そうとしても思い出せず、ライはそれ以上考えるのを止めた。

「まあ、わからないことを考えてもどうしようもない。それより…」

「うん、ハーフなんだね。…私と同じ」

少し頬を赤らめながら言うカレンの表情は嬉しそうで、二人とも気づいた時には、何気なく手を握り合っていた。

しかし、車の後部座席でいかにも恋人同士のようにいちやつかれては、前に座っている人間はたまったものではない。

「あー、お前ら、少しは自重して欲しいんだがな…」

扇にそう言われて、二人が慌てて手を放す。だが扇としては、悪いことではないと思った。

今のカレンがどんな表情なのかは、先ほどまでの感じからたやすく想像できる。そして、そんな表情をしているカレンなど、兄を失ってから一度も見ていなかったのだから。

（譲るべきかな）

リーダーの座も、カレンでもある。扇がこれまでどんなに頑張ってもできなかったことを、この少年はたやすくやってのけた。

だからライには感謝している。少し寂しい思いもあるが、それは呑み下すしかないだろう。

だが、ついぽろつと呟いてしまった次の一言は、失言というほかになかった。

「しかし恋をすると女は変わるって言うけど、本当だよなあ…」

「な、何を言うんですか、扇さん!!! 変なこと言うのはやめてください！」

カレンの手は無意識に扇の首にかかっていた。それを振りほどこうとして運転がおろそかになり、危うく事故を起こしそうになった。

Stage 14 猫と仮面

「いつ見ても趣味の悪い…。これはチューリップをモチーフにしたのか？」

「違うに決まってるだろう。…：チェスのキングの駒だ」

「どっちでも大して変わらん、と言いついて、C・C・は机の上にゼロの仮面を置く。」

「粗略に扱うな。これはギアスと違い証拠に成り得る」

「ちなみにゼロの衣装はルルーシユの自作である。七年前の戦争以来、ナナリーの面倒をずっと見てきたのは彼なのだ。妹のために必死で覚えた結果の本職顔負けの技術が、変なところで役立った。」

「意外なことで、C・C・も裁縫が上手い。ずっと着ている拘束衣のほつれたところを直したりと、女の子らしい一面もあると思ったのだが…。」

（問題は、食事だ）

C・C・の食事は三食ピザなのである。今もピザを食べながらゼロの仮面をいじっていた。何故これで太らない、という不思議は世の女子垂涎ものだろう。

そして代金は、当然のようにルルーシユのクレジットカードで払っている。C・C・を『厄介なもの』と感じたルルーシユだったが、最大の厄介が食費というのは予想してなかった。

「ん？何だそれは？」

「珍しく、C・C・がルルーシユの手元に興味を示した。普段は他の人間が何を食べていようが、ピザ以外なら全く気にしない女なのに、である。」

「これか。ライが作ったらしい。店に出してもいいほど、よくできて…。」

ルルーシユが持っていたのは二個のシュークリームだった。今日の生徒会で、間食に出されたものだ。実は、ライが一人で作ったという。記憶探しの最中に見かけて、作れるなと思ったので作ってみたらしい。

特に料理本も見ずに作り上げ、それが本職顔負けの出来なのだから
凄い。ライの正体について、生徒会ではパティシエ疑惑が急浮上した
ところだ。

「一つもらうぞ」

だが、ルルーシユの言葉が終わらぬうちに、そう言つてC・C.が
一つを取り上げた。

「か、返せーこれはナナリーの分…」

ルルーシユも菓子作りができないわけではないが、これには負ける
と感じていた。だからナナリーにも食べさせてやろうと思ひもらつ
てきた物を、この女の腹に収められては堪ったものではない。

「うるさいーこれは重要な…」

ベッドの上で取っ組み合いになる二人。この状況を見られたら、何
を言い訳しても無駄だろう。

「はむっ」

そんな状況だと理解しながらも妹のために、と必死のルルーシユの
努力も無駄に、C・C.は一口頬張る。絶叫の後「明日はピザ抜きだ」
と言い捨て、ルルーシユはうつむいてダイニングに向かって行った。

「やはり、王様の味……」

だから、C・C.の感想を、ルルーシユは聞いてない。

「ん？」

そして、ゼロの仮面がなくなつていたことも気づいてなかった。

「ナナリー、お茶にしないか？」

まっすぐこちらに向かうべきだった。C・C.の様子をちよつと
覗いてみようと考えたのは大失敗だった。

ただ、割り当ては一人二個。ナナリーもこの味を味わえないわけ
はない、と表面上の機嫌を直したルルーシユだったが、部屋に入った
瞬間とんでもない物を見た。

「にゃー」

猫が、ゼロの仮面を被つていたのである。

「ひよわあー」

「あ、お兄様。どこからか迷い込んで来たらしいんです。捕まえるの

を、手伝ってください」

ナナリーが鳴き声を頼りにそちらに向かうと、この猫は部屋の反対側に動く。頭がいいのか意地悪なのか、良くわからない猫だ。

「……ナ、ナナリー？捕まえるのは俺がやるから、お前はこれを楽しんで……」

出来るだけ動揺を見せずにナナリーの前にシュークリームを置き、すぐさま猫を捕まえようと考えたルルーシュだったが、その気配を察したのか、この猫はルルーシュの足元をすり抜けて外に向かう。

「あーこら、待て!!!」

慌てて追うが、猫は駆けだす。

「……変なお兄様」

残された妹は、首をかしげた。

建物内でそんなことが起きているとは露知らず、カレンは一人で校内を歩いていた。

「……今日のカレンさん、無茶苦茶不機嫌じゃないか？」

すれ違う人が思わず避ける。そんな不機嫌全開なオーラを発しながらカレンは歩いていた。ファンクラブのメンバーでも、さすがにこの状況で話しかける命知らずはいない。

ここしばらく、カレンが一人きりで見るところを見た人間は非常に少ない。無論、ライが隣にいたからである。彼がハーフであると判明してからは特に拍車がかかり、常に一緒だったと言っている。

今日その姿が見れないのは、生徒会長の命令のためである。

「転校生の出迎えなんて……。ライにやらせる仕事じゃないでしょ……」

例のシュークリームを持って行ったライを待っていたのは、満面の笑みを浮かべた生徒会長だった。そしてそのまま、空港まで行ってくれと言われたのである。

予定ではその後記憶探しに行くつもりだった。周囲からは連日連れ歩いているように見えるが、大半はレジスタンス活動に費やしているので、本当に記憶探しに行くのは久しぶりだったのである。

とはいえ、また今度行けばいいだけの話だ。だからカレンがここま

で不機嫌になるほどの理由は何もないはずなのだが、彼女はそれに気づいてなかった。

「…それを受けちゃうライもライよ。しかも、『一人で大丈夫だから』って…」

仕方なくそのまま生徒会を手伝い、ぶつぶつ文句を言いながら仕事を片付けたカレンは、そろそろ戻ってくるであろうライを迎えに出た。

せめて夕飯の買い物は一緒に行くつもりだったのだが、それがまた「もう未永く爆発しろ」と言われる原因になっていながらも気づいてない。

(……水音?)

クラブハウス脇の、いつも人気がない水道のあたりだった。そこからバシャバシャと派手な水音がしていることにカレンは気付いた。

別に誰が使っているのもそれは自由なのだが、出しっぱなしだった場合ミレイから小言を言われるので、見回ることにしたのだ。

「枢木…スザク?」

カレンが見たのは、つい先日転校してきた転校生だった。何やら服を洗っている。

「あ…、君は…。恥ずかしいところを見られちゃったな」

スザクの手元をよく見れば、服には塗料がべつたりと付着していた。

(なるほどね)

カレンでなくても、ある程度の予想はつく。虎の威を借る狐による、典型的な嫌がらせだ。アッシュフォード学園はブリタニア人も日本人も記憶喪失者であっても差別しないが、個々人の感情までは矯正できない。

「建物内なら洗濯機や洗剤もあるから、使ったらどう?」

「え?…いや、ありがたいけど、僕にかかると君にも迷惑がかかるかもしれないよ」

「別にかまわないわよ。そんな真似をする人間に、どんな様に見られても。……ルルーシュだって、そう思ってるんじゃないかしら」

そう言われて、スザクの手が止まった。

「気付いてたの?」

「ライがそう言ってたのよ。あなたとルルーシュ、知り合いなんじゃないかって」

名誉ブリタニア人、かつ一度は皇族暗殺の容疑者となったスザクに向けられた感情は、歓迎には程遠いものになるのも当然のことだった。

無視、陰口、嫌がらせ。そんな扱いを受けるスザクの様子を窺いながらルルーシュが前襟を持ち上げるような仕草をし、それを見たスザクが彼の後を追って行ったのをライは見逃さなかった。

「見抜かれたか。……実は昔、僕の実家のあたりに避暑に来たルルーシュと出会ったんだ。だから、一緒にいたのは一夏の、わずかな時間だったけどね」

そう言うスザクの表情はとても和んでいて、その一夏の思い出は彼にとって忘れられないものなのだろうとカレンは思った。

「それにしても鋭いね、君の恋人って」

しかし、そんなカレンの思いも何もかも吹き飛ばす爆弾を、この男は投げつける。

「ちちちちち違うわよ!!!恋人とか、そういう関係じゃないって!!!」

「そうなの?いつも一緒にいるから、てつきり…」

だから違う、と真っ赤になりながら力説するカレンだが、それがまた火に油を注ぐ結果に終わっていることにも気づいていなかった。

「ふくん、でも、その人のこと好きなんでしょ?」

背後からの声に、カレンがビクツと体を震わせて固まる。恐る恐る振り返ると、見知らぬ女の子がいた。

ライの銀髪よりさらに色素の薄い白い髪に、透き通る玉石のような白い肌。その中で、唯一相手に色彩を強調するワインレッドの瞳。年頃は十歳そこそこ、というところだろうか。

年齢からも服装からも、少なくとも高等部の生徒でないのは明らかだ。

「えつと…、迷子?」

言い難いことを、スザクはさらっと言う。

「違うよ。人に会いに来たの」

よくわからない女の子だったが、それ以上かまっている暇はなくなった。どうしようか考えているうちに、生徒会長からの放送があったからである。

『猫だ！校内を逃走中の猫を捕まえなさい！部活は一時中断、協力したクラブには予算を優遇します』

やれやれ、という感じでカレンが一つ息をつく。

「また会長の思いつきね。何でもお祭りにしちゃうんだから…」

まだ、苦笑いで済んでいた。それが済まなくなっただのは、次の放送で、である。

『そして、猫を捕まえた人にはスーパーなラッキーチャンス！生徒会メンバーからキスのプレゼントが！』

カレンの動きが停止した。生徒会メンバーということは、自分もライも含まれる。

「…な、なななな、何てことしてくれるのよお〜〜〜!!!」

病弱という設定も忘れ、カレンは叫んでいた。

Stage 15 紫の少女と雪の妖精

「ずいぶん騒がしいですね。お祭りみたい…」

ライにもこの状況は理解できない。転校生を迎えて帰ってきたら、学園中が何かを探しているような感じで大騒ぎになっていたのだ。

「あら、帰ってきたのね。ご苦労様」

そこへ、ちようど元凶であるミレイもやってきた。

「あ、ミレイさん。こちら、生徒会長で学園理事の孫娘のミレイさん。そして、こちらが転校生の…」

「ルーミア・フェン・シエルトです。よろしくお願いします」

紫色の髪と、紫色の目。礼儀に則った挨拶は育ちの良さを感じさせる少女だった。

「…えっと、貴族の方？そんな話は聞いてないんだけど…」

「いえ、没落貴族です。200年ほど前に爵位は失いました」

いつか復権を夢見て、礼儀作法は伝えてきたのだろう。アツシユフォード家も没落貴族なので、実はミレイも同じ経験をしている。

ただし、アツシユフォードの没落はわずかここ十年ほどのことだ。彼女の場合は200年。ブリタニアの建国期から今に至るまで伝えてきたというのには、ミレイも少々怨念めいたものを感じた。

「それでミレイさん、この騒ぎは…」

「ああ、野良猫が迷い込んだのよ。それで、何かルルーシユの大事なものを持って逃げてるみたいでね」

ルルーシユが猫を追いかけていったすぐ後、ミレイは野暮用でルルーシユたちの部屋を訪れたのだ。そこでナナリーから一部始終を聞いたらしい。

ルルーシユの慌てようからして、よっぽど人に知られたくない恥ずかしいものだ。ミレイは予想した。よって懸賞付きで学園の生徒に探させることにしたのだという。

まさかそれが、発覚すれば世界中を騒がすような大問題になるとは、夢にも思っていない。

「あなたも参加しなさい。いくら記憶がないからって、壁ばかり作っ

て周りを拒絶してちや駄目だからね。もっと、楽しまなくちゃ」

ライも話には聞いていた。この会長は、何であつても思いつきとそ
の場のノリで祭り騒ぎにしてしまう、と。

しかし、最近はそれも悪いことではないと思えるようになってきた
のである。

「そうですね。なら彼女の荷物を置いたら…」

彼も、ここまでなら余裕があつたのである。それが吹き飛んだの
は、やはり次のミレイの言葉だった。

「でも気を付けてね。つい、捕まえた人には生徒会メンバーがキスし
てくれる、って言っちゃつたから」

その言葉にライは凍りつき、ルーミリアは笑みを浮かべた。

「猫！猫は何処!!!」

もはや病弱という仮面などかなぐり捨て、カレンは全力で走つてい
た。

「…………カレンさん、あんなに足速かつたの？」

すれ違つた女生徒が呆れて眩ぐが、振り向くころには姿が見えなく
なつていた。頭を振り、夢を見たのだろうと今見たものを否定し、自
分も猫の搜索に向かう。

（これは絶好のチャンス！ライ君、ミステリアスな雰囲気たまらな
いのよね〜）

カレンが恐れていたことの、半分はこれだった。

これまで、アッシュフォード学園のアイドルと言えばルルーシュ
だった。眉目秀麗、成績優秀、妹に対する執着と体力面に少し難があ
るのを差し引いても、人気の理由はカレンにも充分理解できた。

だが、彼ならカレンにとつてはどうでもいい。シャーリーが彼のこ
とを好きだというが、それならいくらでも応援してやりたいと思つて
いる。

問題は、編入後わずかな時間でそのルルーシュに匹敵するほどの人
気を集めた、今や学園を二分するほどの存在となつたもう一人の方で
ある。

今のところ、その『もう一人』であるライと最も親しい異性がカレ

ンであるのは間違いない。次点はナナリーだが、ミレイに言わせるとこれは違うらしい。

「あれは異性として意識してないわよ。ルルーシユのナナリーに対する態度そっくりだもん。もしかして、妹がいたんじゃないかな」

これがミレイの評価だった。だが、次点が除外されてもまだまだ予断は許さない状況には変わりない。

変に律儀なライのことだ。今日のことを今日だけのこととして割り切るという考え方はないだろう。「一生責任取ります」などと言いつ出すかもしれない。

「認めないわよ、絶対に！」

だからどうしてそう思うのか。そこに全く思考が及んでいないことに、この時の彼女は気付いていなかった。

「さあライさん、行きますよ！絶対に猫を捕まえるんです!!」

寮の部屋に荷物を投げ込み、部屋を一瞥もせず在意気込むルーミアに、ライは半歩引いて頷く。なぜ彼女がここまで意気込むのか、全く理解できていないライであった。

後はもう、彼女に引きずられただけと言っていい。しかし、この少女には何か既視感も感じていた。何故か拒絶するという選択肢が浮かんでこないのである。

(どこか、昔に――)

城内。整列する騎士たち。右に緑灰色の髪の少年。左に紫の髪の少女。

「どうしました？」

何かがフラッシュバックしたような気がして、ライは頭を押さえていた。

「いや、別段――」

「ライ!!!」

振り返ると、カレンがものすごい勢いで走ってくる場所だった。しかしその勢いも、隣に見知らぬ女の子がいることに気付くとぴたりと止まる。

「……誰、あなた？」

「ルーミリア・フェン・シエルトと申します。今日転校してきました」
「ああ、ライが迎えに行った転校生ね。私はカレン・シュタットフェルトよ」

何となく、この女とは仲良くなれない。女の直感でそう感じたカレンはぶっきらぼうに言ってしまったが、その言葉にぴく、とルーミリアの顔が強張る。

その表情に殺気を感じたカレンは、おもわず内心で身構えた。

「……あなたが、カレンさんですか」

「知ってるの？私のこと……」

「空港からの帰り道、ライさんから聞きましたので……」

「で？その転校生が何してるの？学園案内なら、この騒ぎが収まってからにした方がいいわよ」

「当然、猫を探してます」

そう言いつつ、ルーミリアの目が一瞬ライの方に流れる。それで、カレンの直感は確信に変わった。

(こ、この女……)

今のは、間違いなくライの唇を覗き見た。いわゆる一目惚れという言葉なのだろうが、カレンにしたらよりにもよって、とこの女と迎えに行かせた会長を呪わずにはいられない。

「そ、そう……。でもあなたには難しいんじゃないの？学校の構造とか、なにも把握してないでしょうし……」

「大丈夫です。ライさんに案内してもらいながら探しますから」

二人とも、異常に声が刺々しい。傍からは、バチツ、と火花が飛んだところが見えただろう。

「あっちの方にいそうな気がするわ。行くわよ！」

「あっちの方が騒ぎです。行きましょう！」

カレンとルーミリアが、正反対の方向に向かおうとする。相手への反感のために言っているわけではないのに、なぜかこの二人の発想は真逆に向かうのである。

ただ一つ同じなのは、ライを決して放そうとしないということ。

「ライを放しなさいよ。一人で行けばいいでしょう？」

「カレンさんこそ譲るべきでしょう。私は、転校初日で右も左もわからないんですから」

二人とも、譲る気配は一切ない。

「ふん!!」

最後は、にらみ合いの末同時に顔をそむける。当然ながら、猫の捜索は全く進んでいなかった。

「大変ね、ライ」

そんな三人に、話しかけてきた存在がいた。カレンだけは知っている。先ほど水道のところでスザクといたときに話しかけてきた、あの少女だ。

その少女はどう反応すべきか戸惑う三人に構わず、ルーミリアを吟味するように眺める。

「んー、まあ、そこまで好きならいいんだけどね…」

「…えつと、どういう意味でしょうか？」

意味の分からないことを呟く少女に戸惑うが、この少女はそれには答えてくれない。

「私は『ネージュ』。ネージュ・ファン・シャレット。…猫なら、時計塔に行くといいよ」
「にゃ〜」

ナナリーの声が学園中に響く。「足を悪くしているみたい」という情報も一緒だったが、最後のこの鳴きまねを聴いた男子生徒がどよめいた。

それに気を取られている間に、ネージュの姿は消えていた。

フランス語で『雪』を意味する名前、確かにネージュの外見はそれに合っていると思う。ただ、カレンは気味悪さも感じていた。

(あの子、気配が全くないのよね…)

レジスタンスとして活動してきて人の気配に敏感なカレンだが、二度とも話しかけられるまで気付けなかった。人というより、幽霊や妖精という表現の方がしっくりくる。

ライやルーミリアも似たように感じたらしい。結果、どうにも言い争う雰囲気ではなくなつて、大人しく時計塔に向かうことになったのである。

「スザク、お前は帰れ！」

「だって生徒会長さんが猫を捕まえろつて！」

三人が時計塔に着いたとき、猫を追つてルルーシユとスザクが駆け込んだところだった。

「やっぱり仲良かったようだな、あの二人」

「幼馴染だったつて言つてたわ。それも、とても大切な…。：ライ、どうかした？」

「…いや、何でもない」

また、何か見えた気がした。そのイメージは、やはり昔の城。

「何でもないわけではないわよ！顔色、真つ青じゃない。座つて休む？」

大丈夫だと答えたが、誰からとてもそうとは見えない。結局、カレンは初めて意見の合ったルーミリアと協力して半ば無理矢理ライを休ませることにした。

その間に、ルルーシユとスザクの二人は猫を追つて屋根の上に登つていた。

「あちやー、一歩遅れたわね」

そこに、リヴアルの運転するバイクに乗つて元凶の生徒会長もやってきた。他の生徒も集まつてきたが、もう二人に追いつくのは無理と思つたのか、誰も駆けこまず成り行きを見守っている。

「うわっ」

ルルーシユが足を滑らし、下では黄色い悲鳴が上がる。

「ルルーシユ!!!」

滑り落ちるルルーシユの腕をスザクが掴み支えたことで、それは安堵の息に変わった。

一方、ルルーシユはもう一つの意味でも安堵していた。偶然、猫がかぶっていたゼロの仮面が外れ、屋根の向こう側に落ちたのが見えたのである。

「あ、あれ?…アーサー?」

「にゃー」

その猫が近寄ってきて、スザクは気付いた。この猫は先日ユフィと一緒にだった時に足の手当てをした、あの猫だ。

アーサーはスザクの周りを一巡りして、再び窓から建物内に入る。片手で窓の欄干を握りもう一方の手でルルーシュを支えているスザクには、視線で追うことしかできない。

そしてスザクは初めて気づいた。自分のすぐ傍、窓の内側に、少女が立っていたことを。

「捕まえた」

白い髪の少女が、猫を抱き上げる。

ネージュだった。

「ちよつと…、さつきのはいくらなんでも問題あるわよ」

「気を付けるよ、次からは」

今日の歴史の授業は、『新大陸の遷都と神聖ブリタニア帝国の発足』についてである。記憶喪失だというのに、彼が勉学に困ることはない。

ただ、今日のライの一言には教師を含めてクラス中が面食らっただろう。

『リカルド』は―

なんと、帝国の開祖を呼び捨てにしたのだ。普通なら『大帝』と敬称を付けて呼ぶ。カレンでさえ、不本意ながらも無用ないごこぎを避けるため授業中はそう呼んでいる。

彼によれば、『日本人』と同じくそう呼ぶのが自然と感じるらしい。「だからって、ここはブリタニアなんだから」

『大帝』に敬称をつけないというのは、ブリタニア人ではないと宣言するにも等しい。それはカレンにしてみれば嬉しいことなのだが、学校で言うのは大胆が過ぎる。

「…別に、大帝なんてたいそうな呼び方しなくてもいいと思いますけど」

しかし、その上を行く者がいた。

「リカルド・ヴァン・ブリタニアなど、『王』がいなければ皇帝の位を保つことさえできなかった。偉そうに『大帝』など名乗るなんて烏滸がましいにもほどがあります」

ルーミリアである。『純血派』の人間が聞いたら怒りに任せて射殺しかねない意見を、平然と言つてのけた。

「…あなた、祖国に対する思いって持ってないの？」

日本のために戦っているカレンにとっては、ルーミリアの言動は看過できないものだった。かつての日本にもいろいろ不満はあったが、少なくとも愛着はある。

彼女には、その愛着すら感じられない。

「祖国？私にとってブリタニアなどという国は、私が生まれた場所をたまたま支配していただけの存在にすぎませんから」

そして、自分の祖国についてはこう言い切った。

「私の祖国は、『王』の国です」

『王』という単語は、ブリタニアでは特定の人物を指す代名詞としても使われる。

―皇暦1800年。

のちに『王』と呼ばれることになる男子は、イングランドの北の地に生を受けた。父親は大帝リカルドの弟にあたる人で、婿養子として分家であるリオネス家を継いでいる。

―皇暦1807年。

トラファルガー海戦で勝利したナポレオンはブリタニア本土に侵攻し、ブリタニアは植民地であった新大陸への遷都を余儀なくされる。

この時リオネス家は遷都に同行せず、イングランドに残りフランスと戦う道を選択する。

―皇暦1812年。

『王』の父は、周辺諸侯との抗争中に負った戦傷が元で命を落とす。そして兄二人も後継の座を争う中で頓死し、唯一残った男子である『王』が家督を継ぐ。

―皇暦1813年。

女王エリザベス3世には子がなく、縁戚に当たるブリタニア公リカルドが国を継承し、神聖ブリタニア帝国が発足。同時に皇暦が制定された。

―皇暦1814年。

ナポレオンの第二次イングランド遠征を、まだ14歳にしかならぬい『王』は撃破した。40万以上と言われたフランス軍で、パリまで帰りつけた者は10万に満たなかったという。

―皇暦1815年。

『王』との最後の決戦に敗れ、ヨーロッパのほぼすべてを支配化に治めたナポレオンの帝国は瓦解する。

この時の功績で、『王』は正式にその称号を認められた、神聖ブリタニア帝国史上唯一の存在となった。

―そして皇暦1817年。

『王』は、北の国との戦争で、わずか17歳の生涯を閉じた。

「はー、ライ・リオネス・ブリタニアね…」

今度はカレンの表情の方に侮蔑が現れた。それに対し、ルーミアアの眉が吊り上る。

「…カレンさんは、『王』が嫌いなようですね」

「世界史上で最も嫌いな男よ。弱肉強食、敵であれ味方であれ弱い者は死ぬ、という男のどこに好きになるよう要素があるっていうの？」

ブリタニアの国是の最高の具現者として語られるのが『王』である。カレンにしてみればその評価も当然のことだった。

ちなみにセカンドネームの『リオネス』は、ブリタニア家の黎明期に活躍した騎士たちが自らを円卓の騎士に模して付けた名前の一つで、これが『ナイトオブブラウズ』の原型と言われていた。

「……そうですか」

何か納得したようにルーミアアが頷いた。カレンには理由が全く分からない。彼の国こそ自分の祖国とまで言い切るのに、侮蔑されて全く怒りを見せないというのは不可解だ。

『王』について知りたくなったら言うてくださいね。私の先祖は『王』の側近でしたから」

あなたの知らないものを私は知っている。その優越感が満面に出たルーミアアの横面を張り倒したくなかったが、カレンは必死でその衝動をこらえた。

「まったく、何なのよ、あの女…」

放課後になっても、カレンの不機嫌は収まらない。むしろ学園から出て猫を被ることがなくなった分、ヒートアップしている。

「先祖は『王』の側近ですって。あの腹黒女の先祖なら、『魔王』ともお似合いよ!!!」

ついに最大の蔑称が出てしまった。ブリタニア建国において『王』

の功績は比類ない物であったが、その治世下で示された狂気を嫌悪する者はそう呼ぶのである。

目の前にいる人と、『王』。同じ名前なのにどうしてここまで違うのかと、カレンはつい隣の少年を見つめてしまった。

その視線に気づいたライが、真剣な顔で言う。

「……君も気づいた？ 尾行されている」

「え？」

他のことに気を取られていたカレンは全く気付いてなかったのである。慌てて背後の気配を探るが、それより先に相手の方が姿を現した。

「もうここはゲットーですよ。ライさんもカレンさんも、危険なゲットーに何の用があるのですか？」

ルーミアである。尾行は租界の人波の中では気付けない程度に上手く、ゲットーの中では隠せない程度に下手だった。だから機密情報部員のような人間ではないとライは思っていたが、彼女というのは予想外だった。

「ルーミア……！」

「初めまして、と言うべきですかね。猫を被らない、カレンさんに対しては」

この女は殺すべきだ。咄嗟に、カレンはそう思った。少なくとも、この女は学園での自分が演技であるということに気付いている。

しかし、カレンが仕込みナイフに手を伸ばした時には、ライが一歩進みでていた。

「仕方ない——」

ライの行動には、何か、怖気立つような気迫があった。背中越しでありながらその気に圧されたカレンは、つい一歩後ずさる。

「駄目だよ、ライ」

その気迫は、横からの少女の声によって遮られた。

「ネージュ……。あなた……」

やはり、いつの間そこにいたのか。この少女だけは、どうしてもそれが掴めない。

「駄目だよ、ライ。その力は、今使うべきじゃない」

「どうして、『ギアス』を知っている……」

ライの表情が驚愕に染まる。カレンとルーミアには何のことは分からなかったが、この少女がライの何かを知っているということだけは理解できた。

「……それはまだ答えないほうがいいかな。…そうだ、あなたたちが何をしているか、包み隠さず説明して。そうしたら、あの権利を放棄してあげる」

あの権利とは、先日の猫騒動のことである。捕まえたネージュがキスの権利を得たわけだが、彼女はライの前に立って「保留にしてあげる」とだけ言ってどこかに消えてしまったのだ。

もちろん、その後ろでカレンとルーミアが殺気の籠った視線を投げつけていたのは言うまでもない。

(何言ってるのよ、この子)

あの権利を放棄してくれるというのはいい。が、その代償としてレジスタンスとして活動していることをばらせ、というのは無茶が過ぎる。

「大丈夫。彼女なら、きっとあなたの味方だから。もしそうでなければ、その時は止めない」

ライが何かを隠していて、ネージュはそれを正確に知っている。そしてライの過去も知っていて、しかもそこにルーミアが何か関係している、というのは感じ取れた。

しかし、ルーミア本人は何も知らない。それは先日のネージュの言葉に戸惑っていたことから明らかで、説明を求めた彼女に対しては簡単に言っただけだ。

「大したことじゃないよ。あなたが『エリス』の末裔だっていうだけ」「エリス」という名を聞いて、ルーミアも黙り込む。この場合は、完全に一人の少女に吞まれていた。

「それで、どうするの？これ以上躊躇するなら、私が言ってあげてもいいけど」

もちろんその場合は権利を放棄しないよ、と笑いながら言う少女

に、ライもカレンも不気味さ以上のものを感じていた。

危険極まりない存在。ルーミリアに先ほど感じた危険性など芥子粒一つでしかないような、そんな感じ。

「勘違いしないでほしいけど、私はあなたたちの敵じゃない。『雪』に色はないの。だから、ブリタニアなんてどうでもいいし…」

そう言いながら、口元に指を当てて何か考え始めた。そして出した結論は、突拍子がないとしか言いようがない。

「でも、あなたには興味あるから…。…。うん、決めた。私、あなたたちの組織に参加するね」

「はあ?！」

ついカレンは間抜けな声を上げてしまった。内面はともかく、外面は十歳程度の少女なのだ。とても戦えるとは思えない。

その考えがありありと現れていた声を聞いて、ネージュは少し怒ったように言う。

「むー。私は役に立つよ。ナイトメアの操縦だって、お手の物なんだから」

ただし、足が届くようにシートの位置さえ調整してくれば、だともう。少し恥ずかしそうにそう言う点だけは外見相応で思わず失笑が漏れ、場が少しだけ和んだ。

そしてその和んだ空気の中、ルーミリアがあっさりと言宣言する。

「では、私もその組織に参加します。ただし、ライさんの直属という条件付きですけど」

まるで、学校の部活に参加する、という程度の感覚だった。少なくとも、カレンにはそう感じられた。

「ちよ、ちよっと待って!…えっと、…その、わ、私たちの組織って凄く厳しいのよ。あなたの人生変わっちゃうくらい…」

慌てるカレンに対し、くすつと意地の悪い笑みを浮かべてルーミリアが答える。

「…ゲッター、ナイトメアフレーム、ネージュさんの発言、ライさんの見せた気迫。このくらいのキーワードをつなげれば答えは見えてきますよ。反ブリタニア活動、ですか」

和んだ空気は彼女の頭の回転も元に戻したようである。二人の秘密を、彼女は簡単に言い当てた。

「…そこまで確信してるのなら隠す意味もないわね。その通り。そして、あなたはそのテロリストの目の前にいる。……理解できるわよね」

「だから『仲間にしてください』って頼んでいるんじゃないですか。味方となれば、カレンさんが殺意を向ける意義も消滅します」

確かにルーミリアの論理は正しい。しかし、そんな簡単にブリタニア人であることを捨てるというのが、日本人として戦い続けるカレンには理解できない。

「…あなた、おかしくない？ブリタニアの国是の元になった『王』を敬うくせに、そのブリタニアを何とも思わないなんて…」

『リカルド・ヴァン・ブリタニアは、甥の遺産を強奪して革命を成し遂げた』。国是なんてものは、リカルドが『王』の思想を自分に都合のいいように捻じ曲げて作り上げたものにすぎません」

カレンにも、はつきりわかった。

この女は、本当にブリタニアに対する愛着が皆無なのである。だからブリタニア人であることを捨てても、たとえ自分がブリタニアを滅ぼすことになっても、痛痒など微塵も感じない。

どういう経緯でそう思うようになったかはわからないが、それだけは間違いなかった。

「…裏切りは死、それだけは理解してもらおう。それで、君は何ができるんだ？」

カレンと同じようにライも感じたのだろう。ブリタニアに対する思いはない。だから、ひとまずは信用できる、と。

ただし、もう一つのカレンにははつきりわかっていることが彼にはわかってない。ルーミリアは絶対に裏切らない。彼女の目的は、一つだけなのだ。

それが伝わらず念押しされたことが不満だったのか、彼女は少し苛立って答える。

「私もナイトメアなら勉強してます。実機経験はありませんが…」

身体能力に関しては問題ない。相当鍛えてある、というのが数日の学園生活から見て取れた。カレンでさえ、本気でやっても五分五分だろう。

育て方次第では、相当伸びることが期待できた。

しかし、次の一言があるから、この女とは絶対に仲良くなれない、とカレンは思ってしまう。

「あとは、ライさんが望むなら夜伽の相手でも何でも…」

「駄目に決まってるでしょ!!!」

結局、いつも通りにらみ合いの末顔を背ける、という結末で終わることになった。

コーネリア・リ・ブリタニア。神聖ブリタニア帝国第二皇女にして、「ブリタニアの魔女」の異名を持つ。エリア18の制圧戦を終え、ついにエリア11総督として日本に乗り込んできた。

「……厄介な相手だ」

エリア18制圧戦、さらにそれ以前のコーネリアの戦歴から、ライは改めてそう判断した。

コーネリアは、クロヴィスと違い甘くない。内部の腐敗にも容赦なくメスを加えるだろう。レジスタンス組織にとって、非常にやりにくくなる。

それ以上に彼を困らせているのは、コーネリアの思想に『融和』という考えがないことである。彼女にすればナンバースは支配される者であり、レジスタンスは撃滅すべき敵でしかない。

軍人としても統治者としても一流なのは認めるが、一言でいえば『頭が固い』。彼女は『守成の名君』にはなれても、決して『改革の旗手』にはなれないだろう。

「だからあなたはクロヴィスを生かすべき、って言ったのよね。本当にゼロって余計なことをしてくれたわ」

そう言うカレンにライは苦笑いを浮かべる。クロヴィスはクロヴィスで問題ある相手だった。

(講和の相手として、あれは信用できない)

不思議なほどに、ライはブリタニア皇族たちの知識がある。特にコーネリア、シユナイゼル、クロヴィスの三人は性格まで一通り把握していた。

その知識からすると、最も話を通じるのは第二皇子のシユナイゼルとなる。だが彼も、交渉相手としては危険極まりない。何を考えているのか、腹の底が見えないのだ。

ライが探しているのは、ブリタニアの現状を憂い、それを変えようとする意志と力を持った人である。しかし現状、少なくとも皇族や高官の中に当てはない。

いつそのこと、自らに備わる呪われた力を使うかと考えないでもなかったが、そうすると必ずどこかに歪みが出る。こういうことに、嘘はつかないほうがいい。

結局、現在のところはコーネリアと戦うしかない。彼女でさえ日本を治めきれないとなれば、ブリタニアも強硬論ばかりではいられなくなるだろう。

とは言うが、コーネリアとその親衛隊の戦力は圧倒的である。手持ちの戦力でこれを正面から破るのは不可能に近い。

その点で、ライはクロヴィスを生かすべきと言ったのである。クロヴィスを相手にしながら力を蓄えれば、もう少しましな状況でコーネリアと戦うことができた。

「……一度だけなら、ゼロのおかげでチャンスが生まれるはずだ」
その呟きは、カレンには理解できなかった。

(抜けている、呆けている、墮落している……)

敵より、無能な味方のほうが憎らしい。自分および親衛隊の能力を基準に考えると、このエリアーの官僚も軍人も、失格としか言いようがない。

「……留守も守れないとは、どういうことだ」

無然としてコーネリアが言う。彼女は着任早々中部地区最大規模の反ブリタニア組織『サムライの血』を壊滅させたのだが、その留守中にキサラツ基地を襲撃されたのである。

キサラツ基地はトウキョウ湾に入る船舶を守るための重要拠点で、周囲に衛星基地を持つ。その衛星基地の一つが襲われ、救援に出た部隊が狙われて壊滅したのである。

海軍に被害はないので、全体として見れば大した損害ではない。しかし、誇り高いコーネリアからすると、どこかに棘が刺さったような気分がして、そのままにしておけるものではない。

「あの辺りに本拠があるという『旭日隊』というテロリストから犯行声明が出ていますが、これまでこれほど積極的な動きをしたという報告はありません。ゼロが手を回したと見るのが妥当でしょう」

騎士であるギルフオードの意見にはコーネリアも同感だったが、ツルガシマで確認されたグロースター二機の姿が見えなかった、というのが腑に落ちないでいた。

このグロースターはクロヴィス親衛隊のものを赤と青に塗り直したもので、非常に目立つ。それが見えないということは『旭日隊』に策を授け、自らは出陣しなかったと考えるのが妥当だ。

ゼロの性格を考えると、そこが腑に落ちないのである。ただ、房総半島の先に協力する組織を作り、トウキョウ租界に対する包囲網を形成するのが目的と考えれば、理解できないことはない。

まさか、自分たちがゼロによるものと考えていた事象が、実は二人の存在によって形作られていたとはだれも考えていなかった。

「……立ち切らねばならんな」

ゼロの目的が本当にトウキョウ租界の包囲網形成だとすると、遠征などしている暇はなくなる。その前に租界周辺のレジスタンスの掃討を行い、ゼロを誘い出す。

「では、ナイトメアの輸送は貨物列車で行わせるとしましょう」

コーネリアの意図は、言わずとも幕僚のダールトンに伝わっていた。挑発のため、シンジユクの再現をするつもりなのだ。

もう一つ、ゼロの作戦の傾向としてナイトメアの奪取に重点を置いているという点があげられる。これは当然の話で、ブリタニア軍と戦う以上ナイトメアがなければ話にならない。

しかし、ナイトメアを独自に揃えるというのは高くつく。奪う好機と見れば、罨を食いちぎる気で食いついてくるだろう。

即刻、サイタマゲッターを拠点とする『ヤマト同盟』の討伐が決定された。

「行くのか？ 明らかな誘いだぞ？」

サイタマ方面の道路を全面封鎖という報道を受け急いで荷物をまとめるルルーシユに、C・C. が呼びかける。道路の封鎖はともかく、総攻撃の時間まで発表するというのは意図があると思えない。

「ああ。ゼロの名を高めるチャンス逃す手はない。せつかく誘ってくれた以上、受けないのも非礼になるしな」

ルルーシユの答えに、C・C・はにやりと笑う。その笑みは、やはり自分の内心を見透かしているように感じる。

もつともらしく言っているが、シンジユクの指揮官が自分ではなかったことに多少の引け目を感じているのも事実だった。

世間は、「クロヴィスを殺した」と明言したゼロが、当然シンジユクの指揮官だと思っている。勝手な思い違いではあるが、その声を聞くたびに他人の情けを受けているようで、どうにも気分が悪いのだ。

「あのぐらい、俺だってできたさ」

C・C・にはそう言った。その対抗心が、キサラヅ襲撃を敢行した理由の中になかったわけではない。そして今回でコーネリアを討てば、並び立つかこちらのほうが上になる。

そしてもう一つの目的として、コーネリア本人に問い質したいことがある。それはC・C・には関係ないし言う必要もないことだが、それにも感づかれている気がしてならない。

「急いでいるんだ。俺はもう行くぞ」

道路封鎖の報道を聞き、ライとカレンも出て行った。カレンが気分を悪くしたので家まで送るという名目で、誰もが恋人みたいな二人だと思ったが、ルルーシユだけはそれが意味するところを知っている。

あの二人より先に『ヤマト同盟』に渡りをつけなくては、シンジユクの二の舞になってしまう。

「お前に死なれると、私が困るんだがな……」

相変わらず、C・C・は言いたいことを言う。『困る』と言っても、どう困るかは教えてくれないのだ。

勝手に言ってる、と思い、ルルーシユは戦場に向かった。

ルルーシユの言葉は、決して大言壮語ではなかった。むしろシンジユクでのライより効率的に、的確な指示で無駄なく敵を殲滅している。

「親衛隊まで投入して……。必死だな、コーネリア」

作戦エリア内に展開していたサザーランド部隊を後退させ、親衛隊を投入してきたコーネリアを、ルルーシユは冷たく笑う。

しかし、その笑みが凍りつくまでに、それほど時間はかからなかった。

コーネリアの親衛隊とまともに戦って、付け焼刃のレジスタンス組織がかなうはずもない。ライの成功は相手がクロヴィスだったからであり、コーネリアをそれと同等に見たのが彼の致命的な失敗だった。

付け焼刃であるが故、綻ぶと脆い。少し状況が不利になればもう立て直すことは不可能だった。『ヤマト同盟』のメンバーたちは、逃げ出す者あり降伏しようとして射殺される者ありで、あつという間に崩壊した。

(……ゲームにすらなっていないぞ!!)

チェスの駒に意志はない。ただ命じるままに動いてくれる。だが人は違う。組織としての指揮系統も整備されてない状況で、すべての人間が自分に従うと思っていたことも致命的な失策である。

取るべき道は撤退しかなかったが、コーネリアに近づこうと後退するサザーランド部隊に紛れ込んだのが裏目に出た。不審な動きを見せれば、即時に蜂の巣にされる。

完全制圧まで秒読み、という状況だった。それなのに、コーネリアは眉をひそめたままだ。

「……………」

その無言を理解できたのは、ダールトンだけだった。ギルフオードは親衛隊の指揮で、前線に出ている。

この指揮官は、シンジユクおよびツルガシマの指揮官とは違う。そしてキサラツと一致する。それはコーネリアの中で確信になっていた。

グロースター二機の存在だけではない。シンジユクの指揮官は自ら前線に出て一騎打ちまで行う、自分に近いタイプの指揮官と言える。

今の指揮官は、自分の戦闘は最小限に抑え味方を効率よく動かす、

兄のシユナイゼルに近い指揮官だ。

どちらが優れている、というのは簡単に言えないにせよ、明らかに違う。

次の瞬間、サザーランド部隊の上にとんでもないものが飛んできた。何事かとすべてのサザーランドがそれを見上げる。

「いかん！皆、散れ!!!」

それが何か、真っ先に気付いたのはコーネリアとルルーシュであっただろう。

(ケイオス爆雷!!!)

しかも複数。それを、サザーランドの密集地帯に打ち込んだのだ。何が起きたかもわからないまま銃弾の雨を浴び、一拍遅れて大混乱が起きる。

「行くぞ、カレン」

「任せてー!」

その混乱の中を、赤と青のグロースターが疾走する。後方支援として控えていた純血派部隊の一機を斬り捨て、あとは目もくれずコーネリアに向かってひた駆ける。

「待てーゼロよ、このジェレミア・ゴッドバルトとの一騎打ちを…」

返答は、続けてやってきたサザーランドの銃撃だった。

「現れたな!!!」

やはり、シンジユクの指揮官は別にいた。指揮官席から立ち上がったコーネリアは、飛ぶような勢いで愛機に乗り込んだ。

これは、単純にコーネリアが戦いを好むというだけではない。親衛隊が最も離れた状況でサザーランド部隊が混乱して使い物にならない以上、グロースターの中が一番安全なのだ。

「ギルフオード、すぐ返せ!!!」

ダールトンも乗り込み、即刻指示を出す。無論、ギルフオードも馬鹿ではない。本陣付近がLOST表示で埋まったのを見て、すでに撤退を開始している。

しかし、赤と青のグロースターは止まらない。止められない。邪魔なサザーランドを廻転刃刀で斬り捨て、コーネリアの本陣めがけて突

き進む。

「どけっ!!」

コーネリアのランスが、その廻転刃刀と切り結んだ。それだけで、相手の力量は並ではなかった。生半可な相手なら必殺の間合いを、この指揮官は防いだのだ。

「……間違いなくクロヴィス親衛隊のグロースター。ようやく出会えたようだな、ゼロよ。クロヴィスの仇、討たせてもらおうぞ!」

コーネリアの声に、相手は少し苛立ったように答える。

『…私がシンジユクの指揮を執ったのは事実だ。しかし、クロヴィスを殺したのはゼロの独断であるし、何よりあのような黒ずくめの目立ちたがり屋と一緒にされては不愉快だ』

コーネリアは一つ勘違いをしていた。『ゼロ』と『もう一人の誰か』の存在には気付いたが、シンジユク事変が二人の合作であるとは思わず、ゼロはグロースターの指揮官だと思ってたのだ。

『私は、『紅』の隣にいる『蒼』でいい』

ガンツ、と刀がランスを弾き、相手はそれ以上立ち合いを続ける気はなく撤退に移った。ギルフォード以下親衛隊の反応が迫っている。これ以上留まるのは、自殺行為でしかない。

(だからと言って、目の前の獲物を捨てるとは…)

奇襲で敵大将を討つのは、一度限りの博打である。それを達成する寸前でも拘泥せず引き際を見誤らないというのは、相手は冷静に状況の判断ができる指揮官である、ということだ。

『蒼』か。厄介な相手だ」

相手も同じことを言ったなど知る由もないが、彼女は敵をこう評した。

(危なかった…)

今回ばかりは、心底そう思う。制圧後にナイトメアパイロットの面通しでもされれば、ギアスを使っても逃げられなかったであろう。

あのケイオス爆雷による混乱で、何とかルルーシュは逃げ出すことができた。

「無様だったな。追いつくつもりが突き放されたぞ」

地下下水道を歩くルルーシユに、ゼロの衣装を身にまとったC・C・C・Cが呼びかける。いざというときはその姿を晒して騒ぎを起こすつもりだったのだろうか。

ぎり、と奥歯を鳴らして睨みつけたが、この状況では何を言っても負け惜しみでしかない。

「……今回は俺の負けだ。……今回だけはな」

意外に、ルルーシユはあっさり負けを認めた。だが、『今回だけ』と言ったところに彼のプライドが透けて見える。

「俺の指揮能力がコーネリアやあのライに劣っているとは思わない。今回の敗因は兵士の質と指揮系統の不備だ。だから、コーネリアに負けない、俺の軍を作る」

そうすれば負けることなどない、と言外に言い切ったルルーシユに、こいつは本当にわかっているのだろうかとC・C・C・Cは不安になる。

ルルーシユは「戦略が戦術に負けることはない」と言った。だが本来、『軍を作る』というのが戦略なのだ。今回のように戦力差で押しつぶされた場合こそ、戦術が戦略に負けたと言うべきだろう。

（皮肉なことには、そういう観点から見ると間違ったことは言っていないわけだが…）

今回の敗北を経ても、ルルーシユはそれに気付いたとは思えない。戦力が同じなら何とでもしてみせる、というのは戦術家の思考だ。

どうも、ルルーシユは戦略と戦術を履き違えているような気がしてならない。戦闘では勝つのに、戦争では負ける。そういう指揮官になりそうな予感がしたが、そこまで面倒を見るつもりはC・C・C・Cにはなかった。

（まあ、生きてさえいれば、それでいいか…）

彼女の目的は、それだけなのだから。

(釈然としないなあ…)

早朝、まだ部活の朝練がある生徒ですらほとんどいない通学路を、カレンは歩いていた。

サイタマゲットーでの戦いから、一夜明けた。常勝不敗のコーネリアがあと一步のところまでテロリストに迫られたというので、今朝の新聞は大きな騒ぎになっている。

どうやら、コーネリアは情報を隠蔽しなかったらしい。そういう点は軍人らしい潔さと言えた。

それはいいのだが、問題は突如現れた『蒼』と、それと並び立つ『紅』に対する考察である。

「戦友の『男』って何よ…」

誰も、あの赤いグロースターを乗り回しているのが『女』だということまで想像できなかつたらしい。全ての媒体で男として扱われているのである。

『紅』の隣にいる『蒼』でいい」

その言葉から、ライの通称が決まった。

しかしこの言葉、深読みすると告白に近いのではないかと思えてくる。それで、戦闘後に酔っぱらった井上からさんざんからかわれたのだが、言った本人の返事はこうだった。

「そんなに変な言葉だったかな…」

どうにも、彼はそういう方面にはとことんまで疎いらしい。小笠原曰く「そういう男ほど惚れた相手には一途だよ」らしいのだが、だからと言ってけしかけるのはやめてもらいたい。

いつそのこと記憶探し中にホテルに連れ込めとか、毎朝通つてるのだから寝坊したところを襲えとか、ろくでもない意見ばかり出してくる。

(私が毎朝ごはんを作りに行ってるのも、全部『お世話係』という立場のためなんだから…)

彼女に言わせるとそうなるのだが、それを言葉通りに受け止める人

は誰もいなかった。もはや完全に日課となっており、百人中百人が義務の範疇を超えている、と思っていたのである。

コンコン、とライの部屋のドアをノックする。普通なら、すぐ彼が迎えに出てくれるのだが…。

「あれ？ライー？」

珍しく、反応がない。まあ寝坊する日もあるかと思ひ、合鍵を探そうと鞆をまさぐる。そのうちに中でごそごそ動く音がして、無理矢理起こしてしまつたかと少し悪い気がした。

「…ああ、カレン。もう朝か…」

これも珍しい。明らかに「今起きました」という感じで、いつもの凜々しさなど微塵もない。

「もう、しつかりしてよ。ほら、顔洗つて…」

やはり、この人はどこか抜けている。そう思つたカレンであつたが、逆にそうであるからこそ自分がいないと駄目なのだと思わせる。

これがただの完璧超人なら、敬意は持つてもそれ以外の感情は持ち得なかつたであろう。

しかしそんなカレンの思ひも、ベッドの上で人が動く気配で吹き飛んだ。

「…ああ、カレンさん。おはようございます」

「なななな…。何してるのよ、ルーミリア!!」

取り澄ました顔で何事もなかつたように挨拶をするルーミリアに対し、カレンの思考はショートする一歩手間であつた。

「何つて…。見てわかりませんか？泊めていただいただけですけど…」

確かに彼女はライのベッドで寝ていた。しかしその格好は下着に男物のワイシャツ一枚という大胆なもので、胸元などはあからさまにだけさせている。

「ちよつとライー！ま、まさか…」

この状況から導き出される答えとして、カレンの想像は決定的外れなものではない。いくら朴念仁でもこれで事に及ばない筈が…。

「…ああ、昨日の結果から今後の予測を二人で考えていてさ…。夜

の二時過ぎまで」

あつたのだ。泊めたのも「帰るのも面倒」、格好も「寝るためにいろいろ物色してみた結果」というルーミリアの言葉を、ただ額面通り受け取っているとしたか思えなかった。

(誘われてるって考えないのかしら…)

表裏なく言った彼にほっとすると同時に非常に不安になる。この状況でそう思わない鈍さは、もはやどうしようもない。

「……はあ。やはり裸で仕掛けるべきでしたか」

ルーミリアがつぶやく。あんたはもう少し自重しろ、と叫んだカレンであった。

「まったく、何考えてるのよ、あなたは！本当に襲われたらどうする気だったの!?!」

どういう頭の構造をしているのかと思うが、内心そういうことを平然と行う相手に対して、少しばかりうらやましいと思うこともある。ちなみにカレンは、まだこの部屋に泊まったことはなかった。

「決まってるじゃないですか。本望です」

言い切るルーミリアに、カレンはそれ以上追及する言葉を失う。ただ、彼女に対しては一つ聞いてみたいことがあった。

「……あなた、どうしてそこまで熱心なの？いくらなんでも…」

ルーミリアの執着は、異常と言っている。空港で迎えに来たライに一目惚れした、というのはまあいいにしても、学校という枠を越えてレジスタンスに参加までしているのだ。

「おかしいですか…。……確かに傍から見れば、狂ってるとしたか思えないでしょうね。私だってそう思いますから」

好きな人のためとあれば、人も殺す。そんな女が正常であるはずがない。だがそこまで狂った理由は、本人にもわからないらしい。

「何故だかわかりませんが、一目見たとき思ったんですよ。『あ、この人だ』って」

自分の人生を全て賭けてもいい。いや、地獄の果ての先まで付いて行く。そう思わせる何かが、ライにはあつたのだという。

「……たとえ一番になれなくてもいい。でも、あの人にとって『どうでもいい』存在であるのは耐えられない。私はもう、その道だけを突き進むと決めたくんです」

なんとなく、カレンにも理解できた。そこまで吹っ飛んだ考えはできないにしても、彼女にも共通するところはある。

しかし、次の言葉は吹っ飛びすぎだろう、と心底思う。

「ですから、カレンさんが正妻じゃなければ嫌というのなら、愛人でも我慢しますから」

「ぶっ!!!」

慌てふためくカレンを見てくすくす笑う。冗談なのか本気なのか、いまひとつわからない。

ただ、カレンとしては肯定も否定もできない言葉だった。肯定すれば自分が正妻だと思ってるのと認めることになり、否定すれば「なら私が正妻でもかまいませんね」と言ってくるのは目に見えている。

とりあえず、魚が焼けたので朝食にしようと逃げることにした。

「……あなた、本当は日本人じゃないの?」

ついそう疑念を口にしてしまうほど、ルーミリアは見事な箸使いで味噌汁をすすっていた。しかも彼女が作るというので任せただし巻き玉子は、どこの料亭が作ったものかと言いたくなるような上品な味付けた。

「…まあ、エリス様の影響で」

『エリス』という名前に、カレンは覚えがあった。ネージユが口にした名前で、末裔という単語からするとルーミリアの先祖らしいということとは想像がつく。

「…エリス・フエン・シエルト伯爵令嬢。『王』の参謀であり、秘書役だった人です」

俗説では、『王』の愛人だったとか内縁の妻だったとまで言われる。それほど近くにいた存在ではあったが、子孫に言わせると「ただの俗説で証拠は何もなく、また本人は否定していた」らしい。

「ですが、『王』のことを好きだったのは事実でしょうが…」

『王』の死後、彼女はブリタニア皇太子の嫁に請われたらしいが、一言

で撥ねつけたという。

『王』の万分の一の魅力でいいので、身に備えてから出直してください」

この一言が、大帝の不興を買ったことは言うまでもない。一族が言葉尽くして説得したものの、頑として態度を変えず、その後わずか二年で世を去った。

「病気というより、気鬱症でしょうか。『王』のいない世界に興味はない、と言わんばかりだったそうです」

当然、その一件はシエルト家の没落につながった。少なくとも一因であったのは間違いない。だが目の前の子孫にとっては「私だっとうします」と、批難するどころか賞賛すべき行動になるらしい。

「……それで？そのエリスさんが、日本とどう関係あるの？」

「まあ、知らなくて当然なのですが……。『王』の母親は、日本から来た人ですよ？」

「はあ？」

さらっと重大なことを言っただけのルーミアに、カレンはあいた口がふさがらない。『王』がハーフなど、信じられることではなかった。

「ちよつと待つてよ……。『王』ってリカルドの弟が分家に婿養子として入って、そこで生まれた……」

「ですから言ったじゃないですか。『リカルド・ヴァン・ブリタニアは、甥の遺産を強奪して革命を成し遂げた』と」

ブリタニア人至上の国粹主義者であったリカルドにとって、救国の英雄がハーフでは都合が悪かったのだ。かといって葬り去るには存在が大きすぎる。

「そこでハーフであることを隠して出生を捏造し、国是の象徴として祭り上げた。……この程度、よくあることじゃないですか？」

ちなみにEUとて批難できる立場にない。彼らは彼らで民主主義を絶対のものとするため、『王』の功績を意図的に小さく扱った。

「な、な、な……」

カレンは天地が引っくり返るような衝撃を受けた。これまで信じ

てきたものが、朝食中の雑談で崩壊したのである。

「知りたくなったら教えますよ。その代り、本当にあなたの人生が変わってしまうかもしれません」

つい先日言われたことを言い返し、朝食を食べ終えたルーミリアは部屋に戻ろうとする。

「ご馳走様でした。おいしかったです」

褒められたことすら、カレンの耳には入っていないようだった。

（『王』がハーフ…。それも日本人との…）

『王』のことにに関して、ルーミリアが嘘をつくとは思えない。またエリス嬢の子孫であるから、一般に知られてないことを知っているのもおかしくない。

だが、『王』が自分やライと同じ日本人とブリタニア人のハーフ。夢にも思っただけでなかった事態とは、まさにこのことだ。

頭を下げれば教えてもらえるだろう。人生観が崩壊するかもしれないが、そうしたほうがいいかもしれない。

「どうしたの？ぼーっとしちやって…」

生徒会長の声で現実に戻る。そういえば今は放課後で生徒会に出ていたのだが、ショックが大きすぎて今日は朝からこんな調子だった。

「あー、聞いてなかったのね。ライはそれでいいって言うけど、あなたがどう思うか聞きたかったから…」

「い、いえ、聞いてました。別にそれならかまわないと思いますけど…」

見得で、ついそう言ってしまった。それにライがいいと言ったのだから、自分にとってマイナスはないだろうと思っただのである。

しかし、生徒会室にいつもと違う、見慣れた顔があることに気付いてハッとしました。

「では決定ですね。これからよろしくお願いします」

「ルーミリア!?何してるのよ?」

やはり聞いてなかったのか、と呆れたミレイから、状況の説明が入

る。

「彼女も生徒会に入ることになったの。それで、体が弱いカレン一人じゃ大変だろうからと言うので、ライのお世話係副主任に立候補するって」

「それと、寮とここを往復するのも面倒ですから、こちらに住み込むことにしました」

五秒間の沈黙の後、カレンは状況を理解した。そして自分が何に許可を与えてしまったのかも。

(あ、あなた、私の体のこと知ってるでしょ!!!)

そう叫びたかったが、学園内ではそれはできない。

「もう遅いですからね、カレンさん」

意地の悪い笑みを浮かべたルーミリアに、この女に頭を下げることは生涯するまいと思ったカレンであった。

「……………」

「……………」

生徒会室では、二人の女子が難しい顔をして向かい合っていた。別に仕事で何かあったというわけではない。目の前に置かれているものが問題なのだ。

「あの子の作るお菓子はおいしいんだけど…、さすがにこれは…」

「そう、ですよね…。ただでさえ、最近食べ過ぎなのに…」

ミレイとシャーリーである。山盛りになっているものに、手を伸ばそうかどうかどうしようか悩みに悩んでいた。

「ベルリーナーはやめて〜〜〜!!!」

部屋中に、女子二人の悲痛な声[!]が響き渡った。

ベルリーナー・プファンクーヘン。ドイツのパン菓子で、ジャム入りの揚げパンのことである。表面には粉砂糖をまぶしてあり、非常に甘い。当然のことながら、体重を気にする女性には天敵の一つだ。

「……中のジャムまで手作りらしいです、これ」

「それ以上言わないで！…ここまで耐えた努力が水の泡になるから」

しかもそのジャムは数種類ある。いろいろな味を楽しんでもらおうと小さいものを数多く作ったらしいのだが、その気遣いも恨めしい。一つ食べたら他の味が気になって、歯止めが利かなくなりそうだからだ。

「もう、ミレイちゃん…。お菓子くらい、好きに食べようよ」

二人にかまわずニーナが一つを取り上げる。人が食べる姿を見ながら我慢するのは、非常につらい。

「こんにちはー、って、どうしました?」

「あれ、スザク君?今日は仕事じゃなかったの?」

あの猫騒動の後、スザクはルルーシュの推薦で生徒会に所属することになった。ただし軍の仕事があるので姿を見せることすらできない日も多く、今日も朝から軍の仕事で欠席していた。

だが、思ったより早く終わったので顔を見せに来たらしい。そうす

ると、誰もが歓迎してくれる。ろくに生徒会の仕事をしていないスザクにとっては少し心苦しく、とても嬉しかった。

仕事帰りで腹が減っていたのか、座るなりひよいっとベルリーナーを摘み取る。実は特派で上司から差し入れを食べて行けと言われる前に逃げてきたのだ。

「……酷いんだよ。この前は、おにぎりにジャムが入ってたし……」

真面目に今後も特派でやっていけるか心配するスザクに、他は苦笑いするしかない。

「それでもスザク君、明るくなったよね」

「え？……そ、そう……、かな？」

であるなら、環境のせいだとスザクは思う。確かに、前の名誉ブリタニア人部隊にいた頃と比較すれば、特派やこの生徒会をはるかに居心地がいい。

特派は主任のロイドを筆頭に研究熱心な変人たちの集まりで、彼らにしてみれば興味があるのはスザクの身体能力でしかない。名誉ブリタニア人であることなど、二の次三の次なのだ。

例外的にスザクの内面まで心配してくれるのが副主任のセシル・クルーミー中尉で、まるで姉のように接してくれる。……ただ、差し入れをしてくれるのもこの人で、それだけは勘弁してもらいたいのだが。

そしてこの学園の生徒会は、ある意味その特派より変人揃いと言っている。ほかの生徒たちとも、ルルーシュを助けて以来、だんだん打ち解けてきた。

ブリタニア人と言えば傲慢でナンバーズを見下すような人間ばかりと思ってきたスザクにとって、この日常は衝撃だった。

（殻を作っていたのは、僕の方か……）

ブリタニアにもいろいろな人がいるし、決して分かり合えないことはない。そんな単純なことに気付いただけだが、明るくなったというのならそれが原因だろう。

「明るくなったというより地が出てきた、というところね。ニーナだって、おびえなくなっただけ……」

「もう、ミレイちゃん」

初めて生徒会であいさつした時は、あからさまに引かれたのだ。今でも多少ぎこちなくはあるが、会話が成立するので格段の進歩と言える。

「ところで…、他の人は？」

「あー、ルルーシユならナナリーのところ。これを山盛りにして持つて行ったわ」

リヴァルはバイト、ライはベルリーナーを置いた後カレンとルーミリアを連れて行ってしまった。ルーミリアがするつと腕を取り、それを見たカレンが張り合うように腕を取る、両手に花状態であったという。

「いい傾向だわー。カレンも初心なのはいいんだけど、あれでは全然進展しそうになかったものね」

この生徒会長、完全に楽しんでいるとしか思えない。しかし積極果敢なルーミリアの登場により、カレンもうかうかしてられなくなったのは事実である。

その証拠に、ルーミリアがクラブハウスに住むようになった途端、カレンも「いろいろ必要になるものを置いておきたいので部屋を借りたい」と頼んできた。今では、半分はここで暮らしている。

「でも、本当にルーミリアとくっついてしまったらどうするんですか？」

「その時はその時よ。あの子がそう決めたなら、私がどうこう言うベきじゃないし。私は二人ともに公平にしてるつもりよ」

それを世間では、『煽る』と言う。そう思ったシャーリーだったが、自分に飛び火してきたのでそれどころではなくなかった。

「あなたも気をつけなさいよ。ぐずぐずしていたら、ぱつと出てきた女の子にルルーシユ取られちゃった、なんてことにならないようにね」

冗談で言ったことであるが、本当にそうになったら目も当てられない。しかし、その『ぱつと出てきた女の子』に当たる存在がすでにいる、ということまでは、ミレイも想像していなかった。

「それなら僕がさりげなく聞き出してみようか？ ルルーシユに、シャーリーのことをどう思ってるかって…」

「いいよいいよ！ そんなことしてくれなくて、一向にかまわないから!!!」

立ち上がろうとするスザクをシャーリーは全力で止める。恥ずかしいのと、スザクが聞くと「さりげなく」と言ったくせにストレートに聞きそうな予感がしたからだ。

「そ、それより、スザク君は好きな人とかいないの!？」

何とかスザクを止めようとしたシャーリーは、適当に思いついたことを言う。苦し紛れの反撃だったが、これが意外に効いた。

「あー、それは興味あるなー。いい相手がいらないなら、誰か紹介しよっか？ 軍務軍務で青春をすり減らすのもよくないし、軍じや出会いもなさそうだし…」

次の獲物を見つけたミレイが、話に乗る。こうなった彼女は止めようがない。と同時に、それまでの獲物は解放されたのでほっとした。

「…え？…僕？ 僕は好きな人なんて…」

いない、と言い切ろうとして、頭をよぎった姿がある。包み込むような優しさと凜とした気高さが同居した、理想を追い求めて現実に苦しみ、もがいていた彼女―。

「……………いい、いません、よ?」

「いる、ってことね」

言葉に詰まったスザクの内心など、ミレイにはガラス越しに物を見る以上にはつきり見える。その眼はもはや完全に獲物をターゲットとした肉食獣のものと化していた。

「あー！ ナナリーのところにも顔を見せに行かなきゃ!!!」

軍で鍛えた身体能力に、今ほど感謝したことはない。捕まえようとするミレイの手をすり抜け、何とか生徒会室からの脱出を果たしたスザクであった。

「あれ？ ナナリー?」

生徒会長の魔手から逃れたスザクは庭まで一気に駆け抜け、そこにいるはずのない人物を見かけた。

「あら？スザクさんですか？」

ルルーシユがナナリーのところにベルリーナーを持って行ったというので、てつきりルルーシユと二人でお茶を楽しんでいると思っていたのだ。

しかしここにいるナナリーは散策中という感じで、隣にルルーシユもいなければ手元にベルリーナーもない。

(いなかったのならルルーシユが探さないはず、ないんだけど…)

ナナリーのためとあれば地の果てまでも探しに行く。それがルルーシユだとスザクは思っている。探している最中なのかな、と思いい、とりあえずベルリーナーのことを伝える。

「あ、またお菓子を作ったんですね、ライさん」

どうやら、ナナリーは何も知らなかったらしい。

「え？あれ、ライが作ったものだったの？」

スザクがライの菓子を食べるのは、これが初めてだった。軍務なり何なりで、忙しかったのだ。特に軍務については、ランスロットの縦技術を磨くことに集中していた。

シンジユク事変にて初めての騎乗にもかかわらず通常稼働率94%という驚異的な数字を叩き出したものの、その応用である『戦闘の稼働』は、とても褒められたものではない。

機体性能に任せた単調な攻撃ばかりになってしまい、『蒼』にはことごとく先を読まれた。合格点をつけてもいいのは、『三段突き』くらいものであろう。

(仮に、彼がランスロット級の機体に乗っていたら—)

そう考えると、今でも鳥肌が立つ。シンジユクでなら確実に負けていた。だから軍務に打ち込んできたのだが、そのためあの菓子を食べそこなってきたと考えると、後悔していいとは言いい切れない。

「……お仕事、そんなに忙しいんですか？それに、やはり軍というのは危険なのでは…」

「大丈夫、技術部だから。前線に出ることもまずないだろうし、それ以上にコーネリア総督が許可しないだろうし…」

言ったことの七割は本場で、三割は嘘だった。純粹に言ったことを

信じてくれるナナリーを見てみると少し心が痛むが、その思いは胸の奥に押し込んだ。

「そうですね。コーネリア総督なら、信頼する部下たちを差し置いて、というのは考えにくいですから」

コーネリアは部下に対してこの上なく厳しいが、同時に誰よりも優しい。彼女が特派のようなイレギュラーな存在を使いたがらないのは、使えば部下の能力に不満があると言ってるようなものだから、という理由もある。

それがわかっていながらギルフォードやダールトン以下の腹心たちは、彼女に決死の忠誠を尽くすのだ。

「……でも、コーネリア総督でもなかなか難しい状況になっている」「ゼロ』に続き、『蒼』。『奇跡の藤堂』も含めれば、常に三方を睨んでなくてはならない。これは軍事機密に属することなので言うことはできないが、急遽エリア18に残してきた親衛隊も呼び寄せることにしたらしい。

つまり、今の日本はコーネリアが当初考えていたより、はるかに厳しい状況になっているということだ。

「そうですね……。クロヴィスお兄様に続き、コウ姉様やユフィ姉様まで非命に倒れるなんて、そんなことありませんよね……」

七年前の戦争の直前、日本に人質として送られてきたブリタニアの皇子と皇女―。それがルルーシュとナナリーの正体である。預け先はスザクの実家で、だからスザクは二人の血筋を知っていた。

専制国家の皇室といえば帝位を巡って権謀術数の限りが尽くされるのが常であるが、現皇帝シャルルの子たちは意外に仲がいい。

今のところ、少なくとも表面上は競争相手として激しくしのぎを削るだけの関係である。陰謀と言えるものは一件、ルルーシュたちの母であるマリアンヌ皇妃が殺害された件だけだ。

そして、コーネリアがそのマリアンヌ皇妃を敬慕していたので、ナナリーはコーネリアとその同母妹であるユーフェミアの姉妹とは、特別に仲が良かった。

「心配かい、ナナリー？」

「はい。…ですが、私には何もできません。戦う力もなければ、そう思っていると伝えることすらできないんですから…」

身分を告げてブリタニア皇室に戻ることは、ルルーシュが頑強に反対していた。

マリアンヌ皇妃の殺害は賊の仕業であるとされたが、どうやったら賊が後宮の奥深くまで潜り込めるのか。皇族なり大貴族の関与があり、表沙汰にできないので『賊』と発表したと考えるのが妥当だろう。であれば、死んだとして皇族であることなど捨ててしまった方が安全だ。そう言うルルーシュの主張は確かに一理あり、ナナリーも従ってきた。

しかし、この状況であればやりきれない思いをするのも当然だろう。そう思ったスザクは、つい言ってしまった。

「大丈夫。コーネリア総督もユフィも、絶対にそうならない。僕だって、できる限りのことをするから」

ナナリーの表情がぱつと明るくなり、ありがとうとお礼を言われ、スザクは何となくこそばゆい。考えてみればスザクは技術部所属の、一介の准尉に過ぎない。『できる限り』と言っても、果たして何ができるやら。

それでもナナリーの不安を和らげることはできただろうと思ったのだが、自分が失言したことには気づいてなかった。

「…ふふふつ。それにしてもスザクさん、『ユフィ』って…。愛称で呼ぶなんて、お姉様とどういう関係なんですか？」

「え？ちよ…、ナナリー？」

普段なら天使のようなナナリーの笑顔が、この時ばかりは悪魔に見えたという。

「…で、どうしてベルリーナーなんだ？」

「お前にだって思い入れのある菓子の一つくらいあるだろう。…それだけのことだ」

確かに、それは誰だってあるだろう。ライがベルリーナーを作ったのはルルーシュに頼まれたからであり、そのルルーシュはC・C・に

頼まれたのだ。

しかし、この女にピザを捨ててまで食べたいものがあるというのは、ルルーシュにとって意外だった。山盛りのベルリーナーを平らげた後に、さすがにピザは…。

「お前は何を考えている。あの至高の品を、私が食べ逃すとも思っただか？」

C・C. が指差したのはごみ箱で、真新しい宅配ピザの容器が捨てられていた。つまり、ベルリーナーはデザートとして食べていたのだ。もはや呆れるしかない。

「……太らないのか？」

「安心しろ。この数百年、体型に一切変化はない」

言い切るC・C. に、やはりこの女は魔女だという思いを新たにしたらルルーシュであった。

Stage 20 鷲の羽を継ぐ者

「だいたい、あなたはいつもいつも―」

「カレンさんだって暇さえあれば―」

睨み合いの末、同時に顔を背ける。もはや定番となつてしまったカレンとルーミリアの喧嘩を、扇は少し離れたところから見ている。

一見すると仲は最悪と言つていい二人だが、これを戦場でライの左右に立たせると恐ろしい力を発揮する。恋する乙女の爆発力をまざまざと見せつけられる感じで、つい相手に「ご愁傷様」と思つてしまう。

ただし、これはライがいなくなると途端に破綻する。模擬戦で二人を組ませてみたら言い争っているうちに各個撃破されてしまった。

相手がそのライと、この三人に唯一付いて行けるネージュだったということもあるが、二人には揃つて正座二時間の罰を与えたのは記憶に新しい。

(不思議な奴だよ、ほんと…)

しみじみと、扇はそう思う。ライが来て、カレンは見違えるほどに明るくなった。感情むき出しでルーミリアと言いつ争う姿に、かつての死にたがっていた感じは微塵もない。

そういえば、カレンには友達と言えるほどの存在もいなかった。恋敵(本人は否定するが)とはいえ、本音で語れる相手ができたのも明るくなった一因であろう。

さらにそのルーミリアは、扇グループのメンバーたちが足元にも及ばない逸材だった。

作戦立案や指揮能力では唯一ライに並ぶ能力を示し、経験がなかったナイトメア操縦もライの操縦技術を真似ることで猛烈な勢いで伸びてきた。

新入りにいいところを見せようとした玉城が騎乗三日目に行った最初の模擬戦で逆にやられ、先輩の面目丸つぶれであったという。

今では、カレンですらうかうかできない。カレンにとつて最大のアイデンティティーであった「戦場で彼の隣に立つ」ことすら脅かす存

在になるとは、誰も予想していなかった。

「ライの役に立ちたい」

彼女の行動理念は、すべてこの一言に要約される。信じられないことであるが、本当に彼女はそれだけのために自分を磨き、それだけのために戦っている。

仮にライがブリタニア側に付いたら、彼女はためらうことなく付いて行くだろう。

逆によくわからないのがネージュユで、誰も彼女の真意をうかがい知ることができないでいた。そもそも、いつアジトに来ていつ帰ったのかすら、誰も把握していないのだ。

一度、南がライにしつこく連絡先や住んでいる場所を聞いたらしいが、ライですら何も知らないらしい。ちなみにその後、当然ではあるが南には『ロリコン』の称号が謹呈された。

ただ、いて欲しいときには必ずいて、ハツとさせられるような意見を口にする。ナイトメアはライやカレンに次ぐ実力者だし、外見と内面のアンバランスさがさらに謎を深めている。

そのネージュユが珍しく志願したのが参入希望者の面接で、ここでも扇は驚かせられた。彼女が反対した人間を調べてみると、必ずどこかでブリタニアとのつながりが浮かび上がってきたのだ。

どうやっているのか知らないが、彼女が送り込まれてきたスパイを見抜く方法を持っているというのは間違いない。

とはいえ、扇にとってルーミアとネージュユの二人は嬉しい誤算というものである。

今やエースはライ、カレン、ルーミア、ネージュユのカルテットになり、戦力は一気に増した。カレン一人がエースとして頑張っていたことを考えれば、信じられないほど恵まれている。

それに次ぐのも小笠原だけであったのが、最近古参メンバーの真田が上がってきた。彼もライの戦闘データを参考にしているらしい。ライの操縦は理論的なので、手本にはもってこいなのだ。

なお、個人的にも女性陣の発言力がさらに増した中で、彼の発奮は非常にありがたい。

そしてライが皇家の血を引くと分かって以後、キョウトとのつながりは非常に太くなった。物資は潤沢に送られてくるし、資金面の不安も解消された。

人員の方は『サムライの血』『ヤマト同盟』といった組織が潰されたことで溢れた人を吸収した上、最近の評判を聞いた近隣の組織からは統合を申し込まれたのである。

戦闘員だけに限っても二百人以上。情報提供などの協力者に至っては、もはや末端まで把握できるものではなくなった。それも、野放図に拡大したのではなく絞りに絞って選んだ結果である。

唯一、野放図に拡大したのが、ナイトメアフレームだ。

ライに言わせると、サイタマ戦は「意地を見せただけで勝利とは程遠い」らしい。事実、ブリタニア側では奇襲を防げなかった純血派の一党がツルガシマ基地の駐屯に左遷されたぐらいで、何も変わってない。

「コーネリアと戦う以上、ナイトメア部隊の拡張は急務です」

珍しく、ライは焦ったようにそう進言してきた。ゼロが先に暗躍していたとはいえ、同じ日本人を見殺しにまでして狙った奇襲を外した以上、次は正攻法でぶつかるしかない。

なお、見殺しにしたことを扇は責めるつもりなどない。あの状況でシンジユク同様に住民を救出しようなどとすれば、包囲網の中に通され正面から親衛隊と向かい合うことになっていただろう。

そう説明されれば、その結果が全滅というくらい、扇でもわかる。

(考えてみれば、作戦どころか何もかも、俺はライに頼りっぱなしだよな……)

情けない話ではあるが、それも当然という気がする。自分がライに勝てる要素など、何一つとして思い浮かばない。

「よう扇！何考え込んでんだ？」

「ん？…ああ。…いや。玉城、お前が飲み代を経費で落とそうと考えているのをどうするかをだな…」

メンバーが増えたのはいい。だが玉城のように歓迎会と称してむ

やみに飲み会を開き、しかもその代金を経費として請求してくるのにはほとほと困っていた。

「…いや、先輩として後輩を飲みにつれて行くぐらいは当然のことだろ？メンバーの親睦を深めるという意味でも、これはれっきとした業務で…」

経費にならないと、玉城は非常に困るのである。つい見得で奢ってしまったので、落ちないと具のないお茶漬けだけの食生活になるかもしれないのだ。

「……………今回だけで。それに、全部は出さないからな」

甘いと思われるだろうが、扇に古参メンバーを見捨てることはできなかった。

(飲み会か…)

はしやぐ玉城を見て、こんなところにもあの少年の影響は出ているのだと扇は思う。これまでは、悲壮さを忘れるためにアルコールを必要とした。飲んでも湿っぽい話になるだけで、和気藹々と騒ぐことなどなかった。

「やはり、俺には荷が重すぎた」

リーダーとして、親友はすごかった。その後を継いだ自分は組織を維持することすらできていたか怪しい。そう思っつてつい呟いた独り言であったが、いきなり隣から声がしたので扇は非常に驚いた。

「そうだねー。あんたはリーダーと言うより、No.2だからね」

「お、小笠原!?いつからそこに…」

心中を見透かされた発言に、扇はつい半歩後ずさる。しかし言われた内容はその通りだと本人すら思っていることなので、腹も立たない。

「……………前、お前は言ったよな。俺以上に有能な後任を見つけてからじゃないと納得しないって。ライなら文句ないだろ？」

「決めたのか？」

玉城の声には、若干の批難が混じっていた。いくら有能とはいえ、ついこの前現れた少年にリーダーの座を譲るとするのは、簡単に領けるものではない。

むしろ扇に発奮してもらいライの奴を使い切つてやるつもりで…、
と言いたるところだったが、当のリーダーが燃え尽きたような感じで
あつては、それは言えなかった。

「俺にはもう、ここまで大きくなつた組織を支える自信はない。俺も
肩の荷を降ろしたいんだ」

「そつか。…そうだよな。俺たちは好き勝手言つてりやよかつたけ
ど、お前は違つたもんな」

「…ごめん。あんたにとつて、リーダーの座が重荷であることはわ
かつた。でも、ナオトがいなくなつた後、扇以外に務まる人間もい
なかつた。だから、あんたに責任を押し付けていた」

扇がいなかつたらこの組織は霧散していた。そう言われ、扇はこれ
までの苦勞が報われたように思えた。

(俺の役割は、繋ぎでよかつたんだ)

親友だった男の願ひは、実は日本解放ではなかつた。口には出さな
かつたが、あいつは妹のために戦つていたと扇は思つている。

その願ひは、あの少年が立派に継いでくれるだろう。

「ふふつ、お義兄様らしいですわ」

翌日、キョウト本部を訪れた扇は昨日の顛末を神楽耶に話したので
ある。結果、大笑いされた。

リーダーの座を譲ろうとした扇は、頑強な反対に会つたのである。
…譲られる人の。考えられる限りの説得を行つてみたが、効果はな
かつた。

「何故だかわかりませんが、この戦いには関わるべきだつたと思つて
ますよ。巻き込まれたという感じはあるにしても、それはたまたまみ
んなと一緒になるきつかけだつたというだけで…」

強引に巻き込んだから嫌なのかと思つたが、それも違うようだ。ど
うやら彼の中では扇がリーダーで自分は手伝いと決めているらしい。
「それに、僕をリーダーにただけで勝てると思つてるのなら、大きな
間違いです」

これは扇には耳の痛い言葉であつた。内心、そう期待していなかつ

たと言いつ切ることはできない。

「何かいい案はないものでしょうか？」

権力という魔性の魅力を持つものに対し欲を持たないというのは、美点とも欠点ともいえる。今回の場合だと、扇としては少々恨めしい。

(むしろ俺なんて蹴落として…、つて勢いでだな…)

そうされても、自分は納得しただろう。あくまで『殺されなければ』という前提付きの話ではあるが。

「……そうさな」

断ったライにも、それについて真面目に相談を持ちかける扇にも、桐原は呆れたことだろう。この老人がキョウトなどという組織を運営しているのは、二人がやり取りしている権力に対する欲望故だからだ。

正確に言えば、神楽耶はともかく他の四家を取り戻したいのは『日本』ではない。『自分たち京都六家が牛耳っていた国』である。それがたまたま『日本』という名称だったというだけだ。

もちろんそんなことを口にするはずもないが、そういう人間からすると権力を必死に譲ろうとする人間とそれを全力で拒否する人間の掛け合いというのは、笑い話でしかなかった。

ただ、キョウトの思惑として、扇の決断は悪いことではない。皇家の血を引く若き勇者、となれば、やはり組織の司令官となってもらわねば困る。扇がリーダーであり続けた場合と、押しが全く違う。

問題は、ライが講和まで視野に入れて戦っているということだ。別に全土からブリタニア軍を駆逐できるなど夢見てるわけではなく、彼がただヒロイズムに毒されただけの人間でないことが問題なのである。

(こやつや片瀬ならやすやすと操れるが、さて…)

かといって、操りやすい駒だけを選んだ結果一寸の地も取り返せなかったとなれば、取らぬ狸の皮算用でしかない。

「こうしてはどうでしょう。皆で、お義兄様に連判状を差し出すのです」

これはまた古めかしい、と扇は思ったが、意外に悪くない案であるかもしれない。皆が望んでいるとなれば、説得力はまるで違う。「では、最初の署名は私が行いましょう」

紙と筆を持ってこさせ、手ずから署名する。さすが皇家というべきか、本格的なことに紙は熊野牛王符を使っていた。今の日本で、こんなものを常備しているのはこの家だけだろう。

「皆、よく考えてくださいまし。お義兄様が、本当にこの国に必要なのかを」

その割に自分は真つ先に署名したではないかと扇が怪訝な顔をすると、「妹が兄を信頼するのは当然ではありませんか」とあっさり返された。

第一に、皇神樂耶。次に、桐原泰三。そして京都六家の当主たちの名前が続く。かつての日本なら、これを見ればどんな政治家だろうと大企業の社長だろうと、たちどころに平伏したことは間違いない。

「これが俺たちの総意だ」

連判状を差し出す。幹部級の人間を一人ずつ呼んで話をした結果、全員分の署名が集まった。それを見たライはふう、と息をついて答えた。

「……………わかりました。ここまでされては、断れません」

意外にあっさり承諾してくれたが、それゆえ無理矢理押し付けたような気になり、どうしても謝らずにはいられなくなった。

「……………すまない。だが、どうしても日本には君の力が必要なんだ。

……………その、俺たちが君ならブリタニアにも勝てると思うのは虫のいい話だと思うが」

それでも、そう期待させてしまうのはライに力があるからである。そしてそれは扇にはないものであり、そのため皆はライこそがリーダーにふさわしいと思ったのだ。

「……………安請け合いはしません。言えることはただ一つ、全力を尽くすだけです」

そう聞いてほつとした扇は、神樂耶から預かってきたものを差し出

した。

「皇家に伝わる護国の剣だと言われた。銘は神話の剣から名を取った、『天叢雲』。君がリーダーとなるのであれば、これは君が持つべき剣だ、とも言っていた」

これで俺の役割は終わりだろう、と扇は思う。

彼が『天叢雲』を受け取った瞬間、扇グループは新たな組織へと生まれ変わった。

闇の中から足音が響く。その音を聞いて、ルルーシユは安堵した。断るなら、彼らがここに来るはずはない。

「よく来てくれた。『旭日隊』隊長、正木一彦。返答はイエスと受け取ったが」

「ああ、その通りだ。『旭日隊』は、これより『ゼロ』の指揮下に入る」これで自分だけの戦力を持ったことになり、コーネリアやライにも対抗できる。ゼロの仮面はそうほくそ笑んだルルーシユの表情を隠し、無機質に告げる。

「…では約束しよう。私に従えば、必ず勝つと」

ルルーシユが旭日隊を選んだのには、いくつかの理由がある。

まず第一に、他のレジスタンスに比べて戦力が整っていたことだ。房総半島の丘陵を要塞化し、ナイトメアフレームも持っていた。

その規模は解放戦線には遠く及ばないにしろ、かつての扇グループよりははるかに大きい。関東地方なら、かなり有力なレジスタンスだったのだ。

第二点は、トップに立つ人間たちの関係である。一応、隊長である正木の下に副隊長の酒井と土岐が付く、という形になっているが、重要なことは三人の合議で決めている。

つまり、誰も他の二人を抑えるリーダーシップを持ってない、ということだ。ライという奇才の加わった扇グループより、はるかに扱いやすい。

第三点として、彼らの扇グループに対する嫉妬と警戒感があった。これまで格下と見てきた相手が急速に伸びてきたのを、素直に喜べないのも無理はない。

そして最後の点が、キョウト…、というより神楽耶を除いたの四家の意向である。桐原以下四家としては、旭日隊までライに吸収されるのは、少々困った事態になるのだ。

ライの才覚は誰もが認める。しかし、それゆえ扱いにくい。下手をすれば、自分たちが取り込まれる。その上、総家の神楽耶は「お義兄

様お義兄様」と警戒する様子は全くない。

そもそも、こんな予定ではなかった。あの血液検査でライが皇家の血族と判明し、人物調査を行ったらいきなり神楽耶が「皇家に迎え入れましょう」と言い出したのだ。

せめてもの抵抗で「実力も定かではない男を迎え入れるのは…」と疑念を呈したのだが、ツルガシマであっさりクリアされてしまい、あとはもうなし崩しで進んでいった。

そして気づいた時には『蒼の貴公子』とも呼ばれる、若き英雄と化していたのである。

(そこで俺を対抗馬に立てようというわけだ。さすが桐原老、舌は五、六枚あると見える)

二人を競わせ、そのバランスは裏でキョウトが操る。いくら巧言を尽くして隠したとしても、そのくらいのことが見抜けないルルーシュではない。

(まあ、わかっているれば問題ないな。桐原は桐原で、俺に対して思うところがあつたらしいが)

キョウトの実質的な長が彼だと知って、珍しくルルーシュは皮肉極まる自分の運命に感謝した。ルルーシュたち兄妹が預けられた枢木家は元キョウト六家の一つで、当然他の五家とは親交がある。

自然な流れとして、桐原は人質となっていたブリタニアの皇子のことを知っていた。ブリタニアに対するカードの一枚として使えそうだと注視していたのである。

まさか自分から反逆者となるとまでは考えてなかったにしろ、ルルーシュの怨念が筋金入りだということは桐原も知っていた。

つまり、ゼロが講和を考えることはない。ライが講和を考えても、キョウトがまだ譲歩が取れると踏んだならゼロを使って破談にすればいい。逆もしかりである。

そういった内情を全て見通した上で、ルルーシュはキョウトから伸ばされた手を握り返すことにした。

やはり日本のレジスタンスの間で、『キョウト』の名は大きい。旭日隊がゼロという存在を受け入れることにしたのも、キョウトからそう

内示を受けていたからである。

「キョウトとは、ずいぶん深いつながりがあるようだが…」

「証拠を見せよう。こちらにあるのは『無頼改』。キョウトからの贈り物だ」

それを見た三人は「おお…」と感嘆の声を上げる。日本のレジスタンスで一般的な『無頼』はグラスゴーを改造したもので、その性能はサザーランドにも劣る。

しかしこの『無頼改』はグロースターにも対抗できる性能を実現した、日本の新鋭機なのである。まだ解放戦線にさえ渡されていないものを貰ってきたのだから、証拠として十分すぎると言えるだろう。

だが、ルルーシユには苦い思いがある。計算外だったのはあの銀髪の記憶喪失者が皇家の一族だったことで、おかげで当主の神楽耶は義兄にべったりだ。

名目上にせよ何にせよ、六家の長が向こうばかり向いているのでは少々やりにくい。今回も極秘開発中という第7世代相当の新型は貰えなかった。神楽耶がライのところを送ると決めているのだ。

そこで、仕方なく無頼改で我慢したというわけである。こちらは量産化の目途がついたらしく、数機程度なら回してもらえた。当然、残りは解放戦線とライのところ引き渡すのだろう。

今回の件から考えると、どうやら神楽耶の頭の中ではライ＜解放戦線＞ゼロという順番になっているらしい。

「もう一つ答えてくれ。ここ一連の出来事は、アンタと『蒼』、何がどっちの仕業なんだ？」

尋ねたのは土岐だ。コーネリアを始めブリタニアが二人を区別していなかったように、日本側も当人と関係者以外把握している者はいなかったのである。

しかし、ルルーシユはそれに答えない。

「重要なのは過去ではない。私が、君たちが従うにふさわしい指揮官かどうか、だ」

そしてその証拠はキサラツで間近に見たはずだ、と言われると、三人としては反論できない。あれで旭日隊は一気に名を上げた。

房総半島の先で縮こまっていたことを考えれば、この男の登場によって大きく変わったのは事実である。

「では、今後の方針を話すでしょう。ディートハルト！」

ゼロの声に、一人の男が闇の中から姿を現す。その男がブリタニア人だったので、旭日隊の三人は思わず身構えた。

「心配ない。彼は私の協力者だ」

ディートハルト・リート。職業はTV局のプロデューサー。あの枢木スザク強奪の一件の際ゼロを間近に見て、これぞ自分が撮るべき存在だと思ったという。

「職業柄、ブリタニアの高官とも付き合いがありましたね。情報提供、という形で協力させていただいています」

ディートハルトのつかんだ情報によれば、ここ最近是小康状態と言っている状況にある。足元が気になるコーネリアはトウキョウ租界から動かず、コーネリアが本気で来たら戦う力のない日本側は手が出せない。

『蒼』はサイタマ以後、韜晦を続けたままだ。キョウトがつかんでいる情報はナイトメアの増備に力を入れているというだけで、大きく動く気配はない。

無論、小競り合いはあるにしろ、主力同士の激突という事態が起きることはまずないだろう。

「つまり、今は嵐の前の静けさの中にある、ということだ。しかし……」
「はい、コーネリアはエリアー8の維持のため残してきた親衛隊を呼び寄せることを決定したそうです。これが到着し次第、攻勢に出るでしょう」

ゼロとディートハルトの言葉に、三人は色めき立つ。増強されたコーネリアの親衛隊に襲われたらひとたまりもない。無頼改を貰って強化されたとはいえ、敵はそれ以上に強化されたのだから。

「狙うのは解放戦線ではないか、という噂ですが、これはまだ確証がありません」

それでも自分たちの名前ではないので一息つけたが、ナリタの解放戦線は房総の盾のようなものである。これが倒れば、ブリタニアは

心置きなく房総に攻め込んでくるだろう。

「ゆえに、君たちにしてもraitたいのはこの房総半島に堅固な要塞を築くことだ。……ここが我ら『黒の騎士団』の本拠地であり、日本独立のための最後の砦となるだろう」

「図面を差し出す。それは現状の要塞の十倍近い規模となり、機能させるには少なくとも千を越える兵が必要になる。」

「その点に関して問題はクリアされている。話を持ちかけた他のレジスタンスからも、なかなか色よい返事がもらえた。君たちには『黒の騎士団』の中核として、それを組織し直してもらいたい」

「ずいぶんな役者だったな。日本などどうでもいいくせに、さも『日本の救世主』のように振る舞ったのだろうか?」

「学園に帰り着くなり、C・Cの皮肉を受ける。しかし言われたことは間違いではなく、しかもルルーシュはそれでいいと思っている。」

「俺が勝てば、結果的に日本は解放される。あとはその国で將軍でも宰相でも、好きな位につけばいいさ」

「それがルルーシュの考えだ。自分は他人を利用する。しかし、その他人にはしっかりと利益を返す。ギブアンドテイクがきちんと機能すれば、それで人は満足する。」

「……………」

C・Cは不満があるようだったが、何も言わなかった。

「……………それで?お前が日本の救世主となるのに最大の障害が近くにいてるわけだが、どうする気だ?」

「ライのことである。無論、ルルーシュとて考えてないわけではない。特に血筋については向こうが日本貴族に連なる存在に対し、こちらには憎きブリタニアの皇族。これだけは何としても隠し通す必要があった。」

「とはいえ、日本解放までなら目指す方向は一致する。うまく使う自信はあるし、いざとなればギアスで……」

「カレンにはもう使えないが、ライさえ抑えれば問題ない。そう思っ」
て口にした言葉だったが、言い切らないうちに背後から声がした。

「そんなこと、私が許さないけど」

背筋に氷を詰め込まれたような気がして、ルルーシユが振り返る。知らない相手ではなかった。真白い髪とワインレッドの瞳。猫のアーサーを捕まえた、あの少女。

「…ネージュ・ファン・シャレット。あなたには自己紹介してなかったよね、期待外れの第11皇子さん」

ルルーシユがまず思ったのは、どこから入ったかということだった。確かに鍵はかけたはずで、窓は視界の内にある。

しかし、次の瞬間にはそんなことはどうでもいいと気づいた。この少女は自分がブリタニアの皇子であり、ギアスを持っていることを知っている。話を聞いていたなら、ゼロであることも分かっただろう。

期待外れという言葉の意味は分からないにしろ、好意を持っていないというのは明らかだ。

「—貴様—」

『絶対遵守』は不可能でも可能に変える。目の前の少女を部屋から追い出し、記憶を書き換えることも訳はない。

赤い鳥が羽ばたきながら相手の脳内へと吸い込まれるイメージを感じ、ルルーシユは勝利を確信する。

「今日は警告。だから、これで勘弁してあげる」

しかし、ネージュがそう言ったとき、ルルーシユの体が崩れ落ちた。

「……………」

目が覚めたとき、ルルーシユはベッドに寝かされていた。寝る前に何があったのか、今一つ記憶がはつきりしない。

「なんだ、目覚めたのか。帰ってくるなり私のベッドに直行、熟睡とはな。まあ、疲れているだろうから大目に見てやったが」

そうだったろうか、とルルーシユは思う。確かに学生とゼロの二重生活は楽ではなく、睡眠時間は真っ先に削る対象になっていた。

もう一つ、最近はずっとベッドが占拠されていたので安眠できていなかったのかもしれない。何がお前のだ…、と思ったところで、ルルーシユは気付いた。

「……………」

このところ、このベッドはC・C・Cが使用している。そのせいか、なんとなくいい匂いがする。気にしていなかったものが、気になったら止められなくなった。

「い、今何時だ、C・C・C!!!」

跳ね起きた。顔を赤くするルルーシュに、C・C・Cはにやりと笑いながら答える。夜の2時過ぎとなると、旭日隊の三人に会って戻ってきてから、四時間ほど寝ていたことになる。

「今日は特別だ。そのまま寝ていいぞ。私は、少し外を歩いてくる」
深夜とはいえそのあたりをうろつかれる危険性にも考えが及ばないのか、ルルーシュは止めなかった。

「さて…」

今日のことは明日伝えよう、とC・C・Cは思う。というのも彼女にも明確な答えがないからだ。

(ネージュ…、あれは、私と同じコードマスターじゃない)

ルルーシュを倒したのは、何らかのギアスを使った可能性が高い。だがギアスが効かないというのはマスターの特権だ。そして、マスターはギアスを使えない。彼女は、明らかに矛盾していた。

「今日は見逃してあげるけど、あまり邪魔するようなら本当に殺す…、いや、あなたのために記憶を書き換えるくらいにしようかな。彼、あなたには必要でしょ？」

平然と、そう言つてのけた。その言葉からすると、『記憶操作』のギアスまで使えるということになる。信じられることではなかった。

しかし、それ以上に「オムツを変えたこともある相手だしね」と続けられて、C・C・Cは愕然とした。この少女は、自分と皇帝シャルルおよびマリアンヌとの関係も知っている。

「私の目的?…:…んー。まあ、話してあげてもいいかな。私ね、『明日が欲しい』の」

C・C・Cが何が目的か聞いた返答はこれだった。あまりにも抽象的すぎ、しかしどこか理解できた。

「元々、私は人の可能性に興味があった。だから世界を変えようとするほどの強い意志と才覚を持った人は注視してきて、そして彼に出会った」

その人は、間違いなく歴史の流れを変えた。しかしその後暴走したギアスに呑まれてしまい、もう無理だと捨てるしかなかった。それが、彼の望むところでもあったから。

「でも、彼に勝る人なんて人類史上でもそうそういるものじゃない。そう気づいたのは、失った後だった。気になったこともあってその後を見てみたけど、変化がない世界が続くばかり——」

もういいか、と諦めかけていた時だった。世界の理を崩壊させようとする者が現れたが、そうなるならそれでよかった。そうなった世界を見るのも、また一興かと思っただのだ。

「ところが、ギアスを使ってまでして、世界に『明日が欲しい』って願った馬鹿がいたの」

無論、ギアスといえど世界を思うようにするほどの力はない。しかし、その願いに世界は興味を持った。だから傍観するだけにしていたネージュは一転、急遽介入することにした。その馬鹿の望む流れになるように。

「それが大失敗。……結局、何も変わらなかった。期待外れもいいところ」

何を言っているのか、C. C. でも理解できなかつた。確実なのは、この少女は魔女である自分を越えた化け物ということだ。

「あ、そうそう。ベルリーナー、おいしかったでしょ？初めて作ってもらったお菓子だものね。もう答えは出ていると思うけど……」

最後に、そう言っただけでネージュは立ち去った。追おうという気にも戦おうという気にもなれなかつた。死ぬはずのない自分が、はつきり恐怖したのだ。

そして、言われた通り答えは出ている。なぜ彼女がそこまで知っているのかは、この際どうでもいい。化け物相手に隠し事など無意味なのだろう。

そしてその化け物なら、不可能を可能に変えるくらいいわけはない。

記憶喪失というのも、生きていたというのも彼女の仕業であるなら納得がいく。

「状況証拠は、全てつながるが…」

確かめようと、何度もドアの前までは行つた。いつもそこで躊躇してしまふのは、確かめるのが怖いからだ。

遠くから見た彼は、少なくとも不幸だとは思えなかった。全てを忘れて新しい世界を楽しんでいるときに、自分のエゴイズムで過去を突き付けたらどう思われるか。それが怖いのだ。

(……やはり駄目だ。すまないな、ルルーシュ。私は、あの人には嫌われたくない)

遠くから見ていただけというのが自分に許されたことだったとしても、それならそれでいい。意気地がないと思われようが、嫌われるよりはるかにましだ。

C・Cが部屋に戻った時、ルルーシュは定位置となったソファで寝ていた。

外伝 緑の少女と白銀の王

あれから、いったいどのくらいの時間が流れたのか。

あの時、永遠の生などという運命を押し付けられてから、どこをどう彷徨ってここたどり着いたのか。その記憶がはつきりしない。

昨日のことのようであり、気の遠くなるような時間が過ぎた気もする。絶望という感情しかない日々を精神が拒絶しているのだろう、と私を客観視している私が思う。

改めて自分の様子を見返してみると、廃屋の中で破れてところどころしか残ってない毛布にくるまって座り込んでいるという状況だった。

「奴隷…」

やはり私は、この立場から逃れられない。昔とは少々状況が違うにせよ、自分の意思がないというのは変わってない。今の私は、呪われた力にただ生かされているだけなのだから。

ギアスが使えなくなっていた。

私のギアスは、『愛される』力。使いすぎてうんざりだと思っていたあの力も、今ならばどんな代償を払ってもいいから欲しい。

死のうと思つて、喉を突いてみた。

次に気が付いた時には、血だまりの中で突つ伏していた。他にもいろいろ試してみたが、どんな方法でも死ねない体になっていた。

ギアスがない私に、生きていくすべはなかった。いくら死なない体でも、お金はどうしても必要だ。例えば食事で、死なないにしろ永遠に空腹にさいなまれる、ということになる。

だが元々奴隷であり、ギアスを得てからは偽りの愛情を食るだけだった私には、学識も技能もなかった。仮に何か職を見つけたとしても、この体ではずっと腰を落ち着けることはできない。

その日雇いの仕事を見つけて、ギアスを与えた相手の元に転がり込み、それも駄目なら今のようにならざるを得ない。

私には、世界のすべてが灰色に見えた。

せめてもの救いは、少女の外見のまま時間が止まったことであろう

か。おかげで下心見え見えで寄ってくる男には事欠かない。娼婦になつた時は、かなりの人気者だった。

(私には、偽りの愛情しか得られないのだから―)

もう、何もかもがどうでもいい。娼婦になつた時も、そんな考えだった。決して、こんな自分に無償の愛を注いでくれる人など現れないのだろう。

破れた屋根から、ちょうど月が見えた。あの月のようなものだ。暗闇を照らしてくれる光ではあるが、どんなに手を伸ばそうが決して届かない。

(とりあえず、近くの町に行つてみよう)

明日をどうするか考えながら、これが夢ならばいい、あるいは二度と目を覚まさなくてもいい、と思いつながら、私は眠りについた。

だから、目が覚めたとき、これは夢だと思った。

「人がいたのか。他の住人は？」

銀色の髪が美しく、それ以上に深い青の瞳が美しい少年が目の前にいた。年のころはせいぜい十代半ば。絶対に二十過ぎとは思えない。

「わからないのか?……とりあえず、保護しよう。ここはもうすぐ戦場になる」

「あ、あの……」

保護、と言われて、何か勘違いされているような気がした。主人の勘違いをそのままにして、あとでひどい目に会うなど日常茶飯事だった。

それはどんな理不尽なことであっても、悪いのは必ず私だった。だから、この村には迷い込んだだけということは伝えておかねばならない。これはもう、習性になっていた。

しかし、ギアスとコードのことは言うわけにはいかない。その点は、少し話を繕った。奴隷であり、わけあって主人の元から追い出されたのだと。

後は行く当てもなく、ふらふらとこの小屋に迷い込んだ。そうして目が覚めたら今の状況だったのだが、説明によればもうすぐ戦場になるため村の住民は皆避難してしまつたらしい。

多少の疑念は残ったかもしれないが、頷いてくれたのだから納得してはくれたのだろう。

(これでいい)

これで、この人との縁は切れる。路傍の石にちよつと目をくれたのと同じ。私という存在は、他人の中ではそうあるべきなのだ。

なのに――。

「なるほど、行く当てがないのか。なら、私のところにくればいい」
笑顔でそう言われて、つい頷いてしまった。考えるより先の行動だった。

胸がどきどきする――。

この時私は、初めてギアスがなくなっていてよかったと思った。

この笑顔を手にしたくて、使わない自信がなかったから。

そしてこの笑顔が強制された偽りのものであったら、きっと私は罪悪感に耐えられなかっただろうから。

この少年は、海に向こうの島を領する、白銀の王だった。

あの時、私が王様に拾われてから、2年が経った。その後大陸の国と戦争になったが王様の軍の大勝で終わり、私もこの国に連れてこられた。

そのあたりのことは、私にとってどうでもいい。強いて挙げれば、この国には遠いところに王様より偉い人がいて、その人から正式に『王』と名乗ることを許されたので「王様」と呼ぶようになったくらいだ。

それより問題になったのは、王様が女の子を拾ったということだったらしい。

普通なら考えられないことに、王様には浮ついた話が全くない。そんな人が自分から女性をそばに置こうとしたのだから、一時は愛人にする気かと大騒ぎになったのだ。

もちろん、そんなことがあるはずなかった。ただ、侍女として採用された。何が気に入られたのかは、まったくわからない。

「小屋の破れ戸から綺麗な緑色の何かが見えて、気になって見てみた

ら君が寝ていた」

きつかけはそんなことだったらいい。本当に、ただの気まぐれだったのだろう。ちなみに緑色の何かとは、私の髪のことだ。

しかしながら、いきなりの王宮勤めである。当然、奴隷として過ごしてきた時代に覚えていたことでは足らず、最初は失敗ばかりだった。

失敗しても、王様が怒るということはなかった。優しく、次はどうすればいいか教えてくれた。

だから、必死で何でも覚えた。王様に嫌われることだけは嫌だった。読み書きから、数学に地理歴史といった一般教養。料理や掃除、裁縫といった侍女として必要な知識。

それに王様の好みはお茶に入れる砂糖の量まで把握したし、果ては武術を見よう見まねで学び、考えていることを理解するためこつそり軍学まで。

とにかく、王様に関わりそうなことなら何でもよかった。

そして、王様はもう一つ、大切なものをくれた。私の、新しい名前。王様に名前を聞かれて、私は名乗れなかった。男をとつかえひつかえ、奴隷のように扱ってきた魔女の噂は結構有名だったのだ。

もう昔のこととはいえその名前を名乗るのは気が引けたし、あとは全く思い入れのない便宜上名乗った偽名しかない。

それを王様は、前の主の元でよつぽど酷い目にあわされたのだろうと理解したらしい。これからは生まれ変わったつもりで生きると、新しい名をくれた。

……ただ、この名前を王様に呼ばれた時の記憶が抜けている。これまでに感じたことのない優しさで呼ばれ、私の思考は完全に停止したらしい。

後で聞いた話では、私は顔を真っ赤にしてしばらくの間何も反応しなかったという。

結局、それはどうにも克服できず、王様には何とか呼ばれても大丈夫な名称を考えだしてもらった。呼ばれたいという思いはあるが、不意打ちである名前を呼ばれると失神するかもしれないので仕方ない。

それを王様は、どうにも困る勘違いで対応してくれた。

「そんなな気に入らないにしても、アルファベット2文字で記号みたいな名にすることはないだろう。他の名前を考えようか?」

その後、他の人には普通に呼ばれている姿を見て気に入ってくれていたのかと理解したようだが、そうなる今度は気に入らなすぎているためかと考えるのが王様である。

そういう問題ではないのだが、と気付いてないのは、王様だけだった。何故あれほど明敏な人にこれほど鈍感な面があるのか、不思議でならない。

そして困ったことに、王様は難しい頼みごとをするときはこの名前を使ってくる。これはもう反則としか言いようがない。どうしても断れない上三倍は熱心に働いてしまい、結果期待に届いてしまう。

それで味を占められたらしいのだが、何故そういうことになるのかは全く理解してくれないのが王様である。本当にあの鈍感さは困りものだ。

「おーい、王宮のお使いかい?」

「…?あ、おじさん」

不意に呼び止められて振り向くと、馴染みの店の店長がいた。

最初この店には、王様に連れてこられたのだ。城下でもなかなか評判のいい店だが、とても『王』と名乗る人が来るような店ではない。

だが身分など気にしない王様は普通にこの店にやってきて、普通に料理を注文していた。場合によっては周りの客に多少のサービスも行ったりする。

「また、新しいピザを考えたんだ。食べて行かないか?」

「ほ、本当ですか!」

初めてこの店に来て、王様にご馳走してもらった料理がピザだった。泣きたくなるくらいおいしかった。考えてみれば、あの時が私の人生で初めて料理の味というものを考えた瞬間だったのであろう。

奴隷だったころは最低限度の食事で、料理と言えそうなものは主人の余り物が運よくこちらまで回ってきたときだけだったし、ギアスで

偽りの愛情を得ていた時はその反動で何でも貪るように食べているだけだった。

本当に料理を味わい、作った人に感謝して、心の底からおいしいと思つた。その最初の料理が、私にとってはこのお店のピザだった。

それはともかく、誘つてもらつた以上は食べて行こう。今の私は、しっかりお給金を貰つている。もちろんピザも買える。

時間はお昼には少し早いがまあいいか、という時間だ。城の食堂なら無料（その分は給金から差し引かれているのだろうが）だが、外で何を食べてもいいのだ。

（お昼か。王様は、今日はどうするのだろうか）

王様は本当に不思議な人だ。庶民と同じものを食べ、気に入らないと言つて食べ残すこともない。ましてや食べきれないほどの料理を並べるようなことは浪費としか思つてないらしく、見たことがない。

挙句の果てには自分で料理までするし、母君手製の見たこともない料理を喜んで食べたりする。生魚を平然と食べる姿には度肝を抜かれたが、慣れてくると結構いけるものだ。

ちなみに王様の菓子作りの腕は本職でも脱帽もので、母君の腕はさらにその上に行く。いないと思つたら妹君と三人で調理場で何かしていたりと、普通の貴族では考えられない時間を過ごすこともある。

その作つたお菓子は、私もご相伴に与ることができた。はつきり言つて、その時ほど侍女という立場とこの太らない体に感謝したことはない。王様は、必ず私の分も用意してくれるのだ。

これが他の人だと、甘いにおいが漂うと男性まで調理場の方に寄つて行き、王様に「一つどうだ？」と声と掛けられるのを待っている、と言われている。運よくありつけた人は自慢の種で、もはや一種の恩賞だ。

（お菓子だけは、まだ及ばないんだけど…）

料理に関しては、母君にいろいろ教えてもらった。この人は他国の貴族の娘だというのに、そのころからお付の目を盗んでは調理場に入り浸っていたらしい。

この国に来た理由は、「西洋のお菓子がどういふものなのか知れた

かったから」という。冗談で言ったのだらうと思うが、腕から考える
とこれが本心でそれを一見立派な理由で糊塗したのかもしれないと
思えてくる。

断言できることは、この変わった人たちに仕えている私は今、幸せ
ということだ。

(まるで夢のよう―)

この2年間ほど、穏やかな日々なかつたであろう。奴隷であつた
ころは当然、ギアスで偽りの愛情を貪っていた頃にも、今感じている
ような充足感はなかつた。

灰色の色のない世界は鮮やかな色で染められ、初めて生きているこ
とが楽しいと思つた。

ただ、私はどこまで行つても人の世の理から外れた存在なのだ。何
十年もここに留まるわけにもいかない。長くても、居られるとしたら
10年というところか。

そしてもう一つ、王様のことだ。他の人と違うことに、私は気付い
てしまったのだ。

(王様は私と同じ、あの呪われた力を持っている―)

気付いた時は愕然とした。王様の契約者が何を考えているか知ら
ないが、私と同じだったとしたら…。

王様に、こんな地獄のような人生を歩ませたくない。契約者がどん
な奴か見たことないが、コードを引き受けて欲しいのなら私が引き受
けてやる。もはや、毒を食らわば皿までだ。

(ギアスのことは、いつかきつと―)

全てを話し、そして出て行こう。その時、王様はどういう表情を浮
かべてくれるだろうか。笑つて見送つてくれればいい、と思う。

そんな思いをめぐらしながらピザを食べていると、不意に鐘が鳴つ
た。

「敵襲?」

鐘の打ち方には決まりがある。これは敵襲を受け、城の奥に避難を
呼びかける音。

私は残っていたピザ二切れを口に押し込み、人の流れに従つて奥の

広場に向かう。私が着いた時にはもう広場は人と兵士でごった返していた。

「敵襲である。『北の蛮族』が攻め寄せてくると報告が入った。しかし、安心せよ。私は負けぬ」

王様の声が響き、ざわめきが静まる。そう、王様が負けるはずないので。

「敵は市民まで無理矢理兵に仕立てたらしい。いわば、張りぼての軍勢だ。大軍とはいえ、まるで恐れることはない」

それでも王様は、明らかに苛立っていた。

「背後でこそそそと人の領地を掠め取りやがって」

『北の蛮族』について、王様はそう言ったことがある。あの優しい王様にしては珍しく、『北の蛮族』には敵意と軽蔑を隠さない。

もう一つ王様が嫌いなのは『民主主義』だという。それはそうだ。国を治めることなど何もわからない人たちが、なぜ自分たちに権利を与えろと主張するのだろう。

国のことなど、王様に任せておけばいい。今回も、ただ王様に従っていれば必ず勝つ。

—なのに、私は猛烈に嫌な感じに襲われた。

「あえて言う！二度とこの国に近づこう思わぬよう、一人たりとも生かして帰すな!!!」

その瞬間、私は『嫌な感じ』の正体が何か知った。私は、私だけは感じ取った。これは、ギアス—。

「蛮族どもに死の裁きを!!!」

兵士だけではない。避難してきたはずの人々まで、一齐に叫ぶ。そして私は人の波に押し流された。

「王様…、王様…」

あの後、私はなし崩しで敵と向かい合うことになった。記憶はそこで途切れている。服の染みからして、胸を突かれたらしい。

常人なら、間違はなく死んでいる。そしてその方が明らかに幸せだったであろう。この光景を見ることがなかったのだから。

目を覚ました私が見たものは、原野を埋め尽くすほどの死体。その中で、私は必死に探し回った。知っている顔はいくつもあった。だけど、王様だけは見つからない。

（お城に帰れば―）

王様が負けることなど、決していない。だからもう城に戻っているのだ。そう気づいた私は、駆け出した。どんなに楽観に過ぎた希望であつたとしても、私はすがるものが欲しかった。

城に帰り着いたとき、そのわずかな希望も潰えた。誰もいなかった。街にも、城内にも、王様の私室にも―。

王様のギアスは、『絶対遵守』。あの瞬間、それが暴走したのだというところが、私にははつきりわかった。

終わりはいつか訪れる。それは覚悟していた。だが、この結末はあまりにも酷すぎる。

もっと早くにギアスとコードのことを伝えていれば、こうはならなかったのかもしれない。だがそうだとしても、もう遅すぎた。

「…あ、あははははは…」

生気のない声で、私は笑う。人は壊れるほどの絶望を感じると、笑うしかなくなるものかもしれない。笑いながら、涙があふれてきた。

私はぺたんと座り込んだまま、いつまでも笑い、いつまでも泣き続けた。

私の世界は、再び色を失った。

それから、私はどこをどう彷徨ったのだろう。

王様は、私にいろいろなものをくれた。あの2年間、王様は私のすべてだった。

だから私は、王様の幻影を追い続けた。王様のような、と少しでも感じられる人が欲しかった。

そして、王様が一つだけ私に与えてくれなかったものが欲しかった。

―黒き魔王に出会うまで、私は彷徨いつづけた。

外伝 夢の終わりと、夢の始まり

ゼロレクイエム―。

一人の少年は全ての憎しみを引き受け新たな世界の礎となり、もう一人の少年は自らの存在を捨てて新たな世界を育てる。

全ての国が合衆国憲章を批准し、世界を超合衆国という枠の中に納める。また軍事力は全てを黒の騎士団に集約することになり、その騎士団は超合衆国の決議のよってのみ動くため、戦争が起こることもなくなる。

だが、嘘で塗り固めた世界の崩壊は、あまりにも早かった。

まず、このゼロレクイエム体制に不満を持ったのはブリタニアの国民であった。そもそも、ブリタニア国民がこの体制を望んだわけではない、ということ、ルルーシュは考えてなかったのかもしれない。「これまでの何が悪かったのか？」

そう思うブリタニア人は多かった。絶対君主制に慣れた彼らにしてみれば、別にルルーシュの独裁でも構わない。民主主義など、「使い道のよくわからないものを押し売りされた」という気分だっただろう。

それ以上に、むしろルルーシュの独裁の方が良かったという人も少なくない。何であろうが、彼は勝ったのだ。あのままであればブリタニアが世界の覇者となったのは、誰の目にも明らかである。

その立場は一転、多くの領土を失い、今では独立した旧植民エリアから謝罪だの賠償だの要求される始末だ。これではまるで敗戦国の立場ではないか。

決戦で敗れてこの立場というのならまだ納得できる。だがゼロレクイエムは、表面だけ見れば『ブリタニア皇帝暗殺』というだけだ。

ブリタニアが覇権を捨て各国と協調姿勢に転ずる理由は、何もなかったのである。

「悪逆非道の皇帝ルルーシュと決別し―」

そう訴えるナナリーの声も、そういう人たちにとっては的外れとしか言いようがない。何言ってもやがるというのが偽らざる声だったで

あろう。

何故なら、ナナリーは決戦時に負けた側の、名目上だけとしても総大将だったではないか。何故それを代表として受け入れなければならぬのか。さらに言えば旧都ペンドラゴンを吹き飛ばしたのは、いったい誰だ。

自分の罪状を忘れてルルーシュだけが悪いと罵り、超合衆国にはひたすら尻尾を振る。そして補佐役のゼロは、暗殺の実行者…。

人々の不満は、確実に蓄積していった。

ブリタニアの混乱を見て、世界の覇権を握ろうと動いたのはEUである。民主主義先進国であったが故、民主主義などというものがいかに偽善に満ちたものか、彼らは知り尽くしていた。

民主主義、多数決によって決する政体というものの実態は、多数を握った者が合法的に支配権を得る、という制度である。衆知を集めてより良い意見を探す、などという建前は、痴者の甘い夢に過ぎない。

「どれほど悪辣であろうとも、票を握りさえすれば正義となる」
ありていに言ってしまうえばこの一言に集約される。全てを決めるのは票数だ。彼らはなりふり構わず、票数の確保に突き進んだ。

ここで問題になるのは、「超合衆国の決議における票数は各国の人口に比例する」という制度である。つまり各国がばらばらに行動するより、一つにまとまって得た利益を内で分配する方が利を取りやすい。

「ブリタニアによって破壊されたEUを再建する」

そういう名目を掲げられては、表立って反論はし難い。そして気づいた時には、EUの意向を無視しては議論が成り立たない状況になっていた。

ブリタニアは動けない。日本はようやく独立を果たしたばかりで世界をリードする力などなく、また扇からしてそういうことに向いていない。

ならば合衆国中華は、といえば、ここも問題を抱えていたのである。

合衆国中華にはゼロレクイエムの思想を理解し、かつEUの動きを止めることのできる政治手腕の持ち主である黎星刻がいたが、彼はゼ

ロレクイエムからほどなくして世を去った。

残ったのは、有象無象ばかりである。星刻の後を継ぐに足る、大宦官によって抑えられていた有為の人材が花開くには、あまりにも時間が不足していた。

星刻亡き後、合衆国中華はEUに対抗する最も安易な手段を選択した。合衆国インドを始め、交誼のある国と協力することにしたのだ。それらの国もEUには反発を覚えていたので、協定はすんなり成った。

何ということはない。中華連邦の復活である。

そしてゼロレクイエム体制を完全に崩壊させたのが、ナナリーとスザクが行おうとした『ブリタニア軍の解体』である。

彼らにしてみれば、ブリタニアが覇権主義を捨てることこそゼロレクイエムの完結であり、その象徴となるのが軍の解体のはずだった。しかしこれは、火薬庫に爆弾を投げ込んだに等しい愚行であった。

「何故ブリタニアを支える軍を、暗殺者であるゼロの元に差し出さねばならないのか!!!」

「奴らが掲げる『平和』など、奴らが権力を握るための方便ではないか!!!」

「我らのことを考えぬ代表など代表ではない!!! ナナリーはゼロの操り人形だ!」

「もう超合集国などに従えるか!!! ブリタニアは、世界の覇者であるべきなのだ!」

「このままではブリタニアは暗殺者ゼロの思うままではないか!!! ゼロを倒せ!!!」

ついに民衆の不満が爆発した。ナナリーとゼロが主導する代表政府を倒し神聖ブリタニア帝国を復活させるべく、内戦が勃発したのである。

そして、そういう事態を防ぐためにギアスを使ってまで補佐役として残したシュナイゼルも、ルルーシュの期待からは大きく外れた。

しかも、皮肉なことにそれはギアスを使ったが故にもたらされた結

果だったのである。

例えば内戦の決定打となった軍の解体にしても、ギアスにかかってないシユナイゼルなら間違いなく反対しただろう。

しかし、『ゼロに従え』というギアスにかけられた以上、ゼロの意向が何よりも優先される。簡単に言ってしまうえばスザクの意向がどれほど愚劣なものでも反対できないということになる。

結果として、今のシユナイゼルはルルーシユの期待した『世界を恐れさせた政治家』ではなく、ただの『有能な一官僚』でしかなかった。シユナイゼルの補弼を受けられない二人は、内戦勃発時の対応でも誤った。軍事力による鎮圧を嫌った彼らは、まず対話による解決を目指したのだ。

それを、反乱側が聞くはずもない。その間に軍も国民も、こぞつて反乱軍に付いた。反乱軍は旧皇室の縁者を探し出し皇帝として擁立したのだが、誰もがその新皇帝の方がブリタニアの主にふさわしいと思ったのだ。

『暗殺者ゼロ』と『傀儡の売国奴ナナリー』の求心力は、地に落ちていたのである。

それでもまだ黒の騎士団を使えば、鎮圧は可能だったかもしれない。ブリタニアが再び覇権主義に戻るのはEUも中華連邦も望むことではなかったから、決議が通る可能性は充分すぎるほどであった。

しかし、スザクもナナリーもそれをしなかった。ゼロレクイエムは、人々の望むものではなかった。ラグナレクの接続と同じ、押し付けた善意に過ぎなかったのだ。そしてそれは、悪意と同じ――。

それに気付いた彼らは、姿を消した。民衆が望む未来を押しつぶし、それで自分たちを生かすのでは本末転倒になってしまう。自分たちの手でゼロレクイエムに最後のとどめを刺すことだけはできなかったのだ。

ならば、ということ、せめてブリタニアの内戦を回避し、親友の妹にだけは穏やかで平和な日々を過ごさせようとしたのかもしれない。以後の彼らの行方については、全くの不明だ。

そして復活した神聖ブリタニア帝国は、力を蓄えたのち再び世界に

対して侵略を開始した。その力を蓄えるために費やされたわずかな期間が、ゼロレクイエムによって戦争が止まった時間だったと言える。

当然ながら、ブリタニアの軍拡を黙って見ているEUや中華連邦ではない。ゼロが消えたこともあり、黒の騎士団の制度は崩壊し再び各国が軍事力を持つことになる。

そして超合集国は有名無実となり、やがて消えた。その制度を惜しむものは、いたとしてもごく少数だった。

世界は、あっけなく元に戻った。

「……………」

これほど馬鹿らしい結末は、そうそうあるものではないだろう。期待外れと言うにしても、程というものがある。これでは何のために手を貸したのか、まったく意味がわからない。

私にとって、ラグナレクの接続など痛くもかゆくもない。大樹の葉の一枚に傷がついたという程度でしかなく、「神を殺す」など本気で思っている実行者の様子は失笑ものだった。

逆に、面白いことを考える人がいたものだと思い、放っておいたのだ。それが成し遂げられた世界などろくでもないものだろうと思っただが、試してみてもよいと思うだけは思っていた。

それを捨ててこっちの方がよさそうだと選んだ結末が、これだ。大失敗と言う他にない。

「人間というものがわかってなかったのかな……………」

喉元過ぎれば熱さを忘れるのが人間というものだ。『悪逆非道の皇帝』などと言っても死んでしまえば記録の一つに過ぎず、恐怖などすぐに忘れられる。それを計画の根幹に置いた愚行はそう評するしかない。

その上、計画の運営を現実というものがわかってない男に委ねたのである。崩壊するのも当然の結果、と言えるのかもしれない。

(…彼ならどうしただろう?)

ふと、そう思った。あの少年は、間違いなく歴史を変えた。それだ

けの力を持つ存在だった。そして彼を失ってから200年、彼以上の存在はいまだ現れない。

(…今にして思うと、もったいなかったな)

彼の力なら、この結末も変えられるかもしれない。少なくとも期待はしていいだろう。だが、また『あれ』を起こさないとこの世界にながらないというのには、どうしても気が引けてしまう。

私は人を玩具にしているだけかもしれない。しかし、私は見てみたいのだ。ギアスという超常の力を得た人が何を成すのか、を。それが人の思いによって生まれた私の存在理由なのだから。

とりあえず今見たいのは『この世界のこの時に彼がいたらどうするか』だ。『あれ』については何か埋め合わせを考えよう。彼だって新たな希望を見出すかもしれないし、その手助けくらいはしてやってもいい。

「……じゃあ、『次の』世界に行こうかな」

もう、この世界に未練はない。新たな可能性を求めて、旅立つだけだ。

「……またあなたに会うことになったね、ライ。…そして、ごめんなさい」

一つの夢が終わり、一つの夢が始まった――。

新組織の名を、ライは『天叢雲』にした。神楽耶からもらった剣から取った名であるの言うまでもない。

「私たちは、この国を護るための剣となろう―」

それが、新司令就任の挨拶であった。それに対し、隊員は大歓声で答えたのである。

(それなのに、どうしてこうなったんだろう…)

心機一転、さあやるぞと意気込んだカレンであったが、今はリニアトレインに乗ってヤマナシに向かっていた。生徒会の合宿という名の、ただの旅行である。

ライがハーフだと知って以来、カレンは様々な日本の名所の話をしたり写真を見せたりした。日本で育ったのなら、何か思い入れがあってもいいと思ったのだ。

しかしそれが、お祭り好きの生徒会長に知られたので大事になった。

「旅行の計画？ならお姉さんに任せておきなさい！」

こういう時のミレイの行動力は、賞賛に値する。あつという間に予定を組み、ホテルの予約なども済ませてしまった。その間カレンは、勢いに押し切られてライと旅行用品を買いに行かされていたのである。

「さすがに二人つきりで旅行というのはまずいでしょう？だからみんなで行こうと思うのだけど、チャンスは用意するから楽しみにしてね」
そう言われても、カレンには嫌な予感しかしなかった。

電車の中で、ライはただ外を見ていた。少し斜めを向いた表情は、いつもと変わるところはない。

「……ねえ、何か思い出さない？」

ハチオウジを過ぎたあたりで、目の前に関東山地の山々が広がる。いくらブリタニアに占拠され日本という名称を失っても、この山は昔のまままだ。

「…ん。いや…」

カレンなら電車から外に広がる山々を見れば子供のころ旅行したことを思い出すのだが、ライの記憶を呼び覚ますきっかけにはならぬらしい。名所の写真も、結局何も思い当たることはないという。

ライの過去に関して、いまだにわかっていることは少ない。

まず生活様式はブリタニア式というか西洋の方がしっくりくるらしい。ただ日本の礼儀作法も身に付けており、別に和室でも困らない。

同様に、食生活でも日本とブリタニア、どちらでもいい。生魚も食べれば醤油や味噌や鰹節も問題ない。納豆や生卵に加えて鰹の塩辛まで大丈夫なのだから、下手な日本人より許容域は広いかもしれない。

「…さすがにイナゴの佃煮とかハチノコは参るけど」

とは本人談だ。味がどうこうより、見た目が駄目ならしい。それはカレンも似たようなものなので、食生活からもどちらで育ったのか、今一つはつきりしないでいる。

(会長のことだから、そんなこと考えてないだろうけど…)

記憶探しの一環ということで、ライとカレンはこの旅行に参加させられていた。他メンバーはスザクは軍の仕事があり、リヴアルはバイトがどうしても休めず、ルルーシユは何か用があるのかどこかに行ってしまった。

つまり、男子はライ一人だけ、という状況である。ちなみにリヴアルは何とかしてバイトを休もうとしたが果たせず、ついにはライに代わってくれと頼んでミレイに叱られたという。

女子の方では、なんとルーミアが不参加。もちろん彼女の本意ではない。ライと一緒に旅行、しかもカレンは行くとなれば黙ってない筈だが、ライにこう言われたのだ。

「……『天叢雲』を任せられるのは君しかない」

そう言われて、駄々をこねる彼女ではなかった。……腹の底でどう思っているかは知らないが。

しかし、『天叢雲』の人材層の薄さは問題だった。ナイトメアの操縦員ならともかく、隊長級ですら足りてない。司令代理ともなれば、で

きそうなのはルーミアしかいないのが実情だ。

「二応、神楽耶には相談してみただけ」

部下を眺め渡してこっそりため息をつくしかない現状に対し、ライは神楽耶にいい人材を紹介してくれと頼みこんだのである。レジスタンスに関してならばと出の自分より、義妹の方がはるかに顔が広い。

「任せてくださいませ！解放戦線から藤堂と四聖剣を引き抜いてまいりますわ!!!」

義兄に頼られ神楽耶はそう意気込んだのであるが、それはさすがに無理だとライは思う。隊長級を何人か借り受けられればよし、ということだろう。

（まあ、何にせよ、任せられるのなら任せちゃおう。旅行なんて久しぶりだしね）

今日明日くらい羽を伸ばしても罰は当たらないだろうと思ったカレンは、気分を切り替えてこの旅行を楽しむことにした。

日本を象徴する霊峰を蝕む探掘プラントさえ除けば景色はいいし、記憶探しは何かきっかけがつかめればいい程度でいいだろう。富士山にはキョウト関係で何度か来ているのだから、可能性は薄いのだ。

本当にただ旅行を楽しめばいい、と思ったカレンだったが、彼女の感じた嫌な予感ホテルのフロントで的中した。

「えっと…、会長？説明求めたいんですけど…」

「ん？なーに？」

「なーに、じゃありません!!!どうして私とライが同じ部屋なんですか!!!」

チェックインの手続きを済ませ、部屋のカードキーを渡されたカレンは愕然とした。確かに「チャンスは用意する」と言われたが、ここまであからさまに仕掛けてくるとは思っていなかった。

「えー？だってねー。ライ一人じゃかわいそうじゃない」

ミレイが予約したのは三人部屋と二人部屋だ。しかし、これは明らかに狙って行ったことだ。何故なら、その二人部屋はツインではなく

ダブルの部屋なのだから。

「それに、この前ルーミリアが泊まっていったらしいじゃない。だからあなたも…」

「だから、じゃありません！何か問題が起きたら…」

まだカレンは部屋のことを知らないが、ミレイのにやつき具合から明らかに何か企んでいることには気付いた。ここで抵抗しないと、なし崩しでその策略にはまる。

しかし、その必死の抵抗すら、この生徒会長は歯牙にもかけない。

「問題ないでしょ？今だって一つ屋根の下で暮らしてるわけだし、夫婦なら同じ部屋に泊まるのも自然じゃない？」

「ぶっ!!!」

脳内に巨大隕石が直撃したような衝撃を受け、顔中を真っ赤にしてカレンが固まる。

さすがのライもこれは無視できず口出した。それに勢いづいたカレンもここぞとばかりに反撃しようとしたが、相手が何を言うか考えなかったのは致命的なミスだった。

「ちよ、ちよつと、ミレイさん。今のはいくらなんでも…。僕はいいですけど、カレンは迷惑でしょうし…」

「そ、そうですよ。私はいいけど、ライが迷惑…。あれ？」

気付いた時には遅かった。墓穴の底に奈落まで通じる穴を掘ったようなものである。

「この息の合い様、まさに長年連れ添った夫婦そのものなのよね……。これでまだ何もないっていうのだから恐れ入るわ……」

逆にさらに赤面するような事態へと、状況は悪化した。しかも、ミレイの言葉はシャーリーとニーナにまで領かれたのである。

ちなみにミレイ曰く、ライとルーミリアの場合だと『やり手社長と敏腕秘書』だそうだ。

「むー。部屋は人数ギリギリだから、カレンが駄目となると姉である私が一緒に泊まるしか…」

「駄目に決まって…、『姉』？」

聞きなれない単語をカレンが聞き返す。それに対してミレイが

『じゃん』という効果音が聞こえそうな感じで取り出したのは、ブリタニアのIDカードだった。

写真に写っている人物はライ。そして名前は『ライ・アツシユフォード』。

「ちよつと会長、これって……」

「そ、この子のIDカード。いつまでもIDがないんじゃないから不便だからね。そして戸籍上、私の弟ということになってるのよ」

それはすなわち偽造したということではないか。本気で頭痛を感じ始めたカレンは、大きく息をついた。

「……あの、申し訳ありませんが、よろしいでしょうか？」

「あ、すみません」

声をかけられて、自分たちが道をふさいでいることによく気付いたのである。見れば、声をかけてきたのは同年代から少し上くらいの四人組で、全員が女子だった。

(……でも、どこかで見たような?)

平和そうでいいなー、とうらやましく思ったカレンだったが、その中の一人にはどうも見覚えがある。ピンクの長髪……と考えていくうちに、『天叢雲』のファイル内で見えた顔であることに思い至った。

「んえ!? ユーフェ……」

「しー!!! 言わないでください!!!」

あわてて口を押えられた。しかしその行動は、自分がお忍び中であると自白したようなものである。

「えつと……、本当に本物ですか？」

「はい、本物です。……初めまして、神聖ブリタニア帝国第三皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニアと申します。わたくしのことは、黙っていただけると嬉しいのですが……」

招かれた部屋も一般の客室で、とても皇女殿下の泊まる部屋とは思えない。友達の名を借りて旅行にやってきたというのだが、何ともつかみどころの難しいお姫様だった。

「まさか直に皇女殿下と話ができるなんて……。夢みたいです」

がちがちに緊張しながらシャーリーが言う。表向き貴族令嬢のカレンや元貴族のミレイはともかく、シャーリーやニーナには人生であるはずのない経験だったであろう。

「そんなに固くならないでください。皇女などと言っても、内実は皆さんと何も変わらない、ただの人間なのですから」

護衛の長らしき人が一つ咳払いをする。そのような皇族らしくない卑下はやめてくれと言いたいのだが、このお姫様にそれは通じない。

「……それが事実ではありませんか。わたくしがこのエリアー11に来てから成したことといえば式典の飾り物くらいで、『皇女』という肩書きさえあれば誰にでもできることです」

自分で考えて、自分の力で成したことなど何もない。だから偉そうに振る舞うことなどできるはずがない。それがユフィの考える事実であって、卑下でもなんでもない。

「できないのではなく、やらないだけでしよう。自分にそう言い訳して」

唐突に、これまで黙っていたライが言った。そのきつい言葉を浴びせられてきよとんとしたユフィだったが、激怒したのはお付の方だった。

「貴様、殿下に対して……」

「やめなさい、セラファイーナ。……確かに言われる通りです。わたくしにもできることは必ずあったはずなのにそれを探そうともせず、結局何もしなかった」

コーネリアが妹に任せた仕事は内政にも軍事にも関係ない儀礼関係であった。だが、自分はそれに不満を抱きつつ満足していたのではないか。

無論、コーネリアの命令を拒否しろというわけではない。しかし合間に考える時間はたっぷりあったのだから、何かの案一つぐらいは考えるべきであったのだ。

「ありがとうございます。なんだか、わかっちゃいました」

ユフィは素直に頭を下げた。それに対しセラファイーナと呼ばれた

護衛の長は、誰にも気づかれぬ程度のため息をついた。だから気安く頭を下げないでくれ、と言いたかったのだろう。

「それで、他の人たちは…」

「申し遅れました。神聖ブリタニア帝国第二皇女コーネリア殿下親衛隊中尉、セラファイーナ・デナ・エスターと申します」

「同じく親衛隊少尉、マーガレット・ケインです」

女騎士という感じの凛々しいセラファイーナに対し、マーガレットは軽い。しかしコーネリアの親衛隊所属というだけあり、二人の挙措に隙はない。

それに対し最後の一人はこの中で誰よりも幼く、いかにもまだ見習いという感じだった。

「こ、候補生のマリリーカ・ソレイシイであります！」

実地訓練の一環として、コーネリアの従卒として士官学校から派遣されたのだという。しかし、皇女殿下の従卒とされるくらいなのだから、実力は確かなのだろう。

「みなさん、アッシュフォード学園の人たちだったんですね」

相手にしていたのがアッシュフォード学園の生徒会メンバーと知り、ユフィの表情が一気に和む。アッシュフォードはマリアンヌ皇妃の後ろ盾であった家なので、ユフィも知らぬ名ではなかったのだ。

ちなみに、アッシュフォード家がルルーシュとナナリーをかくまっているのもその縁からである。兄の方は「どうせ政治目的で利用するためだろう」と思っているが、それが全くの邪推ではないとは言いきれない。

とにかく、ユフィは兄妹が生きていることは知らずにいた。ここにいる中で知っているのは学園理事の孫娘であるミレイだけだが、皇女殿下相手でも他言すべきでないことはわきまえている。

もう一つユフィとアッシュフォードの間に関係があるのはこの前推薦したスザクのこと、これも当然マリアンヌの縁からアッシュフォードに頼んだのである。

「スザクは元気でしょうか？学校で、受け入れられてないなどということはない…」

自分がしたことが余計なおせっかいになってなければいいが…、と気にしていたのだが、最近の様子を聞いてほっとしたようだった。しかし、その様子からは何となく「自分がしたことに対する責任感」以上のものが感じ取れる。ミレイやシャーリーなどはぴーんと来たのだが、それを確かめる時間はなかった。

オートロックのはずのドアが、がちやりと開く。そこから、日本解放戦線の軍服を着た兵士たちが入り込んできた。

「……………」

だれも、ルーミアでさえこの状況でどうしたらいいかわからない。自分たちの総司令とエースが味方のはずの組織に人質として捕らえられたという予想外の事態に、完全に自分を失っていた。

かろうじてしたことはキョウトの神楽耶に連絡を取っただけである。このことを聞いた神楽耶は血相を変えて解放戦線指揮官の片瀬を怒鳴りつけたというが、人質の解放には至ってない。

あとは、夜まで放送を眺めていただけだ。コーネリアが素早く包囲網を展開してしまった以上、助けに行くのも不可能に近い。

「……………」

狼狽するメンバーの様子を、ネージュは少し離れたところから見ていた。

「…………予想外の事態ね。カレンは関係ないはずだったのに」

そう呟き、部屋を出て行く。少し前にゼロが報道車に乗りホテルに向かう姿が映し出されて、その後の展開を知ろうとモニターにくぎ付けになっていたので、気にする者は誰もいなかった。

「まったく、カレンのこととなると見境なくしちゃうんだから…。でもあの二人の絆は私の予想を超えていたし、こんなところで失うわけにはいかないから、仕方ないか」

ライの司令室に入る。誰もいないことを確認し、目を閉じる。

白い髪が光り始めた。それが、全身に及ぶ。

「来なさい、『ヤルダバオト』——」

少女の姿が、部屋から消えた。

時は朝まで戻り―

「いきなりそう申されましても…。あそこまで大事になってしまった以上、草壁が素直に言うことを聞くかどうか…」

「よ・ろ・し・い・で・す・わ・ね!!!」

電話の向こうで、鬼の形相でいる少女の姿が想像できる。草壁の馬鹿は何とということをしでかしてくれたんだというのが、この時の片瀬の心境だった。

今回のホテルジャックを実行したのは、解放戦線の中でも強硬派の面々だ。そのリーダーは草壁中佐といい、ことあるごとに片瀬の消極策に反発してきた。

『ゼロ』と『蒼』の華々しい活躍に、我慢が限界に達したのであろう。そしてサクラダイト生産国会議の会場となっているホテルを襲い、要人を人質とした。そこまでならば、なんとか我慢できる。

だが、あの人質の中に『蒼』と『紅』がいる。神楽耶からそう聞かされ、混乱と驚愕で心臓が止まる思いをしたのである。

「お困りのようですね、片瀬少将」

一秒でも早くこの会談を終わらせ、急いでナリタの本部に戻らなくてはならない。そう思った片瀬は可能な限り能面のように変わらぬ表情を作るよう努力したのだが、相手にはあっさり見抜かれた。

先日、ゼロが極秘に会いたいと言ってきたのだ。キョウトからも口添えがあつたので会談自体には不安を抱いていなかったのであるが、こんな厄介なことになるとは思っていなかった。

「解放戦線も大きい分、いろいろありましたね…」

「私の方にも情報は入っております。いかかでしょう、ここは、私たち黒の騎士団にお任せいただくというのは？」

と言ったルルーシュであるが、実はキョウトの桐原から決起の情報はつかんでいた。片瀬にも内密でキョウトの援助が必要となれば、少し探ればそのぐらいすぐ判明する。

ルルーシュにしてみれば、止める理由は何もない。うまく利用すれ

ば解放戦線に恩を売ると同時に血の気が多いだけの邪魔者を消し去ることができるかと思ひ、放っておいたのだ。

片瀬はルルーシユの思惑など、何も気づいていない。ここで解放戦線が動けば、内紛ということになる。遺恨が残り、後々まで尾を引くだろうと予想していたが、それを避けられるとなつてほつとした。

「草壁以下、首謀者たちはどのように処分しても構わないでしょう？問題は、人質の扱いかと」

「さよう。日本としてもこのようなやり方は本意ではない。それをはつきりさせるためにも人質には犠牲なく、また無条件で解放していただく約束を……」

『蒼』と『紅』については、他言無用と釘を刺されていた。だから片瀬はあの中誰がその二人なのか知らず、それを隠してはこう言う他になかった。

「私の考えも一致する。日本は、正々堂々と戦うべきでしょう」
(やれやれ、今回の面倒はこれで片付きそうだ……)

この会談のことを知っているのは、数名の腹心だけである。彼らも草壁には反感を持っているので、口止めするのは簡単だ。

残る解放戦線のメンバーとして、抑え込む自信はあつた。草壁に従つたのはごく一部の兵士であり、裏を返せば大多数はこの一件に賛同しかねるだろうから、草壁は誘わなかつたのだ。

(そもそも、ブリタニアと手持ちの戦力だけで戦えるはずないではないか)

片瀬とて、何も考えていないわけではない。彼が待っているのはブリタニアの混乱だ。例えば現皇帝シャルルが死に、その後ブリタニアが後継者争いで乱れることになれば日本独立の目もあろう。

(他力本願だろうが、とにかく今の状況で現状維持以外に何ができるというのか)

それを考えると、最近の神楽耶は胃痛の種だ。この前も解放戦線から藤堂と四聖剣を『蒼』の元に移籍させると、無茶極まることを言ってきたのである。

藤堂と四聖剣を引き抜かれたら解放戦線は烏合の衆と化してしま

う。神楽耶とてそのくらい知らぬわけではないだろうが、『蒼』のこととなると解放戦線のことなど頓着してくれないのだ。

『蒼』が皇家の血族であり、神楽耶の義兄となったという話は知っている。だがこれまで日本最大の抵抗勢力を率いてきたのは自分なのだから、もう少し配慮が欲しいとは心底思う。

(だが、今回のこともあり、これ以上神楽耶様のご機嫌を損ねるわけにもいかぬ…。仕方ない、四聖剣の誰かを移籍させるぐらいはせねばなるまいな…)

片瀬は気付かない。事なかれに奔る様子を見て浮かんだ冷笑を、仮面が隠していた。

旭日隊を掌握し『黒の騎士団』として作り変えたルルーシュだったが、解放戦線に渡りをつけるのは急務であった。

旭日隊の三人は決して無能ではない。部隊はしつかり掌握しているし、ナイトメアの操縦も上手い。だが、コーネリアやギルフオードといった超一流の相手をさせるには、どうしても不安が残る。

そこで目を付けたのが、解放戦線の客将となっている藤堂と四聖剣である。彼らならコーネリアの親衛隊にも十分対抗できるだろう。

しかし当初の予定では、彼らは欲しかったがそれ以外は必要なかった。熟練兵なら使い道はある、とは思っていたものの、片瀬たち司令部など邪魔でしかない。

それを変更せざるを得なくなったのは、やはりライのためだ。

部下に不安を感じているのはライも同じだ。ならば、日本最高の軍人として藤堂と四聖剣に目をつけるのも当然のことである。そしてライには、義妹の神楽耶がいる。

神楽耶の言葉とあれば、大抵の無茶は通る。下手をすれば解放戦線ごとライの元に付く、という事態にもなりかねず、そうならたならルーシユには出番すらなくなる。

(とりあえず、これで片瀬には恩を売ったという形になる。今は、それで良しとせねばなるまい)

片瀬を通して、藤堂や四聖剣に影響力を持つ。それがルルーシユの

狙いだった。片瀬とて、いくらなんでもぱつと出の男の下に付くのは気が進まないに違いなく、ゼロと手を結ぶのは悪い話ではない。

(だが、やはり無能と言う他はないな。まあ、せいぜい利用させてもらうさ)

おまけの片瀬たちについては、のちのち使い道を考えればいい。

ルルーシユの考えに抜け落ちていたものがあるとするれば、生徒会のメンバーまで人質になってしまったことであろう。

旅行に行く話は聞いていたが、まさか宿泊先が襲撃対象のホテルとは思ってなかったのだ。まったく、どうしてよりにもよって、とは思ったものの、彼の中に見捨てるといふ選択肢はない。

「問題なのはコーネリアの動きだ。あの女は、即決で事を決めたがるからな」

コーネリアがテロリスト相手に妥協するということは考えられない。前に同じような人質事件があった時は、人質にかまわず敵を殲滅した女だ。

(ブリタニア軍の展開が終わるのが昼…。間に合わせなければ、とんだ間抜けだ)

キョウトが用意したヘリコプターに乗り込む。内心、まったく焦ってないわけではない。打つ手を間違えれば生徒会の皆が死ぬ。

それから心を逸らすために、アツシユフオード学園の生徒会には厄介事を引き込む引力でもあるのだろうか、わざと不謹慎なことを思った。

「……………」

このホテルは湖の真ん中に建っている。橋は正面を残して落とし、もちろん残した橋には重厚な防衛線を敷いてある。空と水中からのブリタニア軍の侵入は全て撃退した。

残るは地下の物資搬入路だが、ここにはグラスゴーを改造した大型リニアキャノン『雷光』を設置してある。その一斉射で侵入してきたサザーランド部隊を壊滅させたとき、草壁はこの計画の成功を確信した。

「片瀬の阿呆も思い知るだろう。あのような腰の重さでは、何も変えられないのだとな。だから『ゼロ』とか『蒼』とか、ぱつと出の奴に名を成さしめるのだ」

自分が解放戦線の総司令であったなら、きつと今頃は日本の解放も成っていた。だが今からでも遅くない。今回の功績を後ろ盾に片瀬を排除し自分が解放戦線を握れば、数年で日本を開放してみせる。

救国の英雄となった自分の姿を夢想する草壁であったが、部下から重要な報告があると言われて空想を遮られた。

「……で、どうしたというのだ？」

甘美な夢からたたき起こされた気分で、口調につい棘が生える。この兵士には人質の荷物に不審な物がないか調査させていたのだ。

別に爆弾があるはずもないし、ぶつちやけ雑用である。階級は伍長に過ぎず、報告なんぞ直属の尉官に上げればそれでいいではないか。わざわざ自分まで報告する必要などないだろう。

「そういうわけにもいきません。大変なものを見つけました」

そう言つて差し出したものは、一振りの短刀だった。それに対し草壁は怪訝な顔で答える。ブリタニア人が日本刀を持っているというのはありえないことではない。土産物屋で粗悪品を嬉々として買ったのだろう。

しかし、この伍長は引き下がない。実はかなりの刀剣マニアなのだという。そしてその知識から、この短刀がどのような由来の物であるか語り始めた。

「……な、なに？」

怪訝な表情が猜疑に変わる。この男は正気なのかと疑いたくなるような話だった。この『小菊』と銘打たれた短刀の価値は、誰も想像していないものだったのだ。

「ちゆ、中佐、大変です！」

今度はなんだ、と余計いらつきながら、部下の報告を受ける。窓の外を見やれば、ゼロが報道車に乗ってこちらに向かってくるところであった。

「ブリタニア軍から、ゼロが会談を求めていると通信が入りました。

「いかがいたしましょう?」

「……………通してやれ。そして、こちらの方はお前らが行け」

(見張りは三人…。大した相手ではない…)

兵士たちの様子を、ライは冷静に伺っていた。自分一人なら三人相手でもなんとかなる相手だ。しかし、大勢の人質と一緒にいる以上、うかつには仕掛けられない。

同じように考えているのはセラフィーナとマーガレットの二人だ。この二人は、ごく自然に人質の集まりの両端に別れた。好機があれば、両側で動けるようにである。

今のところ、人質に危害を加えようとする動きはない。実はこれは神楽耶のおかげである。六家総家の名を持って、「人質に危害を加えれば、解放戦線に対して今後一切の援助を絶つ」と断言したのだ。

さすがにこれには草壁も慌てた。なぜ神楽耶がそこまで怒っているのかは知らされなかったが、これでは解放戦線を掌握したとて何の意味もなくなってしまう。補給を止められた軍隊を待つ運命は敗北しかない。

不意に、ドアが開いて解放戦線の兵士が乗り込んできた。見張りの交代ではない。先ほど交代したばかりだ。

「この短刀を持っていたのは誰だ!!!」

前置きもなく、短刀を掲げて叫んだ。誰もがあつけにとられる中、叫び声が上がったのは隣からだった。

『小菊』!!!」

その声は、自分が持ち主だと言ったのと同等の意味を持つ。

「貴様か!!! どうやって手に入れた!? この刀は、日本の宝だ!!!」

『小菊』を打った刀工の名は、圭介景政という。200年ほど前の刀工で、ひよんなことから皇家の知遇を得て、それで世に知られるようになった。

流派やそれ以前の経歴は一切不明。ただしその腕は古の刀工たちにも劣らない、と言われた。

「も、貰ったの。あの戦争の少し前、知らない人から…」

最近、想像もしていない事態が多すぎる。命の危機だというのに、カレンはそんなことを考えた。ライの登場、『王』のこと、そして今度『小菊』だ。

カレンにしてみれば、『小菊』は貰いものであり兄の形見となった品である。それ以上のもではなかった。そんな、名工の手による由緒あるものだとは思っていなかったのだ。

混乱する頭でできたことは、事実を話すだけだった。しかし、それが通じるはずもない。

「嘘をつくな!!」

国宝級の宝を人にくれる馬鹿はいない。この兵士の言うことはもつともである。カレンでさえ、実際に貰ったのでなかったらそう思っただろう。

では、彼らの解釈はどうなるのか。非常に簡単だ。あの戦争の混乱の中で、ブリタニアが奪ったのである。悪いことにカレンは表向きブリタニアの貴族令嬢なのだから、その説には信憑性があった。

そしてこの兵士は、怒りのままカレンをひっぱりたい。草壁を通して神楽耶の言葉を聞いてないわけではなかったが、我慢の限界に達したのである。

だがその行為は、自分の死刑執行書にサインしたのと同じだということを知らなかった。

「え?」

何が起きたのか、理解できたものは少なかった。いきなりライが隣に立っていた兵士を蹴り飛ばしたのだ。防ぐ間もなく鳩尾に食らった兵士は、一メートルほど飛ばされて悶絶した。

「な!き、貴様…」

それ以上は言葉にならなかった。蹴り飛ばすと同時に奪った刀が、首を飛ばす。血が噴き出し驚愕の表情のまま固まった首が転がり、人質の中から悲鳴が上がる。ニーナなど気の弱い者は失神した。

それにかまわず、ライは三人目の脇腹から胸までを逆袈裟に斬り上げた。即死。

残るは元からいた見張りの三人。さすがにこの時には我に返り、銃

を抜こうとした。しかしそれより早く動いた者がいる。セラフィーナとマーガレットの二人だ。当身をくらわせ、簡単に取り押さえた。残る一人は誰を相手にすべきか躊躇し、その迷いが死に繋がった。ライの突きを肩口に食らい、余った勢いで後ろのコンテナまで運ばれ、ぶつかつた衝撃で壁をひしゃげさせて停止した。

「……………」

呆然として、声も出ない。その中でライは突きを食らわせた男にとどめを刺し、刀を空振りして血を吹き飛ばす。あまりにも手慣れている様子に、カレンでさえ何も言えなかつた。

「…………あ、あなたは何を考えていらつしやるのですか!!!」

重い空気の中、ようやくユファイが口火を切つた。一歩間違えれば全員死ぬ状況だったのだから、批難して当然である。

「それにあなたは人を斬つたのですよ!!!しかも、三人もです!!!」

一瞬、ライは言われている意味が分からなかつた。敵は斬る。それは彼にとって当然のことであつて、痛痒など感じることはない。

そして、何を考えていたのか。そう思つてライは困惑した。ただ斬ろうと思ひ、できると思つたから仕掛けたのだ。それだけしか考えなかつた。

その時、地震のようにビルが揺れた。それで返答に困るライは救われた。

Stage 24 偽りの神

「な、何が起こってる…?」

ランスロットのモニターに映し出されるはずの、敵を示す光点がない。それがセンサーの誤作動ではないのは進むにつれて明らかになった。第一射すらこないでいるのだ。

大型リニアキャノン『雷光』。巨大な散弾銃である。トンネルの中、サザーランドでは回避不可能だったその射撃も、ランスロットなら突破できる可能性がある。

しかし、あるとは言っても可能性でしかない。シミュレータの試算によれば回避率は47.8%。これを何度も突破する必要があるのだから、ミツシヨンの成功率は相当低く見積もらねばならない。

ロイドなど「機体を傷つけない程度に、適当なところで戻ってきて」と言ったが、スザクは最後まで突破する気でいた。

これが困だということとは重々承知している。しかし、自分が人質救出の役に立てるならどんな無謀な作戦でもよかった。

だが意気込んでトンネルに入った時、空気の振動を感知した。思い返せば、あれは敵機が爆発した際の爆風だったのだろう。

解放戦線の機体は何者かに撃破された。それは確実としても、その『何者』はいったい誰なのか。ランスロットの前を走る僚機などいるはずがないのだ。

嫌な予感がする。スザクの直観はそれを告げていた。作戦開始まで12分あったのを5分に前倒しし、ランスロットをフルブーストで向かわせるが、それでももどかしい。

「下だ！下に向かえ!!!」

「草壁中佐からは!?連絡がつかないだど?」

「どうやって入り込まれたんだ!?反応などなかったぞ!」

「とにかく手の空いてる者を集めるんだ。地上のナイトメア部隊も投入しろ!!!」

「馬鹿なことと言うな!!!地上が手薄になれば、コーネリアの親衛隊が大挙攻め込んでくるぞ!」

解放戦線の指揮系統は混乱の極みの中にあつた。地下にいきなり敵機が現れたのである。その敵は虎の子の『雷光』を瞬時に撃墜し、他のナイトメアに襲いかかった。

「な、何なんだよ、こいつ!?」

いくら銃弾を浴びせようと、当たっているはずなのに全く効果が無い。そして何か光った気がした時には、僚機が真つ二つになつていった。

さらに一機、無頼がこのアンノウンの餌食になる。何の変哲もない回し蹴りにしか見えないのに、蹴られた無頼は上半身がちぎれて吹き飛んだ。

(ば、化け物だ…)

噂に聞いていたブリタニアの新型でも、ここまで圧倒的な力ではなかったはずだ。これは戦闘ではない。一方的な殺戮である。

そもそも、まずこの敵がナイトメアフレームだと思えなかった。レーダーに反応はなく、柱や天井も含めた三次元空間を跳び回り、その速度は目視で追い切れない。

車輪で滑るように動くナイトメアの動きとはまるで違う。あえて言えば、これは生物の動きである。

投げ飛ばされた無頼が、柱にめり込んでようやく止まる。落ちてこない。それほど深くめり込んだのだ。

「こ、こんちきしょー!!!」

破れかぶれの突進を、相手の光る爪が切り裂いた。中のパイロットごと、まるで薄紙を裂くように。

(死んだ)

敵と視線が合った時、はつきりとそう思った。逃げることもできない。戦うことなど論外だ。何をしようが瞬時に殺される。それ以外の道はない。

まるで物語の竜のような姿だった。首が短く、人と竜を混ぜ合わせたらこんな姿になるのではないか。死ぬ間際に何を考えているのだと思うが、泣こうがわめこうが変わらない現実を前に、恐怖すら感じなかった。

「敵襲、敵襲だ！とにかくく下に行け!!」

もう人質など、だれも見向きもしない。そちらに人数を割く余裕など全くなかったのだ。それに見張りはついていないはずで、それで十分だと誰もが思っていた。

それは、ライにとつて好都合であった。場合によっては来る敵を片端から斬り捨てるつもりでいたが、他の人質がいる以上避けられる戦闘は避けるべきだろう。

倉庫では、捕らえる側と捕らえられる側が逆転していた。最初にライの蹴りを食らった男とセラフィーナとマーガレットに押えられた二人は大人しく縛り上げられた。もう抵抗する気も消え失せたのだろう。

あとは、どうやって脱出するかだ。下手に動けば地下に向かう兵士とかち合ってしまう。まだ動くべきではないというのは方針として一致した。

「ブリタニア軍が攻勢に出たのであれば、人質救出のための部隊も潜入させているはずです。それを待つのが上策でしょう」

普通に考えれば、セラフィーナの意見は正しい。地下で何か起きているのはナイトメア部隊の突入で、それに敵の目を引き付けておいて特殊部隊を潜入させて人質を解放、草壁以下を拘束する。

現状から考えだされる状況として、それが最も論理的な想定である。まさか地下で化け物が暴れまわっているなどとは、誰にも想像できないはずがない。

もう一つこの場を動かない理由として、ユファイの意思がある。「他の人を見捨てて逃げることなどできません」

護衛として、これ以上困る対象はない。自分だけでなく全員を守れと言うのだ。しかしユファイは頑として、何を言っても耳を貸さない。困るお方だとは思いますが、主の言うことであるから従うしかなかった。「あなたはここにいてください。あなたは民間人なのですから、戦闘は軍人に任せるべきです」

そう言つて、ライを自分の隣に引き留めた。実際のところはライを

前線に出すとまた血が流れるだろうから、何とか言いくるめようというところだろう。

それに対し、ライは大人しく従った。何故か、この皇女には反発する気が起きないのだ。

「……………敵であつても人は殺すな、というところですか」

優しすぎるな、とライは思う。現状は力を行使するべき場面だ。しかし、ただ力で押さえつければいいと思っている馬鹿どもより、はるかに好感を持てる考え方でもある。

「あなたのは明らかにやりすぎです。イレヴンの人たちも、同じ人間なのですから」

「……………そう考えているのなら、まず『イレヴン』という呼び方を止めたらどうですか？」

ライの言葉が氷の冷たさになり、ユフィは一瞬ぞつとした。声の裏に殺気が隠れていたのだ。しかし言われたことは、これも自分が今まで考えたこともなかったことである。

植民エリアのナンバーでそこに住む人と呼ぶのはブリタニアでは当然のことであつて、疑問を感じることもなかった。

そして考えてみれば、至極もつともなことである。『イレヴン』という名称は征服者が被征服者に押し付けたものだ。だからそう呼ぶのは自分が征服者の側であると思つているためで、征服者の驕りである。

「……………イレヴンと呼ぶのを、止める」

だが、これは国是と真つ向から対立するということである。普通であれば、それだけで反逆者扱いされることを恐れ、決して聞くことのない意見だろう。

「……………そうですね。わたくしはとんでもない愚か者でした。心の底では『同じ』だなんて、これっぽっちも思つてなかつたのですから」

それをこの皇女は、あっさりと乗り越えた。

「……………」

もしかしたら、もしかするかもしれない。この時ライはそう思つた。脳内に向日葵が群生しているのではないかというこのお気楽天

然お姫様こそ、自分が探していた相手ではないのか。

ブリタニアを変える可能性。能力は問題ではない。そんなものは優秀な補佐役が一人いれば何とでもなる。必要なのは、国是と真つ向からぶつかることになっても引くことのない、強い意志である。

それを、ユーフェミア・リ・ブリタニアは持っていた。

「また、わかつちやいました。……あの、あなたはアツシユフオード学園の方なですよ？できれば、今後もいろいろお話させて……」

その瞬間、これまでにない爆発がホテル全体を揺らした。

「やめろおおお!!!」

未知の機体。それが解放戦線の無頼に止めを刺そうとしているところだった。敵であるはずの解放戦線を助ける理由などなく、逆に助けなどしたら処罰の対象になる可能性もある。

だがスザクは助けようとした。誰であろうと、目の前で人が殺される光景を見たくない。その思いだけで、未知の、敵か味方かもわからない相手と戦う決意をしたのだ。

感情の赴くまま振られたランスロットのMVSは、このアンノウンを切り裂くはずだった。

だが――。

「なっ!？」

信じられないことに、敵はMVSを掴み取った。無頼どころかランスロットでさえもこれをやれば装甲が削り取られ、やがて切り裂かれる。

なのに、この敵には全く高周波振動の刃が通らない。まるで木の棒を掴んでいるように握りしめた剣を、無造作に押し折った。

ぞくつと、背筋に悪寒が走った。ランスロットでも相手にならない。その思いが彼を救った。わずかに機体を後退させた瞬間、掌底を打ち込まれたのだ。

その威力は信じられないもので、ランスロットは10mほど後ろの柱まで吹き飛ばされた。ランドスピナーのギアがバックに入っていないければ、この衝撃をまともに受けていた。

「そ、そんな…」

ユグドラシルドライブに異常発生。エネルギー伝達回路も損傷。たったの一撃で、ランスロットが戦闘続行不能にまで追い込まれた。翼を広げ、四つん這いになった敵を見てスザクも死を覚悟した。口が光る。骨格だけで翼膜がない翼に光り輝く翼が形成される。まだブリタニアでも完成していない光学兵器だということが、はつきりわかった。

(ゲームそのままじゃないか…)

子供のころ遊んだゲームの中では、竜といえば口からブレスを吐く。それを目の前で見られるということに、スザクは何となく懐かしさを覚えた。

ランスロットのモニターを通して、網膜を焼き尽くすほどの閃光を見た。その閃光はランスロットをかすめ、基礎ブロックの柱を破壊して地下の壁をも貫通し、天空に消えた。

「な、何が起こったのでしょうか？」

ホテル全体が沈下している。基礎ブロックが破壊され、ホテルが湖に落下しているのだ。ならばこの混乱に乗じてコーネリアが仕掛けない筈がない。彼女が無能ではないことは、誰よりも知っている。

「落ち着け!!!これはブリタニア軍の破壊工作が成功したということだ！」

ライの一喝で、人質のざわめきが止まる。もうすぐ救助が来る。誰もがそう思い、それは間違っていないが、救助はすぐに現れた。軍と対立しているはずの人物によって。

「これは驚いた。我らの手を煩わせることなく、片が付いていたとは」「ゼロ…」

セラファイーナやマーガレットが憎悪を込めた視線を送るが、仮面はそちらを一瞥もせず、まっすぐ正面を見据える。その視線の先には、ユフィの姿があった。

「…ユーフェミア・リ・ブリタニア。他の人質たちも、怪我一つないよう嬉ばしい。では、我々『黒の騎士団』がコーネリアの本陣まで送り届けよう」

ゼロがブリタニア人である自分たちを保護すると言ったので、人質たちがいぶかしがる。正義の味方でも気取るつもりか、と批難が上がるが、それに対しては嘲笑するように答えた。

「私はそこまで思い上がっているつもりはない。ただ、今回の件は日本としても本意ではないということだ。一部の、本当にテロリストと言われるべき存在が、勝手に起こしたただけのこと」

とはいえ、自分に責められるべき点がないと思っているわけではない。草壁以下がこんな事件を起こしたのも、ゼロや蒼に触発されてだということとは理解していた。

「その責任を取るため人質の解放を求めて草壁に会談を申し込んだが、色よい返事はもらえなかった。やむを得ず、彼らは誅せざるを得なかったのであるが…」

言ったことの八割は嘘だと思っていた方がいい。ゼロに対し、ライはそう思っている。しかし現状、沈みゆくホテルから脱出するには護衛の戦力が必要だ。

(ブリタニア軍を待つか、彼らに従うか)

珍しく、ライは迷っていた。ゼロが本当に人質を守り抜く気であれば、一秒でも早く脱出に移った方がいい。

「……わかりました。ゼロ、あなたに任せましょう」

そんなライを横目に、さっさと決めてしまったのはユファイだった。

「ほう…。兄であるクロヴィスを殺した私を、簡単に信用するとは…」

「ここで人質を殺して、あなたに何の得がありますか？」

「得ならありますが？私がクロヴィスを殺したのは、彼がブリタニア皇帝の子供だから。そしてあなたも、同じ…」

ゼロが銃を構える。それに対しセラフィーナとマーガレットは跳びかかる隙を伺うが、彼の部下たちがそれを制していた。

「……………」

ライは日本刀を構えない。だらりと体に沿って垂らしているだけだ。だがここからでも、半瞬あれば人を突き殺すくらい容易い。せつかく見つけた希望を、ここで失うわけにはいかなかった。

「ですから、あなたにはわたくし以外の人質に危害を加える理由がな

い、ということになります」

その緊張を断ち切ったのは、ユフィの言葉だった。

「…………フ、フハハハハハハ!!相変わらずだな、貴方は…。…………よろしい、任せました。必ず全員を無事に、ここから脱出させて見せましょう。もちろん、貴方も含めて」

その言葉は、嘘ではなかった。すっかり別働隊に退路と避難用ゴムボートを確保させていたのである。

「それでは、次は戦場でお会いしましょう」

コーネリアにそう言い残し、ゼロと騎士団は去って行った。その様子はシナリオを知っていたデイトハルトがしっかり撮影し、リアルタイムで全世界に流れることになる。

事件はこれで解決したものの、コーネリアとしてはここでゼロを見逃したくない。うまく人質と切り離し、殲滅することも考えていた。それを押しとどめたのはユフィである。

「人質となっていたわたくしたちを助け出さいただいた恩があります。であれば、ここは見逃すのが筋でしょう」

それに対し、コーネリアは追跡を一時遅れで行うことで妥協した。それで足跡を消せないような無能なら、その時は容赦なく討ち取る気でいたのだ。

無論、ゼロは無事逃げ延びた。向かったのが東、関東エリアだということだけはわかったが、そんなことは百も承知のことだ。

同じ反ブリタニア活動家でも、ゼロは一味違う。世界はそれを認識した。

そしてその影で、『蒼』と理想家の皇女の間につながりができた。

これが、この先どういう結果を生むのか。解放されて喜ぶ人の輪から少し離れたところに立っていた真つ白な少女が笑みを浮かべたことなど、誰も気づかなかった。

「……………」

学校に行こう、とカレンは思った。ここは自分の居場所じゃない。学校に行けば、彼に会える。自分が自分でいられる場所は、そこしかないのだから。

「怪我一つなかったと聞き、お父様にも報告しておきました。本当に悪運だけは強いようで…」

人質から解放されて帰ってきて、継母の第一声がこれだった。「死んでくれていればよかったのに」という内心を隠す気もなく、それだけ言っただけと部屋に引込んだ。

慣れたと言えば慣れている。自分は愛人の娘であり、彼女は本妻で子供はない。嫉妬と羨望と憎悪と日本人に対する軽蔑が絶妙にブレンドされた物言いは、この家に来てからずっと味わってきたものだ。

どんな家族でも、同じ家に住んでいる以上無事である姿を見せるのが義務。そう思ったカレンは久しぶりにシユタツトフェルト家に帰ったのである。

父はいない。今は本国で、貴族としての務めを果たしているはずだ。人脈を広げるためと称して連日パーティにでも参加しているのだろうとカレンは思っているが、確かめたことはない。

父親が何をしてようが、どうでもいいことだった。血縁上の父親というだけで、精神上的の父親としてならずと兄や扇の方がそう思える。

それでも自分が衣食住に困らず、この家から追い出されないでいるのは彼の厳命であるからで、だから継母は嫌味を言うくらいのことしかできないし、旦那の前ではそれもない。

それは、自分の血を引く者がカレン一人だけという理由だろうが、とにかく自分と一人の使用人は狭い物置部屋で暮らさずに済んできたのだ。

久しぶりの私室は、綺麗に掃除されていた。別にカレンが綺麗好きで、きちんと片づけて出かけるわけではない。

むしろ逆で、掃除は大の苦手だ。好きにさせておくと散らかり放題、脱ぎっぱなしの服を片づけようと持ち上げると足元に下着が落ちるなどというのはさらにある。

だから、この部屋が片付いているのは、誰かが片づけたからである。
「……………」

カレンの趣味や意向を把握し、文句の付けどころがないほど整った部屋。それが逆にカレンには苛立たしい。だから夜明けも待たずにはね起きて、誰も気づかぬうちに家を飛び出した。

休日の、まだ暗い内。道には人も車も全くと言っていいほど通らない。しかしカレンの心は弾んでいた。

それが『当たり前前』になつてしまった彼女は気付かなかつたが、かつては朝の人通りの多い同じ道を憂鬱に通っていたのだ。ましてや、休日に学校に行くなど考えたこともなかった。

(朝ご飯を作つて…、今日は服を買いに行こうかな…)

昨日のホテルジャック事件で、ライはせっかく旅行のため新調した服を血まみれにしたのである。本人は染みさえ落ちれば気にしてないのだが、ニーナなどはトラウマ物だろう。

(彼女、しばらくライと会話ができないでしようね…)

『蒼』としての顔を知っているカレンでさえ驚いたのだ。他の人なら驚愕というより恐怖であろう。とりあえず現場にいた生徒会女子内だけの秘密ということにして、闇に葬ることに決めた。

学校はひとまずそれでいい。他の客には、軍の関係者という出まかせを信じてもらった。幸いユーフェミアという存在がいたため、その影目付としてついてきた軍人と言えれば納得させることができた。

問題は軍部であろう。カレンはなおざりな聴取を受けたものの、人を斬つたライはコーネリアが直々にやってきたらしい。

とはいえ、斬つたのは解放戦線の兵士である。むしろテロリストと戦った勇敢な少年というわけで、危険視されて24時間監視される可能性は低いと考えていいだろう。

コーネリアが個人的に興味を持って調べるくらいはするかもしれ

ないが、それだけで『蒼』と断定はできないに違いない。偽造IDの件が問題になるにしても、それはアツシユフオードの問題である。

あとは、その時になって対応を決めるしかなかった。

「ふあ…、さすがに眠い…」

学生生活に『天叢雲』の活動、それに主婦業までやっているのだから、疲れるのも当然である。最近はルーミアと交代制になったが、いくらなんでも今日は早起きしすぎた。

今日の当番は自分だが、部屋でもう一眠りしてから朝食を作っても充分間に合うだろう。

ちなみにクラブハウスでの食事は三人一緒なので、ライバル心剥き出しの女子二人が腕を競い合うのは言うまでもない。下手なものを出すと、相手から蔑みの視線を受けることになる。

「…そうだね、寝よ」

掃除下手でとても人には見せられない、アツシユフオード学園のクラブハウスの一部屋。もう自分の部屋とはそこであって、あのシユタツトフェルト家の整った部屋ではない。

そう思いながら自分の部屋に入ったカレンは、すぐにベッドで眠りこんだ。

体が揺すぶられる。

「んー、あと5分…」

「カレン、起きないと料理が冷めるぞ。今日は出かけるんじゃないの？」

男性の声で、はつとした。そうだった。彼の朝食を用意しなくてはならないのだ。三度寝の誘惑に打ち勝ち、体を起こす。

「ご、ごめんなさい、ライ。すぐ用意するから…」

しかし、その相手は真っ赤になって固まった。どうしたのだろうかといぶかしんだカレンであったが、理由はすぐに思い当たった。

「……………」

この部屋に入って、自分はベッドに直行した。そういえば鍵をかけた覚えがない。部屋は散らかり放題で、そこかしこに脱いだ服が散乱している。

今朝も面倒だから寝巻に着替えることはせず、しかしそのままの格好では寝にくいので脱ぎ捨てた。勢い、下着まで放り投げてしまったことを思い出す。

布団の下の自分がどういう格好で寝ていて、であれば起き上げばどうなるか。それを理解した瞬間、羞恥で真¹赤¹になった。

「いつやあああああああああああああ!!!」

絶叫が、クラブハウス中に響き渡った。

!!!!

学校は休みではあったが、スザクは生徒会に顔を見せた。生徒会室は休日には談話室となり、大抵いつものメンバーが集まってくるのだ。

ここ最近は特に集まりが良く、その裏にライの菓子という目当てがあるのは間違いない。しかし今日は、どうやらそれどころではなかったようだ。

「ルルーシュ、あの三人、どうしたの？」

ライとカレンは顔を赤らめ、相手の様子をちらちら伺う。そのくせ視線が合うと慌てて逸らす。その隣ではルーミアが終始不機嫌で座っている。

いつもならルーミアがライに寄り掛かったりしてカレンが不機嫌になり、しかしそのじゃれ合いをどこか楽しんでいる雰囲気があった。だからいつもと違うということだけは、スザクにも理解できた。

「い、いや、なんでもない。お前は気にしないでいいからな、スザク」

あの絶叫を聞いたルルーシュは事情を知っている。しかし言うわけにはいかなかった。下手に口にしたりとすると、それだけでライに殺されかねない。

「まあいいんじゃない？しつかり責任とってもらえば…」

さすがのミレイも、ほんのり頬を赤らめて苦笑いしながら言う。

部活前に顔を見せてこの場に出くわしたシャーリーは「あは…、あはは…」とひきつった顔で笑うだけだ。

ルルーシュは赤くなつて口の中で何かごによごによ言いながら、目を合わせようとしない。

「あ、あの…、結婚式には私も呼んでください!!!」

ナナリーすら、テンパってこう言い出す始末。

「ライさんに責任とってもらえるならここで脱ぎます!!!」

ルーミリアに至ってはとんでもないことを言い、そして本当に脱ぎ始めた。普段なら制止役のカレンがフリーズしていたため、シャーリーが必死に止めたのだ。

そして今朝の臨時生徒会で、この一件は絶対他言無用と決まったのである。

「…それよりスザク、お前こそどうしたんだ？その頭…」

「え？ああ、この包帯？ちよつと階段で転んじやって…」

嘘である。とてつもなくバタな嘘であり、一人集めても信じる人はいないだろう。だがこの親友は、十万人に一人ならいたかもしれない相手だったのである。

「そうか、お前は案外そそっかしいからな。何にせよ気を付けてくれ。ナナリーが心配する」

ライもルルーシユも、明敏なくせにどこか抜けている。そう思ったスザクだったが、他人からすれば彼も同類だろう。

無論スザクの傷は、河口湖で柱に叩きつけられたときにできたものだ。

河口湖で戦ったアンノウン。あれは、ロイドに言わせると「人間の作れるものじゃない」と言う。

「だって僕の『あれ』ですらここまで気違いじみた性能じゃないし、まだ完成してないし…」

『あれ』とは何か。疑問に思ったスザクが聞いてみると、予算無視の妥協なしで、考えうる限りの性能を追求した機体を設計していたらしい。

結果、ラウンズでもその全能力を発揮できないだろうという恐ろしい機体になったのである。完成さえすれば間違いなく世界最強の機体であり、研究者であるロイドの誇りであった。

ちなみに、その機体から「妥協して実現可能な部分を集めて作った」機体がランスロットで、さらにもう一機「一人じゃ乗りこなせないか

ら機能を絞った上二人乗りにした」機体があるらしいが、これもまだ完成していない。

「ブリタニアの技術の粋を集めた『あれ』を上回る機体なんてあるはずがないもの。そんなものを開発できる国があったら、今頃ブリタニアは負けてるよ」

さらに、あのアンノウンが使った光学兵器もまだ実験段階の装備だ。ロイドによれば「あと少しで完成」らしいが、とにかく今のところ実戦で光学兵器が使われたという記録はない。

しかもその威力は、ランスロットのヴァリスと比較してなお『桁違い』という…。

「スザク?…どうした?」

「え?…ああ、大丈夫。わかった、気を付けるから」

あのアンノウンが何だったのか。考えても分かるはずもない。とどめを刺されなかった理由もわからない。もう二度と会いたくないと願うぐらいしかできることはないだろう。

とにかく、ランスロットは修理が必要になった。ロイドは意気消沈していたが、スザクは数日は学校に行って穏やかな日々を楽しめる。

その予感は当たり、確かに『数日』は楽しめた。小さな嵐ならあった。翌朝、ルーミアが寝坊したのだ。

結局、前日は寝坊してしまったカレンに代わって彼女が朝食を作ったのだ。というわけで次の朝はその借りを返すことになったカレンが担当で、別に彼女が寝坊しても問題はない。

だが嫌な予感がしたカレンがライを押しとどめて部屋に行ってみると案の定裸で寝ており、起こしに来たカレンとの間でかなり激しい言い争いが起きたのである。

…ただ、それは本当に小さな嵐であった。その後、とんでもない嵐がやってきたのである。

「あー。いきなりだが、転校生を紹介する」

教師に促されて入ってきた転校生の姿を見て、生徒の何人かは椅子から転げ落ちそうになった。

「ユーフェミア・リ・ブリタニアと申します。学園の外ではいろいろありますが、ここでは普通の生徒としての生活を過ごしたいと思っております。みなさん、よろしく願います」

いきなりの皇女殿下の登場に、クラス中が固まった。

「えー、説明すると長いようで短いんだけど…」

その日の放課後、生徒会にて皇女殿下編入のいきさつが語られた。表向きは、エリアー副総督就任前に通っていた学校を中退したことになっているので、足りない単位の取得のため。

もちろん、それは表向き。ミレイが言いよどむ裏の事情を、この皇女はあっさりと言い切った。

「わたくし自身が説明します。ライともっとお話したかったからです」

河口湖のホテルで出会った少年に、自分が至らないことを思い知らされた。だからもっと話をしたいと思ったのであるが、副総督であるから気安く会うことができない。

それに妙な男と会っているなどとコーネリアの耳に入ったら、何を言われるかわかったものではなかった。

「ですから、わたくしもこの学園に通うことにしたのです。生徒同士なら気軽に話していても何の問題もありません」

いや、他が問題大有りなんですけど…、とツツコみたい生徒会メンバー一同であった。よくあのコーネリアが許したものだと思うが、何と言ってもユファイが聞かず、しぶしぶ許したらしい。

「そして、わたくしもこのクラブハウスに住み込むことにしました。これならいくらでもお話できます」

アッシュフォード学園は貴族の子弟も通う学校なので、警備は元から厳重だ。充分コーネリアの基準をクリアしていたし、身の回りについては従卒を一人連れて行くということで話がまとまったらしい。

「本当は自分のことは自分で行いたかったのですが、家事の経験が全くありませんから…。あ、でも、お湯を沸かすくらいならできますよ？」

それは家事と言えるのだろうか…。ツツコむ代わりに、全員がそ

ろってため息をついた。

その従卒も、河口湖に行ったメンバーは知らない顔ではなかった。「マリーカ・ソレイシイです。私は中等部に所属することになりました」

噂を聞いて、自分から志願したという。本来なら高等部に所属でき、普段の護衛も兼ねられる人材が望ましかったのであるが、いきなりのことなので都合がつかなかったらしい。

最初はまあ皇女殿下の覚えがいい立場だから…、と思ったカレンであるが、ライの方をちらつと見て、気付かれたら慌てて目を逸らしたのをカレンは見逃さなかった。

(この小娘もか！)

女性を引き付けるフェロモンでも発しているのだろうか。ついそう思つて隣の少年を見たカレンであったが、さらにその向こうでルーミアが怖い顔をしているのに気付いた。

「ソレイシイ…、ですか」

ルーミアのつぶやきは大きくて大きな声でもなかったにかかわらず、生徒会の空気を凍らせた。

「え、えーと、先輩？あの…、私に何か…」

「別にあなた個人には何もありませんよ。アイザック將軍の息子の末裔ですよ？」

アイザック・ソレイシイ。『王』に抜擢され特に活躍した三人の將軍である『三傑』の一人だ。だからルーミアの先祖であるエリス嬢と、同じ人に仕えたことになる。

「はい、ソレイシイ家の祖は『王』の重臣であつたアイザック將軍です。なるほど、エリス嬢の末裔ならアイザック將軍もご存知…で…」

ルーミアの睨みつけに、マリーカの語尾が沈む。普通なら『王』の重臣の末裔同士、会話が弾みそうなものだが…。

ルーミアはおもむろに立ち上がり、生徒会室から出て行つてしまった。

「失礼しました。でも、アイザック將軍の末裔が純血派の領袖という

のが、どうしても許せなくて…」

『天叢雲』のアジトに向かう途中、ルーミリアが理由を説明してくれた。その説明によると、アイザック將軍は『王』に抜擢されその思想に沿って戦った人で、この人は尊敬に値する。

問題はその息子だ。リカルドに重用され、彼女に言わせれば「『王』の思想を忘れ果てた」のだという。皇太子との縁談を蹴ったエリス嬢の末裔としては、裏切者に近い思いを抱いていた。

「…まさか、国粋思想も捏造？」

カレンの疑問に、ルーミリアは当然と言わんばかりに頷いた。

『王』といえば国是の体現者。当然リカルドと同じく国粋主義者として語られる。だから純血派の中には、自分たちの行動は『王』の思想に沿ったものだと言う人間もいる。

『王』は身分出身で人を区別しない人でした。『実力至上主義』というのは確かにあってますけど、その徹底ぶりは今のブリタニアの比ではありません。宿敵であったフランス人すら登用しましたから」

自分が信じてきたものは何だったのだろう、とカレンは思った。ルーミリアが語る『王』の歴史は、歴史の参考書とは正反対と言っている。いい。

「あれ？でもスコットランドの大虐殺は…」

「それだけは、『王』も人だったということでしょうか…」

珍しく、『王』のことでルーミリアが言いよどんだ。自身がナポレオンと戦っている間、背後で領地を掠め取るスコットランド王国に好意を持ってないのも当然だろう。

そして、『王』はこの国のことだけは『北の蛮族』と蔑称で呼んでいた。元々はリカルドのような国粋主義者が使う言葉だったため、『王』が国粋主義者というイメージの元になったのである。

「まあ、嫌いな国があるのは誰だってそうだろうけど…。だからと言って、民衆にまで武器を持たせて玉砕させることはないじゃない」

カレンが批難めいた口調で言う。それについてだけは、ルーミリアも擁護できない。だが、彼女に言わせると「エリス様でも何故そんなことをしたのかわからなかった」らしい。

『王』の最後の戦いは、あまりにも異常だった。援軍を求める使者を出したにもかかわらず城を出て戦い、そして敵味方全滅という結果に終わったのだ。

実家に帰省中だったエリス嬢も、各地に駐屯していた重臣たちも、何故あの『王』がそんな無謀な戦に打って出たのか、誰も理解できなかったのである。

その横で、ライは頭を押さえていた。

「ライ、どうしたの？…また頭痛？」

見えたものは、原野を埋め尽くすほどの死体。二人の会話の光景が、写真のように脳裏に写し出された。

込み上げてくる吐き気を、ライは必死で抑えていた。

学校に皇女殿下がやってきたその日、『天叢雲』の方にも賓客が来ていた。神楽耶である。

「ようやく話がまとまりましたわ、お義兄様」

解放戦線から何人か人材を出向させてくれ、という話のことだ。ただ、神楽耶には満足いく結果ではなかったのか、少し不機嫌そうだった。

「……藤堂だけは、何としても譲りませんでしたわ」

七年前のブリタニアの侵攻で、ナイトメアもなかった日本が唯一勝利した戦い。それを指揮した男が『奇跡の藤堂』こそ藤堂鏡志朗である。神楽耶としては何としても義兄の片腕になつてほしい存在だった。

しかし、だからこそ片瀬としては何としても手放したくない存在である。すったもんだの末、さすがの神楽耶も折れざるを得なかった。「その代り、と言うには口幅つたいが、俺が四聖剣の一人、卜部巧雪だ。まあ、好きなように使ってくれ」

神楽耶の激怒を恐れた片瀬が譲歩したのである。しかし藤堂は反對しなかったのだろうか。一角の欠けた四聖剣の戦力は、一以上の減算を余儀なくされる。連携も考え直さねばならないだろう。

ライが率直な思いを口にする、卜部はばつが悪そうに頭をかきながら答えた。

「まあ、そうなんだが……。これは他言しないでくれよ。みんな、片瀬少将じゃどうもな……。という思いがあつてな……」

卜部の言葉に、後ろに控えていた三人うち一人が沈思で、二人が苦笑いで答える。沈思した一人は四十前後、残る二人は二十代だろう。

「解放戦線中尉、村上武。これよりよろしく願う」

四十前後と思われる男は、短く自己紹介をして黙り込んだ。見かねた卜部のフォローによると、とにかく無愛想で無口な男らしい。

「だが能力は折り紙つきだぞ。仙波大尉の下で副官のような立場だったこともあるしな」

旧日本軍で兵士から叩き上げた、生粋の軍人である。実は彼のよう
な『ベテラン』は天叢雲に欠けていた存在で、経験に裏打ちされた判
断力が侮れないことはライも知っている。

「解放戦線少尉、朝倉尚人。扇たちの前リーダーだった紅月は名前が
同じだったということもあって、気の合う奴でした」

残る二十代の二人のうち、一人は旧扇グループのメンバーなら知る
相手だった。

「朝倉…。お前が来てくれて、紅月も喜ぶだろうよ」

解放戦線の一部隊がトウキョウ租界で作戦を行った際、地元のレジ
スタンスとして扇グループに協力を求めたことがある。

その時の使者になったのが彼で、リーダーとは名前が一緒だったこ
とから会話が弾み、すつかり意気投合したらしい。

最後の一人は解放戦線ではなく、神楽耶が前々から目をつけていた
存在であったという。

「小野寺達之と申します。若輩者ではありますが、全力を尽くします」

キョウト六家も親衛隊というべき存在の、独自の軍事力を持っている。
その中で若手の有望株を出したのだ。実戦経験は少ないが、軍事
エリートとしての教育は受けている。

神楽耶としては、ライの力を吸収して大きく育ててほしいという思
いもあるのだろう。

「充分すぎるほどだよ。ありがとう、神楽耶」

ライに頭を撫でられて、神楽耶は満面の笑みを浮かべた。

「……それと、お義兄様にお伝えしたいことが」

神楽耶が居住まいを直し、皇家当主としての顔で言う。今から伝え
る内容はとても重大なものだろうと判断したライは、自分と神楽耶以
外の人間を下がらせた。

「桐原や他の家のことです。私にも内緒で、いろいろ動き回っている
ようですよ」

先日のホテルジャック事件で使われた『雷光』や、黒の騎士団への
隠密裏の援助。神楽耶の前ではさも「ライこそ救国の英雄」という口
ぶりであるが、腹の底に別な考えがあるのは間違いない。

「ゼロを使って、お義兄様を抑えるつもりでしょう。桐原達らしい、姑息な考えですわ」

総家の当主として崇めておけば満足するだろうと思っていた少女は、決して人形ではなかった。桐原の行動から見事に目的をあぶりだして見せたのである。

「……………」

その程度、ライも感づいている。はつきり言ってしまったえば、キョウトで表裏なく信用できるのはこの義妹だけと言っている。

「お義兄様には、これから私からも情報をお届けしますわ。皇家には、他の六家にも知らせてない独自の諜報機関がありますから」

キョウトの諜報機関は六家が長い年月をかけて日本中、さらには外国にも張り巡らした組織である。しかし、それはまだ表の部分で、その暗部にあるのが神楽耶の言った組織だ。

歴代の皇家当主にのみ忠誠を誓い、場合によっては六家の行動すらも探るといふ。それがあったからこそ皇家は六家総家の地位を不動のものとしてきたのである。

「もはや桐原達の届ける情報は、完全に信を置けるものとは言えませんが。そして、私だけは決してお義兄様を裏切りませんから」

それに対し「兄が妹を信用するのは当然だろ」と言われ、この後数日間神楽耶は非常なご機嫌で、付き人たちがかえって気味悪がったほどだったという。

もう一つ、神楽耶が伝えたいのが違法薬物のことである。

『リフレイン』と申しまして、幸せだった過去の記憶を呼び起こすというものですわ」

日本人をターゲットにした薬物として、これ以上の物はないだろう。ブリタニアにとっても看過できない代物であるが、それ以上に日本にとっては害毒でしかない。

それが、ここ最近とみに蔓延してきている。どうやらかなり太い密売ルートがあるようで、神楽耶はそれを探っていた。

「わかった。それは、僕が潰す」

礼を言い、神楽耶は帰って行った。

「幸せだった過去の記憶を呼び起こす麻薬ね……。理解できないわ」

カレンが「理解できない」と言ったのは、「そんなもので満足する人の気持ち的理解できない」と言ったのである。

その『幸せだった過去』を奪った相手は明確ではないか。ならば戦って、取り戻す。それが、彼女の出した答えだ。

彼らは戦うことを諦め、まやかしを慰めとする。その行為に対する怒りを感情のまま隣の少年にぶつけてしまったのだが、返ってきた答えは彼女の期待していたものではなかった。

「あまりそう言うものではないさ。全ての人に、戦う力があるわけじゃない。泳げない人を水に叩き込むのはただの苛めだ」

「でも!!!」

「……………だから、僕たちが戦うんだ。そういう人たちの思いも背負ってね」

そう言われ、カレンの勢いは一気にしぼんだ。

『天叢雲』は、不思議な刀だった。

『汝、いかなる思いで我を佩く』

見ていると、そう語りかけてくるようにすら感じる。その問いに対し、ライは答えを見つけた。

「戦う力のない、弱き者を護る。それが護国の剣を手にした者の責務だと僕は思う」

記憶がなく、成り行きでレジスタンス活動に参加することになり、総司令として祀り上げられた彼が見つけた、戦うべき理由である。

「……………なんだか、『正義の味方』みたい」

それもライには似合っているとカレンは思ったが、言われた方は冷たい声で言い返した。

「勘違いしないでほしいな。これは正義の味方では、決していない」

ライが日本人を『護る』ということは、ブリタニアの誰かを『殺す』ということに繋がる。そのブリタニアの誰かにも何か戦う理由があるはずで、それはもしかしたら同じ『誰かを護る』ことかもしれない。『所詮、戦争はエゴとエゴのぶつかり合いだ。自分に『正義がある』と

思うのは、自分のエゴイズムを肯定したいからにすぎない」

人それぞれに正義がある。それを理解せず『自分が正しい』と言う人間は傲慢の塊で、知ってて『正義の味方』などと自称する奴は詐欺師の類だと思えばよい。

(……と、偉そうなことを言ったけど)

自分が戦う本当の理由は、もっと単純なことかもしれない。しかしそれは心の中だけのものでよく、またはつきりとした言葉にならないわけではない。

「……どうしたの？」

いきなり黙り込んだライを、カレンがいぶかしがる。

「……いや、さすが四聖剣や本物の軍人。見事な手際だなんて」

モニターに映し出された情報は、全部隊の展開が終わったことを示していた。

リフレイン撲滅のために、ライはほぼ全戦力を動かした。手元に残したのは直轄隊とカレンを隊長とした精鋭部隊のみ。実戦部隊の一〇五番隊を五カ所の倉庫にぶつけたのだ。

戦闘隊長とした卜部とその部隊が遊軍。あとは一番隊から順に村上、朝倉、小野寺、小笠原、真田の各部隊になる。小笠原と真田の旧扇グループ二人は頑張っているが、やはり経験の差は大きい。

ライとカレンの部隊は、よほどのことが起こらない限り参戦するつもりもない。起きるはずもなかった。各部隊にナイトメアは六機。麻薬の密売組織などが相手になる戦力ではない。

作戦開始からほどなくして、各部隊から制圧完了の報告が入る。ナイトポリスがいたという想定外の事態はあったものの、損害は皆無と言える程度で作戦は終了した。

押収されたリフレインが、うず高く積まれる。

「ひゆう……。これ全部捌いたらとんでもない額になるだろうな……」

「冗談でも言うものではないぞ、玉城」

たしなめた扇であったが、以前の弱小貧乏グループであれば売り捌こうと考える声はもっと大きかったであろう。扇とて、まったく誘惑に駆られなかったわけではない。

「悪かったよ、後方勤務主任殿。俺だつて本心じゃねえ。こんなものを売った金で弾薬を買ったりしたら、崇りかなにかで暴発するかもしれねーからな」

それも、資金が足りているから言える冗談であつた。本当に切羽詰つた状況なら、崇りなど気にしていられない。

『天叢雲』成立後、扇に与えられた役職は『後方勤務主任』というものである。簡単に言えば物資、資金の管理や隊員のスケジュール管理の総責任者で、前線からは外れた。

それでよかつた、と扇は思っている。足りない物資を手配したり隊員の悩みを聞いたりするのなら、自信を持ってできる。

今回は、リフレイン以外の押収した物資の選別が役割だつた。軍需物資などがあれば、それはありがたい。特にグラスゴーを改修したナイトポリスの機体は、最前線は辛いだろうが援護や陽動ならば十分使える。

そして見落としている物資がないか奥の方まで調べに行つた扇は、中毒患者の中に見知つた顔を見つけた。

「お母…さん？」

扇から連絡を受けたカレンは、すぐさまその場に向かった。そしてそこにいた女性の姿を見て、呆然としたようにつぶやいたのである。

その女性は、この場のないものを見ていた。明らかにリフレインの幻覚症状であり、呆然としたカレンの瞳に今度は憎悪の炎が宿る。

「あなたって女は、どこまで弱いのか!!!ブリタニアにすがって、男にすがって、今度は薬？お兄ちゃんはどう？」

カレンの言葉を遮り、パン、と乾いた音が響いた。一瞬、カレンは何をされたのか分からなかった。頬の痛みで、ようやく自分がライに叩かれたのだということを理解した。

「……………いい加減にしろ。事情は知らないが、君が理不尽な怒りをぶつけているのだけはわかる」

理不尽、と言われて、カレンはさらに激昂した。何が理不尽なものか。あの状況で7年も過ごせば、そう思うのが当然ではないか。

「何がわかるって言うのよ！いいわよ、全部教えてあげるから!!!」
洗いざらい、自分の過去をぶちまけた。泣きながら、叫び声で。

最初の結婚で長男にも恵まれた母であったが、ほどなくして夫を失った。その後、どういうわけかシュタットフェルトの当主と関係を持つことになり、そして生まれたのがカレンである。

子はまだ幼く、途方に暮れるような生活を送っていた未亡人に好き心が動いたのかもしれない。女の方も、優しくしてくれた相手は救いと思えたのだろう。

だが7年前の戦争から、母子三人で惨めな生活を余儀なくされた。ブリタニアの貴族と密通して子まで産んだ女に、『イレヴン』とされた敗戦国の住民が好意を持てなかったのも当然のことだ。

そして、行き着いた先がシュタットフェルト家である。娘がその男の唯一の子供だったから貴族令嬢として迎え入れさせ、自分はそのコネでメイドになった。

それで、娘は確かに楽になった。衣食住に困ることなく、望めば困

窮していたころの一家の収入を上回るほどの小遣いももらえた。

しかしメイドになった母に対する扱いは、散々たるものだった。子を産んだ愛人に対し本妻がいい感情を持たないのは当然だし、第一『イレヴン』というだけでどんな仕打ちを受けるかは目に見えている。「なのに、出ていくことすらしない!!!要するに馬鹿なのよ!!!何もできないから、ただ昔の男にすがって!!!」

そんなこと、娘は望んでいなかった。いくら貧しい生活でも、三人一緒の方が良かった。戸籍上にしろ兄とは縁が切れ、母親から「お嬢様」と呼ばれる生活など、誰が望むものか。

「それなのに!!!自分が生き延びたいから、敵の憐れみを受けることにしたのよ!!!恥も何もなく!!!家族もめちゃくちやにして!!!」

その時のライの表情を、カレンは生涯忘れられない。私人として彼がここまで怒ったのは、初めて見たのだから。

「……………生き延びさせたかったのは自分ではなく、娘の方だろ。…行くぞ、ルーミリア」

最後の名前が、カレンの沸騰した精神を一気に冷ました。ライが自分を差し置いてルーミリアだけに声をかけたのは、今回が初めてである。

「……………それでは私からも一言。要するに、あなたは護られるだけで、この人を護る力がなかったからこうなったということでしょう」

ルーミリアは一礼して、ライの後に続く。明らかに彼女も怒っていた。

「カレン、今回は、あなたが悪いわよ」

「井上さんまで…」

「お母さんがどういう思いであなたのそばにいたのか、わかってなかった…、ううん、『わかりたくなかった』のね」

母親が見ている幻。それは、全て子供と一緒にだった時のことではないか。この人は、それだけを頼りにして耐えてきたのだ。

「…………カレン、ごめんなさい。でも、ずっとそばにいるから。私だけでもずっと…」

そうー。

幻影を見ながら、口にされた声。家族がばらばらになると感じ、母の体にしがみついて泣きじやくった自分を宥めた母の言葉―。

この人には、それしかできなかつたのだ。自分を犠牲にして、せめて娘を救うことしか。

『生き延びさせたかったのは自分ではなく、娘の方だ』

たとえ餓死しても、家族が一緒がいい。言うのは簡単だ。だがそう言った娘に頷くのが本当に娘に対する愛情なのか。何であろうが子を生かすのが、親の責務ではないのか。

理性では、シユタツトフェルト家に迎え入れられるのが最も確実な方法だったということとは理解できる。しかしそうなると、母がいなければ何年もあの屋敷で一人ぼっちだったはずだ。

それに耐えきれたという自信はない。また、母がいなかったら継母の憎悪は全部自分に向かつてきただろう。

思い返してみれば、自分が継母とぶつかりそうになった時、必ず母は何か失敗した。それで継母の怒りは矛先を変え、決定的な破局に至ることは避けられてきた。

『護られるだけで、この人を護る力がなかつた』

本当は、わかつていた。さつき自分が叫んだことは、全部自分の中で作られた嘘だ。そう信じ込まないと、自分が耐えられなかつたから。

自分のせいで、母親が苦しむ姿を見るのが嫌だった。それ以上に、その姿を見て何もできない無力な自分が嫌だった。

それが高じて、認めたくないから母を否定した。そして、それさえも娘がづらい思いをせずに済むように、受け入れてくれた。

「お母さん、ごめんなさい。ごめんなさい……」

言葉も通じない相手に、カレンはただ謝り続けた。

翌朝、ブリタニアの政庁前に数台のトラックが停まっております、中からは満載されたリフレインと密売組織の人間が発見され、同時に密売ルートがコーネリアの元に届けられた。

その報告を受けたコーネリアは顔を赤黒くしたという。密売に警

察、官僚、軍組織から爵位持ちの貴族まで関わっており、それほど大規模な不正が自分の下で行われていたことに激怒したのである。

そこからのコーネリアの動きは、さすがに迅速だった。リフレインの密売に関わったものは容赦なくしよつ引かれ、家名を恃んだ貴族は本国に告発されて爵位を没収された。

それが全国区で行われた結果、エリアーにおけるリフレインは撲滅された。さすがに全てを遮断するのは無理であるにしても、大規模な密売は影すら消え失せたのである。

その間、ナンバーズの待遇を改善しようという動きがあった。提唱者はユーフェミアである。

「リフレインなどというものが蔓延したのは、ブリタニアの統治が悪いからではありませんか」

こう言われて、コーネリアは妹の正気を疑った。弱肉強食、攻め取った植民エリアは力で抑え込むのが国是に則ったブリタニアのやり方である。弱者救済を考える統治者など、どこにもいない。

それが、ただ「その人たちがかわいそうだから」と言うのであれば、コーネリアは怒鳴りつけたであろう。しかし計画書まで持ってきたユフィは、こう言ったのである。

「このエリアの安定と発展は、ブリタニアに莫大な利をもたらすと思いませんか？そのために、少し締め付けを緩くするのです」

予測データは、確かにブリタニアの利となることを示していた。コーネリアも不本意ながら認めざるを得ず、イレヴンに対する給与や労働条件を改善する命令が、副総督ユーフェミアの名によって出されたのである。

ただの飾り物と思われていたユーフェミアが、初めて見せた大器だった。

「……これまでの罪は問わない。だから早急に改善しろってさ。もう少し早ければ、お母さんも救ってくれたのにね……」

それが結果と原因を逆転させないと成立しないということは、カレンにもわかっていて。ユーフェミアをそう誘導したのはライなのだ。「ライは本当にすごいんだから……。誰にもできなかったことを、やつ

てのけたのよ」

彼は本当に、ただ戦うだけではない。『国』よりも『生きる権利』が必要な人たちを、救ったのだ。

「餓死寸前の人を救うのは巨大な農場ではなく、一握りの米だ。農場で何を育てるか、あとで考えればいいのさ」

彼に言わせると、そうなるらしい。

しかし、今回の一件で彼の名は、リフレイン撲滅のきっかけを作ったというだけでしか現れない。

確かに全土の密売組織を叩き潰したのはコーネリアだし、待遇改善はそれを受け入れるユーフェミアという存在がいなければ、絶対にできなかつたのは事実だ。

「ライはそれでいいんだって…。自分の名声なんかと引き換えなら、まったく惜しくないって」

病院で、ずっと幻を見続ける母に語りかける。リフレインの中毒症状は非常に重く、カレンが語りかける言葉の一つも理解できてないだろう。治療を続けたとしても、完治する可能性は低いという。

「カレン、ここにいるんだろ？」

「え？ラ、ライ？」

あの日以来、カレンはまともにライと話していない。彼が怒っていたのではなく、カレンに会わせる顔がなかったのだ。ちなみに、母に語った彼に関する情報は全部漏れ聞いたことでしかない。

ライが隣に座る。それに対し、カレンは顔を上げることができない。しかし、言われたのは彼女の予想とは真逆の言葉だった。

「……その、この前は言い過ぎた。悪かったと…」

「違うわ、ライは悪くない！悪いのは全部私。馬鹿なのは、私だったから…」

もつと早く、素直になればよかった。自分がもつとかばってあげていたら、せめて二人きりの時は普通に「お母さん」と呼んでいたら、薬物など手を出すことはなかったであろう。

「……だから、ごめんなさい。……そしてお母さんにも、一言でいいから謝りたい。しつかりと、私の言葉を受けてももらいたい……」

泣きそうなカレンに、ライは何か考え込む。明らかに気が進まないという表情だが、何か考えがあるようだ。

「……うまくいくかわからない。失敗すれば、さらに酷いことになるかもしれない。それにこれは一度限りの反則なんだけど……」

カレンにしてみれば、希望があるなら何でもよかった。医者も見放すような今の状況から何か変わるのであれば、反則だろうが構うところではない。

「……なら、やるだけやってみる」

そう言い、何をするのかと思ったら、ただ耳元で何か喋っただけだった。それだけなのかとその行動を怪訝に思ったカレンだったが、次の瞬間には飛び上がりそうなるほど驚いた。

「…………… あら、ここは……………」

そこにはないものを見ていたはずの人が、急に周囲の状況を気にし始めたのである。

「……………！カレ、……お嬢様!?!」

そして視点が自分に合った。信じられないことに、ライが何か囁いただけでリフレインの中毒症状が消え失せたのだ。

慌ててカレンは隣の少年を見上げる。それに対し、彼はカレンの肩に軽く手を置いて病室から立ち去った。

『それより、やることがあるだろう?』

その手は、そう言っていた。

「あ、あの……、お嬢様……。私は一体……」

「……………違うでしょ」

うつむいたまま、カレンが言う。しかし、上げた顔にはすぐに溢れそうなほどの涙がたまっていた。

「私の名前は『カレン』じゃない。娘の名前を忘れないでよ、お母さん」

そのまま、母親の胸に飛び込んだ。

「お母さん、ごめんなさい、ごめんなさい……」

最初は何が起きたのかわからずあつけにとられた母は、娘の背に手を回して頭を撫でた。

「……………いいのよ、カレン。あなたのためだと思ってたのに、逆に苦しま

せて…」

「ううん、違う。違うんだから…」

「……………」

もう出番はないな、と思ったライは、外に向かう。しかしその足取りはふらついていた。倒れるほどではないにしても、頭痛がひどい。

「使ったのね。……でも、今回はいい使い方をしたと思うわ」

いきなり、横からネージュの声がした。それに対しライは額を押さえ、顔をしかめながらその方向を向く。この力を使うと、その後必ず頭痛に襲われる。だから使いたくなかったのだが、今回は仕方ない。

そしてそう言った事情も、この少女は全て把握しているようだった。

「…重要なのは使い方。どんな力でも、使い方次第で善悪は変わるんだから」

それだけ言って、立ち去る。頭痛で目を閉じた一瞬に、彼女の姿は消えていた。

おまけ

「ところでカレン、あの、さっきのかっこいい人は誰？もしかして、あれがカレンの恋人？」

「へへへへ、変なこと言わないでよ!!!彼は、その…、私たちの新しいリーダーで…。学校のクラスメートで…。あと色々あってお世話係ということに…」

感動のシーンから一転、涙が一気に止まった。何を言い出すのよ、というのがカレンの心境だった。

「なら、彼がそうなのよね？最近学校に泊まってるらしいけど、学校で甲斐甲斐しく男の子に尽くしてるって情報は入ってるんだから…」

どこで手に入れた!!!と叫びたいカレンであった。しかも「もう少し早くこの情報を手にしていればリフレインなんてもものには手を出さなかった」とまで言われ、彼女は盛大な溜息をついた。

「で、どうなの？好きなんでしょ？そうでなかったら、尽くすなんてことしないわよね」

「まあ、それは、その…」

認めたら、引き返せなくなる。それは分かっていた。しかし、もう自分の気持ちから目を逸らすのも限界だということも分かっていた。「……………うん」

彼のこと、好き。その思いに、嘘偽りは欠片もなかった。

「……まさか、二人と再会できるなんて思ってもいませんでしたから」「私もです。もうお姉様とこうして話をする事など、ないと思っていたので…」

喜び合う妹が二人。それはいい。それはいいのだが、どうしてこうなった、という思いが消えないルルーシュであった。

いきなりの皇女殿下入学からしばらくして、学内の騒ぎはミレイが「あまり騒ぎすぎると退学!!」と放送したこともあり幾分おさまってきた。あの会長なら本当にやるということは、誰もが知っている。

そしてようやく、ルルーシュたちとゆつくり話せる暇を見つけたのである。

「…どうしたの、ルルーシュ?あまり嬉しそうじゃないみたいだけど…」

「い、いや、そんなことはない。もちろん嬉しいさ。俺だって、ユフィと直に会えることなどあるはずがないと思ってたからな」

お前は余計な気を回すな、と親友に思ったルルーシュであった。マリーカという従卒を連れてきたユフィだったが、学内では専らスザクが護衛役を受け持っている。

別に命じられたわけではない。ただ、ユフィがどこに行くにもスザクを連れて行くというだけだ。初めての学食でどうするのか教えてもらっている姿は、まさに箱入り娘と一般人のカップルであったという。

(これで俺がゼロでなかったら…)

本当に、心の底から笑いあえただろう。だが、だからと言って今更この戦いから降りるといふ選択肢はない。自分とナナリーを捨てた皇帝には、相応の報いをくれてやる。

その過程で、当然兄弟姉妹と戦うことになる。その中でルルーシュが唯一戦いたくない相手が、このユフィなのだ。

「ところでルルーシュ、やはりお姉様にも生きていと伝えてはいけないのですか?」

「……君には悪いが、俺はコーネリアを完全に信用することはできない」

母マリアンヌが暗殺された日、その宮殿の警備責任者はコーネリアだった。『防げ』なかったのではなく、『防が』なかったのではないか。その思いが、ルルーシユの心境に影を落としている。

だから、ユファイが転入してきて、何とか二人きりになって真っ先に言った言葉が「誰にも、コーネリアにも言わないでくれ」だった。

「お兄様!!!」

ナナリーに批難されても、こればかりは譲れない。ユファイは敬愛する姉を疑いたくないが、ルルーシユの気持ちも理解できるのでそれ以上は言わなかった。

「……俺からも言いたいことがある。ユファイ、先日のリフレインの件は見事だったけど、やはりこのエリアーは危険だ。君の優しさはもっと安定したエリアでこそ光ると思うのだが……」

リフレイン密売に絡むイレヴンの待遇改善で、『お飾りの皇女』と呼ばれていた副総督に対する見方は一変した。ブリタニア内で守旧派は眉をひそめたが、イレヴンの人気が沸騰するのは当然のことだ。

『エリアー』ではありません！『日本』です！ルルーシユもそう呼ぶようにしてください！」

身を乗り出して言ってきたユファイの勢いに押され、ついルルーシユは頷いてしまった。一体どうしたのかと聞いてみたら、ライのおかげだという。

ホテルでライに言われたことをきっかけに、ユファイはこれまでの『常識』を考え直した。

「ブリタニアはこれまで征服した人たちのことなど、何も考えてきませんでした。もう、そのやり方にも限界が来ているとわたくしは思ったのです」

だから日本に残って、副総督の名でできることから始めようと思う。しかし、それは国是と真っ向から対立することも辞さないものである。

『王』の意思と対決する……。並大抵のことではないぞ」

ブリタニアを根本から作り変えることになるだろう。だが、そのためにはまだユフイの持つ力はあまりにも小さい。

『日本』という呼び方も公式の場で使ったら大問題になり、副総督の地位も失うかもしれない。使っても許される場合は、いまだ心の中とこの学園ぐらいしかなかった。

『王』と言えばルーミリアだね。彼女、『王』の重臣の末裔って言うてたから。頼めばいろいろ教えてくれるんじゃないかな？」

スザクとしては、ただ思い付きを口にしたただけだった。彼女なら歴史書にも載ってないようなエピソードも知っていておかしくない。そう思っただけである。

まさか、この一言が歴史の分岐点となるなど、夢にも思っていないかった。

『王』について、ですか…」

スザクに言われたユフイは、さっそくルーミリアの部屋を訪れた。しかし、相手はいまいち乗り気ではなさそうだ。

世間一般で知られているような内容を聞きたいのなら、図書館に行つてほしい。にべもなくそう言われても、ユフイは引き下がらなかつた。

「ですから、知られてないようなエピソードなどを聞きたいのです」

「本当にそれが望みなら、まあ…。人生観が変わってしまうかもしれませんが、それは承知してください」

物騒なことを言いながらルーミリアが取り出したのは、一冊の本だった。

「エリス様の回想録です。さすがに原本ではなく、私が書き写したものですけど」

そんなものがあつたのか、とユフイは驚いた。『王』の最も身近にいたエリス嬢の回想録となれば『王』のことを知る一級資料で、普通なら博物館にでも飾っておくべきものである。

「……本当に、覚悟してくださいね」

最後のつぶやきは、本を読み進めるまでどういう意味か分からな

かった。

「はふう…」

恋した人の写真を見ながら、緩みきった顔で妄想に耽る。二十年後なら恥ずかしくて憤死するような妄想も、恋する十代乙女にとってはなんてこともない。

その妄想の中で、自分は銀髪の少年の隣にいた。赤も紫も押しつけて、彼は自分を選んでくれた。そしてそれから…。

「マリーカ、いますかー？」

しかしその妄想は、いきなり部屋に入ってきた主によって遮られた。

「ユユユユーフェミア様!？」

「…どうしたのですか？慌てて何かを隠して…」

「にや、にやんでもありません!!!」

慌てすぎて呂律が回っていない部下に対し、ユフィは首を傾げたもののそれ以上の追及はしないことにした。

「それよりルーミリアから興味深いものを借りてきました。あなたにも関係あることなのですが…」

「ルーミリアさんですか…」

どうにもあの人は苦手だ、とマリーカは思う。家の問題だけではなく、自分の上位互換を相手にしているように感じてしまう。ライと組んだとして、あれほど能率よく仕事をこなす自信はない。

もう一人、どうしても勝てないと思うのがカレンである。ライと何をするにしても息がぴったりで、傍から見ると恋人としか思えないのにまだ付き合っていないらしい。

そして二人とも、このクラブハウスに住み込んでいるという。同じ建物に住んでいるアドバンテージがあると思っただら、敵はほとんど同棲とはるか先を行っていた。

理性では、もうここまで深い関係の二人を押しつけることなどできないとわかっている。しかし理性では測れないのが慕情というものだ。

(かつこよかったからなあ…、あの戦う姿…)

一応軍属なのにあっけにとられて動けなかった自分と比較すれば、雲泥の差だ。軍人を目指した以上、あなりたいと思うのは当然のことだった。

「マリーカ…、本当にどうかしましたか？」

「い、いえ何も！失礼しました!!!」

思考がライのことに飛び、フリーズしていた。普通ならこの体たらくでは従卒解任である。仕える相手がコーネリアだったら、少なくとも「脆弱者!!!」と怒号が飛んだはずだ。

「それで、エリス嬢の回想録を貸していただきました。『王』について、知られてないようなことがいっぱい載っているはずですから」

エリス嬢が回想録を書き残していたのは、マリーカも初耳だった。ちなみにアイザック將軍は何も残さなかった。しばらく大帝に仕えたものの、『王』について語ることもなく俗世間との縁を切って隠棲したという。

だからマリーカも、エリス嬢から見た『王』の姿には興味がある。最も近くにいた人の生の声が聴けるのだから。

しかし、『エリスの回想録』は、そんな生易しいものではなかった。

「……………」
「……………」

本自体は、そこまで厚いものではないので読みやすい。エリス嬢と『王』の邂逅は、二人がともに12歳の時。いくら詳細に書いても、元が5年分しかないのでは分量も限られる。

だが読み進めるうちに、ユフィの表情はどんどん険しくなった。それをいぶかしんだマリーカもまた、渡された本を読んでいくうちに表情が固まった。

「……………これが本当なら、ブリタニアを揺るがすような事件になりま
すね」

マリーカも頷く。ルーミリアが何故あそこまで『王』に傾斜し、それでいてブリタニアを軽蔑するのか、はつきりと理解できた。

ただ、問題は、この本に書かれていることは本当に本当なのか、ということである。

「マリーカ、貴方は何か知らないのですか？」

「い、いえ……。私の家に伝わっている『王』の伝承と言うと、世間で知られているような姿ばかりで……」

『王』イコール国是。ブリタニア人ならば、それは常識と言っている。だがエリス嬢の書き残した『王』の姿は、国是からかけ離れたものだった。

護るために戦い、弱者にも優しく、敗者を差別しない――。国是の象徴とされた人物が、国是と真逆のことを行っていたのだ。

例えば『名誉ブリタニア人制度』だ。『王』がアイルランドを統合した際に作られたのがこの制度である。だが、『王』の考えた『名誉』とは、『正式』の前段階に過ぎない。

刑法上の扱いは同等で、公共福祉も公平に受けられる。『名誉税』というべき税が追加されていたものの、現状のブリタニアで生活する『名誉』の人たちからすればうらやましい限りであろう。

そして最大の違いは、提唱者である『王』の死によって果たされなかったが、望むものは『名誉』の称号を得て数年で正式なブリタニア人に成れたことである。

『リカルド・ヴァン・ブリタニアは、甥の遺産を強奪して革命を成し遂げるだろう』

回想録の最後の一文である。『王』の死後、わずか二年。それでもエリス嬢には今のブリタニアの姿が見えていたのだろう。

(もしかすると、アイザック將軍も……)

畏敬したかつての主が捻じ曲げられていく様子に絶望したからこそ、隠遁してしまったのではないか。さらには息子は大帝リカルドの寵臣の一人となり、その捻じ曲げられた思想に染まってしまった。

この回想録を信じるなら、そう考えられる。

「……とりあえず、これは口外を禁じます。今のブリタニアでこのことを口にするのは、あまりに危険ですから」

頷いたマリーカであったが、兄の後を追って軍に入り純血派に属す

るというこれまでの『当然』が、大きく揺らいだのも感じていた。

この件に関して、兄は頼りにできない。能力の問題ではなく、認識が自分と同じなのだ。つまり自分と同じ反応をするということは目に見えている。

ならば、と考えたマリーカは、一人の人物に連絡を取ってみようと考えた。

「ところでマリーカ。リアンヌ皇妃殺害事件のことを知っている人に、当てはないでしょうか？」

いきなり話を変えたユフィに、言われた方はどうしてそんなことを言われたのか分からなかった。コーネリアに聞けば誰よりも詳しい情報が手に入るだろう。

「…お姉様では駄目なのです。その、お姉様がどういう様子であったかとか、そういうことも知っている人がいいんですけど…」

ルルーシュとナナリーが皇族ということは、マリーカは聞いていない。しかし、『ルルーシュ』と『ナナリー』という名前に加えてユフィの態度やアツシュフォード家のことを考えれば、思うところはある。

主が秘密にしている以上、従者の分際で口出しするのを控えているというだけだ。

(となると、口の堅い人でないと…)

適役がいた。一時左遷されたが、今はちやうど租界に戻ってきていたはずだ。

「ジェレミア卿はいかかでしょうか？」

リフレイン事件で軍内の将校からも逮捕者が出て、その穴埋めで戻されたのである。失った信用を回復しきれたわけではないが、本人は大いに喜んでいた。

そして彼が「初めての任務がアリエス宮の警護だった」と言い、リアンヌ皇妃を護れなかった自分を恥じていたと、酔った際にこぼしたことを兄から聞いていた。

「では、機を見て話してみることになります」

ユフィに頓着はない。オレンジ疑惑も、証拠が何も出なかった以上

気にすることではなかった。

ただ、世間の目というものがある。政庁で呼び出すより、学園で会った方がいいかもしれない。ここなら、マリーカに兄の友人が様子を見に訪れたとすればよい。

ちよつと話を聞きたいだけ――。

これも、些細な一事に過ぎないはずだった。それが一人の人間の命運を大きく左右させることになるなど、誰も思っていなかったのである。

「だいたい、貴様がすべての元凶なのだ。この『オレンジ』め!!!」
 「な!!! オレンジ オレンジ と調べても何も出なかったことをまだ言うか
 !... 当然のことだ。このジェレミア・ゴツドバルト、不正などは無
 縁なのだからな」

『純血派』の領袖が言い合う。ツルガシマではこれが毎日のことであつたが、トウキョウ租界に戻つてきても変わらずか、とヴィレッタ・ヌウは二人にわからないところでため息をついた。

純血派と言えば「選民意識で凝り固まつている石頭」という批判もあるが、美点もある。出世目的の加入者はともかく、本気で思想に賛同する者は国家及びその象徴である皇室に対して、人一倍忠誠心が強いのだ。

ゆえに、不正を憎む心も人一倍強い。出世目的だった連中は皆抜けてしまったことも幸いして、リフレイン事件での綱紀粛正にも足をすくわれることがなかった。

それがコーネリアに評価され、どん底にあつた純血派にも少し陽が差してきたというのがこのところの状況なのである。

：ただ、それがキューエルには不満らしい。オレンジ事件さえなければもつと評価されていたはずだというのはもつともな言い分であつて、さすがのジェレミアも分が悪い。

もう一つの純血派にとつての陽光は、キューエルの妹のマリーカがユーフェミアの従卒になつたことだ。キューエル自慢の妹であり、うまくいけば皇女殿下の騎士になれるかもしれない。

そして、そこで無理強いしないところも純血派の美点であつた。決して、皇女殿下に意志を押し付けるような真似はしない。簡単に言えば、滅私奉公が純血派の忠義なのである。

例えば今回のことなら、マリーカが皇女殿下の騎士に「なつてくれればいい」とは思うが、皇女殿下の意思が違ふところにあるとなれば、黙つてそれを受け入れる。

「まだ未熟とはいえ、マリーカの素質は本物だ。驕ることなく志尚を

忘れなければ、ラウンズにもなれるかもしれん。……『王』以来ブリタニアに忠誠を尽くしてきた、わが家の誇りとなるだろう」

畏れ多くも『王』の妹である『マリーシャ』に似せて名付けられた以上、そうなるてもらわねば困るのだ。今のところ、士官学校の成績はトップクラスの優秀さなので、家族の期待には十分応えてきた。

このまま行けば陸戦操機科の首席も夢ではなく、なのにその士官学校を捨てアッシュフォード学園に転校することになったのは残念であったものの、家族は批難しなかった。

実技関係の単位は充分だったので、あとの単位は一般学校で取っても士官学校卒と同等に扱われる。なにより、皇女殿下のためである。むしろ誇るべき自己犠牲というものだ。

……まさか、皇女殿下に対する忠誠が全くなかったとは言わないが、惚れた男に対する追っかけというのが転校を決めた大きな理由などとは、家族は夢にも思っていない。

その妹から、つい先ほど重大な連絡があったのである。「ユーフェミア皇女殿下がジェレミア卿と内々に会いたいと仰られました」

こう言われて、キューエルは言葉を失った。何故ジェレミアなのか。それについて妹の答えは「殿下のご意向ですから」とそっけないものだった。

兄は不満だろうとマリーカも思ったが、事が皇室に関わることなので明言できない。とにかく目立たぬよう、内密にアッシュフォード学園を訪れてほしいことは伝えた。

それを聞いたジェレミアは号泣するほど喜び、そこに不満不服なキューエルがつかかり、結果ヴィレッタがため息をつく、という状況になったのである。

ブリタニアという国は、専制君主国でありながらある程度報道の自由が認められている。しかし、それはあくまでも権力者から許可された範囲における『ある程度』だ。

皇女から「取材、質問は政庁を通すように」と言われて、マスコミ

関係者は一斉に退散した。下手をすれば首が飛ぶことになりかねないからだ。しかも、「職を失う」の比喻ではなく、である。

それゆえ、アツシユフオード学園の周りにマスコミの姿は見えず、普段と変わらない。学園に迷惑をかけたくないという配慮であることはもちろんだが、ルルーシユとナナリーの姿を隠すためでもある。とはいっても、軍人、しかも落ち目にあつた純血派が皇女殿下の元に参加となれば、目立たない筈はない。友人の妹に会いに来たと言っても、それは名目に過ぎないと誰もが思うだろう。

思い悩んだジェレミアは、もう一つ理由を加えることにした。

「……………」

ドアの前で、大きく深呼吸する。これは恥ではない。貴族としての、騎士としての誇りのため、どうしても必要な行為なのだと自分に言い聞かせ、ドアノブに手をかけようとした瞬間…。

「あれ〜？こんなところで何をしているんですか、ジェレミア卿」

驚いた猫が全身の毛を逆立てたかのごとく、ジェレミアが体を震わせる。

「ロ、ロイド!?!い、いや、やましいことなど何もないぞ!ただ、少々、枢木准尉に用があつてだな…」

それを聞いたロイドが、いつもの人の悪い笑みを浮かべて「ああ〜」と頷いた。

何にせよ、クロヴィス暗殺の一件でスザクは誤認逮捕されたことは間違いない。そしてその主導者はジェレミアであつたのも動かぬ事実である。

間違いは謝罪する。誇りある者として、当然のことだ。だが相手が『イレヴン』であることに葛藤しているうちにオレンジ疑惑で逮捕されてしまい、ようやく許されたと思つたら今度はツルガシマに向向だ。

今更という感はあるが、だからと言って何もせず済ましてしまうわけにもいかない。

「それでスザク君を…。でもご〜んねん。彼、今日はまだ学校なんですよ」

「そ、そうか！では学校の方に行くのでしょうか…」

ジェレミアにとって、より良い状況になった。このついでにマリカの様子を見に寄ると称して校内に入るつもりだったのが、正当な理由ができたのだ。

謝りに来たというのにやけに喜色にあふれた声を聞いて、ロイドは「はて…？」と首をかしげた。

「謝罪の言葉、お受けしました。もはや、小官に意趣などございません」

行為そのものは、あつけなく終わった。学園を訪れる名目に使ったのは事実で、こんなことがなければ踏ん切りがつかなかったのも間違いないが、言葉に込められた心は真実である。

ちなみにジェレミアは三階級降格で一ナイトメアパイロットからやり直すことになったものの、それはスザクに何ら責があるものではない。

（むしろ策謀を弄した自分に罰が当たったと言うべきだろう。やはり私は、正々堂々と戦うのが性に合っている。そして憎むべきは、ゼロ！！！！）

そして、運命のいたずらというのはこういうことを言うのだろう。そこに、スザクを探していたルルーシュがやってきたのである。力仕事で彼の手が必要になったのだ。

「スザク、こんなところにいたのか…。会長が呼んで…」

友人が話していたのが純血派の軍人、しかも自分が嵌めた男だと気づいて、ルルーシュが固まった。そして、彼の姿を見たジェレミアも固まったのである。

「似ている…」

呆然と、ジェレミアがつぶやく。何がどうなっているのか理解できないがとにかくまずいと思い踵を返そうとしたルルーシュであったが、それより素早く動かれ、がっちりと肩を掴まれた。

「貴公、名は？名は何と申される？」

「名前？…いや、…その、しがない一庶民でして、辺境伯たる御方に名乗るような名は…」

興奮を隠さないジエレミアに、ルルーシュは目を合わせようとすらない。そして彼らしくない謙遜に、ついスザクは口を出してしまっただ。

「何下手にへりくだってるのさ、ルルーシュ…」

「ば、馬鹿!!!」

叫んだルルーシュであったが、もう遅い。『ルルーシュ』という名を聞いたジエレミアは、肩を震わせて言った。

「やはり…、マリアンヌ様の御遺児の、ルルーシュ殿下…?」

「…えーとですね、…どこから説明したらよろしいですか?」

皇女殿下相手に不敬とは思いながら、ジエレミアとしては問い質さずにはいられない。逆にルルーシュは何でこんな面倒な奴を呼んだんだと仏頂面を崩さず、無言でユフィを咎めていた。

その二人と、困惑するユフィとを交互に見て、口を滑らせたスザクは立場を小さくしていた。それに加えてナナリーとマリーカの二人もこの場と呼ばれたが、何も言いだせる雰囲気ではなかったのだ。ただ黙っている。

とりあえずあの戦争の後からのルルーシュとナナリーの境遇をかいっつまんで説明し、皇族として復帰したくないという思いも伝える。

その不信の原因がマリアンヌ皇妃の殺害事件にあるというので、今度はジエレミアが話す番となった。

「……私は軍人として初めての任務で、アリエス宮の警護に当たっていました。そしてあの日、あの夜に限って上からの指示で警備は最低限の人数にせよ、と申しつけられていたのです」

その人数では、とても何かあった場合に対応しきれない。そう思ったジエレミアは果敢に責任者であるコーネリアに具申したが、聞き入れられなかったのだという。

「……なら、コーネリアはやはり怪しいということになる」

「お兄様!!!」

姉への不信を言い切ったルルーシュをナナリーが咎めるが、これだけは彼も譲らない。

「いえ、コーネリア様も苦渋の表情でした。私の具申に対し、『わかっているが、マリアンヌ様が望まれないのでは仕方あるまい』とおっしゃられましたから」

それに対しジェレミアは、コーネリアの黒幕説をきっぱりと否定する。その様子が演技だったとは、彼は微塵も考えていなかった。

「……となると、その晩マリアンヌ様は人払いをしたい理由があった、ということですね」

何かをしたかったのか、あるいは誰かと会いたかったのか。とにかく人に知られたくない事があり、その最中に賊に襲われた。コーネリアが黒幕でないとすれば、そうなる。

「ではどうして賊はその日を狙ってきた？あまりにタイミングが良すぎる…」

賊は全員が逃げ果せ、容疑者すら浮かんでこない。目立たぬように少数で忍び込んだのだろう。アリエス宮の構造や警備状況を把握していなければ、そんな無謀はできるはずがない。

考えられることは、内通者がいたということだ。庶民から騎士候になり、そして皇妃にまで上り詰めたマリアンヌに対する風当たりは強かった。

「それは私にもわかりません。ただ、コーネリア様を始め、あの場にいる者の誰一人として、マリアンヌ様に害意を抱くような者はおりませんでした」

手薄にしなくてはならないということで、コーネリアは徹底的に有能かつ信用できる者だけを集めたのだ。だから、その中には責務を果たせなかった無念の余り自死を考えた者もいる。

ジェレミアも、その一人だった。しかしルルーシュとナナリーという二人の子供がいた。何としても二人を守り抜くことこそ本当の忠義と考え、思いとどまったのだ。

だがその思いも二人が人質として日本に送られてしまい、その上戦火に巻き込まれて死亡という報告を受け、絶望の底に叩き落された。

「…その情報が信じられなかった、いや、信じたくなかった私はなおもずるずると生き恥を晒してきたわけですが…」

辺境伯という高位の爵位を持つ貴族。世間一般からはうらやましがられるだけであろう人生を、ジェレミアは『生き恥』と切つて捨てた。それだけ彼はマリアンヌ皇妃に心酔していたのだ。

「生きていてよかった……。今は、心の底からそう思います」

ついにジェレミアは泣き崩れる。その場に、彼の忠誠を疑うものは誰もいなかった。

「……………」

「どうした？ やけに真剣な顔だな」

C・Cの言葉をわずらわしく思ったルルーシュであったが、放つておいた。そんなことより、心の中を整理するほうが優先されたからだ。

ジェレミアの言葉を信じるなら、コーネリアは母の殺害に無関係ということになる。その点を問い質したいから彼女を狙っていたのに、これでは撃とうと思った瞬間に的を移されたような気分だ。

ただ、ジェレミアがうまく騙されたという可能性も捨てきれない。やはりコーネリアには相対し、ギアスを使つても真実を聞き出すしかないだろう。

(…それに、俺が本当に戦うべき相手はコーネリアではない)

撃つべき相手は、父親だ。あの男が存在する限り、ゼロの仮面は必要だった。

(いったい何が耳に入ったんだろう…)

コーネリアから直々に呼び出され、びくつきながらマリーカは演習場に向かう。従卒としての仕事は、まあ無難にこなしている。コーネリアの基準からは少々馴れ馴れしすぎるだろうが、それは主人の意向だ。

だが、コーネリアの耳に入ったら大目玉を食らいそうなことならある。例えばユファイが料理を教えてほしいと言ってきたことがあり、断りきれず教えたことがある。

それは、コーネリアには容認しがたいことだ。彼女にとって『料理をする』という行為は料理人の仕事であって、皇女の仕事ではない。しかもそれが隣の男に対する差し入れだったと知ったら、激怒などというレベルで済むかも怪しかった。

ちなみに内容はサンドイッチとコーヒーという簡単なものであったが、相手は泣きそうなほど喜んでくれたらしい。

「一体何だろう？僕たち二人を呼び出すなんて…」

その隣の男が言う。名誉ブリタニア人でありながら、最新鋭のナイトメアを駆る存在。マリーカが受けた指示とは、スザクと一緒に演習場に来いというものだった。

「でも珍しいです。お姉様がスザクを名指しで呼び立てるなんて」

そして何故ユーフェミア様までいる、とマリーカはツツコみたくなった。現在、特派のトレーラーで演習場に向かっているのだが、あまりにも自然に、誰にも疑問を持たれることなく乗り込んでいたのである。

改めて考えてみれば、奇妙な光景であった。

ブリタニアの皇女と名誉ブリタニア人が仲良く話していて、それを純血派のはずだった自分が全く奇異に思わない。ごくごく自然に、この空気に溶け込んでしまっていた。

(最近、ショックなことが多かったから…)

軍人になるという目標は変わってないが、純血派に参加するという

意識が薄れている。『エリスの回想録』とユフィの天真爛漫さの中で
られた、と言つていいだろう。

「よお、やっと来たな」

コーネリアの隣にいる人を見て、マリーカはこの状況がどうい
となのか理解した。しかし、先日連絡を取ったばかりなのにもうここ
にいるというのは、いくらなんでも行動が軽すぎる。

「お久しぶりです…、エニアグラム卿…」

本当は、「エリアーにまで来ちゃったんですか？」と言いたいところ
だ。しかしこちらは見習いの軍人、相手は雲の上の人とあっては、
ため息も呑みこまざるを得ない。

それが、相手には不満だったらしい。

「マリーカ、なに固くなってるんだ？『ノネット姉さん』と呼んでいた
頃のかわいいお前はどこいった？」

ヘッドロックをかけられた上頭をグリグリやられ痛がるマリーカ
に、この人は「姉さんと呼ぶまでやめてやらん」とさらに力を込める。

「……オホン、もういいですか、エニアグラム卿」

コーネリアにしては、珍しく弱腰な態度だった。咳払いで流れを断
ち切る、などという配慮をすること自体、スザクには考えられないこ
とである。

「……まったく、殿下もお堅いことで。私の『妹』たちはどうにも真面
目すぎますね」

スザクには、全く話が見えない。コーネリアさえも『妹』と言うこ
の人が何者なのか知らないスザクは、ただきよんとしているしかな
かった。

「卿がこのエリアーに来るとは聞いていませんでした。『ナイトオ
ブナイン』ノネット・エニアグラム卿」

「これはユーフェミア様。久しくお目にかからぬうちに、ご立派にな
られまして…」

背格好のことだけではない。先のリフレイン事件でのユフィの対
応は、賛否両論あるにせよ大きな話題になった。そしてノネットは、

どちらかと言えば賛成派であった。

意外なことである。『弱肉強食』を標榜するブリタニア皇帝直属の騎士であるラウンズが、弱者救済を考えたユファイに好意を持っている、というのだから。

「…まあ、ラウンズは奔放だからな。それに殿下の妹君だ。よい結果に終わってほしいと思うのは、当然のことだろう?」

話を聞けば、コーネリアは士官学校の後輩なのだという。卒業後も個人的な付き合いがあり、だからユファイとも面識があった。

「それで、ラウンズがこの地に来たとなると、やはり皇帝陛下の勅命で…」

エリアーで、コーネリアが意外に苦戦している。本国にいて報告だけで状況を判断している人なら、そう思うのも無理はない。

その声が皇帝に届きラウンズの派遣に繋がったとなれば、コーネリアが解任されることも十分あり得る。それがユファイの心配だったが、相手は拍子抜けするほどあっさり言う。

「違いますよ。私の方から許可をいただいて来たのですから」

皇帝の、コーネリアに対する信頼は全く揺らいでないらしい。であれば、どうしてラウンズの派遣という大事に繋がったのか。その疑問に対して、この人はあっさり答えた。

「なあに、特派で開発中の機体、…ランスロットだったか?それがすごい性能だと言うので、これは一度手合せしなくてはと思ってな」

そしてその思いを、皇帝に率直に言ったという。専用機まで伴ってのラウンズ派遣にしては、あまりにも軽い理由だった。

「スザク君、準備はいい?」

「…はい」

若干乗り気ではないスザクに対し、特派の皆は大乗り気だった。理由はノネットの機体である。ラウンズ専用機とランスロットの戦闘データが取れるというので、ロイドなどは子供のようにはしゃいでいる。

「いつやく、まさか稼働しているところを見れるなんてね。第六世代ナイトメア『ヨーヴィル』!」

ナイトメアの開発において、第六世代は「不在の世代」と言われる。第五世代が一つの完成形としてあり、それを越えようと試行錯誤を繰り返したが成果は挙がらず、設計や実験機の段階で終わったのだ。

この『ヨーヴィル』も、その一機である。グロースター以上の近接戦闘力だけを追求し、遠隔攻撃能力は皆無に近い。しかも機体を軽くすることで機動力を確保したため、装甲が非常に薄い。

他のすべてを捨てて攻撃に特化させたという、とにかく扱いがピーキーな機体である。汎用機としては完全に落第だ。

『だからと言って甘く見るなよ。幾度も共に戦場を駆けた、私の愛馬なんだからな』

実験機でしかなかった、逆に言えば実験機だからこそそんな無茶なコンセプトで設計された『ヨーヴィル』だったが、それをノネットは買ったのだ。

『さあ、行くぞ!!!』

ヨーヴィルの主武装は、両手に持った二本のランス。それはグロースターで使われている大型ランスを細身にしただけであり、別段驚くものではない。

スザクと特派の研究者たちを驚かせたのは、ヨーヴィルの異常な加速力だった。そのスピードは、ランスロットと比較しても遜色ない。

(速い!!!)

二本の槍に対し、スザクも二刀流で迎え撃つ。相手が得意とする近接戦での真っ向勝負を選んだのだ。

それは、騎士道とか武士道によるものではない。単純にスザクが不器用極まりないやり方しか選べないという性格なだけである。

『蒼』ならば、相手の得意とする近接戦は避けただろう。ゼロなら、そもそも一騎討ちという状況を作らないに違いない。

目的を『勝つ』という一点に絞れば、明らかにそちらの方が効率的だ。だがスザクとしては、何よりも正々堂々と戦いたい。その上での勝利こそ、本当の価値があると思っている。

二本の槍と二本の剣が、切り結ぶ。二刀流のメリットは何と云っても手数が多さだ。片手で攻撃する動作が、次のもう一方の手による攻

撃の準備となる。

(さすが、ナイトオブラウンズ…)

帝国最強の騎士と言うだけのことはある。しかし戦えない相手ではなかった。小手調べは全て防いだのだ。

『お前、やるな。噂のランスロットの性能を差し引いても、私と討ち合えるほど腕のたつ奴などそうはいないのだからな』

ラウンズの番号は、強さの順ではない。さすがに『ナイトオブワン』だけは別格であるものの、それ以外は単純に好きな番号をいただいただけである。

そしてノネットは現ラウンズの中でナイトオブワンに次ぐ古株であり、その実力は他ラウンズからも一目置かれている。

『謙遜しなくていいぞ。ヴァインベルグの四男坊やアールストレイムのお嬢をラウンズにという話があったが、私はお前を推挙したくなってきたぞ』

「それは光栄です…ね!!!」

今度はスザクが仕掛ける。ランスと剣。懐に潜り込めれば、勝機はある。

『甘いぞ!!!』

とはいえ、簡単にそれを許すような相手ではない。片手の隙を、もう一方の手と足捌きで絶妙にカバーしていた。

一度引く。しかしそこに追撃が来る。だがそれはスザクの予想通りで、狙い澄ましたMVSが右手のランスを弾き飛ばした。

「なっ!!!」

だが、次に驚愕したのはスザクの方であった。ノネットは間合いを離すどころか、逆に左手のランスまで捨ててランスロットに密着してきたのだから。

膝蹴りをまともに受け、ランスロットが揺さぶられる。体勢を立て直しながら、後退。そこにヨーヴィルは腰の剣を抜き、斬りこむ。

その斬撃をかわす。スザクの脳裏に、あの時の光景が横切った。相手にしていたのは、グロースター。この太刀筋は、ここから――。

『もらったあ!!!』

ノータイムで突きが派生する。それに対しスザクは無理矢理機体を旋回させ、倒れこみながらぎりぎり回避した。と同時に、めくらめつぼうにMVSを振り上げる。

「戦闘終了。勝者、ランスロット」

模擬戦終了のアラームと、セシルの声が響く。MVSは、ヨーヴェルのコクピットにぶつかっていた。

「むむむ…。私が負けるとは…」

「実戦なら僕の負けです」

ヨーヴェルの各所には格闘戦用の隠しナイフが搭載されている。あの膝蹴りの際にそれを展開していたら、ランスロットもスザクも無事では済まなかっただろう。

「それはお前だつて同じじゃないか。剣の振動機構をOFFにしたまま戦っていたのだから」

MVSの高周波振動とまともに撃ちあえる武器はない。いくら受け流そうが、刃に触れば削り取られる。実戦だったら、ヨーヴェルの槍はぼろぼろになっていただろう。

「ええい、負けた負けたー!!!」

全てを振り払うように、ノネットが叫ぶ。しかし、最後の機動は相手に感嘆すると同時に無念だったのか、それについてだけは未練がましく言われた。

「あれを初見で避ける奴なんて初めてだぞ。ビスマルクの旦那から初めて一本取った、私の切り札だったのに…」

「いえ、二度目でしたけど…」

初見では、避けきれなかった。『蒼』と戦った記憶がああ瞬間に蘇ったから、何とか避けられたのだ。

スザクはただありのままを、何となく言ったに過ぎない。しかしそれを聞いたノネットは、恐ろしく真剣な表情で考え込んだ。

『蒼』が、あれを使った…?…:…:…:…:…:…:…:。まあ、考えられないことはないが…」

『剣』という武器の括りがある以上、同じような技を思いつくという可

能性はある。ただ、ノネットの動きは『蒼』そっくりだった。

同じ剣術を学んだ、と考えるべきだろう。ラウンズとレジスタンスという二人であるが、立ち会ったスザクはそれほど不自然だとは感じていなかった。

「何故なら、エニアグラム卿も日本剣術を学んでますよね？」

西洋剣術は、多くが剣と盾を左右に持つ。それに対し日本剣術は一刀を両手持ちだ。当然の結果として、足さばきなどの動きに違いが出る。

ノネットのナイトメア操縦にも日本剣術独特の動きが取り入れられていたことを、スザクは感じ取っていたのである。

「……あー、うん、私の剣術は、先祖が書き残してくれたものを学んだだけでな」

それを基本に、ランスの二刀流（二槍流？）はある人へのあこがれがきっかけで取り入れたという。その人は日本剣術とは関係ないので、あるとしたらそれは先祖の方になる。

その先祖は、兄とその親友が工夫を重ねた剣術を記録した。問題は、その兄と親友が誰だったか、ということである。

「その兄の名は、ユーイン・エニアグラム。『王』の騎士であり、無二の友だった男だよ」

そこまでは、コーネリアやユファイ、マリーカなどは知っている。しかしそれが日本剣術とどうつながるか、ということは、エリスの回想録を知っている二人以外にはわからない。

「その兄に『王』から下賜されたものが、日本刀だったからな……」
「は……？」

ノネットの爆弾発言に、スザク以上にコーネリアやロイドたちが驚いた。国是の象徴と日本に繋がりがするなど、普通のブリタニア人には考えられない。しかも、当時の日本は鎖国中だ。

「何かのきっかけで手に入れたという事は？例えば、オランダ経由で……」

当時のオランダは、日本と国交のある唯一の西洋諸国だった。そしてナポレオンに占領されていた時期とも重なる。

ロイドの言う通り、亡命した人が『王』に日本の品や知識を伝えたというのも、考えられないことではない。

「まあ、な…」

そう言っつてノネットはマリーカをちらりと見る。それを自ら確かめることが、ノネットがわざわざこの地までやってきた理由の一つである。

「…さて、次はマリーカだな」

『王』についてはここまで、と言外に言い、ノネットがマリーカに声をかける。だが、かけられた方は何をすればいいのか、まったくわからない。

「…あのー、それで、私は何のために呼ばれたのですか？」

最悪、コーネリアに手ずから成敗されるかもしれないと思っていたマリーカだが、どうやらそれはなさそうだった。単純に、ノネットがコーネリアを通して呼び出したのだろう。

だが『王』についてのことなら、わざわざ演習場まで呼び出す意義はない。そのマリーカの疑問に対し、ノネットはこともなげに答えた。

「ん、何を言っている？ ナイトメアの腕は陸戦操機科で評判だと聞いたので、なら久しぶりに見てやろうと思ったのだが…」

「は？」

「…：親衛隊からグロースターを一機貸そう。お前はそれに乗り、模擬戦を行え」

その後、マリーカがボコボコにされたことは言うまでもない。

「はつきり申し上げますと、日本解放戦線の装備は旧態依然。コーネリアの親衛隊とまともに戦って、勝ち目があると思えません」

齒に衣着せず言い切ったルーミリアに、ト部も返す言葉がない。『ライ』という存在を至上のものとして考えれば、天叢雲を解放戦線のために使い潰すという選択肢は存在しない。

「それにあの白いナイトメアに加えて、『ナイトオブナイン』が専用機まで持ってやって来たというではありませんか。いくらライさんとカレンさんのグロースターでも、止められるものではありません」

考えれば考えるほど、状況は暗い。ここまで順調に戦力を伸ばしてきた『天叢雲』も、コーネリアの親衛隊と比較すればまだまだ遠く及ばない。

「…や、やってみなくちゃわからないでしょ？勝てないって決まってるわけじゃ…」

「精神論は戦場での禁句です。そんなことを前提として戦うなど、呆れすら通り越す愚行です」

ルーミリアにペしゃんこに押しつぶされ、カレンも黙り込むしかない。しかし、ライに言われたのならすすんり受け入れられる言葉も、この女に言われるとどうにも腹が立つ。

そのライは、この軍議の行方を黙って聞いているだけだった。

『コーネリアの全面攻勢を迎え撃つため、日本も総力を結集する必要がある。諸君には、我ら解放戦線と協同してこの難局に当たることを望む』

日本解放戦線の片瀬少将から、援軍の要請が来たのである。

コーネリアの攻勢は予想できていたことだった。むしろ、リフレイン事件のため遅れたほどだ。軍内の綱紀肅正とそれに伴う立て直しが一段落したということだろう。

「だが、解放戦線は同じ日本のために戦う同志だ。援軍要請となれば、応じないわけにもいかないだろう」

言い返したのは扇である。『日本のため』と考えれば、彼の意見は常

識であった。

ルーミアとて、わかってないわけではない。『日本』という存在を神聖視して天叢雲が道を誤るのを防ぐためなら、憎まれ役も買ってやろうというだけだ。

しかし、言ってることは嘘ではない。日本側のナイトメア主戦力は、グラスゴーを改造した『無頼』。良馬相手に駄馬で競争を挑むようなものである。

「ですから要請は受諾し、可能な限り損害を抑え撤退する。可能ならば、コーネリアの親衛隊を狙い一機でも多く戦力を削いでおく。これが基本方針だと思いますが…」

最も合理的に考え想定された方針。例え日本を見捨てるような選択肢でも、あえて口にするのが自分の役割だとルーミアは思っている。

それで、『日本人』が自分を恨むならそれでいい。頂点に立つ者は、決して恨まれてはならないのだから。

「それしかない、っていうのは認めるんだがな…」

正規の軍人である卜部達にも、理解はできる。必ず負けるのなら、自分たちの力は温存する。その中でわずかなきらめきを見せておけばいい。

ただ、同志を見捨てると言うのが、快いはずがなかった。

そして解放戦線が無くなれば、コーネリアが勢いづく。情勢は非常に厳しいものになるだろう。

せつかく手に入れたユーフェミアとのつながりも、こと軍事に関しては何の意味もない。エリアーではコーネリアが軍事関係のすべてを握っているし、あからさまにテロリストの味方をさせたら彼女の立場が無くなる。

「やはり、敵わないまでも…」

扇が発言しようとしたが、それを遮るように廊下からどたと音が響く。何だと思いい皆がドアに注目した瞬間、電子ロックが解除されドアが開く。

「お義兄様——完成しましたわー!!!」

会議中の部屋に飛び込んできたのは、神楽耶だった。

全員が、あつけにとられる。ライですら神楽耶がやってくるなど聞いてなかったのも、この状況が理解できるはずもない。

動じてないのは、ネージュだけだった。いつものことだが、彼女はめつたなことでは口出ししない。逆に言えば、ネージュが口を出すようなことは皆が見逃している重要なことなのである。

「とりあえずハンガーまで来てくださいます。お義兄様も、きつと気に入ると思いますわ」

よくわからないという表情のままのライの手を引っ張り、連れて行くこうとする。会議中だと言っても、それにも関わる重大なことなのでと言って聞いてくれない。

「揃っているのですしたら丁度よろしいでしょう。皆、来てくださいます」

やむなく幹部がそろってナイトメアが格納されているハンガーまで行くことになったが、そこに運び込まれていたものを見た瞬間、困惑が驚愕に変わった。

「これって…」

赤と青に塗装された、二機のナイトメア。だがこれまでのサザールンドやグロースターとは全く違う、見たこともないフォルムの機体だった。

「赤い方は『紅蓮式式』。青い方は『月下参式』の先行試作機ですわ」

何より目を引くのが赤い方は右手、青い方は左手の大爪である。左右のバランスが崩れるのではないかというほど大きく、異様な存在感を発していた。

「それは輻射波動。高周波によって発生した熱量で敵を爆破膨張させる…、要は強力な電子レンジってと…こ…ろ」

「紹介しますわ。この人はラクシャータ・チャウラー。中華連邦・インド軍区出身の技術者で、この紅蓮と月下の開発者ですわ」

紹介に与ったラクシャータはキセルを揺らしながら、ライとカレンを値踏みするようにじろじろ眺めまわす。

「まさか、こんなかわいらしい坊やお嬢ちゃんだったなんてねえ…」

データからじゃ、想像もできなかったわ…」

「え？それじゃあ、この二機は…」

もちろん、ライとカレンの乗機となるために作られたのである。赤と青のカラーリングになっているのも、それに合わせて神楽耶が手配したからだった。

「基本スペックならグロースター以上よ。後はマニュアルを見てね。…それと、客室を貸してくれない？」

「ここ一週間ほど、ろくに寝ていないのだと言う。当初は紅蓮一機のはずだった。それを神楽耶が無茶を言つて月下も突貫で作らせたのだ。」

「まあ、基礎設計は一緒だからそこまで手間じゃなかったけど」

最大の差は、輻射波動。これを搭載することが前提であるのが紅蓮式式であり、腕パーツの換装によつて切り替えを可能にしたのが月下である。

「輻射波動は強力な兵器ですが、お義兄様はそれに囚われない運用ができる方が良いと思つたのです」

ついでに、指揮のことも考え操縦席もシート型にしたという。操縦時の一体感バイク型の方が勝るが、キー操作などはシート型の方がやりやすい。

そういう融通は紅蓮だと効かないので、神楽耶は設計段階だった新型も開発してもらつたのである。

「お二人がこれに乗れば、あの白いナイトメア…、ランスロットと言うらしいですが、あれにも決して負けません」

スペックで言えば、紅蓮も月下もブリタニアの第七世代ナイトメア相当。つまりランスロットと同等である。心強い専門家が仲間に入ったと思うが、本人は少々複雑そうな表情で答える。

「アタシの専門は医療関係でナイトメアは副業なんだけど…。まあいいわね。満足してくれた？それじゃ、これからヨ・ロ・シ・クね」

最後にそれだけ言つて、ラクシャータは消えた。案内された客室に入るなりベッドに飛び込み、次の瞬間には寝ていたという。

「でも、いくら紅蓮と月下が強くて、二機だけで勝てるようになると

は思えないけど…」

ネージュの言葉に、ぐつと神楽耶が言葉に詰まる。言う通りなのだが、それ以上にこの少女は苦手なのだ。自分より年下にしか見えないのに、全てを見透かしているように感じてしまう。

「…りよ、量産化の計画は着々と進んでおりますわ。ですが、今回は間に合いませんでしたので、こちらを用意いたしました」

紅蓮と月下以外にも、運び込まれていた荷があった。その中身は、『無頼改』。

「十機を運び込ませました。解放戦線にも同数。黒の騎士団にも、五機を渡しました」

ちなみに月下の量産化が進んでも、無頼改の製造は続けるらしい。無頼はブリタニアのナイトメアを改造したもので、パーツが入りやすくコストも低く抑えられるのである。

「ここでコーネリアの鋭鋒を砕ければ、流れが大きく変わります。そのため、ありったけの無頼改も投入します」

すでに「NACCキョウト」ではないかとブリタニアには怪しまれている。であれば、多少大胆なことをしても大差はない。そう考えた神楽耶は、博打に出たのである。

それでも、まだ戦力は足りない。ブリタニアの予想戦力を考えれば、質量ともに劣勢なままだ。

「……その点につきましては、ゼロに何か案があるそうです」

「ようこそお越しくださいました、『蒼』」

三日後、解放戦線のナリタ要塞を訪れたライを、片瀬が笑顔で迎え入れる。その傍らにはゼロの姿もあり、三組織のトップが一堂に会したのである。

「……この仮面はご容赦いただきたい。素顔を晒すのは、少々憚られる」

学生服で出席するような真似ができるはずもなく、ライの衣装は神楽耶考案の紺の生地模様銀糸で刺繍された軍服に、ロングコートのような上着を羽織るといふ形になっている。

そして顔の上半分を、バイザーのような仮面が隠していた。ちなみにこの仮面、マジックミラーであり視界を遮ることはない。

「こちらとて同じこと。よろしいですな、片瀬少将」

ゼロの同意に、片瀬も頷く。彼の方は頭部全体をすっぽり覆う仮面であり、批難する立場ではないことはわかりきっている。

軍議に参加するのは、何も三人だけではない。解放戦線側には副司令や参謀に藤堂の姿が見え、ライは卜部とカレンとルーミリアを連れてきている。

そしてゼロは元旭日隊の正木と土岐を従えていたが、もう一人が今の微妙な空気の原因となっていた。

「……………」

「……………」

「……………」

だれもが、あえて触れないようにしていた。女であるというのはいいとしよう。しかし『天叢雲』の制服を着たカレンとルーミリアに対し、ゴスロリ風の衣装というのは場違いとしか言いようがない。(……………違う。断じて、俺のせいではない)

皆からの批難のまなざしに、ルルーシユは心の中で思う。解放戦線および天叢雲幹部と会談するとC・C・に言ったら、何故か自分も参加すると言い出したのである。

C・C・も、最近はナイトメア操縦の勉強をしていた。なかなか筋は良く、黒の騎士団の戦力として大いに期待できた。

そういう理由もあって「騎士団員としても資格は充分だろう」と迫るC・C・の勢いに押し切られたのであるが、まさかゴスロリ服で現れるとは思っていなかった。

「いい加減スルーするのも限界なので言うが、ゼロ、いくらかわいい恋人だからとて、軍議の席だということを考えてもらいたい…」

「断じて違うぞ!!!この女は黒の騎士団の一員であってそういう関係でないことは、ここで明言する!それに恋人を連れてきたというのなら、お前に言われたくはない!!!」

「二人は僕の右腕と左腕だ!君こそ変なことを言うな!!!」

もはや軍議と言うより、漫才である。

「かわいい…、かわいい…、かわいい…」

そのC・C・はと言えば、真っ赤になって何かぼそぼそ呟いている。変なことを言いださない分は助かっていたが、どうしてこうなったのかルルーシユには全く理解できない。

(俺を困らせるために着てきた、というわけではないようだ…)

ちなみにこの服は、ルルーシユが選んだものだ。いつもの拘束衣しか着ず、「それでいい」と思っているC・C・に何となく腹が立ったのであるが、この時ばかりはやめておけばよかったと後悔した。

なお、彼の名誉のために言っておくと、そういう趣味はない。逆に興味がないから候補から除外することなく、単純に似合いそうな服として選んだものがこれだったのである。

「……オ、オホン。話を戻そう。……ここにいる者ならわかっているだろうが、我ら三組織が協同したとてコーネリアと正面から戦うのは非常に厳しい」

ゆえに、何か策が必要になる。その策は、すでにルルーシユの胸中にあつた。

「……ずいぶん大胆な作戦だな。しかし、決まれば効果的ではある」説明を受け、ト部が言う。大胆と言えば片瀬が何も言わないというのが、大胆すぎて意外だった。何しろ、この策を実行すれば間違いなくナリタ要塞は使用不能になるだろう。

「……何よりも優先するべきは、コーネリアを討つことである。要塞を死守しても損害ばかりが大きく、意義はない」

それどころか、初耳だったので反対した参謀たちを諭したのである。驚くというより、もはや違和感を感じるレベルだった。

その片瀬の目に異様な赤い光が宿っていたのに、気付いた者はいなかった。

「もちろん、解放戦線を根無し草にするつもりなどない。代償として我らの基地に迎え入れましょう」

このために、旭日隊の基地を拡張したのだ。名目は招き入れたとしても、主導権は自分が握る。あとはなし崩しに、黒の騎士団に取り込

んでいくだけだ。

(片瀬では持ち腐れにするだけだったからな。俺が、有意義に使ってやるさ)

そして解放戦線を取り込めば、すなわち日本最大の抵抗勢力となる。この戦争の主導権も、自分が握ることになるだろう。

それにしても、片瀬の能力については失望した。かなり低く見積もっていたにも関わらず、なお落胆させられたのである。

保身のため四聖剣の一人を手放すわ、ナリタ要塞を捨てる決断ができず今回の作戦に反対するわ、よくこれでやってこれたものだと思いに感心する。

仕方なくギアスで傀儡としたが、それが悪いと思う気持ちは全く湧いてこなかった。

(『奇跡の藤堂』とやらが、なぜこんな男の下で逼塞していたのか?)

ルルーシュには不思議でならない。彼が解放戦線の総指揮を執っていたら、歴史は大きく違っていただろう。あるいは、ゼロや蒼などという存在は必要なかったかもしれないのだ。

「……………」

その藤堂は無言を貫いたまま、賛成とも反対とも言わなかった。

「……………作戦自体には賛成する。しかし、どうやってこれを起こすのか、だが……………」

「その点については、『蒼』、貴方の同意が得られた時点でクリアされた。先日キョウトから渡された新型であれば、成功は疑いない」

こいつめ、とライは内心で舌打ちした。おそらく桐原たちが漏らしたのだろうが、紅蓮と月下のことは武装まで把握済みらしい。

「ならば『緋龍』を貸そう。…私はこの位置で待つ。問題はないだろうな?」

今度はルルーシュが内心で舌打ちした。ライが差した場所は、コーネリアが攻め込んでくる最も有力なルートの上。文句のつけようがない位置であり、やはりこの男は主導権を握られたまままで終わる相手ではない。

そして自らその位置を指定したという事は、コーネリアの親衛隊に

真っ先に斬り込むにはお前らでは力不足だ、と言っているようなものである。

コーネリアが情報通りトウキョウ租界を発した、と連絡が入る。決戦の時は、間近に迫っていた。

「準備は良いな？この作戦は、君が要なのだからな」
 「はい、はい」

ゼロの呼びかけに、カレンはぞんざいに返す。選択肢がそれしかなかったから納得はしたものの、当然やる気につながらない。

「カレン……。いくら『蒼』と一緒にやらないからって、少しはしやんとしてもらわないと……。私たちの命がかかってるんだからね」

二番隊に所属した井上からたしなめられる。それはわかつているのだが、『蒼』の刃となって先を駆けるのが『緋龍』であり、その先頭に立つのが自分の役目のはずだったのだ。

「はあ……。彼のことしか頭になくなつちやって……。ここまで恋愛脳に育てた覚えはないんだけど……」

恋する乙女は厄介だ、と井上は思う。そう言う彼女も同じような経験はしたはずだが、本人に言わせれば「ここまで酷くはなかった」らしい。

「しかし、兄貴がいなくなっても大丈夫そうで安心した。あいつからは、事あるごとに妹の愚痴を聞かされたからな」

それはつい先日までのカレンを知らないからそう言えるのだ、と井上は思う。朝倉は、ライが現れてからのカレンの姿しか知らない。

『蒼龍』と『緋龍』。ライとカレンが率いる天叢雲の最精鋭部隊である。赤と青の龍、という名前はテンプレートっぽくはあるが、カレンは気に入っていた。

何より、ライが親衛隊と対になる部隊の隊長に、自分を任命してくれたというのが嬉しい。それに専用にかスタムされていたとはいえ、紅蓮式式という専用機も真つ先に渡してくれたのだ。

やはり、戦場で彼と並び立てるのは自分しかない。そう思ったのに、その専用機が仇になるとは思ってもしなかった。

地面に埋められたパイルバンカー。これで輻射波動を地下水に伝え、沸騰させようというのだ。

沸騰した水は水蒸気となり、体積は一気に膨張する。それが地層を

破壊し、あとは斜面に沿って流れ落ちる。人工的に土砂崩れを発生させようというのである。

しかし、それを実現させるには輻射波動を持つ紅蓮か月下が必要になる。ライは天叢雲全軍を指揮しなくてはならないので、カレンの紅蓮がやるしかない。

「……始まったな。……逸るなよ。私が指示を出すまで待て」
麓から、全軍の展開を終えたブリタニア軍の攻撃が始まる。ついにコーネリアと激突する時が訪れたのだ。

「言つときますけど、私は仕方なくあんたに従つてやつてるの。私に命令していいのは、この世界で『蒼』だけなんだからね」

しかしその緊迫した状況にも関わらず、カレンはそう言ってしまった。

「始まったな」

「……私としては、ライさんが決戦に応じるというのが予想外でしたけど」

ライのつぶやきに、ルーミアが反応する。天叢雲主力は地下道を通り、ナリタ連山を囲むブリタニアの包囲網の外に出た。土砂崩れによる混乱に乗じて、背後から襲う構えだ。

残ったのが、カレン率いる『緋龍』と朝倉率いる二番隊である。ルーミアからすると、『合流するまで撤退しない』と同義である。
(まったく、カレンさんにだけ甘いんですから……)

自分にも、その十分の一でいいから関心を向けて欲しい。しかしそう言うとおそらくルーミアにも専用機を用意しようと考えてるのがこの人だ。

どうしてそつち方面にばかり考えるのか。『副官』としては至上の存在であると認められていると思うが、『女』としての認識は皆無だ。
(いつか、振り向かせて見せますから)

ちなみにルーミアの乗機は、遠距離狙撃用にカスタムしたサザーランドである。専用機はあればいいとは思いますが、ライのフォローを考えて狙撃というスタイルを選んだ以上、紅蓮を貰っても意味がない。

朝比奈に任せた北部は一進一退。東部の千葉は押されていた。

「やむを得ん。千葉には後退させろ」

全体を俯瞰しながら、藤堂は指示を下す。後退させたところには部隊を埋伏させてあるが、この時点で使うのは予定よりかなり早い。

だが、東部の先鋒はコーネリア親衛隊の分隊だという。それを考えると、潰走に至らないのは千葉の力によると言えた。

(東に五、南に十五、本陣に十五、旗下が二十…)

斥候と監視装置が確認した、コーネリア親衛隊のグロースターの数である。本陣の防衛に十五も割くというのは藤堂からすると遊兵と思えるが、おかげで助かっているのだから文句はない。

そして藤堂が受け持っているのは、南側のブリタニア軍主力である。コーネリアの腹心中の腹心であるダールトン将軍が、通常軍も率いて攻め込んできていた。

(ダールトン将軍相手なら、相手にとって不足はない)

ダールトンは七年前の日本占領時にも軍を率いて参戦しており、戦った経験がある。その際に彼の手腕がどれだけすぐれているのか理解した。

軍人としての性であろう。難敵に会うと、逆に高揚するのだ。

片瀬は前線の指揮を藤堂と四聖剣に一任し、自身は司令部から後方支援に徹するという。その決断も意外であったが、おかげで何の足枷もなく敵と向かい合える。

(今回は勝たせてもらうぞ、ダールトン)

敵を誘い込み、かつ土砂崩れに巻き込まれないように避難ルートを考え撤退する。今のところ、それは上手く行っていた。

「さて…、相手は『奇跡の藤堂』だろうが、何を考えているのやら…」
じりじりと押していく。一見優勢であるが、敵が防衛線を一点に向けて収束させるように動いているのに気付かぬほど、ダールトンもセラフィーナも馬鹿ではない。

「やはり引き込んで伏兵と罫で叩く…、それしかないと思いますが」
「そうなのだが、何か引つかかる」

セラフイーナは愚鈍ではない。が、その発想は常識を超えるものではない。その壁を越えられれば、とダールトンは思っていた。

むしろ、マーガレットの発想の方が飛躍する。ただ、彼女は彼女で軽率なところがあり、今も一気に押し込んでいたところを伏兵にあって後退を余儀なくされていた。

(二人合わせれば、ギルフォードにも劣らぬのだが…)

ダールトンは知っている。実はこの二人にコーネリアが囑目しているのは、どちらかをユフィの騎士にしたいからだ。男の親衛隊員を選ばなかったところに、コーネリアの心境が透けて見える。

ちなみに二人に囑目しているのはコーネリアだけではない。ダールトンは、養子たちの誰かの嫁になってくれれば、と別な意味で期待していた。

(戦災孤児を引き取って育て立派な軍人にしたまでは良かったが、あいつらには青春というものを教えられなかったからな…)

勝手な思いながら、ダールトンも二人は戦死させたくないのである。

「……考えているだけではがちが明かぬな。進むしかないだろう」

黒の騎士団および天叢雲全軍がナリタに入ったという情報は手に入れている。それなのに、どの戦線でも相手にしているのは解放戦線の部隊だけだ。

あのゼロと蒼が、ただの伏兵で収まるような策を考えているはずがない。もっと何か、想像もできないことを考えているはずだ。

しかし、どう考えても自軍に隙はない。サイタマゲットと違い、本陣はがちがちに固めた。何しろユーフェミアがいる。親衛隊から十五も割いたのは、そのためだ。

親衛隊以外の部隊も、駐屯軍から選抜した兵士で固めてある。どこに奇襲をかけてこようと、跳ね返す自信があった。

伏兵を破り、防衛兵器を破壊して、なおもじりじり進む。戦力は圧倒的にこちらが上なのだ。網を手繰るように追い込んでいけば、負けるはずがない。

やがて、一件の山荘にたどり着く。偽装だと睨んでいた建物だ。こ

ここから要塞内に突入し、一気に片づける。注意すべきは敵により、内外で分断されることだけだろう。

だが、この嫌な予感は何なのか。それがダールトンの心に、相変わらず引つかかっていた。

「…粘るな」

本隊の西の端。そこから攻め込むと決めたコーネリアだが、敵が最も重厚な防衛線を敷いていたところに当たったらしい。

しかし、それはそう予測したうえでこの道を選んだのであって、読み通りのことだ。外したのは、自身と親衛隊の中核なら突破できると思っていたことである。

ちなみにこの道を守る指揮官は、四聖剣の仙波だった。長年の戦場経験を活かし粘りに粘るその戦い方は、コーネリアが旗下に欲しいと思うほどのものである。

「…ダールトンはもう目標地点にまで達しているな。少々、侮りすぎたか…」

ここだけではないが、『無頼』ではない新型の姿も見える。それもコーネリアの予想の外にあった。グロースターでも、侮れない性能を持っている。

だがこれで、上を取ったダールトンと挟撃できる。敵がどう防ごうが、それには耐えきれまい。

あとは、ゼロと蒼の二人がどう介入してくるか。それさえ凌げば、この戦は勝ちだ。

……凌げれば、の話であった。

「よし、全ての準備は整った！これより我が部隊は、山頂より奇襲を敢行する。一気に駆け下りろ!!!」

「輻射波動、鎧袖伝達!!!」

ゼロの檄に合わせ、出番を待ちわびていたカレンの精神が一気に高揚する。だが同時に、軍議の後ライから受けていた極秘の指示も反芻していた。

「失敗した場合、紅蓮を先頭にして包囲網を破り、逃げろ」

いくら調査が正確でシミュレーターの成功率が高かろうが、実際にやってみない事にはわからない。だから、もし失敗したら「ゼロなど見捨てろ」と言ったのだ。

二人の間にある不協和音を感じながら、紅蓮の右手から弾けた閃光は地中に達し、やがて山を揺るがせた。

例えば数百機のナイトメアが現れようとも、ここまで驚くことはなかった。ブリタニア軍を襲ったものは、それよりはるかに原始的で、はるかに恐ろしいものだった。

「なっ!？」

ダールトンの部隊が、見る間に麓まで押し流されていく。いくらナイトメアフレームでも、膨大な土砂を相手にして踏みとどまれるはずもない。

幸いなことに、ダールトンとセラフィーナは間一髪で難を逃れた。だが情報が錯綜し、コーネリアにまで伝わらない。当然、敵のジャミングも行われているだろう。

「くそー麓から回り込むぞ」

コーネリアがいるのは、土砂崩れの反対側である。専用の装備がなければ、これは越えられない。敵の狙い通りコーネリア隊が孤立した。見事すぎて、忌々しいほどだ。

そして彼らに続いていた通常軍は、文字通りの壊滅だった。

「全軍、総力を挙げて撃って出よ!!」

片瀬の指示に、これまで隠されていたナリタ要塞の全武装および解放戦線の全兵力がブリタニア軍に襲いかかる。何が起きたかわからない上の猛攻が、ブリタニア軍の混乱に拍車をかけた。

だが、主力軍が潰えたのは大きいと言っても、損害を出したのは南だけだ。北と東は、動揺が収まるまでが勝負である。

(いた!!)

千葉はコーネリア親衛隊のグロースターの中で、指揮官の乗る機体をあやまたず狙う。それさえ倒せば、あとは勢いで押し切れるのだ。

「…なめないで、欲しいなっ」とー」

マーガレットのバルディッシュが、千葉の廻転刃刀と火花を散ら

す。一騎打ちなどしている場合ではないのだが、襲われた以上受けるしかない。

「あー、もう！姫様とおやつさんとセラちゃん危険なやつに!!!」
面倒な奴に当たった。そう思い舌打ちしたマーガレットだったが、敵の勢いは止めたのだ。

「……………!!!……………どちらか知らぬが、やってくれたな!」

噛み締めた唇から、血の味がする。人為的に土砂崩れを引き起こすなどということは、いくらコーネリアでも想定の中じゃない。

「全軍を後退させる!!!体勢を立て直す」

ギルフォードが素早く旗下の部隊を集合させる。これで終わるはずがない。ゼロにせよ蒼にせよ、狙うのは自分の首だけのはずだ。

「山頂付近に敵部隊発見！カリウス隊が迎撃に向かいました」

次の報告は、敵が黒の騎士団であるというもの。だがコーネリアは安堵していた。ゼロがこの斜面をまつすぐ自分に向かって下つてくるといふ事は、こここの滑落はない。

(となると問題は、蒼の方だ)

ユフィのいる本陣はアレックスに任せただから、この混乱の中襲われなくても耐えきるはずだ。東もマーガレットが何とかしてくるだろう。

最も危ういのが、通常部隊だけの北の戦線である。挟撃されたら持ちこたえられないであろう。そして、敵はその通りに動いていた。

どこに潜んでいたのか、ブリタニア軍の背後に敵の反応が現れた。ト部、村上、小笠原、小野寺のナイトメア部隊に解放戦線の増援を加えた部隊である。

「よし、出撃!!!」

ライの号令を受け、赤と青のグロースターを先頭にコーネリアの親衛隊に向かう。グロースター二機はこれまでライとカレンが乗っていたものだ。

当然、ブリタニア軍はそれが二人の乗機だと思うだろう。

(一度限りのフェイク、だが)

今の操縦者は、真田とネージュなのである。だが、ネージュが乗ると言ってきたのにはライも驚いた。一応『蒼龍』の隊員としてあるが、実のところライも使い道に困っていたのである。

彼女によると、「カレンの動きを真似できるのは私だけ」らしい。実力で考えれば納得いく。

第一の目標は、コーネリアの後方に位置する部隊。それは、純血派の一角が指揮する部隊だった。

「ジェレミア卿!!!」

「やはり来たな…。全機、迎え撃つぞ!!!」

ジェレミアの落ち着いた指示に、ヴィレッタは安堵して従う。黒の騎士団が現れたという報告が入った時は、持ち場を無視して突っ込むかと思っただのだ。

(ユーフェミア様に呼ばれてから、人が変わった…。いや、元に戻ったと言うべきか…)

元々、ラウンズの座も充分狙える優秀な人なのだ。アッシュフォード学園で何があったかは話してもらえなかったが、いい事があったのは間違いない。

「赤と青のグロースターか…。相手は『蒼』だな。……ふん、お前も仲間に入れてもらったらどうだ？オレンジ色の機体を用意してくれるかもしれないぞ」

「残念ながらキューエル卿、このジェレミア・ゴッドバルトが忠誠を尽くす相手は決まっているのでな」

キューエルの悪意が濃厚に含まれた冗談にも、冷静に返す。オレン

ジ事件の際の記憶がないと言っていたが、以後の記憶も失ったのではないかと思わせるほどの変わりぶりだった。

(何としても武勲をたて、殿下をお守りせねば…)

ジェレミアの考えていることは、忠誠の対象であるルルーシュやナナリーと違っていた。

彼らは「皇族であることを捨て、ひっそりと生きていきたい」と言う。だが、周囲はそれを許さないだろう。特にゼロや蒼に知られたら、何をしてくるかかわからない。

アツシユフオードとて、何かしら打算はあるはずだ。いくらマリアンヌに心酔していたからとしても、二人を一生涯かくまい続けるなどリスクばかりで得は何もない。

だから二人の希望には反するが、やはり皇族として復帰した方が安全である。

武勲で陛下からそれなりの領地と立場の保証を買う。隠棲した分家なら、謀略とは無縁に静かに暮らすこともできる。皇位継承権も二人が不要であると言うなら捨ててしまえばいい。

その上で担ぎ上げようとする貴族は、まずいないだろう。

それを、キューエルやヴィレッタに伝え純血派としての意思とするという事はしなかった。二人のことを知る人間が多いほど漏洩の危険は増すし、そもそも他人にはそこまでする理由がない。

これはあくまでもジェレミア・ゴッドバルト個人の問題であり、マリアンヌ皇妃に対する忠義なのである。

(ゼロか蒼の首を取れば、叶わない願いではないはずだ)

そのチャンスが、さっそくやって来た。だが『蒼』はシンジユクで完膚なきまでに負けた相手だ。あの無駄の一切ない操縦には、素直に敬服する。

(私としては、ゼロを相手にしたかったが…。まあいい。怨恨など、忠義の前では些細な事よ)

今度こそ、二人は守り抜く。そのためならば、いわれのない汚名だろうが甘受しよう。その思いでジェレミアは立ち直ったのである。

「先に行くわ」

真田を捨て置き、ネージュが赤のグロースターを加速させる。純血派部隊の発砲にも物怖じせず突っ込むというのは、確かにカレンの動きだった。

「……………よし、左から狙うぞ」

一瞬啞然とした後、真田はライならどうするかを考える。正面をカレンに任せ、左から一機ずつ叩く。それがライの取る戦い方のはずだ。

それにしても、ネージュには驚かされる。いや、驚くと言うより呆れると言うべきか。知らなければ、あのグロースターに乗っているのが明らかに場違いな幼女だとは誰も思うまい。

そのネージュの動きに気を取られた敵機に、ライフルの銃弾がヒットする。体勢が崩れたところにルーミリアの狙撃が命中し、一機を撃破した。

戦力は劣勢。それでも純血派の部隊はジェレミアの指揮の下果敢に応戦し、戦線を維持していた。厄介なのはやはりグロースターの存在と狙撃用の機体がどこかにいることだが、戦えない相手ではない。そして、それがジェレミアにしてみれば、おかしい事態なのである。

「……………むむむ」

違う。明らかに違う。ジェレミアはそう思った。青のグロースターの動きが、どう考えても鈍い。『蒼』ならば、もっと果敢に踏み込んでくるはずだ。

一方、赤のグロースターはデータと寸分変わらぬ動きをしている。なら青だけが偽物で、『蒼』は別の機体に乗り込んでいるのだろうか。(だが最強の持ち駒であるグロースターを捨てて、何を―)

次の瞬間、斜め後ろから青い旋風が飛び込んできた。

「なにっ!?!」

ヴィレッタのサザーランドが、抵抗する間もなく両断される。次いでキューエルの機体が正面から廻転刃刀に貫かれ、機能停止。

青い新型。それで、ジェレミアは理解した。やはりグロースターは偽物。だが思考できたのはそこまでで、異様な爪を持つ左腕に掴まれた。

「……………!!!」

何かやばい。戦士としての直観が、この左手は危険だと告げていた。次の瞬間、サザーランドが異常な膨張を始める。

サザーランドの各機関から、悲鳴のように警報が鳴り響く。この機体はもう捨てるしかない。これ以上乗っついていけば、機体が爆発して間違いなく死ぬ。

が、緊急脱出装置が作動しない。

「くっ、私は死ぬのだ。やっと、やっと見つけたというのに!!!」

負けるのは、是非もない。だが死ぬことだけは―。

「ルルーシュ様!!! ナナリー様ああ!!!」

サザーランドが爆発する瞬間、脱出装置が作動した。

一瞬。わずか数秒のこと。それで中核を叩き潰された純血派の部隊に、もう組織的な抵抗はできなかつた。

「逃げた者は放っておけ。目標はコーネリアだ」

と言うが、コーネリアを討ちとることは考えてないライである。彼女は厄介な敵ではあるが、ユーフェミアの姉だ。殺せば、ユフィとの関係は破断する。

(負傷により本国療養、というのが一番ありがたいのだが…)

それも治療には時間がかかるものの五体満足、という状況であれば、なおいい。しかしそんな生ぬるいことを言ってられる相手ではないというのも、重々承知である。

「……………行くぞ、ここからが本番だ」

少なくともルーミアとネージュの二人は、そんなライの思いに気付いていた。

「純血派の部隊がLOST。このままでは、コーネリア総督が挟撃されます」

完全に、敵の策にはまった。この戦局図を見れば、子供でも理解できる。

ダールトン將軍は解放戦線の追い討ちを受け、何とか土砂から逃げ延びた残兵をまとめて抵抗しながら後退している。とても他を助け

る余裕はない。

北の部隊は挟撃を受け、明らかに劣勢だ。各部隊の指揮はともかく、全体を見て判断する指揮官がいないのである。各個撃破の餌食になる一方だ。

唯一互角なのがマーガレット率いる親衛隊が踏みとどまった東の戦線だが、ここはコーネリアがいる場所とは山の反対側。遠すぎる。(お姉様…)

本陣には、アレックス將軍率いるコーネリアの親衛隊が十五機。『蒼』の所在も判明した今なら、この部隊も投入できる。

だが、土砂崩れは本陣よりはるか麓まで大きく浸食した。ここから土砂を迂回してコーネリアのところまで向かうのでは、とても間に合わない。

「どうもどうも、特別派遣嚮導技術部でございま〜す」

悩むユフィの元に、通信が入る。憤る参謀たちを押し切って通信に出ると、総督救援の指示をいただきたいのだと言う。

「無礼者！イレギュラーは大人しくしておれ！」

特派は参加は許されたものの、後方待機の予備部隊という扱いだっただ。参謀の一人が『イレギュラー』と罵ったことから分かるが、初めから数に入っていない。

「おかげで困ってるんですよ、ヒマで」

それに対しロイドは、戦場での発言とは思えない言葉で返した。

「ふん、あの土砂を越える方法がないから頭を悩ませているのだ。ランドスピナーでは、とてもあの液状化した斜面は進めない…」

「その点はサンドボードを用意してありますけど？」

参謀の嘲りに、ロイドはあっさり返す。特派のトレーラーには様々な備品も積んであり、そのまま戦場まで持ってきていたのだ。

「特別派遣嚮導技術部に命じます。何としても、総督の救出を」

それを寄越せと言いたげな参謀たちより早く、ユフィが決断を下す。そしてアレックス將軍は親衛隊を率い、迂回してコーネリア救援に向かつてもらう。

ダールトン隊の救援は、通常軍が当たる。本陣には最小限の護衛だ

けで充分だ。

そしてロイドは、ユファイの後ろに立っていた人物に重大なことを告げた。

「予備のサンドボードが一つあるのですが、いかがですか、エニアグラム卿？」

「Z―01ランスロット、RZA―9ヨーヴィルはサンドボードを使用し最大戦速にて液状斜面を上昇、総督を救援せよ。……よろしいでしょうか、エニアグラム卿」

「私に遠慮するな。今回の作戦を受け持ったのは特派なのだから、指示を出すのはそちらでいい」

セシルの遠慮がちな確認に、ノネットはそういう気遣いは不要と答える。特派が臨時のデヴァイサーを雇ったと思つて指示を出してくればいいのだ。

「それでは失礼しまして…、敵部隊に新型を視認したとの報告が有り。性能は未知数ゆえ、最大限の注意を」

「サザーランドじゃ相手にならなかつたらしいから、もしかしたら僕のランスロットに匹敵するかもね」

とはいえ、ロイドの声は弾んでいた。またヨーヴィルとナイトオブナインの騎乗データ、しかも実戦のものを誰からも文句言われくことなく取れる。さらに敵とはいえ新型となれば性能が気にならないはずがない。

「ああ、それとスザク君。君には一つ聞いておきたかったことがあるんだけど…」

「何でしよう？」

訝りながらもスザクは返す。しかし、聞かれたことは彼の矛盾を的確に突くことだった。

「君は人が死ぬことを極端に嫌うね。なのに、軍隊にいる。何故だいい？」

「……死なせたくないから軍隊にいるんです」

わずかに躊躇った後、スザクは答えた。その躊躇が、ロイドには意外だったようだ。

「…ふむ。もしかして、気付いてるのかな？その矛盾はさ、いつか君を殺すつてことに」

ロイドの問いにスザクが躊躇った理由。それは、シンジユクでの『蒼』の言葉が頭をよぎったのだ。

『私たちが戦うのを止めれば、虐殺が再開されるだけだ』

あのシンジユクで、何が正しかったのか。いまだにスザクの中では答えが出ない。

きっかけは、住民を巻き込むようにテロリストが逃げ込んだから。テロ活動は間違った行動で、それが悪い結果をもたらしたのだ、とは思う。だが、だからと言ってブリタニア側の行為を肯定できるはずもない。

「…ランスロット、発進します」

迷いを断ち切るように、スザクは宣言した。少なくとも、この戦場で虐殺は行われてないのだ。

ただの挟撃なら、跳ね返す自信があった。だが要塞を犠牲にしての土砂崩れに未知の新型というのは、予想のはるか上を行っていた。今回の戦いは、戦略でも戦術でも負けたのだ。

「……いつ以来かな」

普段と変わらぬ口調でコーネリアが問う。この状況でむしろ落ち着いているというのが、逆にかつてない危機だという事を現していた。

敵から『ブリタニアの魔女』と恐れられたコーネリアが、ここまで追い詰められた例はない。まだ駆け出しのころ、ダールトンと模擬戦をやって完膚なきまでに打ち破られて以来かもしれない。

純血派の部隊が壊滅し、退路が絶たれた。東は土砂で越えられない。敵は上下から迫ってくる。まさしく、窮地と言う他にない。

残るは西に逃げる道だが、ここは崖が大きくせり出しており狭い谷間になっている場所を通らないとかなりの回り道になる。迂回していては、山頂と麓の二方向から来る敵から逃げ切れない。

「……仕方あるまいよ、ギルフォード」

谷間を通る、とコーネリアは決断した。少しでも頭が回る指揮官なら、そこは必ず抑えるべき場所だと理解するだろう。まず間違いない、先回りされている。

だがそれでも、ここで迎撃して取り囲まれるよりはましだった。

「半数を付けます。何としても、友軍と合流を」

十機の親衛隊を、三・三・四の三部隊に分けた。先頭の指揮はエドガー。第二陣がバート。二人とも『グラストンナイツ』と言われるダールトンの養子である。

それに、近くにいた部隊からサザーランドを三機ずつを付ける。はつきり言ってしまえば、この二部隊は第三陣のコーネリアを無事通すための生け贄だ。

残る十機はギルフォードが指揮し、麓から来る敵に当たる。補佐をするのはこれもグラストンナイツの一人のクラウディオ。

こちらはこちらで、命を捨てても敵の追撃を止めねばならない。麓の敵は『蒼』で、しかも新型に乗り換えていたという報告がある。単純に考えれば、グロースターより強い機体だから乗り換えたのだろう。

將軍に何と詫びたらよいものか、と思いながら、彼らにプライベートチャンネルで話しかける。

「…すまない。君たちはここで私と死んでくれ」

「姫様のためとあれば、本望ですよ」

その声は、親衛隊員すべての心情を代弁していた。誰もが、この状況で無事に済むとは思ってない。が、コーネリアだけは何としても生かしてみせる、と。

「ギルフォード、死ぬなよ。これは命令だ。他の者も、何としても生き延びよ」

その思いを見越して、コーネリアは全員に告げた。

「……………」

予想通り、と言っている。コーネリアは谷間に向かい、黒の騎士団の一部が解放戦線と協力してブリタニア軍に当たっているが、主力の反応が消えている。

(皮肉な話だが、ここは彼女を信じるしかないか)

間違いなく、ゼロは谷間に向かっている。実のところ、コーネリアがその包囲網に飛び込んでくれるのは都合がいいが、彼女がゼロに討たれるのは困るのである。

谷間の手前で、敵が二つに分かれた。動きを止めた後ろの部隊は、当然反転してこちらを迎撃するだろう。だが紅蓮と月下を先頭に突っ込めば、破れない相手ではない。

ゼロとしては、そうして欲しいところだろう。

(だが…、全てが君の思う通りに行くと思ったら、大きな間違いだ)

ゼロに対しては、信用するなど勘が告げていた。そういう相手には、時に悪辣さも必要になる。

「下山する。そして、敵本陣から出てきた増援を叩く」

「ちよ、ちよつと…、コーネリアは？」

ゼロに任せて放っておけばいいというライの言葉に、合流を果たしたカレンが唾然とする。いや、カレンだけでなく、数人を除いて誰もがそう思っただろう。

「増援を放置しますと、手間取った場合こちらが挟撃されます。コーネリアの旗下部隊ですし、そうたやすく片づけられるはずもありません」

それより解放戦線の索敵が、本陣を固めていた親衛隊が出撃したと探知した。数は十五機と多くなるが、まさか敵がコーネリアを放置して向かってくるとは思うまい。

これを殲滅する方が容易く、十五機もの親衛隊の損失はコーネリアにとって大打撃であろう。

「まだまだ戦いは続きます。重要なのは無理をしてコーネリアを討つことではなく、可能な限り損失を抑えて勝つことなのですから」

ゼロがコーネリアを討ちたがっているのなら、そうさせてやればいい。ルーミアは、ライの考えを正確に理解していた。

常にこちらの十倍の損害をブリタニアに与えたとしても、いつかすり潰されるのはこちらである。無尽蔵の回復力を持つ敵と戦う際に絶対にやってはならないことは、損失を顧みない消耗戦だ。

そしてもう一つが、土砂を越えてくる反応が二つあること。このスピードからして、一機は間違いなくランスロットだろう。

「白い騎士様のお出でだ。見つかる前に、盗賊団は逃げ出すとしよう」その冗談はあまり受けなかった。ゼロに通信文だけ送り、ライは麓に向かう。その文には「健闘を祈る」としか書かなかった。

谷間には、予想通り敵が待ち構えていた。その手前で部隊を反転させたギルフオードだが、当然あると思っていた敵の追撃がない。

（『蒼』め…、何を考えている…）

谷間にはゼロと黒の騎士団が陣取っていたという。コーネリアがそれを突破する前に蒼が背後を扼せば、まさに袋の鼠となる。

なのに、レーダーに映らないよう識別信号を切って消えてしまっ

た。油断を誘う作戦かとも思ったが、いくら待っても敵の銃弾一つ飛んでこず、代わって見えたのは味方のナイトメア。

「あれは特派の……。それに後ろにいるのは、やはりエニアグラム卿だな」

二機とも特徴的なのですぐわかる。識別信号もそう告げていたが、視認した機体は間違いなくランスロットとヨーヴィルだった。

「ユーフェミア副総督より総督救援の許可をいただきました。ギルフォード卿、コーネリア総督は？」

残してきた参謀たちでは絶対に許可しなかっただろう。最近のユフィの成長は、目を見張るものがある。

今回の作戦は、ここまでの窮地になるとは思ってたにしろ、激戦を予想していた。だからコーネリアは軍人以外の、足手まといになりかねない存在は連れてきていない。

例外が、ユフィである。トウキョウ租界の留守居役だったのだが、「戦場も知らないような者は、統治者として失格ではありませんか」とコーネリアを言い負かしたのだ。

それは溺愛する妹だったから聞き入れられたという面はあるにせよ、コーネリアは理がない言葉では動かされない。確かに統治者として、軍事経験は必須であろう。

そしてそのユフィが果断を下したことに、ギルフォードは満足ともいえる喜びを感じた。

「この先で黒の騎士団と交戦中だ。しかし、君たちが『蒼』を排除したのであれば、やけに早いけど……」

到着が早すぎるのは疑問だが、それなら安心できる。だがスザクはそれに対し、明確に「否」と答えた。

「いえ、ここまで何の障害もなくたどり着きました。『蒼』の行方は、わかりません」

『蒼』は何を狙っているのか。誰がどう考えても、敵を狙うのはコーネリアのはずだ。その疑問が消えたのは、スザクが次の報告をした時である。

「アレックス將軍率いる親衛隊十五機もこちらに向かっています」

『蒼』が消えたならこの谷間をわざわざ通る必要はない。麓に向かって駆け下り、アレックス將軍と合流すればいい…、と思ったところで、ギルフォードは状況を理解した。

「いかん！ 『蒼』の狙いはアレックス將軍だ!!!」

報告を聞き、コーネリアも血相を変えた。決死の覚悟をした自分たちが、とんでもない間抜けにされたのだ。

「撤退だ！」

黒の騎士団など、もうかまっている場合ではない。アレックス將軍の親衛隊が壊滅すれば、がら空きの本陣はすぐそこになる。最小限の数は残してきたというが、蒼からすれば鎧袖一触だろう。

「全機、谷間から脱出！ 特派の機体とエニアグラム卿はすぐアレックスの救援を、残りは敵の追撃を迎え撃つたのち、本陣に向かうぞ！」

もはや、イレギュラーだという事にかまっていられる状況ではなかった。アレックス隊を救うには、ランスロットのヨーヴィルのスピードに賭けるしかない。

「逃がすわけにはいかないな、コーネリア」

歯噛みしたい内心を押し隠し、ルルーシユは言う。独力で正面からコーネリアとぶつかれば、大損害は免れない。だがここまで追い詰められた獲物を容易く手放す決断もできなかった。

（あの男め…）

忌々しいのは、コーネリアという獲物に思うところがなければ、合理的だと認めざるを得ないことである。そこまで見越せなかったどころか、こちらがコーネリアに執着することを見通された。

谷間から抜け出す前なら、まだ勝機はある。入り口を崩して塞いだが、その岩が排除されるまでにコーネリアが討てるかが勝負である。

だが、コーネリアの親衛隊と白兵戦となれば、並の騎士団員では歯が立たない。この状況では、ルルーシユの作戦の妙も何の役にも立たなかった。力押ししかないのである。

相手の装備が大型ランスだけならこの閉じ込めも大いに効果を発揮しただろうが、ミサイルランチャーを装備していたグラストンナイツ機があったのが誤算だった。

岩が吹き飛ばされ、道が開ける。そして同じく外側から道を作ろうとしていたギルフオードの部隊と合流。

「これ以上は無理だ。損害を増すだけだぞ」

いつものふてぶてしい態度を取り戻したC・C・に言われたが、ルーシユとてそんなことは分かっている。ちなみに、C・C・の服はちゃんと着替えさせた。

「全部隊…、退却だ」

無念と憎悪を押し殺し、騎士団に告げる。そしてアレックス將軍の部隊は、この時壊滅していた。

『蒼』…」

遅かった。ダールトンに次ぐ將軍だったアレックスも、コーネリア救援しか頭になかったのだろう。

そこを、『蒼』は急襲した。純血派同様一撃で中核を粉碎したのだ。紅蓮の輻射波動腕に掴まれたアレックスのグロースターは、主の身を乗せたまま爆散した。

あとは、掃討戦でしかなかった。さすがにコーネリア親衛隊にわれ先と逃げ出す者はいなかったが、この場合はそれが仇になった。

十五機中、残りは四機。秩序ある後退は、獲物が自らまとまってくれただけでしかなかった。むしろ逃げ散れば、もっと助かったかもしれない。

残る四機が撃破されるのも、もはや時間の問題となっていた。逃げようにも逃げられず、戦つても勝ち目はない。

ランスロットとヨーヴィルが到着したのは、その時だった。

「間に合ったとは…、言えないな」

「でも、まだ反応があります。友軍を見捨てるわけにはいきません!!!」それはそうなのだが、真つ正直に飛び込む必要はないだろう。もう少し頭を使うべきだと思うが、窮地の味方以外何も見えてないスザクに引きずられる形で、ノネットも戦わざるをえなくなった。

しかし、敵はこちらの反応を見ただけであっさり包囲網を解き、撤退に移ったのである。そして殿は『紅』と『蒼』の新型二機が受け持つ

ていた。

『……シンジユク以来だな、ランスロット』

「あの時とは違う。今、間違っているのは、君たちだ」

確信があるわけではない。笑い飛ばされることも覚悟していた。だが、相手は一つ息をついて、諦めたように言っただけだった。

『…それが君の正義なのであれば、そうなのだろう』

剣は握ったままだが、仕掛ける気配はない。目的は時間稼ぎではないからだ。部下が安全圏まで逃げ果せれば、二人も撤退に移る。

「主将自ら殿とは、ずいぶん剛毅な奴だな。だが、そういう奴は好きだぞ」

ノネットが一步を踏み出す。それに対し、『蒼』をかぼうように赤のナイトメアが応える。

「私は『ナイトオブナイン』ノネット・エニアグラム。いぎー」

空気が張り詰める一呼吸の後――

「勝負!!」

ヨーヴィルが、紅蓮に向け突進した。

ランスの攻撃を、十手のような形をした呂号乙型特斬刀で弾き飛ばす。紅蓮が、防戦一方だった。

(反撃の、隙がない…)

二本の槍を自在に操る敵は、これまでの相手とはまるで違う。強引に輻射波動で破壊しようとするのと出した腕をもう一本のランスで狙われ、慌てて引つ込めるしかなかった。

「ナイトオブナインか…。嫌な奴」

ブリタニア最強の騎士の一角。ルーミアアの言ったことは正しかった。グロースターなら、あつという間に撃破されていただろう。精神論で何とかなる相手ではない。

『はっはっは、楽しいぞ。ラウンズと戦える奴が、こんなにいるとは思わなかった。…どうだ？ いっそ、お前らもラウンズに加わらないか？ 推拳なら私がしてやるぞ』

「ふっぎけんなー!!!」

外部スピーカーのスイッチは入れなかったが、それでも聞こえるのではないかとという大声で返してしまった。普段のお嬢様としての顔しか知らない相手なら、別人が叫んだのだと思っただろう。

『はっはっは、いや、そうだろうな。まあ、そういう奴と轡を並べて戦うのは楽しいが、敵として命のやり取りをするのも心躍る』

紅蓮が構えたのを見て、ヨーヴィルも構え直す。

相手の動きで特にいやらしいのが、紅蓮の左へ左へと回り込んでくることである。輻射波動機構である右腕を警戒しているのは明らかなのだが、こんな単純な方法で紅蓮の戦闘力が減衰するなど思ってもいなかった。

旋回の方、どうしても動作が遅れる。つかめると思ったタイミングでも、ぎりぎりのところでかわされてしまうのだ。

輻射波動腕はリーチが伸びる仕組みになっているのだが、それも読まれていた。歴戦の戦士の、戦場における『勘』の凄みを、改めて認識させられる。

ランスを大きくかわして一度距離を取る。追撃のハーケンを輻射波動で破壊し、急加速。突進しながらの一閃を急後退で回避した相手に、小刀を投げつけた。

『おっと!!』

当たるとは思っていない。だがやむなく回避したヨーヴィルの足が、わずかに止まる。そこを狙っていた者には、それで充分だった。

ドオンと、ヨーヴィルの右肩が火を噴く。誰よりも嫌いな、誰よりも頼りにしている相手からの援護射撃。大きく体勢を崩した機体を、ついに紅蓮の輻射波動腕が掴んだ。

「弾けるブリタニアアアアアアッ!!!」

輻射波動の高周波がヨーヴィルを変形させ、限界を超えた機体が爆裂する。しかし搭乗者は、掴んでから輻射波動照射までの一瞬に脱出していた。

「エニアグラム卿!!!」

本人は何とか脱出したようだが、ヨーヴィルは失われた。これで状況は一对二…、いや、一对三である。どこかから、狙撃兵が狙っている。

「…くっ、汚いぞ。部下に加勢させるなど…」

どう罵ろうが、状況は変わらない。ランスロットと『蒼』の新型は、まったくの互角。似たフォルムの赤い方も、同等の性能と見ていいだろう。

ならば、勝負の行方は自明である。スザクも、この状況で勝てるとうぬぼれるほど馬鹿ではない。

『また会おう、裏切りの騎士よ』

しかし、それだけ言い残して敵は去った。スモークが焚かれ、視界が遮られる。黒の騎士団の追撃を退けたコーネリアたちが迫っていたからであることは、すぐわかった。

いつもながら、未練なく『見切る』敵である。粘りが足りない、諦めが早すぎる、と罵ることはできるが、レジスタンス活動は正規軍とは違う。とにかく『負けない』ことが優先されるのである。

(裏切りの騎士、か…)

おそらく、『蒼』はランスロットのこと念頭にそう言ったのだろう。それが搭乗者にも当てはまるとは、思っていないに違いない。

「かまわないさ、そう罵られようとも。それが、僕の選んだ道だ。……間違った方法は、悪い結果しかもたらさない。俺は、俺は——」

自嘲を含んだ言葉でしか、言う事が出来なかった。あの時、ああするしかないと思った。その結果が、今である。

それを見て誓ったのだ。もう二度と、ルールから外れるような行動はしない、と。

「親父を殺したんだから——」

その呟きを聞いた者は、誰もいなかった。

「くそっ！あの男め……」

目論見通りであれば、黒の騎士団に損害はほぼなく、天叢雲と解放戦線が犠牲になるだけでコーネリアを討てたのだ。

それが、最後の最後で見事にひっくり返された。

追撃でコーネリア親衛隊の三機を打ち取ったが、相手は親衛隊十一機に加えてナイトオブナイン専用機。引き立て役になったのは、こっちである。

「お前の見込みが甘すぎたのだから、仕方ないだろう。そもそもお前は、『すべてが目論見通り』の場合ばかり考えて作戦を立てる癖があるからな」

C・Cからはそう言われた。通信のモニター越しに見る彼女の表情は、どこか楽しんでいるようにも見える。

「…………お前、ライのことを知っているだろう。何者なのか、教えろ」
「…………」

返ってきた返事は無言だったが、何となく予想はつく。以前言った『初恋の男』というのが『ライそっくりな奴』なのだろう。C・Cの言ったことを信じるならば、であるが。

「…………一つだけ言っておくぞ。あいつは、絶対に敵に回すな。特にあいつに寄り添う女には何があっても手を出すな。怒らせたらとんでもないことになるからな」

待っている運命は破滅だ、と言うC・Cの迫力に、よくわからな
いながらルルーシュは頷く。

C・Cは知っている。『王』は当初ワールローに向かうつもり
はなかったのだ。ナポレオンの遠征軍を撃破した時点で、講和を結ん
でもいいと思っていた。

それが破談になったのは、フランス側が出した条件の一つが逆鱗に
触れたためである。

「妹君をフランスの皇太子妃に―」

この一言で、ナポレオン帝国の滅亡は決定した。騎士団に対してそ
れが再現されないとは、誰にも言い切れない。

その時、先を行く酒井の部隊から、男が一人倒れているとの情報が
入る。近くには異様な変形をしたナイトメアのコクピットがあり、何
とか脱出したもののここで力尽きたと思われた。

「まだ息はあります。犠牲になった日本人の鎮魂のために、磔にして
やりたいところですが…」

酒井の意見は過激ではあったが、理解できないことはなかった。な
にしるナンバース迫害の急先鋒であった純血派の領袖を捕虜とした
のである。報復を考えて、当然だった。

「……そういう蛮行はやめにせよ。ただ捕虜として、拘束すればいい。
必要なら手当もしてやれ」

それを押しとどめたゼロの言葉は、一同にとって意外だった。ル
ルーシュとて、つい先日までなら考えもしなかったであろう。

ジェレミア・ゴッドバルト。彼のマリアンヌへの敬慕を知らなけれ
ば。

「よし、積み込む荷はそれで終わりだな。早々に立ち去るぞ」

思いついた時は名案だと思つたし、実際その目論見は当たつた。テ
ロリストの本拠地のすぐ近くに極秘研究の施設を作れば、監察の目も
届きにくいと思つたのだ。

だが、クロヴィスを失つて以後、彼に安息の場所は無くなった。ク
ロヴィスを守れなかった無能と袖にされ、バトラーの今は置物となん

ら変わらない。

だが、極秘に研究してきたcode関係のことが知られば、ただでは済まない。研究結果が評価されれば裏取引の材料にも使えるが、そうでなければ絞首刑になるかもしれない。

コーネリアが解放戦線討伐に向かうと聞いたのが、昨日の公式発表で。それまで誰もバトレーに知らせてくれる人がいなかったというのが、彼がどれだけ疎外されているかの証明であろう。

そこから人を集めて、とにかく資料をトラックに詰め込んだ。あとは走り去れば、今回は何とか乗り切ったということだ。

(やれやれ、ほっとした…)

目を閉じ、大きく息をついた。だがその瞬間、急ブレーキで前につんのめる。それでも止まらず、ドンという音と衝撃。何かに正面から激突したのだろう。

「な、なんだ!？」

つんのめった体を起こしたバトレーが見た物は、竜のような異形の機体。何が起きたのか理解するより先に、閃光に包まれた。

「う…、こ、こは…?」

間違いなく消し飛んだと思った体は、しつかりある。だが景色はナリタ山から一転し、まるで死後の世界と言うのがふさわしいものへと変わっていた。

バトレーは、この場所を知っていた。クロヴィスに仕えていた時代、研究のために遺跡の調査をしていて偶然迷い込んだのだ。そして見つけたのが―。

「大丈夫だよ、君たちは死んでないから」

姿を現したのは、奇妙な格好の少年。その顔を、バトレーは驚愕の思いで眺めた。現皇帝シャルルが少年まで若返ったのだとしたら、まさしくその姿であったのだから。

「僕はV・V。シャルルとは…、まあちよつと縁がある存在だね」

V・Vと名乗った少年の説明によると、バトレーたちをこの『黄昏の間』に瞬間移動させたらしい。原理は説明されても理解できないが、とにかく助けてくれたことは間違いない。

「無論、ただの善意というわけじゃない。君たちが研究していた『C O D E—G』、ナイトギガフォートレスが欲しいんだ」

「それで私に対抗しようと言うのかしら、V・V・？」

いきなり、頭上から声がした。見上げると、先ほどの竜のような機体と、V・V・と同じくらい年恰好の少女が下りてきた。

スカートの裾をつまんで一礼する少女に、V・V・は憎悪の視線を向ける。

「ネージュ・ファン・シャレット。そしてこれは私の専用機『ヤルダバオト』。…わかつてると思うけど、あなたたちを殺そうとしたのは私ね」

あつさり宣言する少女にバトレーたちは全く理解が追い付かず、しやべろうとしても言葉が出ない。口をぱくぱく動かすのが精一杯だった。

「まあ、一応理由は説明しておいてあげる。あなたたちのせいで、私の予定が変わっちゃったの。本当ならもう少し眠らせておく予定だった『彼』を、あなたたちが見つつけちゃったから…」

ネージュ本人も休眠中で、もう少し先まで動き出す予定はなかった。『彼』が奪われたことを知ったのは、たまたま「ちよつと様子を見てみよう」と思っただけである。

「この私が仰天したわ。あと少しで、私の仕込みをすべてペアにくれるところだったんだから」

だから殺そうとした。理屈は通っているかもしれないが、殺される側としてはたまったものではない。

「……でも、今回は見逃してあげてもいいかな。これはこれで、面白くなってきたし」

自分たちを一瞥したネージュの目に、バトレーは心底から恐怖した。少女の外見はまやかしに過ぎない。中身は、人外の化け物だ。

「……覚えておいてね。僕とシャルルは、必ず君を殺す。殺してみせる。そのために、僕はコードを引き継いだ」

「期待しないで待ってるわ。…あ、でも、彼を怒らせないほうがいいわよ。彼のことは、C・C・から聞いてるんでしょう？ブリタニアが、ど

れほど嘘にまみれた国かつてことも――」

そう言われて渋い顔になったV・V・に冷笑を投げつけ、ネージユはおもむろに振り向く。

「あなたもね。止まるなら、まだ間に合うから」

どこへとなく語りかけ、ネージユは姿を消した。

「……………」

ネージユが立ち去った後、皇帝シャルルは黄昏の間に姿を現した。その表情は、いつもと変わらない。一切の感情を消した、皇帝としての厳粛さを現した顔だ。

「シャルル、僕たちはもう止まれないんだ。いくら相手が『王』とその契約者だって、『ラグナレクの接続』は完遂させる。それが僕たち兄弟の誓いなのだから」

V・V・の言葉にも、シャルルは何の反応も見せなかった。それについて感じた不安を、V・V・は押し込めた。

謀略と裏切りが蔓延する世界――。その中で、双子の兄弟である自分たちだけは信じ合うと決めた。決して嘘をつかないと誓い合った。

それに不安を感じ始めたのは、C・C・やマリアンヌと知り合ってからだ。『王』の真実、マリアンヌとの絆というものが、シャルルにどんな影響を与えたのかはわからない。

(けど、この世界から嘘をなくす。その誓いは絶対のはずだ。でなければ、僕は何のために、不死の運命を受け入れたんだ――)

その思いを込めたまなざしにも、シャルルの表情は変化しなかった。

居眠りから覚めたように、グロースターの中で目を覚ます。この体を保ったまま意識を飛ばし、しかもヤルダバオトまで出現させたのだ。半分寝ているような状態になるのは、仕方ない。

(V・V・が出張ってきたのは予想外だったけど、まあいいわ)

バトラーごとき、その気にさえなればいつでも殺せる。ジェレミアは黒の騎士団に捕らえられ、彼の運命は大きく変わった。なら、バトラーにもう意義ないと踏んだのだ。

とはいえ鬱憤晴らしでしかないのだし、V・V・が欲しいのならば

れてやってもいい。ジークフリードでヤルダバオトに対抗するつもりなのだろうが、愚かしい限りだ。

それにしても、V・V・は自分を集合無意識そのものでも思っているのだろうか。だとしたらとんだ勘違いで、ネージュからすれば失笑ものである。

（私は、人の願いから生まれた存在―）

神のような、人を超越した存在。それを願うさまざまな世界の人の意識が集合無意識を通じてさらに深い場所に積り、やがて人格を得るほどになった。

意識だけの存在―。それが、彼女の本質である。今の体は、この世界で活動するために作り上げたものに過ぎない。何故、ベースが幼女の姿なのかはわからないが。

だからこの世界の集合無意識を壊しても、もう一人立ちしているネージュには何の影響もない。逆に、やる気になれば、手間はかかるにせよ元に戻すことだって不可能ではない。

つまり、V・V・の行動は彼女の気分次第で何とでもできてしまう、無駄な努力に過ぎないのである。

（それで、どこまで私に迫れるか、期待しないで待っててあげるから）勘違いだろうが喧嘩を売ってきた以上、それは買う。自分の行動がどれだけ愚かなことか知らしめるために、徹底的に叩きつぶしてやろう。

久しぶりに『敵』という存在を意識したネージュの浮かべた笑みは、見た人がいたなら凍りつくほどの恐怖を与えるものだった。

現場でやるべきことを成し終え、トウキョウ租界、エリア11政庁まで帰り着いたコーネリアが真っ先に向かったのは、屋上の庭園だった。騎士であるギルフォードすら傍に寄せず、行儀など構わず仰向けに寝転がった。

「負けた…な…」

雲を見ながら呟く。呆けたわけではない。だが、彼女と言えど、心中を整理する時間は必要だった。

ナリタ攻防戦、とのちに呼ばれるようになるこの戦いで、ブリタニア軍の戦死行方不明者は六千を超えた。ナイトメアは通常軍から動員した三百機の内、帰還が百八十六。およそ四割を失ったのである。

コーネリアの親衛隊も、消失十九機、戦死者十一名。その中には、当然アレックス将軍も含まれる。

一方の日本側は、人的損失五百六十名、ナイトメアの損失は三十二機。そこまで正確な数字を彼女が知るはずもないが、こちら側よりはるかに少ないというのは確実である。

さらに言えば、日本側の損失のほぼ全ては解放戦線である。つまり、あの土砂崩れ以降は一方的に負けたということだ。

「遺族には、可能な限り報いてやらねばな…。それで許されるものではないが」

失われた人命を悼惜し終えた彼女の精神は、次の段階に飛ぶ。すなわちこの敗戦の、戦後処理である。

冷徹に、戦力という数値だけで考えれば、通常軍の補充は容易い。六千の人命、百機を越えるナイトメアとて、ブリタニア全軍から見れば欠片の一つに過ぎない。

親衛隊の補充は、ゆつくりやっていくしかないだろう。人を選ばねばならず、かといって優秀な人材をそこかしこから引き抜けば他の戦力が落ちるのは当然である。

次は、敵の動きだ。

黒の騎士団と解放戦線は合流して、南に向かったという。本拠地は

房総半島の山地であることは間違いない。

(そこに籠るだけなら、恐れることは何もないが…)

どんな堅固な要塞でも、単独であれば落とす自信はある。だが、相手はゼロだ。防御のための拠点というのは最後の使い道であって、出撃のための拠点と考えた方がいい。

となれば、第一の狙いはキサラツだ。キサラツ基地を落とし、房総半島を制圧したうえでトウキョウ租界に向けて進軍する。それがゼロの狙いだろう。

それでも、ナリタ同様房総だけに全力を投入できれば勝てない相手ではない。だが雨後の竹の子のように、各地でレジスタンス活動が活発化するの当然である。

遠方の駐屯軍から軍を動員する余裕は期待できないと想定した方がいい。むしろこちらから援軍を送らねばならないだろう。

ただ、安心して送り出せる指揮官がいなかった。ギルフオードとダールトンは手元から離せない。セラフィーナやマーガレット、グラストンナイツは小隊の指揮なら見事にこなすが、一軍を任せる立場ではない。

(アレックスがいてくれたら…)

つい、そう思ってしまった。彼がいれば、別働隊の指揮など全て任せておいても不安はなかったのだ。

そして問題は、『紅』と『蒼』の新型だろう。グロースターをも上回る性能を持つこの二機に対抗できるのは、現状特派のランスロットしかない。

親衛隊を派遣するにしても、これをなんとかしない限り各個撃破の標的にされる。対抗するために一部隊の機体数を増やせば、手が足らなくなる。

技術部にはグロースターの強化を命じたが、改修には時間が必要だろう。

「おのれ……」

その怨嗟は、自分にも向けられていた。

解放戦線を叩き潰す。そうなれば、ゼロと蒼も黙っているまい。ま

とめて二人にも大打撃を与えれば、この地の平定は一気に進むはずだったのだ。

その予測は甘すぎた。『ブリタニアの魔女』などと敵から恐れられ、どこか傲慢になっていたに違いない。

今はとにかく、これ以上の事態の悪化を食い止めるより他はなかった。

そのコーネリアの視界の端に、ドレスの裾が割り込んできた。誰かは確認するまでもない。

「……お姉様」

妹の声は、暗く沈んでいた。アレックス隊の壊滅は、自分のせいだと思っっているのだろう。

「ユファイ、人の死を悼むのは正しいことだ。だが、いつまでも気に病むな。アレックスとて、いつかその時が訪れる覚悟はしていたのだから」

頷かれたが、表情を晴らすことまではできなかった。最後は自分がどう思ふかの問題なので、それはどうしようもない。

しかし、ユファイの判断を軽率と責めるのは酷だろう。参謀たちも、アレックス将軍も、ゼロすらもコーネリアしか見ていなかった。『蒼』だけが、その呪縛から逃れていたのだ。

「お前はお前の務めを果たすことだ。…シンジユクゲットー再開発の予算は、据え置きとする」

リフレイン事件での待遇改善に続き、ユファイが出してきた案はゲットーの再開発である。インフラを整えて職を斡旋し、イレヴンをブリタニアの支配に組み込もうと言うのである。

探らせてみたところ、提案者がユファイという事もあって、イレヴンの反応は賛成三に反対七というところだった。

表面上だけを見るなら反対というより不信が七割を占めたが、提案者がユファイ以外なら賛成は一あったかどうかだろう。

ブリタニアとしても、人口の増加は望ましい。名誉ブリタニア人は何とか把握しているもののイレヴンの戸籍など滅茶苦茶で、実情は誰にもわからない。

それを整理して税を課せば増収が見込めるし、職が保障されれば給与を得ることになり、消費の活性化にもつながる。

イレヴンとしても、今の廃墟のようなゲットーで今日の飯の当てにも困る生活をしたと言おう物好きはまずいない。「ブリタニアには従えない」という意見は当然あるだろうが、平穩を望むものだって必ずいる。

ユフィはこれまで弾圧しか考えてこなかったブリタニアに、『慰撫』という新しい概念を加えようというのである。

「誰かいるな」

唐突に、コーネリアが言った。ユフィには何のことかわからない。誰かが立ち聞きしているのかと、きよろきよろと周囲を眺めてしまった。

「そうではない。最近のお前は、あまりにも出来過ぎだ。誰か、恐ろしく頭の切れる参謀が裏にいる、ということに気付かぬほど愚鈍ではないぞ」

「…そういうことですか。はい、その通りです。なにしろ、二人もいますから」

得心したユフィは、あっさり言つてのけた。一人はクラスメートの少年であり、もう一人は『王』だ。エリスの回想録で見た『王』の国を、ユフィは自分の理想と重ね合わせるようになっていた。

エリスの回想録を、コーネリアにも読ませることはやめておいた。(お姉様の場合、あれを突きつけられたら人格変わっちゃうかもしれないから…)

真面目すぎるのがコーネリアの性格である。国是は、彼女の中で絶対のはずだ。それが大嘘の塊だったと知った時、一体どうなるか。

回想録を全否定してこれまでにしがみつくなか、全肯定してこれまでから一転するか、とにかく極端な結果が出るだろう。

「……一人はあの銀髪の少年か。いろいろ話しているという情報は、マリーカから入っているぞ」

そう言うコーネリアの口調は、どこか荒んでいた。

河口湖のホテルで、テロリストを斬り殺した男。その剣の冴えはセ

ラフィーナやマーガレットも認めるほどで、興味を持ったコーネリアは直々に取り調べた。

その際に親衛隊に参加する気がないか誘いをかけてみたのだが、にべもなく振られたのである。

「貴方の元では、僕が護りたいものは護れない」

それが理由だった。当然詳しい事情までは話してもらえず、断られていい気分になれないのはもちろんだが、それに対して権力を使って復讐するほど彼女は狭量ではない。

ただ、それがあつさり妹には協力しているととなると、どこか釈然としないものを感じる。彼女にしては非常に珍しく、「不貞腐れて」いるのである。

ライの才覚を知ればそれも無理なからぬことと、ユフィは苦笑うしかない。そしてもう一つのことでも、ユフィは安堵していた。

(ルルーシュとナナリーのこと、話してないのですね)

ユフィの学園生活について逐一報告させていたというのに、コーネリアが二人のことを知っている様子はまるでない。マリーカは、主であるユフィの意を汲んでくれていたのだ。

そのマリーカは、この時病院に駆け込んだところだった。

「兄さん!!!」

ノックもせず、病室に駆け込む。しかしベッドからゆっくり上半身を起こした兄の姿を見て、安堵したマリーカはへなへなと崩れ落ちた。

「…静かにしろ。傷に響く」

しっかりと聞いた兄の声に、マリーカは大きく息をつく。ナリタで重傷を負ったと聞いた時は、心臓が止まるかと思ったのだ。

敵は『蒼』だった。あの新型に、攻撃する間すらなく負けた。サザーランドを貫いた刀の切っ先を、わずかに逸らすことしかできなかったのだ。

そのため、足にかかる布団の盛り上がり方が左右で違う。左は爪先まであるのに、右は膝から下のふくらみが消えていた。

(命があっただけ、ましとさえねばな…)

失った、感覚だけならまだそこにありそうな片足を見てそう思う。『蒼』の刀は、キューエルの右足の膝上あたりを吹き飛ばしたのである。

サザードはその一撃で機能停止。運よく機体が爆発せず、敵には捨て置かれたので助かった。止血処置をして救援ビーコンのスリッチを入れたらしいが、そのあたりの記憶はあいまいだ。

生き延びようとする本能がそうさせたのだろう。はつきり気付いた時には、病院のベッドに寝かされていた。

だが、命を拾ったのはいいとしても、片足切断は軍人、特にナイトメアパイロットとしては致命傷である。

いくら性能のいい義足であっても、自分の感覚が行き渡った足と同じ働きを期待することはできない。現場復帰は、よほどの訓練を積まない限り無理だろう。

(退役か…)

心残りが多い。マリカはまだまだ雛鳥に過ぎず、純血派は今回の敗北で再び傾いた。どちらも託すことができたジエミアは行方不明だ。

「まったく、あのオレンジはどこで野垂れ死んだ。いなければいけないで、面倒な奴だよ…」

散々悪罵を投げつけてきたが、自分がこうなると誰よりも頼りになる相手だった。

暗い気持ちで病室を辞したマリカは、そこで見知った人と出会った。

「…あれ、カレンさん？」

「あら、マリカ？」

カレンは明らかに日本人と分かる女性を連れていた。それは意外でも、表向き『病弱なお嬢様』である彼女が病院にいるのは不自然ではなかった。

(定期的な検査か何かかな？見たところ、元気そうだし)

逆にそちらは何をしているのか聞かれたマリカは、別に隠すこと

もないと思つて兄のことを伝える。

「……………そう。それは、お気の毒でした」

それに対するカレンの反応は非常に短く、機械的だった。まあ変に慰めの言葉をかけてもらうより、こういう方が気分がいい。

それでは行きたいところがあるので、とその場を辞したマリーカは、アツシユフオード学園に戻る。

だが、マリーカが向かったのは自分が属する中等部でも主であるユフィのいる高等部でもなかった。向かった先は、高等部の向かいにある、大学部。

「おや…、君は…。僕に何か用？」

「お願いがあります。ロイド伯爵、私を特派で雇ってください」

その懇願にロイドは一瞬呆けたように停止し、理解が追い付くと「やったー!!!」と子供ののように飛び跳ねた。元々、優秀なデヴァイサー候補として目をつけていたのだ。

(…『蒼』を討つ。兄さんの無念は、私が晴らす)

不安はある。マリーカの実戦経験は、河口湖のホテルで震えていただけしかないのだ。あの時、訓練のように動けなかった自分が、いきなり実戦に出て『蒼』を討とうと考えるなど無謀もいいところだろう。

それでも、やるしかない。そしてやるからには、最も確率の高い方法を選ぶのは当然のことだ。

特別派遣嚮導技術部。あのランスロット以外に、兄を倒した『蒼』に勝つ術はない。少なくとも、サザーランドでは絶対に勝てないのは明らかである。

マリーカは知らない。兄の負傷は、誰によるものなのか。

実のところ、カレンが検査のために病院にいたというマリーカの予測は全くのはずれで、患者は彼女ではなく付き添いだと思った日本人の方だった。

「さ、行く、お母さん」

リフレインの後遺症による、重度の幻覚症状。それがふとした間に治っていたという事例は、医師を呆然とさせるものだった。

考え付く限りの検査を試みたが、理由は一切不明。『奇跡』の一言で片づけるしかないという諦念からの結論となり、めでたく退院となったのである。

ライが何をしたのか、カレンは教えてもらってない。教わりたいても思わない。母と再び心を通わせることが望みで、それができたのだから何でもいい。

ただ、リフレインの所持と使用は明らかで、罪に問われるのは避けられなかった。判決は、懲役二年六ヶ月の執行猶予五年。これまでの判例から見ると非常に軽いが、これは症状が消えた以外にも理由がある。

第一が、ユーフエミア。これまでのように一方的な略式裁判で量刑が確定するのを、彼女が嫌ったためである。この意向が各所に伝わり、ちゃんと裁判が開かれた。

もう一つが、シユタツトフェルトの名だ。カレンにとって意外だったことに、裁判費用や入院費は全て父親が出してくれた。そのため、裁判官も名門貴族の名に遠慮したのかもしれない。

父親の行動が、愛情が残っていたためなのか、一人娘の歓心を買いたいだけだったのかはわからない。とにかく、少しだけにしてもカレンが初めて父に感謝したのは事実である。

ちなみに、他の人も懲役十年を超える判決はなかったという。

カレンとその母親が向かったのは、当然シユタツトフェルト家ではない。もうカレンにあの家には留まる気はなく、ならば母も残していいはずがない。

そこも、父親が取り計らってくれた。アッシュフォード家に頼んで、娘の世話係として住み込む許可をもらったのである。何か見返りは要求されたのだろうか、カレンは何も聞いていない。

「ここが私たちの新しい家。ま、居候の身だけどね…。そしてお兄ちゃんはどういらないけど、私たち、やり直せるよね……」

「大丈夫。私もそう願うから、決して間に合わないことはないわ。それより……」

つかつかと歩き、収納の戸に手をかける。慌てて止めようとしたカレンだったが、開け放たれた戸からは物が雪崩のように落ちてきた。

部屋に散乱していたものを、無理矢理押し込んでおいたのである。それを、完全に見抜かれていたようだ。

「……あなたにはまず、掃除の仕方から教えてあげるわね」

カレンには、赤面して頷くしか道はなかった。

「ナリタでの活躍、お見事でした。そしてご無事で何より……」

ただ一つ、コーネリアを討ち漏らしたことについて解放戦線から文句が来ているらしい。それについてライはあの状況での不利とユーフェミアとの関係を、義妹には包み隠さず説明した。

「私はそういうことだと理解しておりました。ですが、そういう声があるのも事実で……」

コーネリアを討つ千載一遇のチャンスだったと、納得できない人が出るのも当然であろう。だがそのために多大な犠牲を出すとなれば、損得が釣り合わない。

「部下を無駄死にさせるようなら、組織の長は務まらない」

ライの説明を受けた神楽耶は席を立ち、五分後に怒った様子で戻ってきた。

「まったく、片瀬も物分りの悪い…。あれではゼロと組んだとて、いい様に利用されて終わるでしょう」

不機嫌を隠さず、神楽耶が言う。今回は、片瀬もなかなか折れなかったようだ。

「やはり藤堂達は引く抜いておくべきでしたわ…。黄金と真鍮を見間

違えるような片瀬の下に、藤堂達は勿体なさすぎます」

神楽耶の愚痴に、ライは苦笑いを浮かべる。ここで頷くと、神楽耶の勢いはもう止まらなくなるだろう。

(だが、解放戦線は理解せず、か…)

騎士団との溝は、元からあったのが顕在化しただけだ。陰で桐原達と結んで動いている以上、手を組みたいとは思わない。

(その騎士団と組むと片瀬が言うのなら、解放戦線とも付かず離れずの位置でいた方が良い)

現状、天叢雲の保持する戦力は無視できるものではないから、一切の関係を絶つ、という選択肢はあり得ない筈だ。

他勢力との関係は、ひとまずそれでいい。次の問題は敵のことである。

「……神楽耶、例の件だけど」

申し訳なさそうに神楽耶は首を振る。ランスロットのデータやパイロット、開発部署など探らせていたのだが、いまだに偶然掴めた機体名以外わからないと言う。

「軍部をできる限り深くまで探りましたが、無駄足でした。よほどの機密扱いなのでしょう」

当然のことだろう、とライも頷く。最新鋭のナイトメア開発部署が最重要機密でなくて何なのか、と考えるのは誰であっても当たり前のことだ。

それが、実際は冷遇されて隔離に近い状況で、研究所も大学の一角を借りているなどは思い至るはずもなく、そんなところを探る指示など出していなかったのである。

「あれについては、諦めた方がよろしいかもしれませんわ…。ナイトメアの補充ルートを探る方を優先いたします」

親衛隊に大損害を負ったコーネリアは、当然グロースターを補充しようとする。予備も多めに確保したいと思うだろう。

それを、横から搔つ攫う。卑劣ではあっても、せつかく与えた痛手なのだ。それを癒そうとするのを看過できるはずがない。

奪ったものがサザーランドであっても、駐屯軍の補充が遅れれば各

地のレジスタンスが有利になる。それは望ましい展開だ。

「…ただ、各地のレジスタンスに配備するナイトメアが足りないのです」

無頼でさえ、元となる機体が不足しているという。当然無頼改の生産が追いつくはずもなく、月下はようやく汎用型の設計がキョウトに届いた状況で、量産はこれからだ。

「中には独自のルートで、中華連邦からガン・ルウを輸入しようというところも…。まあ、戦力の増強は嬉しいことなのですが…」

政治的にはあまり嬉しくない。軍部の横流し品を密輸入するのであればいいが、本気で中華連邦と結ぶような動きがあると、ライとしては非常に困る。

「最後にユーフェミアの動きです。シンジユクゲットー再開発…。それは、NACが全面的に請け負いましたわ」

NACはブリタニアに協力する経済団体なので、不自然さは全くない。無論ユフィを騙すわけでもなく、日本側も関わるることによってブリタニアが一方的に恩恵を『押し付ける』印象を薄れさせたいのだ。

「ブリタニアとはうまく付き合う必要がある…。それはわかっておりますが、お義兄様、本当に日本は勝てないのでしょうか？」

「…勝てると思うなら、いつでも僕を切り捨ててくれてかまわない」
自分の方針を強制するつもりはない。だが勝てると思うなら、こちらの力を当てにしてもらっては困る。方針を違えた相手まで護る余裕はないし、護ってくれると勝手に思われるのは虫が良すぎる。

「つまらないことを聞いてしまいました。忘れてくださいませ」

一礼した神楽耶は、政略には関係のないさらにつまらないことですがと前置きして、ただし興味深々という内心を隠しきれないという態度で話を追加した。

「あと…、その…、お義兄様のクラスメートに枢木スザクという人がいると思います…。彼の様子はどうでしょうか？」

危うく失笑しそうになったライである。神楽耶とスザクは従兄妹の関係になり、婚約者でもあった。彼がアツシユフォード学園に入学したことで、七年ぶりにかつての許婚の消息を知ったのである。

それがブリタニア軍に所属していて皇家の当主として許すことのできない相手でも、やはり気になるらしい。

(それこそ諜報員を張り付けなければいいものを…)

それは公私混同だ、というのが神楽耶なりの当主としての在り方なのだろう。仕方なく、ライは神楽耶が望むままにスザクのことを語った。

神楽耶との会談を終えて学園に戻って来たライは、校門のあたりでつい先ほど話題になったスザクの姿を見つけた。向こうもこちらの姿を認めたらしく、走り寄ってくる。

「珍しいね、君が一人で出歩くなんて」

いつもカレンかルーミリア、あるいは二人とも連れている、というのがスザクの印象なのだろう。決して間違いであるとは言えないが、ライとしては返事に困る言葉である。

一方、スザクはもう夜だというのに、どこかに出かけるようだった。それも、そこまで買い物に出るといふ感じではない。ポストンバッグを抱えた姿は、小旅行にでも出かけるようである。

「…ああ、これ？仕事が泊まり込みになっちゃって、着替えとか必要なものを取りに来たところなんだ。ちよつと長引きそうで、数日は帰ってこられないと思うけど…」

ナリタでの戦闘が終わった後、スザクはひたすら土砂崩れに巻き込まれた人の救助を行ってきた。ナイトメアや装甲車の中にいて運よく生き長らえた人の一人でも助けられれば、と思っただのである。

だがそれも、時間が過ぎれば過ぎるほど可能性は無くなっていく。だから夜を徹しても救助活動を行いたいののであるが照明の設営が間に合わず時間が空いてしまい、当座の荷物だけ取りに来たというわけだ。

無論スザクは、その事情を全て語ったわけではない。学園の皆は、ナリタに参戦したという事実も知らないはずだ。

それは望んだことだった。戦死したら、軍務で転校したことにしてほしいとユファイには言っている。

学園には、軍事に関わることは持ち込みたくない。だが、この友人にだけは少々突っ込んだ話もできるのではないか。そう思ったスザクは、いい機会かもしれないので聞いてみることにした。

「…あのき、ライ。ちよつと聞きたいんだけど、テロ行為って、間違ってると思うよね？」

「……………」

内容に、一瞬ライは動揺した。『蒼』だと知ってるのかと思ったのだ。

「あ、ごめん。突拍子過ぎたよね。……その、『蒼』にせよゼロにせよ解放戦線にせよ、何で抵抗を続けるんだろう、って。ユフィと政治向ききことも話してる君なら、何か思うところがあるんじゃないかな、と…」

スザクとて、何も考えてないわけではない。七年前の戦争で、日本は負けたのだ。彼らはどうしてそれを認めようとしなのか。敗北を認め、占領側も認めるやり方で日本を取り戻すのが正しい方法ではないのか。

「それを彼らに言わないのは、どうしてだ？」

「聞いてくれないからだよ。…誰に言っても、戯言としか捉えてもらえなかった」

七年前の、敗戦後である。スザクは桐原や片瀬など枢木家と縁のある人に対してそう言ったのだ。結果は言った通り、子供扱いされただけである。

そして、スザクは一人でもその道を進むと決めた。六家から絶縁されようとも、日本人全てから裏切者と罵られようとも。

「……僕だってブリタニアという国が全面的に正しい、と思ってるわけじゃない。でも、この国を戦火に巻き込まずに済むなら、その方がいいのは明らかじゃないか」

「……その方法は『ある』というだけで、実現できそうにないからだろうね」

それでもその道を進むという考えが、間違いであるとはだれにも言えない。ただ、ライには賛同できないだけだ。

「力のない相手がいくら叫んだからって、聞く耳などない。ブリタニアとは、そういう国だ」

そして聞く耳がない相手に、聞くまで叫び続けるのがスザクである。それも、まず間違いなく徒労に終わることを理解しながら、だ。「でも、僕が駄目でも次の人、そのまた次の人と続けば、いつかきつと……」

「それはただの言い訳だろう。それも、自分自身が『無理だ』と思ってるからそんな言葉になる。やると決めたなら、自分で何とかしろ。その覚悟ができないなら、不満を抱えたまま卑屈に生きろ」

いきなり声を荒げたライに、スザクは豆鉄砲を食った鳩のようにきよとんとした。「覚悟ができない人」のために『蒼』は必要なのだ。そのライからしてみれば、スザクの言ってることは甘すぎる。

「……そうか、そうだよね。これは、僕がやらなきゃ駄目なことなんだ」

そう言ったスザクは、吹っ切れたような表情で去っていった。

「……………」

事情は分からない。だが何か、言うべきではないことを言ってしまった気がする。言った内容に後悔はないが、スザクにはふさわしくなかったのかもしれない。

スザクの表情が晴れたのが、逆に不安になる。

（『否定されなかった』ことを喜んだだけならいいが……）

『占領側も認めるやり方』かつ『テロ行為は正しくない』となると、ブリタニアの国政を担うような立場を目指すのは理解できた。

軍に入り出世する、というのは、その方針からすれば間違いではない。傍目からは裏切者と見えても、信念に基づいた行動である。その信念そのものを、ライは否定しない。

ただ、それが彼の頑なな部分を、さらに押し固めてしまったような気がするのである。

「……………」

これを掘り下げると、確実にスザクの抱える『闇』に手を突っ込むことになる。それは、彼を余計に頑なにさせるだけだ。おそらく自分

には、その闇を晴らすことはできないだろうから。

そう思ったライは、心のどこかに留め置くだけにした。

「…あ、出かけてたのね。ちよ、丁度よかったわ…」

ひとまずクラブハウスに戻ったライはスザクに次いでミレイとばったり出くわした。それはいいが、彼女もいつもの快活な笑顔が失せていた。

ライの姿を見てギクツとしたりと、何か言いにくいことがあるという感じだ。

「その…驚かないで聞いてほしいんだけど、あなたの血液検査の結果が出たから…」

(ライ、遅いな…)

ナリタ戦後、ライは神楽耶に会いに行った。富士山まで行ったのではなく神楽耶が近くまで来てくれたのだが、それでも気になる時間になっただけだ。

食卓の上には、すでに腕を振るった料理が並べられている。

「カレンさんがお母さんと一緒に作った料理ですからね。冷めないうちに帰ってきてもらわないと…」

そしてこの女は、いつの間にかその輪に入っていた。母と料理談議に花を咲かせる姿は、むしろ彼女の方が本当の娘に見えたほどである。

「カレンもいい友達見つけたわね。…ルーミアさん、見ての通りの娘ですが、どうか未永く仲良くしてやってください」

その言葉に、ルーミアは恭しく頭を下げる。

(ルーミアの本性を知らないから、お母さんはそんなことを言うのよ…)

その礼儀正しきの裏に、とんでもない腹黒さを隠しているのがこの女である。特にライに対しては、隙あらば貞操を窺う野獣のような存在だ。

と思うカレンであったが、実は傍目からは「喧嘩するほど仲がいい」という言葉の見本そのもの「と思われる。本当に嫌い合ってるなら、とつくに流血沙汰になってるだろう」と。

ちなみに二人の間にいるライについてだが、優柔不断と批難される声は少なかった。それより、「本当に気付いてないのよ、あれは…」という声が圧倒的だったからだ。

「ごめん！ライ戻ってない!?!」

そこに、息切れしたミレイが駆け込んできた。何が起きたのか説明する前に水を求められ、差し出されたそれを一気に喉に流し込んでようやく落ち着いていたようだ。

「はあ…、ごめんね。あの、ライの事なんだけど、よほどショックだった

たのか…。他人が言うべきじゃないってことはわかってるけど、あなたたちには伝えておかないと…」

いつもはきはきと、明朗な言葉で無茶なことを言う彼女が、明らかに狼狽していた。そしてようやく決心して言葉にしたことは、カレンを青ざめさせるに十分な威力を持っていた。

「ライが、ブリタニアの…、皇族…?」

あり得ない。カレンの脳細胞の全てが、差し出された科学的根拠を拒否していた。

(だってライは皇家の血族で、私たち日本人の仲間でー)

それが、最も憎むべきブリタニアの皇族の血を引くという。検査の間違いではないか。それを一縷の希望にして次のミレイの言葉を待ったが、その希望は儂く消え去った。

「私も驚いたから驚く気持ちはわかるけど…。検査機関の方も何かの冗談じゃないかって、相当調べたらしいわ」

結果は、覆らなかった。この血は『ブリタニア皇族とイレヴンのハーフ』という、あり得ない筈の物。それ以外に読み取れる余地はなかった。

「ま、まあ、きつと傍系の、それも端の端くらいで皇族と認知されてないような家なんじゃないかな。そう考えれば、ハーフというのもありえないことじゃないと…」

重くなった空気を何とか軽くしようとしてミレイが思い付きを口にするが、カレンもルーミアも領かずさらに空気が重くなる。

カレンとルーミアは、日本側の血統も知っている。皇家の、しかも直系にかなり近い人である、という分析結果まであるのだ。

そんな端の端との相手との結婚が、許されるはずはない。

「それで…、ライさんがいまだ戻ってきてないということは…」

「うん、ショックが大きすぎたのか、うろたえてどこかに行っちゃって…。ごめん、まず本人に伝えておくべきだと思ったんだけど、間違えたわ。変な気を起こしてなければいいけど…」

もちろんミレイは走って追いかけたが、見失ってしまった。探そうにも当てなどなく、もはやこの二人に告げるしかないと思って全力で

引き返してきたのだ。

「それを早く言ってください!!!」

カレンが勢いよく立ち上がる。当然、ライを探しに行くつもりだ。だが同じ反応をすと思うていたルーミリアは、席に座ったままだった。

「あなた、行かないの？」

「私が行っても、たぶん無駄…、いえ、むしろ有害ですから」

当たり前前のカレンの疑問に、ルーミリアは当たり前のように返す。だがカレンにしてみれば、その態度に腹が立つ。

誰よりも、おそらく自分より彼の事を理解しているくせに、どうして行こうとしないのか。そのカレンのいらだちにも、彼女は当たり前前のごとくのように言う。

「…理解しているからですよ。私相手なら、逃げる必要がありませんから」

会うのが怖いから、否定されるのが怖いから逃げ出したのである。そしてルーミリアは、ライがブリタニア皇族だろうが異星人だろうがどうでもいい。怖れる必要は、全くない。

「だから私が何を言っても、彼の心には届かないんです。…ここはカレンさんに任せるしかない、と」

「…わけわからないわよ。とにかく、あなたは当てにできないってことでいいかしら」

「二つほど。カレンさんがもう二度と会いたくないと思ってるにしても、その気持ちをそのまま伝えることです。嘘偽りで説得できることではありませんから。それと、自力で探すことをお勧めします」

その言葉を背に受けながら、ドアを叩きつけるような勢いで閉めてカレンは出て行った。

「…それにしても、あなたってこれ以上ないほど不毛な道を選んだわよね。わかってたんでしょ、『勝てない』って」

「私は『付き従う者』で、『支え合う者』ではありませんでしたから」
ミレイの言葉にも、ルーミリアは淡々と返す。最初から、勝負にすらなっていないかった。それを誰よりもわかりながら、彼女はそれでも

その道を行くと割り切ったのだ。

「……ライさんの意思がそうであれば、私はそれでいいと受け止める。それが私の愛の形ですから。……とりあえず、今はあの二人がどう決着するのかを見守りますよ」

表情一つ変えず、ルーミリアは部屋に戻る。ただ、ミレイは帰り際にドンと壁を叩く音を、一度だけ聞いた。

(ライ…、どこ…?)

当ては全くない。むやみに租界中を走り回ったとて見つかる可能性など皆無に等しいのはわかってる。だが、それでも走っていた。

それっぽい後姿を見つけ、見知らぬ人の肩を掴むこと五度。さすがの彼女も息切れしてきた。

「ねえ彼女、そんなに急いでどうしたの？それより俺たちとー」

「あんたらなんかお呼びじゃないのよ!!二度と私に関わらないで!!!」

話しかけてきた軟派な男たちを一蹴し、カレンは再び走り出す。こんな馬鹿どもと、彼は絶対違う。彼は初めて会ったあのシンジユクの時からー。

(…シンジユク?)

もしかしたら、彼が自分と離れたいと思っただけで、あの場所にいるかもしれない。藁にもすがる思いでその可能性に賭けたカレンは、深夜のシンジユクゲッターに踏み込んだ。

不夜城のごとく照明に照らされた租界から一歩ゲッターに入れば、そこを照らす物は月しかない。それでもカレンは慣れた足取りで、瓦礫の散乱するゲッターを進んでいく。

廃墟も、ブリタニアの官憲の目も怖くない。外見がブリタニア人であるカレンの場合ゲッターの住民にも襲われかねないが、それも今はどうでもいい。

(ライを見つけて、それからー)

目的の建物の前に立つ。この廃墟はあのシンジユクの戦闘後、ライを介抱した場所。自分と彼の縁が始まった場所として、カレンが思いついたのがここだった。

だが、仮に彼がここにいたとしても、何を言えればいいのか。怖いのは、彼に自分の思いが届かない事。そしてその感情を見通したように、この少女は現れた。

「……こんばんは、カレン。いい月夜ね」

「ネージュ……」

唾然とした。絶対に日本人と思われたい外見の幼女がここにいれば、襲ってくれと言っていているようなものだ。しかしそんなカレンの感情にはお構いなしに、ネージュは続ける。

「自信を持っていいわ。あなたにとつて、どうして彼が必要なのか。それに本当の意味で向き合えるのであれば」

「……ここにライがいるのね。……それと、ありがとう、ネージュ」

ネージュの言葉に、カレンは迷いを捨てた。日本も、『蒼』の存在もない。伝えたいことは、ただ一つ。

「……まったく、弱めにしておいたとはいえ『強制退去』のギアスを展開しておいたのに。やっぱり、あの時会ったことで運命は決まっちゃったのかな」

建物の中に入っていく背に向けたネージュのつぶやきを、カレンは知らない。

人の気配に、ビクツと顔を上げる。そこには『蒼』としての威厳はなく、傷つくことに怯えた少年がいるだけだった。

「ライ、その……」

その姿を見て、カレンは思う。この人は、超人でもなんでもない。弱さも抱えた、ただの人だ。そして自分たちは彼の強いところだけを見て、弱いところを見てこなかったのではないか。

「……聞いたんだろ、ミレイさんから」

その言葉に、カレンは頷き返す。今の彼に届くのは、どんな不都合なことであつても真実しかない。

「……皇家の血族だとわかって、僕は嬉しかった。日本人として戦う理由ができたと思った。……だけど、ブリタニアの皇族？……わからぬ。僕は一体、何者なんだ？」

「あなたはあなた。それでいいじゃない」

「いいはずがない！僕は君たちの敵だったかもしれないんだぞ。君の憎むブリタニアの皇族で、日本を迫害する一人で―」

カレンもライがブリタニア皇族の血を引くと知って、頭の中が真っ白になるほど驚いたのは事実である。だが、彼を憎もうとする気は全く起こらなかった。

「…私は信じるわ。あなたは決して、そんな人じゃないって。それに、あなたが誰であれ、私はあなたに傍にいて欲しいの」

「それは『蒼』としての力が必要だから―」

それは名目に過ぎなかった。今なら、はつきり言える。『蒼』としての力以上に、自分は彼の存在そのものが欲しかった。

怯える彼を、しっかりと抱き留める。そして戸惑う彼の唇に、自分の唇を重ね合わせた。

「……これが私の気持ち。『蒼』とかそんな立場は関係ないわ。……私は、あなたのことが好き」

呆然としたライの瞳から、涙が零れ落ちる。そんな彼を、カレンはまるで泣きじやくる子供をあやす様に抱きしめた。

「………僕は、君と一緒にいいいのか?」

「例え世界が認めなくても、私が認めるわ。だから、あなたはいいいの」

胸のあたりで、嗚咽が漏れる。服が汚れようが構わない。

「…僕も、僕も君のことが好きだった。この世界の誰よりも」

泣きながら言う彼をしばらく抱きしめ、落ち着いたところでカレンは言う。

「帰ろう、私たちの家に」

二人がアツシユフオード学園まで帰り着いたときには、とつくに日付が変わっていた。電車もバスももう便がなかったこともあるが、何より今は二人だけで良かったのだ。

手をつなぎ、だが何も話さずひたすら歩くだけ。それなのに、何故か楽しかった。学園近くまで来ると夢の終わりが近づくようで、物寂しかったほどだ。

クラブハウスのライの部屋に入り、一息つく。そういえば何も食べてなかったことを思い出しキッチンを漁ると、二人分の夕飯はしつかり残されていた。

(お母さんとルーミアも、ありがとう)

今更ながらではあったが、温め直した料理で胃が膨れるとほっとした。あとはもう寝ないと明日が辛い。

「……それじゃ、私、部屋に戻るから」

未練を断ち切るように言ったカレンの袖を、ライの手が掴む。彼自身何でそんな行動に出たのか説明できなかったが、袖を掴む力が弱まることはない。

「……わかったわ。今夜は、一緒にいてあげるから」

今のこの人には支えが必要なのだ。自分ができることは気休め程度のことでしかないかもしれない。だが、できる限りのことはしよう、とカレンは思った。

目を覚ます。恋人となった人の顔が目の前にある。まだ起きないでいた彼の寝顔を見ながら、カレンは昨夜のことを思い出して赤面した。

(覚悟してただけどなー、一応…)

結局、カレンが想定したようなことをライは何もしなかったのである。ただ添い寝しただけだ。らしいと言えばらしいのだが、女としての魅力を疑うべき事態であろう。

ただ、心の方はつながった。

これからは、もつと彼に甘えてもらおう。自分にだけは、弱いところを見せていい。それを支えるのが、これからの自分の役割になるのだから。

(改めてよろしくね、ライ…)

学園に迷い込んだときと比べて血色のよくなった寝顔は、より一層お姫様に見える。勢い任せとはいえ、その唇を奪ってしまったのは一世一代の大胆さであっただろう。

(で、でも、あんな廃墟でムードなんてなかったし、このくらい…)

恋人同士が一緒のベッドで寝ているのだから当然の事、と自分に言い聞かせ、顔を寄せる。

「ん……」

あと数センチというところで、彼が目を覚ました。

「……………」お、おはよう！…えっと、…これはね、私も今日が覚めたばかりで……」

無言で見つめる彼に、カレンはしどろもどろで言い訳を述べ立てる。しかし責められることは全くなく、逆に力一杯抱きしめられた。

「ちよ、ちよつと…。ライ?」

「……よかった、目を覚まして君がいてくれて」

耳元でささやかれた言葉に、彼の不安の大きさを知る。だからカレンも、彼の体に手を回して抱きしめた。

「…………うん。私はどこにもいかないから。ずっと、あなたと一緒にい

るから」

この誓いを一生守ろう。そう、カレンは心に誓った。

「ゆうべはおたのしみでしたね」

「ぶっ!!! なななな、何言うのよ、ナナリー!!!」

生徒会室には、すでに他のメンバーが集まっていた。それはいいが、ライとカレンが入室するなりこう言われたのである。

「あれ、間違えましたか？日本ではこういう場合こう言うのがお約束なのだ、咲世子さんから聞いていたのですが…」

挨拶程度の付き合いであるにしろ、咲世子さんがナナリーの介護のため雇われた日本人だということはカレンも知っている。だが、同じ日本人として、変な日本のイメージを植え付けるようなことはやめてほしい。

それを、疑いなく信じてしまうナナリーもナナリーである。この前は、「願いがかなうおまじない」ということで釘と藁人形を渡されたという。その誤解は、ルルーシュが訂正したらしいが。

「んー、でも、生徒会長で学園理事の孫娘でこの子の義姉かつ保護者である私はちゃんとしたことを聞いておきたいんだけど…。当然、そういう事はしちやった…」

「はずありません!!!」

そう、本当に何もなかったのだ。この朴念仁を甘く見ては困る。むしろ、こっちの方が残念だったくらいである。

「でもさ、同じ部屋で一晩過ごしたっていうのは事実なんですよ？なら、あなたたちって付き合うことにしたの？」

「そ、それは、まあ…」

否定できなかった。嘘でもなんでも彼との関係を偽りたくはなかったのだ。しかし、こうもあっさりばらされると残念に思う心が存在するのも事実である。

「し、信じられません…。あの状況で何もしなかったなんて…。…。では、カレンさんに手本を見せてあげます。ライさん、今日は私の部屋に来てください」

「あんたも何言ってるのよ!!!」

ルーミリアの言葉に、カレンは激昂して返す。まだキスしただけとはいえ、人の恋人に躊躇いなく仕掛けてくる神経というのはつくづく理解できない。それに第一、昨日で諦めたはずではなかったのか。

「諦めましたよ。……本妻の座は、ですが。それにキスぐらいなら……」
あつげにとられるカレンを尻目にライに近づいたかと思うと、ルーミリアはあつという間にライの唇を奪っていた。しかも、明らかに舌まで入れている。

「ん……。ちゅ……」

「…………。な、なななな……、何してんじゃー、あんたはー……!!!」

数秒間の硬直の後、我に返ったカレンが二人を引き離すが、ルーミリアに悪びれた様子は一切ない。

「ル、ルーミリア、カレンをからかうな!あと冗談でこういう事はするな!」

あまりの突発事故に呆然としたライが慌ててたしなめる。が、その言葉に対してルーミリアは明らかに気分を害した。

「はあ……。まったく……。ここまで鈍い相手では言い切るしかないようですね。……一目惚れでした。私は、あなたのことが好きでした」

それも、『カレンのことを好きなライが好き』なのだという。つまり、カレンに以前言った『愛人でも我慢します』という言葉は本気だったらしい。

「……二番手であっても一向にかまいませんから。それと、私ならカレンさんには言えないようなリクエストにも応じますよ」

「……ラ、ライ!!!浮気したら許さないから……」

信じられない女だ、とカレンは思う。諦めるどころか、より踏み込んできた。この場にいる全員があつげにとられる中、ルーミリアだけが冷静に、腹黒く返す。

「あら、別れるのですか?では、その後ライさんをお慰めする役は私が……」

「別れないわよ!!!というか、万一そうなたら元凶はあんたでしょうが!!!」

別れてたまるものか。ずっと一緒にいるとさつき誓ったばかりなのだ。しかしそれは、ルーミリアにとつては望ましい答えだったようである。

「なるほど、カレンさんは何があっても別れる気はない、とおっしゃるのですね。ではライさん、安心して私とも付き合えますよ」

「いい加減にしろー!!!この淫売変態腹黒女ー!!!」

「まったく、あんたって女は!!!脳内に虫が湧いてるんじゃないの!?!」

「……まあ、カレンさんも落ち着いてください。ああしておけば、これまで通り私が一緒でも怪しまれないじゃないですか」

くすくす笑いながら策略だと言うルーミリアに、カレンは不信しかない目つきで応じる。いや、そういう面がないわけではないから幾分かは本当だろう。ただ、それが主目的ではない。

そしてそれをこの人は気付いてないのだろうか、と思えばため息の一つもつきたくなる。ライはルーミリアをやり過ぎだとたしなめはしたが、決して関係を絶つようなことはしなかった。

(なんだかんだ言つて、ルーミリアには甘いよね…)

傍目からは、ルーミリアが一方的に仕掛けて、鈍感なライが流しているように見える。だがこれが他の女だったら、さすがの朴念仁も許していないのではないか。

男女の関係まで発展しないから認めているが、この二人の間にも魅かれあうものがあることをカレンは感じていた。

「……ですが、ここからが本番ですよ」

不意にルーミリアが真面目な顔となる。ライの血筋について、ミレイはおくびにも出さなかった。よって学園では秘密のままである。また、仮に知られても驚かれるだけだろう。

しかし、天叢雲内ではそんな簡単な話では済まない。

「伝えるとなると、下手をすれば組織が崩壊……。もっと悪ければ、ライさんの抹殺でしょうか」

「……それであっても、伝えるべきだろう」

隠蔽する方が、発覚した時の傷は深くなる。それに検査したのはブ

リタニアの研究機関だ。検査官は深入りすると命に関わると思ったのか「冗談はやめてくれ！」と投げ返したらしいが、漏洩の危険はある。

「離間の隙は埋めておくべきだ。たとえば、今どんなに不利になろうとも」

ライの存在が注視されるようになれば、『蒼』と気付かれる恐れも多くなる。そして、敵国の皇族であるというのは離間を謀るのに最適のネタだ。

防ぐ手段があるとすれば、先に言ってしまう事しかない。

「……………」

「……………」

「……………本当なのか、それ？」

扇の問い質す声にライが頷くと、重苦しい空気がより重くなる。夢想もできない告白に、どうするべきなのか誰にも判断できなかった。

「そ、それで、お義兄様は……………」

神楽耶の顔は青ざめている。昨日の今日で「どうしても直に話さねばならない重大な話がある」と聞いて、よほどの事だろうと思っていたのだが、話の展開は義兄を失いそうであった。

そして、その神楽耶の不安通りのことをライは言う。

「司令として不適格、というのなら出ていくだけです。リーダーの座は、扇さんに返しましょう」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。あまりに突然なので、何が何だか……」

青ざめたのは扇も同じだ。自分がリーダーになれば、またあの暗い、うだつが上がない組織に逆戻りする。とは言ってもブリタニア皇族という事実は、はいそうですかと流せるものではなかった。

「まず、皆、考えを整理する時間が必要でしょう。…三日。それで、お義兄様を認めるか、組織を抜けるかを決めるというのではどうでしょうか？」

神楽耶の提案に、皆が頷く。即答を避けられただけでも、ほっとする空気が流れていた。

「お義兄様…」

「…もう、僕をそう呼ぶ必要はないだろうね」

三日後、付いてくるのはカレンとルーミアだけかもしれない。いっつになく弱気なライに、神楽耶は「そんなことありません！」と叱咤する。

「少なくとも私は付いて行きますわ。そしてキョウトのネットワークを活かして、お義兄様を認めてくれる人を探します」

頼もしい義妹だ、とライは苦笑いする。もちろんライはここで終わる気はない。三人で再出発する覚悟だったのが、さっそく四人になったのだ。

「それで、神楽耶様。皇家とブリタニア皇室の結婚というのは、あり得る物でしょうか？」

家格で考えれば釣り合うだろう。ただ、そんなことになれば一大ニュースのはずだ。ライが生まれたであろう20年ほど前のことで、そんなことに言及している記載は一切ない。

「ですから、あり得ないはずなのです。そもそも皇家は、基本的に六家内やそれに準ずる家格のところとしか縁組してませんし…」

そして、200年ほど前にある事件が起きた。そのせいで、皇家のそういう方針は一層強化されたのだ。神楽耶が早々にスザクとの婚約を決められたのも、その余波である。

「まあ、その200年前の事件と言うのが私の知る限りで皇の血が外に出た例外ではあるのですが…。皇家の長女が留学先のイングランドで、今で言うできちゃった婚をしたらしいのです」

「はあ?」

唾然としたカレンである。しかも相手は既婚者だったという。当然、皇家からは勘当され、公式からは姿を消した。皇家の記録の中にほんのわずかだけ残っているものを、神楽耶は見たことがあったのだ。

「その人の名は皇咲耶。相手の男性の名は、確かウルとかという…」
「ウィルフレッド、ではないですか？」

ルーミアの指摘に、神楽耶はそうかもしれないと頷く。相手の

素性や名前までは、はつきりと覚えていなかったのだ。

「では、その咲耶という人は、西洋の政治体制を学ぶためという目的で留学して、趣味は菓子作りではありませんでしたか？」

これには神楽耶の方が驚いた。確かにその通りであるのだが、何故そこまで詳しくルーミリアが知っているのか。

「……ちよつとルーミリア。もしかして…、もしかして、だけど…」

カレンに思い当たる節は一つしかない。200年前で、ルーミリアが知っていて、日本とブリタニアの両方の血を引く存在。さらにその人なら、ブリタニア皇族というのも当てはまる。

「はい。間違いなく、『王』の母君ですね」

『エリスの回想録』にも、母親の実家が皇家とは書いてなかった。本人が詳しいことを話してくれなかったからだ。

「では謎も解けたのではないでしょうか？あのブリタニアの狂気の王が咲耶様から産まれたことはショックですが、子を残さず死んだ彼は関係ありませんわ。お義兄様はその兄弟姉妹の子孫であるとすれば…」

それなら皇家とブリタニア皇族という検査結果と一致する。『皇家直系にかなり近い』とする検査結果も、遺伝次第で何とか許容できる範囲内だろう。

しかしルーミリアは、その可能性を一刀で両断した。

『王』と母を同じくするのは妹一人だけです。その妹君も、子を残さず亡くなったことは変わりません」

こうなると、ライの血筋についてはやはり皆目わからないということになる。

「はあ…、暗い話になってしまいましたわ…。あるいは、お義兄様がついに婚約を決めたのではと期待してましたのに……」

「…あ、その話なんだけど。神楽耶、僕はカレンと恋人として付き合うことになったから」

ため息交じりに言う神楽耶にライが少々困りながら告げると、いきなり食って掛かる勢いで飛びついてきた。

「本当でございませるか!?では、さっそく皇家の伝統に則って納采の儀

を準備をいたし…」

「ちよつと神楽耶様ー!!!気が早すぎますって!!!」

暴走しかかる神楽耶を、カレンは必死に止める。しかしその言葉は、さらに事態を悪化させただけであった。

「カレンさん！いえ、お義姉様!!!私は妹となるのですから、『神楽耶』と、呼び捨てで呼んでくださいまし!!!」

それまでの重苦しい空気はどこ行つた、と叫びたくなるほど、神楽耶は目を輝かせて二人の関係を祝福したのである。

「扇さん、どうして引き受けなかったんですか？このままでいいと思ってますか？」

「そうは言うがなあ……」

真田の詰問に、扇は返すことができない。第一、真田がこう言ってくるというのが扇には予想外だった。ライの操縦技術を学び取るなど、扇グループ時代から彼を認めていたはずではなかったのか。

「確かに能力は破格ですよ。でも、ブリタニアの皇族だと知って、信用できるはずないでしょう。記憶喪失っていうのも、嘘かもしれないし……」

扇には肯定するほどライに対する不信がなく、否定するほどの勇気もなかった。ただ困惑するだけである。その様子が不満だったのか、真田は「とにかく俺は認めませんからね」と言い捨て、行ってしまった。

「……………」

どうしたものか、と頭を抱える。これまでもライがブリタニア人とのハーフだということを問題視する声がなかったわけではない。しかし『皇家』の名は、それを打ち消して余りあるものだった。

だが、今回ばかりは相手が悪い。日本人にとって『皇家』が+に作用する最良の要素なら、『ブリタニア皇室』は-に作用する最悪の要素だ。

突き詰めると、結局はこれまで通りライを信じるかどうか、ということではない。真田はそこで『ブリタニア皇室』という点を重視して信じない方へと舵を切ったのだろう。

問題が変えようのない血筋については、説得は難しい。

「悩み過ぎだ。馬鹿の考え休むに似たり、と言うぞ」

「朝倉……？」

真田について思い悩む扇に、話しかけてきたのは朝倉だった。1年前、扇がリーダーになってからは疎遠だったが、共通の友人を持つ仲だ。

だから扇が頭を抱えるところに話しかけてくるのは当然なのだが、彼の方は全く悩んでいる様子がない。

「ああ、俺は迷わない。俺はこのまま、『天叢雲』に留まる。例えば片瀬少将から帰還しろと言われてもな」

そう断言する朝倉の表情は晴れ晴れとしていて、迷った末の妥協ではないことを示していた。

それもまた、扇には意外である。朝倉はつい先日、こちらに来たばかりだ。それが何故、ここまできつぱりライに付いて行くと決められるのか。

「あいつに頼まれたんだよ…。『俺に何かあったら、お前にも妹の事を任せていいか?』って。……あいつが行方不明になって、お前がリーダーを継いだと聞いたのはそれからしばらくしてだった」

思えば、その時すぐ駆けつけるべきだったのかもしれない。だが簡単にはできなかった。解放戦線で部隊長に抜擢されたばかりで、部下を見捨てて身一つで出奔する踏ん切りがつかなかったのだ。

そして何より、あいつには敵わない、自分にはあいつの代わりはできないと心のどこかで思っていたからかもしれない。

「……だから、まあ、こういう動機は不純かもしれないが、あいつの志を継いで、あいつの妹を幸せにできる奴なら俺は従う。素性は二の次だ」

友人との約束を果たせずいた朝倉にとって、扇グループから発展した『天叢雲』が部隊長を探しているというのはまさに渡りに船だった。

新リーダーが紅月ナオトの志を継ぐに足る男なら、解放戦線を捨ててもいい。そう考え、自分から志願したのだ。

「そうか、ナオトの志か…」

扇も思い出す。自分は何故、彼にリーダーの座を譲ったのか。自分には重荷が過ぎたというのものもある。日本のためを考えたためでもあった。そして、親友だった男の妹のため―。

「わかった、確かにカレンを幸せにできるのはあいつだけだ」

あの少年は、間違いなくカレンを救った。それは、自分にはどうすることもできなかったことだ。それだけでも認めるべきではないか。

「……となると問題は、何人残ってくれるかだが」

後方勤務は自分の所管だ。各人とのコネは誰よりも強い。扇はそれをフル活用し、一人でも多く留まるように説得することを考えた。

「おおう、扇もナオツもいいこと言うじゃん。安心して、あたしと井上も残るから」

「……………小笠原、『ナオツ』はやめてくれ」

そんな二人に、いつから聞いていた、とツツコミたくなるようなタイミングで割って入ってきたのは小笠原だった。

ちなみに『ナオツ』とは『二人目のナオト』という意味で小笠原が着けた綽名なのだが、本人にはとても不評である。

「だってさー、片瀬のジイさんや胡散臭いゼロに従うくらいなら、あの可愛らしいライ君の方が100倍マシだって」

小笠原が残ると決めた理由は真面目に話していた二人を嘆息させた。だがそれでも、昔なじみの二人が残ってくれるのはありがたい。

「まあ、半分は冗談だって。それより真田は…、無理っぽいね」

となると半分は本気なのか。そう思った扇と朝倉であったが、話題が真田のことに移ったので雰囲気は一気に暗くなった。

「決意は固いようだ。仕方あるまい」

朝倉はすでに真田の離反を決したものとして考えていた。そして部隊長が出ていくとなれば、同調する兵も出てくるだろう。ライの血筋については、もう噂が駆け巡っているはずだ。

「小野寺君はさつき会ってきた。『皇家の血を引くのも事実でしょう』だって」

小野寺は元々六家の私兵だったため、皇家に対する忠誠心は人一倍厚い。真田とは逆に『皇家』の方を重視したのと、それ以上に神楽耶が見限らなかつたのが大きいのだろう。

「あとは卜部さんと村上さんか…」

この二人は、藤堂がどう思うかが決め手になるだろう。そして卜部は、丁度この時藤堂と会話中だったのである。

「……………成程」

電話が切れたのかと思うほど長い沈黙の末、藤堂が口にしたのは一語だけだった。

「……中佐の指示を仰ぎたいと思います」

さすがのト部も、判断がつかなかった。四聖剣の一人として、仰いだ主は藤堂だという思いがある。それは天叢雲に出向しても、変わることはない。

だからライがいかに有能だとしても、藤堂が認めないのであれば認めない。そしてブリタニア皇族という告白は推量でどうこうなるものではなく直接聞いたのだが、それに対する答えはもらえなかった。

「……お前がどうしたいか、で決めろ」

そして、ト部が何と答えたらいいか迷っているうちに、電話は切られた。

「藤堂さん、いいんですか？俺は、ト部を戻すいい機会だと思います」

ト部がいないと、やはり四聖剣の連携も厚みが欠ける。そう思う朝比奈としては、血筋云々よりト部がどちらにつくかが問題なのだろう。

それは藤堂も分かっているし、覚悟の上のことだった。ト部が戻ってくるとなれば、嬉しいのは同じだ。

「……だが朝比奈。仙波と千葉もだが、今後の解放戦線を、どう思う？」

ナリタで、片瀬は要塞を潰して勝利を得るといふ果断を見せた。それは戦術的には正解だったであろう。だが結果、解放戦線の立場は騎士団の居候となってしまった。

「それに片瀬少将は、『今後はゼロと歩調を合わせ、攻勢に出る』と言う。このままでは、解放戦線が取り込まれかねない」

藤堂達も、これまで通りでよかったとは思わない。ただ、薄気味悪いかを感じているのだ。何故、あの腰の重い片瀬がこうも果断になったのか。それはゼロの影響と言うだけで、流していいものなのか。

「だから、『蒼』とのつながりを残しておきたいという事ですか」

『蒼』とて素性の見えぬ怪しさはある。だが、『ゼロ』に持ち金全てを

賭けるような行為は危険極まりない。紐の一本くらいは、あつた方がいい。

しかし、無理強いて残らせたのでは卜部にとつてもライにとつても不幸であろう。それが、卜部の判断を尊重するという方針に繋がった。

(……本当は、こんなことを思い煩いたくはなかったのだが)

軍人として軍令を遵守し、武人として任務を全力でこなす。それが藤堂が考える理想の在り方であつたが、状況はそれを許さないようだ。

藤堂は、誰にもわからぬよう小さく息をついた。

三日後、人の多さにまず驚いたのは、誰よりもライ本人であつたであらう。

「俺たちはこれまで通り、君に従う。君がリーダーだ。俺たちを、導いてほしい」

扇の宣言に、皆が頷く。それを見て、ライは思わず涙してしまった。「……まったく、何泣いてやがるんだよ。ほら、もつとしゃんとしろつて！」

そう言つて頭を小突いたのは玉城である。しかしブリタニア嫌いの急先鋒と言つていい彼が残るとは、ライは全く予想していなかった。

「……ああ。だから、確認するぜ。……お前は今後もブリタニアと戦つて、そして講和を目指すつて言うんだな」

方針を変える気はない。だからその問いには、迷うことなく頷いた。それを見た玉城はふつと微笑んで、痛いほど強くライの肩を叩いた。

「よつし、それでこそだ。……ここで俺たちに媚つて変えるようなら、俺は見限つていた」

玉城の言葉は誰もが意外に思った。誰よりも『講和』という方針に反対していたのは彼だつたからだ。そう指摘されると、彼はさも心外だと言いたそうに答えた。

「……あのな、俺だって馬鹿じゃねえぞ。さんざん考えて、そういう認めたくない現実まで考えてる奴だって思ったから認めたんだけだ」

伊達に官僚目指してたわけじゃあないからな、と決めた玉城だったが、何とも言えない空気が場を支配する。

「……………んー。言ってることはもつともなんだけど、玉城が言うとね……………」

皆の思いを果敢に言葉にしてくれたのは、ネージュだった。「なんじゃそりゃー!!!」と食って掛かる玉城に誰かが耐えきれなくなって吹き出すと、あとは爆笑が巻き起こった。

それでも、立ち去った者は多い。

「真田は…、本当にいなくなっちゃったね…」

諦めようと思っただけのもの、実際にいなくなると寂寥感がある。真田は副隊長の吉田を始め賛同する部下を引き連れて離脱した。

他では『緋龍』の副隊長だった木下、ライが次の部隊長と目していた和田など、『ライと直接関係しない者』の離脱は多かった。一般兵となると、三割ほど減っている。

「離脱したものは解放戦線に引き取ってもらおうことで話を付けました。なお、お義兄様の血筋に関しては厳つ重つな口止めをしておきましたから、ご安心くださいませ」

いつも通りの笑顔で語る神楽耶に、内心引いた者は多い。神楽耶は「漏らした場合は利敵行為と見做し、相応の対処をする」と言ったのである。……………おそらく、『度の過ぎた対処』になるだろうが。

逆に残ると決めたものの中には、他より頭一つ抜けた長身といつも通りの無愛想な表情を崩さない軍人の姿があった。

「卜部さんと村上さんも、残ってくれたのですか」

「……………ああ。君がそれでも日本のため戦うというのなら、見限る理由はないからな」

卜部の言葉に、村上も無言で頷く。無論、扇や朝倉たちの説得もあった。しかしそれ以上に、ライの態度が大きかった。

自分たちを利用するだけ利用して捨てる気なら、黙っていたらいい。それをあえて告げた覚悟に、二人は信頼で返すことにしたのであ

る。

「では、最後にもう一度だけ聞きます。ここに残った者は皆、お義兄様を認めるといふ事でよろしいでしょうか？」

幹部たちは頷き、兵士の間からも反対の声は上がらなかった。それを見た神楽耶は再び誓紙を差し交すことを提案したが、その必要はないとライが止めた。

「皆、ここにいてくれる。それだけで充分だと思わないかい、神楽耶？」

そしてライは、リーダー就任の際出された誓紙を皆の前で焼き捨てた。状況が変わった以上、これを突き付けて相手を責める必要はない。

離脱した真田たちを恨む気持ちは、全くなかった。

「それとお義兄様……。皆に伝えねばならぬことが、もう一つありますわよね？……特に扇には」

神楽耶が小悪魔のような笑みを浮かべる。明らかに、ここからの状況は楽しみだと思っている表情だった。

「俺？……あー、いや、何かあったか？物資は足りていたと思うが……『特に』と念押しされた扇が、いぶかしながら問いかける。自分の仕事を反芻してみても、そこまでの問題はないと思っっている。

離脱に関して人は仕方ないにしても、物資には一切手を付けさせなかった。特に月下に乗り換える前ライが乗っていたグロースターは真田の乗機になっていたため、真つ先に確保させている。

「そういう事ではありませんから。えと……その……ですね……僕とカレンは、恋人として付き合うことになりました」

井上と小笠原はニヤリと笑い、朝倉は感心したように「ほう」と小さく声を上げる。皆がどう言葉をかけるべきか躊躇った一瞬に、迷いなく動いたのはこの男だった。

「……まったく、ようやくかよ。遅すぎだってーの！………で、具合はどうー、ゴベア!!」

玉城の言葉が終わる前に、カレンの鉄拳が頭蓋骨を粉砕する勢いで

振り下ろされていた。まともに食らいぴくりとも動かず倒れ伏す玉城を全く気遣うことなく、井上が言う。

「はあ、まったくデリカシーの欠片もない奴よね…。誰か、このゴミ外に捨ててきてー」

とは言っても、そのあたりに興味津津なのは彼女とて同じである。時と場所を選ばねばこうなるということをわきまえていただけだ。

「……………」

そして誰よりも大騒ぎするだろうと思っていた扇はというと、固まったまま静止していた。隣にいた杉山の観測によると、「息をしている気配すらなかった」らしい。

「…………あ、ああ。うん。ナ、ナオトの奴も喜んでくれるだろう。めでたいぞ」

そうなるだろうと予想はしていたが、いざ実際にとなるとやはり衝撃は大きかったようである。扇はもつれる舌で、何とか二人への祝福を口にした。

「私が好きな人の万分の一の魅力でいいので、身に備えてから出直してください」

懲りない人たちだ、と思う。この言葉はもう何度も使っているのに、まだ言い寄ってくる男がいることが信じられない。

そして今回の男は、これまでよりたちが悪かった。容姿については認めてもいいが、中身が最悪だ。

「男爵家の跡取りである僕を拒絶するなんて…。これは君にとっても、いい話じゃないか」

何がいい話だ、とルーミリアは思う。自分のことを「男爵家の跡取り」などと言うことからして、先祖の功績を自分の力と勘違いしているだけの穀潰しでしかない。

こんな男の恋人になるくらいなら、すげなくされても彼に尽くした方がはるかにいい。

「では一生私に関わらないというのなら、考慮してあげてもいいです」返事は聞かず、さっさとその場を立ち去った。

「えー、さすがに勿体ないんじゃない…」

ルルーシユ、ライの二強を別格として、それ以外の中では有望株だと女子の間では人気だった男をぴしゃりと振ったルーミリアにカレンが非難めいた声で言う。

「ただの馬鹿でしたから。男爵などと言っても、あのままだと彼の代で潰れると思いますよ」

この予言は、のちに当たる。当然ながらルーミリアがそんな馬鹿男のことを気にかけるはずもなく、ただ無能な貴族が一つ消えたというだけと処理された。

(純愛と言うか妄執と言うか…)

恋人持ちになった男だろうと一途に慕うというのは、同じ女として理解できないこともない。同情もしたかもしれなかった。その男が自分の恋人でなければ、の話だが。

「…とりあえず、カレンさんの報告書に不備は見当たりません。『蒼』

の元に回します」

話しながらもてきぱきと仕事をこなすルーミアに、カレンと云えど賛嘆の思いがないわけではない。自分がやっていけば、間違いなくパンクするであろう。

もう一つ、私情を挿まない点も好感を持てた。例えば、カレンに対する嫉妬で細かい書式がどうこうとねちねち言ってくるなどということは絶対がない。

(ライが手放さないわけよね)

副官として、これ以上優秀な存在は他にいない。扇や卜部に至るまでが頼りにし、実質的な副司令と見なされているのもさもありなん、という感じである。

「で、そのライはどこ行つたの?」

「ライさんならナイトメア部隊の選抜と訓練です。穴は直ちに埋めねばなりませんから」

ルーミアの言動は冷酷なようだが、組織運営という観点から見れば正しい。大量の離脱者が出たことを嘆き帰参を期待するより、現状を把握して対策を練る方が建設的なのは明らかだ。

しかし、それでも、総司令官自ら誰をナイトメアに乗せるか選抜するというのは前例がない。これまでは、部隊長任せだったのだから。

「……………みんな言うのよね、ライが少し変わったって」

これまで、ライにはどこか人と距離を置くところがあった。孤高の司令官という感じで、兵たちと積極的に交わることなどは避けていた節がある。

それが変わったというのは、カレンにも理解できた。血筋のことがありながら認めてもらえたというのが、よほど心に響いたのだろう。

私も行ってくる、と出て行つたカレンを見送り、ルーミアは再び書類に目を戻す。カレンが持ってきた書類は『緋龍』の再編成案である。特に、副隊長をどうするかが焦点だった。

(桐生さんですか…)

すぐさまパソコンから個人データを引っ張り出す。桐生奏、元は扇

グループと同じようなトウキョウ租界近郊のゲッターを根拠地に活動を続けていたレジスタンスの一人である。

表面上の経歴に疑問点はなし。『暗部』の調査でも引つかかる点はない。ネージュの面接も受けている。

「……………」

カレンやライはただ信じればよい。疑ってかかるのは自分の役割だ。そのためには、神楽耶に独断で依頼を出すのも辞さなかった。極秘裏に集めたデータは、今や隊員のほぼ全てを網羅する。

必要ならば、手を汚すこともあるだろう。今のところそれが無いのは、ネージュが面接の段階ではじいてしまっているためだった。

ただ、ルーミアにとって一番わからないのがそのネージュなのである。目的不明、経歴不明、『暗部』を使ってなお、いまだどこに住んでいるのかすら特定できない。

そしてライに関する秘密を知っているような態度。怪しいといえば、これ以上怪しい存在はない。それが問題視されないのは実力と、いつの間にか組織のマスコット化していたからである。

(可愛らしさは認めますが…)

ライやカレンでさえ、骨抜きにされたらしい。というのも三人で遊園地に行った姿はまさしく子持ちの若夫婦で、それが二人ともまんざらではなかったようで一発で懐柔された。

「手元に置いておくのが危険だとしても、手放すのはもつと危険だ」

それがライの意見である。抹消する、という選択肢は消え失せたらしい。現状、問題がないのも事実なので、ルーミアも静観せざるを得ない、という状況なのだ。

「おう、ちよつといいか?」

次にやって来たのは扇だ。話の内容は無頼と無頼改を他の組織に引き渡すため、天叢雲への配備が遅れるというものだ。

「相手は『月輪七曜』…。戦力的には、そこまでの相手とは思えません
が」

「神楽耶様のご意向でな。何でも隊長がナイトメアの適性試験で60
0以上、隊員の中にも500台後半を出した奴がいるらしい」

組織分裂の危機を知った時点で、神楽耶は積極的に動いていた。具体的には大量の離脱者が出ることを見越して、他組織に渡りをつけていたのだ。

その一環が、これまでキョウトとつながりのなかった小規模レジスタンスにナイトメアの適性試験を受けさせることだった。

「有望株なので、囲い込んでおくという事ですか」

『月輪七曜』はかつての扇グループと同規模のレジスタンスで、ナイトメアを所持していない。というより、扇グループはよくあの規模でグラスゴーを持つことを決断したと先見性を褒めるべきである。

「あれもナオトの考えだ。本当にすごい奴だったよ、あいつは…」

扇が感じた感傷は脇に置き、ルーミアは状況を考える。ナイトメアの適性試験は、400以上で『適性あり』と診断される。ろくに経験もない人間が600以上というのは、確かに才能があるのだろう。「わかりました。『蒼』には前向きに考えるよう、私から伝えておきます」

助かる、とほっとしたように言いながら扇が去ると、ほどなくして神楽耶から電話がかかってきた。

「ルーミアさんですか!?あの本に書いてあることは真実なのでしょうか!?!」

出るなり、叫ぶように問い質す声があった。その声の大きさは、つい端末を耳から離してしまったほどだ。

(まあ、気持ちわかりますが…)

『エリスの回想録』は、劇物も同然である。『王』について、ブリタニアで語られることと全く違う姿が書かれているのだから、読んだ人が激昂するのも無理はない。

「何ということでしょう、『王』がこのような人だったなんて…。咲耶様は、皇の名に恥じぬ立派なお子を持たれていたのですわ…」

特に神楽耶は、『王』が皇家に連なる人であることを知ってからのことだからショックも大きい。『王』を罵倒する姿が許せず貸し与えたのであるが、効きすぎたかな、と後悔しないでもない。

宥めて会話を実務的なことに移行させるのに、少々骨が折れた。

「……『月輪七曜』のことについては感謝いたしますわ。その代り、ルーミアさんとネージュさんの専用機および汎用型の月下については、できる限り急がせます」

ラクシャータはまた寝る暇もない日々だろうと同情する。汎用機的设计図はできていたとはいえ作成後の実働試験に加えて専用機的设计だ。神楽耶もなかなか、人使いが荒い。

「少なくとも一月は、どこも動けないでしょう。その間に」

電話を切る。一か月は余裕があるという見込みは、間違っていない筈だ。天叢雲はごたごたのせいで動けない。コーネリアはナリタの傷が癒えるまで動けない。

そして黒の騎士団は、戦力不足で動けなかった。

現状、黒の騎士団と解放戦線にはランスロットに対抗できる戦力がない。だから汎用型の月下が配備された時がゼロにとつての機である。ライもルーミアも、それは読んでいる。

問題は勝てるかというのが第一であり、さらにはその戦果を維持できるかという点である。

(ゼロがトウキョウ租界奪取をもって勝利とすると考えているなら、非常に危ういところですね)

正直言つて、そんな男に引きずられて戦に参加したくない。勝つたとしても防衛に戦力を割かねばならず、他に手が回らなくなるのは目に見えている。

騎士団をトウキョウ租界に封じ込めておき各地のレジスタンスを各個撃破で叩き、最後に孤立した騎士団を押しつぶせばいい。自分がブリタニア軍を指揮するなら、そうする。

そもそもトウキョウ租界を制圧したら勝ちなどと、誰が決めたものでもない。ブリタニアの日本における最大拠点であるから一見そう見えるというだけである。

それを考えると、ナリタでのライの行動は正解だった。当然だとは思うが、あれから共闘の申し込みはない。独自にやる、ということだろう。

(結構です。こちらとしても、足を引っ張られないで済むのですから)

ブリタニアは敵である。これは明確で、誰も異議ないであろう。しかしライやルーミアアの頭の中では、ゼロはそれ以上に厄介な敵なのである。能力ではなく、立場上の問題で。

「確証を得られればそれこそ手を汚すことも厭わないところですが……。まあ、今のところは敵を掻き乱してくれるので、放置ですか」

戦術面では、確かにライですら及ばないものを持っている男だ。だから、ブリタニアと戦力の削り合いをしてもらうには丁度良い相手だろう。

（さて、今日は何を作りますかね）

遅めの夕食は、いつものことだ。冷蔵庫の中身を思い浮かべながら学園への道を歩いていると、いきなり呼び止められた。

「おい、おまえ」

見知らぬ顔ではない。しかし礼儀を一切省き、『おまえ』はないだろう。そこまで親しい仲ではないのだ。

「……………どうしてあなたがここにいますか、コスプレ趣味のゼロの恋人さん」

「C・C。だ。……何、少し聞きたいことがあっただけだ。たいした用じゃない」

呼びかけは皮肉を込めたものだったが、C・C。は意にも解さない。しかしその問いは、ルーミアアでさえも凍りつかせるに充分なものだった。

「数日前、お前らの所から解放戦線に移籍してきた奴らがいたが……。何故、そんなことになったのか、だ」

そこまでは、まだ普通の問いである。理由を知りたいという気持ちはあっている。あなたには関係のない事と突き放したルーミアアも、ここまでは許容できた。

「…もしかして、あいつがブリタニアの皇族だった、とか？」

「……………世迷い事を」

動揺を隠しきれなかった時点で、負けであった。わずかであっても躊躇してしまったことは、凶星だと認めたと同然である。

「そうか、やはりか。…当然わかっているのだろうか？『王』とまったく

同じだという事に」

「……だから、何だというのですか？まさか、『蒼』が『王』その人であるか？その妄想力、滑稽を通り越して呆れますね」

『王』は200年前の人間だ。生物学上、人間が200年を生きるという事はあり得ない。また仮に生き延びていたのであれば、リカルドの行いに対抗して立ち上がらないはずがない。

「いや、だからお前が惹かれるのではないか、と思ったただけだ。何しろ『エリス』だからな」

わかったような、わからないような返答である。だがそれ以上に、この女はエリスのことも、『王』の真実についても知っている。重要なのはそっちの方だ。

「ふつ、察し通り、私は『王』についても知ってるぞ。誰よりも強く、誰よりも気高く、誰よりも優しい男だったよ……」

その言葉に、ルーミアは違和感を感じた。『王』のことをどこで知ったかも疑問だが、懐かしそうにそう言う姿は、まるで直に見たかのようにではないか。

「あなたは、一体……」

「恋人がいて、お前がいる。奴には、それで充分かもしれないな」

何が『充分』なのか、ルーミアでもわからない。しかしこの女は、自分でも知らない何かを知っている。それは間違いない。

「……ところで、お前はどのようなのだ？奴には恋人ができたらしいじゃないか。それでもなお、付き従うのか？」

「当然です。地獄の果ての、先までも」

それは奴も大変だな、という感想を残し、C.C.は去った。ルーミアが何か口に出す間もなかった。相手に問い詰める隙を与えない切り上げの上手さは、見習うべきものであろう。

(…C.C.、ですか)

注視しておいて損はない。『暗部』に依頼を出そうと、ルーミアは神楽耶に電話を掛けた。

「あいつは強いな。私とは大違いだ」

誰に聞かせるでもなく呟きながら、C・C・は廃墟の街を歩く。ルーミリア・フエン・シエルトという女は、確かに彼の傍にいるにふさわしい。

「それで、あなたは諦めたのかしら？」

「元から私などでは釣り合わない相手だった。……決して強がりではないぞ、ネージュ・ファン・シャレット」

やはり現れたか、というのがC・C・の心境である。相変わらずこの女の正体はわからないが、彼に関わる話題なら出てこない筈がない。

「一つだけ聞いておこう。あれはお前の仕業か？」

「違うわ。ルーミリアに対して、私は何もしていない。この時代に現れたのも、そして彼に出会ったのも、全て偶然。ライも記憶が戻ったらびっくりするでしょうね」

正直、侮っていた。だから人は面白い。そう続けたネージュの言葉の意味は、二人にしかわからなかったであろう。

—これは夢だ、と夢の中で思う。

—軍人を志し、一兵卒とはいえ憧れの御方の近くに配属されたあの日の喜び。

—「この子たちをよろしく、ジェレミア・ゴッドバルト」

—そしてその御方に、初めてかけられた声。身が震えるほどの感動を、今も忘れることはない。

—「わが身に代えましても」

—それが、私にとつての聖誓となったのだから。

「マリアンヌ…様…。こ、ここは…?」

動けない。見知らぬ部屋で目を覚ましたジェレミアが状況を把握しようと視線を向けると、体がちりちり拘束されていた。

意識が途切れる前のことを思い出す。そう、自分はナリタで『蒼』と戦い、再度負けたのだ。一矢報いるどころか、何もさせてもらえなかった。

そしてあの左腕。原理はわからないがとにかくあの異形の兵器により、自分のサザーランドは爆散した。死を覚悟したが、どうやら生き延びたらしい。

だが、今の状況は？拘束されているのはわかる。となると捕虜となったのであろうか。なら、むしろ生き延びたことは不運であったといえる。

「マリアンヌ様、お許しを—」

テロリストの捕虜となった以上、結末は決まりきったことだ。命乞いをする気などないし、身代金と引き換えに解放されても恥をさらすだけ…。

(いや—)

どれほど恥にまみれようが、自分は生きねばならない。あの方の遺児を守り抜くためであれば、自分の名誉など汚物にまみれようが惜しくないのではなかったか。

瞳に生氣を取り戻したジェレミアは、そこで初めて隣に座っている

人がいるのに気が付いた。

「寝ても覚めてもマリアンヌか。相当入れ込んでいるようだな、貴様
は」

見知らぬ女から、呆れたという感情が濃厚にこめられた言葉が降つてくる。恥など考慮外だと思っただけであり、うわ言を聞かれていたというのは恥ずかしい。

「な、何者だ、貴様は？それにその言、マリアンヌ皇妃を侮辱する気が
!!!」

一拍おいて動揺が収まると、ジェレミアはおかしい点に気が付いた。この女は、ブリタニアの皇妃であるマリアンヌを知っているような口をきく。

「私はC. C.。黒の騎士団の一員だ。マリアンヌの奴なら、まんざら
知らぬ仲ではない」

「なんだ、早かったな。デートだというから、今日は来ないものだと
思っていた」

ホテルに連れ込むくらいの度胸もないのか、と続けられて、女として少しは恥じらいを持てと思ったルルーシュである。

「コンサートに行ってきただけだ。……無論、お前が期待するような
話は何もない」

相手はシャーリーである。一緒に行こうと誘われ、向こうの勢いに呑まれ領いてしまったが、承知した以上行くしかなかった。しかし彼女には感謝している。

（息抜きも、たまにはいいー）

久しぶりに殺伐とした世界から解放され、音楽と夕食を堪能したわけである。ちなみに夕食代はコンサートの返礼としてルルーシュが出している。男として、当然の行動であろう。

「で、お前の方はどういう風の吹き回しだ？」

意外なことに、C. C. は溜まっているであろうと思っていたデスクワークを片づけてくれていたのである。ゼロでしか判断できない重要な件を除き、確認して決済すればいいだけになっている。

「別に？気が向いたというだけだ。毎日期待されては困るぞ」

この女は、相変わらずよくわからない。先日、以前ギアスを与えたという男と一戦やらかしたが、その償いかと思わないでもない。

ところで、優秀な副官が欲しい、とは最近感じることである。今のところその役には誰も付けてないが、これはふさわしい人物がいなかったためだった。

騎士団内から誰かを抜擢するにしても、能力だけなら見どころのある人材は見つかるだろう。が、日本のことを第一に考える相手ではすぐ齟齬が生まれるに決まっていた。

(C・C・C がやる気になってくれれば、簡単なのだが…)

ライにとつてのルーミアのように、C・C・C が有能かつ従順であればどれほどよかったか。生徒会の仕事ぶりを見てみると、つくづくそう思う。

ちなみに、おかげでルルーシュがサボってもあまり文句を言われなくなり、その点では助かっていた。

さてC・C・C に対して、有能さは合格点を与えてもいいと認めている。だが、言う事を聞かせるために何枚のピザが必要になるか真面目に考えねばならない状況に、ルルーシュは大きく息をつく。

一応、奥の手がないこともない。この女が捨てられない、何か大きな思い入れがある本名を知っているのだ。だが下手に使うと、照れ隠しのとんでもない反撃に合う。

それは全くの幸運で、昼寝中の寝言で偶然知ったのである。寝ながらにやつくその表情はなかなか可愛らしく、それもからかうネタとして使えた。

それを教えた時のC・C・C の反応は、当事者でなければ傑作だったであろう。後ろ向きだったのが油の切れた機械のようにぎこちなく振り向き、だがその後の反応は過激に過ぎた。

危うくビルの上から落とされるところだったのをなんとか宥めて、とりあえず命を繋ぎ止めたのである。

とまあ、いろいろな理由を総合してみて、C・C・C を副官として頼めることは諦めた方がよさそうだった。

だから奴を生かしたのか、とC・C・に問い詰められたとき、ルルーシュは返事をしなかった。無論そういう打算はあった。

だがそれ以上に、母に対する彼の気持ちを知ってしまった以上、単純に殺したくなかったのである。

(ジエレミア・ゴッドバルト…)

その男が昏睡状態から目覚めたとC・C・から言われ、ルルーシュは追い込まれた。

「ゼロ!?!おのれ貴様…」

「……………」

憎悪の視線に対し、仮面は何も答えない。彼が憎んでも余りある仮面の下で、ルルーシュはまだ迷っていた。

(生かすか、殺すか—)

ナリタでジエレミアを捕縛して以後、この二択の選択はずっと先送りしてきた。が、もはや限界であろう。ゼロとしての裁断は、ここで下さねばならない。

個人的には、殺したくない。例えばナナリーのことを託せば、彼なら喜んで引き受けてくれるだろう。アツシユフォード家にどんな企みがあるろうが、ゴッドバルト家も後ろ盾となれば迂闊なこととはできない。

だが、それらは全て私情である。騎士団と解放戦線を納得させる理由にはならない。無条件で解き放ちでもすれば、ゼロの立場が危うくなる。

殺すしかない。ここは私情を振り払わねば、先がない。そう決意したルルーシュは、首の後ろあたりに回された手に気付いていなかった。

「ん?」

仮面のロックが外れる。壊れたのかと疑ったが、次の瞬間には仮面越しに見ていた世界が本来の色を取り戻す。それが何を意味するかルルーシュが理解したのは、ジエレミアの様子によってだった。

「……………ル、…………ルルル、ルルーシュ、様…………!?!」

がば、と背後を振り向く。そこにはゼロの仮面を遊ぶC・C・の姿

があつた。疑うまでもなく、C・C・がゼロの仮面を取り上げたのである。

「C・C。——!!!」

彼の人生の中でこれ以上の大声を出したことはなかったし、おそらくこれからもないであろう。

「お前たちではグダグダになるだろうから、ちよつと手伝つてやつただけだ。……で、どうする?」

ルルーシュに視線を合わせたまま固まったジェレミアとあまりに予想外の展開で次の手が浮かばないルルーシュの様子を、C・C・は明らかに楽しんでいた。

「どうすると言われても……。俺にはゼロとしての立場があり……。だから……」

しどろもどろのルルーシュの言い訳を、C・C・はにやつきながら見守る。その表情は「殺したくないくせに」と言葉にするよりはつきりと語っていた。

「こ、この件に関しては保留だ!! 処分は追つて知らせる!!」

何だ、逃げ出すのかと追い討ちをかけられたルルーシュは、ゼロの仮面をひったくるようにして部屋を出て行った。

「……それで、本当にどうするのだ?」

一事の茫然自失からは何とか回復したものの、ジェレミアの悩みも深い。憎悪の対象だったゼロの正体が忠義の対象だったルルーシュと知つて、混乱しない筈がない。

問題は、ゼロが反ブリタニアのテロリストだということである。祖国に銃を向けることなどできないと言えばルルーシュを見捨てることになり、ルルーシュに従うと言えば祖国を裏切ることになる。

「ああ、言い忘れていたがあいつの目的は母親の死の真相と父親への反抗、あと妹が政治利用されないように、らしい。マザコンとファザコンとシスコンの塊だな」

言つた本人は大笑いしたが、ジェレミアはつられて笑うこともできない。

「……………」

これまで所属していた組織の事であるから、ジェレミアはブリタニアの軍事力がどれほどのものか把握している。勝つことができるのであれば、奇跡と僥倖に恵まれた場合だけだろう。

そして、ジェレミアとしてはどうすればいいか。ここで自裁すればルルーシュにも祖国にも弓引かないですむが、ゼロの反逆は続く。

結論を言ってしまうえば、ルルーシュが生き延びる可能性を少しでも上げるためには、祖国を裏切っても自分が護る以外に道はないのである。

（マリアンヌ様の死の真相、皇帝陛下への反抗心、ナナリー様の安全――）

その三点でルルーシュが満足すれば、ゼロの仮面は捨てられるだろう。あとは部下としている騎士団員への見返りが必要というくらいか。

厄介なのは皇帝に対する反抗心であるが、これが落ち着いてくれればルルーシュはナナリーとともに穏やかな生活に戻ってくれるかもしれない。

ジェレミアも知っている。マリアンヌ皇妃暗殺事件のすぐ後、ルルーシュは父である皇帝を詰ったのだ。どうして母を護ってくれなかったのかと問い詰める息子に、皇帝は冷徹に返した。

C・Cに言わせると、「ここで優しく言葉をかけてもらっていたら今頃ゼロなどやってない」らしい。……表現は置いておくとして、その観測が正しければ和解の見込みはありそうだ。

（クロヴィス殿下のことは、取り返しがつかないが――）

それでも、この親子の関係を修復できればこれ以上の骨肉の争いは回避できる。マリアンヌもきつと喜んでくれるだろう。

その時まで、自分がお守りしよう。裏切者と罵られようと、卑怯者と蔑まれようと、これがジェレミア・ゴッドバルトの忠義なのである。

翌日、黒の騎士団員に捕虜の死が伝えられた。尋問のため生かしておいたのが、隙を見て自死したという。

それを聞いて騎士団員は残念とは思っても、そこまで疑問に思う者はいなかった。純血派が国を裏切るなど、ありえないことだと思つて

いたからだ。

だから、ゼロと似た仮面をつけた謎の男がこれから副官だと言われ
ても、正体に関する疑念はあったが受け入れられたのである。

外伝 遊園地

—ついに、天使を見つけた。

—皆勘違いしているようだが、俺はロリコンではない。少なくとも奴らが思っているように、幼女に手を出す変質者ではない。

—こういう少女は、隣にいただけでいい。この可愛い存在がいるだけで、幸せになれるものなのだ。それを理解せず人を犯罪者扱いする連中の方がおかしいのである。

そう思った男は、南という。他人が聞けば確実に「変態!!!」と評するだろうが、彼の中では今日の行動は確実に善行なのである。

(この子に頼らざるを得ない俺たちも情けないが、今日ぐらい—)

隣にいるのは、真つ白な少女。十歳そこそこの少女に、一日だけでも戦いを忘れさせてやりたいという願いは綺麗な物であろう。

しかしその思いは、いきなりの鉄拳によって粉碎された。

「み、みみみ南さん!!!見損なつたわ、ついに幼女に手を出すなんて!!!」

弁明の間もなく繰り出された鉄拳を受け倒れ伏す南に、カレンの罵声が浴びせかけられる。

「さ、ネージユ、私たちと行こ。…こんな危ないおじさんと一緒にいたら、何されるかわからないから」

「ご、誤解だ…。そしてせめて『お兄さん』と呼んでくれ……………」
その言葉は相手に伝わることなく、そこで彼の意識は途切れた。

「はあ…、まったく…。危うく組織から犯罪者を出すところだったわ」
「でもやり過ぎじゃないか、あれは。南さん、運ばれていく時も全く動かなかつたけど…」

パトカーで連行されるよりマシよ、とカレンはにべもなく返す。どうやら彼女の中では「南＝児童淫行の犯罪者」という方程式が固まっていたらしい。

ちなみに犯罪者と言えばレジスタンスのメンバーは皆犯罪者となるはずだが、それはブリタニア基準での犯罪であるため彼女に言わせ

れば「同じにしないで」となる。

丁度良くここまで車で送ってもらった扇がいたので彼に南の事を任せ、ライとカレンは少女を連れてチケツト売り場に向かう。

否、連れられているのは二人の方であった。ネージュは右手にライの左手を握り、左手にカレンの右手を握って引つ張っていく。

「南がいなくなっちゃったから、今日は二人が私の面倒を見るの!!!」

たどり着いたチケツト売り場では、販売のおばさんから「あら、家族連れ？ずいぶん若いお父さんとお母さんみたいだけど…」と言われてライとカレンは赤面した。

クロヴィスランド。提案者の名を取って、この遊園地はそう呼ばれる。前総督クロヴィスが表裏なく「皆に楽しんでもらいたい」と思って創設したこのテーマパークは、つい先日開園したばかりだ。

開園初日こそコーネリアとユーフェミアの二人が来園したため客の入りは制限されたが、それ以降は家族連れやカップルで賑わう、トウキョウ租界近郊の新たな行楽地となっていた。

絶叫コースターに乗り、ホラーハウスに入り、巨大迷路を抜ける。「大人でも泣く」と評判の絶叫マシンでもネージュにとっては何てことないらしい。

考えてみれば普段からナイトメアフレームを駆使しているのだから、絶叫マシンくらいで泣き叫ぶような子ではない。

ただ、戦闘とは無縁に遊び回る姿は、本当に楽しそうだった。

「ほらほら、こっちこっち!!!」

はしやぐネージュの姿は外見相応であり、何も知らない人は子供の無尽蔵なエネルギーに付いて行けず苦笑いして見守る若夫婦と見て、仲のいい家族だと思っていた。

「……娘を持った父親って、こんな感じなのかな」

ぼろっと漏らしたライの言葉に、カレンは一瞬思考が停止した。ネージュが娘、ライが父親とすれば、当然母親に擬されているのは自分である。

「あ、あのね、そういう話はまだ早いんじゃないかなー、って思うんだけど…」

「??？」

カレンの意図が理解できず、ライが首をかしげる。「やはり本当の娘が欲しいよね」という意味と受け取った彼女と違って、ただ感じたまま言っただけであったのである。

「それじゃ、お昼にしましょ」

芝生が広がる広場にシートを広げて、お弁当の包みを開く。二人分にしては多いが、三人分となると食べたら足りない。不足分は、後で買いたいなり何なりで補えばいいだろう。

「ライのお菓子もあるの？」

好き嫌いを言わないネージュが唯一執着するのがライの菓子なのである。ときには、クラブハウスのライの部屋を訪れてくることもある。

出来上がったタイミングに計ったように来るのでライもカレンもいぶかしんだが、最近はもう諦めの境地にある。ネージュに対しては常識の物差しが通用しないという事は、経験からわかってきていた。

「おにぎりに鶏のから揚げ、玉子焼き……。定番の品ばかりだな。……ピザはないのか？」

「ピザなんてあるはず……。ってアンタは何してるのよ!!!」

団欒を楽しむ母親の肩越しに、弁当を覗き込んできたのはC.C.であった。ちなみに今日の服装はごく一般的なものである。ゴスロリ服で懲りたルルーシュが、新しく買い与えたものだ。

「別に、ここに私がいたところでおかしくはないだろう。……というのも園内限定のピザがあるというのでやって来たわけだが、まあ満足できるところか、というレベルでな」

その帰り道、三人を見つけたので話しかけてみたのだという。そう話しながら、ライの菓子だけはしっかりつまんでいるのだがら侮れない。

「そう不審な目で見るな。私個人としては、お前らとは良好な関係を築きたいと思っているのだし」

黒の騎士団の幹部、というので警戒をあらわにするカレンに対し、

C・C・は宥めるように言う。そう言えば、ライは顔を隠していたのだから『蒼』と知らない筈―。

「言いふらしたりはしないよ。だからそれをしまえ」

腰の後ろに回した手で隠しナイフを展開したカレンだったが、先を越された。だが、『蒼』の正体が騎士団の関係者にばれているというのは安心できない。

「大丈夫。C・C・ならライの不利益になることはしないから」

そう言っただけでカレンの殺意に水を差したのはネージュである。ネージュが「大丈夫」と言った場合は、本当に大丈夫なのだ。

「ネージュがそう言うなら、まあ…。ライもそれでいいの？」

「知っていて話しかけてきたみたいだし、それならその気があればもう広まっているだろう。君個人に対しては、思うところはないし」

ライからもそう言われると、カレンとしても寛容にならざるを得ない。「どうなっても知らないわよ」と拗ねたように言い、だがナイフの刃は引つ込めた。

「それにしても、お前らはこんな大きな子持ちだったとは…」

「そんなわけないでしょ!!!知り合いの女の子よ!!!」

年を考えればわかりきったことで、C・C・とてからかう為に言ったのだ。反応を見てくつくくと笑う姿に、ルーミアとどっちがたちが悪いか考えてしまったカレンである。

こんな女を傍に置いているとなれば、ゼロの心労も相当な物だろう。いや、そういう点も含めて好きになったので苦労はないのだろうか。

「……ところでお前、記憶がないそうだな。取り戻したいとは思わんのか？」

C・C・の直球すぎる問いに、カレンが固まる。天叢雲でもアツシユフォード学園でも、意識的に避けてきた問いだった。それをこの女は、何の遠慮もなく切り出したのだ。

しかし、問われた本人はそれほど気に障ったという印象はない。微笑を浮かべたまま、静かに返した。

「取り戻せばいい、とは思うよ。でも…」

「でも？」

「取り戻せなくてもいい、という気持ちもある。こんな僕でも、受け入れてくれた皆がいる。それが僕には、とても嬉しい」

その答えに、カレンはほっとした。C・Cは少し残念そうな表情で黙りこみ、ネージュはいつも通り感情を表さず見守っていた。

ピザ完食後だというのに、C・Cは結構な量を食べた。「いつか礼はするよ」とは言っていたが、食べるだけ食べて帰っていったのである。しかも、明らかにライが作ったものを狙っていた。

「何か買ってくるよ。もう少し食べないと、どうにも胃が落ち着かない」

表情に現れるくらい不機嫌になったカレンに、ライは苦笑いしてなだめにかかる。ただし二人分の弁当を四人で食べることになったので、足りないのは事実である。

園内には売店もレストランも充実しているし味の方にも力を入れているので、困ることはない。当初予定になかった日本のB級グルメも出店していたりしていて、なかなか人気を博している。

「あ、私クレープ欲しい。カレンもそうでしょ？」

偶然なのか、知ってて言っているのか、カレンはつい疑ってしまった。子供のころ、母に買ってもらったクレープはおいしかった。そのことをこの少女は知っているのではないか。

(まさか、ね…)

人の記憶を覗き見でもしない限り、あり得る話ではない。常識で考えて、そんなことは不可能だ。だからこれは、偶然食べたいものがないというだけだろう。

ライが戻ってきたころには、カレンの機嫌も直っていた。

そこから夕方までは、ごく平穏な半日が過ぎた。ネージュはアトラクションを大いに楽しみ、ライとカレンは二人きりのデートという予定はご破算になったものの、これはこれで楽しかったと思っている。

最後の閉めとして、大観覧車に乗った時のことである。ネージュがいきなり、しんみりとした口調で言い始めた。

「…………私ね、初めてだったんだ」

何を、と聞けば、こんなふうに関子連れ感覚で一日遊び歩くことだという。親も兄弟も親戚もいない。彼女はずっと独りきりだった。

「ねえネージュ、やっぱりあなたみたいなお子に戦わせることって——」
戦力として、ネージュの存在は大きい。しかし子供は、今日みたいに戦いと無縁の日々を楽しむべきではないか。

(お母さんも、こんな気持ちだったのかな)

兄がレジスタンスを組織したとき、母はカレンには距離を置かせようとした。今ならば、その気持ちがよくわかる。

「気にしないでいいわ。そう決めたのは私の意思。強制されたわけじゃないし、第一、私、あなたたちより年上だし」

「……………はい?」

理解不能なことを言われ、間抜け面でカレンが固まる。せつかくの配慮を無にされたのはまあいいとしても、『年上』とは何なのか。

「正確な年齢なんて自分でもわからないけど、少なくとも十八歳は越えているわ。いわゆる『合法ロリ』ってやつね」

えっへんと無い胸を張って宣言するネージュに、二人の困惑は頂点に達した。ちょうど観覧車が一周し、係員に「降りてください」と言われなかったら、固まったままもう二、三周していたかもしれない。

「それじゃあね、今日は楽しかったわ。お父さんとお母さんができたみたいだから」

去り行くネージュを見送りながら、二人はまだ先ほどの言葉を消化できずにいた。この少女としか見えない存在が十八歳以上など、にわかには信じられるものではない。

「き、きつと冗談で言ったのよ。私たちに心配させないように、ね!」
「う、うん。僕もそう思うけど…」

しかしながら、二人とも心の底では何となく納得している。あのネージュが、ただの幼女であるなどは断じて思っていなかった。……………それでもショックは大きすぎたが。

「……………不思議なところはいっぱいあるけど、ネージュは決して悪い子じゃないし、僕たちの仲間だっていうのは変わらないよ。それで充

分じゃないかな」

「そ、そうよね。あの子は味方!!重要なのはそこよね…」

とりあえず、このくらいの結論に落ち着けておくのが無難だろう。そう思った二人は、この件はこれで終わりにすることにした。

おまけ

翌朝、ルルーシュは夢の続きかと思う光景を目にした。C・C・がキッチンに立っていたのである。

「……何をしているんだ、お前は？」

「見てわからんのか？弁当を作っているところだ」

いや、料理をしているというのはわかる。問題は、どういう風の吹き回しかということだ。気まぐれにしても、予想外すぎる。

「なに、少々あいつらに借りができたのでな。ついでにお前の分も作ってやった。感謝して食べるよ、ルルーシュ」

押し付けられるように弁当包みを渡されたルルーシュは当惑したが、といって捨てるのも誰かにくれるのとはばかられる。

仕方ない、自分で食うかと決めたルルーシュであったが、多くの人がいる学食で包みを開いたのは不用心だった。

味は極上であったが、まるで漫画にしか出てこないような愛妻弁当がリヴァルとスザクに見つかり、学食中が大騒ぎになったのである。

外伝 三人官女の飲み会

「それじゃあ、奏の副長就任を祝って…、乾杯く!!!」

井上、小笠原、桐生の三人が大ジョッキを打ち付けて、中のビールを飲み進める。こうやって、女性だけで飲みにくるというのも久しぶりのことだった。

「やっぱりこの品揃え…。悪いけどゲットーとは比べものにならないわね。…ねえ、何から食べる?」

以前の日本であれば、居酒屋くらいある程度都会の駅前ならどこにでもあったであろう。チェーン店はブリタニアの統治下で姿を消し、ゲットーで細々とやっている店はあるが、当然ながら品揃えは悪い。

この店は、ブリタニア所管の区画、つまり（隅の隅ではあるが）租界の内にある。内装は綺麗だし、仕入れもNACが協力しているので充実していた。

「…こういう光景を見ると、頑張ったかいがあったって実感するわ」
シンジユクゲットー再開発区。行政区分では租界の一部となったこの一角では、かつてのようなチェーン店の居酒屋が復活していたのである。

「皇女殿下サマサマってね。シンジユクも、昔のにぎやかさを取り戻せばいいんだけど…」

シンジユク事変にて廃墟となったゲットーの土地を強権発動で接収し、更地にするところからユーフェミアの復興事業は始まった。道路や水道などのインフラを整え、家を建て、NACと協力して企業を誘致する。

他には憩いの場として日本古来の様式に忠実な庭園を造ったりなどして、『入れ物』の建設はどんどん進んでいるのである。

だが、中身がなくては『入れ物』は用をなさない。その中身が、今回の再開発がこれまでと違う、という証拠であった。

用地押収ならこれまでにもたびたびあったが、そこに住んでいたイレヴンは何の補償もなく追い立てられた。そして造られたのは『ブリタニアのための施設』である。

今回は、そこにイレヴンを住まわせる。職を提供するのもNACが主体で、言ってみれば税金の納め先がブリタニア、というだけの日本人街ができたのだ。

「……祝ってくれるのはいいけど、まさか私が選ばれるなんて思っ
てなかったから、聞いた時は正直戸惑ったね。木下さんの代わり、務ま
るか不安だわ」

カレンに対して影響力のある旧知の二人が推挙してくれたのかと
思ったが、それは否定された。その関係も考慮に入っているのだろう
が、カレンは自分の意思で彼女がいいと選んだのである。

「でも、責任重大だよ。何しろうちの棟梁はあの子にお熱だから。何
かあったら、本当に首が飛ぶかもね」

「やめてよ、晴香」

小笠原の冗談は冗談で済むかどうかわからない、という事は二人も
知っている。河口湖の件は、幹部には話されていた。

当然、その時ライが「カレンをひっぱりたい」だけの解放戦線の兵
士を斬り殺した、ということも。

「本当に愛されているわよね、あの子」

しかし、その先はため息となる。妹分がいい相手を見つけたという
のに、姉分の井上と小笠原には相手がいないのだから。

(ま、私は違うんだけど…)

二人にも内緒にしているが、実は彼氏持ちな桐生である。相手はご
く普通の日本人男性で、名誉ブリタニア人になって租界で働いてい
る。リフレインの一件で改善されたおかげで、待遇は決して悪くな
い。

「そうは言っても、相手としてどうかと思う男ばかりだし…」

扇は真面目なだけでつまらなそう、玉城は下品、卜部は食べ物の趣
味が駄目、南はロリコン…、と次々に組織の男を酷評していく。アル
コールの力によって、毒舌は滑らかだ。

ちなみに村上は妻子持ち、小野寺は故郷に許嫁がいるというので、
評価対象から除外されている。

「朝倉君は？」

その中で桐生が挙げた名前に、小笠原が考え込む。確かに、同僚の中では最上の選択肢かもしれない。しかし井上は、自分にその気がない事を明確にした。

「……あいつは駄目。だって、明らかに好きな奴がいるから」

誰、とは言わなかった。井上から見ると明らかなのに、目の前の人気が気付いてないのが何とも歯がゆい。

「むむむ、ナオツーは候補外か……。そうになると、本当にいい相手がいなくなるぞ……」

どうやら鈍いのは、ライとカレンだけではなかったらしい。これは朝倉も苦勞するだろうと、井上は友人のために息をついた。

「へっくし!!!」

「……どうかしましたか、朝倉さん？」

心配する小野寺に対し、風邪ではないと思うが、と歯切れ悪く返す。しかしそれは、なら女の人が噂してるんじゃないですかとさらなる返しで報われた。

「……あのな、小野寺。俺が女の噂になるような男だと思うか？」

「思いますよ。自覚なかったんですか？……それに今日、井上さんが友人を連れて飲みに行ってるって話でしたし。思い人が噂してるのだといいですね」

にや、と小野寺が笑う。『蒼』は無頓着だったが、彼は気付いていた。朝倉が自分の部下に井上を希望したのは、その友人である小笠原が訪れてくることを期待してのものだったということにも。

「……『月下』のシミュレーション、もう一戦行くか？」

殺意を込めた目で促す。シミュレータであるから怪我一つ負うことはないが、何であろうとボコボコにしないでは気が済まない。

ちなみに朝倉と小野寺の実力は、ほぼ互角。村上は老練さで二人の半歩先を行き、卜部はやはり一段上の存在だった。

「いいですね。俺だって生き残らなくちゃなりませんから。生き残って、許嫁と結婚するんです」

小野寺は、元々キョウト六家の親衛隊。言ってみれば「いいところ」の

生まれである。家の都合もあり、幼いころから結婚相手を決められていた。

「でもいい人ですよ。家ぐるみの付き合いがあつて、俺より三つ上の姉みたいな人でしたから」

俺たちの人生が誰かによつて作られた物語なら、間違いなく今のは死亡フラグだな、と朝倉は物騒なことを思う。しかし小野寺は、それも弁えて言ったのだ。

「大丈夫ですつて。『蒼』はちゃんと、俺たちが死なないように考えてくれますから」

そう信じられる人だからこそ、小野寺は残つたのだ。「御国のために死ぬ」などとほざく指揮官であれば、いくら神楽耶の命令であつても見限つていた。

「俺は日本を取り戻したいですが、それは彼女と幸せな家庭を築くための前提ですからね。もちろん皇家に対する忠誠だつて嘘じゃありませんけど、彼女に比較できるものなんて存在しませんよ」

にっこり笑いながら言う相手に、なるほど、こいつは死なないなど何となく納得した朝倉である。追い込まれようが、ちやつかり生き残る要領のよさがある。

その後のシミュレーション勝負は一戦で終わらず、それまでと合わせて5勝4敗で朝倉が勝つた。最後の一本について、「実機なら殺してでも勝つ気でしたね、あれは」とは小野寺の感想である。

「……ところで、二人とも新型を使うんでしょ?」

少々声を潜めて、井上が聞く。四人用の個室ではあるが、具体的な名称を出さない程度の用心はしている。

「私の方は、数が余れば、だと思ふけど。晴香は間違いないでしょうね」

「そうなんだけどねー。ぶっちゃけ不安」

真田が抜けて、通常部隊は五部隊編成になった。隊長を務める五人の中で、自分が最も弱いという自覚が小笠原にはある。

「何であたしがいまだ隊長やつてるのか、自分でもわからなくなるこ

とがあるんだよね。そりや操縦にはそれなりの自信があったけど、せいぜい『上手いアマチュア』だよ、あたし」

それは違う、と井上は思う。小笠原が『アマチュア』なら、自分など素人でしかなくなってしまう。ライやカレンを基準として考えているからおかしくなるのである。

(でも、下手に持ち上げて天狗になるよりか卑下していた方が…)

そう思ったのは桐生も同じらしく、二人ともあえて慰めの言葉を一切口にしなかった。

「……もちろんあたしだって死にたくないから、誰かに教えを請おうとか考えてはいるんだけど」

誰に請うか、が問題なのである。ライの緻密さは真似できない。カレンは同じ感性タイプであるが故、教官とするには不安がある。ルーミアは後衛であり、戦闘スタイルが違う。

「うちのカルテットで残るはネジユちゃんってことになるんだけど、幼女に教えを請う光景を想像してみてもよ…」

その躊躇は理解できる。はつきり言って、情けない。隊長の威厳なご木端微塵に吹っ飛ぶだろう。

「そうなることやっぱり朝倉あたりに相手してもらえばいいんじゃない？ 私、頼んでみようか？」

「うーん、やっぱりそれがいいかなあ…。よし、お願いするわ！」

援護射撃はしてやったぞ、後はがんばれ。そう井上が思った時、小野寺と対戦中の朝倉がまたくしゃみをしたかは定かではない。

「……………で、あのネージュって子、何者なの？ 後になって知っただけど、参入者の選別はあの子がやっているとか…」

当然、桐生もその洗礼を受けた一人である。その時は扇の隣にちよこんと座っているだけで何でここにいるのかと思ったのだが、裁定はその少女が握っていたのである。

「ぶっちゃけ、あたしたちにもわからんのよ。よくよく考えてみるとあんな子供がいるなんておかしいと思うのに、何でだか『あの子は例外』って認めちゃってさ」

戦う意志も力もある。決して強制したわけではない。そう思う

のだが、どうも認めた後の言い訳に思える。どうして認めたのか、その最初の所がわからない。

「催眠術でも使われたのか、ってくらい不思議なのよね。あの子のことで知ってることなんて何もなくていいのに、別に変だっと思わないのだから」

噂レベルでなら、いろいろある。例えば素性に関してならブリタニア皇帝の隠し子、EUの大物政治家の娘、実はライの娘、と言った具合だ。

ちなみに最後の噂については、本人曰く「天涯孤独」らしいのでカレンが養女にして引き取ろうと考えているとかいないとか。

「…まあ、強くて頼りになる味方だっというのとは間違いないから、根掘り葉掘り追求する気はないんだけど。そのうち本人が話すでしょ」

桐生もすっかり懐柔された一人らしい。井上や小笠原はネージユにいろいろな服を着せて楽しんでおり、遠目から見ただけだった彼女も実は興味津々だったのである。

ちなみに、撮った写真の売り上げは山分けされ、この飲み会の軍資金になっていた。

「そうだねー。そういうことはいつかのことにして、今日は楽しませよ。…おっ、来た来た」

その豊富な軍資金を使って、三人は天然物の刺身十点盛りや黒毛和牛のすき焼きといったこの店の高額品をどんどん注文していく。少なくとも玉城主催の飲み会ではありえない豪華さである。

「んー、やっぱりこういう時は贅沢しなくちゃね」

これだけでも、ネージユには感謝するべきではないか。三人揃ってそんなことを考えながら、夜は更けていった。

「…………どっちだ？」

蒼です、という返答に、コーネリアの渋面がさらに渋くなる。予想できたことであつたが、こうもあつさりやられると心中穏やかではない。られない。

「こちらがわざと流した情報は、あつさり罫だと見破られたか」

「囷には目もくれませんでした。よほど強力な諜報網を持っているようです」

補充のグロースターが、奪われたのである。港で積み下ろしが終わった直後に現れたのだから、確信を持って目を付けていたのだろう。

とは言つても、全ての機体が奪われたわけではない。グロースターは三艘に分散させて運び込んでいたので、二艘分は無事だ。

いくら相手の諜報網が強力と言つても、さすがに全てが筒抜けというわけではない。もしそんな事態になっていたら、戦略の破綻以前の問題になってしまう。

(強奪二機、破壊されたものが一機…)

サザールランドも三機を奪われた。機体に識別信号とは別の発信機を仕込んでおいたが、その程度の小細工で本拠が突き止められる相手なら苦労はない。

「相も変わらず、嫌な動きをする。……まあ、今回は七機の補充ができただけ良しと考えよう」

それしかない、という気分である。半ば、自棄になっていた。

『蒼』と比べれば、正面から挑んでくる分ゼロの方がはるかに与し易い。『負けない』ことを目的とした相手と『勝つ』ことを目的とした相手の差なのだが、いくらコーネリアでもそこまでは読めていない。

ただ、二人の戦略に温度差があることは感じていた。

一方で、ブリタニア国内にも温度差はある。コーネリアの強硬路線とユファイの穏健路線の対立…、とは言つてもエリア11内ではなく本国での話である。

「ブリタニアの威光を示すためにはただ力あるのみだ。懐柔などという行為は反抗を叩き潰す力がないことを示すだけではないか」

二人の皇女に対する批判となるので表の声にはならないが、裏でそういう声が上がっていることは知っていた。逆にユファイに賛同する声もあることはあるが、比べればひどく小さい。

疑問なのは、それに対し皇帝が全く関与するそぶりを見せないことである。

「やらせてみるがいい」

ユファイがナンバースの待遇改善を言い出した時、危惧する廷臣たちに下した諭言はこの一言だけだった。口には出さなかったが、やる気があるのかと思った廷臣は多かつただろう。

元々、皇帝シャルルの治世は対外的な功績こそ目覚ましいものの、内治に関しては墨守の一言に尽きる。他国を攻め取ることにしか関心がないのではないか、とあってしまうほどだ。

とはいっても、それが廷臣たちの間で問題視されてきたわけではない。旧例、慣例からはみ出すことのない君主というのは、臣下にとつては理想像の一つであろう。

さて最初の疑問に戻れば、皇帝は何故ユファイの行動を黙認するのか。これまでのやり方が絶対だと言うのなら、ユファイの行動はそれに真っ向から対立する。逆行行為と言いだしてもおかしくない。

本当に内政に関して無関心であるなら、問題ではあるが流せる範疇である。現状を見れば決して悪政ではなく、問題と言っても最後の可能性に比べたら微々たるものでしかない。

その最後の可能性とは、「内心ではユファイの穩健路線に賛成である」というものである。

「……………」

内政の無関心は韜晦のため本心を欺いていたからであり、穩健路線には内心賛成なのだから問題視するはずがない。

あり得ないとは思いながら、しかしもつとも説得力がある。皇帝だからとてすべてのことを思い通りにできるわけではない。

下手なことをすれば暗殺、謀殺の憂き目に会うのは、幼少時の経験

や『血の紋章事件』で明らかだった。シャルルは時間をかけて、危険を一つずつ取り除いて行ったのだ。

「……コーネリア様？」

セラフイーナの声に、現実に戻る。皇帝の内心を忖度したところで何もならない。今はとにかく、このエリアー11の事を考えねばならない。

「…ああ、それで、ゼロの方の動きは？」

「依然、沈黙を続けています」

ナリタ戦から、半月ほど。いまだ、状況は動かない。コーネリアは守勢を固め、ゼロは攻勢に打って出る機がまだ熟さずにいる。

だが、房総半島の山間部はもはやブリタニアの威令が及ぶ地ではなくなっていた。今や完全に、ゼロの支配下と言っている。

ここが敵の勢力圏となると、ブリタニアの防衛拠点は第一にキサラツ基地、第二にサクラ基地となる。この二つが抜かれると、あとはトウキョウ租界外周部で迎え撃つしかない。

だから本当は、両基地に信頼できる司令官を送り込みたかった。だがキサラツは前回の襲撃の責任を問うて更迭したばかりで、サクラは大過なく運営されてきた。

そして頼りになりそうなのは尉官クラスの親衛隊員だけとなると、組織運営の観点からそこまで横車を押すことは避けたかったのである。

一応、キサラツにはクラウディオを、サクラにはセラフイーナを軍監として送り込んである。後は司令官の器量に期待するしかなかった。

（『蒼』さえいなければ、もっと兵力を回せるのだが…）

クライディオとセラフイーナには、それぞれ親衛隊から六機を付けた。それが限界である。やはりここでもアレックス隊の壊滅が響いている。

トウキョウ租界を手薄にすれば、嬉々として『蒼』が攻め込んでくるだろう。その恐れがある以上、コーネリアは租界を離れられない。

難敵であることを考えればギルフォードを手元から離すわけには

いかず、全体の情勢を見てどの局面にも対応できるようダールトンも遊軍にしておく必要があった。

「……そう言えば、特派はどうしている?」

ふと思いついたコーネリアがつぶやく。というのも厄介事の種になりそうな事を持ち込んだ人がいて、自分の権限で何とかしてくださいと突っ放したからである。

「おおー、これが私の新しい機体か。…これから、長く頼むぞ」

新たな機体を前に、ノネットが感嘆の声を上げる。そして前のヨーヴィルにも勝る愛機となって欲しいという思いで語りかける姿は、研究者からは好ましいものに映った。

そう。

ナリタ戦でヨーヴィルを失ったノネットは、特派に機体の作成を依頼したのである。

「機体名『ベデイヴィエール』。ずっと気になっていたのですが、どうして『ベデイヴィエール』なんです? トリスタンとかラモラックとか、強いとされる騎士の名前はあったでしょうに…」

「何もおかしくなどないぞ。カムランの戦いで生き残ったという伝承を考えればな」

つまり、「縁起がいい」という理由である。ノネットにしてみれば、強いよりそちらの方が重要なのである。横死した騎士にあやかるなど、まったくもって気が進まない。

「…注文通りに設計しましたが、本当によろしいのですか?」

セシルが最後の念押しで問いかける。というのもベデイヴィエールのコンセプトはヨーヴィルと同じであり、つまり紙装甲の高機動重視というもの。

ヨーヴィルから見て上がった出力を、装甲の強化ではなくさらなる機動力の向上に振り向けたのである。

主武装も、二本のランスという点では変わってない。ただしこのランスは特派開発の新技术であり、これまでの装備とは一線を画するものとなっていた。

装備名『ロンゴミニアト』。ブレイズルミナスを発生させながら高速回転する槍である。サザーランドの装甲ぐらいいは、触れるだけで削り取る。

「ん〜!!!さっそく他のラウンズと一戦交えてみたくなるな」

説明を受け、ノネットのテンションはさらに上がる。ちなみに、ベデイヴィエールの性能なら他のラウンズ機も上回る。この時点ならば、間違いなくノネットが最強となるだろう。

他の装備として、短剣が二本。MVSが一本。さらに肘膝はニードルブレイザー内蔵であり、近接格闘戦となれば他の追従を許さない。

両肘のニードルブレイザーはシールドにもなるため、装甲の薄さもある程度補える。シールドを抜かれたら終わりという脆さはあるものの、ヨーヴィルから見れば格段の向上だろう。

一方で、遠隔戦は変わらず貧弱である。一応スラッシュハーケンはブースター付きになり変幻自在に動くよう改良されたのとセンサー類は強化されたが、武装自体の追加はない。

「それでいいのさ。ベデイヴィエールは前衛。万能型や後衛は、他の機体に任せればいい」

搭乗者の意見は、そういうものだった。

「馴らし乗りも兼ねて、ランスロットと模擬戦を試みたらどうでしょうか?」

そう言い出したのは、他でもなくランスロットのデヴァイサーであるスザクである。ノネットはノリノリで受けたが、セシルの心中は穏やかではない。

(このところ、スザク君は焦ってるみたいなんだけど…)

憑りつかれたかのように訓練に打ち込む姿にロイドは欣喜するが、セシルにしてみればその心境の変化の方が気になるのである。

元々、人の死を極端に嫌うくせに自分に関することだと度外視して、歪んでいるという印象はあった。こここのところ、それが一層悪化したという気がする。

話を聞いてみようにも、「思うところがありませんでしたので」としか答えてもらえず、どうすればいいのかわからない。

もう一人、同じような人物がいて、こちらもセシルには悩みの種だ。「あの、私の機体も用意するとのことでしたが…、こちらでしようか？」

こちらの方もセシルにはどうしようもない事は同じだが、理由がわかるだけまだましだ。兄が軍人の道を捨てることになった傷を負わせた相手に対する復讐心が、今のマリーカを突き動かす原動力である。

素質は、上々と言える。さすがに士官学校の秀才であっただけあり、ランスロットにも充分対応できた。ノネットという師匠が入り浸りだったのも大きく、操縦技術だけなら充分戦場に出る力がある。

ただ、自分を顧みず目的に向かって盲目的に驍進しているのは、スザクと変わらない。

「んー、これはね、君の機体じゃないんだ」

マリーカが指差したのは、月夜のような紺青の機体だった。ロイドによれば、「まだデヴァイサーが見つからない」のだという。

その言葉に、マリーカは首をかしげた。自分が乗りこなせないとと言われるのはいいとして、ここには帝国最強の騎士の一角がいるではないか。どうして彼女の乗機としなかったのか。

「近接格闘戦だけならスザク君やエニアグラム卿でも充分だろうけど…。でもこの機体はそれだけじゃ乗りこなせない」

この機体は、『万能の最強機』を目指して作られたもの。『万能』というのは、ひっくり返せば何も得意がないということである。

ゆえにこの機体は『最強』でありながら、『第一人者』ではない。例えば近接戦だけで見れば、ベディヴィエールが上回る。しかし、総合力で見ればこれを上回る機体はない。

「だから、この機体はラウンズでも乗りこなせない。どんな局面にも対応できる操縦技術に、状況に対する判断力と柔軟性が必要なんだ」ということは、これがロイド伯爵自慢の『あれ』か」

ブリタニア国内でも、有名になっていた。ラウンズ級の実力者でも『不適合』とされた、ブリタニアの技術の粋を集めた機体を作っている、と。

「そう、機体名『ウラノス』」

ギリシア神話の天空神の名である。そのネーミングは、これまでのナイトメアとは一線を画する存在であることを語っていた。

「……予算が付いたので実際に作ったんだけど、デヴァイサーの選定はランスロットの時以上に難航しているんだ」

仮にマリーカを乗せたとしても、サザーランドやグロースターでは及びもつかない性能を発揮するだろう。だがそれが『ウラノス』の全力ではない。それでは、作った意味がないのである。

ちなみに特派の予算は基本的にエリアーの予算から独立しており、今回はナイトオブブラウンスの依頼という事で臨時に付いたのであるが、ロイドは優に数機分の建造ができる額を要求した。

それに気付いて渋面な官僚を前に、帝国宰相のシュナイゼルは微笑しながら判を捺したという。

「……そういうわけで、マリーカ君の機体はこっち。機体名『ラヴェイン』」

ベデイヴィエールとは対照的に、半身を覆うほどの巨大な盾を装備した機体である。主武装がガトリング機銃というのも、マリーカの実力に合わせてものだ。

つまり、「充分戦場に出る力がある」とは言ってもスザクやノネットのような機動はできないので、防御力を高めて中、遠距離戦に対応するようにした機体だ。

自分の専用機を目の前にして目を輝かせるマリーカに、セシルは嘆息する。畏れ多いことだが、この気持ちを共有してくれそうな人はこの場に一人しかいなかった。

「……………」
その人であるユーフェミア皇女殿下は、冴えない表情で考え込んだままだ。

「……………」
下を向き、もう一度嘆息したセシルは、がたっと勢いよく立ち上がる音に再び顔を上げる。そこには、何か意を決したユファイの表情があった。

そのユファイはつかつかと模擬戦の準備をしていたスザクに歩み寄り――

「枢木スザク准尉、あなたを、わたくしの騎士に任命します」

その宣言に、特派中が静まり返った。

ブリタニアの皇族は、選任の騎士を持つ。いつから始まったのか定かではないが、大帝リカルドの時代にはすでに当然の慣例として定着していた。

大帝リカルドの騎士リシャル・エクトル卿、『王』の騎士ユーイン・エニアグラム卿を始め、騎士として選ばれる人はその皇族にとって代え難い存在であった、とされる。

当然ながら、その全てはブリタニア人。名誉ブリタニア人を騎士とした事例など、これまでに一件もない。

「ですが、『名誉ブリタニア人を騎士にしてはならない』という法はありません」

「……………」

そう言われると、コーネリアとしても返す言葉がない。騎士の選任は皇族の特権であり、他の皇族と言えど関与する権限はない。

ただ、姉として意見することならできる。そのため「名誉ブリタニア人を騎士に」などと血迷い事を言いだした妹を諭そうと思ったが、逆に言い負かされたのだ。

確かに、騎士の出自を規制した法は存在しない。それ以前に『選任騎士』という存在を明確に規定した法がないのである。

慣習法の、誰も考えなかつた穴を突かれた。『蒼』の考えも読めないが、それに負けず劣らずで妹の考えも読めない。

唯一、法的根拠がなくともこれを覆せる権力を持った皇帝は、やはり「好きにせよ」と言っただけであった。

「……………わかつた、お前の好きにするがいい」

法に違反しておらず皇帝も問題視していない以上、コーネリアは認めることしかできない。長い沈黙の末渋々認める、というのがせめてもの抵抗であった。

「同時に、枢木スザク准尉を少尉に昇進させるよう手配しよう。……これでいいな、ユファイ」

皇族の騎士が准士官では、あまりにも立場が軽すぎる。最下級とは

いえ正式な士官にする必要があるだろう。無論、正式な士官として幹部候補生の養成訓練を受けてもらい、試験をパスしてもらおうことになる。

本当であれば佐官くらいの立場は欲しいところだが、彼にはランスロットのデヴァイサーに選ばれて以来、万人が認めざるを得ないような功績がない。

あの『蒼』では相手が悪い、というのは理解できるが、これではあまり大きく昇進させるわけにはいかなかった。

「スザクなら大丈夫です。ああ見えて、彼は結構頭がいいんですよ」試験で駄目ならば、それを理由にもう一度反対できる。そういう考えもあったコーネリアに対し、ユフィは太鼓判を押す。

実際、編入当初こそ苦勞したものの、学園でのスザクの成績は悪くない。どれほどいい点でも出席日数が足りないので追試確定、というのが悲しいが。

指揮官としての素質は未知数だが、性格から考えると正攻法で圧倒するタイプであろう。応變の才は欠けるかもしれないが、下手に小細工を弄する指揮官よりは好感を持てる。

問題はやはり、『名誉』という一点に集約される。

「……………」

一礼したユフィが立ち去り、閉まったドアをコーネリアは無言で見つめていた。

今回のことでよくわかったが、ユフィは本気なのだ。本気でブリタニアの国是と激突することも辞さないでいる。

これまでの無茶は、結果的にブリタニアの役にも立っている。例えば待遇改善以降、エリアー1の経済短観は上向いた。

給料が上がり生活が楽になったナンバーズや名誉ブリタニア人の消費が活発になれば、これは当然と言える。それは税収増や企業の増益として帰ってくるため、ブリタニア人の理解も得やすかった。

しかし今回の騎士の件は、極論すればユフィのわがままだ。これは、当事者を除く誰も益さない。強いて言えば日本人の好感を買うことが利と言えるが、それはこれまでの業績で充分得ている。

法に違反していないとはいえ、ブリタニア内の反発は必至である。それでもやるといふ事は、その反発を受けて立つ覚悟がなければできない。

(騎士さえ決まれば安心できると思っていたのだが―)

どうやら、妹を見損なっていたらしい。これが単なる大うつけなのか類稀なる大器なのか、この時のコーネリアには判別がつかなかった。

「ただ今戻りました」

アツシユフオード学園、生徒会室。ユフィは何気なく『戻る』という言葉を使ったが、もう彼女の居場所はここになっているらしい。

その生徒会室では、当然スザクが質問攻めにあっていた。しかし、彼にも答えられることは少ない。何しろ突然のことだったので、相手の意図が全く解らなかつたのである。

「どうしてこんなことをしたか、ですか？……スザクには、もつと自分のことを大切にしてほしいと思つたからです」

好奇心で目をきらつかせた生徒会長の質問に、ユフィはあつさり答えた。

元々、スザクは自己犠牲の精神が強かつた。それは何に起因するものかわからないが、他人が気安く手をつ突つ込んでいい問題ではないくらいはわかる。

「ですが、ここ最近のスザクは明らかにおかしいです。登校もせず、軍務に打ち込んでばかりで…」

と言つても、いきなり騎士任命はないだろう。特派を大混乱の渦に巻き込んだユフィは生徒会も困惑の淵に沈め、本人は「お姉様を説得してきます」と軽く腰を上げ、今戻ってきたところなのだ。

スザクとしてはコーネリアの反対で立ち消えになるかもと半ば期待していたが、ユフィはあつさり乗り越えてきたのである。

「…ユフィ、やはり騎士はブリタニア人から選ぶべきだと思う」

身近で気心の知れた人がいいとしても、候補はいる。そう思つてスザクが視線を向けたのはライであり、マリーカだった。

軍人ではないが、ライの実力は確かである。個人的な武勇に加えて政戦両略に長けた彼なら、自分よりはるかに立派に騎士としての役割を務めてくれるだろう。

一方、マリーカは名門貴族出身かつ士官学校の優等生で、無用の軋轢を生む要素はほとんどない。実戦経験なしというのも、彼女の實力なら挽回は難しくない。

ちなみにマリーカが特派に入り忙しくなったが、ユフィは他の従卒を持つとはしなかった。ルルーシュとナナリーの事で他に人を入れたくないというのもあるが、本人も特派に入り浸りであり困つてないのである。

「……僕を逃げ道に使うな。第一、ユフィの騎士は君の方がふさわしいのだから」

助けを求めるようにちらりと見た視線を受け、ライが言う。しかし、何故自分の方が騎士にふさわしいのか。スザクには、とてもそうとは思えなかった。

「簡単なことだよ。ユフィがそれを望んでいる」

それだけ？、とスザクはあっけにとられた。逆にユフィは、我が意を得たりと目を輝かせる。

それでも踏ん切りがつかずにいるスザクに、次に声をかけたのはナナリーだった。

「……スザクさん、あの、私も受けた方がいいと思います。せつかく、ユーフエミア様がこうおっしゃってくれたのですし……」

「ナナリー？」

歯切れの悪い言葉だったが、ナナリーの心中を察するとスザクにも納得がいった。皇帝が問題視しないからいいものの、最近違反すれすれの無茶ばかりする姉を支えてほしいということだろう。

「……………」

そう言えば、ナナリーに対しては「できる限りのことはする」と言ったのだった。騎士という立場は夢にも思わなかったにせよ、その言葉は守るべきではないか。

「……………わかったよ、ユフィ。…でも、本当に僕でいいんだよね？」

「大丈夫です。足りないところがあっても、それがあなたなのですから。あなたはもつと、自分を好きになるべきだと思いますよ」

（自分を好きになる、か―）

ユファイはこういう考えでこの言葉を言ったのだろう。考えてみれば、この7年間自分は自分自身に対してどういう感情を持っていたか。

少なくとも、『好き』とは思っていなかった。自分は許されざる存在だと思っていた。その強迫観念にずっとつき動かれて続けてきた。

だから、自分を捨てた。私情を捨て、規則を絶対視する機械となる。それでようやく、自分自身に「生きていてもいい」と思うことができたのだ。

ユファイは、それでは駄目だと言う。

「スザク、あなたは『自分は幸せになってはいけない』と生きていますか？だとしたら、それは大きな間違いです。幸せになる権利は、どんな人にだってあるのですから」

（負けた、な…）

屋上の手すりに身を預け漫然と景色を眺めながら、ライは思う。ユファイの器量は、もしかすると自分の想像以上だったのかもしれない。

少なくとも、スザクに対しては完全に負けた。あの後、スザクは憑き物が落ちたように表情から陰が消え、大粒の涙をこぼした。

彼に必要なだったのは、ユファイのように『許してくれる人』だったのかもしれない。それは、個人的には喜んでいいことである。

一方、政治的に見れば、スザクの騎士就任は喜んでばかりいられない。「イレヴンにうつつをぬかす」としてユファイが葬られれば、元の木阿弥になる。

ライの目的はあくまでも日本の立場を強化し、それをブリタニアに認めさせることにある。ユファイにせよゼロにせよ、あまり過激なことをされるのは困る。

（難しいところだ）

とりあえず、これは神楽耶に伝えねばならない。スザクに関わるからというわけではなく、暗殺などという過激な手段に訴えぬようキョウトを通じて釘を刺しておく必要があった。

「…スザクがユファイの騎士だと!? くっ!!!」

生徒会室では終始無言だったルルーシュは、自分の部屋に戻ると壁に拳を叩きつけた。その態度を見て、C・C. がからかうようにたしなめる。

「……物に当たるな。親友が出世したんだ。喜ぶべきことじゃないのか?」

喜べるか、と叫びたくなつた。まったくもって、スザクに対しては全てが裏目に出る。

ジエレミアから得た情報で、スザクがああのランスロットの操縦者だと知つた。これだけでも運命を呪いたくなつたものだが、今度のことはもつと悪い。

「……ふん、甘ちゃんな坊やだ」

C・C. の言いたいことは理解できる。相手がスザクでさえなければためらうことなく特派を壊滅させたし、騎士になる者の暗殺を狙う事も考えた。

「お前の優しさは悪徳だ。偏りすぎているんだよ。他の人間にならできることを、そのために判断を狂わす。片瀬と同じように、ギアスを使えばいいじゃないか」

「ふ・ぎ・け・る・な!!!」

スザクなら、きつとわかってくれる。ゼロの進む道こそが正しいと証明すれば分かり合える。そう信じているから、彼には自分の意思で味方して欲しいから、ギアスは使わない。

それはC・C. に言わせると、「そう考えてずる先延ばしにした結果がこれだろう。いい加減諦めろ」となるのだが…。

その言い方にも激昂したルルーシュは、ついベッド上のC・C. を押し倒してしまった。

「……………」

かつとなつてやってしまつたが、その一瞬の激情が冷めた先の展開を何も考えてなかつた。このまま襲うなど論外だし、すぐさま離れるのも体裁が悪い。

「……まあ、その優しさだけを見れば美德に見えないこともないんだがな」

躊躇した一瞬に、するつと首の後ろに手を回される。その感触に慌てて身を起こし、ベッドから立ち上がる。

「なんだ、そういう事を期待していたのではないのか？」

「当たり前だ、この魔女め！」

真つ赤になつて否定する。この女は、自分をからかつて遊ぶのが趣味なのだ。その点に関しては、重々警戒しなくてはならない。

「ふん、とことんまで甘ちゃんな坊やだ。襲う覚悟もないのに女を押し倒すとは、な」

もうかまつてられるかと、ふいと後ろを向いた。とにかく、スザクとランスロットについては何か策を考えよう。それは、できるだけ早い方がいい。

(戦力は、これで整つた)

キョウトの桐原から、月下量産型の配備について連絡が入る。神楽耶にも秘密で、天叢雲より先に騎士団に引き渡すという。

機は、熟していた。

Stage 45 キサラツ攻略戦

「これより解放戦線は黒の騎士団に協力し、全力でキサラツ基地を攻略する」

片瀬の宣言に、兵士たちが歓声で答える。いい方向に向かっていることは、間違いない。

「……………」

しかし藤堂は、やはり違和感を拭えなかった。

キサラツ攻略戦において、藤堂は再び解放戦線の前線司令官に任命された。つまるところ留守居を除く全部隊の指揮権を委託されたわけだ。

主力部隊の指揮を任される。武人の本懐である。それはいい。問題は、このところ感じていた片瀬の変貌ぶりが、今回もまた、ということだ。

片瀬と解放戦線の司令部たちは、またしても要塞の留守居である。もつとも、これに対する一般兵の評価は良好であった。

「ようやく藤堂さんに全て任せて、引っ込んでいることを覚えたか」
酷い意見だところという陰口もあるが、実はそれが最も共感を集めている。口には出さないにせよ、藤堂とて実戦の指揮においては司令部の誰にも負けない自信はある。

しかし、その自信のために、藤堂は司令部から頼られつつも白眼視されていたのである。

(片瀬少将が抑えこんだと言うが…)

片瀬からも、決して全幅の信頼があったわけではない。あえて無視していたが、示された好意の裏に嫉妬や恐怖などの感情があったことはどうに気付いている。

当然かもしれない。何しろ藤堂がその気にさえなれば、容易く解放戦線に乗っ取られていただろうから。

「藤堂、日本のため、任せただぞ」

その片瀬が、表裏を感じさせずこう言ってくる。それが、最近の違和感の正体なのである。

「……………一つお尋ねします。『蒼』との連動は、どうなっているのでしょうか？」

『蒼』抜きで充分作戦は成し得る。それが司令部およびゼロの見解である」

「……………」

できないことはないとは思う。だが彼らの戦力は遊ばせておくにはもったいなさすぎるではないか。

(どうやら『蒼』とゼロの亀裂は、相当深いようだ)

そうは思うが、司令部の意見がそう達した以上、藤堂に覆す権限はない。不安と不満を抱えつつ、一礼して立ち去る以外に無かった。

せめて部隊の状況を自分の目で確認しておこう、と考えた藤堂は、ナイトメアの格納庫へ向かった。多数の無頼と、エース格が乗る無頼改。

そして自分と四聖剣の乗機は、つい先日キョウトから届いた新型の『月下』だ。

「…どうだ、月下の調子は？」

三人からは、一様に「良好です」と返答が来る。ろくに訓練の時間も取れず実戦投入となったが、そこはさすがに四聖剣、皆、手足のように使いこなしている。

一般兵も、士気は旺盛だ。本拠地であったナリタ要塞を失ったことは残念とはいえ、その犠牲に見合う以上の損害を与えている。『厳島の戦い』以来であろう大戦果が、彼らを高揚させていた。

その中で、少し異質な部隊がある。

「真田君」

声をかけると、相手はびしっと敬礼で返す。解放戦線は旧日本軍を母体に行っているだけ他組織より軍隊色が強いが、彼もそういう形式には慣れてきたようだ。

「藤堂中佐、いよいよ出陣でしょうか？」

真田たちが『天叢雲』から移籍してから、小競り合いすら鳴りを潜めていた。ここで大きな功績を上げようと彼が逸るのも当然だ。和

を乱さない限り、それは認めていいと思う。

しかし、その真田とは対照的に、部下の表情はどこか暗い。解放戦線に組み込まれたとはいえ、打ち解けるにはまだ時間が必要なのだらう。

ちなみに、彼らから『蒼』の血筋について漏れることはなかった。何でも神楽耶が青筋浮かべながら笑顔で口止めしたらしく、卜部ですら藤堂に「絶対に口外しないでください」と言ってきたのである。

「藤堂中佐」

真田に確認すべきことを聞き他の部隊のチェックを進めていた藤堂は、機械的な音質の声に呼び止められた。

「何かな、『オレンジ』殿」

ゼロと似たデザインの仮面の男。通称『オレンジ』。ナリタ戦後、いきなり現れたゼロの腹心だ。正木や土岐なら旭日隊を率いていたと知っているが、この男に関する情報は一切ない。

分かっていることと言えば実力の確かさと、ゼロに対する厚い忠誠心くらいである。ちなみに『オレンジ』の通称は、本人の申告による。「騎士団側の準備は完了している。…それと、確認するが総指揮はゼロが取る。よろしいかな」

そう片瀬とゼロの間で取り決められた以上、藤堂は従うだけである。しかしわざわざ念押ししてくるところを見ると、やはりナリタでコーネリアを取り逃がしたことを気にしているのは間違いない。

あの時は、指揮系統の統一が不可能な状況だった。そうなれば誰もが自組織の利を第一に考えるのは当然で、藤堂は残念だとは思っても不満と思うほどではない。

しかし片瀬やゼロは不満だったらしい。そこで今回は、最初から一本化しておくというわけだ。

「……解放戦線も問題ない。では、出撃と参ろう」

藤堂は、片瀬にもゼロにも伝えないで一つだけ裏で手を打っている。卜部に今回の作戦について、全て伝えておいたのだ。

（頼むぞ、卜部――）

今回の作戦は、『蒼』の方針とは完全に道を違える。たとえ成功して

も、その先の展望がない事を彼は見抜いていた。積極的な協力は期待できないだろう。

だが、覆すのはもう無理だった。せめて背後から圧力をかけてくれるだけでもいい、と思いつながら、藤堂は新しい愛機となる月下に乗り込んだ。

キサラヅ基地―。

トウキョウ租界と湾を挟んだ場所に位置するこの基地は、今や対黒の騎士団の最前線基地である。当然、普段から気が張っていたが、今日の空気は一段と厳しい。

「黒の騎士団、出撃―」

監視が捉えた情報に「ついに来たか」という思いはあるが、決して慌ててはいない。即刻トウキョウ租界のコーネリアに報告を届け、戦闘配備を済ませた。

「籠城が上策でしょう」

司令部の意見は一致した。援軍さえ来れば内外呼応して打ち破ればいいだけだ。当然、ゼロもそれはわかってるだろうから遮二無二押ししてくるだろう。

だが、防御を固めた衛星基地を潰し中枢に攻め込んでくるまで、どう考えても数時間はかかる。援軍到着までには充分な時間だ。

定法に則った防御態勢を固めたその時、彼らの敗北は決定した。

「ゼロ、もうすぐ既定の時刻だ。……が、どうする気だ？」

すでに敵は防御を固めていた。この防衛ラインを突破できるか、正木にはあまり自信がない。

海側は手薄であり、それはゼロの見込み通りだった。そちらからは土岐の部隊が奇襲をかけることになっているが、陸側が突破できなければ全滅は必至だ。

「心配ない。……それより、私が指示したルートから外れないでくれ。いいな、絶対だぞ」

それさえ守れば、条件は全てクリアされる。そしてルルーシュは、

この基地一つに何時間もかけるつもりはない。

「…では行こう。このキサラツを、二十分かからずに落とすぞ！」

「一番から四番隊まで、全ナイトメアフレームが機能停止！」

「各衛星基地のナイトメア、動力停止しました！」

何が起きた、と詮索する余裕すらない。防衛陣を形成するナイトメアの大半が動かなくなったのである。

動けないナイトメアは、歩兵の放つ大口徑砲弾の格好の的でしかない。理由がわからぬままとにかく再起動を試みる兵士たちの努力を、無慈悲に爆散させていった。

「ば、馬鹿な…。そんな馬鹿な…」

司令官の口から洩れたのは、現実を認められず疑う言葉だけだった。これは悪い夢に違いない、と呟く参謀もいる。

さらにこの上、海上から敵軍襲来の報が入る。普通であれば慌てふためく必要はなく、予備兵力を当てれば追い払える敵に過ぎない。

が、今はその予備兵力すら陸側防衛線の救援に投入してしまった後なのだ。

内外からの挟撃に、あつという間に防衛線は崩壊した。敵が司令部に迫り建物内で白兵戦が開始される。

戦闘開始から八分三十七秒後、キサラツ基地司令部は陥落した。

（桐原老め、今回は俺を勝たせたいみたいだな）

ゼロを暴れるだけ暴れさせ、ライの背をせっつき神楽耶の頭を抑えるというのが腹の内だろう。神楽耶に押し切られてばかりの現状にいい加減業を煮やした、というところか。

とはいえ、ゲフィオンディスターバーは使える。そのうち対処法が確立されるだろうが、それまでこれは最強の兵器にもなり得る。

サクラダイトを使用した電動機関は、強力な磁場による干渉が加わると正常な動作ができなくなりやがて停止する。

その特性に着目したラクシャータは研究を進め、桐原はその試作品を黒の騎士団に横流しした。ルルーシユはそれをキサラツ基地の各所に仕掛けておいたのだ。

ナイトメアを始め、大型機械となればサクラダイト機関を利用して
いない物はないと言つていい。ゲフィオンデイスターバーはその全
てを停止させる。

籠城という選択こそルルーシユの望んだことであり、敵の行動はキ
サラヅ基地をそっくりプレゼントしてくれたようなものであった。

「…が、まだ粘っている敵がいるな」

ゲフィオンデイスターバー対策を施したサクラダイト機関がない
のはこちらと同じである。基地一つを丸ごと囲んだりしたら、ナイト
メア抜きで攻めねばなくなる。

それで効果範囲を絞った以上、取りこぼしが出るのは仕方ない。問
題は、その抵抗を続ける敵の中核にいるのがグロースターだといふこ
とである。

「コーネリアの親衛隊か。……仕方ない、四聖剣を投入して討ち取れ」

何が起きたのか、詮索するのは後でいい。負けた。わかることはそ
れだけで、それで充分だ。

この失態では姫様と義父に合わせる顔がない、と思いながらクラウ
ディオはグロースターを駆けさせる。軍監として、何もできなかった。
ゼロに翻弄されただけだ。

幸い、自分以下コーネリア親衛隊のグロースターは機能停止を免れ
た。それで残兵をまとめたものの、どうすればこの重囲を突破できる
のか、まったく目途が立たない。

原理は不明にせよ、敵にはサクラダイト機関を停止させる兵器があ
る。どうやら装置で円形に囲まないと効果が無いと思われる。わ
かったことは、コーネリアとセラフィーナに急報しておいた。

二人なら、即刻徹底的な調査を行うだろう。装置さえ壊せば、キサ
ラヅの二の舞は避けられる。

あとは、自分たちが生き残ることだが―。

(どうやら、ここが死に場所らしい)

目の前に立ちふさがったのは、無頼でも無頼改でもない新型であ
る。映像で見た『紅』と『蒼』の機体に似ている。グロースター以上

の性能と推定された、あれだ。

「姫様、申し訳ありません。弟たちよ、義父上を頼んだぞ―」

キサラヅ基地、完全制圧。日本の抵抗勢力がこれほど大規模な基地を落としたのは、初めての経験である。

「ここに、私は宣言しよう。一かけらに過ぎずとも、我々は間違いなく『日本』を取り返したのだと」

キサラヅさえ落ちれば、房総からブリタニアの勢力を駆逐するのは容易い。いくつか小さい基地があるが、落ち栗を拾う容易さで制圧できさるだろう。

「…だが、落ち栗は落ち栗。そんなものにかまうより、我らには成さねばならぬことがある」

しかしゼロは、その方針を否定した。ここは腰を据えるべきではない。勢いに乗るべきである。

ならばサクラか、と思った人は多かったが、藤堂たち幹部は違う事を知っていた。サクラには土浦方面から傘下にあるレジスタンスを南下させる。そして本隊が向かうのは―。

「向かうべきは、トウキョウ租界である!」

キサラヅ、陥落。その報は、援軍を組織し出陣しようとしていたコーネリアの元にも届いた。

「……………」

いくらなんでも、早すぎる。先発隊を空輸する時間すらなかった。落ち延びた者は駐屯部隊の二割に満たず、残りは戦死か捕虜となった。ナイトメアに至ってはほぼ全てを失っている。

なぜ、こうなったのか。それはクラウディオが戦死の直前に伝えてくれた情報で、あらかた理解できた。

「ナイトメアの駆動系を止める、ジャミング装置か…」

ブリタニアでも理論だけなら提唱されていたことであるが、まさか実現するシステムを作り上げられるとはだれも考えていなかった。あの奇人で奇才の、ロイドさえもである。

「……出撃予定だったナイトメア部隊をトウキョウ租界の東外周部に布陣させる。そして、租界一帯に怪しい機器がないか歩兵部隊で徹底的に搜索させる」

さすがに、コーネリアの立ち直りは早い。クラウディオ以下親衛隊員の死も悲しく、涙すべきことである。が、そのためやらねばならないことをおろそかにする彼女ではなかった。

キサラヅを落としたゼロが、どう動くか。房総半島の完全制圧を目指して他の基地を襲うなら、こちらが攻め込む。サクラを襲うなら背後を突けばいい。どちらの場合も、対応は容易だ。

もう一つの可能性が、このままトウキョウ租界に攻め込んでくること。まさかとは思うが、そのまさかを狙ってくるのがゼロという男だ。

「海軍にはトウキョウ湾の警備を命じろ。対岸からの船は一艘たりとも通すな。海中も見張れ」

東から襲うと見せかけて海を渡り、西から奇襲。いかにもゼロが考えそうなことであるが、その芽はこれで潰せるだろう。

（残るは、『蒼』か―）

正直言つて、これだけはどうか動くか全く予想できない。ある程度のナイトメアは『蒼』に対する備えとして残しておく必要があった。

ナイトメアだけに限れば、コーネリアが今回動員した兵力はナリタを上回る五百機である。当然、そこに親衛隊が加わる。さらにトウキョウ租界の防衛機構を加えると、鉄壁の備えと言つていい。

ゼロに動きが見えるや、地方軍から最小限の数だけ残してありつたけを動員したのだ。相当な無茶である。地方には基地と各地の租界を守ることにだけに専念しろと指示を送つたが、どうなるかはわからない。

それはもう、覚悟の上だった。トウキョウ租界を守り抜きゼロと『蒼』さえ抑えこめば、基地の一つや二つ失おうがどうとでもなるはずだ。

「背水の陣、ですな」

ダールトンの声が内心を抉る。ブリタニアとしてではなく、彼女のである。仮にトウキョウ租界を失つてもどこかの基地に抛り本国に増援を仰げば、いくらでも挽回は可能のはずだ。

しかし、自分は敗戦の罪により総督の任を解かれ、総指揮を執るのはおそらく第二皇子のシュナイゼルになるだろう。

別にそれが不満というわけではない。兄の才覚には素直に敬意を払うし、負けた以上責任を取るのは当然のことで、死罪も覚悟の上だ。皇位継承争いだって、元々皇帝になるより將軍であり続けたいという思いがある。

ただ、敗北者という不名誉な称号のまま表舞台から消えなければならなくなるだろう。それだけは、彼女に許せることではなかった。「…それと、ユフィには迎えを出せ。この非常時、副総督が政庁にいるのは当然だからな」

もはやユフィの普段の居場所は、アツシユフォード学園になつてしまつている。『蒼』やゼロがそれを知つてれば、真つ先に捕らえようとするだろう。

まさか、知つているところか一緒に居るとまでは、いくらコーネリアと言えど予想できるものではなかった。

「……ゼロが動いた？」

「ああ、藤堂中佐がそう伝えてきた。キサラヅを落とし、トウキョウ租界まで攻め込むつもりだと」

騎士団ないし解放戦線、あるいはキョウトからも援軍要請はない。ゼロや片瀬はこちらの戦力を当てにせず、それに不安を覚えた藤堂が独断で知らせを寄こしたのだとはすぐわかった。

やはり、手を組むに足る相手ではなかった。仮にトウキョウ租界を落とすことができたとしても、それがどんな結果をもたらすか考えてない。

確かに、全世界に衝撃が走るだろう。日本だけでなく世界中のレジスタンスが立ち上がる好機と見るに違いない。だが、そんなものは順次潰していけばいいだけだ。

騎士団と解放戦線にそれを援助する力はあるだろうか。奪還した土地は守らねばならない。戦力を二分するほど余裕があるとは、とても思えない。

そしてライが最も恐れる事態は、ブリタニアが断固とした対応に出ることである。日本人全てを対象とする皆殺しジェノサイド作戦で来られたら、対処のしようがない。

「……とりあえず、隊員を全て集合させてください。…僕とカレンは、あと1時間は抜けられないでしょうが」

それでも間に合う、とライは考えていた。キサラヅはあくまで誘いで、コーネリアを誘い出し決戦に持ち込む。それに勝利した余勢を駆り、トウキョウ租界に攻め込むのだと。

ゲフィオンデイスターバーのことを知っていれば考えを改めたかもしれないが、藤堂もその瞬間まで知らなかったのだ。

「ライー、何をしてー。……電話中でしたか？お邪魔しました」

背後から呼びかけられる声に、慌てて通話を切る。「あと1時間は抜けられない」原因は、今の状況にあった。

「いえ、丁度済んだところでしたから。それより買い物の方は……」

「はい、紙皿や名札など他のものはわかりましたけど…、この『ピコピコハンマー』というのは何でしょうか？」

学園祭で使う品の、買い出しである。何を思ったのかその役にユフィが立候補し、状況は『はじめてのおかいもの』になってしまったのだ。

当然のことながら、護衛は騎士となったスザクの役目である。ところが今日は特派の新兵器実験のため郊外まで出向いていて、不在だ。何でも、「租界の上だと危ない」テストらしい。

騎士の役目より研究を優先させるロイドも大概だが、許可を出してしまうユフィもユフィである。しかも、どうするかが「代理をライに願いますから」であった。

ライの方はというと、別に気分を害したわけでもなくそれを受けた。とは言っても探すのはユフィが「自分にやらせてください」と言ったので専ら荷物持ちである。

そしてカレンはというと、「浮気だと思われないように」ということで半ば無理矢理連れて来られた。ユフィ曰く、「ライは頼れるお兄さんで恋愛対象とは違う」とのことだ。

そこまではまあいいとしても、明らかに人選ミスだと付いて来たカレンは思う。

「……あの、それって叩くと笛が鳴るようになってるおもちゃなんですけど」

ハンマーというからには武器なのだろうかと真剣に悩む天然ボケ二人に、泣きたくなる思いをこらえながらツツコミを入れる。放っておくと、本気で軍部に在庫を問いかねない。

(私一人なら、とづくに終わってるわよ…!)

ゼロの奴も、何でこのタイミングで事を起こしたのか。よりにもよって、と呪いたくもなってくる。

仮病や急用で切り上げることも考えたが、「なら政庁の公用車で送ります」ぐらいのことは言ってくるに違いない。それで話をごねるより、大人しくしていた方が結果的に早く終わる。

おもちゃ売り場へ移動し、ピコハンがあっさり見つかった。ようや

く終わり、と息をついたカレンであったが、状況はこの時急転していた。

すでにキサラヅは陥落し、騎士団はトウキョウ租界に向けて一気呵成に軍を進めていたのである。

「……はい。…はい。では、今の場所は…」

学園への帰り道、ユフィの携帯に通話が入る。真剣な表情で話していることから、内容はたやすく予想がつく。

「申し訳ありませんが、政庁に戻らねばならなくなり、迎えが来るそうです。あ、でも、一度学園に寄ってから向かうことにしますから、荷物も大丈夫です」

このくらいの荷物なら二人で充分、というライたちに、ユフィは頑強に学園に戻ることを主張した。やって来た運転手にも譲らず、コーネリアの厳命を受けていた相手も渋々諦めた。

何故、ユフィはここまで学園に執着したのか。

(ナナリー…)

ゼロは「ブリタニアの皇族に恨みがある」と言った。そしてゼロの正体について、ユフィには予想とも言えないレベルの、漠然とした予感がある。

それが当たっていれば、ナナリーの身だけは確実に守られるだろう。だが、その予感が外れ、かつゼロがナナリーの事を知っていた場合、妹の身は非常に危ういものとなる。

そのため、ユフィは何としても学園に戻ろうとした。コーネリアに知られることになっても、一緒に政庁に連れて行った方が安全だ。

さらには、自分の存在は広く知られているから、ナナリーの存在を抜きにしてもゼロが学園を狙う可能性は充分すぎるほどある。生徒も避難させた方がいい。

コーネリアはトウキョウ租界東部でけりをつける気であり、アツシユフオード学園一帯には避難指示を出していない。

トウキョウ租界の奥深くまで踏み込ませるつもりはないし、万一を考えてユフィの身は確保したからそれでいい、というのが彼女の考えなのだろう。

他の生徒のことまで考えないのはブリタニアでは批難されることではないが、ユフィには耐えられなかった。

もつとも、学園に寄り道したくらいなら大勢に影響はない。誰もがそう思っていた。

なのに、この些細な一事が勝敗を左右した、と、後々言われることになる。

「壯観だな。そうは思わないか？」

川を挟み、対岸はトウキョウ租界。そこには、コーネリアが大軍を持って整然と陣を敷いていた。普通に考えれば隙など一切ない、攻め入る者にとって死地である。

ルルーシユは、その対岸を眺めるに良い丘の上に仮の本営を置いた。ブリタニア軍と向かい合う形だが、対時のまま時を過ごせば敵の増援がやってくる。そうなれば、こちらの負けは確実である。

「ゼロ、この膠着を破る手立てはあるのか？」

余裕綽々で対岸の相手を賛美するゼロに対し、正木に余裕はない。まさかここまで嚴重とは、というのが偽らざる声だった。

「心配ない。言ったであろう。私に従えば、必ず勝つと」

この男を迎え入れたことは、決して失敗ではなかった。キサラツの存在に怯えるだけだった自分たちが、トウキョウ租界に攻め込むところまで来たのだ。

解放戦線に合流せず、盾として利用する形で房総に逃げ込んだ。不安がる部下は多かったが、その決断が全てだったと言っている。加わっていれば、いいところ尉官として小部隊を指揮していたくらいのはずだ。

「……では行こう。ここが日本解放の山場だ」

「敵軍、動きました！」

斥候の報告に、コーネリアはわずかに眉をひそめた。何故ゼロは動いたのか。自軍の布陣に、隙はない。自信を持ってそう断言できる。なのに動くという事は、ゼロにしか見えない隙があるという事なのか。

ゲフィオンデイスターバーについては、すでに解除済みだ。搜索漏れがあっても、少なくともキサラズと同じようにナイトメア部隊のほぼ全てが止まるなどという事態にはならない。

(ゼロ…、戦術を誤ったのか?)

このままだと、こちらが望むところの真つ向勝負になる。ゼロの掌握するナイトメア戦力はせいぜい百五十から百八十いうところだろう。三倍の数で圧倒できる。

そんなはずはない、という思いと、そうであってほしい、という思いが交差する。

次の瞬間、ナイトメアのモニターに映る外の景色が、大きく揺れた。「なっ!!!」

地震ではない。租界は地震対策のためいくつものブロックを組み合わせた、立体パズルのような構造をしている。これは、その結合を一斉にパージしたのだ。

(馬鹿な！)

ゼロに内通する人間がいたという事か。解除コードは、ごく限られた人間しか知らない。しかし、そんな人物が一体何の不満があつて裏切るというのか。

「全軍、後退!!! 政庁を最終防衛線として陣を立て直せ！」

ロツクが外れた地面は傾き、空いた巨大な穴にナイトメアが吸い込まれていく。救う手立てはなかった。とにかく、政庁まで引くしかない。

政庁はトウキョウ租界の中心となる、巨大な一つのブロックで形成されている。ゆえにその周辺ならしつかりした足元の、広さも充分ある場所で戦える。

が、道は迷路と化していた。一体何機が政庁までたどり着けるかと考えると、心が寒くなる。

そしてコーネリアは、すでにユファイが政庁に戻っていると思っていた。

急ブレーキと急ハンドルで、全員が大型リムジンのシートから投げ出される。頭をぶつけそうになり目をつぶったカレンは、いきなり引き寄せられて抱きしめられた。

痛みはない。目を開けると、視界は黒い布でふさがれていた。それがアツシユフオード学園の男子制服だと気付くと、今の状況を理解した。

「……………」

自分のことを身を挺して護ってくれるような恋人だと思うと、つい顔がほころんでしまう。もう少しこのまま、と思つて顔を寄せるが、この場にもう一人いたことはすつかり頭から抜け落ちていた。

「な、何が起きたのでしょうか…?」

ユフイの声に、慌てて身を起こす。緊急事態だし恋人同士なのだから問題ないという思いはあつても、やはり気恥ずかしい。

ひとまず外に出てみると、租界の状況は一転していた。あちこち陥没し、目の前の道路は倒壊したビルでふさがっている。

横数十メートルの先は、何も無い。陥没に巻き込まれなかったのは幸運だった。落ちていたら、まず命はなかっただろう。

「租界外縁部のパージか…。成程な」

『蒼』としての表情になつたライが呟く。何に納得したのか不明だが、ゼロの作戦を賛美したのではないことは厳しい表情から明らかだった。

学園までは、それほどの距離はない。しかし瓦礫とパージによって道が途切れたため、車は使えない。その状況に対して、お姫様はあっさり答えを出した。

「走りましょう」

ブリタニアの皇女が「走る」などと言いだすとは思つておらず、ライもカレンも内心面食らつた。

「……………」

塵煙が収まってから調べてみると、隙間を潜り抜ければ向こう側に

出るのも何とかかなりそうだ。ただし、ここでさらに崩れたらまず命はない。

それにも拘わらず、何としても学園に戻ろうとするユフィの執着は度が過ぎている。しかし、詮索するライに対し「今は何も言えません」とだけ言い、ユフィは走り出した。

「おい、カメラは回しているな」

テレビ局本社ビルの最上階に、ディートハルトはいた。黒の騎士団の侵攻と聞いて、この場所から様子を撮影していたのである。ここからなら、崩落の現場も遠目に見えた。

顔面蒼白ながらも仕事はきっちりこなしていたカメラマンに満足して頷くと、内心でにやりと笑う。やはり、こういう派手なことをやってくれるゼロは撮り甲斐のある男だった。

(ほどなく、騎士団の奴らが占拠に来るはずだが――)

それほど待つ必要はなかった。下で混乱が起こり、上まで達する。元々、TV局なのだから、武装など全くしていない。占拠は容易いとだ。

「ここは我々日本軍が占拠した。我々の指示に従うなら、絶対に危害を加えないことを約束しよう」

トウキョウ租界陥落後に、日本が解放されたと全世界に向けて発信する。その特別番組の用意をしろ。それが日本側の要求である。

「……わかりました。わかりましたから、銃は下ろしていただきたい」
上司を差し置きディートハルトが答える。筋書通りに事が進みほくそ笑む相手に、ディートハルトは内心冷笑を返した。

ディレクターとして、やはり物語には見せ場が欲しい。そう考えてディートハルトはゼロに接触することにした。『蒼』もまた上等の素材ではあるが、華に欠けると思ったのだ。

関東一帯のレジスタンスに接触すれば、どちらかには行き着くだろう。そうして何件かレジスタンスに情報を流すうち、その動きがキョウトの目に留まったのである。

さすがのキョウトの諜報網も、ことブリタニアに関しては総督府の

幹部と直接の付き合いがあるデイトハルトには敵わない。

『蒼』の対抗馬としてゼロを担ぎ上げたいキョウトとしては、大いに魅力のある存在だった。ゼロにとつても、ブリタニアの正確な内情は計り知れない価値がある。三者の利害は一致した。

とは言つても、デイトハルトはブリタニアにおける地位を捨てたわけではない。プロデューサーの立場は、しっかり保持していた。

デイトハルトのゼロに対する献身は嘘ではない。自分にできる限りのことをして、彼に勝たせたいと思っている。ただ、負けた時まで彼に付き合ひ、心中するつもりはさらさらないといいただけだ。

ゼロが勝てば、諜報、広報の担当者として重職に取り立てられるだろう。それはそれでいい。逆に、負ければ騎士団との関係をすっぱり絶ち、次の素材に取り入ることも考えねばならないだろう。

（『蒼』あるいは、ユーフェミアあたりが面白そうだが…）

そのため、デイトハルトは決して裏の顔を出さない。この場はあくまでも「巻き込まれたブリタニア人」という立場を装っていた。

その程度の事にも気付かず自分を仲間だと信じている日本人の人の好きに、デイトハルトは呆れている。

せいぜい、上手く踊って欲しいものだ。自分はその裏でいい画を取らせてもらう。自分の力が及ばぬところの結末まで、責任を取るつもりはなかった。

（悲劇なら、悲劇として仕立てるだけのこと…。それを肥料に、次は大輪の花を咲かせるのみ…）

あらかた、想定通りと言つていい。周囲を崩落させた租界に、地上から増援は入れない。騎士団の航空戦力では制空は不可能だが、細工をしておいたので空からの援軍もまず無視していい。

事実、緊急発進したブリタニア空軍の戦闘機は全て租界手前でUターンせざるを得なかった。というのも、租界の対空防衛システムが味方のはずの自分たちを狙っていたからである。

目標制圧の報告が次々入る。コーネリアは政庁を最終防衛線とするつもりで、ずるずると下がるだけだ。

「が、ユファイの身をこちらが握ってしまえば、どうするかな？」

コーネリアはユファイの身柄を政庁に移そうとする。それは当然のことだが、彼女の計算にはナナリーという要素が入ってない。ユファイなら、絶対にナナリーも連れて行くこうとするだろう。

そしてナナリーは、自分を見捨てるような妹ではない。キサラツを落とした時に「あと1時間くらいで帰る」と伝えてあるから、きつと待つてくれる。ナナリーが動かねば、ユファイも動けない。

その間に、学園を抑え政庁と結ぶ道を封鎖してしまう。これで二人の安全は確保されるし、コーネリアの戦意も鈍る。さらにはライやカレンも抑えれば、邪魔されることもない。

特派は郊外に向いて不在だし、あとは政庁を制圧するだけだ。

「問題は全てクリア。俺の勝ちだ、コーネリア」

……しかし、ルルーシユにも知らないことがあった。ユファイの買い物が異様に長引き、この時点でまだ学園に戻っていなかったことである。

ゼロの命令通り、学園に向かった部隊は容易くそこを制圧した。ユファイたちが戻ってきたのは、そのすぐ後だった。

遠目から見えたナイトメアの姿に学園に入ることを諦め、近くのビルから様子を窺う。どうやら虐殺などの事態は起きてないようで、無抵抗のまま占拠されたらしい。

「ゼロめ…、この学園に手を出すとは、いい度胸だ」

「お母さん、大丈夫かな…」

とはいえ、不愉快な事実には変わらない。ライやカレンにとってアッシュフォード学園は家そのもので、生徒会の仲間たちを始め失ってはならない物が数多くある。

また、学園を占拠したのはユファイを狙ったものと考えるのが妥当だ。さらにC・Cが自分たちの存在を知っていたから、ゼロも知っていたとしてもおかしくない。

(ユファイを殺し、どきどきに紛れて僕たちも討つ気か)

河口湖で、ゼロはクロヴィスを殺した理由を「ブリタニアの皇族だ

から」と言った。であれば、ユファイも躊躇なく殺すだろう。

「……………であれば、敵だ。学園を奪還する」

容赦をする理由はない。相手の行動が日本のためになるのであれば一考の余地はあるが、租界制圧などという愚行の生贄にされるのでは話にならない。

「待ってください。お姉様に事情を話せば、すぐ軍を派遣してくれるはずですから…」

そう言いユファイは携帯電話を操作するが、コーネリアとも政庁ともつながらない。破壊されたカシステムを落とされたか、とにかく通信設備が使えない状況にあるらしい。

どの道、騎士団との戦闘で手一杯だろうから、軍の増援は期待できないだろう。そう指摘されると、ユファイも折れた。

「仕方ありません。……………ですが、戦えるのはライ一人です。申し訳ありませんが、あなたの力に頼るほかありません」

ナナリーの身を思い、ユファイも焦っていた。でなければ、ここは待つ選択をしただろう。

ただし、ナイトメアが問題になる。無頼でもいいから、とにかく一機欲しい。学園の倉庫にガニメデがあることはあるが、さすがにあれでは戦えない。

ちなみにガニメデは、今度の学園祭で使おうということでニーナがメンテナンスをしていた。その実働試験で操縦を担当したのがライだったため、ユファイもライの操縦技術は知っていた。

携帯は駄目でも、天叢雲で使う無線なら使える。しかし学園奪還に『蒼』の姿を晒すわけにもいかず、第一、ナイトメアを運び込むための道がない。

どうするか思い悩むライに、ユファイが何気なく言った。

「ナイトメアなら、特派に一機余っていたはずですよ」

特派。正式名称、特別派遣嚮導技術部。スザクの務める技術部である、という事は聞いていた。

(それがランスロットの開発部署で、真向かいの大学部にあったとは

…)

探る気さえあれば、簡単に探れただろう。完全に盲点に入っていた場所だったと、自分たちの間抜けぶりに呆れるほかない。

大学部に忍び込むと、銃を構えた騎士団兵がちらほら見える。キョウトが掴んでいなかった情報はどうやって知ったのか不明だが、ゼロは知っていたようだ。

「何者だ！」

「しばらく、気を失っている」

特派の研修室を占拠していた兵士は、その言葉で崩れ落ちた。極力人目を避けて進み、倒せる敵は倒したものの、今回ばかりは『ギアス』も使わざるを得なかった。

手鏡を取出し、離れた場所に潜んでいるカレンとユフィに合図を出す。古風だが、電子機器に頼らない方法も取り決めておくと、こういう場合に役に立つ。

「あ、あなたは一体…」

怯えながら誰何する特派の研究員も、遅れてやって来たユフィの姿を見て安堵する。その研究員に対し、ユフィはエリアー1副総督の名で命令を下した。

「この者を『ウラノス』に乗せて、出撃させなさい」

「ライ、行けそうですか？」

領き返すが、正直ライは驚嘆していた。こんな機体がこの世にあったのか、という思いである。

「武装。可変型銃剣『イグニス』異常なし。左腕部ルミナスクロー異常なし。胸部ハドロン砲異常なし。背部、徹甲榴弾式マイクロミサイル搭載完了」

特派の職員により出撃体制が整えられていく中、ライはマニュアルに目を通していった。基本操作などは理解できるから飛ばしていい。どういう装備があるのか知っていれば、何とかなる。

「エナジーファイラー装填完了、1番から5番まで異常なし。ドルイドシステム機動。各部ブレイズルミナス異常なし。フロートシステム異常なし。システムオールグリーン」

この機体が、ゼロに奪われる前に奪還できたのは幸運だった。逆にゼロにとつては限らない不運である。『ウラノス』なら、一機で戦局をひっくり返すことも不可能ではない。

ウラノスのドルイドシステムが貪欲に周囲の情報を収集し、解析する。演算能力を若干犠牲にしたものの、ほぼオートメーション化するシステムが組み込まれているので難しい操作は必要ない。

それによると、学園内の敵ナイトメアは無頼改が三、無頼が十二となる。これにライは違和感を覚えた。学園を占拠するには過ぎた戦力であり、保持する意図があると思えない。

が、学園には政略的な意味はあっても戦術的な意味は何もない。ユフィと自分、それにスザク、カレン、ルーミアあたりを捕らえた後は放棄してしまえばいいだけのはずだ。

「……………」

ゼロの意図はわからないが、敵の数はわかった。この十五機を叩き潰せば、あとの歩兵など逃げ去るしかない。

「ウラノス、出撃ー」

ユフィの号令により、夜天を統べる神が飛び立った。

機種不明の敵機、一。その報告を受けても、当初この部隊の指揮官である安居は慌てなかった。向かいの大学部にナイトメアの研究所があり、そのナイトメアや研究資料は全て運び出せと指示されていたからだ。

「移送するのに起動した方が楽だったんだろ。それよりユーフェミアがない件はどうなった？」

「依然、捜索中——」

いきなりの爆音が、部下の声を遮った。何事かと窓の外を見れば、大学の敷地内で煙がもうもうと上がっている。

「どうした!? 誤射でもしたか!？」

ユーフェミアを含め、学生には決して危害を加えるな。安居はそうゼロから厳命されている。誤射だろうが何かあったら、ゼロから大目玉をくらうだろう。

「ち、違います！ 味方三機がLOST、敵襲です!!!」

何故、敵がここにいる。いくら考えても解らず思考が停止した安居をさらに打ちのめしたのは、この学園に敵の反応が迫っているという事だった。

——舞う。

走るのではない。滑るのではない。空中を自由自在に駆けるその姿は、舞踏の優雅さを思わせる。

銃弾をすり抜け、『イグニス』を一闪。MVS機構の刃は、容易く『無頼』の装甲を切り裂いた。銃撃モードにすればランスロットのヴァリスを小型化したもので、これまた無頼程度なら一撃で仕留める。

「おのれっ、飛ばせるな！ 地上に引きずり落として仕留めるんだ!!!」

敵が弾幕を張る。それは作戦として正しいだろう。このままでは、一方的に上空から攻撃を受けるだけだ。

だが、『ウラノス』はそれをものともしない。自分から地上に降りると、左腕に形成されたブレイズルミナスの爪で無頼を貫いた。

「距離を取って纏まれ！ 接近戦では圧倒的にこちらが不利だぞ！ 連携

して当たるんだ！」

それも無駄な抵抗に過ぎない。纏まった所に、背部から射出されたミサイルが襲いかかる。小型でありながらナイトメアの装甲を突き破り、爆発する。受け所が悪ければ一発で戦闘不能に追い込まれる。敵機報告から、二分弱。それで騎士団の十五機のナイトメアは破壊された。歩兵部隊も銃は手に取ったものの、誰も前に進もうとする者はいなかった。

「黒の騎士団に告げる。大人しくこの学園から退去するというのなら、この場は見逃してやろう」

呆然とする安居が思ったのは、この報告をしたらゼロがどんな反応をするかという事だった。学園制圧はこの作戦の要だと言っていた。守り通すことには、政庁制圧に等しい意義がある、と。

そのゼロから、通信が入る。内容は簡単だった。ユーフェミア救助のため、ブリタニアが大部隊を学園奪還に向けた。守りきれぬものではないため、撤収せよ。

レーダー反応はその指示を裏付けるものである。そしてこの一機はそれに先行してきた特殊機なのだと思われた。が、冷静であれば、おかしいと考えたであろう。

学園と政庁を結ぶ道は遮断したはずなのだ。瓦礫をどかさか、仮設の橋でも架けねば、大部隊がやってこれるはずがない。そして政庁周辺で激戦中のブリタニア軍に、そんな事をしている余裕はない。

「ゼロの指示だ、撤収せよー」

しかし、パニックに陥っていた安居にそんな余裕はなかった。窮地、敵の反応、ゼロの映像と声。それが彼の判断力を奪い去った。

作戦完了。特派の研究室に通信を入れる。大部分の騎士団兵は何が起きたのか把握できないまま撤退命令を受け、慌てて逃げ出した。大学部も無事解放されたという。

「……あつけない」

蜘蛛の子を散らす様に逃げ去る騎士団を見て、ライはウラノスの中で苦笑いする。ブリタニア軍の反応もゼロの指示も、全部彼の作りだした幻影と知ったら、どんな表情をすることか。

ウラノスのドルイドシステムを利用すれば、騎士団の電子機器をハッキングするくらい訳はない。ゼロの映像と音声は単純な合成映像だが、仮面で通してきたことが裏目に出たということだ。

そして軍用の非常回線を使ってコーネリアとも連絡が付いた。ユフィは「学園にいる」と白状して呆れられたが、「叱るのは後だ」という事で援軍の派遣を取り付けた。

「ライ！あなただったのね！」

ウラノスから降りたライに、ミレイが走り寄る。その姿を見て、これで終わりだとライは思った。

このままウラノスを前線に押し出せば、騎士団を壊滅させるのも容易だろう。しかし、そこまでブリタニアに味方する義理はない。学園の安全さえ確保できれば、それで充分だ。

「何時になっても帰つてこないと思つたら……。……無茶するわねえ、あなたも」

まったく、お姉さんに心配かけて、と叱りつけるミレイに、そういえば自分は戸籍上この人の弟なのだったと今更ながら思い出す。

「無事でよかったです。ミレイさ……」

笑顔でそう言おうとしたライだったが、不意に視界が歪んだ。

「ちよ、ちよつと……」

ふらついてミレイに向かって倒れ込んだライは、そのまま意識を失った。

「ライさんが倒れた？」

「そう。医者も呼ばれたんだけど、原因はわからないって。とりあえず肉体的な問題じゃないと思う、ってことだけど……」

苦しんでいる様子はなく、呼吸も脈拍も正常。ただ眠っているようにしか見えないライに、医者も首を傾げていた。

まるで、この学園に迷い込んできた時の再現のようだった。しかし、今回は疲労も衰弱もない。緊張の糸が切れたためではないかとミレイは言ったが、その気遣いはカレンにとって空回りでしかない。

「……わかりました。天叢雲の方は私が動かします。カレンさんはそ

のまま、ライさんの傍にいてください」

「ありがとう、ルーミリア」

指揮を執るのが、ルーミリアなら安堵できる。そう思ったカレンは、ほっと息をついた。

学園の方は、ブリタニア軍の援軍到着までもうしばらくかかる。それまで学園を無防備にするわけにはいかない。騙されたことを知った騎士団が引き返してくる恐れは充分あった。

「いざという場合、カレンさんがそのウラノスとかいうナイトメアに乗って撃退するしかありません」

言われずとも、その覚悟はしていた。病弱なお嬢様の仮面を捨てナイトメアの操縦ができることを暴露しても、ライと学園の皆の命には替えられない。

「……カレンさんも、すっかり学校が好きになったようですね。ではお願いします。私にとっても、そこは家なのですから」
「任せて。……って人が来たみたい。切るね」

ライのことは、カレンに任せるしかない。自分に期待されていることは、私事ではなく公務だ。

「おい、ライが倒れたって……」

「扇さん、ト部さん、緊急事態につき指揮は私が執りますが、異存はありますか？」

二人は戸惑いながらも、ないと頷いた。ライの考えに着いて行ける存在は、この少女しかない。それはわかっているが、これからの動きを説明してもらわねば不安で仕方がない。

「とりあえず松戸まで出たのはいいとして……、ここからどうする気だ？」

騎士団の侵攻を知ったライは、トウキョウ租界を迂回して松戸方面に部隊を展開する指示を出していた。ここで合流するつもりだったのだろうが、こうなっては是非もない。

彼抜きでここから先を考えねばならない不安に対し、ルーミリアはこともなげに答えた。

「決まりきったことです。黒の騎士団の敗退に備え、退路を確保して

あげるのですよ」

「何をやっている!!!」

黒の騎士団、司令部。戦局図を見ていたルルーシュは、思わず拳を机に叩きつけた。ナイトメア反応消失に加え学園制圧の部隊が撤退して行くのである。

学園方面に取り残されるブリタニア軍の戦力を考えても、十分な戦力を与えたはずだ。少なくとも援軍を送るまで耐えられるはずだった。

それが、占拠から10分程度で敗走した。アンノウン反応が学園に一つあるが、これに負けたとでもいうのか。ランスロットという前例を考えればあり得るのかもしれないが、特派の面々は出払っているはずなのだ。

(ナナリーとユフィはどうなった!?)

そのアンノウンも気になるが、それ以上に問題なのは妹の身柄だ。逃げるにしても、二人を確保したままであるならまだ許せる。

「安居を呼び出せ!早く!!!」

しかし、通信兵の答えは「敵の妨害でつながらない」というものだった。十分弱の後、ようやく繋がった通信は全く要領を得ないので、それがルルーシュの激昂にさらに拍車をかけた。

「それは敵の謀略だ!そんなものに乗せられるな!!!」

撤退はゼロからの指示だと信じ切っていた安居に、ルルーシュの怒号が飛ぶ。しかもナナリーは学園にいたが置いて来て、ユフィに至っては姿が見えず、搜索中だったという。

「この失態については後で詮議する。お前は学園を再度占拠しろ。よいか、ユーフェミアと車椅子の少女の身柄だけは何としても抑え、司令部まで連れてくるのだ」

怒鳴りはしなかったが、ルルーシュも余裕がない事がわかる。この戦いの戦略的目標はコーネリアを討ち取り政庁を制圧することなのだ。

この時の彼はそれを忘れ、妹の身ばかり考えていた。ナイトメアを

失った安居の部隊は本隊からの増援に組み込み、彼には命に代えてもユフイとナナリーを攫ってこいとまで言い切った。

安居がウラノスの圧倒的性能について進言しても、相手にしない。

……それが、致命的な失敗となった。

その隙を、朝比奈と対峙しながらもコーネリアは見逃さなかった。『蒼』に対する備えとして残しておいた戦力を、ゼロの部隊に向けて進ませたのだ。

正直、当初はダールトンでさえ躊躇った。『蒼』がここまで姿を見せないのは、サイタマと同じようにコーネリアに手が届く機を窺っているからではないのか。

『蒼』の攻撃はない！そう思いきれ、ダールトン！」

あつたら滅びだ。だがそのリスクさえ覚悟すれば、ここで押し返せる。押し返せば、ゼロには勝てる。

ゼロと『蒼』の関係が『対立』と言うべきものであれば、この侵攻がゼロの独断で『蒼』は関与していないのであれば、コーネリアの決断は英断となる。

「ブラッツ隊、コーニッシュ隊、ヌウ隊は側面からの敵部隊に突撃せよ!!!」

ダールトンの指示に勇躍した部隊は、敵側面攻撃部隊に突っ込んだ。情報が錯綜してブリタニア側は誰も知らなかったのだが、そこに司令部から出てきたゼロがいたのである。

総指揮はゼロが執る。それは了承したが、政庁に正面から攻め込むのは解放戦線の最精鋭である藤堂と四聖剣が指揮する部隊とする。

これまで日本最大の反抗組織であった解放戦線の面子に賭けて譲れない一線として提案したが、ゼロは気を害した風もなく承諾した。そして自分の部隊は側面攻撃に回る、と。

当初、ゼロもいきなり最前線に出るつもりだった。「まず王が動かねば兵は付いてこない」というのが彼の信条らしく、それは見事と言えたが、だからと言って戦闘しながら混成部隊の指揮を執られては安心できない。

そこで、ある程度の目途が付くまでは司令部で指揮を執ってもらい、最終局面でゼロも前線に出る。双方でそう妥協することにした。

予定通りであれば、騎士団の一隊にゼロの本隊を併せた部隊が別方向から政庁に迫り、それでブリタニアの最終防衛線も崩れただろう。

ところが現状は手薄な所をブリタニア軍に襲われ、進むこともまま

ならない。学園に割いた戦力があれば、例えばそれに敵を任せ政庁に向かうこともできたはずだ。

朝比奈ならずとも、「何をやってるんだよ」と罵りたくもなる。これなら司令部から出ず大人しくしていてくれた方が、まだましだったのではないか。

一方、ブリタニア側の三隊は、自分たちの相手とする部隊がゼロの部隊であることに気付いて色めきたった。後方待機を命じられて軍功は期待できそうもないと思っていたら、最高の獲物が飛び込んできたのだ。

「純血派の諸君、ここが千載一遇の好機だ！何としてでもゼロの首を取れ!!!」

その中で、特に苛烈だったのが純血派の部隊とそれを率いるヴィレッタ・ヌウである。ジエレミア、キューエルの両巨頭を失った純血派の再浮上を志す彼女にとって、この状況はまさに千載一遇に違いない。

「させん!!!」

しかし、それを遮るのが『オレンジ』率いるゼロの親衛隊である。黒の騎士団の中でも腕利きを集めているだけあって、数では劣りながらも互角以上に戦っている。

だが、流れはブリタニア側に大きく傾いた。日本側の一方的攻勢だったものが、形勢互角かややブリタニア優勢となっている。

挽回の機を作るべく、朝比奈が三度目の突撃を敢行する。対するコーネリアも全力を挙げて迎え撃つ。

（あと一步―）

日本側の、誰もが思う。あと一步、ここさえ突破すれば、勝利に手が届くのだ。

（あと一手―）

ブリタニア側の、誰もが思う。あと一手、何か決め手となる一撃があれば、日本軍は崩壊する。

どちらが早いのか、の勝負であった。そして勝敗を決める最後の要因が、トウキョウ租界に姿を現した。

「これって…」

ラヴェインのモニターに映る光景を見て、マリーカが絶句する。エリアー1におけるブリタニアの国威の象徴だったトウキョウ租界は半壊し、そこかしこで銃声と爆音が響く激戦の舞台と化していた。

「ユーフェミア様からの情報によると、いまだ政庁は健在。敵はゼロで、『蒼』の部隊は確認できていないとのこと」

セシルからの通信に、マリーカがわずかに眉を寄せる。努めて平静を装っているが、内心残念だという気持ちが抑えきれなかったのだろう。

「マリーカ、サポートを頼むぞ。私と柘木は、一気に突っ込むからな」そんなマリーカに、ノネットが声をかける。初陣で『蒼』を討ち取るうなど、その発想が歴戦のノネットにしてみれば危なっかしくて仕方ない。自分の能力を把握できない者は、戦場で真っ先に死ぬ。

「では、ランスロット、ベデイヴィエール、ラヴェインの三機は空中より政庁に向かい、総督を救援。しかる後、黒の騎士団を殲滅せよ」

北方より敵機襲来、と聞いて、ルルーシユの思考は完全に崩壊した。学園に続き、またしてもあり得ないことが起きた。

「戦闘機ではありません！ナイトメアが、空を飛んでいます!!!」

ルルーシユにとつて、最後の計算外の要素がフロートシステムの存在だった。特派がわざわざ郊外まで出向いた理由は、実験中に万一墜落したときの被害を避けるためだった。

ナイトメアの飛行実験―。空からなら、この急場でも間に合うかもしれない。そのことを思い出したユファイが救援を要請したのだ。

防空システムは効果なく、迎撃に出た航空戦力は全て撃墜された。三つの光点が、すさまじい勢いで迫ってくる。

その三機に痛打され、政庁を攻めていた解放戦線の部隊は大きく傾いだ。

ベデイヴィエールのランスが無頼を貫く。ランスロットのMVSが無頼改を切り裂く。前を遮る敵以外には目もくれず突き進む二機の後ろから、ラヴェインのガトリング銃が残敵を掃討する。

「マリーカ!!!」

警告音より早く、ノネットの声。襲いかかってきたスタントンファをシールドで受け流し、逆に殴りつける。シールドの先から射出された槍は、無頼を容易く貫いた。

LOST、LOST、LOST。政庁に攻め寄せた仙波の部隊のナイトメア反応が、あつという間に消えていく。部下を庇って立ちふさがった仙波の月下は、善戦したもののランスロットに討ち取られた。仙波は脱出には成功したらしいが、無事かどうかはわからない。

「全軍後退！戦力の再編成を行うー！」

これ以上、戦線を維持することは不可能だ。すなわち『敗北』ということを、ルルーシユは認めた。もはや、再度租界に踏み込む戦力はない。

学園でユフィの身柄を抑えられなかった。そのため、学園が奪還された。それを再度奪還しようとして政庁制圧が遅れ、最後に特派の救援が間に合ってしまった。

ウラノスやフロートユニットの存在を知らなかったことは不運であつたが、それも彼の戦略を崩壊させる隙となつた。

「全軍、総力を挙げて敵を追え!!!」

特派の救援は不本意だが、この機を逃すコーネリアではない。政庁付近まで攻め込んでしまったことが、退却の際には仇となる。

（徹底的に撃ち滅ぼすー）

容赦をする理由は、世界のどこを探しても存在しない。同胞を討たれた兵士たちもこの指示を聞き、一人たりとも生かして帰すなど攻め立てる。

「姫様!!!」

「ギルフォード、無事だったか!」

ギルフォードのグロースターは右手を失い、損傷だらけだが健在だった。コーネリアが「勝った」と確信したのは、この時である。

生きて何機がたどり着けるか、今度は日本軍が問われる番となつた。藤堂は執拗なギルフォードの足止めを振り切り朝比奈と合流したが、だからと言って挽回の余地はない。

(分を越えても、止めるべきだったのかー)

漠然とした不安を感じていた藤堂も、ここまで惨敗になるとは思っていなかった。むしろゼロの作戦がある程度まで成功してしまったことが逆に悲劇をもたらした、と言っている。

だが、それは結果論だ。今やるべきことは、一人でも生かして退却することである。

勢いに乗りすぎて孤立した敵部隊を叩き、あるいは雷光の射程に誘導して撃破する。局地的に押し返すことはできても、全体の流れは変えられない。

何と言っても、特派の三機の存在が大きい。これに狙われたらまず助からない。戦闘力が段違いである以上に、機動力が桁違いだ。

「機体は捨ててもいい。人命を最優先とせよ」

今後、軍の再建が必須となる。その時必要なのは機体ではなく、乗り手の方だ。勝てない相手と戦うくらいなら、まだ瓦礫に紛れて逃げた方が助かる見込みは高い。

新藤隊、溝口隊、斎村隊と壊滅が続き、マーガレットに足止めされて退却が遅れた千葉隊がベイヴィエールに襲われ壊滅。彼らがどうなったのか、生死を確かめる術はない。

(生きていてくれよ、千葉)

それは部下に対する思いなのか、と問われれば、藤堂はそうだと答えただろう。朝比奈に言わせれば、「本当に失ってから気付くんじゃ遅すぎるんだけどね」となるらしいが。

それはともかく、仙波隊に続き千葉隊も壊滅した以上、敵がゼロ隊および藤堂・朝比奈隊に攻撃を集中させるのは当然の事である。

もはや、指揮系統などあるものではない。そして主力から切り離された各部隊は、それぞれの才覚で生き残る道を探すしかなかった。

「た、隊長……」

「うろたえるな。……とにかく、租界から脱出して房総を目指すことだ。まだ藤堂中佐は健在なのだし、このまま終わるはずない」

この状況で『蒼』ならどうするか、ついそう考えてしまうのが真田には不快だった。考えないようにしているのに、自分では手に余る状

況になると考えてしまう。

天叢雲を離反した真田が、新たな付き従う人として選んだのが藤堂である。はつきり言ってゼロは胡散臭く、その大言壮語はどこか軽薄に感じられた。片瀬はそのゼロにべったりだ。

藤堂を擁立し、ゼロも『蒼』も必要としない、日本人による日本を取り戻すための組織を作る。日本人としての誇りを取り戻すにはそうするべきだ。真田はそう考えた。

しかし水を向けてみた藤堂にそんな気は毛頭なく、『蒼』の血筋についても言い触らすことは禁じられた。

「ちくしょう！あの時、藤堂中佐が立ちさえすれば！」

解放戦線の兵士たちは片瀬より藤堂を慕っていた。藤堂にその気さえあれば、片瀬とまとめてゼロも排除してしまえた。『蒼』も必要なくなっただろう。

ゼロや片瀬が明らかな失敗をすれば、藤堂の意識も変わるかもしれない。そう思って機を待つことにしたのだが、ここまでの敗北を喫するのは全く想像できなかった。

空から襲来したラヴェインの銃弾が、無頼改を貫く。機体だけでなく、人体も貫いた。もう助からない。

（彼から離れたのは失敗だったのか―）

自分は、本当に後悔してなかったのだろうか。だがブリタニア皇族の指揮下に入るなど、できるはずがない。何度自問しようと、残るのはこの結論である。

つまるところ、アレルギーのようなものだ。いくら味が良くても食べれば命に関わるような食品なら、食べようとは思わない。

『ブリタニア』という存在は、真田にとってそういう物だった。

主を乗せたまま、無頼改は爆発四散した。

味方部隊と協力してヴィレッタらの部隊を何とか退けたものの、押し寄せる波のように次々と新手が来る。ジエレミア率いる親衛隊は必死に奮戦するも、一機また一機と数を減らしていく。

このままでは、租界を出る前に全滅は必至である。しかしその追撃のブリタニア軍が大きく乱れ、後退していく。

「ゼロ!!!」

「堀江か、助かったぞ」

学園奪還に割いた部隊が横合いから攻めかかったのだ。敵が挟撃を避けて一時引いたため、一息つくことができた。

一時しのぎであつても、それで充分だった。全速で逃げる。崩落した租界の中で、谷のようにそこだけ通れるようになっていいる地形がある。そこさえ越えればいい。

騎士団の部隊が越えると同時に、爆発が起きる。追ってきたブリタニア軍は、頭上から降るコンクリートの大塊を見て慌てて退避した。仕掛けておいた爆薬でビルを爆破したのだ。

「ゼロめ、こんな小細工まで……」

大魚を逃した、とヴィレッタは歯噛みする。塞がれた道を越えるか迂回するかするしかないが、それで追いつけるかどうか。

その上空を、一機のナイトメアが越えて行つた。ナイトメアが空を飛ぶ光景は、ブリタニアの兵士たちも初めて見るものだ。

皆言葉無く、半ば陶然としてその姿を見送つた。

「敵一機、急速接近中!」

反応が一つ、地図上の道を見捨てて猛スピードで突っ込んでくる。望遠カメラに写し出された機体は、翼を持った白い騎士。まがうことなくランスロットだ。

(スザクか!)

単騎といつても、ランスロット相手では分が悪い。飛べる相手では足止めもできない。まさしく、進退窮まった。

「ゼロ、ここまでだ。大人しく降伏するよう勧告する。……しないな

らば、君には一度助けてもらった恩はあるが、容赦はできない」

皇女ユーフェミアの騎士として、君たちを討つ。そう宣言するスザクの声には、確固とした信念があった。

「枢木スザク、何故君はブリタニアのために戦う!? 我らは日本のために戦っている。枢木ゲンブ首相の遺志を継ぎ、日本の国土と誇りを取り戻す。それが我々の目的だ!」

租界陥落を合図に、交誼のあるレジスタンスを総動員して全国的な蜂起を起こす。『日本』が取り戻されていく様子を見れば、スザクも考えを変えるかもしれない。

そう考えていたためこの状況で説得を行おうというのは情けない限りだが、しかしこの状況を乗り切るにはスザクを仲間を引き込むしかない。

「それが正しい道だと思ったからだ。日本は戦争に負けた。それを認め、その上でどうするべきか考えるべきだ」

それを認められないからテロリズムに奔る。スザクに言わせれば、彼らも日本の復興を阻害する一因である。日本が抵抗を諦めないから、ブリタニアも寛容になれない。

「違う! 日本は負けたのではない。戦う機会を奪われたのだ。枢木首相を殺した一人の男の手によって、降伏せざるを得ない状況に追い込まれたのだ。だから、君の考えは根本のところ間違っている」

それは人々の望んだものではない。負けたと認めるのではなく、あの時日本人が選べなかった道を提示する。それこそが君の進むべき道であろう。

その言葉を聞いて、スザクは反論せず黙り込んだ。スザクのトラウマを抉ることになるがこれしかない、とさらに言いつのろうとしたルーシユであったが、次のスザクの言葉で逆に血が凍った。

「君はどうやら、その人物が誰なのか知っているようだね。……何故僕だと言わない?」

「!!」

「父は、徹底抗戦を主張する軍部を諫めるため自決したとされている。が、それは嘘だ。実際は、徹底抗戦を主張する父を僕が刺した」

「……………」

今度は、ルルーシユの方が何も言えなかった。まさかスザクが自分から真実を宣言するとは、全く予想していなかったのだ。

「あの時、僕はそうすれば戦争は終わると思った。…浅はかな子供の考えだったよ。だから、今度こそ誰もが納得する方法でこの戦争を終わらせる」

それは、自分のエゴイズムにすぎないと言えばそうなのだろう。それを認めるようになったことが、スザクの成長である。

「それについて、君たちが僕をどう断罪しようとかまわらない。今この状況の責任が僕にあることも認める。だが僕は、君たちに許しは請わない」

誰かに許してもらおうと戦うことは、やめた。自分自身で何が正しいか考え、その上で進むべき道を決める。その結論が、ユフィの騎士として、彼女の理想のために戦う事である。

それで、自分が自分自身を許せる日が来るのかはわからない。だが今までのように何かに怯え自分の殻に閉じこもっていた時と比べ、世界の見方が変わったのは確かだ。

「今、この世界の情勢を動かしているのはブリタニアであることは動かない事実だ。だから、ブリタニアを変えれば、世界も変わる。俺は、ユフィと共にその道を行く！」

戦争のない世界。それを目指すのはスザクも同じである。ただ、ルルーシユと違う点は、彼には最終的なヴィジョンがなかったところだ。

それも、ユフィやライとの関係により、おぼろげながら見えてきた。ユフィが日本でやったようなことを、世界レベルで行えばどうなるか。その先にこそ、自分が望んだ『優しい世界』があるのではないか。「違う！お前の居場所は、そこじゃなく！」

「俺の居場所は、俺が決める！お前に決めてもらおうとは思わない!!!」

ゼロの親衛隊がランスロットに襲撃され窮地に陥った。そう聞いても、藤堂に助けに行く余力はなかった。解放戦線の部隊を逃がす

ことも危ういのだ。

(間に合うかー!)

残兵を纏め、ようやく租界の端が見えてきた。あとは川さえ越えればいいのだが、当然ながらブリタニア軍は退路を断つため橋を封鎖、もしくは爆破するだろう。

後方から追ってくる部隊に加え、迂回して先回りしようとする部隊がある。後方の敵に応戦していると、間に合うかわからない。

「藤堂さん、今のうちに、早く!!!」

朝比奈も同じ結論に達したらしい。藤堂が止める間もなく、自分の部隊だけ反転させて敵に突っ込んだ。藤堂だけでも逃がそうということだ。

「朝比奈、馬鹿な真似は止せ!」

仙波と千葉は生死不明。この上朝比奈まで失ったら、自分は両手両足をもがれたに等しい。だがここで自分まで反転しては、それこそ最悪の決断だ。

朝比奈の思いを無駄にしないのであれば、涙をこらえ、胸の痛みを抑えこみ進まねばならない。

その朝比奈の向かった部隊に、後ろから回り込むようにして襲いかかった部隊がある。識別信号を切って潜んでいたのか、いきなり現れた。

「朝比奈、大丈夫か!」

「下部!!!」

予想外の味方から通信が入り、モニターに映し出された顔を見て朝比奈が叫ぶ。同時に、先回りしようとした部隊も伏兵にあつて後退している。

(『蒼』か!)

助かった、と安堵の息をつく。これで無事租界から脱出できる。ゲッターに入りさえすれば、地の利はこちらのものだ。逃走ルートはいくつもある。

藤堂隊の残機は八、朝比奈隊は六で、たったの十四機。これから逃れてくる者もいるだろうが、解放戦線全体で何機残るだろうかと思

と暗澹とする。壊滅と言っている。

橋を確保できたのが、せめてもの幸いだろう。逃げてくる味方を効率よく逃がせる。

「ト部、お前は…」

「受けた指示は、『藤堂中佐を救え』。ですから、久しぶりに中佐の下に入らせてもらいます」

その返答を受け、藤堂はふっと笑った。ト部を派遣したのは、『蒼』の気遣いだろう。

月下のエナジーファイラーは危険域が迫っていた。それを交換し、銃弾も補給を受ける。もう少しだけ、ここで踏みとどまるう。藤堂はそう考えた。

「『蒼』が現れた？」

この報告に、真偽を確かめることもせずラヴェインを向かわせた。マリーカにしてみれば、何でこんな敗色濃厚になってから現れたのかなどどうでもいい。

（兄さんの仇、今こそ――！）

ラヴェインなら、それができる。初陣にも関わらず、マリーカは撃墜数を積み重ねていった。ラヴェインの力でしかないと言われると、領くしかないのだが、目的を果たす上では関係ないことである。

「おい、マリーカ！」

ノネットの静止を振り切り突き進んだマリーカは、ほどなく青い月下を発見した。

（あのコクピットに、この槍を叩きこんで――）

兄にしたことをそっくり返してやる。その思いで凝り固まっていた彼女は、脇目も振らず一直線に突進する。血気に逸った彼女が、背後の備えを怠ったのは当然だった。

「覚悟!!」

後一步、というところで、彼女のコクピットの方が大きく揺すぶられた。何が起きたかわからないまま、体勢を立て直せず墜落。爆発は免れたが、思い切り地面に叩きつけられた。

「一機撃墜、ですね」

何を思ったのか知らないが、あんな一直線に突っ込んだのでは狙ってくれと言っているようなものである。ルーミアにしてみれば、逆に何かの罠かと思ったほどだ。

とにかく厄介な飛行能力を持つ三機の内、一機はもう飛べないだろう。ルーミアの弾丸は、ラヴェインの右フロートユニットを吹き飛ばした。

マリーカは叩きつけられた際に気絶したのか、ラヴェインに動く気配はない。

「ネージュさん、できれば鹵獲をー」

飛行システムはラクシャータでさえも実用段階に達していない技術である。解析し量産すれば、大きな武器となることは間違いない。

そう考えたルーミアはライの月下に乗るネージュに指示を出す。その瞬間、警告音が鳴り響いた。

『お前か。ナリタでの借り、返させてもらおうぞ』

くり出されるランスより先に、脱出機構が作動する。間一髪の差で、ロンゴミアトは乗り手のいなくなった機体を薄紙のように貫いた。

『……思い切りのいい奴だ。だが、嫌いではないな』

ほんのわずかでも戦おうとして脱出が遅れていたら、ルーミアの体はミンチとなっていただろう。警告音と同時に躊躇なく機体を捨てた果敢が、彼女を救った。

「全部隊に伝達、撤収です。可能な限り地下ルートを通るよう。ト部さんも藤堂中佐に、無理をしないように、と」

藤堂と朝比奈は救えた。ルーミアにしてみれば、これで目的は果たした。無理をして天叢雲まで壊滅させるなど愚の骨頂である。ましてやゼロを救う気など毛頭ない。

（私たちの地ならしを頑張ってくれたことだけは、感謝しますが）

ナイトメアの飛行技術に対し、現状日本側は成す術がない。それを知らしめただけでも、ゼロの租界侵攻は意義があった。天叢雲が先行していたら、壊滅していたのはこっちだったところだ。

そして、今回もまたブリタニア軍の損害は大きい。結果からみると、自分を犠牲にしてせつせとこちらに有利になるよう励んでくれただけである。

皮肉と冷酷さの入り混じったルーミリアの笑みを、ゼロが知ることはない。

「みんな、早く下がって。あいつは、私が止めるから」

ベディヴィエールを見上げ、ネージュが言う。相手はナイトオブラウンズのノネットか、と思うと、少々複雑な思いにとらわれる。

(ユーインの子孫が、彼に牙をむくってね)

たった一人、『王』がギアスのことまで打ち明けた存在。それがユーイン・エニアグラムだった。その子孫とライが戦うというのは、期待するほうが間違いなのだが残念だったという思いを消しきれない。

だが、ナリタに続いて今回もライとノネットが直接向かい合わずに済んだ。それは、先祖の遺志によるものかもしれない。

『今回は赤い奴が見えないな。：あつちにも借りを返したいと思つていたのだが』

ベディヴィエールが降り立つ。周囲の味方が、一人残らず見えなくなった。これでやりたいようにできる。

(さて、と。ここはどのくらいにするのがいいかな)

ライの月下を借りてきたが、それでも機体性能は向こうが上。だがネージュにしてみれば、勝つ手段はいくらでもある。

ヤルダバオトを召喚するまでもなく『未来視』のギアスで充分だろうし、マリアンヌの操縦技術を『模写』してもいい。

それをやらないのは、無条件でライに勝たせてしまったらつまらないと言うだけだ。ネージュの目的はライを勝たせることではなく、ましてやブリタニアの破壊などでもない。

「遊んであげる。せいせい、私を楽しませてみてね」

Stage 51 救援

ランスロットの回し蹴りが頭部にクリーンヒットし、瓦礫に叩きつけられた無頼改は機能を停止。黒の騎士団は中核を撃破したら、後は逃げ散った。

スザクは脱出できないように撃破した。シートが飛ぶ射線は、ビルの瓦礫で塞がっている。

「……これより、ゼロの身柄を確保します」

ゼロは殺さず、必ず捕らえるように。ユファイからの絶対命令である。スザクにも異論はない。ゼロは正当に裁かれるべきであって、裁くのは自分ではない。

「その裁きが『不当』であれば、僕とユファイはそれを変えるべく行動する」

スザクが変わったのはその点だ。皆が納得する方法で、という点は変わっていないが、今のルールを絶対視することが正しいとは限らない、と気付いたのだ。

シンジユク事変で、何が正しかったのか。結論を言ってしまうえば、テロリストもブリタニアも正しくない。テロ行為は批難されるべきだが、ブリタニア側の虐殺とて非道と言われるべきだろう。

それに気付いたスザクは、この時ふと思ってしまった。

(…『蒼』なら、もしかすると話が通じるかもしれない)

今、ユファイが新たに煮詰めている計画がある。それは「正しい」と胸を張って言える。であれば、彼も賛同してくれるのではないか。

ゼロはここで終わりだ。その上『蒼』が組織を解散してくれば、この戦争は終わる。少なくとも規模は格段に小さくなるだろう。

あとは、自分とユファイの仕事である。そこで終わりにならないよか、その苗木をしつかり根付かせるのだ。

「!!!」

「夢想から覚めるのがあと一瞬遅ければ、ランスロットは撃ち抜かれていた。攻撃が来たのは上からだった。敵もフロートユニットを持っていいのかと空を見上げたスザクは、敵の姿を捕らえた。」

「狙撃機か…？」

望遠カメラに写し出されたのは、ナイトメアの空中輸送機。そこに、大型ライフルを構えた見慣れないナイトメアが乗っている。紅蓮や月下に近いが、明らかに違う。

ここにラクシャータがいれば、その機体を見て「朧月夜!!!」と叫んだことであろう。

『おい起きろールルーシユ!!!』

がなり立てるような声に、気を失っていたルルーシユが目を覚ます。誰かは確認するまでもない。

「C・C…、お前…、どうして…」

ここまで、C・C・とは別行動だった。ゼロの代人として派遣せねばならない用があったのだ。そして、彼女が戻ってくる予定はなかった。

『こつちの方は上手く行った。…そこで急いで戻ってきてみれば、何だこの様は』

飛び上がったランスロットがヴァリスの狙いを付けようとして、一瞬静止。その瞬間にC・C・は輸送機から機体を切り離し、降下開始と同時にライフルを発射。

当然スザクはそれを回避するが、降下中に狙われるのを防ぐための牽制である。ヴァリスのロックから外れた機体は、無事地面に降り立った。

『言っておくが時間稼ぎ以上は期待するなよ。私であいつに勝てるわけがないのだから』

胸を張って言う事か、とツツコみたくなるが、着地したC・C・はルルーシユを庇うようにランスロットと向かい合った。

「…ゼロを庇う気か？そいつは人の憎悪を煽り、災いを起こすだけの存在だ。日本のためにならない」

『日本か、思うところがないわけではないが…。まあ、私が邪魔するのはとても個人的な問題によるものさ。こいつに死なれると少々困る。それだけのことだ』

敵は日本刀を抜く。それに対し、スザクもMVSを構える。数秒の

対峙の後、先に仕掛けたのはスザクだった。

C・Cは、それを冷静に受け流す。スザクの悪い癖で、最初の攻撃は正面かつフェイントをかけない。どんな鋭い太刀筋も、予想できれば受け様はある。

ルルーシユはスザクの行動パターンを解析していた。それによると、次に彼は間合いを取ろうとするはずだが…。

「三分、下がりなさい」

その声に、前に出ようとしたC・Cは慌てて機体を後退させる。二歩分下がったところに薙ぎ払いが来た。

(避け…きれん！)

大型ライフルを盾代わりにして捨てることで、腕は無事だった。下がらなければ、胴体から両断されていたところだ。

「…何のつもりだ？言っておくが、恩を売ってコードを譲渡させようというのなら無駄なことだぞ」

頭に直接話しかけてきた声に、C・Cも相手がそこにいるかのようには話を成立させていた。彼女にとっては特別なことではないだろう。

ただ、相手の意図が全く見えないという点で、彼女も驚いていたのである。

「別にそんな事言うつもりはないわよ。最近彼が望んでないみたいだから…」

「…何だと？」

それも予想の外にある答えだった。あれだけしつこく迫っていたのが最近ぱたりと止んでいたのとおかしいとは思っていたのだが、「望んでない」とは…。

「諦めたのか？あいつの悲願だったはずだが…？」

「悲願なのはもう一人の方であって、彼じゃないわ。もう少しこの世界の行く末を見てみたいということどころかしらね」

つまり、サボタージュ中ということなのだろう。では何故C・Cに味方してくれたのかというと、その理由は彼女の予想範囲の斜め上を突き抜けていた。

「簡単に言っちゃうと、嫁に対する姑からのアドバイスってところ」
「なななな何を言っているマリアンヌ!? 何故私がお前と嫁姑の關係に…」

真つ赤になつて慌てふためく。どうやら、ここが戦場であるという事も忘れてゐるらしい。「あ、来るわよ」という念話に慌てて構え直し、斬撃を受け流した。

「なら、何でルルーシユから離れてあの人の下に奔らないのかしら? シャルルと二人でずっと不思議に思つてたんだから」

「う、うるさい! ……そもそも、…第一、わ、私があいつと一緒に居るのはあくまで私の目的を果たすためであつて…」

「ふーん、まあ、この話は追々にしておこうかしら。あ、次はね…」
(C. C. の奴、あんなに強かつたのか?)

ズクと互角に戦つている。時折反応が遅れて回避しきれない時があるが、今だ致命傷は一発も受けてない。足止めどころか、勝てるかもしれない勢いだ。

とは言つても、このままC. C. にすべてを任せて逃げることはできない。彼女を犠牲にして自分が生き延びたら、自分自身を許せなくなる。

「くそつ、何かないのか!」

思い起こすのは、母が殺された時の記憶。あの時と同じく、また世界は「お前は無力だ」と突きつけるのか。

とはいえ、乗つていた無頼改はもう動かない。他の親衛隊員が乗つていた機体も撃破されたか、残つている機体にはコクピットのシートがない。

(……トレーラー?)

ふと、目についたのはブリタニア軍で使われているトレーラーだった。運転席には誰もいないが、それより積み荷を物色しようとコンテナに入る。サザーランドでも乗つていれば儲け物だ。

「これは…?」

積み荷はサザーランドではなかった。が、これこそ今望むものだ。どうやら運命は、まだ彼を見放していなかったらしい。

(なんなんだ、こいつ…)

『蒼』ではない。通信に対して「今日は代理なの」と少女の声が返って来た時点でそれは確実だった。技量は『蒼』に比較して明らかに劣る。油断できる相手ではないが、ぎりぎりの勝負となるほどではない。

ロンゴミアトと輻射波動がぶつかり、二つのエネルギーがスパークする。片方の槍を失ったが、相手は左腕消失。最強の武器である輻射波動を打ち破った。

明らかに優勢。なのにノネットは、どこか余裕のある相手に脅威を感じていた。

槍は一本になった。敵は右手のみの、刀一本。敵にとってロンゴミアトは厄介な武器だ。全体がブレイズルミナスに覆われるため武器で受け流すことは難しく、回避するしかない。

突きからの、横薙ぎ。振った勢いを利用して回し蹴り。全てかわされた。反撃の回転切りを、シールドを展開して防御。

「速さが、…増した？」

相手の操縦技術からして、当たるはずの攻撃だった。それが全て避けられた。先ほどまでの動きから、一段ギアを上げた、という感じだった。

(こいつ、むしろ『蒼』より怖い相手かもしれないぞ…)

ただ『強い』のであれば、相手の力量に感嘆し自分の未熟を恥じるだけだっただろう。強さの底が見えないのが、不気味なのである。

戦闘開始から、五分を超えた。時間稼ぎとしては充分で、天叢雲は損害軽微で逃げ切った。ルーミアは機体を撃破されたとはいえ、本人は健在なので問題ない。

(じゃあ、そろそろ撤退しようかな)

間合いを取ったところで、切り上げを考える。当初の予定より少し力を出さないといけなかったのは、さすがラウンズと言ったところか。

だがその程度、許容しても問題はないだろう。しかし、次の瞬間、ネージユも想定していない事態が起きた。

『死にさらせブリキ野郎!!!』

いきなり、廃墟となったビルの上からの銃撃。識別信号を切ってひそかに近づいた機体があったのだ。そのくせ攻撃の前に外部スピーカー駄々漏れで叫んでしまったのは、奇襲の効果も薄くなるのだが…。

「玉城!!」

何故、彼がここにいいのか。自分を残して撤退することに罪悪感を覚えないよう、天叢雲の団員には「そうするべきだ」と思う程度に弱くギアスを展開したのだ。

ルーミリアならともかく玉城がそれを破ってきたというのも驚きだが、はつきり言つてこの行動は迷惑でしかない。

『邪魔、するな!!』

ノネットはその奇襲に動じることなく銃弾を避け、ハーケンを発射。狙いは玉城の乗る無頼ではなく、その足場となっているビルの柱。

「お、おお?」

柱が崩れたことにより、ビルの一角が欠け落ちた。無論、その上にいた玉城も一緒に落ちる。受け身を取れず地面に叩きつけられた無頼に、ベデイヴィエールは突進する。

(死んだ)

レジスタンスとして幾度も窮地に陥りながら、しぶとく生き延びてきた。その玉城も今回はかりは覚悟した。

無頼は駆動系のどこかが故障したのか、動かない。敵のランスを避ける術はなく、機体ごと自分の体を引き裂くだろう。

目をつぶった玉城の前に、青い機体が割り込んできた。

「……………」

ロンゴミニアトは、月下の胴を貫いた。機体は爆発。当然、搭乗者は助からない。武人として、何とも後味の悪い幕切れとなった。

それでも機体を後退させていたのは、直感が危機を察していたからだろうか。

「なっ!!!」

爆炎の中から、竜のような機体が現れた。その異形の機体が振るう

拳を、ベデイヴィエールは両手で防御：したつもりだった。

その拳はブレイズルミナスを紙のように突き破り、一撃でベデイヴィエールの両腕を粉碎した。右腕は肩関節が外れて吹き飛び、左腕は肘の先が千切れて無くなっている。

機体自体もその衝撃でスピンし、あちこちにぶつかりながら地面をのた打ち回る。

かろうじてベデイヴィエールを起き上がらせたノネットだったが、彼女が見たのは機能を停止した無頼だけだった。

―夢を、見ていた。

―少年は、母と妹を護りたかった。

―力を与えてくれる少年がいた。契約を結んだ。

―親友と共に戦った。戦いの果てに全てを手に入れた。

―だが、最後には、その全てが手から零れ落ちた。

「……………あ…れ？」

目を覚ます。アツシユフオード学園の、自分の部屋だ。妙に現実感がありながら、どこか違和感のある夢だった。

騎乗し、剣槍を持って敵と対する。冷静に考えればこの時代にそんな情景などあるはずない。しかしその光景は現実感にあふれる物だった。

では何が違和感の正体か、と問われると、それがわからない。

「よかった、よかった、よかったよ…！」

いきなり、体に重さを感じた。視界は赤い髪で塞がれる。何か、と考えるまでもない。

「…ごめん、心配かけた」

やはり、自分のギアスはぎりぎりのところにある。今回は幸いなことに一段落するまでもってくれたが、途中で倒れていたら大変なことになっていた。

可能な限り使用は控えるべきだろう。何より、彼女を悲しませることはするべきではない。

「大胆ねえ、カレン」

そんな二人の世界に水を差したのはミレイである。心配だったのはわかるが、人目もはばからず抱き着かれると苦笑いの一つも浮かべなくなる。

その声にカレンは慌てて身を起こし、真っ赤になって身を小さくする。

「えー、戦況の方は…」

ライとしても気恥ずかしかったのだろう。取ってつけたように、話

を転換する。

「安心してください。総督から増援もいただきましたし、学園に被害はありませんでした。全体としては、もう掃討戦に入っています」

答えたのはユファイである。戦局図を見て、もはや形勢が覆らない事くらい素人でもわかる。ただ、ブリタニア軍も大損害を被った。戦術的には痛み分け、というところだろう。

「そんなことより、君、『ガウエイン』知らない？」

いきなり割り込んできたのは白衣に眼鏡の男である。隣にいた女性士官が慌てて頭を抑えて無理矢理下げさせた後、説明を加える。

「特別派遣嚮導技術部副主任のセシル・クルーミー中尉です。……こちらは主任のロイド・アスプルンド少佐です」

ぎろりとロイドを睨んだ眼光は上司に対するものではない。とりあえず黙つてろ、ということだろう。

「お分かりだと思いますが、スザクの上司となる二人です。あの『ウラノス』の開発者でもあるんですよ」

ユファイのフォローにこほんと一つ咳払いをして、セシルが続ける。実は、特派で所有している機体が一つ足りないらしい。

「最終調整のため今日届く予定だったのですが、この混乱の中行方不明で……」

輸送の予定が遅れていれば、崩落に巻き込まれた可能性もある。そしてその機体の名前が『ガウエイン』だった。

始動キー確認。暗証コードはコピーした特派の機密データ内から見つかった。それを入力して機動シーケンスをクリア。つまり、この機体は動かせる。

異様に大型な機体だった。サザーランドや無頼、ランスロットの全高は4・5mほどだが、この機体は明らかに6m以上ある。

そして機体の色は黒。ランスロットと対となるよう、その色が選ばれたのだろう。

「行け、『ガウエイン』」

「何だ？」

付近で爆発音。朧月夜の攻撃をかわし間合いを取ったところでそ

ちらを流し見る。爆発自体は小規模で、戦闘に影響はなさそうだが…。

「何?!……ぐあつー!」

いきなり、赤黒い光線がランスロットを襲った。シールドで防ごうとしたが、防ぎきれない。体勢を崩したところに、朧月夜の発砲。

朧月夜の兵装、陽電子砲。避けきれず、右足首から下が吹き飛んだ。フロートユニットがあるので動けないことはないが、ランドスピナーと組み合わせた複雑な三次元駆動はもう無理だ。

「相手も、フロートユニット搭載型か……」

攻撃が来たのは、上空からだった。その方向に見えたのは、夕闇に溶け込むような黒色の機体。

これで、ランスロットが持っていた優位は一切無くなった。何より、敵は二体。片方を相手にしているうちに背後から狙われる。

その上試験場からの移動とこれまでの戦闘で、エナジーファイラーの残量は危険域に差し掛かっていた。

友軍は、といえばサザーランド部隊はようやく迂回路を探し出したところで、とても間に合わない。頼りになるラヴェインとベディヴィエールは、どちらももう戦闘できる状態ではなかった。

「この勝負、預けたぞ、ゼロ!」

引くしかない。そう決めたスザクは、全速力で飛び去った。ゼロの首にあと一歩まで迫ったのに取り逃がしたという無念はある。だが、ここで戦い続けるのは無謀だった。

(俺は、ユフィと共に歩むと決めただ)

だから、死ぬわけにはいかない。その思いが、冷静な判断を自然に下せるようにしていた。

「……………」

スザクを退けた。この窮地を生き残った。それは喜ぶべきことなのだが、去り行く友の背中を見送る心の中は虚しかった。

(あいつと俺が手を取り合うことは、もうないのか)

歴然とした事実として、突き付けられた。ゼロの仮面を捨てない限り、ユフィの騎士であろうとする彼が握り返してくれる手はないだろ

う。

『……やれやれ、酷い目にあつた。おい、まだ呆けている暇はないぞ』
そんなルルーシュを正気に戻したのはC・Cからの通信だった。
もう、後戻りはできないと覚悟したはずではなかったのか。

(ゼロの仮面を捨てることは、これまでの人生を否定することだ)

ガウエインで窮地に陥っていた部隊を救い、撤収。これ以上ナイト
メアを失えないコーネリアも追撃を切り上げたため、戦闘は一挙に終
結に向かった。

瓦礫の山となつたトウキョウ租界は、一時、静寂の闇に包まれた。

「……………ユファイ」

「……………はい」

これは相当怒っている。さすがに今回は総督命令を無視して勝手
な行動をし過ぎたと、しゅんとしたユファイである。

「結果的に良かったから、ではすまぬこともある。お前はそれを理解
することだ」

苦言はこれだけだった。言つた本人も甘すぎるとは思うが、どうに
も言葉が続かない。

無論、叱るだけで政庁まで呼び出したわけではない。とにかく考え
ねばならないことは、被災者の保護と復興についてである。

「私財を全て投げ打つてでも、やりましょう」

まずそう言つた妹に、コーネリアも啞然とした。だが政略的には非
常に有効だ。もちろん足りるはずもないが、覚悟のほどは示せる。上
が覚悟を示せば、下も続かざるを得ない。

とりあえず、被災者を受け入れる避難所が必要だ。国公立の施設を
解放し、アツシユフオード学園など民間にも打診して場所の確保は何
とかなつた。

次は救援物資を運び込む手配だ。仮だろうが食と住が確保されれ
ば、人間生きていける。逆にこれが確保されないとすれば、誰もが犯
罪、略奪に奔るだろう。

当然、同時に救助作業もやらねばならないし、二度とこんなことが

起きないようにセキュリティのシステムを見直す必要もあった。

(結局、動機はわからず仕舞いだった…)。

パージの実行者は同僚を殺害後、自害していた。何故彼がゼロの誘惑に乗ったのかは、遺族にも全く思い当たる節がないという。

ちなみに遺族は、このままトウキョウ租界に留まれば常に後ろ指を指され生きていくことになるだろうから、この後誰にも行先を告げずに逃げ去った。

ただ、おそらくそこでも、身を小さくして怯えながら生きていくしかないであろう。

さらに並行して、軍を再整備し房総に攻め込む準備も整えねばならない。ブリタニアも苦しいが、それ以上にゼロは苦しいはずだ。

「セラファイーナはサクラを守りきったか。その点は、幸いだったな」

サクラが健在なら、房総への橋頭保とできる。サクラを襲った敵は、ゼロの敗北を聞いてそそくさと逃げ出したところを追撃され、粉砕された。司令官は逃したものの、無効化されたと言っている。

今回の決め手となった特派の三機は、どれも修理が必要とのことだった。ランスロットはすぐ戦線復帰できるだろうが、一機だけでは速戦即決は博打となる。ガウエインを奪われたのが、いかにも痛い。残る一機があるといえはあのだが、乗り手が問題だった。

「……また、あいつか」

さすがに軍人ですらない奴を使ったのでは、軍全体の面目丸つぶれである。ただロイドたちはデータを見て欣喜したらしい。ウラノスに最適なデヴァイサーたる素質が見れるという。

そして最大の問題で、最もわからないのがベデイヴィエールを中破させた謎の機体である。特徴からして、かつて河口湖でランスロットを圧倒したアンノウンと同じであろう。

報告だけは上がっていたが、コーネリアも半信半疑で、しかも対策がどうしようもないので打つ手なしで放っておくしかなかった。

研究者も、頭をひねるばかりである。推定されたスペックは、理論上の数字をはるかに超えていた。

しかし、今回『蒼』の乗機を倒したら現れた(どうやって現れたの

かも謎だが）以上、『蒼』と何らかの関係があると見ていい。

だが、そんな対策の取りようもない化け物のような機体を持っているのなら、何故それを前面に押し出してこないのか、という疑問がわく。正直言つて、トウキョウ租界などたちまち陥落するだろう。

もつとも、いくら考えたところで「何らかの事情があつて出せないのではないか」という希望的推測で話を打ち切るしかないのだが…。

「記者会見の準備が整いました」

重い体を無理矢理奮い立たせて、場に向かう。さすがのコーネリアも疲労困憊していた。だがエリアー1総督府が健在であることをしっかりとアピールしておく必要があつた。

記者の中には、デイトハルトもいた。ぬかりなく、クロヴィス時代からのコネで高官たちに接触している。誰も、彼を騎士団の関係者とは思っていなかった。

「我らは勝利した。今度の戦いは、ブリタニア軍の大勝である」

高らかに謳うコーネリアだが、内心では薄氷の上の勝利であつたと思つている。誰であろうと、士気高揚のためにはそのくらいのリップサービスは行うものだ。

被災者には援助を、死者には補償を、どさくさ紛れに法を犯す者には厳罰を、と続けていくうち、コーネリアの元に一つの報告が入る。

それを聞いたコーネリアは眉をしかめ、早々に会見を打ち切つた。キユウシユウに、中華連邦軍が来襲したという。

「今回の首謀者は澤崎敦という、かつて枢木政権で官房長官を務めていた男ですわ。敗戦後は、中華連邦に亡命していました」

それが中華連邦遼東軍管区の曹將軍と共にフクオカ基地を奪取し、勢力を北九州一円に広げていた。中華連邦が介入する名目は「人道的支援」というが、傀儡政権を作るのが狙いだろう。

「……片瀬ともつながりのある人物ですから、十中九までゼロが一枚かんでいる物と」

自身はトウキョウ租界を奪取し、中華連邦に西から攻め込ませる。戦略的に間違いではない。ブリタニアと徹底的に戦うのであれば、中華連邦との同盟は必須と言っている。

「……おそらく、中華連邦を手玉にする自信があったのでしよう。自信過剰な男ですから」

神楽耶の集めてきた情報に、ルーミアが推測を加える。ただ、彼女の言葉には棘があった。

激戦から、一夜明けた。ライとカレンは「ルーミアを迎えに行く」と称して外に出た。戦闘後、ルーミアは一晩を避難所で明かしたと報告している。

なお、学園の方は当然ではあるが学業に励めるような状況ではなく、無期限の休校となった。仮の避難場所であることが終わるまでは、再開の目途は付きそうもない。

そしてメンバーを集めた軍議の席で、まず話題となるのは当然中華連邦に対する対応である。

「彼らは、『日本』と称しているが……」

「看板だけ、です。やってることは九州をブリタニアと中華連邦の戦場にただけですね」

味方するべき相手ではない。そうルーミアは言い切った。仮に今回日本からブリタニア軍を駆逐できたとしても、ブリタニアの再反抗は必至だ。

日本全土が戦場となり、その被害は計り知れないものとなるだろ

う。

「……まあ、悪い事ばかりとも言えないだろう」

劣勢になった扇に味方したのは朝倉である。ブリタニアは騎士団と中華連邦の対応で手一杯のはずだ。こちらが動くには、好機と見ていい。

その意見にはルーミアも賛同した。数年は先だと思っていた機が、今やって来た。

『月輪七曜』の長野、『小鷹』の秋月など、すぐに北陸道に移し『鎌鼬』の中条に合流させましょう」

折衝した神楽耶が説明する。急ではあるが、作戦の概要は通してある。

とはいえ、しばらくの時間は必要だった。彼らの準備にも、自分たちの準備にも。

「お義兄様の新たな機体は全力で用意させますが、隴月夜まで取られてしまいました……」

隴月夜は、元タルーミア機となる予定だった。それを桐原達が無断でC・C・に引き渡してしまったのだ。『暗部』の知らせを受けた時には、すでに遅かった。

「桐原達には、きつーーーく灸を据えることにしましょう」

藤堂達の月下やゲフィオンデイスターバーも、神楽耶に無断で引き渡されたものである。勝てば神楽耶も認めざるを得ないと思ったのだろうが、完全に裏目に出た。

「というわけで、残っている第7世代相当のナイトメアはカレンさんの紅蓮と、ネージュさん用に開発していた『雪花』の2機のみとなります」

それと、半月ほどあれば汎用型の月下を何機か輸送できるという。フロートユニットが搭載されたブリタニアの第7世代ナイトメアと戦うには、少々心許ない。

それとは別に、『ネージュ』の名前が出た時、期せずして皆の視線が玉城に集まった。

「……い、いや、言いたいことはわかる。わかるけどよ……、お前ら、あ

いつに全部任せて逃げ出すだけでよかったのかよ?」

玉城の言い分はつまり、「あんな子供に強敵押し付けて逃げたんじゃない男が廢る」というものである。改めて言われると、それは皆に共通する思いであった。

「それに、お前ら、あいつが死んだら絶対悲しむだろうと…」

その言葉はライとカレンに向かって言われたものである。「まるで親子」という認識は、もう組織の中では鉄板となっていた。

「……でも、玉城が何もしなければ無事帰ってこれたんじゃない?」

そう、結果から見るとそうなる。皆、「私たちでは手出したところで邪魔になるだけ」と考えて撤退したのだ。玉城はその冷徹な判断ができず、まさにその通りになったのだから。

ぐつ、と言葉に詰まって黙り込んだ玉城だったが、その背後でいきなりドアが開いた。

「勝手に人を殺さないでくれるかしら?」

入ってきたのは、真っ白な少女。その姿を見て誰よりも速く動いたのはカレンだった。

「……もう、本当に心配したんだから」

力一杯、抱きしめる。その姿を見た井上から「お母さんぶりが板に付いて来たわねー」とツツコまれ慌てて身を離したが、ネージュの身は自分とライの間に座らせた。

そのネージュは、十人ほどの客人も連れて帰ってきていた。

「解放戦線の仙波峻河と申します。ご息女のおかげで助かりました」

その一同を代表した男が四聖剣の一人であることは、皆知っている。他に女性の姿もあり、それが千葉凧沙であることもすぐわかった。

戦闘は終了したとはいえ、残党狩りは続いていた。逃げ遅れた者は、そこをうまくすり抜けねば命はない。ネージュは逃げ惑う解放戦線の団員を集めて、ここまで案内してきたのである。

「不思議な子だな。何故か、自分の勘よりあの子を信じてみたくなかった」

千葉の中では、今になってみると腑に落ちない。これまで危地に

陥っても自分の才覚で生き延びてきたのだ。なのに、今回ばかりはあの少女にすべてを任せてしまったのである。

それは仙波も、他の人も同じだった。ネージユに誘われるまま、ここまで来てしまった。その選択は確かに正しかったのだが、冷静になると「何故？」という疑問が消えてくれない。

「……………」

ライとしても、返しように困る。ネージユの不思議さは自分たちにとっても理解の範疇を越えているのだ。なんかもう、「考えたら負け」みたいに諦めているのだが。

ただし、修正すべきところは修正せねばならない。ネージユは娘ではない。のだが……

「ねえカレン、私たち、昨日から非常食しか食べてないの。お腹すいたー」

その本人が子供のように甘え、しかもカレンの方も急いでおにぎりを作って来て食べさせているとなると、何とも説得力に欠ける。

仙波は微笑ましいものを見たとき、千葉は理解に困るという表情をしていた。

「……………そうか、仙波も千葉も無事だったか」

不幸中の幸いだ、と藤堂は思った。朝比奈も、戦友が生きていて嬉しくないはずがない。ブリタニアの警備状況を見極めてから帰還するとしても、数日中には戻ってくるだろう。

今回の大敗で、解放戦線と黒の騎士団の戦力は激減した。せつかく取ったキサラツ基地すら守れそうもなく、残存戦力をかき集めて本拠の要塞に籠るしかない。

暗澹たる状況に陥った中で、二人の帰還は朗報と言えた。

租界制圧後の一斉蜂起を約していたレジスタンスは、大方が蜂起を見送った。フライング気味で起ってしまったところがいくつかあるが、今頃頭を抱えているだろう。

中華連邦を参戦させたのは片瀬が主導したという。裏で沢崎と示し合せ、租界を攻略した日本軍は東から、中華連邦の力を借りた沢崎

は西からブリタニアを駆逐する予定であった。

藤堂は与り知らぬことだった。自分は実戦部隊の指揮を任されただけなので、それはまあいい。

「中華連邦の力を借りることは反対だったが、現状、贅沢は言ってもらえん」

しかし、その中華連邦が、どこまで本気であるかはなはだ疑問だ。形勢不利となれば、「曹將軍とその軍が勝手にやった」とトカゲのしっぽ切りで終わりにするだろう。

外部ばかりではなく、内部にも亀裂が走っている。今回の敗因は、何と言ってもゼロが指揮を誤ったことである。ユーフエミアの政治的価値を重視するあまり、戦術的目標を見失った。

「このまま、ゼロに従っていいのだろうか」

解放戦線内では公然と、騎士団内ではひっそりとささやかれている。藤堂はゼロに対する不満こそ口にしなかったが、敗北後の軍議の席で一点だけ批判した。

「そもそも、『蒼』との協調を欠いたまま事を進めたのが間違いであつたと考えます」

その言葉は片瀬に容れられることなく、ゼロ追従の関係は続いたまままだ。

「……片瀬少将の考えは、とにかく、今は分裂だけは避けようということだろう」

自分自身を納得させるように言う。ここで騎士団と袂を分かつとしても、解放戦線には行き先の当てもない。留まるならば、喧嘩をしている場合ではないというのは道理である。

それに、あと少しまで行つたのは確かにゼロの力だ。それ故ゼロを見限るのはまだ早い、と片瀬は言うのだ。

「……自分の保身のため、とも考えられますけどね」

『蒼』ではなくゼロを選んだ。その判断が間違いだった、と認めたくないから粘っている。そう受け止められても、仕方ない点はある。

「その上、『こんなことになったのはナリタでコーネリアを討たなかった』『蒼』のせいだ』といい、神楽耶様を大激怒させたつて言うじやな

いですか」

それに対し、藤堂は何も答えなかった。答えられない、と言う方が正しい。なんでも、神楽耶は解放戦線を割ることも考えたという。分裂の火種を自分で蒔いている片瀬を、擁護しようがない。

「オレンジ殿がお見えになりました」

片瀬への愚痴が止められなくなりそうな流れが、取次の士官の声で断ち切られた。要件は大体わかる。

「次の防衛戦は、藤堂殿に実戦部隊の総指揮を執ってもらうことになりましょう」

貧乏籤を押し付けられたという感がしなくてもないが、妥当な提案ではある。少なくとも解放戦線には、今ゼロに指揮権を託そうなどと言われて納得する者はいないだろう。

「：ブリタニアが我らと中華連邦の二面作戦を強いられている限り、この要塞を守り抜く自信はある。が、その後は力及ぶところではない、とゼロに伝えてもらいたい」

もはや独力での挽回は不可能、中華連邦の存在で支えられている。残る、頼りになる戦力を持っているのは『蒼』しかない。

故に、含むところがあっても『蒼』との関係を改善しろ。言外に、そう言ったつもりである。

さすがにジエレミアは馬鹿ではない。藤堂の言いたいことは、すぐ理解した。

(が、しかし—)

容れられることはないと思う。二人の関係は、大きく捻じれている。方針がまったく相容れない上、個人的にも嫌い合っていた。

学園では生徒会長のミレイを始め他メンバーが橋渡し役となり、ルーシユの猫かぶりもあつてそれなりに付き合っているらしいが、ゼロと『蒼』の関係ではそういう人もいない。

「……お、戻って来たか」

ゼロの執務室で待っていたのはC. C. だった。朧月夜の存在と合わせて、今回の戦いで大きく株を上げた。その割に騎士団内で何ら

かの肩書を欲しがらなくても、客分として気ままに過ごしている。

「お前からも言っただけのことがある。いくら切羽詰ったとはいえ、私のピザ予算を削減するとは何事だ？」

いくら気ままと言っても、こんなことを言えるのは彼女だけであろう。片瀬と会談中のルルーシュはまだ戻っていない。それをいいことに、C・Cは言いたい放題だ。

それが何か、照れ隠しのように聞こえるのは気のせいだろうか。

「……ところで、お前はブリタニアに戻るつもりはないのか？」

不意に、きわどい話題に切りこんできた。戻れないことはない。今のこのこと姿を現したら冷笑で迎えられるのは確実だが、言いつくろえば死罪ということはないだろう。

事実、ヴィレッタとは連絡を付けている。マリアンヌ事件の、それもコーネリア総督やユーフェミア副総督が持っているデータを入手できないか頼んでいた。犯人を見つけ、その功で復帰を認めてもらうと言っただけ。

「…敗北は補佐である私の力量不足によるもの。ナナリー様やユーフェミア様の御身は大事だが、あの場はもっと強く諫めるべきであった」

どれほどルルーシュが二人のことを気遣っていたか知っていたジエレミアは、反対したものの最後は妥協してしまった。それが敗因である、と彼は言う。

「……お前は本当にマリアンヌのことが好きなのだな」

やれやれ、とC・Cは息をついた。

一週間が過ぎた。

租界および関東エリアは、表面上平穏な日々が続いていた。租界の復興のため重機の駆動音と槌音はそこかしこで鳴り響いているが、銃声はどこからも聞こえることはなかった。

騎士団および解放戦線は外に向かう力を失い、それを受けて泡沫のレジスタンスも鳴りを潜めている。コーネリアの統制の下、暴動が起きたという話もない。

一方で、九州ではブリタニアと中華連邦の対峙が続いていた。コーネリアは最も信頼するダールトンに西日本全軍の指揮権を任せ、中華連邦の本州四国上陸を防がせた。

が、ダールトンと言えどそこまでが限界だった。租界防衛戦の生き残りKMF百数十に地方軍を併せて、掌握する戦力は三百機ほど。

対する中華連邦軍のKMF戦力は、鋼體^{ガン・ルウ}八百機以上と推測されていた。性能はサザードランドどころかグラスゴーにも劣る程度だが、いかにせん数に差がありすぎる。

何とかして九州に橋頭堡を確保すべく上陸したブリタニア軍は、曹將軍によつて叩き返された。

とはいえ、中華連邦軍も順風というわけではない。後続が全く来ないのである。

「洛陽は何を考えているのか!!!」

沖繩方面から侵攻する予定だった江南軍管区の孫將軍、遼東軍管区以上の戦力を保持する河北軍管区の袁將軍など、動員予定だった部隊が続く心配がない。

孫將軍からは「勅令で動けない」との連絡を受けている。騎士団の敗北を知り、大宦官が尻込みしているのは明らかだった。

手持ちの戦力では北九州の制圧と維持で手一杯で、九州戦線は両陣営とも本意ではないまま長期戦へ突入する見込みが大、となった。

「ライー、入るわよー」

返事はない。おかしいと思ってカレンが突入した部屋は薄暗く、甘い匂いが漂っていた。

「……………」

匂いはいい。被災者の慰めになろうかと、何か菓子を作るという話があつたことは知っている。一度に大量に作れる焼き菓子を作つたのだろう。

ルーミリアがその手伝いをしているはずなのだが、その彼女の姿も見当たらない。

「何してんじやー、あんたはー！！！！！！」

嫌な予感がして寢室に駆け込んだカレンは、ベッドで同衾している二人を見つけて絶叫した。

「……………くすつ。何って…、見ての通りですけど?」

起き上がったのはルーミリアだけである。その姿は、何と全裸。あまりのことに絶句するカレンに対し、ルーミリアは調理場を指差した。

「パウンドケーキの風味付けにお酒を使つたんです。そうしたら、その匂いだけでライさんは酔っぱらってしまつて…。お酒に弱いにしても、ここまでとは思ってませんでした」

それはカレンも知っている。玉城がいたらずらでジュースと騙してカクテルを飲ませたら、一杯も飲めずに倒れてしまった。急性アルコール中毒にはならなかつたので、嚴重注意だけで済んだのだが。

「それで、介抱しようとベッドまで運んだんですけど、酔っぱらったらイさんは私をベッドに引き込んで…」

しかし、事の直前で寝込んでしまったという。目覚めたらすぐ続きができるよう、準備して待つていた、と。

「作文するな作文! どうせあんたが酔いつぶれたライを襲つたんでしょ!!!」

そう言われても、ルーミリアは悪びれる気振りすら見せない。さも心外だと言うように、頬に手を当てて答えた。

「まあ酷い。普通、こういう場合は男性から疑うものでしょう」

「相手があんたの場合は女の方から疑うわよ!!!」

「……………うー。あれ、カレ…」

騒ぎでさすがに目を覚ましたライが、ぴしりと固まる。この状況が何を意味するかということくらい、どんな朴念仁でも理解できる。

「あら、目を覚まされましたか？」

平然としているのはルーミリアだけである。先ほどカレンに否定された話を、何の躊躇もなく繰り返す。

「だ、騙されちゃ駄目よ！そんなの、絶対嘘に決まってるんだから……………」

「……………本当だったらどうするんですか？」

自信満々なルーミリアを前に、カレンも言葉に詰まった。否定する、証拠がない。

「も、もちろん、僕にできることであれば、どんな責任でも取るけど……………」

「なっ!!! 駄目よ駄目!!! どうせ『愛人にしろ』とか、ろくでもない事を言ってくるに決まってるんだから!」

それを受け、仕方ないとルーミリアは妥協する気振りを見せた。愛人は取り下げる。その代り、他の願いならいだらう、と。

嫌な予感が消えたわけではないが、相手が一步引いた以上こちらも引かないわけにはいかない。しかしカレンは、ルーミリア・フェン・シエルトという女を甘く見過ぎていた。

「では、ライさんの子供を旦那ほど……………」

「もっと悪いわ……………」

!!!!!!

「……………で、本当のところはどうだったのよ」

「さあ? ライさんは何も覚えていませんし、私が何を言ったところで意に沿わない事ならカレンさんは信じないでしょうし……………」

とぼける相手を濃厚な殺意を込めた視線で睨みつけるカレンだが、その程度で動じるルーミリアではない。それどころか、彼女に言わせればカレンが悪いのだと言う。

「そもそも、カレンさんが今に至るまで事に至らない、というのが問題なんです。いい加減、ライさんも無聊を託つこと久しいのでは……………」

それに、女としてファーストキスをささげた相手にすべてをささげたいと思うのは当然ではないか。

「今更純情ぶるな!!!あれはあんたが無理矢理奪ったんでしようが!この強姦魔!!!」

「まったく、胸の大きさに対し気の小さいことですね。私より大きいくせにその活用の仕方も知らないなんて、何ともったいない……」

「胸の大きさと何の関係があるって言うのよ!!!」

顔を真っ赤にして叫ぶカレンと、そういうネタを表情一つ変えずに話すルーミリア。漫才のごとき形式美は、もはやこのクラブハウスの定番だった。

「ああ、もう……。頭痛い……」

天叢雲では誰よりも頼りになるくせに、学園では誰よりも嫌な敵となる。思考が自分とは違う次元を進んでいるとしか思えない。

結局、ルーミリアは条件を保留にした。いくらカレンが嘘だと主張しても何があったか知っているのはルーミリアだけである以上、取り下げさせることはできなかった。

とりあえず最悪の事態は回避したものの、次はどんな事を言ってくるのか、全く予想できない。

「少しは反省しなさいよね。ライ、思い切り落ち込んでたじゃない」

酒癖が悪いと信じ込んで自己嫌悪したのだろう。好きな相手を陥れるとは、どういう神経をしているのか。だが彼女にしてみたら、最後のところで甘さが出してしまったという。

「その点については反省すべきですね。やはり、有無を言わず既成事実まで持ち込んでおくべきだったかと……」

「ふざけんなこの淫売!!!」

この女は、どうしてそっち方面にばかり突き進むのだろうか。男女の交わりというののもっとピュアでロマンチックなもの……、と思うカレンにとって、ルーミリアの言動は刺激が強すぎる。

「そういう心のつながりはカレンさん一人で充分じゃないですか。ですから、私は愛人らしく体のつながりを重視してですね……」

「からっ!!!」

カレン、真つ赤になって思考停止。回復後、むしろ別次元の思考でよかつたのではないかとカレンは思う。この女の思考は理解できない以上に、理解したくない。

「あら、マリーカさん」

「うっ、ルーミリアさん…、に、カレンさん」

廊下の向こうから、ライの部屋に向かってくるマリーカの姿があった。一瞬後ずさったところを見ると、どうやら今だルーミリアは苦手なようだ。

ルーミリアの方もルーミリアの方で、マリーカに対しては底に敵意が見え隠れする。カレンに対しては冗談交じりに楽しんでいるような感じがあるが、マリーカにはない。

「また『ウラノス』のテストでライさん呼びに来たのですか？」

この一週間ライが何をしていたかと言うと、『特派に入り浸っていた』のである。騎士や武士が名馬に焦がれるように、彼は『ウラノス』に惹かれていた。

そして、マリーカとの仲が何やら急接近しているようであった。今回のことは、それが一因でもある。ルーミリア曰く「そろそろ私も身を固めておくべきかと思ひまして」らしい。

もつとも、もちろんそういう話は一切ない。ナイトメアの操縦、それに軍略や政略の話といった、堅い話だ。ユフィの補佐役候補、ということである。

とはいえ、女の方からしてみたら消えかかっていた火に息を吹きかけられた気がするのも無理はない。

それにしても、ルーミリアの厚顔にはカレンも感嘆する。つい先日、ラヴェインを撃墜した張本人などということはおくびにも出さない。

それどころか、ライと一緒に特派にまで平然と出入りする始末だ。二人揃って特派に入らないかと誘われもしたらしい。

「ライさんと一緒なら考えますよ」

ルーミリアの返事はあっさりしたものだが、裏の顔を知っているカレンにすればかなり危ない返答である。ライと一緒になら、という条件

付きにせよ、ブリタニアに付くことを否定していない。

さて、マリーカの要件はテストのことではなく、逆にテストが行えなくなるということだった。

「実は、出張と言いますか、ユーフェミア様のお供で遠くまで出かけなくてはならなくなりました」

その上、その出張先にウラノスも持って行くという。戦闘行動ではないので、操縦技術は必要ない。これ以上は軍機に関わるので言えないが、準備も含めて一週間ほどかかる。

マリーカの言葉に、ライは素直に頷いた。しかし、彼女が去った後の表情は『蒼』のそれだった。

「……………兄上が来るとはどういうことだ？」

口に出すことはしなかったが、この忙しい時に迷惑な、というのがコーネリアの素直な思いである。

第二皇子、シユナイゼル・エル・ブリタニア。現皇位継承争いの、二強の一人である。第一皇子オデュッセウスは血筋と人柄で、彼は才覚で尊崇を集めている。

もつとも、当人たちにはあまり争っているという自覚はないようだ。兄は弟に劣ることを認め、弟は兄を差し置くつもりがないのか、至って普通の兄弟という関係が続いていた。

コーネリアとも、関係は悪くない。尊敬に値する存在と、互いで認めていた。

そのシユナイゼルは増援を率いてくるという。なんと、本国防衛用の戦力を割いたのだ。本国を少しでも手薄にすることに反対の声も大きかっただろうが、彼はそれをねじ伏せた。

「…そういう果断は、さすが兄上なのだが」

第一報を聞いた時は解任かと覚悟したが、それは明確に否定された。増援部隊も、コーネリアの指揮下に入ることになる。

コーネリアとしては、正直ほつとした。ナリタに租界戦と立て続けに大損害を負った上に中華連邦とも戦わざるを得なくなった現状、戦力が足りないのは明らかだった。

しかし、増援部隊の引率くらい適当な將軍に任せればいいではないか。何も、帝国宰相たる兄が直々に率いてくる必要など、どこにもないだろう。

だから本人には別の目的があり、むしろ増援はおまけというところか。しかし、場所が場所である。

「式根島とは、また辺鄙なところに用があるものだな」

そちらの目的については、まったく聞かされていなかった。迎えも不要というが、さすがに放っておくわけにもいかない。

「ユフイ、任せたぞ」

特派が呼ばれていると言うし、丁度いいだろう。増援部隊は直接トウキョウ租界に来るため、コーネリアはそちらを組織し直さねばならない。

「ダールトンには、苦勞をかけるな」

ダールトンはキサラツでクラウディオを失い、租界戦でバートンを失った。愛育してきた養子二人を弔う間もなく九州に出陣し、不十分な戦力での作戦を強いられている。

彼の心情を思えば早く駆けつけてやりたいところだが、ゼロを放置して九州に向かうのは危険すぎた。

ゼロの首さえ取れば、中華連邦など容易く叩き返せる。成算は、充分にあった。

「来ました」

遠くの空に見えた点は、やがてジェット旅客機などとは比較にならない大きさとなった。飛行戦艦『アヴァロン』。フロートユニットで飛翔する、空の要塞だ。

式根島にはブリタニア軍の駐屯基地があるが、普通的大型航空機では滑走路が足りず着陸できない。しかし滑走路を必要としないアヴァロンは海上に着水し、小さな島にも無事降り立った。

「お久しぶりです、宰相閣下」

「……おや、ユファイ。コーネリアには迎えは不要だと言っておいたのだが…。そんなに畏まらずともいい。今回私がここを訪れたのは、ごく私的なことでね」

では、とユファイも相好を崩す。呼び方も『宰相閣下』から『お兄様』に変わった。

「最近の活躍は聞いているよ。コーネリアは政戦両略に優れた為政者だが、思考が武断に傾きすぎるくらいがある。そこを、君がうまく埋め合わせているとね」

これを世辞だと受け取らないユファイは、素直に感激して礼を言った。だが、世辞でも何でも、帝国宰相がユファイの寛容路線を褒めたという事実は大きい。

「そして君が枢木スザク君だね。ロイドたちから聞いていたが、君の操縦技術は実に見事なものだ。先日の戦いではナイトオブナインにも勝る活躍をした、とね」

「お褒めに与り、光栄であります」

スザクは幹部候補生の試験を通過し少尉になった。先の戦功により、次の機会では中尉昇進が内定している。ゆっくりでも、今はまだ着実に地歩を固める段階だった。

ちなみにスザクは、実を言うとペーパーテストは無難に越せたのだが、戦術指揮シミュレータでの対人戦は危うかった。

(ライには感謝しないと…)

自分の天分が部隊指揮に無い、という自覚はあった。だからウラノスの試験で特派を訪れるようになった彼に特訓を頼み、結局一度も勝てず、嫌になるくらい負け続けた。

しかし、その数えきれない負けは無駄ではなかった。彼の動きを模倣し、本番では何とか勝てた。負けていたら自分だけでなく、騎士に任命してくれたユフィの面目も丸つぶれだったところだ。

それはさておき、シュナイゼルの温顔にスザクはかえって不気味なものを感じた。

(この人が、帝国宰相―)

何か、巨大な洞の中を覗いたような気分になる。自分に向けられた表情にはよくある日本人に対する蔑視も、ユフィのような温かさもない。

生気のない、作り物のような表情だった。褒められたにもかかわらず、何となく背筋が寒くなる。

「それで…。ロイド、準備はできているね」

スザクの内心は洞察されなかったようで、シュナイゼルは式根島基地の隊長に一声かけた後ロイドに向き直った。

式根島に来たのは、単にここが最も目的地に近い基地だったからにすぎない。この島での目的は荷の積み込みだけであって、特派が荷を運び込むのにここが便利だったというだけである。

「はい。……でもガウエインが奪われてしまったおかげで、ウラノスだけになっちゃいましたけど」

ガウエインは、ここで使うために先日送られてきたのである。二機のドルイドシステムを併用し、シュナイゼルが目的とする物の解析を行う予定だった。

「奪われたものは仕方あるまいよ。一機だけでも、実施するとしよう」
しかし、シュナイゼルは執着せず目的地へと向かった。その地はアヴァロンであれば指呼の距離にある、神根島という小島だった。

「本当にこんな人つ気のない小島にやってくるのかよ？それよか、トウキョウ租界に乗り込んで奪っちゃえば手っ取り早いだろうに」

愚痴る玉城を横目に、ライは足を進める。とはいえ彼も半信半疑のため、前半分については返ししようがない。

『ウラノス奪取』

特派出張の連絡を受けたライは、ただそれだけを目的として神根島に上陸した。ただし決行の場をここにしたのは彼の意志ではない。

伊豆諸島周辺での、報道機関の活動をしばらく禁止する。コーネリアからそういう通達が発せられたという情報を掴んだため、ある程度の範囲は絞りこめた。

実はこの情報をリークしたのはディートハルトであった。騎士団以外にも繋ぎを付けておこうということだろうが、彼とてピンポイントでの島か掴んでいたわけではない。

「シユナイゼルの目的地なら、神根島よ」

ネージュが、そう断言したのだ。最終的に、彼女を信じるという事で神根島にやって来た。

学園周辺はユフィの護衛部隊が展開しており、力技での奪取は間違いなく全面对決に発展する。ギアスさえ使えれば一人で特派に乗り込めばいいのだが、次に使えばどうなるか知れたものではなく、これは廃案。

かといって特派の試験中に乗り逃げなんてすれば、テロリストを匿っていたとしてアツシユフオード家が取り潰されるだろう。

理性の声は「そんな面倒ならウラノスを諦めればいいのではないか」と言うが、欲しいものは欲しいのである。戦力的にどうこう言う前に、あれを思いきり駆けさせたい。

というわけでわざわざ神根島までやって来たのであるが、今回の作戦にはカレンもルーミアも参加していない。上陸にも潜水艦を使った、少人数の密行だった。

ちなみにこの作戦、玉城が選抜隊の隊長を務めている。玉城を抜擢することを不安がる者もいたが、きわどいところで生き抜いてきた幸運としぶとさを評価しての人事であった。

なお、その中にネージュもいたのだが、彼女は「私は私でやりたいことがあるから」と言つてどこかへ行つてしまった。完全に命令無視

なのだが、いつも通りわけもなく全員認めてしまったのである。

「…で、これがあいつの言っていた遺跡とやらか？」

神根島の遺跡。目的はそこしかないとネージュは言い、結局他に当てもないので第一候補として捜索にやって来た。

ただ、ネージュはライに対して不思議なことを言っていた。

「ねえ、今、世界の色はどう見える？あなたは今、幸せ？」

いきなり色、と言われても、よくわからない。ただ、幸せかどうかという問いにははつきりと頷いた。そうしたら、神根島のことを教えてくれたのだ。

「わけわかんねーな。何だここ？」

この遺跡は何かの祭壇なのだろうか。扉のような壁画があるだけで、他に何があるわけでもない。戦闘行動でない以上ウラノスの使い道はドルイドシステムによる解析だろうが、この扉を解析するのだろうか。

「おい、どうしたよ」

「……………いえ。ここだけでなく、他に良いポイントがないか探索しましょう」

何気なく扉に触れ、呆然と立ち尽くすライに玉城が声をかける。何でもないように答えたが、この時彼はネージュの問いにどういう意味があつたのか理解した。

「…とところで、一度ちゃんと聞きたいことがあつたんだよ。お前さ、次の作戦に成算あるんだろ？」

玉城の言う『次の作戦』とは講和締結へ向けた作戦のことである。成算はあることはあるが、どう転ぶかはわからない。

もつとも、成らねば成らぬでよいのである。次の作戦を考えるだけのこと、ゼロのように一度の決戦に全てを賭けるような真似はせいぜい一将軍の心構えと言うべきだろう。

「それはいいんだよ。…………俺が聞きたいのはな、成功すればこの戦争は終わるだろ、その後、お前はどうするんだ、ってことだ」

そう問われて、ふと思った。どうするかと聞かれても、特にない。そう答えると、玉城は呆れたようだった。

「……まあ、好きにすりゃあいいけどな。だが、一つだけ言っておくぞ。カレンに対してだけは、ちゃんと責任取れ。それだけは絶対に守れよ」

捨てるようなことあれば、昔なじみ全員で処刑しに行く。そう合意が成り立っているらしい。

「手っ取り早く言うと、だ。さっさと決心して身を固めてしまえ。お前の過去がどうあれ、あいつは付いて行くだろうからな」

いまだ行方不明者の搜索願などで、ライの身元に関わる情報は無い。となれば記憶を失う前に恋人はいなかったと見ていいだろう。なら、今の関係を大事にしろというのが玉城の意見である。

それにカレンは奥手だ。そういう女は男の方がしつかりリードしてやらねば駄目なのに、こちらも奥手でいつになっても進展しない。ずっと歯がゆく思ってたのだ。

「……………そうなければいいですけどね」

玉城としては、苦笑いを浮かべるか真剣に考え込むかと予想していた。異様に寂しそうな表情で呟く姿は、予想の外にあった。

一方、ライたち天叢雲にもシュナイゼルの一行にも属さない、森の中を進む人影があった。

「……………」

駒に、思考は必要ない。主の命令は絶対であり、それがどういう意図によるもので、どういう結果をもたらすかを考える必要はないのだ。

必要なのは、それを実現する力のみ。幸いなことに自分には適した力があるのだから、手慣れた仕事としていつものように終わらせればいいだけのことである。

「はじめまして、ロロ。V. V. は元気かしら？」

不意に、頭上から声がした。全神経が一瞬で緊張状態になり、大きく後ろに飛び退る。と同時にナイフを構えるが、相手は悠然と木から飛び降りた。

「ネージュ・ファン・シャレットよ。V. V. から聞いてないかしら

？」

聞いていないわけではない。ヤルダバオトのことも知っている。だが今のネージュは何の武装もしていない。丸腰の少女一人を片付けるくらいわけない事だ。

「……………っ！」

『絶対停止の結果』を展開。範囲内の人間の体感時間を止め、行動、思考の一切を停止させる。例えば正面から心臓にナイフを突き立てられようとも、このギアスを解除するまで気付かれることはない。

ネージュに対して効果があるか不明だが、それでも周囲に潜んでい敵の動きは封じられる。その間に、ネージュを抑えればいい。

……………そのはずなのだが、ネージュに対してでは相手が悪すぎた。

「私に効くわけないじゃない。ギアスなんて、私の力の欠片一つに過ぎないんだから」

あっさりと腕を取られ、そのまま投げ飛ばされて木に叩きつけられた。背中への衝撃で、呼吸が止まる。

小柄であるが、人ひとりがより体の小さな少女の細腕で数メートルは投げ飛ばされたのである。物理法則上では考えられない力だった。

「……………あなたを暗殺に差し向けるなんて、V・Vも焦りだしたよ。うね。でも、ここまで面白くなつたのにそれをぶち壊しにしてくれるような行動、見過ごすわけにはいかないわ」

立ち上がれず這いつくばりながら喘ぐ頭上から、声が落ちてくる。次に待つ運命は、首を切られるか頭を潰されるか。何にせよ、『死』以外ないと思つた。

恐怖はない。むしろ安息があつた。『失敗作』は、ここが限界だつたという事だ。

「口口、V・Vを捨てて私についてきなさい。あなたが『人』として生きられるところへ、連れて行ってあげるから」

しかし、それだけは少女の物としか思えない、小さな手が差し伸べられた。

困惑、というのは、初めての経験だった。命令を受け、それを実行する。V・V・との関係はそれだけだったが、ネージュはあれこれ、益体のない話を続けるだけだ。

差し出された手を、何となく握り返してしまった。それでV・V・を裏切り、ネージュに乗り換えた形になった。それについてどういう心の動きがあつたのか上手く説明できないが、不思議な解放感があつた。

だが、例えば好きな食べ物を聞かれても、答えようがない。食事は体を動かすためのカロリー摂取であり、それ以上の意味はない。味について考えたこともなかった。

「……あの、一つだけよろしいでしょうか」

策戦の疑問点を問う以外、こちらから主に問いかけたことはない。ただ、これだけはどうしても確認しておきたく、なけなしの勇気で初めての事を行った。

「ん？なーに？」

「どうして僕を『ロロ』って呼ぶんですか？」

初めて呼びかけた時から、ネージュはずっとそう呼んでいた。だが今回の任務に名前が必要なく、『ロロ』と名乗ったこともない。

「嫌？それなら別の名前を考えるけど？」

ネージュはわずかに首を傾げ、あつさり答えた。気を害した雰囲気はない。ほっとするような拍子抜けのような感を味わったが、別に嫌だから問うたわけではないのだ。

「そういうわけじゃなく、任務の時以外名前で呼ばれることがなかったから……」

「じゃあ決まり。ロロ…、うーん、姓はどうしようかな……」

任務の時の名前は、当然その都度用意された偽名に過ぎない。使い捨ての道具でしかなく、思い入れなど一切ない。

この少女は、『道具』ではないものを自分にくれた。それはV・V・が、これまで一度もやってくれなかったことである。

しかし、考え込みながら歩く姿には、先ほどの威厳は一切感じられなかった。

「そういえば、あなたのギアスなんだけど、取り上げておくわね」
「はい？」

相手の言っていることに理解が追い付かず、間抜け面で聞き返したのも初めての経験だろう。慌てて発動させてみるが、何も起きない。口口のギアス『絶対停止の結界』には、大きな欠陥がある。発動中、本人の心臓が停止してしまうのだ。脳に酸素が供給されない状況で意識を保てるのは、せいぜい数秒だろう。

それゆえ、V・Vからは『失敗作』と称された。発動させてしまった以上どうしようもないし、使い道がないわけではないということ暗殺者として育てられることになったのだ。

だが、そんな力でも数少ない自分だけの持ち物であった。存在意義であり抛り所であった。それを、あっさり、ただの一言で無にされたのだ。

「なななな、何ていうことをしてくれましたか!!!!」

頭の中は大パニックだ。だがそんな口口の様子を見て、ネージュは楽しそうだった。ようやく感情をあらわにした、と言われて、口口も自分の狂態に気付いた。

「……………」

無意識に顔が赤くなる。恥ずかしい、と思ったのも最初のことではないか。ネージュの手を取ってから10分あまりしか経ってない。それなのに、初めての事ばかりである。

「あなたは『人』なの。人だから、いろいろ感じることもできるのよ」
そう言われて、心の中で何かが込み上げてきた。だがそれに影を落としたのは、自分と同じ境遇にある者たちのことである。ネージュなら、助け出すのは簡単なことではないか。

「……………うーん、シャルル次第かな」

『まだ』嚮団を潰すのは早い、とネージュは言った。潰す気ならすぐにも潰せる、と確定事項を言うような軽い口調が、かえって怖い。

しかし、その理由がV・Vではなく皇帝のシャルル次第、という

のは、ロロにはわからない話である。

基本的に、この世界で『ラグナレクの接続』は行わせない。今回、ネージュはそう決めた。よってV・V・Vが出しやばらなくても、彼が計画を進める限り叩き潰すのは必然だったのだ。

であればV・V・Vを消滅させコードを回収しても良いのだが、それをしないのはV・V・Vの可能性も残すためである。V・V・Vが自分の思いもよらない手段で出し抜いてくれるなら、それはそれで満足いく結果となる。

しかし、事態は少々ネージュの想定から外れた展開を見せ始めた。というのも、ここにきてV・V・Vと皇帝シャルルの間の齟齬が目に見えるほど大きいものとなった。その理由は簡単だ。ライと、ネージュというイレギュラーが現れたからである。

(人というものは、どうつながるのかわからないものね)

ネージュであっても、人の縁は読めない。きつかけを意図的に作り出すことはできるが、どういう展開を見せるかはわからない。もつとも、だからこそ自分が存在し続ける楽しみがあるのだが。

今回のことと言えば、種を撒いたのはC・Cだ。『王』の真実を知っていた彼女が、それをシャルルに語った。その本人が目の前に現れたとなれば、興味が湧くのは当然だろう。

対して、V・V・Vは『王』の真実にさほど感銘を受けなかったようである。もつとも、彼は兄弟の誓いのために人であることを捨てたのだ。それをただ頑迷と批難するのは、酷であろう。

ちなみに、C・Cが残したものに『王』の肖像画もあつた。シャルルはそれを見ながら、少しだけ『王』の真実を語ったことがある。その相手が、少年時代のクロヴィスだった。

その上、ネージュが表舞台に出てきたのが決定打となった。シャルルは理解したのである。自分たちの計画など、この少女からすれば指先一つで弾き飛ばせるものだ。

ネージュを敵にするのは危険すぎる。おそらく、V・V・Vもそれはわかっているだろう。だがそこで迷うことのできるシャルルともう止まれないV・V・Vの差が、ここにきて表面化し出しているのだ。

「元々、家族思いの優しい人なのよ、シャルルって」

不器用で臆病なのに加えて少年時代を政争の嵐の中で過ごしたトラウマのため、それを素直に表現出来ないだけである。今の強面の征服主義者というのは、皇帝としての仮面に過ぎない。

ネージユのシャルル評を、ロ口は呆然として聞いていた。そんな裏事情、考えたこともなかったからだ。

「つまり、今回のあなたの派遣は、V・Vの自棄つてところね。ライを消せば私も諦め、シャルルも元に戻ると考えた。私の介入は予想できても、他に手が思いつかなかったというわけ」

それを暴かれると、何ともやりきれない気持ちになってくる。兄弟喧嘩のどばつちりを押し付けられたようなものだ。しかも、そのため危うくネージユに殺されかけた。

「……で、まだ諦めてないようね。本当に、私を怒らせたのかしら」不意に真顔になったネージユの髪が、光り始めた。「すぐ戻るから」とだけ言い残し、ネージユの姿は光の粒子となって消えた。

「……はあ、考古学は専門じゃないんだけど」

この扉のような遺跡が何なのか、シュナイゼルの興味はそれだという。確かに考古学的には大発見かもしれない。明らかに自然に出来た物でない以上、未知の文明があったという証拠となるからだ。

しかし、それなら考古学者に担当させるべきだろう。その上戦時中のエリアーでこんな悠長なこと、やっている場合ではない。

「クロヴィスの遺品の中に、気になる記述があつてね。この遺跡で、重大な発見をしたそうだ」

それが何なのか、シュナイゼルはあえて言わなかった。秘匿すべき情報であり、荒唐無稽としか言いようのない事だったからだ。

『王』を見つけ、それを意のままに操ろうなど、何を考えていたのか）クロヴィスの統治が上手く行ってなかったのは明らかであった。その解決策として、従来のナイトメアフレームとは根本から違う、新たな戦闘兵器の開発を極秘裏に進めていた。

それはまあいい。兄弟とはいえ、隠し事の一つや二つ当たり前だ。

しかし、それに続く内容が『王』の復活であつたり不老不死の研究であつたりと、オカルトめいたことになるのである。

そしてその端緒が、考古学的興味からここ神根島の遺跡を訪れたことであつた。

ウラノスに機器を繋ぎ、解析の準備を整える。しかしその時、予期しないことが起こつた。

「……なんだ？」

いきなり、扉が光り始めた。シュナイゼルはざわめく一同を制し、後ろに下がらせた。何が起きてるかわからない以上、むやみに近づくのは危険である。

そして、扉の中から出てきた物に皆目を疑つた。なんとナイトメアフレームが、放り投げられたように飛んできたのだ。それはウラノスの隣に立っていたサザーランドを直撃し、大破させた。

「……ヴィ、ヴィンセント？」

これが何でここにあるのか、さすがのロイドもこの状況が理解できず、呆然とつぶやく。本国でようやく生産が始まつて、試験運用中のはずのものなのだ。

ヴィンセントとは、簡単に言えば量産型ランスロットである。サザーランドに替わる次世代機として開発されたものだが、見通しはあまり明るくない。

というのも、ランスロットから見ればだいぶ落としたものの、一般兵が扱うにはそれでもスペックが高すぎたのである。

生産コストの問題もあり、エース機としては良いが全軍に配備するような量産機としては計画を見直さざるを得ない、と評価された機体だった。

それは余談として、エリアーに存在しない機体であることは間違いない。それがいきなり飛び出てきたとなれば、混乱しないほうがおかしい。

さらに、続いて2機のヴィンセントが現れた。しかしこの2機はシュナイゼルたち一同には目もくれず、扉に向かって武器を構える。

その理由はすぐわかった。スザクは血の気が凍る思いをした。竜

のような機体、あのアンノウンが続けて現れたのだ。

「これは…、撤収かな」

シュナイゼルはここでも冷静だった。ナイトメア同士が激突する周りでうろちよろするなど自殺行為であるくらい、誰でもわかる。が、正気を疑う事態の連続に、言われるまで頭が回らずにいた。

「う、ウラノスは回収しませんと…」

セシルの声にはつと気づいてウラノスを見やる。あれを失ったら損失は甚大なものとなる。その視線の先では、ウラノスのコクピットハッチが閉まったところだった。

「目標奪取。玉城、撤退だ」

ウラノスに乗り込んでさえしまえば、あとはこちらのものである。この騒ぎがどういう経緯で起きたのかわからないが、運はこちらに味方したと断言していい。

『なあ!? おい、俺たちまだ何もしてねーぞ?!』

それに対し「何でもいから撤退だ」とライに言われ、玉城は素直に従った。誰もが意外に思うのだが、玉城は自分が認めた相手の言うことなら聞くのである。

解析中が最大のチャンスだった。玉城に洞窟の外で騒ぎを起こさせ注目を引き、洞窟内に残ったライが機を見て奪取する。そう説明したが、多少の嘘が混じっている。

ライがいたのは洞窟内ではなく、遺跡から繋がる『黄昏の間』と呼ばれる空間であった。そこで様子を見ていたところヴィンセントに襲われ、そしてそれを邪魔するようにヤルダバオトが現れた。

あとの混乱ぶりは、先の通りである。その混乱の中、ライは一直線にウラノスへ向けて走った。

戦闘モードに移行。全火器管制のロックが外れ、フロートユニット起動。それに気付いたヴィンセントが銃口を向けるが、それより速くイグニスの一撃がその頭部を吹き飛ばした。

もう一機のヴィンセントは、ヤルダバオトによって壁に叩き付けられて機能停止。この間に、シュナイゼルたちは出口に向かって走って

いた。

「……………」

二機だけが残った。ライは、ヤルダバオトについて何も知らない。ウラノスのドルイドシステムも「正体不明」と返すだけである。

敵か味方が判別できない相手を前に躊躇していると、その相手は光の粒となって掻き消えた。

ロロが裏切り、ヴィンセント三機喪失。そして戦果は無し。一部始終を、V・V・は歯噛みしながら見ていた。

「……………」

改めて、ネージユの怪物振りを認識させられる形になった。だがそれを倒さない限り、自分の夢は叶わない。

実は、ここにV・V・の勘違いがある。V・V・は、ネージユが邪魔をするのは『ラグナレクの接続』が彼女の存在を脅かすからだと思っていた。

だから、ネージユと共存は不可能。倒す以外道はないと固く信じていたのである。彼女が邪魔をするのは「つまらなそうだから」という啞然とする理由であるなど、予想できるはずもなかった。

それはともかく、大失態だ。今回のことがシャルルに知れたら、どうなるか。何とかして取り繕わねばならないが、妙案は全く浮かばない。

「……………」

結局、V・V・は何も言わずとぼけ通すことにした。以前も使った手である。その時だって気付いていただろうが変わらずここまで来たのだから、今回もそれで済むと考えたのである。

(シャルルも喧嘩別れしたいわけじゃないから、きっと最後は許してくれる。何とかしても僕たちは兄弟なんだ。それに第一、今回のことはシャルルにも悪い点がある)

そう思い、V・V・は自分の行動を正当化した。

このとき、破滅への階段を一段上がったことに、彼は気付かなかつた。

食えない奴だ、とコーネリアは思う。黎星刻という男、ブリタニアが中華連邦と全面対決に踏み切ることを望んでないことを、しっかりと見抜いている。

「曹將軍の独断による暴走、あくまでその線で押し通そうという気だな」

エリア11中華連邦領事館に向けて抗議したものの、返答は芳しくない。「洛陽も困惑している」と被害者面される始末だ。

対応したのが、領事代理と名乗った黎星刻だった。本来の領事は大宦官の高亥という男だが、急遽本国に帰って不在だという。直接状況を確認しに行ったというが、実のところ逃げ出したのだろう。

会談は不調に終わったが、状況はコーネリアにとって不利というばかりではない。最悪の状況は、ここで中華連邦が総力を挙げてエリア11に攻め込んでくることである。

それは避けられた。少なくとも、現状の均衡を維持する限り、中華連邦軍が大挙して押し寄せてくる恐れはないことは明らかになった。（大宦官も、愚かな連中だ）

宮中での権謀には長けていても、国家の行く末を決めるような政略など持ち合わせていない。奴らにできることは、自分たちの権力を脅かしそうな人間を陥れて葬り去ることだけだろう。

黎星刻はそこまで理解した上での鉄面皮だったとコーネリアは見ている。大宦官の主導でブリタニアと全面戦争など危うすぎる以上、曹將軍を犠牲の羊とするのもやむなし、というところか。

「…だが、ああいった男がいつまで大宦官の下風に甘んじているか」
それまでにエリア11の諸問題を片付けておきたい。エリア11が安定すれば、中華連邦に対して取れる戦略の幅は大きく広がる。

その諸問題のうち、難敵だったゼロは追い詰めた。キュウシユウ戦線はダールトンを張り付けておけば心配しなくていい。となると残る最大の障害は、韜晦を続ける『蒼』の出方である。

ゼロと『蒼』が組んでいる、という可能性は低い。故に、『蒼』は独

自の戦略で動いていると考えるべきである。そして厄介なことに、その戦略が全く読めない。

「トウキョウ租界ではないなら…、何を狙っている？」

静かすぎるホクリクがかえって怪しい、とコーネリアは睨んでいる。ゼロとこちらの抗争中に、一地方を取る気なのか。しかしそれは平凡すぎる回答で、『蒼』にはいかにもそぐわない。

だがこれも、ひっくり返せばブリタニアがゼロ討伐に動いても『蒼』が全力で救援する可能性は低い、ということである。

「…ならば、やはりゼロか」

早急にゼロを叩き潰し、『蒼』に備える。それがこの場の、最上の判断であろう。

シユナイゼルが率いてきた増援は五百機である。よってコーネリアには余裕が出来た。ダールトンに幾分か回しかつトウキョウ租界の防備を充分なものとした上で、討伐に出ることができる。

ゼロの命運も、これで尽きる。戦局が見える者なら、誰もがそう思った。

「君は……」

同刻、ライは私室に珍しい客を迎えていた。ノックの音にドアを開けると、そこにいたのはC・C・であった。

「は、話があるのだ。…聞くだけでも、聞いてくれ」

かちこちに緊張しているらしく、声がぎこちない。しかもライの方もつつい探る様子に見てしまったから、C・C・も緊張を解くどころではない。

「いや、失礼。実は昔の知り合いに、そっくりだったもので…」

「思い出したのか!!!」

ひとしきり眺め[!]た後の言い訳に、C・C・が絶叫で答える。その声に、今度はライの方がびっくりした。

「例えば…。あくまで例えば…、だぞ。ワ、ワートルローに向かう途中に拾って侍女にした少女のことなどだな……」

「もしかして、本人か…?」

「あの時、私はすでにコード持ちだったからな。……死にたくても、死ねなかった」

ふう、とライは大きく息をついた。この時代に過去の自分を知っている人物と出会うとは、思ってもなかったことである。

「……ネージュ、聞いてるんだろ？直に話したい」

部屋の中に入ったライは、誰もいない空間へ話しかけた。何も知らない人からすれば狂人の行動だろう。しかし、その言葉に反応するように光の粒が集まり、少女の形になった。

「……私のことも思い出しちゃったのね。それは少し計算外だったわ」

まあいいかと言い残し、ネージュは部屋の外に向かう。「関係者を集めてくる」と言ったから、カレンとルーミリアを連れてくるのだろう。

「まず君の用事から片付けようか。…：救援要請だろうか？」

藤堂も、五百機の増援は読み違えた。本国配備の部隊がこんなに早くやってくるとは思っていなかったのだ。百程度の補充なら耐えられるという計算も、完全に崩れた。

いまや、ゼロを救うには『天叢雲』を動かす以外にない。子供でも分かることである。ただ、C・C・はゼロから命じられて来たのではなく、独断で来たという。

「頭を下げるくらいなら華々しく散ってやる、というつもりなのかな。……いくらなんでも、そこまで小さい奴とは思いたくないが」

呆れたような口調でありながら、それでも見捨てるつもりがないからここに来たのだろう。それは、C・C・にとつて彼が大切な存在であるからではないか。そう言われると、C・C・は恥ずかしそうに答えた。

「あいつは人の心にはとことん疎い。……だが、何故か私の心だけは理解してくれる」

彼はこう言ったのだという。「俺の願いもお前の願いも、まとめてかなえてやる」と。

「……正直、嬉しかった。私に対し『契約だ』などと言ってきたのは、

奴が初めてだ」

それがあつたから、C・C・はルルーシユの元を離れなかった。その点だけは、彼は世界中の誰よりも勝っていた、と言える。

「……………僕は僕の戦略で動く。ゼロを助けるためには動かない。……ただ、それで結果的にゼロが助かる、という場合もあるだろう」

C・C・は深く頭を下げた。ライの目的は講和締結による終戦である。騎士団が潰される前に講和に持ち込むように考える、というのが言外にある意だろう。

そしてそれは、明らかにC・C・のためである。C・C・は、それがとても嬉しかった。

カレンとルーミアがネージュに呼ばれてライの部屋までやってくると、珍しい匂いが漂っていた。

「……………チーズが焦げる匂いですね」

そうね、とカレンも頷く。そういえば、一時期ルルーシユの部屋から同じ匂いが漂っていた。しよつちゆう宅配ピザを頼んでいたらしいが、ここ最近では消えている。

「飽きた。……………少なくとも三年は食べたくないし見たくもない」

というのが本人談なのだが、その一件もあって「この匂い『ピザ』と頭に染み込んでしまった。しかしライは「ピザはあまり好きではない」とのことである。

「邪魔しているぞ」

だから珍しいことだと思つたのだが、その理由は挨拶もそこそこにピザを掻き込んでいた。

「……………何であなたがここにいるのよ」

黒の騎士団がらみ、となれば援軍要請しかない。それはいい。そこまでは、カレンにも理解できる。しかし、客が我が物顔で主にピザを作らせている、という状況は何なのか。

「菓子だけではない。こいつのピザは絶品だぞ。それを知らないとは、お前らもまだまだだな」

そもそも、私のピザ予算が削減された一因はお前らだ、その責任をとれ。それがC・C・の言い分である。滅茶苦茶な話だが、ライは気分を害した様子もなく二枚目をオーブンから取り出したところだった。

「……自分で作ったらどうなのよ」

呆れ気味に言い放ち、しかしピザは一切れ頂いた。確かに美味しい。そしてC・C・の答えはと言うと、「自分で作ってもこの味は出ない」という。

「……援軍要請ですか？でしたら、私としてはお断りしますが」

機先を制するようにルーミリアが言う。実はC・C・はルーミリアが大の苦手である。冷徹な頭脳も怖いが、それ以上に過去の記憶がよみがえるのである。

しかし、今回は先んじたという自信があるので、態度に余裕がある。「残念だったな。その話なら、もう終わった」

びく、とルーミリアの眉が吊り上がる。この睨みつける目がC・C・にとつて恐怖の対象だった。

「何ですか？私の顔に、何か？」

「いや、つくづく『エリス』そのものだと思ってな……」

エリス嬢は『王』の妻だと明言したことはなかったが、最後を選ぶのは自分だと思っていた。故に彼女でさえ割って入ることのできない母君や妹君は除き、他の女性には恐れられていたのである。

「私から説明してあげるわ。あなたの魂って、ほとんど『エリス』そのもののよ」

割って入ったのは、C・C・と争うようにピザを食べていたネージュである。

虫の知らせ、という言葉がある。わけもなく不安に駆られたら、同じ時間に家族に不幸があった、というあれだ。それは人の意識が、根本のところでは繋がっているから起こるのである。

ネージュやC・C・はそれを『集合無意識』あるいは『Cの世界』と呼んでいる。人が死ぬとその意識はCの世界に拡散し、いつかまた再構成されて新たな人となる。

「あなたたちが輪廻転生とか前世とか言ってるのはこのことよ。……まあ、イレギュラーが起きてね。普通なら拡散するはずの『エリス』の意識がほとんど集まったままあなたとなり、そしてこの時代に現れた」

『王』に対する思いがそれほど強かったのだろうか。ネージュもこんなケースは初めてらしい。「正直言つて呆れたわ」という言葉には、実感がこもっていた。

「……私とエリス嬢が同一の存在、ですか。……それはまあいいとして、そんなことを言い出すあなたたちの正体の方が気になるのですが？」

「いいの!!!?」

叫んだのはカレンである。自分なら、取り乱していただろう。それをこの女は、「だとしても何なんですか？」とあっさり乗り切ったのである。

「……『Cの世界』で拡散しないほどだから、このくらいタフなのは予想していたけど」

ネージュが「呆れた」と言う理由は、この場の全員に伝わったらしい。

「順を追って、全部話そうかしら。まず私の素性からね。……わかりやすい例を見せてあげる」

どこに持っていたのか、ネージュがいきなり拳銃を取り出した。それを自分のこめかみに当てて発砲。止める間もなく、頭の一部が吹き飛んだ。

「……」

皆があっけにとられる中、ネージュの体は光る粒子となり、再びいつもの少女の姿に戻る。傷はきれいに消えていた。

「わかった？ 私、人間じゃないの。……あなたたち人間の願望が生み出した、意識の塊」

説明を続ける少女に、理解が追いつかないカレンは青ざめていた。一方でルーミリアは大きく息をつき、諦めたように言った。

「……まさか、自分がオカルトの世界に踏み込むことになるとは思っ

てませんでした」

認めたくないが見せつけられた以上、認めざるを得ない、ということなのだろう。つくづくタフな精神の持ち主だと感嘆するしかない。

「オカルトなら、神話とかおとぎ話で私の存在が語り継がれたものもあるでしょうね。私、時折歴史に介入してきたから」

そして重大な転機があったのは、2000年前。ここでネージュはあ
る一人の少年に目を付けた。ここで死ぬ運命にあるその少年を、生き
延ばしてみよう、と。

柄にもなく可哀想だと同情したのかもしれない。何であれ、気まぐ
れの行動に過ぎないはずだった。

「それが、まさか今に至るまで続くなんてね……。それどころか、こんな
楽しい流れになったのは初めてよ」

そして視線をライに向ける。それを受け、彼も意を決したらしい。
躊躇を切り捨てるように、一気に言った。

「……全部思い出したよ。僕の本名は、ライ・リオネス・ブリタリア。
2000年前の、『王』本人だ」

その告白をC・C.とネージュは静かに聞いていたが、残る二人は
狐につままれたような表情で聞いていた。

「どういう…事…?」

呆然とカレンがつぶやく。「200年前の人間だ」と名乗る人がいたら、まず正気だとは思わない。それが普通の反応だ。

「私が200年前から連れてきたの。この世界を、変えるために。……信じられないなら1000年後に連れて行ってあげてもいいわよ」

何気なくネージュが言う。自分たちの隣にいた少女がとんでもない化け物だったということが、ようやくカレンにも呑み込めてきた。

「……それでネージュ、僕をこの時代に連れてきて、何が望みだ?」「別に何も?あなたがやりたいことをやりたいようにしてくれれば、それでいいわ。……そもそも、クロヴィスたちのせいで私の予定とはだいぶ変わっちゃったし」

発端は、ネージュがこの世界を変えてほしいと思ったこと。そして変えられそうな存在として、以前の契約者であるライに目を付けた。そして200年前から連れてきたライを、この世界の誰と組ませるか。この時、ネージュは自分で選ぶのではなく運命を試すことにした。

「私が重要だっと思う…、まあここは私の主観が入ってるけど、順番に誰がライと出会うか試してみたの」

すなわち、その相手の近くにライを配置して放置したのである。その結果、出会ったのがカレンだった。7年前の、戦争が始まる少し前のことだ。

「……え?」

しかし、当人はすっかり忘れているようだ。まあ無理もない、とネージュは一人頷く。実を言えば、数年で忘れるようにギアスを使っただのである。

「思い出させてあげる」

ネージュの目が、異様な光を発した。そう思ったとき、カレンの脳内ではある光景がフラッシュバックしていた。

(あれ？私―)

戦争が始まる前の日本。駆け回る子供の自分。ふと目をやった先には、森の中に入っていく白い少女の姿。それを追って、自分も森の中へ。

その先にいたのは先ほど見かけた少女ではなく、ブリタニアの貴族のような格好をした少年。その人から貰った短刀こそ、『小菊』。

『売ろうが捨てようがかまわない。……私には、もう持つ資格などないのだから』

この言葉だけは、今もはつきり覚えている。それを言ったのは、今と変わらぬ姿の、自分の恋人―。

『小菊』を持つ手が震えている。常識を超えた展開の連続に、理解が追いつかない。

「思い出した？……あ、勘違いしないでね。私はあなたたちが出会うきっかけは作ったけど、それだけよ。恋人になったのはあなたたちの意思だから」

そして7年前、目的を果たしたネージュは再びライを眠らせたのである。この時ギアスによって、ライの記憶をすべて忘れさせた。自暴自棄になっていた心の傷を癒すための、荒療治である。

「…感謝すべきなのかな。頭を冷やすには、充分な時間だったよ」

しかし、ライには腑に落ちないことがある。『絶対遵守』のギアスで忘れさせた記憶が、なぜ戻ったのか。

「簡単な話よ？『忘れろ』と言ったのなら、『忘れた』時点でそのギアスは終わり。何かきつかけさえあれば『思い出す』わよ」

ライとしては苦笑いせざるを得ない。おそらく、これもネージュの計算の内だ。いつか、自暴自棄を乗り越えた自分が、記憶を取り戻してなお『生きたい』と思える日が来る、と。

「それで、本当はもう少し先でカレンと会わせる予定だったの。ところが、クロヴィスたちが記憶を失ったままのライを連れて行っちゃって…」

ここで、ネージュの予定は崩れたはずだった。しかし、運び込まれた研究所をとあるレジスタンスが襲撃したことにより、意図せずに軌

道修正が成ったのである。

「それ、もしかして……」

「そ。あなたたちが『毒ガス』の研究所だつて襲つた、あそこよ」

あまりの事実に、カレンは愕然とした。あの命から逃げてきた襲撃失敗が、今に繋がる起点だった。

記憶のない人間というのは、人形と大差ない。言いつけに素直に従う『人形』に、当初は、バトラーたちも研究が順調に進むと満足していただろう。

しかし、その『人形』がふとしたきっかけで『自我』に目覚めてしまった。『王』のことは知っていてもギアスユーザー、しかも『絶対遵守』の持ち主であることを知らなかったのが、『CODE—G』を破滅させた。

「正直、何が僕を目覚めさせたのかわからない。ただ、こいつらは許せないと思った。僕をいいように操ろうなどとした奴には、相応の報いをくれてやった」

ギアスで近くの研究者を抹殺。その上でサザーランドを奪い脱出。途中、赤いグラスゴーを助け、その後、ギアスの副作用で倒れそうになり、近くのトレーラーの空き箱に逃げ込んだ。

「え？」

またしても、カレンは聞き捨てならないことを聞いた。そんなところで止まっているトレーラーとなれば、扇グループで使っていたものだろう。しかも、『空き箱』とは……

(あの時、ライと背中合わせだった!?)

素直になれず、トレーラーに逃げ込んで泣いていた自分。そこから板一枚挟んだ裏側に、彼はいたのである。

「ほーんと、呆れるほど強い絆があるんだから。そして、そこからはカレンも知つての通り。シンジユク事変へ繋がり、今に至るわけね」

「……『ギアス』とは何ですか？確か、ライさんがその名を呟いたことがあつたと思いますが……」

「簡単に言ううと『超能力』ね。人の精神に関わることで、その人の潜在的な願望を具現化したもの」

ネージユは本当に洗いざらいぶちまけるつもりらしい。『ギアス』についても、あつさりと答えた。

「私がライに与えたギアスは『絶対遵守』。一度だけ、どんな命令でも従わせるというもの」

そう言われ、カレンはつい探るような目でライを見てしまった。目の前の人は、人を操る力を持っている。では、今の自分の思考が捻じ曲げられたものではないと断言できるはずではないか。

「大丈夫だ、そう疑えるということが、お前らに使ってない何よりの証拠だ。……『絶対遵守』で『愛せ』とか『従え』なんて命令したら、そんな風に疑うことだってできなくなる」

ギアスは、生ぬるいものではない。そう言うC・C.の言葉には、カレンも納得させる重みがあった。

「さすがに経験者の言葉は違うわね。C・C.はギアスユーザーより一段上のコードマスター。私は、さらにその上の存在と考えればいいわ」

ギアスを使い続け、ある一定の段階に達するとコードを得ることができる。C・C.のギアスは『愛される』力。誰彼構わず使って本当の愛情がわからなくなった過去も、ネージユはちゃんと知っているらしい。

そして、コードマスターは他人にギアスを与えることができる。それを聞いて、ルーミリアはカレンがぎよつとするような策を平然と言ったのけた。

「……であれば、『天叢雲』の幹部たちに皆ギアスを持たせる、というのも策ですね」

一人や二人、有用なギアスが発現してもおかしくない。そうすれば大幅な戦力アップが見込める。確かにその通りではあるが、ギアスの恐ろしさを知らないから言えることである。

『王』が家督を継いだのは、皇暦1812年。ギアスを得たのも、丁度この時だ。

「隣国との戦争で、父上が負傷。……僕の初陣で、見事な大敗だったよ。そして継母と次兄はその責任を全て僕たちに負い被せようとし

た」

父の傷は深く、傷口から細菌が入り感染症を併発したのが死因となった。死が避けられないとなるや、継母たちは敗戦の理由をライたちの内通によるものとして邪魔者を消そうとしたのである。

「牢に閉じ込められた僕の目の前に現れたのがネージユで、ギアスをもらった。……その力で、僕は兄二人を殺したんだ。相打ちに見せかけて、ね」

継母が呆然自失する中、宰相格のカトラル卿がライ擁立を唱えたため形勢は大きく変わった。フランスに付いても冷遇されるだけだし、醜態が本国に知れて誰か送り込まれて来たら、自分たちは権勢を失うかもしれない。

「それより、側室腹とはいえれつきとした子がいるのであるから、その子を立てるのが筋と考える」

新君はまだ12歳の子供。他の重臣たちも与しやすいと考えたのか、ひとまず宰相に従うべきだと考えたのか。その宰相の目に異様な赤い光が宿っていることに、気付いた者はいなかった。

賛成した者の計算違いは、擁立された少年があつという間に権力を掌握してしまったことである。カトラル卿は身を引き、ほかの重臣たちは断罪されるか閑職に追いやられ、それまでの既得権益層は壊滅した。

その流れに拍車をかけたのが継母による毒殺未遂であり、

唯一残ったのが、先々代からの重臣でありながら父の良き協力者であつたりルバーン卿だけである。そして代わって抜擢された者の中からユーインやエリス、『三傑』が名を残すことになる。

「無論、それらもすべてギアスあつてのこと。……と言っても、僕はそれに対して罪悪感など感じていない。彼らは、僕にとって敵に等しい存在だった」

婿養子で家に入った父も重臣たちに気兼ねしなくてはならず、思うことなど何もできなかつたと言っている。ライがそれに気付いたのは、父の死の枕辺であつた。

「父上が僕に最後に言い残したことは、『すまなかつた』と『咲耶とマ

リーを頼む』。だから、僕は戦うと決めた。二人が、フランスの脅威に怯えずに済むように」

この間も、ギアスを使わなかったわけではない。特に必要としたのはナポレオン自ら率いてきた第二次イングランド遠征軍を撃破した時である。

フランス軍が上陸した時、イングランド南東部は焦土と化していた。その地に誘い込まれたところで海軍がドーヴァー海峡を封鎖。さらにその上で手持ちの兵糧を失えば、もう戦どころではない。

ちなみに、このとき海軍の指揮を執ったのがアイザック將軍である。彼は二度の海戦に完勝し、フランス北西部に至るまで襲来して軍船を沈めまくった。

ナポレオンにとつて不幸なことに、兵糧が焼き討ちされた直後から長雨となった。フランス軍は飢えと泥濘に苦しみ、雨による冷えで疫病が多発した。

そして、苦戦を見たプロイセンとオーストリアがナポレオン陣営から離反。本国が危うくなった以上、イングランドに留まり続けることはできなかった。

しかし、制海権はアイザック將軍の手にある。軍船はなく、非武装船でドーヴァーを通るなど、鮫の目の前を泳ぐに等しい状況だったのだ。

案の定、フランス軍はドーヴァーの藻屑と消えた。『王』の完勝であり、ナポレオンへと流れていた歴史の潮流が一転した戦いとなった。

これらの作戦の裏には、当然ギアスの存在があった。ギアスがなければ素早く住民を避難させるなどできなかったし、フランス軍の正確な情報もギアスによってもたらされた。

さらに言えばアイザック將軍の指揮した軍船もギアスで徴用したものだ。だから、ギアス無しでは成り立たない作戦だったのだ。

だが、それが、あの悲劇へとつながっていく。

「……フランスを退けてから、時折頭痛に悩まされるようになった。今にして思えば前兆だったが、気付かなかった。そしてあの時、ギアスが暴走した」

『王』の最後の戦いとなった、大虐殺の真相である。その暴走に巻き込まれ、護りたかった二人を失った。親友だったユーインも失った。国が必要だったのではない。彼らと一緒にの日々が欲しかったのだ。

王の力は人を孤独にする――。

ギアスの恐ろしさを知らず、力に驕った者の末路だった。

「……さて、私たちの過去についてはこんな所かしら。大体理解できた？」

理解できたかと言われても、正直、何を言えばいいのかわからない。そう思ったカレンは助けを求めるようにちらりとルーミリアを窺い、その視線に気づいた彼女は口を開いた。

「：ギアスの危険性は理解できました。暴走の危険があるとなると、作戦の根幹に据えるのは難しいですね」

「それにね、ライだから『絶対順守』で五年ももったのよ。誰彼構わず与えたら、すぐ暴走して発狂する人が続出しちゃうから」

ギアスに呑み込まれないためには、よほど強い意志がなくてはならない。そういう人が何をするか、をネージュは見たいのである。発狂するような弱い精神の持ち主に与えるつもりはない。

「そしてまず間違いなく、ゼロもギアスユーザー。しかも僕と同じ『絶対遵守』か」

オレンジ事件や租界構造のページなどで、ライは確信に至った。その指摘にC・C・は横を向く。肯定も否定もしたくないということなのだが、その態度は凶星だと言ったに等しい。

しかし、それ以上の爆弾を投下したのがネージュである。

「ふーん、昔の主人様の言うことに答えないんだー。そんなにゼロのことが好きなんだー」

カレンとルーミリアの視線が揃ってC・C・に向き、それに対しC・C・は真っ赤になりしどろもどろの言い訳を繰り返す。ネージュはひとしきり笑った後、まとめに入った。

「ま、C・C・で遊ぶのはこのくらいにして……。次は、あなたたちがどうするか、よ」

どうするか、と問われても、答えの出ないカレンは再びルーミリアを見る。むしろ喜んでライに付いて行くと言うだろう。そう予想したカレンだったが、彼女が言ったのは思いがけないことだった。

「……………とりあえず、カレンさんはライさんと別れるのですね」

「何だよ!!!」

思わず叫んでしまったカレンだが、ルーミリアは全く動じない。

「確か、『王』のことを『世界史上で最も嫌いな男』と言った記憶がありますか…」

「違うわよ!!!私が嫌いなのはリカルドによつて作られた『王』の姿であつて—」

考えなしに叫んでしまった後で、はつとした。ライが『王』本人としても、何も変わらないではないか。くすくす笑うルーミリアに、そう気付かせるためにわざと言つたなという思いはあるが、感謝はすべきであろう。

「ではカレンさんはこれまで通り、ということ。私の方は、シエルト家の没落も含めて責任を取ってもらいたいので…」

「ずつとお傍に置いてください」と続けたのでカレンは危うく叫びそうになった。この女は、こんなシリアスなことまで色ボケのネタに使うのか。

咽喉まで出かかった叫びが押しとどめられたのは、ライがあつさり了承してしまったためである。

「ちよつと!!!浮気するつもり!?!」

怒りの矛先は彼氏の方に向いた。恋人の目の前でこの女に言質を与えるとは、何を考えているのか。しかしその相手は、心底何のことかわからないという表情で続けた。

「いや、僕としてはルーミリア以上の副官はいないと思ったから……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………。くすつ」

何とも言えない空気が場を支配する。呆然とするカレンに、やれやれという表情のネージュと落ち込むC。C。その中で、ルーミリアだけが楽しそうだ。

「では、さつそく今晚…」

「何考えてるのよこの野獣!!!」

言わぬことではない。隙を見せれば、即貞操を窺ってくるのがこの女だ。そして、「カレンをからかう」という逃げ道を用意しておくのもこの女である。

「まあいやらしい。私はただ、ゼロの援軍要請に応えらるとなると計画をさらに早める必要があるからお話を、と考えただけですけど…」

ぐぬぬと歯ぎしりしながらカレンが黙る。そう言われると、反論できない。そして自分にはその話し合いに参加する戦略眼がない。

が、この女のことだ。前のように酔いつぶして襲うくらいのごとは、簡単にやる。

「何だ、結局、みんな変わらないのね。よかったわね、ライ。もう、あなたは孤独じゃないわ」

ネージュがおもむろに立ち上がる。それを見て、ライは引き止めるようにその手をつかんだ。

「ネージュ、君こそどうするつもりだ？」
「どうするって…」

ネージュの予定は、これで終わった。ライが記憶を取り戻し、その上でこの世界に生きることを決心した時。手助けするのは、そこまでのつもりだった。

『天叢雲』のことなら安心して。ロロが、私の代わりにを務めてくれるだろうから」

その点も考えて、ネージュはある程度の実力しか出さなかったのである。しかし、ライが聞きたいのはそんな答えではない。

「僕はただ、今まで通り君と居たい。それだけだ」

司令官として、ネージュの力は当てにしない。やる気がないなら戦ってくれなくても構わない。ただ、ネージュと共に過ごした日々は楽しかった。それを続けたいだけなのだ。

「……………怒って、ないの？」

長い沈黙の末、ネージュが小声で呟いた。何であれ、ネージュはライを利用した。あの虐殺だって防ぐ気になれば簡単に防げたのである。あえて、そうしなかった。

ライも、重々わかっている。それでもあの虐殺は、ネージュに非が

あるものではない。ギアスを甘く見すぎていた、自分の責任だ。

「それに、この時代でまた、護りたいと思える大切な人たちに出会えた」

過去を忘れたわけではない。生涯、忘れられないだろう。ただ、過去に囚われてこの時代を捨てることは、もう出来そうもない。どちらも、同じくらい尊いものとなってしまった。

そしてその世界には、当然ネージュも含まれる。

「ライ、大好きー!!!」

沈み込んでいたネージュの表情がぱつと明るくなり、ライの胸に飛び込んだ。実に子供っぽいその表情と行動は、カレンを苦笑いさせるには充分だった。

だが、彼女にしてみれば、『普通の女の子としての幸せ』というものは決して手に入らないものだったのである。だから、ライやカレンと過ごした日々は彼女にとっては『特別』なものだったのだ。

ライの記憶が戻れば、その『特別』は捨てざるをえないと思っていた。すべてを思い出せば、憎まれるに違いないと思っていた。

ネージュに計算違いがあったとすれば、この点だっただろう。

「今、すっごく機嫌いいから、望むならブリタニアを3日で滅ぼしてきてあげてもいいわよ!!!」

えっへんと宣言する姿には、人智を超越した存在たる威厳も何もない。ただの、甘えん坊の子供である。しかし言っていることは恐怖だ。そしてそれを実現してしまいうようなのが、何より怖い。

「やめてくれ。ブリタニアだって、僕にとっては祖国だ」

慌てて、ライがネージュを引き止める。リカルドによって捻じ曲げられ望まぬ形となったとはいえ、生まれた国であることは変えようのない事実である。

「だから、僕が止める。父上の国と母上の国が殺しあう事態を止めるのは、僕の役目だ。この世界を形作る一因となったことも含めてね」
「……………? どうかしましたか、カレンさん?」

ルーミリアの声に、固まっていたカレンが現実に戻る。何でもないと答えたが、表情は暗い。ただしそれもすぐ消えた。ネージュが、今

度はカレンに抱き着いてきたからである。

「……賑やかだな、お前のところは。援護はしてもらえるもの、と考える。……聞き届けていただき、感謝いたします」

一礼したC・Cは、そのまま立ち去った。その後姿を、ライは引き止めなかった。彼女は彼女で、新たな幸せを見つけられたのだろう。

ならば、もう自分が邪魔をするべきではない。そして、少しくらいの応援はしてやりたい。

「甘いですね」

ルーミリアの指摘を、ライは否定しなかった。

「いよいよ、か」

ついに『天叢雲』が動くと聞いて、扇には感慨深いものがある。何の勝算もなく小さな抵抗を続けるしかなかった弱小レジスタンスが、この戦争の行く末を左右するところまで来たのだ。

「いよいよ、ですわね」

神楽耶にも感慨深いものがある。この作戦が成功すれば、ブリタニアのエリア制度に大きな風穴を開けることになる。

それで取り戻せる日本は、無論一部でしかない。ブリタニアの従属国という立場にも立たされるだろう。それでいいとは、神楽耶も思わない。

しかし、『今』の状況から変化が生まれる。例外というものは一つ認めると、どんどん拡大するという宿命を持つ。その先に、真の独立への道を見据えるべきだろう。

第一、日本全土からブリタニア軍を駆逐したとしても、産業や統治機構を整備し直すには恐ろしい時間がかかる。戦争を続けながら、そんなことをできるはずもないのだ。

「目的は目先の戦鬪の勝利ではなく、ブリタニアを講和のテーブルに引っ張り出すこと。第一目標は、コーネリア」

シュナイゼルが来日したものの、エリアー総督府の人事に変わりはしない。コーネリアが失脚したわけではないらしい。であれば、まず

相手にするのは彼女であろう。

「その際に、彼女でさえ話を聞かざるを得ない状況に追い込む」

コーネリアの思想に『融和』という考えはない。ただ、彼女は政治家としても一流の存在だ。国家の威信などでは取り返しのつかない事態に追い込まれば、それを判断する能力はある。

そこから先が、ユーフェミアの出番となる。ライはすでに、彼女が進めている構想を知っていた。だがそれは武装解除が前提となる。ブリタニアも、そこは譲らないだろう。

それを、何としても譲ってもらおう。武装解除など馬鹿正直に应じてしまえば、あとは煮るも焼くもブリタニアの自由である。ユフィにそんな気は毛頭ないだろうが、他はわからない。

生存権の確保のために、軍事力の保持は必須なのだ。

「二つだけ確認しておきたいことがある」

そう切り出したのは、『月輪七曜』のリーダー・長野である。作戦開始前の最後の会議として、協力関係にあるレジスタンスの代表にも集まってもらっていたのだ。

『蒼』、あなたがブリタニアの皇族という噂がささやかれているが、本当なのか？」

場が、水を打ったように静まった。神楽耶が前に出ようとしたが、それはライが押しとどめる。

「本当だ」

きつぱりと認めたことで、場の重圧がさらに増したように思えた。「ここに居る皆には、終わったらすべてを話します。…ただ一つ言っておくなら、僕はハーフだ。日本もブリタニアも、僕にとっては滅んでほしくない『祖国』だ」と

ただ、今のブリタニアは護るに値しない。リカルドの思想を叩き潰し、新たな国として『新生』させることに痛痒は感じない。

「日本と新生ブリタニアの共存共栄。それが今の僕が考えていることです」

そのために戦う。認められないなら、去ってもらっても構わない。ただ、今回の作戦が終わるまでは従って欲しいというのが本音ではあ

る。今回は、絶好の機なのだ。

「…………『蒼』、それは、ハーフであるあんたの感傷だろう」

それは否定しようがない。ただ、ブリタニアを思う故日本を蔑ろにしている、と思われるのは不愉快だ。どちらの国に対する思いも、胸の中にある。

「日本は母上の国です。僕は母上から、日本のことを学んだ。日本という国が常世に栄えて欲しいという思いなら、あなたたちに劣るものではない」

その言葉に、長野は『今』は従うと言った。元々、「日本に勝ち目はない」という現実を認めているからこそ、長野たちもここにいるのである。

であれば、将来はともかくとして、今はライの思想に乗るしかない。そしてライも、将来をどうするかまで押し付けるつもりはない。未来のことを決めるのは、その時を生きる人達だ。

「…………さて、『王』の戦を見せてやるとするか」

その眩きを、ネージュだけは聞き取った。

「弾けるおっ!!!」

久しぶりの実戦だ。紅蓮は変わらず、敵サザーランドを圧倒する。動かしたのは、カレンの『緋龍』と小笠原隊を中心とした部隊である。ニイガタ基地に紅蓮に対抗できるような駒はない。一時間もあれば、制圧できる。

「小笠原さん、そっちはー?」

「厄介な奴がいたけどネージュちゃんとロロ君が倒しちやったわー。問題なしー」

別動隊を指揮していた小笠原からの報告も、暢気なものだ。言われた通り、問題なしと見ていいだろう。

抵抗の消えた基地内を突き進み、中央部で純白のナイトメアと行き会った。ネージュのナイトメア『雪花』である。

『紅蓮』や『月下』をベースに、左手を輻射波動機構、さらに右背面に大型ライフルを懸架させることによつて遠火力の不足を補った機体である。丁度『朧月夜』と『紅蓮』の中間と言える。

ちなみにこの『雪花』、コクピットがネージュ用の寸法のものしかなかったので、「乗れる人がいない」という理由で騎士団に引き渡されずに済んだ。

「あなたたちを人外の力で勝たせることはしないわよ。……私が使いたくなったら別だけど」

そう言い、ネージュは留まった。結局、ネージュも変わらなかった。契約者であるライの行く末を見届ける、その幾分かの手伝いはするということなのだ。

カレンもネージュの正体を知って驚愕したことはしたのだが、この関係も変わらなかった。中身は甘えん坊の子供ということを知りすぎていたため、どうにも畏れる気が起きなかったのである。

……ただ、傍目からすると「ライやカレンに対する甘えっぷりが5割増しになった」と言われている。当事者たちは変わってないと思っっているらしいが。

なお、ブリタニアを3日で滅ぼして見せるというのは、さすがに冗談だったという。カレンやルーミアの前ではそう宣言している。

しかし、ライだけは笑わなかった。神根島の正体不明機。あんな化け物を使うことができるのは、この少女しかいないからだ。

とは言っても、追及してもどうにもならない。はぐらかされるだけだろう。

もう一人の口は、陰のある子だった。連れてきたネージュによる「ちよつと重い過去のある子」らしい。ナイトメアの操縦技術や格闘など、軍人としての技能は優秀だ。

しかし、人付き合いはてんで駄目で、最初の頃はネージュが間に入ってやらないと会話も成り立たないような状態だった。受け答えはしてくれるのだが、ごく表層的なことしか言わず会話が続かないのである。

カレンとしては、あまり好きになれなかった。だが小笠原などはそれにも関わらずけげなく踏み込み、それを受けて口口の方も少しずつ慣れ始めてきてるようだ。

それはともかくとして、ニイガタ基地奪取。緒戦は、『天叢雲』が物にしたということだ。

「……でも、やけに簡単に行ったと言うか、手薄すぎじゃない？」

小笠原の疑問はもつともだ。敵の司令官は死守するつもりなどさからさらないようで、ナイトメア戦で守り切れないと見るや基地を捨てた。

ライやルーミアなら確信に満ちた答えをすぐ出すだろう。しかし今は、二人ともここにはいない。それどころか受けていた指示は、「重要部を破壊して放棄しろ」であった。

「ニイガタが落ちた？」

予想より少し早い、とは思いながらも、それ以外は予想の範囲内である。コーネリアは、『蒼』が動くのはこちらがゼロ討伐に乗り出してからだと言っていたのだ。

(食いついた)

やはり、北陸道。その観測は見事に当たった。そしてニイガタ基地は奪われても仕方ない、と考えていた。無理に抵抗して損害を増すだけなら、いつそ放棄しろ、とも。

その後、相手がそこに拠るつもりなら、大兵力で圧殺すればいい。むしろ、そうなつてくれればいいと思う。楽な戦で終わる。

ただ、今ニイガタに向かうかどうかは、少々悩みどころではある。(どちらを優先すべきか…)

ゼロの息の根を止めて、安心して北陸に向かいたいところだった。逆にゼロとて必死の抵抗をするだろうから、無傷のうちに『蒼』との決戦に臨むべきだという思いもある。

悩んだ末に、コーネリアは後者を取った。ダールトンを九州戦線で使ってしまった現在の現状、『蒼』を抑えられる司令官はごく限られる。

自分もギルフォードも北陸に向かいたい。敵のナイトメア戦力を考えれば、ノネットとベディヴィエールも連れて行きたいところだ。

しかし、となると留守を任せる將軍たちはどうにも頼りないのしか残らない。だが今回に限っては、特別不安視する必要はないと考えている。

「そこは、兄上がいれば問題ないだろう」

シユナイゼルはエリアーに留まったままだが、前面に出るつもりはないという。まあ、トウキョウ租界の危機ともなればさすがに指揮を執ってくれるはずだ。

兄がいれば安心してトウキョウ租界を留守にできる、というのが、コーネリアがホクリク討伐を優先させた大きな要因であった。

しかし、彼女の目論見はすべて、北陸道に入った瞬間に潰えることとなる。

「……………」

敵軍、消息不明と聞いて、コーネリアは眉を顰めた。敵がニイガタ基地に拠らなかつたのは、まあいい。そんなへまをする相手なら、とつくに潰している。

「これは、やはり私が釣り出されたようだな」

自分の影を見せれば、コーネリアが食いついてくる。『蒼』がそう考

え、罨を仕掛けてくるというのは予想の範囲内である。

仮にここで遠征失敗、ブリタニア軍敗退などという事態に陥れば、ゼロの敗北でブリタニアに移った流れがまた変わる。

「ひとまず、ニイガタ基地に拠るべきではないでしょうか？」

参謀の提案は平凡と言うしかないものだが、反対する理由はなかった。使えそうなら、本陣を置く場所として適当ではある。

向かってみると中枢部が破壊されていたため、修理するまで要塞としては期待できない。それでも更地に陣を構えるよりは安全だろう。つまり、宿舎としてなら使える。

「情報を集めろ。全てはそれからだ」

振り回されている、という印象しかない。

コーネリアが入った途端、北陸道の各地で一斉に蜂起が起きた。それはいい。しかし各個撃破を狙おうとすると、敵は消えるのである。奪った敵の基地は、とりあえず雨風を防げればいいというレベルのものしかない。

そして消えた敵は、ブリタニア軍が去るとまた現れる。

「魚沼丘陵で敵を発見したと報告が入りました」

すでに二度、同じ報告を受けている。しかし今回は、黒の騎士団も使っていた新型の姿を確認したという。ならばこれまでとは違うかもしれないと向かってみれば、やはり敵の姿は消えていた。

敵の基地を破壊したところで、穴を掘って崩れないように壁を固めただけのものである。作る気になれば簡単にいくらでも作れるだろう。炸薬を無駄にするだけと思えるが、と言ってやらないわけにもいかない。

部隊を分割する、という選択肢は、出来るだけ避けたかった。こちらが各個撃破の餌食になる。

「必ず、どこかに本拠があるはずだ。探せ」

ゲリラ戦に徹し、じりじりと消耗を誘う。さらにゼロが戦力を回復したり九州の雲行きが怪しくなれば、コーネリアは撤退せざるを得ない。それで相手は『勝利』と謳うことができる。

(だが、本当に、それが『蒼』の狙いなのだろうか?)

何か、腑に落ちない。というのも発見された敵の中に、『蒼』の直轄部隊と思しき姿が見えないのである。具体的には奪われた『ウラノス』とシンボル機とも言うべき『紅蓮』、それにニイガタ攻略で見せた白い機体だ。

「……………」

ナリタ戦を思い出す。あの時、誰もがコーネリアしか見ていなかった中で、『蒼』だけは違った。今回も何か、あの男だけ全く別なものを見ている、という可能性は高い。

「……………何か見落としている。そんな気がしてならないのだ、ギルフォード」

最も信頼する、自分が誇る騎士に問う。しかし問われたギルフォードとて、明確な答えはない。

中華連邦と対峙する、キュウシユウ戦線。ゼロと向かい合う房総およびトウキョウ租界防衛。そしてこのホクリク討伐戦。今、エリア1で抱えている戦線はこの3つだ。

ブリタニアとしてもこれ以上の戦線拡大は辛い、敵にその余裕はない。全力を傾けねば、できるのは時間稼ぎだけだろう。

では、敵は時間稼ぎをしているとして、その間にできることは何であらうか。

(隙はない、はずだ)

自分の周りは、そう簡単に崩されるものではない。トウキョウ租界には十分な戦力とシュナイゼルがおり、ランスロットとフロートユニットを失ったままとはいえラヴェインがいる。

北陸にコーネリアを引き付けておいてキュウシユウ戦線に参戦、という可能性も低い。キュウシユウ戦線が動くなら、中華連邦に何か動きがあつていいはずだ。

同様に、EUにも動く気配がない。となると、『蒼』は単独でできる作戦を考えている、と見るべきだろう。

「なんとなく、『王』の戦に似てますな」

ノネットが言う。コーネリアとしては、そうだろうかと思うところ

だ。強いて言えば、ナポレオンの第二次イギリス遠征。『王』の完勝で終わった、あの戦いだが…。

「今回、補給路が途切れることはないでしょう」

ナポレオンは、補給を断たれて立ち枯れた。対し今回は、魚沼丘陵に敵が出現するのは目障りだが補給を断つほどのものではない。回り道をすれば回避できるし、ニイガタ基地には海路もある。

「確かにそうですが、何か、理屈じゃないところで感じるのですよ。我々は、絶対に敵にしてはならない相手を敵にしているんじゃないか、と」

領けないが、笑い飛ばすこともできない話である。敵にしなくてよかったなら、という思いならコーネリアにもあるからだ。

「ミヨウコウ山系にある基地が、これまでとは違う規模のものと思われます」

諜報員が、ようやく敵の本拠らしき基地を発見したらしい。たとえ本拠でなかったとしても、出入りからして有力な拠点であることは間違いない。

「よし、全力でそこを叩く。そうすれば、さすがに戦局も動くだろう」『蒼』とて、今回ばかりは姿を隠しているわけにはいくまい。結果がどうなるうと、構想の一端は間違いなく見えるはずだ。

全軍を挙げ、コーネリアは妙高山に向かった。しかしこの時点で、彼女は後れを取っていたのである。

その途中、敗報が飛び込んできた。

敗報、と聞いて、コーネリアは耳を疑った。

(トウキョウ租界がそんな簡単に落ちるはずがない！)

第一に考えたのが、それである。狙うなら、やはりコーネリアが留守中で戦力の半減したトウキョウ租界。自分なら、そうする。

「敵、ハコネ基地に襲来！ 陥落必至、至急救援を乞う、とのことですよ」先頭で攻め込んできたのが、あの『ウラノス』だった。ついに『蒼』がその姿を見せたということだ。そして特派から提供されたデータから考えれば、ハコネ基地が防ぎきる可能性は皆無と言っていい。

案の定、すぐさま第二報が届き、陥落したと報告が入った。

トウキョウ租界近郊の戦力は防衛及び対ゼロに必要なだから、ハコネ基地が襲われてもブリタニアが即応できる戦力は高の知れたものである。故に、取るのは難事ではない。

「……………だが、取ったとて何になる？」

解らないのはその点だ。『蒼』直々に動いたということは、そちらの方こそ作戦の肝であるのだろう。しかしコーネリアの分析の中で、ハコネ基地の戦術的価値は薄い。

訝る彼女の元に、さらなる報告が届く。オオツキとニラサキの両基地も陥落したというのである。

「……………」

数瞬の後、『蒼』の狙いに思い至ってさあーっと血の気が引いた。ハコネ、オオツキ、ニラサキ。その3点を結んだ三角形の中に、トウキョウ租界を超える重要施設が、ある。

(フジ鉱山!!!)

戦術的価値は何一つとしてない場所だった。だからコーネリアは今の今まで思いもしなかったのだ。

だが、世界のシェアの70%を占めるエリア11産サクラダイトの最大の採掘場だ。その戦略的価値は計り知れない。コーネリアの顔色が、真っ青になるくらいである。

「宰相閣下より通信です！」

全軍に停止命令を下し、トウキョウ租界からの通信を受ける。先にも言ったが、フジ鉱山に戦術的な価値はなくあるのは政略的な価値である。

その政略的価値を活かす方法はただ一つ、脅迫だ。

「敵の要望は『戦力を保持した、日本人による自治区の設立』。……妥当な提案ではあるね」

「あ、兄上は認めるつもりですか？」

国家の威信はどうなるのか。それを護るために、今まで戦ってきたのだ。だが、コーネリアはフジ鉱山の価値を充分理解している。それが、彼女の口をどもらせた。

断れば、敵は当然フジ鉱山を爆破すると言ってくるだろう。脅しと見て強硬手段に打って出るのは容易い。が、相手が本当に実行したら、世界経済が大きく揺らぐ。

そうなった時、責任はコーネリアの首一つなどでは到底収まらない。その後の世界戦略を、根本から見直す必要が生じるだろう。

そして放っておくわけにもいかない。サクラダイトは重要な政略物資だ。備蓄はあるからすぐさま枯渇するわけではないが、フジ鉱山を奪われたまま放置するなど許されざる失態だ。

「これはエリアーの範疇を超えた問題と判断する。故に、帝国宰相である私が預かる。……いいね、コーネリア」

そう言われて、コーネリアはがくりと肩を落とした。この瞬間、『蒼』に対する決定権は自分の手から離れたのだ。そしてそれは、『敗北』ということでもあった。

「……………」

握りしめた拳がわなわなと震える。戦術的に負けはしなかった。だがそれが、何だというのか。今、何もできないこの状況は、政略で完全に負けたということなのだ。

おそらく『蒼』は、ゼロとの戦術的勝敗に一喜一憂する自分の姿を見て笑っていたのだろう。

(だが！だが、しかし——！)

『フジ鉱山を質に取る』などという発想は、自分のどこにもなかった。

いや、自分だけではない。ブリタニアの中でも、考えられるとしたらモニター越しのこの人だけだっただろう。

「……正直、私も悔っていたよ。君が苦戦するのも無理はない」

慰められるのが、かえって辛い。その後の話はほとんど頭に入らなかったが、「ホクリク戦線は停戦せよ」という帝国宰相の名で命じられたことだけは、忠実に実行した。

「……動いたのはシュナイゼルか」

フジ鉱山、サクラダイト採掘プラント。ブリタニア軍の排除は『ウラノス』の力をもってすれば、容易いことであった。

そしてNACの幹部たちを人質にした…、と言うが、実際にはキョウトの本部である。神楽耶などは、喜ぶ内心を押し隠して迎え入れた。

「正使がシュナイゼル。護衛も数名、という事ですわ」

豪胆と言うか暴挙と言うか、わずかな人数で乗り込んでくるという。ただ、交渉の使者が帝国宰相という事は、ブリタニアも本当に乗る気にいるということだ。

占拠後、通信でこちらの要望をトウキョウ租界に伝えた。シュナイゼルが全面的に出張ってきたのは少々厄介なことと思っただが、大筋では認めるという。細部は、直に会って詰めたい、と。

「さすがにフジ鉱山と引き換えでは、国家の威信などとは言ってられないのでしよう」

ブリタニアという国にとって、日本の価値はサクラダイトの産地であることが第一。第二が中華連邦に対する戦略上の拠点というところだろう。

多少の誇張はあるにしても、ブリタニアはフジ鉱山があったからテロリストだらけの難治の地でも放棄しなかったのだ。そのフジ鉱山を失うという事は、これまでの犠牲を全て捨てるに等しい。

「……いやいや、ここまでは思いもなかった。ゼロは保険と考えていたが、さっさと見捨てるべきであったな」

口を挟んだのは桐原だ。表は笑顔だが、内心舌打ちしているのでは

ないか。露骨なまでの擦り寄りゼロ墮しが、彼の目論見が破綻したことを示していた。

『蒼』とゼロを競わせ、そのバランスは裏でキョウトが操る。ところが、どちらも操られるような男ではなかったのである。

(……まったく、あの小童も情けないわ)

トウキョウ租界侵攻が、桐原にしてみれば想定外の暴挙だった。せいぜい房総を制圧するくらい。そのくらいの勝利を望んでいたのだ。

それで勝ったのならともかく、大惨敗に終わった。房総の占領地も放棄せざるを得なくなり、援助はすべて水の泡だ。おかげで神楽耶に頭が上がらない日々が続いている。

「解放戦線や騎士団の中にも講和締結を望むものがおろう。キョウトとして、帰順を促すことは任せてもらいたい」

そして、桐原も現実は見ている。騎士団と解放戦線が半壊した現状、このあたりが潮時だ。隠れ蓑にしてきたNACの活動も怪しまれている。尻尾を捕まれる前に、安全地帯に逃げ込まねばならない。

「念のためであるが、『講和に応じた者の赦免』をシュナイゼルに明言させることを忘れてもらっては困る。誘い出して一網打尽、という恐れがあるのではな」

応じない者のことまで知ったことではなかった。ここで講和が成るなら、ゼロなど躊躇なく切り捨てる。元々、人質だった敵国の皇子に過ぎない相手に、愛着などない。

「……さて、『君との』講和なら、ブリタニアの帝国宰相として認めぬものではない」

自己紹介も何もなく、シュナイゼルが言った。『君との』という意味は簡単だ。ゼロなど、他の組織に至るまで無条件で許すつもりはない、ということだ。

「実は、ブリタニアでもこういう計画がある。それに参加する、という形なら、賛同も取りやすい」

ユフィの行政特別区計画である。シュナイゼルの提案は、ブリタニアが提唱した計画にそちらが乗るといいう形にしたい、というものだ。

「成程」

当初は武装解除が前提だったが、そこは譲歩。特区の自衛戦力として、天叢雲以下の戦力が参加する。ブリタニアは名を取り、日本は実を取る形になる。

「君には感謝するよ。名目にすぎないことでも、国家には必要だね」
今回の一件は、声明を出さず伝えたのもエリアー11政庁だけである。シュナイゼルも即座に緘口令を布いたので、世間にはまだ知られていない。

「私の組織と、私の傘下にあるレジスタンス。『今回』応じた者は反乱の罪を問わず、その自衛戦力に編入されたい」

『今回』とわざわざ言った意味はシュナイゼルなら察するだろう。日本が保有する戦力に、制限をかける。『今回』応じなかつた者に関しては武装解除してもよい、と言質を与えたのである。

「また、特区に参加する者については、反逆の罪を問わない」

具体的にはブリタニアに対する戦闘行為およびその支援行為に対して、となる。実はここにも裏がある。戦闘行為に要人暗殺や誘拐、民間人虐殺などの犯罪行為を含めるとは、ライは言わなかつた。

「……………ふむ」

特区計画を示した以上、国の威信がどうこうと言う段階は過ぎた。その上で、ブリタニアが受け入れやすいよう日本側も譲歩しよう、ということである。

特区がテロの温床になるというのが、最も懸念されることだ。その点から見れば、参加者を選別するというのは悪くない。

(ただし、この男がいる限り、牙は抜ききれない)

天叢雲とその傘下のレジスタンスには、抵触しないよう条件を出している。ブリタニアがこの講和を反故にすれば、再び牙をむく。そのための軍事力は、絶対に保持する。その気概は、決して失わないだろう。

ただ、逆に誠意を見せれば、この男の牙はブリタニアの外に向く。

「一つ聞いておきたい。ゼロはどうするのかな」

クロヴィスを殺したゼロは、ブリタニアでは大逆の犯罪者だ。これ

を許すとなると、ブリタニアとしては相当な譲歩となる。何か、特別な事柄がなくてはならない。

無論、ライも承知の上である。それに対する明確な答えは、すでに用意している。

「彼がどうするかは、私の関与するところではない。……もつとも、これ以上の抵抗は諦めるよう諭す所存ではあるが」

C・Cのことがあるにしても、そこまで面倒は見切れない。特区に参加したいなら、ゼロ本人が何とかすべき問題である。生き残るだけなら、取るべき手はいろいろあるだろう。

「……では、自治区の範囲を決めたい。君が掌握している北陸道をそのまま、というのであれば、却下せざるを得ない」

そこまで譲ってもらえろと考えるほど、ライも楽観的ではない。この状況なら、指定する場所はまず決まっている。

「ブリタニアとしては、北九州を指定したい」

君たちの手で、中華連邦軍を排除せよ、ということだ。予想通りである。いきなり同士討ちではブリタニアの本気を疑わせることになるから、房総の可能性は低かった。

ただ、これを受けることは中華連邦と対立する、ということである。ブリタニアを盾にして悠々と国力を養わせるほど甘くない、ということだ。

（しかし、この男―）

講和の条件としては、相当緩い。こちら側の言い分をほとんどそのまま呑んだ、というレベルである。フジ鉱山の重要性を考えても、甘すぎる。

「今回のことは皇帝の承認を得て、全世界に向けて公式に発表してもらいたい。それまで、フジ鉱山の占拠は続ける」

ただし、サクラタイトの搬出はこれまで通りとする。それがこちらの誠意である。もちろんブリタニアが反故にするようであれば、即刻次の行動に移る。

「承知した。……ただ、少し時間は必要になるだろうがね」

「……………」

シユナイゼルが立ち去ってしばらく、ライは腕組みをしたまま動かなかった。

「やりましたわね、お義兄様」

興奮で顔を紅潮させた神楽耶の声にも、ライは反応しない。シユナイゼルの態度は、欲しければくれてやっても一向にかまわないと考えているとしか思えない。

最後の最後に、つい問いただしてしまった。何を考えているのか、と。

「私が考えているのは、どうしたらこの世界が平和になるかという事だけだよ」

言葉は熱意あふれるロマンチストが言うようなものなのに、声音は冷淡としていた。そのギャップは、この男が途方もなく大きな、何かよからぬことを考えている証ではないのか。

その計画の中では、日本などあっても無くても大勢に影響ない、取るに足らない存在なのだろう。だから、シユナイゼルは甘すぎる講和を呑んだのだ。

(とはいえー)

今回の目的は、これで果たした。いつかシユナイゼルの意図と激突する日が来るにしても、先のことである。

七日後、『行政特区日本』の設立が、大々的に発表された。

外伝 7年前、伊豆

『行政特区日本』設立の決定―。この先どうなるかは不明なままだが、一つの区切りができたことは間違いない。

シュナイゼルとの会談を終え、北陸戦線でコーネリアが撤退する様子を見届けたライは、ある場所へと足を運んだ。

もつとも、今日は彼の方がおまけである。主役はカレンや扇、それに玉城や井上たち旧扇グループのメンバーの方だ。

「ナオト…、ようやく報告することができた。ほんの一部とはいえ、俺たちは日本を取り戻したぞ」

カレンの兄、紅月ナオトの墓である。実のところ遺骨も納められてない墓だが、弔う人にとっては象徴足り得る場所なのだ。

「……………」

一人一人が思い思いのことを長く語り掛ける姿を、ライとネージューは無言で見つめていた。

問題は、まだまだ多い。

シュナイゼルは約束通り皇帝の内諾を取ったらしい。混乱が起きぬよう準備を整え、数日中には公式発表に至ると言う。ただ、不満を内包する者は多いだろう。

日本側とて、全員が全員諸手を挙げて賛成するわけではない。とはいえ、一時的にせよ全土のレジスタンス活動は停止している。今後をどうするかは議論で、それぞれではないというところか。

次いで、国家の立て直し。まず領土として中華連邦に占拠されている北九州を、奪い取らねばならない。が、これはいい。成算は十二分にある。急ぐべきはその後の統治機構と産業の立て直しの方だ。

フジ鉱山は今後嚴重な管理下に置かれるだろう。それにブリタニアと手を組むとなれば、もう密売で稼ぐことはできない。

「ブリタニアには秘匿していたのだが、実は北九州にもサクラダイト鉱脈がありそうなのだ」

そう教えてくれたのは桐原である。それに7年間NACとして保護してきた技術者たちを、皆移す。それで工業再生の端緒はつく。あ

とは、時間が発展させてくれるのを待つしかない。

「……………」

その中で、自分は何をすべきなのだろう。神根島で玉城に言われたことだが、その予定が全くない。強いて言えばユフィの手助けをすることであろうか。…許してくれるならば、だが。

「…………あれ、ネージュは？」

物思いに耽っているうちに、墓参りは終わったらしい。そして隣にいたはずのネージュの姿も消えていた。どこに行ったのかと思つて辺りを見回すと、桃を抱えて戻ってきた。

「直売所があつて買ったらいっぱいおまけしてもらっちゃった。みんなで食べよー」

そして、自分でできるにも関わらずカレンに「剥いてー」とねだる。こういうところは、どこまでも子供である。それが演技なのか素なのか、いまいち判別できない。

そしてカレンの方も「仕方ないわね」と苦笑いしつつ、穏やかな表情で受け入れていた。井上などから言わせると、「ずいぶん丸くなつた」となるらしい。

(桃、か…)

手元から立ち上る芳香に、記憶野が刺激された。あの日の思い出にも、この香りがあつたのだ。

—7年前、戦争が始まる直前のことである。

「それじゃあ、お母さん、お兄ちゃん、行つてきます」

引越しの片づけが終わり、桃を片手にカレンは走り出した。前にいた町を出発する直前、見知らぬ少年からもらつたものだ。

「遅くならないうちに帰ってくるんだぞ」

その背に向かって兄が呼びかける。が、その姿はあつという間に小さくなった。

「やれやれ、わが妹ながら呆れるな…」

10歳の少女とは思えない脚力に、兄は苦笑いで見送つた。あのお転婆で、嫁の貰い手は見つかるのだろうか。今は自分に懐いているか

らで、好きな男ができれば変わるのだろうか。

カレンの行き先は、電車から見えた高台だった。町が一望できそうな場所だ。桃はそこで食べるつもりなのだろう。

「着いたっ！」

高台の上は公園になっている。が、カレンの家のある方向はちょうど木々に遮られて見ることができない。それが不満で見渡せそうな場所を探していると、森の中に進む人影を見た。

「……………あれ、何？」

真っ白な少女だった。何か、この世の物ではないものを見たような気がした。恐怖と、好奇心。後者が勝ったカレンはどんどん森の中に入っていく。

視界が開ける。崖になっているのだ。そこからなら自分の家もよく見えるだろう。

もしかすると、あの少女はそのことを教えてくれたのではないか。そんな思いにとらわれたカレンだが、少女の姿はどこにも見当たらない。

「……………」

もしかしたら、その木の陰にいるかもしれない。そう思ったカレンは、崖近くまで足を進めた。

その場所に、その人はいた。

銀色の髪、深い海のような色の瞳、表情に哀愁が漂い、身に纏う服は昔のブリタニア貴族のようで、まるで絵に描いたような光景にカレンは数瞬見とれていた。

「……………」

男は無言でカレンのほうを見た。まだ20歳にもなっていないだろう、『少年』と形容するべき年齢だった。

「あなた、誰？…ここで何してるの？」

言ってから気づく。相手は明らかにブリタニア人なのだから、日本語で話しかけても分からないだろう。

そう思い、勉強中のつたないブリタニア語で話しかけようとするが、それより早く相手が口を開いた。

「誰、と聞かれてもな…。何をしているかなら答えられる。風景を見ていた」

日本語、だった。それも日本人と変わらないほど流暢な。そのことにびつくりしたカレンは桃を取り落とししてしまった。

「おっと」

崖から落ちそうになる桃を、少年が拾い上げる。気をつけるんだな、と言い、それをカレンに手渡した。

「あなたのしてることって、それだけ？」

「そう、それだけだな。僕は何をしているんだか…」

変な人だ、とカレンは思った。しかし危ない人ではない、とも思った。理由は無い。ただの直感である。

「桃、食べる？」

これも直感だ。手渡す瞬間に垣間見た表情から、なんとなくそう思ったのだ。

「いいのか？」

「いいよ。お兄ちゃんが拾わなかったら、崖から落ちちやつてたもん。半分あげる」

それなら、とカレンの手から桃を受け取り、なんと日本刀を使って皮を剥きはじめた。長さからして短刀だろうが、日本刀を使うブリタニア人というのにカレンは再び驚いた。

「……手で剥けるよ？」

カレンが言葉にできたのはそれだけだった。どこから突っ込んだらいいのかわからず、言葉が出なかつたのだ。

「桃は切り分けて食べるものだろ？」

そう言つて削いだ果肉の一片をカレンに渡す。確かにかぶりつかれるよりこつちのほうが気分がいいので、カレンは何も言わないことにした。

桃はよく熟れていて、甘かった。

「カレンー」

森の中に兄の姿が見えた。家を出てから結構な時間が経つたので、探しに来たのだ。

桃を食べ終わってからには特に話すことも無かった。謎の少年はただ風景を見ていただけで、カレンはただそれを見ていただけだった。「駄目だろう、こんな危ないところに、知らない人と来るなんて」「一言言っておく。私のほうが先客だ。私がいたところに勝手にやってきたのだから、勘違いされては困る」

この少年の口調が、二人だけのときとまったく違うことにカレンは気づいた。優しそうな感じが一切消え失せ、冷徹な、鋭い刃物を思わせる感じになった。

「…あ、それは申し訳ない。だけど、一人で来るのも駄目だ。崖から落つこちたらどうするんだ」

「……ごめんなさい」

「反省したのならもういいよ。さあ、家に帰ろう」

そう言つて兄はカレンの手を引く。カレンに多少の後ろ髪を惹かれる思いはあったが、手を振りほどくことはしなかった。

「ちよつと待て」

二人を引きとめ、少年は短刀を外した。

「桃の礼だ。亡くなった妹の守り刀として打たれた物で、そこそこ価値はあるはずだ」

「いいの？ 大事なものなんでしょう？」

鞘や柄の細工も見事なもので、邪気や災厄を払うお守りとして作られたものなのだろう。そして亡くなった妹の形見でもあるものをもらつていいとは思えなかったのだ。

「売ろうが捨てようがかまわない。……私にはもう、持つ資格などないのだから」

哀しく、寂しい声だった。その声を受け取らなければ悪い気がして、カレンは短刀を受け取った。そしてそれを、兄に渡した。

「お兄ちゃんが持つてて。この刀が、お兄ちゃんを守つてくれるように。私のことはお兄ちゃんが守つてくれるから」

元々の持ち主だった少年は驚いたようではあったが、怒った様子はなく兄に言った。

「信頼されているのだな。妹を大切にしてくれ」

その言葉も哀しく、寂しいものだとかレンは思った。

—その後のことについて、カレンは知らない。

「……まさか妹の形見を渡すなんてね。あの子にそんなに感じるものがあつたのかしら」

7年後の世界で、誰とライを組ませるか。ネージュユにしてみれば遊びみたいなものである。面白くなれば、それでいい。

だから誰であれ、最初に出会った相手と組ませようという考えは変わってない。少々予想外なことが起きたが、許容範囲内であろう。

「おやすみなさい、ライ。目覚めた世界が、あなたにとって色鮮やかな世界であればいいんだけど」

ネージュユは再びライを眠りにつかせた。その際に、彼の記憶をすべて忘れさせた。

荒治療である。過去をなくし、真っ白な状態でこの世界を体験させる。その隣に、彼女にいてもらうことになるだろう。

「そして、私も出るわ。一度あなたを壊してしまった責任の埋め合わせとして、少し手伝うから」

すべてを投げうってでも守りたかった母と妹を自らの力で殺してしまった。今、この人が生きているのは、『契約』という一事があるからでしかない。

ネージュユはわざと、そこに追い込んだ。そうしないと、自分の望む世界にならないからだ。神聖ブリタニア帝国、EU、中華連邦の三つ巴の世界は、彼の国を崩壊させないと訪れない。

憎まれて当然だろう、とネージュユは思う。ただ、世界の行く末を変えてほしい。そんな自分のわがままに付き合わされているだけなのだから。

「……でも、この絆がどうなるかは、存分に楽しませてもらうわよ」
ネージュユも、この先にある展開は予想していなかった。この時点では、期待が持てる結果で終わったことに満足しただけである。

皇暦2010年8月10日—

神聖ブリタニア帝国は日本に宣戦布告した。

「やあ」

フジ鋹山から久しぶりに学園に戻ったライたちを、迎えたのはスザクであった。わざわざクラブハウスの入り口で待っていた、という時点で、話の内容は見当がついた。

「…………ふっ!!!」

いきなりの、鉄拳。それをライはあえて受けた。手加減一切なしの一撃に、尻餅を余儀なくされた。

「…………どうして避けなかったんだ？」

「どうして殴ったのか、それを説明する方が先だろう」

理由は、簡単である。スザクが『蒼』の正体に気付いたというだけだ。その確信に至った理由もまた、簡単なことである。

「ウラノス奪取は軽率だったね。君だって白状したようなものだよ」

軽率と言われるもやむなし、というのはライだって自覚があった。しかし、それでも欲しかったのだから仕方ない。そう言うと、スザクは真顔を崩し笑い出した。

「ごめんごめん。…でも、君にもそういう子供っぽいところがあるんだなって」

そしてスザクは、今度は手を差し伸べた。

『蒼』の正体を隠し、学園の皆を騙していたこと。これは言い逃れできない事実である。スザクには、許せることではない。

「だから殴った。ただの、このアッシュフォード学園の一生徒である、枢木スザクとして」

しかし、それはあくまで私人としての怒りである。公人としての行動は、また別だ。だからスザクは、ライに手を差し伸べた。

「皇女ユーフェミアの騎士、枢木スザクとしては君と手を組みたい。行政特区計画の成功のために」

「…………ユファイを利用したことについてはいいのか？」

その問いに、スザクは「良くはない」と答えた。ただ、本人は「利用されたことは事実でも、良い方向に向かったのもまた事実」と言い、問

題にしなかった。

ユファイもまた、気付いていたのである。そして、今後のためにはむしろ全面的に手を組むべきだと判断した。であれば、選任騎士としてその意向に従うべきだろう。

「面倒な男ね」

呟いたのはネージユである。それに対しスザクは、「それが僕だ」と笑った。昔なら、笑うことなどできなかっただろう。

「……………ところで君、断られたら本当にフジ鉱山を爆破するつもりだったの？」

スザクには考えられないことだ。フジ鉱山を失えば、確かにブリタニアには痛手だろう。ただ、それと同等に日本にとっても痛手なのである。

ただ、「やるかもしれない」という恐怖は、ブリタニア内でも共通していた。

「まさか、一度断られた程度でやるはずないだろう。……………まあ、地上部分を吹き飛ばすくらいなら」

全山爆破は最後の手段である。それまでに取るべき手段はいくつもあった。例えば、貯蔵分を吹き飛ばす。鉱脈の一つを採掘不能にする。撤退し駐屯した敵軍ごと採掘プラントを壊滅させる。

そして全てが駄目ならば、戦力を保ちつつ、次の機会を探る。

「……………」

苦笑いせざるを得ない。今回、講和で得をしたのはブリタニアの方ではないのか。話を聞いていると、そんな気がしてくる。今後誠意を見せる限り、この男が敵となることはなくなったのだ。

そして、カレンとルーミア。実は紅蓮の操縦者と、『天叢雲』の實質的な副司令官だという。この二人も、相当な逸材であることは間違いない。

わからないのは、連れの中の少女のことだ。説明を求めるが、誰も引き受けようとしらない。冷厳なルーミアさえ、視線を逸らした。

「えっと、君…」

全く知らないわけではない。スザクが転校してすぐのころ、二言三

言会話したことはある。

「あ、アーサーだ」

どこからともなく現れた猫のアーサーが、そのネージユの胸に飛び込む。抱きかかえたネージユが、くるくる回る。絵としてみれば、とても微笑ましい光景である。

「……君たち、こんな女の子まで戦わせていたの？」

批難するようにじろつと見る。しかしそれに対し、本人が「私は18歳以上ー！大人ー！」と叫ぶ。そういう態度がこれまた子供っぽい上、仕返しも子供の残酷さを秘めたものだった。

「行けっ、アーサーー！」

猫は意を受けたように、「にゃー」とスザクに襲い掛かる。ネージユの言葉に謝るべきなのか迷った分、逃げ足が一步遅れた。

「いったああああああ!!!」

がぶりといつもより深く噛みつかれたスザクの悲鳴が、辺りに響いた。

「……………なるほど。にわかには、信じがたい話ですが…」

ユフィとスザクに対し、ライはすべてを語ることにした。それに対しユフィは、少なくとも真面目に聞いてくれた。それだけでも感謝するべきだろう。

「ライのこと、私のこと、ギアスのことー。素直に信じろっていう方が無理だけど、作るならこんな与太話じゃなくてもう少しまともな話にするわよ。そして肝心なのはー」

「特区政策の成功のためには、あなたたちと手を組むべきである。その点は、何も変わらないということですね」

びく、とネージユの眉が動いた。ユフィの返答が気に入った、ということである。なるほどこの世界は以前の物とは全く別な方向に向かう。この皇女が生きている限り、そうなる。

ユフィとて、馬鹿ではない。特区政策は、今までのブリタニアのやり方から見れば異端の政策である。これを成功させるには日本側の協力はもちろん、ブリタニア内部で発生する障害を跳ね除ける力がい

る。

「……故に、わたくしは皇帝の位を目指します。たとえば、お姉様と戦うことになっても」

特区だけではない。それを手始めにブリタニアを変えらるとなると、皇帝の権力が必要不可欠となる。そして「いつか誰かが」という他力願望では何も変わらない。やるなら、自分がやるしかない。

ただ、ユフィに絶対的に足りないのは、現実の政治力である。理想論だけでは政治はやっていけない。理想を現実に則した形に合わせ、そして現実を理想に近づける力が、ない。

それゆえ、そこを補ってくれる誰かが、絶対に必要なのである。そしてぴったりの人材が、目の前にいる。

「二つ頼みがある。彼を、君たちの下で使ってほしい」

そう言い、引き合わせたのはロロであった。一通りのことは教え込んだ。あとは、自分の下よりユフィの下の方が伸びる。そう考えて、本人に事前に言い聞かせてある。

「それが命令であれば」

というのが、ロロの返答だった。未だ、『駒』として扱われてきた思考が抜けきっていないということだ。そこを、ユフィに叩き潰して欲しいのである。

「では、これからよろしくお願いしますね、ロロ」

皇女に頭を下げられて、明らかにロロは戸惑った。V・V・ともネージュともライとも違う。今まで会った誰とも当てはまらない存在を、自分の中でどう評価したらいいのか迷っていた。

「問題はマリーカだと思うけど……」

スザクが遠慮がちに口を挟む。マリーカの兄のキューエルが退役したのは、『蒼』との戦闘で負傷したためであった。つまり、やったのはライだ。

「……どうするかは、彼女次第だろう」

恨みたいなら恨めばよい。ただ、あれは戦争だった。黙って討たれてやるつもりなど、ない。

「……………」

机の陰でぎゅっと握りしめたカレンの拳を、ルーミアがそつと抑えた。顔を見つめると一つ頷いただけだったが、何を言いたいかは伝わった。やるなら私がやる、と。

「…それで、あなたたちはどうするの?」

もう一人、この場に同席していた人が重々しく口を開いた。生徒会長のミレイである。普段の飄々として何事もお祭り騒ぎにしてしまふような軽さは、今の彼女にはない。

彼女にも、すべてを伝えるべきだと考えた。どうせ九州戦が終わり、特区成立時の式典となれば素顔を晒さねばならなくなるだろう。少し早くなった、というだけだ。

「……」迷惑をおかけしました。ミレイさん」

頭を下げるしかない状況である。正体不明の記憶喪失者を受け入れてくれた上、義理の弟という立場までくれた。それに対し、自分は厄介事を持ち込んだだけだ。

講和成立でアッシュフォード家が法的な罪に問われることはないにしろ、白眼視されるのは確実だろう。祖父の悲願である貴族への復帰も、どうなることやら。

「別に爵位なんてどうでもいいって思ってたから、それはいいのよ。……あなたに、何としても護りたい人がいたってことは解るつもりだし」

ぱちんと、カレンに片目をつぶって見せた。受けた方は、赤面せざるを得ない。

それにミレイにとっては不都合ではないかもしれない。彼女には、貴族という立場に未練などない。見合いの話が来なくなれば、個人的には万々歳だ。

不安なのは学校経営が傾くことくらいだが、そうになったらそうなたで何とかなるだろう。日本に賠償を求める手もある。

「…あなたたちの主任との縁談話も、これで完全に立ち消えかもね」

伯爵家との見合いということ本人除くアッシュフォード家側は大乗り気だったのだが、「忙しくなったから」という理由で先延ばしさ

れていたのである。

祖父などは「決して断られたわけではない」とまだ諦めてない様子ながら、さすがにこうなると先方から断るに違いない。

「……………」

スザクは無言で通した。普通ならそうだろうとは思うのだが、その『普通』に当てはまらないのがロイドという男である。下手なことを言って、外れるのが怖い。

ウラノスの件に関しても、そうだ。九州戦後の返還が決まり喜びのは当然としても、「このまま正式に貸し出そう」とシユナイゼルに働きかけているという。データさえ取ればどこの所属でも構われないらしい。

相も変わらず、研究が第一、他はどうでもいいという人なのだ。そして問題がもう一つ。科学の常識を超えた存在ともなれば、これまた興味を引くだろう。

「だから、ネージュのことはロイドさんに教えない方がいいと思う。……絶対、『研究させて』って言ってくるから」

ネージュを護るように、カレンが抱きかかえた。解剖される、とても想像したのだろうか。聞いたところでは「生物学は専門じゃない」らしいが…。むしろ、医療関係が本業のラクシャータの方が危険かもしれない。

「……………何と言うか、『お母さん』そのものねえ」

それはともかく、ネージュを抱きかかえるカレンの姿を評したミレイの言葉がこれである。スザクやユファイも何と反応したらいいのか、曖昧な笑みを浮かべるだけだ。

慌ててカレンが身を離すが、一度固まったイメージを覆すこととはできそうもない。と言うより、当人たちが自然に上塗りを重ねるからどうしようもないのである。

さらに話が続く、最後にネージュが「ミレイにお願いがある」と言い出した。「え？」と言う表情をしたのはライとカレンである。そんなことなど、聞いてなかったからだ。

「ライたちがここを出て行くとしても、今日くらいはいいでしょ？私

も、ここに泊まるー」

「ふぎやー……!!!」

ネージユが、叫び声をあげた。それをカレンが「大人しくしなさい」と押さえつける。……何ということはない。シャンプーが、目に入っただけである。

「…もう、今までどうしていたのよ」

真っ白で長く、艶のある髪。同じ女性なら、垂涎ものだ。手入れも相当大変なはずなのだが、本人曰く「何もしていない」らしい。

「…だって、体を再構築すれば全部元通りなんだから」

そうだった。この子は人知を超えた存在なのだ。ついつい忘れてしまうことを、再確認したカレンであった。

本来なら、風呂も必要ない。それなのに「入るー」と言い出したのである。しかも、最初はライと一緒に入ろうとしたのを、カレンが一緒に入ることを条件に止めたのだ。

(本当に、甘えん坊なのよね)

永遠の生。これまで、どんな寂しさの中にいたのだろうか。せめて今くらいは甘えさせてやりたいと思う。50年や100年など、彼女にとっては須臾の間なのかもしれないとも。

「…ねえ、カレン。まだ許せない?」

不意に、ネージユが超越者らしい顔になった。こういう表情を見せた時の彼女に、何を、ととぼけるのは無意味だろう。

「…そうね。素直には喜べない、というところかしら」

講和成立後、ユーフェミアの補助を行う。その考えを、理性では理解できる。ブリタニアが裏切れば、すべてが元の木阿弥になる。それは誰の目にも明らかだ。

ならば、どうすればいいか。結論を言ってしまうえば、ブリタニアの征服主義を変えればいい。相手を利用するだけ利用して攻め滅ぼすような国から、覇権の盟主にふさわしい国に変えてしまうのだ。

「それで、真の『パックス・ブリタニカブリタニアの平和』が成る」

ユフィの覚悟を聞き、ライは新たな構想を立ち上げた。そしてユ

ファイもその考えに賛同した。戦いは、新たな局面に入ったのである。ただ、どんな理由があろうとも、『ブリタニアに手を貸す』ということに変わりはない。

「……正直言うかね、私は講和という方針自体乗り気じゃなかった。必要だって、頭では理解できるわよ。でも、いざ現実になってみたら、心の方が駄目だったの」

それに気付いたのは、ライが「ブリタニアも祖国」と言った時だ。自分には、そんな考え方はできない。

『ブリタニアを滅ぼす』という、絵空事を言っていたころは良かった。現実を認識せず自分の殻に閉じこもり、調子のいいことを言っていただけで済んだ。

それを変えたのは、間違いなくライだ。現実を直視しろ。扇グルーポのメンバーに対し、彼がまず言ったのがそれだった。

それから、カレンとて自分なりに成長したという思いはある。以前の自分が目の前にいたら、その甘ったれた考えを殴り飛ばしてやりたいと思うだろう。

それでも、心の底では『ブリタニア』という国を認めていない。許していない。

「……講和が成れば、私たちは日本で暮らすと想っていた。ライは皇家の血族として重要な役職に就き、みんなその下で働く。……今までが、続くものだと思ってた」

ブリタニアとは直接の関係を持たず、日本人として生きていける。それなら講和も悪いことではない、と考え、自分を納得させていたところがある。

「……………どうしたらいいと思う、ネージュ？」

これから先、彼についていくことはできるのだろうか。ネージュに對して、初めて漏らした弱音だった。

「…私に答えを求められてもね。それは、あなたの問題なんだから」

Stage 63 キュウシユウ戦役

「援軍第一陣が『天叢雲』以下35機、第二陣が総督率いる150機、となっておりませう」

無然とした表情で、ダールトンは報告を聞いていた。ナイトメアの数だけなら、現状と合わせて500機ほど。北九州に展開する中華連邦軍を叩き帰すには、十分な戦力と言っている。

（しかし、『蒼』を先鋒として使えという命令とは…）

政治的な配慮であり必要性も理解できる。ただ、軍務に持ち込んでほしくないのだ。おそらくコーネリアも同じ思いだろうから、命令元はシユナイゼルか。

さらには、ユファイからも「使い捨てにしたりすればブリタニアの沽券に関わる」と言われていた。助けないわけにもいかなかった。

それにしても、と挨拶に来た人物を見て思う。本当に目の前のこの少年が、自分たちを翻弄していたのだろうか。ついそう思ってしまうほど、外見は戦場に似つかわしくない。

「……ふーん。君が『蒼』だったんだ。只者じゃないとは思ってたけど」

マーガレットは納得するところがあるらしい。その理由を聞いてみて、ダールトンも思い出した。ホテルジャックの際、解放戦線の兵士を斬り殺した少年。あの男か。

「できれば、第二陣の到着前に片を付けたい」

平然と、そう言われた。先鋒で使われることは解っているだろう。800機と推定される敵の中に突っ込むのだ。包囲されれば、袋叩きである。

（…『ウラノス』で、100機も倒せばいいと思ってるのか）

ハコネ基地を陥落させた時の戦闘データを見れば、そのくらいはできるだろう。数十機のサザーランド部隊が、あつという間に壊滅した。ほぼ、『ウラノス』一機に負けたような戦いだっただ。

しかし、そんな馬鹿な自信で作戦を考えられてはたまったものではない。

ただ、早いうちに片づけたいというのは、ダールトンも同じである。嫌な報告が上がってきていた。江南軍管区の軍が、独断で動こうとしているのだ。洛陽のやり方に、愛想が尽きたらしい。

「中華連邦とは、まだ本格的に事を構えたくない」

ブリタニア内での共通認識である。今回の講和でエリアー11が落ち着けば、その時こそ正面对決となるだろう。いや、EUを片づけてからか。

大宦官はその程度のことを読めず、ただ現状の安楽を求めているだけだ。奴らのことであるから、不利になれば国の代表である天子にすべての責任をおつ被せ、自分たちは降伏すればいいとでも考えているのだろうか。

まあ、それもその時になってからの話だ。今の情勢とは、関係がない。

「大丈夫ですよ。ライが負けるなんて、想像できませんから」

本当にこの人は何なんだ、とロロは思う。その根拠のない自信は、一体どこから生まれてくるのか。このふわふわした感覚を受け入れられる日は、果たしてくるのだろうか。

つい先日まで戦争をしていたブリタニアと日本が、手を組んで作戦などできるはずがない。ロロの懸念はそこにある。ユフィの訓戒も、どこまで効き目があるか疑わしいものだ。

「特派所有の戦力をキュウシュウに向けるよう、コーネリア総督なりシュナイゼル殿下に要請してみてはいかがでしょうか？」

ラヴェインのフロートユニットも修復された。租界にランスロット、ベデイヴィエール、ラヴェインを配置するのは、騎士団に対する防衛としては過剰だろう。

そう思っ提案してみたのだが、ユフィは何の不安も感じてないししか思えない。

「……………」

軽い目眩を感じ、席に着く。改めて、今の境遇を考えてみた。ギアスを失い、暗殺はライとネージユに禁止された。ここでは明確な命令

をくれる人もいない。以前の自分が持っていたものを、すべて失った。

(でも、僕は生きている―)

ロロにとつて、驚きなのはまずそれなのである。生体機能を持つだけの、人殺しの道具に過ぎなかった自分にも、他にできることがあったのだ。

「……大丈夫ですか、ロロさん」

騎士である、スザクもユフィと似たようなものだ。唯一、話を通じるのはこの少女だけだと言っている。

「とにかく、二人で殿下を支えよう」

話し合った結果、ロロとマリーカの間で達した結論である。上の二人が頼りない以上、自分たちで何とかするしかない。

そうなる、ロロの心境にまた違った変化が生まれてきた。自分で考え、自分から行動する。命令を待っていたら、何もやることがない。今までは全てトップダウン式だったが、ここではボトムアップ式だ。

そして、マリーカの存在も大きかった。初めて、横の繋がりというものを意識したのである。

一方で、マリーカの方も大変だっただろう。

「今後は『蒼』と協力し、事に当たる」

そう言われて、彼女が大反対したのは言うまでもない。納得させる方法はただ一つ、『蒼』の正体を教える以外になかった。

『王』やギアスのことは省いたが、それを抜きにしても衝撃だったことは間違いない。一晩部屋に籠り、翌日の昼近くになって泣き腫らした目まで出てきた。

「申し訳ありませんでした。兄のことは戦場で起きたことですから……」

戦争であれば、仕方のないこと。一晩かけて、自分自身にそう言い聞かせたのだろう。それからは、以前と変わった様子はなかった。ただ、隠していた写真立ては、空になっていた。

救いだっただのは、兄のキューエルが生きていたということだ。そうでなければ、彼女の葛藤はもつと大きいものになったはずだ。

(……しかし、割り切ろうとして無理をしなくてもいいのですが) 肉親を傷つけられて、そんな簡単に割り切れるはずないのである。コーネリアに何かあった場合に置き換えてみれば、容易に想像はつく。

とは言っても、想像は想像である。共感はできても、実感したわけではない。今ユフィたちが何か言っても、彼女の心までは届かない。機を見て、何かしてやれることを探すしかない。

ユフィが懸念するのは、その点だけだ。キュウシユウ戦線など、不安は微塵もない。

35機の突進。その先頭に立つのは、当然のごとく『紅蓮』である。「敵の防衛線を一点突破し、フクオカ基地まで一瀉千里で走る」

それで勝てる、とライは宣言した。仮にダールトンが全く動かなくても、である。

「35対800、と見るから隙が見えなくなる。35機で、フクオカ基地の150程度を打ち破ればいい」

戦力の質は圧倒的にこちらが上なのだ。ウラノス、紅蓮、雪花らワンオフ機は言うに及ばず、量産型も月下はもちろん無頼改でも鋼體より上回る性能を持っている。

鋼體の売りは保有火力に対する生産性の高さ、つまりコストパフォーマンスが良いということであって、大量配備は『質より量』という考えの現れなのだ。

それゆえ、35対150というのは、決して無謀な数字ではない。「邪魔しないで！」

カレンの操縦は、いつもの鋭さと変わりない。ブリタニアに味方すると言っても、今回は制圧した北九州の地が日本領となるのだ。国土を取り返す戦いとなれば、彼女にも納得できる。

……ただ、そう思っている時点で「気負いすぎ」なのである。カレンが「いつもの鋭さ」で紅蓮を駆れば、当然部下が追い付けない。

「!？」

警告音が鳴り響く。誘導ミサイルだ。わずかに突出したところを、

狙われた。

だがそのミサイルと発射した敵は、はるか遠くからの砲撃によって爆散した。

『……………まったく、割り切ろうとして無理しすぎなのですよ』

プライベートチャンネルで通信が入る。2秒ほど躊躇った後、カレンはその相手に礼を言った。どういたしましてとそっけなく返されたが、いい加減長い付き合いになってきたカレンには彼女の機嫌の良さがわかる。

「……………気に入ってるようね、その『アルテミス』」

遠隔狙撃特化型。ルーミリア専用機として作られたのが『アルテミス』である。租界戦で乗機を失い、専用機のはずだった『朧月夜』を奪われた彼女にしてみれば、ようやく念願叶ったというところだろう。

しかし、問題は名前前で解る通り、これは特派製作の機体なのである。ウラノス関係で入り浸っていたライに付いて行きながら、ちゃっかり自分用の機体を作成してもらっていた。

その射撃の正確性は、驚嘆するしかない。指揮官級の敵から、誤らず撃ち抜いていく。35機の突進が遮られない大きな理由の一つは、戦う前から敵の指揮系統が破壊されていることにある。

(本当に、ルーミリア向きの機体だわ)

敵の射程外から、一方的に撃ち抜く。それだけでもえげつないが、それ以上なのは彼女の行動予測の正確性なのである。

弾丸というのは、どんなに正確に狙っても真つ直ぐ飛ばない。風、重力など、人にはどうすることもできないさまざまな影響を受ける。それらは機械が補正してくれるものの、一つだけどうやっても機械にはできないことがある。目標が、着弾までにどう動くか、だ。

その予測について、ルーミリアに勝るものがあるとするればライだけだろう。

アルテミスが崩し、紅蓮が抉り、ウラノスが粉碎した敵を、部下のナイトメアが掃討する。中華連邦の防衛線は、あつという間に崩壊した。あとは、フクオカ基地まで奔るだけである。

「何がどうなっている!？」

何故、たった35機の部隊に窮地に追い込まれているのか。澤崎には、全く理解できない。しかもその指揮を執っているのが『蒼』だという。

黒の騎士団が大敗し、ただでさえ澤崎の立場は微妙なことになっている。慌ててキョウトと連絡を取ろうとしたが、通信は途絶していた。

「……………騙された」

中華連邦軍を動かし、ゼロとともに日本を解放せよ。キョウトからそう指示を受け、勇躍したものだ。だが、その目論見は潰え、キョウトは『蒼』と手を組んだ。そして自分は邪魔者として、見捨てられたのだ。

こうなれば、戦うしかないだろう。一縷の望みを託し隣にいる曹將軍を見やるが、悲痛な表情を発見しただけだった。

「……………」

やられた、という思いがある。35機という少数が、判断を遅らせた。後にダールトンの300機が控えている。追えば、本隊に背中を見せることになる。そこに追撃を受ければ、全軍が崩壊する。

部下たちは、まさにその罠にかかった。迷う間に、敵の姿は消えていた。35機を相手にしているようで、実際は335機を相手にしているのである。

「……………占領地を放棄する」

曹將軍の言葉に参謀たちは戸惑い、澤崎は血の気を失った。まだ、負けたわけではない。いや、数の上では圧倒的なのだ。質で劣るとはいえ、勝ち目が無いわけではないだろう。

「負けてからでは遅い。今なら、遼東に戻り再起できる」

再起、というのは、再び日本に攻め込むという意味ではない。ここで敗北した場合、命運は二つしかない。戦で敗死するか、洛陽の命で刑死するかである。

大宦官は、間違いなく自分を犠牲の羊に立てるだろう。そんな命令に従う気など、あるはずない。拒むとなれば、軍事力を背景に脅すし

かない。であれば、ここで戦力を失うわけにはいかないのである。

そもそも、曹將軍に自分の命運を賭けて日本のために戦わねばならぬ義務など、どこにあるか。今回、よしんば勝ったところで傷が深ければ、その後を勝ち抜くことなどできないだろう。

慌ただしく、撤退の準備が始まった。積めるだけの荷物を積み、溢れたものは処分する。

(得たものは、ブリタニアでも名将の名が高いダールトン將軍を苦しめたという名誉だけか)

損失に対し、あまりにも小さい。もう少し早く撤退を決めていればよかった。『蒼』やコーネリアにも一泡吹かせてやると気負ったところが、無いわけではなかった。それがまずかった。

「一つ、やっておかねばならぬことがある」

澤崎はもはや置物と化していた。茫然自失とは、このような状態を言うのだろう。銃口を向けられて、ようやく反応を見せた。曹將軍の一步ごとに、澤崎が一步後ずさる。

「貴様との好誼も、ここまでだ。貴様の口車に乗った愚かな將軍という不名誉は、甘受するしかあるまい」

大宦官が澤崎と自分に全ての責任をかぶせるつもりなら、自分は澤崎と大宦官に全ての責任を押し付けるだけである。

「ままままま、待ってくれ。……死にたくない。私はまだ、死にたくない。……そうだ、『蒼』をこちらに引き込めばいい。その説得ができるのは、私しかないだろう？」

蒼白な顔で命乞いする澤崎を、曹將軍は無慈悲に撃ち殺した。怒りや怨みというより、馬鹿馬鹿しいという思いの方が先に立つ。

『蒼』に通信を繋げ。我らは撤退する。賠償は、洛陽に請求するよう
に」

「成程、曹將軍は良器だ」

発端は澤崎であり、最終的な決定は大宦官によるもの。無論、これが曹將軍の言い訳にすぎないことなのは百も承知ながら、ライは部隊を停止させた。衛星基地の一つを奪い、そこに拠る。

「ねえ、これが嘘ってことはないの？」

カレンの疑念に、「それはない」とあつさり答えた。前線の部隊が戻るまでの時間稼ぎなら、フクオカ基地を捨てることはない。ところが、そこから撤退が開始されているのだ。

つまり、曹將軍は次の敵を見据えている。その敵とは日本でもブリタニアでもなく、大宦官である。

(大宦官の器量では、使いこなせまい)

大宦官が曹將軍を全力で庇うという可能性は、億万に一つだろう。であれば彼の生き残る道は、内乱を起こすしかなくなった。大宦官が簡単に折れればいいが、そうでなければ大乱になる。

遼東軍管区を独立国とし、大宦官と戦う。結末がどうなるにしろ、終結までにはかなりの時間がかかる。そしてそれは、日本の講和派とブリタニアにとって悪いことではない。

それが、曹將軍の計算である。ここで自分を討ち果たすより、見逃しておく方が得になるぞ。言外に、そう言ってきたのだ。

悠然と、去りゆく中華連邦軍を見守る。空いたところは、即座にダールトンの部隊が埋めていく。とはいえ苦虫を噛み潰したような表情をしていることだろう。上手く利用されたという思いは、消えなはずだ。

詰まるところを言えば、今回はワンオフ機の性能に任せた力攻めに過ぎない。戦術などあつて無いようなものだ。異端のやり方であり、軍人として優秀であるほど『考えたくない』方法となる。

そこに、曹將軍もダールトンも引つかかった。

ともあれ、これで日本は拠つて立つ土地を手に入れたことになる。フクオカ基地も、このまま軍事要塞として使える。ブリタニアの目算

も狂わせる、完勝と言っていいだろう。

「……これで、『蒼』の役割も終わりか」

予定より、はるかに短い道となった。その一因がゼロであることは間違いない。あの男が場をかき回してくれたおかげで、ブリタニアも譲歩せざる状況まで追い込まれたのだ。

ただ、これから先は、逆に彼の存在が邪魔になる。しかしいきなり討ち果たすわけにもいかない相手だ。故に、まずは足元を切り崩すところから始めるべきだろう。

すでにその手は、神楽耶が打っている。

「……………『蒼』が、フクオカ基地を奪取したそうだ」

藤堂は腕を組み、目を閉じながら朝比奈、仙波、千葉にそう告げ、黙り込んだ。まるで、瞑想しているかのようである。

そうこうしているうちに、エリアー1全土に向けて副総督ユーフェミアからの公式発表が行われた。

特区構想とその場所が北九州となることは、すでに公表されている。それに賛同した『蒼』がブリタニア軍と共同で中華連邦軍に当たったということが、今回発表された。

そしてその布告の最後はこう結ばれていた。「『蒼』に続く者が、現れてほしい」と。

「藤堂には、日本軍の総司令官職に就いてもらいたいです」

ユーフェミアとの間で、話がついていたのだろう。神楽耶の意向が伝えられた時、藤堂はまずそう思った。

『蒼』ではないのか、と思ったが、彼には日本に留まるつもりがないらしい。となれば、能力で考えてまず自分の名が挙がるのは納得できる話である。

「いい話だと思いますけどねえ」

朝比奈などは、冗談めいた口調でそう言う。評価されたのは嬉しいことだが、この誘いには裏の意図が隠されている。

「片瀬少将はいまだゼロとの協調関係を崩していない。キョウトは、その片瀬少将を見限ったということだ。それは、解放戦線と黒の騎士

団を見限ったということでもある」

そうでなければ藤堂に名指しで話が来るわけがない。新生日本軍は規模に制限がかけられる以上、指揮官も兵も質を高めるのは当然の方針だ。

つまりキョウトは藤堂を引き抜くと同時に、解放戦線内の優良分子にも誘いをかけている。心が揺れる者は多いだろう。

「…それで、どうします?」

キョウトの援助はなくなり、残るのは説得に応じない強硬派か悪質な部隊のみとなったりしたら、もはや戦争をする以前の問題だ。千葉としては、そんなところで藤堂に腐ってほしくない。

と同時に、それでも片瀬を見捨てられない藤堂の義理堅さに魅かれていた。

「……………」

案の定、藤堂は無言を通してしている。それを見た仙波が、話を変えた。取り出したのは日本酒の一升瓶である。

「秘蔵の一本がありましたな。まあ、祝いにしても気晴らしにしても、今日くらいは」

「…………で、どうするんだ、ルルーシユ?」

C・C・がにやりと笑う。相変わらずこの女は、ライの活躍と自分の苦難を楽しんでいるように思える。しかし、そのくせ裏切るそぶりは見せない。

「もう日本での活動は諦めたらどうだ?元々、お前にはこの国に執着する理由は薄いだらう。となると、次は中華連邦かEUか…」

まるで、自分も付いて行くのが当たり前のような口調である。何故この女は自分を見捨ててあの男の元に行かないのか。いくら頭を悩まして、答えが出たことはない。

(…まあいい。問題は、他だ)

C・C・については、もう放っておこう。それより考えねばならぬのは、放っておけば離反者が大量に出るであろうということである。防ぐには、どうしたらよいか。

「藤堂さえ抑えておけば、良い」

藤堂が残るなら、出て行くことを躊躇う者も増える。そして彼を説得するのはそう難しいことではない。基本的に軍人なのだ。上官の主張が、理の通ったものであれば納得する。

特区政策がこの先どう転ぶかは未知数だ。ブリタニアの譲歩も限度があるだろう。再び戦争になる可能性は大いにある。特区不参加、戦力の現状維持は必須だと頷かせるには、十分な説得力となるはずだ。

あとは新たな糧道をしっかりと確保すれば、当座はしのげる。その間に情勢が変化すれば、回天の機はある。

「よし、片瀬に連絡だ。今後のことを話し合わねばならないのも、当然だしな」

ところが、いつまで経っても藤堂と四聖剣は姿を見せなかった。

「……………むっ？」

状況を整理してみよう。確か、皆と話し合っていたはずだ。そのうち仙波が酒を持ち出してきた。一杯くらいはいいかと思つて飲み干したところ、耐え難い睡魔に襲われた。

そして今は、移動するヘリの中である。

「……………」

仙波を見据える。黙って頭を下げられた。千葉は視線を逸らし、朝比奈は「あ…、お目覚めですか」とひきつった声で言う。それで、大體理解できた。

体勢を整え、どつかりとシートに腰を下ろす。無言、腕組み、目を閉じた不機嫌な表情ながら、そうすることでほっと一息ついた音が聞こえた。

「……………」

嵌められた、というのは快いものではない。しかも誰よりも信頼していたこの3人に、である。しかしそれが、誰よりも自分のためを考えての行動だというのは理解できる。それゆえ、無言で通した。

ヘリの向かった先は富士山。キョウトの本部である。

「……皆を恨まないでください。発案は、私なのですから」

藤堂は依然として無言。あたふたしながら、神楽耶が弁明を続ける。説得が不調の場合、とりあえず一服盛って攫ってしまえという、馬鹿馬鹿しいほど単純な手であった。

これがもう少し込み入った手で片瀬やゼロとの離間を図るというのなら対処もできたが、ここまでシンプルにやられるとどうしようもない。嵌められた本人でなければ、笑い話にしかできないところだ。さて、問題は、これからどうするか、である。

解放戦線に戻るというのは、最後まで筋を通したい藤堂にとってはまあいいだろう。だが四聖剣ですらこの状況では、一般兵の感情は推して知るべしである。

「少し、考えさせてもらってよいでしょうか」

そう言つて、外に出た。一つ確かなことは、とりあえず道場でも開いて静かに暮らしたいという夢はまだまだお預け、ということである。他が、放っておいてくれない。

「藤堂さん」

かけられた声は、四聖剣のものではなかった。解放戦線の兵士たちが10人ばかり、後ろに並んでいたのである。三人が藤堂を運び出す姿に気づき、止めるどころか「俺も」「なら俺も」と我先に逃げ出してきたという。

「片瀬少将たちのことを考えるばかりでなく、俺たちのことも考えてください」

解放戦線は、日本のために戦う組織だったはずだ。ゼロのために戦う組織では、決してない。片瀬がゼロに追従するのを、快く思わなかった者は多い。

無論、誰もが思っている。自分たちの手で敵を駆逐し、日本の全てを取り戻したい、と。そのためならゼロと手を組むことだって良しとした。

だがそれは、現状を見ればもはやかなわぬ夢である。

「……解放戦線はもう終わりです。このままだと討伐されるのを待つだけか外国に逃亡するか……」

しかも、討伐となれば特区の日本軍も動員されるだろう。敵からテロリストと呼ばれ、敵を裏切り者と呼んで、日本人相手に殺し合う。少し良識があれば、そんな救いようのない戦争を行いたい奴などいない。

「もう俺たちは、『蒼』の構想に乗るしかなかったんですよ。藤堂さんが乗るとなれば、解放戦線の奴らはみんな付いて行きます」

「あの藤堂が見捨てた」となれば、気後れすることなく出奔してくるであろう。皆を救うために、どうか節を曲げてほしい。そう言われて、藤堂は内心で自嘲した。

(……どうやら自分は、大きくなりすぎたようだ)

奇跡と言われた『巖島の戦い』の勝利。それは軍人としては大成功だったが、藤堂鏡志朗という個人としては大失敗だったのかもしれない。

もはやこの身は、自分の責任だけを背負えばいいものではなくなっていた。

——藤堂鏡志朗、特区日本に参加。それをユーフェミアは、盛大に歓迎した。

「で、どうするんだ、ルルーシュ？」

相も変わらず、C・C。がにやりと意地の悪い笑みを浮かべながら言う。状況はさらに悪化し、それと逆に比例するようにC・C。の機嫌は良い。

しかし、どうするんだと問われても、正直言っただろうしようもない。「藤堂までもが見捨てたお前に付いて行こうなんて奇特な奴は、そうそういないぞ。だから言った通り、これ以上ぼろを出す前にこの国での活動は諦めてだな……」

C・C。が言っていることはもつともである。だがそれを、認めるのが辛い。

そもそも、自分はどこで間違えたのか。記憶をたどっていくと、シンジユク事変まで遡る。あの時、傍観するのではなく自分が主導権を握っていたら、展開は大きく違うものになったはずだ。

「今や、旭日隊の3人すら揺れている始末だ。口先だけでは、もうどうにもならんところまで来ているということだな」

かといって実績を示そうにも、そのための実力はすでにない。今下手に動けば、テロリスト扱いされて掃討されるだけだ。

中華連邦も、当てにはできない。帰国した曹將軍と大宦官の対立は抜き差しならぬところまで来ていた。そのうち内乱が起こる気配が濃厚である。

「そもそも、だ。特区政策はお前の愛する妹が主体となって進めている政策だろう。なら、兄として力になってやろうとは考えないのか？」

ユフィはともかくブリタニアの大部分の考えは、エリア11の安定化のために特区を認めたのである。「蒼」、藤堂に続き、ルルーシュが日本での抵抗を止めてしまえば、短期的には大成功と言っていいたいだろう。

ちなみに特区についての現状を述べると、ユフィに次いで熱心なのはコーネリアという意外な事実がある。甚だ不本意で始まった政策

とはいえ、そう決まった以上全力を尽くすというのはいかにも彼女らしい。

しかもそれが、最愛の妹が肝入りで進めている政策となればなおのことだ。ブリタニア内での対立から崩れる、という展開も期待が薄い。

(だが、まだ手はある)

崩れないなら、崩せばいいのである。まだ、ルルーシユは諦めたわけではなかった。

「……………お前が護りたかったのは、日本という国だったということか」

エリアー1、政庁。敵の本拠地に呼び出されたというのに、物怖じする様子はどこにもない。もつとも現状、この少年は殺すより活かす方がメリツトが大きい。それが計算できる相手だと、しっかり見抜かれていた。

「……………僕はハーフですから」

質問に対しては、少し違うと答えられた。ブリタニアと、日本。どちらか一つでなく、二つの祖国が共存共栄してほしい。それが望みだと言うのだ。

「……………善処するだけはしてみよう」

コーネリアには、ハーフの考えは解らない。頭で理解することはできても、そう求める心の機微は決して体験できない。生まれ落ちた時点で決まっていることなのだから、どうしようもないことである。

とりあえず、エリアー1内の反抗勢力が特区で大人しくしてくれるなら、それは認める。ここまで来てしまった以上、彼女もそこまでは譲歩していた。

「ただ、藤堂が司令官というのがどうにも気に入らん」

彼の軍才を恐れて、というわけではない。全力でぶつかっても勝てるかわからない相手というのは確かだが、それは戦略的条件が同じであればの話である。

今度の場合、日本は北九州という国土を得た。制限された戦力で、

その防衛をまず考えなくてはならない。その上であれば、勝つ手段などいくらでも思いつく。

つまりコーネリアが「気に入らない」理由は、「何故お前が表舞台に立たない」ということである。

「日本軍を纏められるのは、彼しかいないでしょう?」

ライは少し答えをはぐらかした。200年前の亡霊に過ぎない自分は、裏方でいい。その思いを、コーネリアにも理解してもらおうのは面倒だ。

と言うのも、隣の人を説得するのに散々苦労したからである。

『蒼』はわたくしの客分として、政庁に勤めていただくことにしました。日本のことも判る人が、今後は必要となるでしょうから」

当初は、「二人目の騎士としましょう」だった。そうすれば、部下たちも親衛隊として正規の立場に組み込める。そう主張するユフィを「客分」で納得させるのに、骨を折った。

「……………」

コーネリアは明らかに不満げである。ただし反対だと口にするとはなかった。特区で自由にさせるより、政庁で監視できる方が安全だと思える。次は本当にフジ鉱山を爆破するかもしれない男なのだ。

しかし、そうすればそうしたで、今度は妹を取り込んで何かしでかすのではないか、という疑念がもたげてくる。もはや、遅すぎる懸念かもしれないが。

「…………まあ、貴様との対立は避けよというのが陛下のご意向だ。であれば、それも認めぬわけにはいくまい」

ふう、と大きく息をついた。どうにも最近、周囲に妥協せざるを得ない羽目になる。見えない糸にからめとられている気分だ。

「…………それと、アッシュフォードやシュタットフェルト、シエルトなどお前に関わった家は全てお咎めなしと陛下は明言された」

破格の厚遇と言っていいだろう。いくらフジ鉱山が大事とはいえ、ブリタニアに弓を引いた罪を許すというのである。皇家など、日本側も同じく一切の処罰なし。

コーネリアにすれば、ここまでするのは妥協のし過ぎだ。ご機嫌取

りと言っている。何か弱みでも握られているのではないかと勘繰りたくなってくる。

(……まさか、隠し子などということはあるまいな)

疑えないことはない。だが、さすがに邪推のし過ぎだろうとすぐに考えを捨てた。何しろ疑う相手が父親なのだ。そんな真似はしない人だと、信じたい。

それに20年位前の記録を調べても、シャルルと日本に接点はほとんどない。丁度、『血の紋章事件』の混乱でブリタニアを離れられなかった頃だ。その上、マリアンヌ皇妃がいつも一緒だった記憶がある。

では一体何がブリタニア皇帝を気後れさせているのか。それは、コーネリアには全く分からなかった。

「よう」

コーネリアの執務室を出ると、声をかけられた。相手は、わざわざ話し終わるのを待っていたらしい。そして目的の相手は、コーネリアではなく自分だった。

「ずいぶんお待たせしたようですね、エニアグラム卿」

どこことなく、ユーインの面影を感じさせる。それゆえ、記憶が戻ってからにはあからさまにならないように避けていた。

「……ふん。こうでもしないと、上手くスルーされるからな」

……つもりだったが、完全に見透かされていたようだ。

「用事は二つだ。……まずはこの間ベディヴィエールを中破させてくれた、あの龍のような機体について」

コーネリアにもとことん詰問されたことである。が、答えようがない。ネージユの仕業というのは確かとしても、詳細は教えてもらっていないのだ。

「……こちらが保有する戦力は、すでに提示済みのはずですか?」

というわけで、そう答えるしかない。しかし、当たり前だが納得されるはずがない。究極の切り札として、隠していると考えるのが普通だ。……事実、まるきり外れというわけでもないのだが。

「……言いたくない、か。まあ当然の反応だな」

『その気になれば3日でブリタニアなど滅ぼせる』と豪語するネージユの存在は、ある意味最高の抑止力だ。どう足掻こうが勝ち目のない化物が敵にいるという恐怖は、そう簡単に越せるものではない。

「こちらも、聞けるとは思っていない。それに本命はこっちだ。さあ行くぞ」

それだけ言い、ライの腕をがっしりつかんで拉致していく。引きずられて着いた先は、鍛練場であった。

「……」

何をする気か、と戸惑うライに、ノネットは無造作に日本刀を渡す。もちろん真剣ではなく訓練用の模擬刀である。

「二度、立ち会ってみただけさ。……本気で来いよ」

自身もすつと模擬刀を構える。その構えを見て、ライも気が乗った。ユーインが得意とした構えに、ふつと口元が緩む。

こうして、何度立ち合ったことか。『王』という立場も忘れて付き合いえた、莫逆の友だった。リカルドから叙爵され新大陸に領地を与えられた際も弟に任せて、自身はずつと傍にいてくれた。

過去を思い出させるノネットの剣は、だがユーインには及ばない。彼の真似をしていた、弟の剣だ。

「……」

五合もせず、ライの刀は喉元に突き立てられていた。ユーインなら、この隙はない。驚愕が一段落した後、ノネットの全身から冷汗が噴き出す。

「……では、失礼します」

刀を引き、鞘に納める。心のどこかが冷めた。都合のいい妄想としても、どこかで期待していたのだ。ルーミアとエリスの関係と同じことが起きていないか、と。

学園に戻り表面上こそ取り繕っていたが、どこかに虚しさがある。新たに得たものも多いが、失った物も大きい。それを、改めて実感してしまった。

「……………僕はもう、『王』じゃない」

自分に言い聞かせるように呟き、準備を始める。行政特区設立の調印式は明日だ。ユファイが復興させたシンジユクが、会場になる。

皇帝に動く気配はない。シユナイゼルは本当に無関心らしい。コーネリアは決められたことは守る人だ。ブリタニア側から、邪魔が入るといふ可能性は低い。

となると、問題はただ一人――。

「……………どうぞぞ」

思考を遮るように、ノックの音が響く。誰かと思えばルルーシュであった。そういえば、同じ建物で暮らしているというのに、私室を訪れたことも訪れられたこともない。

「……………いや、大した話ではないんだが」

そう前置きして切り出したのは、ネージユのことである。学園から出て行くことも考えたライたちだったが、ユファイに引き留められてそのままになった。

ライたちに見れば嬉しいことではあるのだが、同居人が一人増えた。ネージユも住み着いてしまったのである。

「生徒会の副会長としても、しっかり把握しておきたい。……………その、お前たちの子供ではないか、という噂が立っている」

「……………」

もう諦めた方がいいのだろうか。一つは、ネージユの力による。

「私がここにいても不思議に思われない」というギアスが常時展開されているらしい。人が勝手に、都合のいい解釈をしてしまうのだと。

とりあえず、実子ではないことは明言できる。孤児であつて、懐かれてしまったので親代わりに保護している。このくらいなら、無難なところだろう。

「……………まあそうだな。年恰好から考えても妥当な話だ。経済的な問題さえクリアされているなら、ここに住んだとて文句を言うつもりはない。あとはお前たちが、しっかり面倒を見ることだ」

それは改めて言われるまでもない。と言うより、甘やかしすぎの心配をするべきかもしれない。今もカレンと一緒に風呂に入っていた。

「誰かと一緒にお風呂」というのが、すっかり気に入ったらしい。

「それなら都合がいい。……お前のことは、大体聞いた。何故、記憶もないのに『日本』という国のために戦うことにしたんだ？」

何故か。改めて考えてみると、成り行きでそうなったとしか言えない。カレンに誘われ、なんとなく力を貸すことにした。その結果行きついたのが、『蒼』という立場だ。

「……おそらく、この一点だけは記憶より深いところに染みついていたんだろう。僕はリカルドが嫌いだ」

しかし、ブリタニアという国自体は嫌ってない。むしろ愛着があるから、逆にろくでもない国にしたりリカルドが許せない。そういう公憤は、確かにあった。

「それで、貴様はユフィを傀儡にしてブリタニアを思うままに変えよう、と考えていると？」

ルルーシユの声音が冷えた。しかしそれに対し、ライは失笑で返す。なぜなら、ユフィの器は、自分が及ぶものではないからだ。

「……もう少し妹を信じてやったらどうなんだ、ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア」

「……………」

わからない、とでも思っていたのだろうか。ユフィの態度やマリアンヌ皇妃と繋がりのあるアッシュフォード家のことを考えれば、少し頭を巡らせるだけでたやすく正解にたどり着く。

「……まあいい。とにかく、ユフィをないがしろにするようなことがあれば許さん、それは明言しておく。それで、具体的にどうするか考えがあるのだろうか？」

『バックス・ブリタニカブリタニアの平和』構想を、ルルーシユは真剣に、だが懐疑的に聞いていた。ただ、否定はしなかった。指摘はしたが、難癖をつけたわけではない。

しかし、世界のためと考えれば、それが最善だと信じている。滅ぼす方が、はるかに簡単だ。だがその先の混沌を考えれば、ブリタニアの力は生かすべきなのである。

「……そろそろ風呂から上がってくるだろう。ありがとう、邪魔した

な」

『大した話ではない』つもりが、世界の行く末になってしまった。このまま続けると長い議論になりそうな気配を感じたのか、ルルーシュが話を切り上げる。

「……………お前とは、もう少し早く話をするべきだったのかもしれない」

最後にそう呟き、去った。

「ふーん、ルルーシユが、ね…」

先ほどルルーシユが訪れて来たという話をすると、ネージュの眼光が超越者の鋭いもの変わった。が、それも一瞬のこと。すぐに気持ちよさそうな、柔和なものに変わる。

ドライヤーで、ライに髪を乾かしてもらっていた。長いから、かなりの手間である。が、粗雑に扱われたことはない。ライの方も、この表情を見ているとその手間も悪いことではないと思えるようだ。

ちなみに、ルルーシユとの話で経済的なことについて言われたが、ネージュという子は手間はかかるが金はかからない。彼女が飢えているのは『愛情』であって『物品』ではないからだ。

ライに髪を乾かしてもらい、カレンが淹れてきたココアを飲む。「ちゃんと歯を磨くのよ」という言いつけを遵守し、ベッドに潜り込む。

事あるごとに『再構築』で済ませていた手間を、ネージュも無駄だと思わなくなっていた。

しかし、布団にくるまって眠りに落ちるというのは、まだ慣れない。ネージュにしてみれば睡眠は暇つぶしだった。機能を停止し、時間の経過を待つだけのものだ。

これも、再構築をしないことよって生じる手間だった。それについては、構わない。不満があるとすれば、一人で寝ることになってしまったことだ。

「弟や妹のためと思えば仕方ないんだけど…あの調子じゃ、一体いつになるのかしら？」

いい加減、ベッドを共にするくらいのごとはしたらどうなのだろうか。三人でならすんなり行きそうだが、そうすると真ん中に自分が入る。それはそれで嬉しいが、意図とは違う。

(ちちゃんと結婚まで漕ぎ着ければ、違うのかな?)

とりあえず、そこまで漕ぎ着けてもらうためには、明日を何としても乗り越えてもらわねばならない。

「……………」

前の世界を決定づける分岐となった舞台である。今度もまた、ルーシユは何かするつもりだろう。その目論見を叩き潰すのであれば、今してきてもいいのだが…。

「……まあいいわ。私には、やりたいことがあるし。…そのくらい、乗り越えてもらわないと面白くないし、ね」

世界を俯瞰してみれば、この時期、ブリタニアの軍事行動は停滞していた。

「エリアー1の情勢は未知数であり、しばらく他地域での大規模な作戦行動は控えるべきである」

そう皇帝の意向が伝えられ、植民エリアの数はコーネリアがエリア11着任前に制覇した18で停止した。各地の軍はその18の植民エリアを保持するための、守勢に入っている。

同時に、EU戦線も停止した。ユーロ・ブリタニアも、渋々呑んだ。呑まざるを得なかった。寄って立つ地のない、占領地を確保しているに過ぎない彼らは、ブリタニアからの補給無くしては戦えない。

特に、ナイトメアの補充が滞っているのが大きな要因だった。エリア11での損害が、こんなところにも出ていたのである。

EUとしても、停戦は望むところだ。押されっぱなしだったのが一息つける。体勢を立て直し、可能なら反攻作戦まで持って行きたい。その準備に忙殺されていた。

中華連邦は中央の大宦官と曹將軍の対立が抜き差しならぬところであり、とても他国に手を出す余裕はない。

つまり、エリア11・日本を除いて、この時丁度嵐の谷間に入ったように戦火が止まっていたのである。

その小康状態を望む者がいれば、望まぬ者も当然いる。

「……………」

がん、と拳を机に叩きつけた。もっとも子供の筋力では、大した威力ではない。そういう八つ当たりをしなければやってられないほど、V・Vは苛立っていた。

その原因は、弟シャルルの変節である。彼にしてみればそうなのだ。一見もつともらしくエリアーのことがどうか言っているが、そんなものはいい訳だとV・V・は見ている。

(神根島さえ抑えておけば、計画に何の支障もないのだから—)

エリアーなど、極論すれば神根島以外はくれてやってもいいのである。もちろんそう言ったが、皇帝としての表の立場もあり、それは無理だと退けられた。

「…あと少し。あと少しだっていうのに…」

E U戦線を押し進め、拠点をすべて確保。あとはC・C・のコードを奪えば達成…のはずだった。『王』にかまけたりネージュを恐れて足を止めているより、無茶をしても成してしまえばいい。

「…でも、あなただって本当は解ってるんですよ。無理だって」

ぽん、と肩に手を置かれた。驚愕で、椅子から転げ落ちるように跳び退る。いつの間にか、ネージュがそこにいた。

「久しぶりね。もうこの世界であなたは邪魔者だから、決着を付けに来たの」

ネージュが、ついに牙を剥いた。その酷薄な笑みに、V・V・は冷汗が止まらない。不老不死なんて、この少女にしたら何の障害でもないのだ。

「…まあ、私だって反省が無いわけじゃないのよ。正直、今回は関わりすぎたわ。こんな面白い世界、初めてだったの。…お詫びとして、気が向いたらどこかの世界であなたに味方してあげるから—」

『この世界では』消滅しなさい、と続けたネージュの体が、光の粒子と化して消えた。その瞬間、遠くの方で爆発音。入ってきた報告は、龍のような異形の機体の襲撃を受けた、というものだった。

「さーて、あなたの全てを叩き潰してあげるわ。どこまで足掻けるか、見せてもらおうかしら」

別に、V・V・を倒すだけなら、ヤルダバオトを召喚する必要などない。彼だけでなく、このギアス嚮団ももう邪魔だ。跡形もなく、消し飛ばしてやるとしよう。

「全力で暴れるなんて久しぶりだから、やりすぎちゃうかもね！」

立ち塞がったヴィンセントの頭部が、拳の一撃で粉微塵に砕け散る。遠目から発砲する相手は、光の刃で両手両足を斬り落とした。

ヤルダバオトの主武装は、光子。ネージュの思うまま、剣にもなれば砲にもなる。その威力は、人の科学力で作られたもので太刀打ちできるようなものではない。

しかし、ネージュは乗り手を殺さないように戦っていた。わかっていたからだ。相対したヴィンセントを操縦しているのが、ロロと同じ境遇の子たちであることを。

(バトレーも、ろくでもないことをしてくれるじゃない)

ライの卓越したナイトメア操縦技術は、バトレーの改造によるものだ。それを、嚮団の子たちにも施した。V・V・やバトレーはともかく、その子たちまで皆殺しにする必要はない。

「隔壁閉鎖、急げ!!!」

分厚い三層の壁がヤルダバオトの行く手を阻む。ハドロン砲の威力を基準に、十分な防御力を持たせた隔壁が閉じ、作業員たちはほつと一息ついた。さすがに多少の足止めにはなるはずだ。

―が、次の瞬間。

「退避、退避ー!!!」

何か熱いぞ、と思つたら、扉が熱で赤く発光している。次の瞬間にはバターのよう溶けだした。そこから悠然と、ヤルダバオトが現れた。

「……………」

戦意など、この光景で霧散した。皆、腰が抜けて動けない。中には失禁した者もいる。その目の前をこの異形の機体が何もせず過ぎ去ったとき、彼らはこれまで信じたことなど無かった神に感謝した。

相手は、ただの一機。なのに状況は絶望的だった。戦闘力が桁違いどころか、次元が違う。

そして展開は、思つてもない局面を見せ始めた。嚮団のナイトメアが、同士討ちを始めたのだ。

「二部パイロットが叛乱!」

V・Vの元に矢継ぎ早に届く報告は、どれもこれも情勢の悪化を

告げるものでしかない。ちなみにこの叛乱はネージュの仕込みではなかった。嚮団の中に、V・Vの支配から抜け出そうと考える者がいたのである。

「ジークフリートを出せ!!!僕が出る!!!」

V・Vに残された手段は、それだけだった。

「リディナ、あなたは、皆を護ってなさい」

ネージュにそう言われた叛乱の首謀者は当初きよとんとし、ようやく自分に言われたのかと理解した。『リディナ』というのが、ネージュがこの少女に付けた名前である。

首謀者が年端もいかない少女だった、というのはネージュも少々意外…と思ったが、すぐにそうでもないかと思ひ直した。

(何でだか、女の子が寄ってくるのよね)

どういう星の巡りか、ライのところには美女が集まる。カレンも大変だとは思うが、積極的にどうしようとは思わない。あの二人の絆は、そんなに脆いものではないはずだ。

リディナたちを黄昏の門に押し込み、光子砲で壁を破壊して外に出る。そこに大型のハーケンが撃ち込まれるがヤルダバオトはたやすく受け止め、力任せに引きちぎった。

「へえ…」

KGF、ナイトギガフォートレス・ジークフリート。バトラーの研究を基に嚮団で開発した、機動兵器である。

ナイトメアフレームが人型であるのは、パイロットとのシンクロ性を重視したためであるとされる。やはり人間は両手両足を持つ人型の方が、直感的に理解しやすいのである。

ただし、それが同時に欠点になる。人型という枠に埋めねばならぬ故、どうしても限界ができてしまう。例えば人型である以上、腕は2本というのは絶対の条件だ。その上で兵装を考えねばならない。

KGFは、その枠を取っ払った。人型を捨てることで、第7世代ナイトメアさえ圧倒する戦闘力を持つ兵器を実現したのだ。

その上、ネージュに対抗する手段として、V・Vは能う限りの兵装を積み込んだ。基本の円錐型スラッシュハーケンにはブレイズル

ミナスの刃を、遠距離砲撃能力としてハドロン砲を、という具合である。

しかし、それすらヤルダバオトの前では玩具に過ぎない。いや、戦いにすらなっていない。打ち破るどころか、傷一つ付けられないのだ。

「何だよ！何なんだよ、これ!!!」

こんな理不尽なことがあっていいのだろうか。自分という存在全てを賭け、人としての生を捨ててまで成し遂げようとしたことが、指先で虫を弾くより無造作に蹂躪されていく。

それでもV・Vは、戦いをやめようとしなない。もう自分が何をしているのかすらわからなくなっていた。それを、ヤルダバオトは無慈悲に粉碎していく。

気が付いた時、ジークフリートは戦闘不能になっていた。浮かんでいるだけ、という状態である。

「―原子の塵にまで還元してあげる。光子槍『イリス』!!!」

ヤルダバオトの手から、虹のように輝く槍が投げられた。それはジークフリートを貫き、爆発。後になってわかったことだが、その衝撃波はブリタニアの観測機に捉えられ、未知の超兵器として驚愕を与えたという。

世界を揺るがすような大爆発の中、ジークフリートは消滅した。

「さて、と…」

ヤルダバオトを解除。『イリス』の爆風で崩壊した嚮団の、『黄昏の門』の残骸の前に降り立つ。リディナたちはもう神根島に渡り、船に乗り込んでいる頃だろうか。勿論、ネージユがギアスで調達したものだ。

「う、うう…」

うめき声が出た。見れば、禿頭の男が瓦礫に両足を挟まれ、身動きできない状態であった。足は完全に骨が砕けているだろう。血まみれで、意識があるかもわからない。かろうじて生きていた、という状態だ。

ネージユは近くに落ちていた銃を拾い上げ、男めがけて発砲。頭を撃ち抜かれ、足掻きが止まる。

「……さようなら、バトレー」

この男も、間違いなくこの世界を形作る一因であった。200年間誰にも気づかれないう隠しておいた『王』を、バトレーは偶然見つけてしまった。それがこの世界の発端なのだから。

その点で、少しにせよ感謝の念はある。だが、助けてやるべき相手とまでは思わない。苦しまぬよう介錯してやるのが、せめてもの情けだ。

ちなみに、ネージユの意識にあった相手はV・V・とバトレーだけだ。そしてリディナたちは口口との関係から助けてやろうと決めていた。他は、知ったことではない。

だから悲惨なのは他の嚮団関係者だ。砂漠のど真ん中に、放置されたのである。『黄昏の門』も使えず、皇帝が極秘に手を回した救助が来るまで極限のサバイバルを強いられることになった。

生き残った者の中には、「二度と神には逆らわない」と敬虔な宗教家になる者もいた。

さて、そろそろ、トウキョウ租界で式典が始まる時間だ。V・V・もこれを破算にすべく裏で手を回していたが、そちらは叩き潰してお

いた。

「予定ではすぐ合流するつもりだったけど、ちょっと用が増えたみたいね」

ネージュの体が、粒子になって消えた。現れたのは『黄昏の門』の中、『Cの世界』である。

「こんにちは、シャルル。……やっぱり、お兄さんは見捨てられなかったのかな」

そこには『アーカーシャの剣』の前に立つ皇帝シャルルと、地に手をつき肩で喘ぐV・V・がいた。

「これが、新たな世界の始まりとなることを願います」

ユーフェミアの宣言に、日本人も拍手で答えた。まずまず、という反応だろう。少なくとも、ユフィはこの政策を本気で願っている。それはこれまで彼女が行ってきたことで、日本人にも信じられた。

しかし、ブリタニア全体としてはどうなのだろうか。コーネリア、シユナイゼルは欠席。皇帝も何も言わず、内心賛成なのか反対なのか不明のままだ。

しかし、彼らの態度はそれでもましな方だ。あからさまに嫌悪を示す皇族や貴族は多い。そのような人が政柄を握れば、この政策は一晩で覆されかねない。

とはいえ、今参加することによるメリットは大きい。ユフィは一つ大胆な提言を盛り込んだ。特区の範囲に住まなくとも、申請すれば『イレヴン』の称号を消す、というものである。

「その人たちは『日本人』として、ブリタニアに住まう在留外国人と同等の立場となります」

特区には賛成でも、行くことのできない人だつて多い。例えば仕事や郷里の情など、いろいろあるだろう。そういった人たちへの救済措置も、ユフィはちゃんと考えていた。

リフレイン事件でユフィが行った待遇改善は、あくまでも努力目標である。副総督である皇女の言うことであれば半ば強制だが、改善の度合いは各自の判断に拠った。

今度は違う。これからは、『日本人』となった人を法に則って扱わねばならない。不当に扱えば、法に問われるのはブリタニアの側だ。

(皇帝は何を考えているのか…)

無関心なのか、本気でユファイに賛同しているのか。あるいは何か別の理由があるのか。

正直ライでさえそこまでの譲歩は見込めないと思っていたのだが、ユファイが皇帝に直訴した結果、あっさり通ってしまったのである。

そしてユファイは、皇帝のサインが入った公文書をおの場で堂々と提示してしまった。ここまでされたら、もう取り返しはつかない。

なお、ブリタニアにもメリットが無いわけではない。特区外での経済活動によって生じた税金は、きつちりブリタニアが徴収する。これまでのようなNAC任せのどんぶり勘定から、直接統治に乗り出すのである。

「……………」

そのNACの代表としてこの式典に臨んでいた桐原は渋い顔だ。サクラダイトの密輸に続き、キョウトの資金源をまた失うことになるからだ。

(まあ良い。ここは、生きながらえることが先決よ)

厄介な『蒼』もいなくなるというので、特区内ではかつての日本のように思いのまま権勢を振るえるだろう。情勢次第で、今後特区の拡張も見込める。今のところは、それで満足するべきだった。

式典自体に、特に問題があるとは誰も思っていないかった。何しろ双方の代表がユファイとライだ。裏では、充分過ぎるほど打ち合わせが済んでいる。

しかし、招かれざる客が訪れた。

「……………片瀬少将」

藤堂はそう呟いただけだが、朝比奈などは露骨に眉間にしわが寄せた。何をしに来ただか、と言わんばかりの不満顔である。

日本解放戦線司令官とその重鎮たちが、揃って会場に現れたのだ。

「ゼロと袂を分かつて来ました。土壇場ではありませんが、我らの参加もお認め頂きたい」

「えっ……はい。そうですね…」

予定になかった展開に、ユファイが狼狽する。正直なことを言ってしまうと、特区に片瀬以下の居場所はない。防衛軍は藤堂を准将に格上げし、指令代行とする予定だ。

強いて上げれば、軍政を担当する人材は不足しているの、そちらの方で使えないことはない。だがそんなことをすれば、実戦部隊との間に埋めがたい溝がでかかねない。

(……ゼロの策謀か?)

解放戦線の重鎮たちにも、ゼロに対する反感は高まっていただろう。そういつた邪魔者を片瀬と共に追い出し、純粋な反ブリタニアの思想を持つ者だけを集める。

と同時に、特区に余計な軋轢を生む種を蒔く、という手だと考えられなくもない。だが――。

「片瀬たちは、退役させ一私人として扱う、といたしましたよ」

強権で解決策を出したのは桐原である。そう、大したことではないのだ。片瀬はもう、政局に影響を与えるほどの存在ではない。

そんな男を使って特区を失敗させようなど、ゼロが打つ手としては何とも間の抜けた策だ。となると、本当に喧嘩別れしてきただけかもしれない。

(ゼロも、手が出せないということか)

ギアスの対策も、すっかりしてある。あの『オレンジ事件』で、ゼロは一つ失敗した。生放送の現場でギアスを使ったことだ。

仮面の目の部分が、わずかに開いたシーン。ギアスの存在を知っている者からすれば、それで彼のギアスは視覚媒体だと解る。そして視覚媒体のギアスは、光と同じ。特定の波長を遮れば、簡単に無効化できる。

ユファイやライをはじめとする主要人物は、このところはごく親しい人にしか会わないようにした。外出時はサングラスなり偏光コンタクトなりで、目を守る。

警備兵はぎりぎりまで配備を知らせず、当日はバイザーを装備。ギアスを使って破綻させようなどとしても、墓穴を掘るだけに終わるだ

ろう。

「……もしかすると、C. C. が説得したのか」

不穏な動きも不穏な物も見つからない、というので、ついそう思ってしまった。ギアスを封じようが、ゼロなら何か仕掛けてくるだろう。そう予想していただけに、順調すぎて拍子抜けしたという感がある。

—ゼロの正体が誰なのかまでは、予想していなかった。それが陥穽だった。

—だがそれは、誰にとっての幸福で、誰にとっての不幸だったのか。

「—では、『蒼』」

ユフィに促され、席を立つ。『蒼』の仮面を外し、素顔を晒した。日本人らしくない容貌に観客がざわつくが、これはもう必要ないものだ。

皇女ユーフェミアと、現状日本最大の抵抗勢力の長である『蒼』。その二人が握手する。その瞬間は、この式典のクライマックスだ。誰もが生放送で中継されるモニターの前に、釘付けになる。

「—え？」

小さく叫んだのは、誰だったか。台本にない行動。理解不能の行為。疑問が、取るべき行動を遅らせた。

ライに駆け寄ったマリーカが、ドン、と勢いよくぶつかつた。その直前、袖から隠し銃が滑り出てきたのをはつきり見た。

「……………」

長い沈黙。誰もが、凍り付いたように動けない。まるで会場全体の時間が止まったようだった。その中で、ライの体が崩れ落ちる。

「……………殺される！」

誰かが、叫んだ。それが呼び水となり、パニックが起きた。人が一斉に出口へと殺到する。それを止めようとした兵士が、暴徒となった男に殴り倒された。

仲間の兵士が、馬乗りになって殴りつけていた男を銃床で一撃。男

がひるんだ隙に、馬乗りの体勢を崩す。だが別な男が殴り倒された兵士の銃で、その兵士を撃ち殺した。

ブリタニア兵も、もう黙ってはいない。制止など耳に入るものではない。応戦しなければ、やられる。一か所で銃撃戦が始まると、あっという間にそれが全体へと拡散した。

「ユファイ！」

マイクを手に必死で制止を訴える皇女を、スザクは無理矢理バックヤードに引き込んだ。肩には素早くライの体を担ぎ上げている。

「マリーカさんも、早くー！」

茫然自失のマリーカは、ロロが手を引く。そのまま会場を抜け、逃げ込んだ先は特派のトレーラーである。ランスロットやウラノスがあるここなら、たとえ暴徒に襲われようが撃退できる。

「マリーカ、どういふことですか!!」

ユファイがここまでの怒号を発したことは、過去にない。その怒気を正面から受けたマリーカは真っ青な顔で、しかし「わからない」と繰り返す。

「…違う」

スザクに担がれたままのライが、弱いながらも声を出した。慌ててスザクが傷を確認するが、出血はない。

『防弾繊維にしておいた方がいいわよ』

姿を消す直前、ネージュはそう言い残した。この展開をわかっていたなど、少しばかり恨めしく思う。こうした方が面白い、だが死なれては困る。そう判断した上でのアドバイスだったのだ。

使われたのは小型銃。防弾繊維は銃弾を止めたものの、衝撃までは消せない。脇下の筋肉が薄い箇所肋骨を折り、一時的に呼吸を麻痺させ意識を飛ばすには充分だった。

「……これは、ゼロの策謀だ」

呼吸のたび、鈍痛に襲われる。それをこらえて、ライは断言した。

「お、お前……。……お前、何てことをー！」

C・Cが、真つ青な顔で言う。ギアスのことを知っている彼女なら当然気付くだろうとは思っていたが、取り乱すというのは予想のない反応である。

「お前は自分が何をしたのかわかってるのか！言っただろ！あいつは絶対に敵に回すな、とー！」

そういえば、言われたことがあった。だがルルーシュにしてみれば、相手が敵に回ったのだから仕方ない。それよりなにより、今はやるべきことがある。

「この混乱に乗じて、今度こそトウキョウ租界を奪取する。それさえ成れば、失った戦力くらいあつという間に回復するさ」

藤堂たちは片瀬に説得させ、連れ帰らせる。そのために片瀬たちを送り込んだ。そして『蒼』に賛同したレジスタンスが、一斉に靡くはずだ。その戦力があれば、その後も充分に戦える。

「……………私は行かん。もう付き合いきれん」

C・Cは心底呆れたように椅子に身を投げ出した。この男は、まだトウキョウ租界などにこだわっているのか。何故『蒼』がそんなものに食指を伸ばさなかったのか、考えてないのか。

『朧月夜』の戦力は、失つていいものではないぞ」

知ったことかとC・Cは横を向いた。そんな短絡的にしか物事を考えられないから、こんな馬鹿な真似をするんだ。そう、怒鳴りつけてやりたかった。

(……………所詮、戦術屋だ)

マリーカと観客の何人かを操り、日本とブリタニアの間に決定的な亀裂を作る。ルルーシュの目的から見れば、間違ったことをしたわけではない。稚拙な手口は問題だが、それはまあ流してやるとしよう。

だが、トウキョウ租界を落とすとして、その後はどうするのか。ルルーシュの考えは、そこがすっぽり抜け落ちたまままだ。

「……………前回の侵攻だって、むしろ負けて良かったくらいだ。一度は何

も言わず付き合つてやったが、二度目まで面倒見きれぬものか」

大切な妹や生徒会の仲間も含めて、トウキョウ租界に暮らすブリタニア人を見捨てる。それができるのなら、文句はない。

だがルルーシュには、決してできないだろう。「修羅の道を進む」とか格好つけながら、親しい者には非情になりきれない。だから、無理が生じる。

(日本とブリタニアの間を修復不能にまで決裂させトウキョウ租界を制圧したら、今度は日本人によりブリタニア人がどういう目に合うか。自明の事だろうに)

仮に、それはゼロの強権で押さえつけて、何とかなったとしよう。だがその上でも問題はあつた。トウキョウ租界の膨大な人口を、どうやって養うのか。

トウキョウ租界は生産より消費が圧倒的に多い、他から物資を輸入することで成り立つ経済圏である。平時でも多大な負担となり、大兵力で囲まれて兵糧攻めにでもされれば、あつという間に干上がる。

ましてや占領地となれば、これまでの経済活動は崩壊する。日本の力で住民を養わねばならなくなる。ブリタニア人を養うことを、はたして日本人が了承するだろうか。

そういった悲観的な予測を、C・C. は口に出すことまではしなかつた。

「……ならお前は勝手にしろ。どこだろうが、好きなところに行けばいい。俺は行く」

この熱狂が冷め切らぬうちが、勝負の機だ。すぐさま声明を出し、軍を進める。不貞腐れたC・C. の相手をしている暇はない。

バンと、荒々しくドアが閉じられた。ルルーシュが去つてなお、C・C. は無言でいた。起き上がる気にもなれない。

「……………私も、行かねばなりません」

そのC・C. に声をかけたのはジェレミアだ。彼も落胆したのではなかるうか。和議が成れば、もしかしたらルルーシュも諦めるかもしれない。内心そう期待する気があつてもおかしくないだろう。

ルルーシュとは対照的に、今度は弱弱しくドアが閉められた。諫め

はする、だがどんなことがあるうが見捨てることはしないというのが彼の忠義である。その彼でも、今回は内心を隠しきれないようだ。

「王様、ごめんなさい」

こんなことなら、助けを求めに行くのではなかった。『王』は無事なのだろうか。騎士団には、まだ情報が届いていない。

だが、一命をとりとめていれば、それはそれで問題だ。ルルーシユはあの『王』に上等をかましてしまったのだ。それを、『王』がわからないはずがない。

間違いない、騎士団を滅ぼす。もう、自分がいくら頼もうが止められない。

「待機つてどういうことよ！ライが撃たれたのよ！」

カレンが、ルーミリアに食って掛かる。式典の中継は、パニックが起きた時点で途絶えた。ただ、ライが撃たれたシーンは、すべての人がはつきりと見ただろう。

東京湾、横須賀沖である。『天叢雲』の戦力を軍艦に乗せ、ここに展開していた。デモンストレーション以上のものではない。事あれば、戦も辞さず。その気概まで失ったわけではない、と。

「全軍を待機させてください。勝手に出奔するような人がいないよう、しっかりと」

動揺する隊員たちに、ルーミリアはそう指示を出した。正式には『蒼』の副官に過ぎない彼女には、皆に指示する権限などない。しかしライがいなければ彼女が指示を出すというのは、もう当たり前前になっていた。

「では、カレンさんは、今回得をしたのは誰だと思えますか？」

的外れな、少なくともカレンにはそう思えた質問が、逆に頭を冷ました。得をしたのは誰か。少なくとも自分たちではない。ブリタニア？ いや、あんな全世界に向けての場で謀殺なんて、得るより失う物の方が…。

「謀略は得をした者を疑え。それが基本です」

ルーミリアの言わんとすることが、ようやくカレンにも見えてき

た。

「ゼロが、特区を潰そうと動いたってこと？」

ゼロの筋書きはこんな感じだ。特区反対の皇族ないし大貴族が、謀略を仕掛けた。ユフィを黒幕にするのは、いかんせん無理がある。ギアスを使つたとしても、不自然すぎるだろう。

そしてマリーカにとって『蒼』は、兄の仇である。黒幕にそのかされた彼女がああいう行動に出たとしても、無理はない。

「あとは民衆の中に工作員を紛れ込ませておけば、パニックは作れま
す」

すらすらとルーミアは語る。幹部たちも、一時の激情が冷えれば理解できる。確かにブリタニアが仕掛けたのなら、やり方が不味すぎる。こんなことでは、信望を失うだけだ。

そしてその説の正しさは、すぐ立証された。すぐさま、日本全土に向けてゼロの声明が発表されたのである。その内容は、ルーミアの予測とほぼ一致していた。

(しかし、どういうことですかね)

ギアスの対策も、充分していたはずだ。ゼロはそれを掻い潜って仕掛けてきた。掻い潜ることができた存在だった。ということは、ゼロはすぐ近くにいるということになるのではないか。

「……………まあ、どうでもいいことかもしれないが」

即刻、ユフィに連絡を取った。ライの容態を問い合わせ、こちら側の今後の動きを伝え、そして特派からアルテミスを借用するためである。

誰であろうと、私が潰す。カレン達には普段と変わらない沈着な表情を見せていたルーミアも、内心は沸騰していた。

「ブリタニアの不実は明らかになった！もはや、『日本』は力をもって
取り返すより他はない！」

激昂した兵士たちが、声を上げる。ゼロの元に残った自分たちは正しかった。そういう声が、そこから囁き交わされた。

「トウキョウ租界へ向けて、進め！」

黒の騎士団と解放戦線。租界攻略戦で大敗北した後多少の補充は受けたが、掌握する戦力はナイトメアで60機まで落ち込んでいた。月下に至っては藤堂機と朝比奈機の2機しかない。

だが、ブリタニアの租界防衛軍も250程度と半減している。中華連邦と北九州の特区防衛軍が万一敵対した場合に対する備えと、各地の反乱分子鎮圧のために散らせていたのだ。

まさか、ゼロが再び攻め込んでくるはずがない、あったとしても250もあれば叩き帰せる、と誰もが思っていた。

(俺を侮りすぎだぞ、誰もかも！)

まだルルーシユには切り札がある。ゲフィオンディスターバー。これを、租界の復興工事に紛れ込ませ各所に仕掛けておいた。一斉に作動させると政庁に向かう一本の道を残し、全てを止める。

「敵は、我らが友軍と合流してから攻勢に出ると考える。その隙をつく」

前回同様ブリタニア軍が租界外周部に布陣した場合、ほぼ全てのナイトメアが停止する。今度はカムフラージュも万全にした。60機でも、トウキョウ租界を充分落とせる。

計算違いが一つあった。幾分かは離脱者が出るだろうと踏んでいた『天叢雲』の主戦力が、全く靡かない。誰かが代理としてしっかり掌握している、ということだ。

「ルーミアアか…」

有能すぎて危険すぎる存在だった。仮にライがいなかったとしても、騎士団にスカウトはしなかっただろう。ひとたび見限れば、ゼロの首を手土産に寝返るくらいのはやる女だ。

そして彼女が動かないということは、少なくともこちらの謀略だと疑っているということである。

「急げ！今は、時が勝敗を分ける！」

奴らの船にミサイルでもぶち込んでやればよかったか、と後悔しないでもない。しかし今後の戦いを考えれば、最も頼りになる戦力であるのも事実だった。可能なら首脳部を排除し、無傷で手に入りたい。

(トウキョウ租界さえ落とせば、講和を推進する奴らの立場

は無くなる)

そのトウキョウ租界が、見えた。まだ、『天叢雲』の船影はない。ブリタニア軍は定石通り、再び外周部に防衛線を形成していた。ルルーシユが思い描いた通りの展開である。

—ただ、一つクリアされてない条件が残っていた。『ウラノス』が、その上空に鎮座していたことである。

ウラノスと、ガウエインが向かい合う。ランスロットやベディヴィーエールの姿はない。空中においては、邪魔の一切ない一対一の状況だ。

『蒼』よ、ブリタニアを信用してはならなかった。今回のことで、それは明らかだろう」

「白々しい。全て、貴様が裏で糸を引いていたことだろう」

ルルーシユの強みは、『確証がないこと』である。実行犯がマリーカだというのは、誰がどう見ても変えようがない。いくら自分が裏で糸を引いていると言われようが、それを裏付ける証拠はない。

「ここまで来てもブリタニアに味方する、と。やはり貴様はブリタニアの血を引く者、ということだ。本当に、この日本のために思うなら—」

『正義は我にあり』と声高に主張することで、世論を作るのがルルーシユの目的である。日本人の心情を無視して、『蒼』は行動を起こせない。世論がブリタニアとの徹底抗戦に傾けば、『蒼』は去るしかない。

しかし、『蒼』が攻撃までしてきたというのは計算外の事態だった。正直言ってしまうと、怪我人相手とはいえナイトメア戦をするのは分の悪い賭けで、これ以外に策はなかったと言える。

「……………」

ライは、言いたい放題にさせていた。証拠など生かしたまま捕らえれば、ギアスで何とでもなる。最後の、わずかな我が世の春を楽しむ方がいい。

そう思っていたところに、全世界に向けて声が響いた。

『ほう。では、貴様は違うというのか、ゼロよ』

皇帝の顔が、ありとあらゆるモニターに映し出された。

「皇帝……！」

何故、今、奴がここに。そう思ったのはルルーシュだけではない。その衝撃は、ここまで猛進してきた日本軍の足を止めるに充分だった。

『ゼロ、いや、神聖ブリタニア帝国第11皇子ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。我が息子よ』

「!!!」

「続けられた言葉に、ルルーシュは呼吸が止まるほどの衝撃を受けた。何が何でも否定すべきのだが、声が出ない。

『愚か者よ。貴様が小細工で死を偽装したことくらい、わからぬとも思うたのか。もつとも、わしに向かつて弓を引く気概があるとは思わなかったが、どうやら思っていた以上に馬鹿だったということか』

日本の枢木家に人質をして送られていた皇子ルルーシュと、皇女ナナリー。その二人は7年前の戦争に巻き込まれて死亡したという『正規の』報告は、確かにブリタニア皇帝の元まで届いた。

しかし、影目付の一人も置かずに放置していたなどということはない。二人は生き延び、その後アッシュフォード家に匿われたという報告もまた届いていたのだ。

(馬鹿な！馬鹿な!!馬鹿な!!)

皇帝の言っていることが、どこまで真実なのかはわからない。ただ、筋は通っている。頷く者は多いはずだ。

しかし、そこからどうやってゼロの正体にまでたどり着いたのか。皇帝はそこを全く説明していないのだが、そんなことまで考えをめぐらす冷静さを保っている者など、誰もいなかった。

そして次の行動が、さらに見る者の冷静さを失わせた。目を疑う光景としか思えなかったからだ。ブリタニア皇帝が片膝をつき、礼讓を示したのである。

『蒼よ、我が愚息たちが失礼を致しました。どうか、お許しください』

トウキョウ租界中、いや、全世界が静まり返った。

「……………では、どうすると言うのか」

ウラノスのシステムを使い、放送に割り込む。皇帝の真意は全く解らない。が、『王』の真相を知っていることは疑いようがない。そうでなければ、こんな態度はとらないからだ。

『第98代ブリタニア皇帝シャルル・ジ・ブリタニアとして宣言いたします。日本との講和、特区の成立は、我も望むことであります』

そして皇帝は続ける。謝罪の証として、北九州だけであつた特区を拡張し、九州、四国の全域、中国地方の西半分も範囲に含める、と。

「……………」

完全に流れが変わったことを、ルルーシユは認めざるを得なかつた。ゼロの正体、皇帝の宣言といった衝撃の事態の連続に、日本人の怒りなどどこかに吹き飛んでしまった。

「……………」

逆に向けられるのは、ゼロに対する不信の視線である。ブリタニアの皇子。自分のことはひた隠し、『蒼』の血筋を口撃するというやり方が特にまづかつた。

ここで、口先で否定するのは容易い。だが、言われていることは事実なのだ。どう言い繕うが、ゼロの素性を明らかにする動きを止めることはできない。

それに皇帝がこれほどの礼譲を示す『蒼』と、自分。聞いた者の心の秤がどちらに傾いたかは、聞くまでもない。

『ルルーシユよ、日本に貴様の居場所はない。去るがいい。それでもわしに逆うという気概を残すのであれば、それもよからう』

「ぐ」苦労さま。なかなかの役者ぶりね」

『黄昏の間』に戻ると、ネージュが労つてくれた。もはや戦える状況ではないということ、ルルーシユも認めるほかなかつただろう。残された道は、ガウエインで逃走することだけだつた。

「……………じゃあ、こつちも片付けようかしら」

頷いたシャルルを見て、ネージュが手を挙げる。現れたヤルダバオ

トが、再び虹色の槍を放つ。「やめろおーー!!!」というV・V・の絶叫を尻目に、『アーカーシャの剣』は砕け散った。

「……兄さん、私は考えを改めました。これからは、兄さんとは別の道を歩もうと思います」

決別を宣告するシャルルに、V・V・は憎悪の眼差しを向ける。

V・V・は解っている。ネージュに勝てないとか、そんな理由は嘘だ。本心は、『王』に対する憧れであろう。

「君は、君はずっと僕に嘘をついてきた!とつくに諦めていたくせに!僕の事なんて、もう何とも思ってたかったくせに!!!」

「……おや、兄さんとして嘘をついていたじゃないですか。マリアンヌの事、知らぬとでも?兄さんこそ、自分の事しか考えてなかったのではないですか?」

この世界から嘘を無くす。そう誓ったはずの兄弟が、お互いを騙し合っていたという皮肉。最も憎んだものによって、ここまで破綻を回避してきた関係。傍で聞いていたネージュは、小さく笑った。

「僕は、僕は諦めない!!!たとえ僕一人でも、『ラグナレクの接続』は完遂させる!!!」

踵を返し、V・V・は『黄昏の間』から立ち去った。しかし、まだわからないのだろうか。ネージュがその気になれば、そんなものは即座に潰えるということ。

「私を怒らせる覚悟までして、せっかく助けたのに。わからずやのお兄さんを持って大変ね、あなたも」

わからずやなら、もう一人いる。ルルーシュだ。そして二人とも気付くことはないだろう。これが、シャルルの愛情表現だということに。

「私もライも、本気で殺す気だった。あなたが出しゃばらなければ、そうなるしかなかったはずよ」

全く持って、不器用な男である。もつと素直に言えばいいのだ。

V・V・もルルーシュも、何とかして命だけは助けてやりたい。そう思った末の行動なのだ。

その思いに免じて、今回だけは勘弁してやることにしよう。

「…………私はこれから、どうしたらいいのでしょうか」

消し飛んだ『アーカーシヤの剣』のあった場所を見ながら、シャルルが呟く。彼とてこれまでの人生を、兄との誓いのために費やしてきたのだ。兄を救うためとはいえ、それを捨ててしまった。

「…………もう、どうして誰も彼も、私に答えを求めるのかしら。私は、そういう存在じゃないのに」

答えを授けるのではない。答えを見出そうと足掻くところに人の価値を見出すのがネージュである。だから、これから彼が何をしよう、それ自体についてを否定することはない。

「やっぱり『ラグナレクの接続』を続けたいというのなら、その意思は尊重するわ。いくらでも相手になってあげるから」

冗談とも警告とも取れる発言に、皇帝は苦笑う。相手にもならず一方的に叩きのめされるだけということは、今回で良くわかった。

「それと、もう一つ言っておくなら、あんまり彼に阿らないことね。あなたが自分で考えて、駄目と思ったらしっかり主張すること。時には喧嘩もした方が、相手を理解できるものよ」

せっかくV・Vから自立できたのだ。ここでライに依存してしまつたら、人としての成長はない。前の世界のナナリーがまさにそうだった。誰かの意思に依存し続け、気付かぬまま破滅への道を転がり落ちた。

「そうそう、ルルーシュはC・Cに任せておけば何とかしてくれるわよ。結局、見捨てられないみたいだし」

ふつ、と今度は小さく笑う。それは母性なのか異性への思いなのか。ルルーシュは物心つく前だったから覚えているはずもないことだ。C・Cが、幼児の自分の世話をしてくれたことなど。

「ところで、あなたはこれからどうするのです？」

愚問ね、と今度はネージュが笑う。決まりきったことだ。

「帰るわよ。大好きなパパとママライとカレンのところに」

「……………」

怒る気力すら出なかった。一体何がどうしてこうなったのか、誰か

に説明してほしい。わかっていることは、自分は全てを失ったということだ。

「ナナリー…」

もう、アツシユフオード学園にも戻れない。妹の身が心配だが、どうすることもできない。ユファイが護ってくれることを期待するしかなかった。

伊豆の、とある廃神社。当てもなくガウエインを飛ばし、ルルーシユがたどり着いた場所がここだった。自分たちが人質として送られ、7年前の戦争で無人となった、スザクの実家の枢木神社である。

そこで、一体どのくらいの時間佇んでいたのだろう。太陽がいつの間にか移ろい、正面から日が射すようになった。移動する気も起きずにいたところ、その光が急に遮られた。

「やはり、ここだったな。いつまで腑抜けている気だ？」

逆光の中でも、緑色の髪ははっきり見えた。

「C.C. …。どうして…」

あの時、決別したはずではなかったのか。少なくともルルーシユはそのつもりで言ったのだ。そして、当然ながらライのところへ奔ったのだろうかと思っていた。

「…ふん、お前が言ったのではないか。『好きなところに行けばいい』と。だから、もう少しお前と一緒に行くことにした」

お前はまだ、誰かのお守りが必要な餓鬼に過ぎない。放っておくと、また今回みたいにならなくてもないことをしでかすだろう。私が側で目を光らせておくのが、世のため人のためだ。

「そもそも、お前は自分の小さな世界に閉じこもり、その中で物事を考えるから失敗した。『自分は世界で一番可哀想なんだ』とでも思っているのか？お前より悲惨な奴など、この世界にはごまんと居るぞ」

延々と続くC.C.の毒舌を、ルルーシユは茫然としながら聞いていた。普段なら間違いなく激昂するはずの言葉が、何故か今はすんなりと心に届く。

「…とはいえ、一つだけお前はあいつに勝った。それゆえ、見込みはまだあると思ったのだ」

一体何をだろうか。ルルーシユには、全く思い当たる節がない。しかしC・C・は「それがわからないから負けるんだ」と教えてくれなかった。

「それに、もう一人いる。場所は教えておいてやったから、もう着く頃だろう」

C・C・の声で階段の方に目を向けると、ほどなくして一人の男が上がってきた。ジェレミアだ。彼もまた、ルルーシユを見限れなかったらしい。

「私まで去ったらルルーシユ様は一人きりだと思ったのですが、いらぬ気遣いでしたかな」

わからない。C・C・にしろジェレミアにしろ、何故ここにいるのだろうか。それは、ルルーシユの価値観を叩き潰すようなことだった。

「ルルーシユ、お前の反逆は大失敗だったが、無駄ではなかったぞ。始めた時、お前は一人きりだった。今は、こんなになっても付いて行くうとする者が、二人もいる」

しばらく顔を伏せた後、すくつとルルーシユが立ち上がった。その表情は、先ほどまでの生気の抜けたような物ではない。

「中華連邦に行く。俺は最後まで反逆者で在り続ける。それに、奴らが変わえ損ねた時、ブリタニアを叩き潰すのは俺しかいない」

ひとまず手を組むのは、大宦官か曹將軍か。どちらも強い手駒を欲している。ガウエインと朧月夜を手土産にすれば、亡命くらい許されるだろう。最新のナイトメア技術は、喉から手が出るほど魅力的なはずだ。

無論、技術だけ頂いて捨てられるという可能性はある。だが、そうなれば相応の対処をしてやればいい。

「……………それと、ありがとう」

最後は呟くような小声であったが、二人ともはつきり聞いた。ふ、とC・C・が笑う。ルルーシユが礼を言ったことなど、初めてではなかったか。

わずかであっても人として成長したのであれば、それこそこの反逆

でルルーシユが得た至上の物であろう。

(まったく、苦勞する。ここまでいびつに育ったのはお前らのせいだぞ。なあ、シャルル、マリアンヌ—)

心の中で、かつての同志に語り掛けた。

「来ましたー！」

神楽耶が、声を上げる。指さした先にあった黒い点は次第に大きくなり、目の前の港に着水した。アヴァロン級戦艦二番艦のそれは、『王』の乗艦となり『エリシオン』と名付けられた。

「久しぶり、神楽耶」

特区成立から、2か月。日本は愛媛県の松山市を仮の首都として、復興の途中にあった。四国の地方都市で戦争の被害が比較的薄かった点と、領土の中央にあるという点選ばれた理由という。

「お久しぶりです、お義兄様」

日本の妹が、抱き着いてくる。日本は六家を中心となり、暫定政権を立ち上げた。とりあえず枢木政権時代の生き残りを大臣に据え、選挙ができるよう戸籍を整理している段階だ。

だが桐原たちにとっては、思っていたほど甘い果実を得られなかった。神楽耶に完全に頭を押しえられてしまったのである。排除しようにも、後ろにブリタニア皇帝すら動かす存在がいては手を出せない。

「日本のこと、忘れないでくださいませ」

2か月前、ブリタニアに行こうとする義兄に、神楽耶はそう言った。シャルルは特区成立の際、一つ条件を出した。ライのブリタニア皇族復帰が、それである。

表向きは『王』の末裔、皇族やラウンズ、日本の要人には真相が伝わっている。信じようとしめない者も、ネージュがヤルダバオトを召喚してみせると信じざるを得なかった。

一番衝撃を受けたのはコーネリアであっただろう。自分が誰を相手にしていたのか。それを知った彼女は、足腰が崩れてその場にへたり込んでしまった。

「忘れないよ、日本に妹がいることは」

そう言つて、『蒼』は役目を終えた。同時に、ブリタニアで二人目の『王』が誕生した。領土も持たない、国の主である。

そのブリタニアは、激震のさなかにある。ルーミアアが持っていた、エリス嬢の回想録。シャルルはあれを、大々的に公表したのだ。「この国について、考え直すべきなのかもしれぬ」

そう言ったが、これまで皇帝としてかぶってきた仮面を外すための方便として回想録を使ったのかもしれない。なかった。

とはいえ、皇帝が言及した『エリスの回想録』は売れに売れた。おかげでルーミアアはかなりの印税を手にしたらしい。もしかすると、シエルト家に対する皇帝の謝罪なのかもしれない。

とはいえ、本人はそんな事どうでもいいと断言する。男爵に叙任されたのも受けはしたが、喜んだのは両親の方である。彼女にとって重要なのは、自身がライの副官から外されたことだ。

勿論、ライが彼女を手放したわけではない。『王』の親衛隊の司令官としたのだが、人材不足で軍の統括を任せられるのは彼女しかいなかったのである。本人は恐ろしく不満気であったが、やむなく受けた。

ただし、一つ交換条件を出してきた。とある貴族に、口をきいて欲しいと。以前ルーミアアと見合い話が持ち上がり、こつぴどく振ったところ逆恨みされたのだという。

「言ってませんでしたか？それでほとぼりを冷ますため転校することになって、アッシュフォード学園にやってきたのですけど…」

当然ながら、その貴族も『王』相手では何もできるはずがない。平伏して、謝罪を繰り返すだけであった。

しかし彼女が狡猾なのは、何気なく自身を『王』の愛人だと思わせたことである。その貴族から噂がぱつと広まり、それを耳にしたカレンが激怒したのは言うまでもない。…まあ、いつものことである。

空いた副官の席には、リディナが座ることになった。『王』の元で使ってほしい。そう、彼女は言ってきた。ルーミアアには及ばないが、それは比較相手が間違っているからだ。

そのリディナを推薦したネージュは、自分に従おうとする嚮団の子を集めて一部隊を編成することにした。放り出すわけにもいかなかったからだ、隊長が最も年少に見えるのが何とも言えない。

一方、ロロはどうしたかと言うと、ユファイの元に残った。ネージユが誘ったのを、拒否したのだ。

「もう少し、こちらに居させてください」

覚悟を決めてそう言ったロロに、ネージユはむしろ笑顔を浮かべた。もし命令だからと了承していたら、もうしばらくユファイの元に放り出すつもりだったのだ。

どうやらユファイの元での日々は、予想以上のいい影響をもたらしたようである。

さて、問題だったのがマリーカだ。ギアスのことを知っている者なら話は別だが、式典での銃撃犯として罪に問われるのは避けようがない。

「兄の仇を討とうとした行為、その点は讃えよう」

ライはそう言い、シャルルもユファイも『王』の雅量として美談にすり替え、刑事罰は回避した。しかし通常のエリートコースは閉ざされた。士官学校は、除籍となったという。

当てがないならライが召し抱えてもよかったのだが、ユファイが腹心として拾い上げるつもりだという。彼女にしてはその方がいいだろう。挨拶に困るのは目に見えていた。

そのユファイは、エリアー総督に格上げされることが内定している。しばらく様子を見た後、コーネリアは武断派の彼女が必要なエリアに送り込まれることになる。有力候補は、制圧してすぐ離れたエリア18か。

「しかし、あまり過大な要求をしてユファイを困らせてはいけないよ、神楽耶」

皇帝の意向も得たと言っても、やはり特区はこれまでのブリタニアからすれば異端の政策だ。日本が凶に乗れば反発する声は大きくなる。その点は、しつかり釘を刺しておかねばならない。

問題は、ユファイの軍事能力が未知数であることだ。いくら日本との折衝に最適の人物としても、中華連邦との最前線の総督が戦下手では不味いだろう。

中華連邦の方では、ついに曹將軍が決起した。その混乱が続く間

に、情勢を整える。ブリタニアの方でも戦略顧問として信用の
おける、実力のある人物を探しているところだ。

「スザクとの連携は欠かさないでくれ。いざと言うときは、僕が駆け
付ける」

スザクにとって、神楽耶は従妹で元婚約者（先日、神楽耶の方から
正式に破談としたらしい）、藤堂は武術の師匠である。連携はやり易
いはずだ。

しかし、ゼロ、ルルーシュが、その中華連邦に逃れたという噂があ
る。ブリタニアの破壊。彼は、彼なりの『正義』を貫くため行動して
いる。余裕はあまりないかもしれない。

ユフィとスザクの二人は、ゼロの正体について何となく予想してい
たようだ。そうであってほしくないという希望が潰れた諦念と、ル
ルーシュの心境をよく知るだけに納得したという表情が入り混じっ
ていた。

「彼の境遇に同情する点が無いわけではないし、ゼロと成るに至った
ことも理解できる。けれど、僕は賛同しない」

スザクはそう言った。そして、やはり自分はユフィの騎士として、
彼女と共に理想を目指す、と。親友と戦いたくないという思いは当然
あるだろうが、彼の『正義』もまた揺らぐことはなかった。

日本軍は藤堂以下、まず自衛のための戦力を整える段階にある。領
土が広がった分規模も拡張しなくてはならなくなった。それでいて、
下手な軍拡に奔らないよう歯止めをかけなくてはならない。

『天叢雲』の隊員たちの多くはその日本軍に参加したが、そうしなかつ
た者もいる。例えば扇は事務能力を買われて官僚に転向したし、普通
の生活に戻りたいと希望する者もいた。南、杉山、井上あたりがそう
である。

なお、ひとまずの平和が見えてきたので、この後特区では祝い事が
続いた。『天叢雲』内でも小野寺が例の許嫁と正式に結婚したし、桐生
も恋人と同棲を始めるという。

意外だったのは、『王』となったライに付いて行こうと考える者がか
なりいたことだ。筆頭が朝倉と小笠原である。朝倉は自分の意思で、

小笠原は「井上や桐生と相談した結果、何故かあたしになった」らしい。

不幸と言うか、不遇な立場に追いやられたのは片瀬であろう。ルーシユがかけたギアスはネージユが解除してくれたのだが、本人が与り知らぬ間に退役させられ隠居の身分が決定していた。

それに対し、デイトハルトは狡猾だった。全く悪びれる様子もなく、キョウトの紹介状を持ってライの元に広報の担当として自らを売り込んできたのである。

「乗る船を間違えました。ぜひ、あなたの元で使っていただきたく…」その席で、ゼロとの関係から自分の目的まで洗いざらい白状した。臆面なく、ここまで言える男も珍しいだろう。あまりの図々しさに、怒るより笑うしかなかった。

その瞬間、彼は賭けに勝った。『王』の番記者という新たな立場を手にしたのである。

とはいえ、これで日本からレジスタンスが一掃されたわけではない。一片の辞令で済む問題ではないのは当たり前である。神楽耶たちが粘り強く説得しているが、最後は軍事力の行使も考えねばならないだろう。

その中で特に強硬なのが、やはり房総の『旭日隊』である。ゼロが消えた後、看板を元に戻した。彼らの行動は信念と言うより、もう意固地になっているとしか思えない。

特区の範囲内でも、島根や鹿児島あたりのレジスタンスが怪しい動きを見せている。地理的に、中華連邦と深いつながりがあってもおかしくない。どうするかは、大きな課題となるだろう。

他では、アツシユフオード家も男爵に叙任された。ミレイの祖父のルーベン氏にとっては念願叶ったというところだろう。『王』の保護者であった、というのが理由らしい。

ナナリーは、シヨックが大きかったようだ。数日、誰も近づけず部屋に籠りきりだった。それを慰めたのはシャーリーだった。彼女も彼女でシヨックだっただろうが、その彼女の必死さがなんとか立ち直らせた。

一般生徒にはルルーシュ・ランペルージとルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが同一人物だと知らせなかったが、気付く者は気付いたであろう。ナナリーは卒業後、皇族復帰する予定だ。

—この2か月で、少しずつ世界は変わり始めたのだろう。

「……………」

『エリシオン』の艦上で、二人きりで座っていた。ライもカレンも無言で、夕日に映える日本の姿を見守っていた。これが、これまで行ったことの結果なのだ。

ただ、ここから進む先がいい方向なのかは、誰にもわからない。いい方向に持つて行くのが、これからの仕事になる。

「…………君は、本当にこれで良かったのか？」

この2か月間、どちらも話題から避けていたことである。2か月前、日本を去ろうとしたライに、カレンは付いて来た。

しかしシュタットフェルトの姓は使わず、紅月で通してきたのである。日本人として生きる、という考えを捨てたわけではないようだった。

「…………井上さんから言われたの。『もう、あなたにとって日本は希望じゃなくて呪縛よ』って」

本当の幸せは、どこにあるか。それをしつかり考えなさい。その言葉は、扇たちみんなが頷いた。ちなみに小笠原が付いて来たのは、「見知った同性がいる方がカレンも心強いだろう」という理由が第一にある。

それにネージュのことがある。行かないと言っていたら、あの甘えん坊がしょぼんとするだろう。その表情を想像してしまうと、どうにも我を通しにくい。

そこで、ようやくわかったのだ。自分の幸せは、どこにあるか。『日本』という国が、幸せを約束してくれるわけではない。周りにいる人たちの幸せだった記憶、その舞台が『日本』という国であるだけだった。

なお、井上たちに言わせると『子はかすがい』って本当だわー』となるらしい。

「日本を取り戻して…、私は何をしたかったのかな…」

答えは、何もなかった。『日本を取り戻す』と言っている間だけ、自分で自分を許すことができた。『リフレイン』に逃げた人たちに、偉そうなことを言う資格などなかったのだ。

「……それより、私の方こそ、ごめんなさい」

ライが戦ったのは、カレンが無理強いしたからだ。結果、『王』という立場に逆戻りする羽目になった。それは彼にとって幸せなのだろうか。それが、彼女の引け目になっていた。

「……僕は、よかったと思ってるよ」

『王』の立場は、欲しいものではなかった。しかし手にした力は、有意義に使う。そう腹をくくれば、悪いものではない。

「こうなったら、もうやりたいようにやってやるさ。これからは、リカルドの亡霊との戦争だ」

2000年、彼に毒された世界。その毒を抜くのは並大抵のことではない。2000年前に叩いておけば、もっと楽だったかもしれない。しかしそれは、不毛な感傷だ。

「………それに、その、つ、妻のために戦うのは、夫として当然のことじゃないか」

夕日の中でもわかるほど真っ赤になって、彼が言う。言われたカレンはしばらくきよとんととしていた。これもプロポーズなのだろうか。それならしつかり決めなさいよと思うが、そういうところが彼なのだと思う。

そして、返答ならすでに用意してあった。

「……なら、私の一生を、あなたに預けるわ。……信じてるから。私が嫌いなブリタニアは、あなたが変えてくれるって」

そう言っつて、カレンは心の底からの笑顔を見せた。それを見て、ライはようやく自分が何のために戦っていたのか、その根本にあった物を理解した。

7年前のあの日、赤い髪の少女は今のようになつた。

僕は、それを取り戻したかったから戦ったのだ、と――。